

東方戾界録 ～Return of progeny～

四ツ兵衛

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

800年程前幻想郷で一つの村がスキマに飲み込まれ、その村の人々は様々な世界にバラバラに飛ばされてしまった。人々は戻ろうとする者、新しい世界にとどまる者など様々な考えを示した。これは、幻想郷から外に飛ばされ、幻想郷に戻ることを願った一族の末裔が幻想郷に戻った物語。

※タグは多分、変更されます。

※都合上、書かない異変があります。

※オリジナル異変が出ます。

※戦闘がガチになること有り

※挿絵募集中

※キャラ崩壊は一応

※他作品とのクロス有り

目次

プロローグ	1
第一章 戻ってきた末裔	
第一話 博麗の巫女とお賽銭	5
第三話 弾幕勝負 VS 魔理沙	13
第二話 白黒の魔法使い	17
第四話 魔理沙の家の居候	23
第五話 博麗神社での昼食	28
第六話 範人の正体	32
第七話 範人の過去	35
第八話 範人は人間	38
第九話 闇纏いし少女	41
第十話 一日目終了	44
第十一話 人里訪問	48
第十二話 寺子屋と天才	51
第十三話 紫の友達	56
第十四話 範人の師匠	62
第十五話 剣術勝負	68
第十六話 告白は突然に	74
第十七話 紅魔館の試練 1	80
第十八話 紅魔館の試練 2	84
第十九話 館の幼き主	89
第二十話 命のかかった遊び	94
第二十一話 紅魔館での夕食	100

第二十二話	研究所に侵入者	106
第二十三話	買い出し	113
第二十四話	研究所案内	118
第二十五話	臆病者	124
第二十六話	宴会準備	129
第二十七話	幻想郷の仲間入り	136
レミリアの過去	吸血鬼と影の騎士	142
レミリアの過去	吸血鬼と影の騎士	150
レミリアの過去	吸血鬼と影の騎士	158
キャラ設定		164
第一章での新オリキャラ設定、追加設定		167
第二章 咲かない桜と長い冬		
第二十八話	化け物	170
第二十九話	掃除	177
第三十話	生物兵器の脅威	183
第三十一話	ハンターの森	188
第三十二話	天獄	192
第三十三話	社会科見学	197
第三十四話	二人目の門番	202
第三十五話	暴君の休日	208
第三十六話	依頼受注	214
第三十七話	『mission』と書いて『遊び』と読む	219
第三十八話	お化け屋敷	223
第三十九話	表裏	227

	第四十話	壊し屋	232
	第四十一話	技と数	236
	第四十二話	救世主	240
	第四十三話	クロウの処分	244
	第四十四話	ジェットの答え	248
	第四十五話	兄貴降臨	255
	Jet's story		261
	第四十六話	春が来ない!?!?	266
	第四十七話	氷精と雪女	272
	第四十八話	迷ひ家の猫又	280
	第四十九話	魔法人形使い	288
	第五十話	冥界チート庭師	294
	第五十一話	帰還	302
	第五十二話	春雪大戦 開戦	307
	第五十三話	剣士と狩人	313
	第五十四話	迫撃の死	318
	第五十五話	難波 優は何度死ぬ?	324
	第五十六話	evolution weapon	331
	第五十七話	災厄の最後	338
	第五十八話	暴走?	344
	範人の過去話	人間を辞めた子供たち	350
	範人の過去話	デュークの救出	358
	範人の過去話	別れ	370
	二章での新キャラ設定、追加設定		381

第五十九話	復活の狩人王	384
第六十話	地底へ	392
第六十一話		397
第六十二話		404
第六十三話	椰揄いからの巻き込み	414
第六十四話	女性になっちゃった	423
第六十五話	感染者	434
第六十六話		444
第六十七話		449
第六十八話	生物吸収は終わる	456
第六十九話	訪問者との宴会	463
第七十話	探訪	475
第七十一話	W再会	482
第七十二話	Day break shadow	488
第七十三話	お嬢様はお怒りのご様子です	497
第七十四話	真の夜王	502
第七十五話	サプライズとつながり	508
平の過去話	スパイダー転生!	516
平の過去話	コバルトブルーのお医者さん	524
平の過去話	深き地に消えゆ	531
三章での新登場オリキャラ設定、追加設定		537
第四章 狩人王と傍若無人なる王		
第七十六話	彼岸へ	539
第七十七話		545
第七十八話		550

第七十九話		557
第八十話		563
第八十一話		569
第八十二話		574
第八十三話		582
第八十四話		588
第八十五話		597
第八十六話		606
第八十七話		612
第八十八話		623
第八十九話		635
第九十話		651
第九十一話		658
第九十二話		666
手の届かぬ距離		676
第九十三話	し、新婚旅行ちやうし……	690
第九十四話		695
第九十五話		701
第九十六話	鯨を見に行こう	707
第九十七話		714
第九十八話		720
第九十九話		728
第百話		736
第101話		743
第102話		752

スペルカードリスト	798
ハロウィン特別編	793
特別編・番外編	
第106話	783
第105話	775
第104話	764
第103話	758

プロローグ

アメリカ某所、とある研究所の本宅のリビングで3体の生命体が夕食を食べている。全て人型をしているのだが、全員が不思議な雰囲気放っており、完全に人間であるとは言いにくかった。

「いよいよ、今夜向こうの世界に戻るんだな。」

あまり落ち着いていない様子で少年の声が訊ねた。

そう、今夜彼らは戻ることになるのだ。それはずっと昔から決まっていたことだったが、今になってやっと実現した。いや、今になって、やっと権利が戻ってきたと言った方が良さだろう。

「そうね。でも、貴方向こうの世界に行くの初めてでしょ。戻ると言う言い方はおかしいと思うわよ。」

女性の声がかたえた。反論された少年は少しムツとした様子で言い返す。

「別にいいだろ姉さん。俺のご先祖は、こつちの世界に向こうの世界から飛ばされて来たんだ。そう考えれば、戻ると言ってもおかしくはないと思うがな。」

「ハントの言うとおりです。別におかしくはありませんよ。」

もう1人の高い声が少年の肩を持った。

その声は人間の声と言えば、確かにそれだが、その声の主は人間としては圧倒的に背が高く、見た目とは不釣り合いだ。この容姿ならば、太く低い声がびったりだろう。

女性は自分に反論してきたことに少し驚きながら、考えるような仕事をする。

「ふふ、そうね。それにしても、貴方が口を開くなんて珍しいわね。デューレス。」

女性はデューレスと呼ばれた者があまり話さないと思っていたらしい。しかし、彼にとってそれは偏見だった。

別に話さないのではなく、話せないのだ。その容姿のせいで話しかけても相手が逃げてしまうのだ。これは彼の深刻な悩みの一つだった。

「そんなことはないですよ。俺は本来おしゃべりです。それより、紫さん。俺のことはデューと呼んでください。デューレスでは長いでしょう。それにフルネームで呼ばれるのは、あまり好きではないです。」

「これからは、そう呼ぶように気をつけるわ。」

女性の声の主が紫という名前であることも分かった。紫は少し反省するようなことを言っているが、その声にあまり反省している様子はなかった。

彼らにとつて、こちらの世界での最後になるかもしれない夕食が終わった。各自、食器を片付け始める。

意外なことにキッチンの流しで食器を洗っているのは、女性ではなく少年だった。性別による偏見だが、女性の声は母親と言ってもおかしくない年齢だった。あくまで声だけで、その容姿は少年の母親にしては若すぎたが……

「ごちそうさまでした。ハント、貴方のつくるごはんは本当に美味しいわね。」

「それはどうも。そう言ってもらえて嬉しいよ。」

そう応えるハントの顔は、本当に嬉しそうだ。しかし、これもまた意外。料理をしたのも少年というのだ。しかも、その腕前がなかなかのものらしい。この家は性別が反転してしまっているのではないか？と思ってしまう。

実はこの女性には家事をする気がほとんどない。実際、家事をしていたのは彼女が1人暮らしをしていた頃だけだ。

「向こうに行くときは、スキマで研究所の敷地ごと飛ばすから準備し

「おいてね。」

「いいのか、向こうの世界に研究所を入れても？」

ハントが心配そうな顔で質問する。

今、彼らがいるこの研究所は合衆国政府から直々に研究サンプルが届くことも珍しくないため、技術水準がかなり高い。職員は2人だけ、実際に活動しているのはそのうちの1人だけだが、それでも機材や資料は充実しており、その活動している者の技術も優れたものだった。

「別にいいのよ。進んだ技術も欲しくなってきたし。あ、そういうえば、貴方たちのこっちの世界の通貨は、まだ一部だけど、向こうの世界の通貨に替えておいたから。(まあ、ただの日本円なんだけどね。)それと貴方たちも準備しておきなさい。」

彼女曰く、向こうの世界というものは時代がまだ少し前で技術が遅れているため、進んだ技術があってもいいのではないか？ということらしい。

女性の説明を聞いたハントは安心し、ホッと息を吐く。

「もう既に準備はできています。」

「そう。10時には研究所の敷地内にいてね。」

「分かった。」「分かりました。」

その日の夜10時、研究所の敷地は不気味な空間の裂け目のようなものに飲み込まれて消えた。しかし、それを見ていた者は誰もおらず、それを知っているのはこちらでの一部の協力者と旅立った者たちだけだった。

もといた世界の研究所の敷地がスキマに完全に飲み込まれて、向こうの世界に戻ってきたとき、少年の耳に女性の声が聞こえてきた。少年が姉さんと呼んでいた女性の声である。

『幻想郷へようこそ。』

その声を聞いたとき、少年には戻ってきたのだという実感が沸いてきた。

彼はついに先祖たちの願いを叶えたのだ。突然にして、自分たちの世界を追い出され、外界に飛ばされた先祖たちの叶わなかった願い。彼の家にはそのことを綴った手紙や日記といった資料が置いてあった。だから、その願いを叶えたとき、彼はとても嬉しかった。

「ついに戻ってきたんだ、幻想郷に。ご先祖たちの願いは叶ったんだ。今から、俺の名前は旅行 範人だ。」

しばらくしてから、範人はつぶやく。

彼の頭の中に浮かんでいたのは、離れ離れになった兄弟たちの顔だった。もう4年程会ってないが、無事であることを彼は願っていた。

「あいつらもきつと戻って来るよな。」

これが幻想郷から外に飛ばされた者たちの末裔が初めて幻想郷に戻ってきた瞬間である。

一族の願いは叶えられ、末裔による幻想郷での生活が始まった。

第一章 戻ってきた末裔 第一話 博麗の巫女とお賽銭

幻想郷に戻ってきた翌朝、俺はリビングで1人で朝食を食べている。「今日の予定はどうしようかな?」と、考えながら食パンに噛みつく。

昨夜の移動の直前に研究所の敷地内はすべて掃除をってしまったために、することがとくに思い浮かばない。実際、リビングを見渡してもごみなんて1つもなくピカピカだ。ひとまず「朝食の片付けをしていれば、何か思いつくだろう」と思い、片付けを始めた。

少年片付け中

結局、あの後片付けをしても何もつかなかった。自分の想像力の無さが恨めしい。

「あー、暇だー。」

思わず声に出してしまう。暇すぎることはなかなか辛いものがある。こんなときこそ、外の世界の漫画やアニメみたいな出来事が起きてもらいたい。さすがに世界消滅の危機とかはご遠慮願いたいが……

(そういえば、デューはどうしたんだ?)

リビングにデューレスが来ていないことに気づく。

いつもならば、もうとつくに起きて来る時間のはずなのだが、今日はまだ来ない。真面目な彼に限ってまだ寝ていることはないはずだ。心配になったため、様子を見に行くことにした。

少年移動中

デューレスの寝室に着いた。ひとまず、ドアをノックしてみる。

「……………うう。」

苦しそうな声が聞こえた。しかし、ここで焦ってはいけない。焦ってしまえば、向こうを不安な気持ちにしてしまう。こういうときこ

そ、平常心だ。

俺はなるべく普通を装い話しかける。

「デュー、大丈夫か？入るぞ。」
「どうぞ。」

ドアを開けて驚いた。なんと、デューの顔色が悪かった。いや、タイルントなのだからその肌の色は灰色近く、もともと悪いのだが……身体がタイラントになってから風邪なんて一度もひいたことがないのにどうしたというのだろうか？

「いったい、どうしたんだ？」

「昨夜、移動したとき気分が悪くなったんだ。」

ひとまず安心した。どうやら、移動の衝撃で酔っただけのようである。その程度、放っておいてもすぐに治る。しかし、さすがに放置は友としてどうかと思うので適当なことを言っておく。

「気分が良くなるまでは安静にしておけ。水とかは置いておくから。」

その後、デューレスの部屋に食事と水を置いておく。少しだけだが何かすることができて、少しだけだが暇を潰せた。しかし、結局は少しだけ……

「あー、どうしょ。マジでやることなくなった。」

やっぱり、こうなった。何かアイディアはないものだろうか？

考えた末にリビングに戻ることにする。

リビングに戻ったら、紫がいた。

昔からの付き合いのため、親しみを込めて姉さんと呼んでいる。しかし、勝手に人の家に上がり込んでコーヒーを飲むのはどうかと思

う。いや、別に上がり込んできたからどうとかはないが、さすがに礼儀というものがあるだろう。何か言つてやりたいのだが、口で彼女に勝てるはずがないため黙っておく。俺の心が折られるよりはよっぽどマシだ。

「姉さん、今暇なだけどき、なんかすることとか、いいアイディアねーか？」

「そうね……博麗神社に行つてきたらどう？」

博麗神社……聞いたこともない。さすがに神社が何かはわかるが、そんな名前の神社は知らない。そもそも、向こうの世界にこの幻想郷の情報がそんなにあつたら、困るのだが……

「なんだそこ？」

「この世界のバランスを保っている巫女がいるところよ。」

「面白そうだな。行ってみるか。」

幻想の世界を管理する巫女と聞いて興味が湧いた。そんな面白い場所、行かないわけがない。折角こちらに戻つてきたのだから、楽しまなければ損である。

今日することがひとまず決まり、安心する。

「あ、そういえば範人。そこに行くならお賽銭たくさん持つて行きなさい。」

「えっ、なんでだ？」

頭に？マークが浮かぶ。その神社の人間が金好きだとしても言うのだろうか？しかし、神社と言えば、聖職者。神に仕えるものが、金にがめついわけがないとその考えを振り切る。

「まあ、いいから。たくさん持つて行きなさい。それに私もすること終わったら、そこに行くから。その後、人里の案内してあげるから。」

「まあ、分かったよ。」

結局、頭の？マークは消えなかったが、従うことにした。幸いなことに金なら自分が稼いだものや両親が遺したものが大量にある。神社に賽銭として出す分なら、普通に有り余っている。

「あ、地図あるか？」

「ちよつと待ってね………はい、どうぞ。」

紫から地図が渡されるが、俺は手渡された地図を開いて黙ってしまった。その地図は子供の描いたような落書きのような地図だったのである。

(姉さん、こりやないぜ。)

そう思うが、仕方がないと自身に言い聞かせる。研究所が幻想郷に来たのは、つい昨夜なのである。そう考えたとき、俺の脳内に一瞬だけ、頑張つて地図を描く姉さんの姿が浮かんだ。実際、その地図には研究所も描いてあったのだ。

俺は、財布の中に金と地図を入れた。

「じゃ、行ってくる。」

俺は博麗神社に向かった。迷子になつてもいいから徒歩で行くことにしよう。

範人に地図を渡したら、範人が一瞬困つたような顔をした。何があつたのだろうか？疑問である。彼はもともと、あまり心境を表情に出さないはずなのだが……

「じゃ、行ってくる。」

範人は神社に向かって出ていった。私は無言でその後ろ姿を見送る。

「なんで範人は困つたような顔してたのかしら？」

私は不思議に思つてつぶやいた。まあ、気のせいだろうと自分に言い聞かせ、コーヒーを飲み干す。充分にくつろぐこともできたため、仕事をしようとスキマに潜る。そのとき、範人が困っていた理由が分かった。

「あ、範人に渡した地図、橙が描いた下手なやつだったわ。」

「ええ^{!?}？」

「ここ上がるのかよ。面倒くせえ。」

俺は今、後悔している。何故なら、目の前に長い階段と高い山があるからである。ただでさえ、ここまで来ることに地図のせいで苦労したというのに。

「仕方ねえ。登るか。」

博麗神社に行く^と決めたのだから仕方ない。俺は石段を登り始めた。

少年登山中

「はあ、やっと頂上か。」

少し休んで息を落ちつかせてから、境内を見渡すとその神社がかなり立派であることが分かる。しかし、人が全然いない。いや、少なくとも自分以外にもう1人神社の中にいることは、気配で気付いていた。ひとまず、お賽銭を入れることにしよう。

(姉さんが多い方が良いつて言っていたからな。諭吉にしておくか。) 諭吉を賽銭箱に入れ、鈴を鳴らし、手を合わせる。願いは、あいつらが幻想郷に無事に戻って来ることだ。賽銭を入れた瞬間、ドタバタと足音が聞こえてきた。

(誰か走って来る。俺なんかしたか?)

足音が近づいてくるにつれて「自分が何かまずいことでもしたのだろうか？」と、心配になってきた。

「お賽銭くくくッ!!」

紅白の巫女服を着た少女が叫びながら走ってきた。そして、賽銭箱にたどり着くと箱の中をあさり始めた。その少女は、諭吉を取り出すと意味不明な叫びを上げる。

客の前でそんなことするなよ。

「おつ s y % ? . + @ / ☆ # & ♪」

その少女を見て一目で巫女だと分かったが俺の心の中にある感想は異国の文化に対しての感動ではなかった。

(なんだ、この腋巫女は…)

その巫女の行動に対する批判的な感想だった。

「貴方がこれ入れてくれたの?」

突然、巫女に質問された。身体が当たるような距離まで一瞬で接近され、上目遣いで質問されてしまったため、思わずビクツとしてしまう。

正直、この神社で賽銭を入れるやつが俺以外どこにいますか? というのだろうか? 境内にいたのは俺一人だったはずである。

「あ、ああ。確かにそれを入れたのは、俺だが…」

「ありがとう。こんなにお賽銭入れてくれたんだから、お礼としては何だけど。上がって行ってよ。お茶くらい出すわよ。」

少し迷ったが、紫はまだ来てないようだったため、上がらせてもらうことにした。

その巫女はお茶を入れてくれた。個人的に日本の緑地はかなり好きである。

「貴方見ない顔ね。私は、霊夢。霊夢って呼んで。で、貴方の名前は？」

（見知らぬ奴を家に入れんなよ。）

……それよりも名前か。」

「俺はハント。ハント・ゴート…」

向こうでの名前を出してしまいそうになり、俺は黙った。

この名前はあまり好きではない。自身の起こした事件にそのままつながってしまう可能性がある。と言っても、こちらの世界にそんな情報があるはずがないのだが……

「ん？」

霊夢が興味深そうにこちらを見ているため、慌てて言い直す。

「範人。旅行 範人だ。範人って呼んでくれ。」

「へえ。範人はなんでこんな神社に来たのかしら？」

「幻想郷に来たばかりで、とくにやることがなかったからかな。姉さんに聞いたたら、博麗神社に行ってみたらって、言われたからな。」

「貴方の姉さんって、名前なんていうの？」

「八雲 紫だ。」

「ブツ！」

俺がそうこたえた瞬間、霊夢は吹き出した。俺が何か問題発言でもしたのだろうか？別に誰が自分の姉であっても問題はないだろう。

「霊夢、どうした？」

「紫が姉さんって、あんた何歳なのよ？」

「別に実の姉さんって訳じゃねえよ。俺が小せえ頃から面識あったから、親しみを込めて姉さんって、呼んでいるだけだよ。」

「あら、そうだったの。納得したわ。」

どうやら、霊夢は勘違いしていたようだ。

まあ、勘違いされてもおかしくないだろう。同年代の日本人と比べれば俺の背はそこそこ高いし、髪の毛の色も金である。紫は女性としては背が高いし、髪の色も同じ金なのだから。

「そういえば、貴方って外r「ワーツ」！」

ドオオオンツ!!!

「何だ？」

「あんのバカ……。」

俺は様子を見るために、霊夢はなんかスゲエ怒りながら境内に出た。

新しい出会いの予感しかない。しかも、かなり面倒なやつ……いや、面倒なやつに慣れてはいるが……

第三話

弾幕勝負

V S 魔理沙

魔理沙が弾幕を飛ばしてくる。なかなか良い弾幕だが、魔理沙の弾幕はレイジの弾幕に比べたら、大したことはない。余裕でかわすこともできるし、こちらの弾幕で相殺することも簡単だ。話にならない。久しぶりの弾幕勝負だったが、軽く勝てそうだ。

(魔理沙は、これで本気なのか?)

そんなことを考えていると魔理沙が動いた。

私は手加減しながら弾幕を放っていく。どれも直線的、どれもゆっくりだ。

(なかなかやるな。)

いくら手加減しているとはいえ、ここまで完璧に対処されるのは初めてである。範人の動きは驚くほど余裕に満ち溢れている。このままでは、絶対に勝てない。そう考え少し本気を出すことにした。

魔「魔符『スターダストレヴアリエ』」

私はスペルカードを発動した。

魔「魔符『スターダストレヴアリエ』」

魔理沙がスペルカードを発動した。おびただしい数の星型弾幕が襲いかかってくる。魔理沙が少し本気になったようだ。

範「そう来なくっちゃ、面白くない。」

そう言つて、スピードを少し上げる。確かに、弾幕は多い。それでも、かわす隙間はある、まだまだ余裕である。かわすことができなくても、向こうよりも少し強い弾幕を放てば、相殺したり、押し勝つたりできる。

しばらくして弾幕が薄くなった。時間経過によりスペルカードの効果が切れたようだ。

(かなり良い弾幕だったな。さて、次はこちらの番だ。)

スペルカードを取り出し、詠唱する。このくらい躲し切ってもらわなければつまらない。

「粒符『パーティカルストーム』」

私は自分の目を疑った。ただでさえ速かった範人の動きが更に速くなり、弾幕を軽々とかわされたのだ。一発だけでも当てるためにも、更に弾幕を濃くしたが、全く当たらなかつたのだ。

そうして時間が経過し、スペルカードの効果が切れてしまった。弾幕をかわしている範人の動きを最初のうちは目で追うことができた。しかし、弾幕が濃くなり、最も濃くなった時には、もはや目で追うことなど敵わず、残像を残して、瞬間移動しているような速さだった。(すげえ、なんて速さだよ。)

私が、驚いていると範人が動いた。

範「粒符『パーティカルストーム』」

範人がスペルカードを発動すると、範人の両手の上で粒子が渦を巻き始め、それぞれの手から一つずつ粒子の竜巻が発生し、発射された。私はその二つの竜巻をかわした。

しかし、それぞれの竜巻は私の周りを回り始め、大量に弾幕を発射してきた。範人はその更に外周を回りながら、私を狙って弾幕をこれまた大量に発射してくる。

(どんなスペルだよ。)

私は、焦りながらも弾幕をかわしていく。弾幕の相殺をしようとしてみたが、範人の弾幕の方が威力が高く、相殺できなかった。そして、時間が経ち、スペルカードの効果が切れた。何発か掠ったが、直撃はしないで済んだ。範人の圧倒的な強さが分かったため、本気を出すことにした。

少し驚いた。何発か掠ることはあっても、魔理沙は直撃することなくスペルカードをかわしきった。これなら少しは楽しめるかもしれない。

(まさか、かわしきるとはな。もう少し本気になってもいいか。)

俺は少し本気になることにした。まだ、この姿での本気だが……
「ここからは、本気でいかせてもらうぜ。」

「そうか、こつちも少し本気になろうと思ったところだ。さっきのは物足りなくてなあ。」

俺はネックレスを外し、それに力を込めた。ネックレスは大剣に変化し、俺はそれを片手に持った。クリムゾン、それがこの剣の名前だ。

魔理沙は、弾幕を発射しながら、範人の弾幕をかわしていく。対する範人は、弾幕を発射しながら、覇剣クリムゾンを片手で振りまわし、魔理沙の弾幕を斬撃で消滅させていく。

魔理沙と範人は同時にスペルカードを取り出し、同時に発動した。

魔「恋符『マスタースパーク』」

範「破斬『大切断ハルバード』」

魔理沙のミニ八卦炉から途轍もない威力の巨大なレーザーが発射

される。同時に、範人の覇剣クリムゾンが巨大な斧に変化し、それが振り降ろされることにより、凄まじい破壊力の斬撃が生み出され、発射された。

魔理沙のレーザーは範人の斬撃を押し返して進もうとし、範人の斬撃は魔理沙のレーザーを縦に切り裂いて進もうとする。スペルの衝突により、辺りを衝撃波が襲い、二人の姿は舞い上がる砂塵により、見えなくなる。

しばらくして砂塵が晴れると、えぐれた地面には、範人と魔理沙を抱き抱える少年が立っていた。

第二話

白黒の魔法使い

境内の様子は砂煙でよくわからなかった。ほとんど何も見えないが、ひとまず声をかけてみる。

「おい、大丈夫か？」

「別に心配する必要ないわよ。」

「はっ？」

霊夢は誰かのことをまるで心配していないようだった。しかし、先ほどの声からすると境内に突っ込んできたのは女性である。この激突音からして大丈夫なはずがない。

俺が霊夢の発言に驚いていると、

「うう、スピード出し過ぎちまったぜ。」

「おい、霊夢は心配する必要なんてない、って言ってるけど、本当に大丈夫か。」

「大丈夫だ。問題ない。」

砂煙の中で人影が立ち上がり、言葉を発した。人影に向けて訊ねると、お決まりの言葉が返ってくる。それはフラグだろうか？

砂煙が晴れると、地面がえぐれているというひどい有様になった境内と少女の姿が確認できた。その服装から、その少女が魔法使いであることが一目でわかる。その少女は恐ろしいことに無傷である。フラグはへし折っていくスタイルらしい。

「おう、霊夢。来てやったぜ！」

「来てやったぜ！じゃないわよ。この境内誰が掃除していると思ってるのよ。」

「そりゃ、霊夢だろ。」

「分かっているなら、気をつけなさいよ！」

口喧嘩が始まって、俺は完全に空気になっている。さすがにこれは悲しい。

神様、俺にセリフか注目をください。思わず天に祈ってみる。しかし、願いや見ない顔だが……

「そーいや見ない顔だが、そこのお前誰だ？」

ありました。ありがとうございます、神様。

やっと、話をふってもらえたことに喜び、俺は答えようとする。

「俺は旅Y「紫の弟よ。」ちよ、霊夢。」

霊夢に答えられてしまった。しかも、間違いなく勘違いされてしまうほうの言い方で。案の定、それを聞いた少女はとても驚いたようだった。

「は、それって…。お前何歳だよ?」

勘違いされてしまった。急いで説明する。これだから勘違いは面倒くさい。

せっかくのセリフを盗らないでくださいお願いします。

「待て待て、俺は実の弟じゃないぞ。小さい頃から面識があったから、姉さんって呼んでるだけだ。あと、俺の名前は旅行 範人だ。範人って呼んでくれ。」

「そうだったのか。私は、霧雨 魔理沙だ。普通に魔理沙って呼んでくれ。よろしくな、範人。」

「ああ、よろしくな、魔理沙。」

俺の早口での説明をすべて聞き取り、笑顔で返してくれる魔理沙。

最初は驚かされたが、魔理沙は良いやつそうだ。彼女の言葉からはその勢いで人を元気づけてくれるような感じがする。

「互いに自己紹介が終わったところで悪いけど…。範人、質問している?」

「何だ?」

「範人って、外人人よね。弾幕ごっこって分かる?」

弾幕ごっこ…。小さい頃、姉さんに教えてもらった記憶がある。ルールはあまりよく覚えてないが、弾幕を撃ち合うことは分かっている。まあ、殺さずに勝てばいいって話だ。

「弾幕を撃ち合うことぐらいしか知らないが…。」

「空は飛べる?」

「多分できる。」

最後に空を飛んだのはだいぶ前だな、と幼き日々を懐かしく思う。「なら、説明することはスペルカードぐらいね。」

俺はスペルカードという言葉に思い当たるものがあつたため、財布の中を探る。

……あつた。スペルカードだと思われる、自分が過去に作ったもの、しかも9枚も。いつの間にこんなになつた？と不思議に思うが、よく考えれば減っているかもしれない。

「霊夢。スペルカードってこれか？」

財布の中にあつたスペルカードだと思われるものの内2枚を取り出し、霊夢に見せる。彼女はそれらを手に取り、表裏を丁寧に眺める。

これらは見せても全然問題ないが、他のものは色々まずいことになりかねないため渡せなかった。

「これは確かにスペルカードね。でも、何で外来人の範人が持っているの？」

「小さい頃、姉さんに弾幕ごっこを覚えてもらっていたし、手強いライバルもいたからな。」

スペルカードを返しながら、霊夢は言う。俺は自身満々に答えた。

そんじよそこらのザコと思つてもらつては困る。俺は（多分）強いだろうから。

「範人って能力持ち？」

「ああ、俺の能力は、『粒子を操る程度の能力』だ。物を粒子に分解したり、粒子を組み立てて物を作ったりできる。素粒子や電子とか、粒子なら基本的になんでも操れる。」

「それは、随分と便利そうな能力ね。」

さつきから魔理沙が静かなため、心配になり、声をかける。話し方からして元気な彼女が黙っているのは少し不気味な感じがした。

普通の人間からすれば、魔女って時点で不気味なのだろうが……

「おい、魔理沙、さつきからやけに静かだが、大丈夫か？」

範人と霊夢が弾幕ごっこについて話をしている。どうやら範人は、弾幕ごっこについて全く知らない、というわけではないらしい。

範人は、霊夢にスペルカードを渡した。

私もそのスペルカードを見たが、それを見て私は、範人と勝負してみたくなった。しかし、その願望を我慢をする。

話は能力についての話に移ったようだった。範人が能力を持っていることが分かった。私は、範人の能力も見てみたくなった。

駄目だ。もう我慢できない。

そんなとき、範人に声をかけられた。

「おい、魔理沙、さっきからやけに静かだが、大丈夫か？」

「範人、私と勝負しろ！」

「範人、私と勝負しろ！」

「はっ、なんでだよ。」

出会ってから、あまり時間が経ってないやつに向かって、「勝負しろ。」とは、魔理沙の頭はどうなっているのだろうか。思考回路の短絡っぷりは半端ないらしい。まあ、そのくらい積極的なのも彼女らしくて悪くない。

「なんでって、そりゃ、私が勝負したいからに決まってるだろ。」

まあ、俺も霊夢と話をしているうちに久しぶりに勝負したくなっていたからいいだろう。

この腕が疼く。間違つても俺は厨二病ではない。本当の話だ。

「分かった。勝負してやる。どうすれば勝ちなんだ？」

「相手を気絶させたりして、戦闘不能にするか、相手を追い詰めて、降参させたほうの勝ちでいいか？」

それはあまりにも大雑把すぎないだろうか？ 弾幕は確か非殺傷だったような気がするのだが……まあ、俺は別にそれで構わないし、そもそも戦いには危険が付き物なのだから、これでよしとしよう。

「ああ、それでいい。霊夢、境内がめちやくちやになるかもしれないけどいいか？ 勝負が終わったら俺が直すから。」

「それならいいわ。」

俺の頼みを了承してくれる霊夢ありがたい。

俺の弾幕は非殺傷と言つても威力がバカにならないらしい。昔、兄弟共々に姉さんに怒られた記憶がある。結局、それが直ることはなかったのだが……非殺傷だし大丈夫だろう。

しかし、このままでは外に被害しまう。そこでもう一つの頼みをする。

「もう一つ頼みがあるんだが、いいか？」

「私ができる範囲ならいいわよ。」

「外に被害がでないように境内を結界で囲っておいてくれ。」

「分かったわ。」

霊夢の返事と同時に境内が結界で囲まれ始める。その結界は思っていた以上に強固で、ちよつとやそつとじゃビクともしなさそうである。「これなら弾幕も軽く防げるだろう」と安心してから身構える。

「どんな弾幕かが楽しみだぜ。」

「さあ、勝負開始だ。come on！」

境内が結界で囲まれるのと同時に、俺たちは弾幕を放った。空中に色とりどりの弾幕が咲き乱れる。

「魔理沙、速いよ。少し待ってくれてもいいのに。」

俺は、魔理沙の向かった博麗神社へ急いでいた。

魔理沙は箒に乗って猛スピードで飛んで行ってしまったが、最近飛び始めた俺に追いつくスピードが出るはずもない。距離はどんどん離れ、完全に置いてけぼりを食らった。

まあ、高速で飛ぶ魔理沙のスカートの中が見えたから悪い気分ではないが……

第四話

魔理沙の家の居候

範人の強さは、圧倒的であった。魔理沙の実力は、トップクラスのはずだったが、範人はその魔理沙の弾幕を余裕で見切り、全てにほぼ完璧に対処した。しかも、途中までに出していた力は、全体の20%ほど、スペルをぶつけ合ったときも50%には満たなかっただろう。事実、範人の顔には、まだ余裕の表情が浮かんでいる。今、目の前には、範人と気絶した魔理沙を抱き抱えている少年が立っている。

「君か？魔理沙をこんな風にしたのは。」

その少年は範人に訊ねる。範人には境界を直してもらわなければならぬため、私は話の場を移そうと提案する。

「魔理沙がこんな状態だし、中で話をしましょう」

「まあ、そうだね。そうさせてもらおうよ」

「俺は境界を直したら、中に入るからな」

「ええ、頼んだわよ」

少年は案外あっさり提案を受け入れてくれた。私は少年を神社の中へと案内する。

◇

魔理沙を布団に寝かせて、話を始める。

「わたしは、博麗 霊夢よ。貴方は？」

「俺は難波優だ。よろしくな、霊夢」

「ええ、よろしく、優」

「で、一体何が起きたんだ？」

早速、飛んでくる質問。少年の目は本気だ。嘘について誤魔化すことなどできそうもないため、全てを話すことにする。

「魔理沙が範人に弾幕勝負を挑んだのよ。そして、負けたの」

「そうだったのか。なら、俺が怒る必要はないね」

優は魔理沙が一方的に攻撃されると勘違いしていたらしい。まあ、あそこまでポロポロになった姿を見れば、誰だってそう思うだろう。私自身、魔理沙があそこまで余裕で負かさされるなんて驚いた。

(まあ、一方的な勝負みたいなものだったけどね。)

「優はどうやって境内に入ってきたの？」

私にはこれが一番の不思議だった。あのとき境内には結界が施してあり、出入りできない状態のはずだった。約一名、あのスキマ妖怪なら入ってこれるが……。

「俺の能力を使っただよ。『移し替える程度の能力』っていう能力だね。自分を位置を境内の中に移し替えたんだよ」

「なるほどね」

境内の中に入ったことの不思議は解けた。何と移し換えたのかは、この際触れないでおこう。何か大切な物と移し換えられていたら発狂する自信がある。饅頭とか煎餅とか団子とか……。

「優は何でここへ来たの？」

「魔理沙が博麗神社に行くって言ったから、着いて来たんだ」

「優と魔理沙の関係は？」

「俺は、魔理沙の家に一週間前から居候させて貰っているんだ」

「えっ、あんなところによく居候なんてできるわね」

前に魔理沙の家に行ったときは散らかっていて足の踏み場もなかった。そんな場所によくもう一人住まわせる場所があるのだろうか？ ……どう考えても見つからない。

「最初のうちは掃除とか大変だったよ。ハハハ……」

「あそこが片付いていく様子が想像できないわ。掃除中の貴方の表情は想像つくけど……」

「……………う、うう……………」

魔理沙が呻き声をあげる。気がついたようだ。目をぱちりと開け、何が起きたのかわからないような表情をしている。

「魔理沙、気がついたみたいね」

「弾幕勝負はどうなった？」

「範人の勝ちよ。範人、全然本気じゃなかったわよ」

「でもあいつ、少し本気になるって……」

「少し力を上げただけよ。最後まであの姿での50%ぐらいだったと思うわよ。」

「えっ、あれでか!?!?」

魔理沙はとても驚いている。

範人の力は50%も出されてなかったかもしれない。おまけに「あの姿の場合は」だ。

優が魔理沙に声をかける。

「おう、気がついたみたいだな」

「おう、お前も来たのか」

魔理沙と優は手を打ち合わせ、パンツと良い音が鳴った。二人共、何故かハイテンションだ。まあ、無事なようで何よりだが……。

(これは……)

「あつ、霊夢。賽銭入れてくる」

「ええ」

(ヨッシャー！ 優、ありがとう)

「霊夢、顔が気持ち悪いことになっているぜ」

今日だけで二回も賽銭を入れてもらえる。そんなことを喜んでいると、魔理沙に突っ込みを入れられた。かなりイラツとする。

「なっ……。まあ、いいわ。(少し仕返しを……) 魔理沙は優のことをどう思っているの?」

「と、突然何を訊いてくるのぜ!?!」

そう言う魔理沙の顔は真っ赤だ。私の勘はやはり冴えているらしい。考えていたことが現実だったようだ。

「まあ、なんでもないならそれでいいんだけど。魔理沙のことをここまで運んだの誰だと思う?」

「えっ、霊夢じゃないのか」

魔理沙は少し落ち着いたようだ。ここで追い討ちをかけると、なんとも面白いことが起こりそうだ。

「優よ。しかも、お姫様抱っこで」

魔理沙はさつきよりも顔を赤くして気絶した。魔理沙は良い友人おもちゃだ。

◇

俺は、能力を使用して境内の修復を始めた。合掌し、

「craftt!」

俺が能力で粒子を組み立てていくと境内はみるみるうちにもとに戻っていく。しばらくすると、境内はきれいに修復された。

「おう、ご苦労さん」

先程の少年が声をかけてきた。思わず身構える。ボコしてしまったため、勘違いされても仕方がないが、攻撃されるのは勘弁だ。俺の本能が敵と認識すれば殺しかねない。

「すまなかつたな。魔理沙がいきなり勝負を仕掛けちまつて」

少年の言葉から戦う気がないことが分かり、警戒を解く。

「別に構わないさ。魔理沙を勝負で気絶させたのは、こつちだからな」
「どうせ、魔理沙のことだから大雑把に『相手を気絶させたほうの勝ち』とか言っただらろ」

「ああ、その通りだ」

「おっと、自己紹介がまだだったな。俺は、難波 優だ。優って呼んでくれ」

少年は爽やかな感じに笑いながら言った。

「俺は旅行 範人だ。よろしくな、優」

「ああ、よろしく。範人」

「優は、魔理沙とはどんな関係なんだ？」

「一週間前から居候させて貰っている」

「男女が同じ屋根の下って……魔理沙のことをどう思っているんだ？」

「友達としても好きだし、恋愛対象としても好きだよ」

——スゲエ！ こいつ、好きってさらつと言いやがった。

俺は口から出そうになった言葉を慌てて飲み込む。

「あ、賽銭入れるんだった」

優は五千円札を賽銭箱に入れると、鈴を鳴らし手を合わせた。これは霊夢が喜ぶだろう。見た感じ、霊夢はどこか貧乏そうな感じがした。

「おまえすごいな。普通に誰かのことを好きだと言えるなんて」

「別にすごくはないと思うよ。むしろ、これが普通だと思う。誰でもあっても誰かを好きになることはあるだろうから。そういえば、魔理

沙が気がついたよ」

「そうなのか、良かった」

(殺さずに済んで……)

俺はホッと息を吐く。

優の後に続き、俺は神社の中に入っていった。

第五話

博麗神社での昼食

霊夢がみんなの分の昼食を作ってくれたため、今はみんなで昼食をとっている。これがなかなか美味い。母国アメリカのファストフードに比べたら雲泥の差で美味い。

日本ってスゲー！

「範人、おまえ強いな」

「そうか？　ありがとな。魔理沙の弾幕もなかなか良かったぞ」

「そんなこと言っても、範人はすべての弾幕を余裕でかわしてたじゃない」

　優が驚いた表情をする。

　魔理沙に勝つなんてそんなにすごいことなのだろうか？　戦場で銃弾の相手をしてきた俺からすれば、あのくらい普通だ。まあ、確かに魔理沙の弾幕はなかなか良いものだったが……。

「魔理沙の弾幕を余裕でかわすって、すごいなおまえ」

「しかも、手加減してたわね」

「あ、ばれた？」

「明らかに余裕の表情だったじゃない」

　ばれないように自然な動きで避けるようにしていたのだが、その自然さが逆に不自然だったのだろう。まあ、自然な動きは個人個人の特徴が出るのだから、ばれても仕方がない。

　魔理沙がこちらをじっと見つめていたため、怒っているのかと思いついて謝る。

「ごめんな、魔理沙。気絶させちゃまって。あと、手加減も」

「ああ、それは別にもういいのぜ。（優にお姫様抱っこして貰えたしな）実はちよっと気になることがあってな」

「何だ？」

「おまえ、サラシ巻いてるよな。霊夢の真似か？」

　全員の視線がこちらを向けられる。霊夢に至っては、めっちゃ嫌そうな視線を送ってくる。

　キャラが被ったのか？　……いや、俺におっぱいはないけどな。

似ている者との関わりは意気投合するか、対立するかのも二通りなのだが、反応からして霊夢は間違いなく後者なのだろう。

「これは包帯だ。三歳の頃に大怪我をして、ひどい傷痕が残っててな。見た人が気持ち悪がるから、見えないように巻いているんだ」

霊夢の視線が少しやさしくなる。

別に俺自身、霊夢に合わせたわけではないし、巫女などのコスプレの趣味もない。女装なんてなおさらだ。この白衣は仕事着に近い。

「ちよつと見せてみるよ」

「嫌だよ。恥ずかしい」

「何だよ、裸を見せるのが恥ずかしいって、おまえ男だろ。もしかして、おまえ女か？」

霊夢の視線がまた厳しくなる。今度は女ということに反応したらしい。

なんなのだろう？ この巫女はサラシを巻いている全国の女性を敵に回すつもりなのだろうか？

「俺は男だ。男にだって恥ずかしがるやつはいる」

「そうなのか。まあ、私は大して恥ずかしくないけどな。実際、優といっしょに風呂入ったし」

何やってんだよ、こいつら……。このリア充め……。

呆れた表情になる俺の隣で、霊夢も同じような顔になっていた。思ったことは同じというわけだろう。

「魔あ理い沙あ……！」

優が顔を赤くする。

「好きって言うことやお姫様抱っこは恥ずかしいのに、裸は恥ずかしくないってどんな思考回路してんのよ」とでも言いたそうな顔の霊夢。

対して俺は、優の思考回路が魔理沙の思考回路に比べ、まともであることにホツとしていた。

「あの時めっちゃ恥ずかしかったんだからな！」

優が怒っている。好きな相手でも、いっしょに風呂に入るのはやっぱり恥ずかしいらしい。

俺自身そんなことがあれば、恥ずかしいに決まっている。まあ、俺なんて初恋もまだだし……まだ、だよな？ うん、きつとまだだ。

「悪かったな、優。さて、範人見せて貰おうか」
「嫌だ」

そんなの即お断りだよ！

「なら、方法を変える。優、範人を押さえてくれ」

「分かった」

優に押さえつけられた。

おまえは何で協力してんだ!?!?

「ごめん範人。」

優が小さな声で謝ってくれた。優のことは許してやろう。ただし、魔理沙、てめーは許さん。

「さて、どうなってんのかな〜」

魔理沙に白衣を脱がされ、包帯を取られた。乱暴に取られたため、一瞬きつく締まった胸が痛い。

「うわっ！」

「!!」

みんな驚いた表情をしている。当たり前だ。俺の背中の中の右半分の一部は、皮膚や筋肉が半透明で体の内部が透けているのだから。実際に鏡で見たときはグロいの一言に尽きた。

「……悪かったな、範人」

魔理沙は、白衣で俺の背中を隠しながら謝ってきた。謝るくらいなら、やらなければよかったのに……。まあ、未来なんてわかるはずもないのだから仕方ない。余計なことまで調べて、知りたくなかったことを知って後悔するなんてこと、研究者や捜査官にはよくあることだ。

俺は包帯を巻き直しながら言う。

「別にいい。もう見られちゃったし」

そう答えるが、許しはしない。次の弾幕勝負で泣かせちやる。

「ねえ、範人。私も気になっていたことがあるんだけど」

「なんだ霊夢？」

「範人って、完全に人間？」

「!?？」

全員の視線が俺に集まり、包帯を巻く俺の手が止まった。

第六話

範人の正体

範人は人間だが人間ではない何かでもある。最初に会ったときはまだ少ししか感じとれず、核心には至らなかつた。話をしている内に普通の人間だと思えた。

しかし、魔理沙が来たとき、一瞬だけだが、範人からは人間ではないものの気配がした。周りを威嚇するような人間ではありえないほど強い、生物の気配だ。そして、その考えは魔理沙との弾幕勝負で核心に変わった。

範人のスピードは、普通の人間にはもちろん、弾幕勝負をする私たちにさえ、実現することが非常に難しい速さだった。ここまでは、特訓を積み重ねたと言えようにか成り立つ。しかし、魔理沙と範人がスペルをぶつけ合ったとき、範人の腕がこれも一瞬だけだったが、黒い甲殻に覆われた。

生物の中にはこのような甲殻を持つものもいるが、体から甲殻を突然発生させるようなものは、普通の生物どころか妖怪にも存在しない。ましてや、そんなことができる人間なんて存在するはずがない。だから、範人は完全な人間ではない。

霊夢に完全な人間であるかを質問された。俺は、包帯を巻く手を止めて考える。俺は、完全に人間である、と答えたかつた。だが、できない。父さんから貰ったこの体を否定するわけにはいかない。だから、答える。たとえば、みんなの期待を裏切つたとしても、

「俺は、完全な人間じゃない。」

「俺は、完全な人間じゃない。」

(嘘だろー！)

私は範人の答えを信じられなかつた。いや、信じたくなかつた。範人は人間だ。範人とは、今日友達になつた。時間はあまり経っていない

い。それでも、範人は大切な友達だ。私と弾幕勝負をして全力の50%も出さずに勝つなんて、たしかに化け物だ。でも、人間ではない、とは思えなかった。それに、たとえば、人間でないとしても、友達であり続けることに変わりはない。

「俺は、完全な人間じゃない。」

(なんだって！)

範人と会ってから、あまり時間は経っていない。だが、範人が悪いやつではないことはよく分かっている。魔理沙の弾幕を余裕で全てかわすなんて、人外もいいところだが、それでも人として接していたとき、範人はとても嬉しそうだった。そんな範人が人間であることを否定なんてできるはずがない。範人が人間でない場合、分かり合えないことはきつと発生してしまう。しかし、範人が人間でなくても、友達であることはできる。

「俺は、完全な人間じゃない。」

やはり、範人は完全な人間ではなかった。この答えを聞いた瞬間、みんなの表情が曇る。当たり前だ。質問をした私ですら、受け入れたくない答えなのだから。だが、私の答えは最初から決まっている、たとえ範人が人間ではないとしても友達でいること、これが私の答えだ。

全員が言葉を失い、重たい空気が流れる。しかし、範人がその沈黙を破った。

空気が重い。俺が人間であるか、ないか。みんなそのことで悩んでいる。ここは、幻想郷、ご先祖の願いを叶えられると、俺の願いが叶うと受け入れてもらえるか聞いて来たはずなのに……。人間であるか？などという小さなことにとらわれている。俺は自分が何者なの

かを話すことに決めた。

「…兵器。」

「…え？」

「俺は、生物兵器だ。」

第七話

範人の過去

俺は、みんなに過去を話すことにした。

3歳の頃、俺はまだ純粋な人間、完全に人間だった。俺には兄弟が2人いて、家族は、父さんと母さん、俺、俺の双子の兄、2歳年下の弟の計6人だった。俺の家は生物研究所で、所員は父さんと母さん、そしてもう1人の3人だけ、もちろん生物兵器についても扱っていた。

3歳のとき、俺と兄は、遊んでいる最中に事故に遭った。その事故で、俺は右腕、右脚を失い、背中の中を大きく損傷した。兄は左腕、左脚、左眼を失った。父さんは身体の失った部分を再生させるため、俺たちにそれぞれ異なる生物兵器のサンプルを投与した。

俺も兄も腕と脚は完全に再生したが、俺は背中がうまく再生せず、背中の一部が半透明に、兄は左眼がうまく再生せず、左眼が二度と光を感じることでできない真っ赤な眼球になってしまった。俺と兄に投与された生物兵器のサンプルは、それぞれが俺たちにうまく馴染んで、俺たちは生物兵器になった。

弟は生まれつき全身の筋肉が弱くなる病気にかかっていたため、心臓を動かし続けられるように、生活で不自由しないように、とモノリスを使用したサイボーグになった。

俺たちが生物兵器になった頃から、姉さんが訪ねてくるようになった。姉さんは、俺たちに弾幕ごっこを教えてくれて、幻想郷についても教えてくれた。俺はこのときからずっと、幻想郷に憧れていた。俺にとって夢だった、全ての種族が共存する世界が。

俺が5歳になって、初めての友達ができた。デューク・フォートレス、普通の人間の友達だ。デュークはいいやつだった。俺が生物兵器であることを伝えても、友達として普通に接してくれた。俺を人間と

して、見てくれた。

俺が8歳のとき、デュークの住んでいる町でトーウィルスが研究所から漏れたことによりバイオハザードが発生した。俺たち兄弟はデュークを助けるためにその町へ入り込んだ。

感染者はゾンビとなり、新鮮な食事を求めて徘徊していた。なかには、身体の表面がほとんど喰い千切られて身体中の筋肉が剥き出しになっていたり、内臓を腹から垂らしているやつもいた。人々は逃げ惑い、ゾンビに喰われて、血を流しながら死んで、ゾンビ化していった。

俺たちは、目につく限りのゾンビは殺しながらデュークを探した。俺たちは生物兵器だったために力が異常で、ゾンビの身体を殴れば貫通するか、身体がグチャグチャに弾け飛ぶかのどちらかだった。

町に入って2時間後にデュークを見つけた。しかし、デュークは既に感染していて、更にウィルスが身体の中で突然変異を起こして、タイラントに変異を始めていた。弟が能力を使用し、タイラントとして暴れることは阻止できたが、身体をもとに戻すことはできなかった。

デュークを助けることには成功したが、デュークの両親は既にゾンビ化していて、助けられなかった。デューク・フォートレスはデューレス・タイラントに名前を変え、俺の家で世話になることになった。

9歳のとき、母さんは病気にかかって、死んでしまった。母さんは最後まで自分ではなく、俺たちの心配をしていた。最後まで自分は自分の心配をしてもらいたかった。

12歳のとき、父さんはアンブレラの残党に殺されてしまった。兄は、研究所を継ぎたくないから、という理由で姉さんに頼み、他の世界に飛んだ。研究所は、俺が継ぐことになった。俺は政府の下につき、実力を見込まれてエージェントとして働き始めた。そこで、自分を弟と読んでくれた人と武術を教えてくれた師匠に会った。政府の特例で大学にも入学した。

14歳のとき、俺は政府の特例と成績が優秀だったことにより、大学を正式に卒業した。弟も12歳になり、姉さんに頼んで他の世界に飛ばしてもらった。師匠は行方不明になった。とある都市で、とある男性に出会い友達になった。

15歳のとき、師匠は死んだ。俺を弟と呼んでくれた人に殺された。俺はそのことをその人の口から直接聞いた。その年に俺は初めて任務を完璧にこなすことができなかった。任務には成功したため、誰も俺を責めなかった。それを理由に俺は他のエージェントに対して、表向きにはエージェントをやめた。政府から直接出される特別な任務だけを受けるようになった。

16歳のとき、幻想郷に来た。そして、今に至る。

「……………」

「これが俺の過去だ。」

俺は一気に話し終えるとため息をついた。

「俺は生物兵器だ。完全な人間じゃない。でも、完全な人間じゃないだけで人間であることに変わりはない。」

第八話

範人は人間

言いたいことはすべて言った。みんなが俺をどう見ているかは知らない。だが、誰がなんと言おうと俺は人間だ。みんなが俺を人間として見てくれるなら、もっと嬉しいが…。

「人間でいいじゃないか。」

「えっ?」

「完全な人間じゃなくたって、人間でいいじゃないか。」

「そうね。」

「そうだな。」

「ここは幻想郷だぜ。人間じゃないやつだって普通に生活している。完全な人間かどうかなんて小さいことどうでもいいじゃないか。」

「俺を……人間として見てくれるのか?」

「当たり前だ。お前が頼めば、神としても化け物としてもゴミとしても見てやるよ。」

(「ゴミはないだろ。」)

「ありがとう。」

「別にいいって、私たち友達だろ。」

魔理沙がかけてくれた言葉は俺にとって最も嬉しいものだった。

「私も友達よ。」

「俺だってお前が人間じゃなくても友達だぜ。」

(「そうか、ここは幻想郷、気にする必要はないよな。」)

俺の心の中のモヤモヤが少し消えた。

「突然、完全に人間か?なんて質問して悪かったわね。」

「別にいいよ。俺も、自分が人間でいいのか、って悩んでいたから。」

俺は人間として生きていいことが分かりとても嬉しかった。

俺は、幻想郷での生活について考えている。

「範人。」

「うわっ! て、なんだ姉さんか。」

突然スキマが開き、姉さんが飛び出してきた。

「なんだ、って何よ。」

姉さんは少し不機嫌そうだ。

「ごめんごめん。で、何。」

「実は人里に行くことなんだけど」

「ちょうど良かった。そのことで話があったんだ。」

「ごめんね。今日いっしょに行けなくなっちゃったわ。」

「別にいいさ。俺も少し疲れたから行く気なくなったし。明日、いっしょに人里に行けばいいだろ。」

「そうね。明日は特に用事もないからいいわよ。」

「ありがとう、姉さん。」

「じゃあ、私は戻るわね。」

そう言うのと姉さんはスキマに戻っていった。

「範人、お前って紫の弟だったのか？」

(霊夢と魔理沙は話してくれなかったのか。)

霊夢と魔理沙に目を向けると二人は目で、ごめん伝え忘れてた、と返してくる。

「俺は実の弟じゃない。小さい頃から面識があったからそう呼んでいいだけだ。」

「なんだ、びっくりした。」

「そういえば、なんでみんな驚くんだけ？」

「そりゃあ、紫がBB「魔理沙、O☆HA☆NA☆SI☆しようよ。」え

どこからともなく姉さんの声が聞こえ、魔理沙はスキマに落ちていった。

「紫はこの幻想郷の創設者なのよ。」

「なるほどな。」

かなりの年齢ってことは知ってたけど、姉さんってすごいな。

「そうだ霊夢。でかくて力のあるやつが働けそうなところあるか？」

俺はデューの働く場所について考えていたため訊いてみた。

「そうねえ。あつ、紅魔館はどう？」

「紅魔館？どこだよ？」

「霧の湖のところにある紅い館よ。その門番なんてどう？既に1人いるけどいつも居眠りしているから。」

「門番か、良いね。そこに行ってみる。」

俺は外へ向かう。

「じゃあな、霊夢。ありがとな。」

「またいつでも賽銭入れに来なさいよー。」

「気が向いたらな。」

俺は博麗神社から飛び立つ、目指す場所は紅魔館だ。

「あれ、なんで？」

姉さんからもらった地図が下手なものから上手なものに変わっていた。

第九話

闇纏いし少女

俺は今、デューの働き口を見つけるために紅魔館に向かっている。しかし、

「迷った。」

方向がわからなくなってしまった。

幻想郷の夏は気持ちが良い。元いた世界の夏はもつと気温が高く、空気もべつとりとしていた。日差しが眩しくて、思わず目を細めてしまおうが、これが本来の日差しの強さなのだろう。幻想郷は空気が澄んでいておいしいため、元いた世界の空気は汚かったに違いない。

「ん？なんだ、あれ？」

黒い球体が浮かんでいる。興味深いものを見つけたため、近づいてみる。

近くで見るとその球体は黒よりも、もつと暗かった。しかも球体は浮かんでいだけではなく、動いている。不思議に思い、更に近づいてみる。すると黒い球体が消え、中から金髪の少女が現れた。少女が話しかけてくる。

「あなたは、だーれ？」

「俺は旅行 範人だ。君は？」

「わたしはルーミア。ねえ、範人。範人は、食べていい人間？」

初対面のやつにいきなり、食べていい？と訊かれた。俺のことを人間と言ってくれたのは嬉しいが、さすがに喰われて死ぬわけにはいかない。

「俺はたしかに人間だが、純粋な人間じゃないぞ。」

「そーなのかい。」

「それでも喰うのか？」

「そーなのかい。」

「分かった。」

仕方がない。俺はネックレスを右手に持ち、力を込めた。ネットクレ

スは、覇剣クリムゾンに変化した。俺は覇剣クリムゾンで自分の左腕を切り落とした。切り口から真っ赤な血が噴き出す。俺は覇剣クリムゾンをネックレスに戻し、左腕をルーミアに投げつけ、ルーミアはそれをキャッチする。そして、今はない左腕に力を込め、左腕を瞬時に再生させた。

「ルーミア、俺は喰われて死ぬわけにはいかない。だから、左腕で我慢してくれ。」

「範人みたいな人間は初めてなのだー。わたしに会っても逃げなかったのだー。」

そりゃ、初対面で、食べていい？なんて言われたら、誰でも逃げるよ。俺が異常なだけだ。

「そういえばルーミア、紅魔館ってどこかわかるか？」

「そういう建物なら、向こうにあるのだー。」

俺はルーミアが指を指した方向を見る。

「方向教えてくれて、ありがとな。」

「別にいいのだー。左腕のお礼なのだー。」

俺はルーミアの教えてくれた方向へ飛んだ。

しばらく飛んでいると湖に着いた。しかし、湖の様子がおかしい。今は夏のはずなのに湖面が凍っていて、空気も冷たい。

「何が起きたんだ。」

俺が呟くと同時に氷の弾幕が飛んできた。弾幕が飛んできた方向を見ると水色の服を着て少女と緑色の服を着た少女がいた。背中にある羽根から、少女たちが人間ではないことがわかる。

「はっはっはー、参ったかー。」

「いきなり攻撃しちや駄目だよ、チルノちゃん。」

「大丈夫だよ、大ちゃん。アタイはサイキョーだからね。」

「いきなり危ないだろ。誰だおまえら？」

「アタイはチルノ！サイキョーだ。」

「私は大妖精と申します。名前はありません。」

「俺は旅行 範人だ。範人って呼んでくれ。で、何故攻撃してきたん

だ？」

「それはアタイがサイキョーだからだ。」

「ハイ、ソーデスカ（棒）。」

（自分で最強って…。何言ってるんだ、このバカは。）

「あ、今おまえバカにしたな。」

（何故わかったし。）

「氷漬けにしてやる！」

チルノと勝負することになった。

第十話 一日目終了

チルノは氷の弾幕を放ってくる。俺はそれらを軽くかわしていく。(魔理沙のほうがよく、ほど手強かったぞ。こんなん最強なんて、こいつ、言葉の意味分かって言ってるのか?)

「なんでかわすんだよく。」

「攻撃はかわすもんだろ。おまえバカか?」

「あー、バカって言ったな。バカって言うほうがバカなんだぞ。」

「ならバカって言ったから、おまえもバカなんだな。」

「う…、うるさい。」

(あーあ、怒らせちゃった。)

言い返すことができないあたり、やはりチルノの頭はかなり残念な性能らしい。

「くらえ、氷符『アイシクルフォール』」

チルノがスペルカードを発動した。しかし、それには一目でわかる安全地帯があった。

「何故だ。何故当たらない?」

「やっぱり、おまえバカだよ。」

弾幕は横に広く放たれているが、チルノの真正面には飛んでこない。こいつはふざけているのだろうか?俺はチルノに向かって弾幕を一発放った。弾幕がチルノに当たるとチルノの弾幕が消えた。スペルブレイクだ。

(たった一発でスペルブレイクとか、弱え。)

「まだまだ、くらえ凍符『パーフェクトフリーズ』」

今度は弾幕をランダムに放ってきた。俺はまた軽くかわしていく。すると弾幕に変化が起きた。突然、弾幕が凍りつき動きを止めたのだ。チルノが三列に弾幕を放つと、凍っていた弾幕が俺に向かって迫ってきた。そして、俺は弾幕に包まれた。

弾幕が消えるとそこに範人の姿はなかった。

「アタイの弾幕で消しとんだみたいね。」

(アタイったらサイキョーね。)

「やったよ、大ちゃん。範人に勝った。」

アタイは勝利を確信して言った。

「それはどうかな？」

「☒」

俺は今、チルノの背後にいる。弾幕が当たる瞬間に身体を粒子にして、弾幕の包囲から脱出したのだ。

「勝負のときははっきりと確認してから、勝利を確信しないとダメだぜ。」

俺はチルノに手をかざして力を込め、弾幕を生成する。一撃集中型の高威力弾幕、シングルショット。ただの弾幕と大して変わらないが高威力だ。

「戦いを挑むときは相手を選びな。」

チルノに向けて弾幕を発射した。それに当たるとチルノははるか彼方へ飛んでいった。

「チルノが飛んでいっちゃったけど、俺の勝ちでいいよな？大妖精。」
「はい、範人さんの勝ちです。」

俺の言葉に大妖精は頷き、チルノを追いかけていった。

範人VSチルノ、範人の勝利。

「あれが紅魔館か。」

その館は湖のほとりに建っていた。ほぼ全てが真っ赤で目に悪そうだ。

「この主は、素敵な趣味をお持ちだな。」

皮肉たつぷりに呟く。

「門は……、あそこか。」

門の前では1人の女性が居眠りをしていた。この人が霊夢の言っていた門番だろう。

「もしもし、起きてください。」

声をかけるが起きる気配がない。すると、どこからともなくメイド服を着た女性が現れた。

「私はこの紅魔館のメイド長 十六夜 咲夜です。この紅魔館に何のご用でしょうか？」

その女性は礼儀正しく挨拶をしてきた。それに合わせて、俺の言葉遣いも自然と丁寧なものになる。

「私は旅行 範人です。紅魔館のご主人様にご用があつてうかがいました。」

「そうですか。お嬢様はこの一週間お忙しいのでご面会は難しいかと思えます。」

「わかりました。では、一週間後にまたうかがいます。」

仕方がないため一週間後にまた来ることにした。

「では、お嬢様に伝えておきます。」

「お願いします。」

俺は紅魔館から飛び立ち、家に向かった。すぐ後に門番と思われる女性の悲鳴が聞こえてきた。

少年移動中

「ただいま」

「おお、帰ったか、範人。」

「おかえり範人。」

家に帰るとデューが復活していた。姉さんもいる。今日は疲れたから早く風呂入って寝よう。

「じゃあ、飯作るから。」

俺は夕食を作り始めた。

（少年調理中）

出来上がった料理をテーブルに並べ終え、食事を始める。

「範人、貴方を幻想郷に連れてきた理由を説明するわね。」

突然姉さんが話しかけてきた。その内容に少し驚いた。

「え、幻想郷から飛ばされたものの末裔だからじゃないのか？」

「それもあるけど、貴方には他の末裔を連れ戻して欲しいのよ。私が見つけたら、だけど。」

「そうなのか。まあ、精一杯努力するけど。」

「ありがとう。」

その後、みんなが夕食を終えたら食器を洗い、風呂に入って、すぐに寝た。

第十一話

人里訪問

幻想郷に来て二日目の朝。いつも通りの時間に起きて、服を着替えて、いつも通りにリビングへ行く。リビングには既に姉さんと他にも2人、いや2体いた。

「おはよう。藍と橙は久しぶりだね。」

「おはようございます、範人様。」

「おはようございます、範人しやま。」

「おはよう、範人。」

「別にタメ口でもいいのに、2人とも真面目だね。」

藍と橙に会うのは約2年ぶりである。2人とも2年前と変わっていない。そこへデューもやってきた。

「おはようございます、紫さん。2人とも久しぶり。」

「おはよう、デュー。」

「おはようございます、デューレス様。」

「おはよう、お兄ちゃん。」

デューと橙は実の兄妹ではないが、橙はデューのことを昔から、お兄ちゃんと呼ぶ。

「今から朝食作るけど、食べる？」

姉さんたち3人に聞く。

「頼むわ。」

「お言葉に甘えさせていただきます。」

「わーい、お兄ちゃんとごはんだー。」

「じゃあ、すぐに作るね。」

俺は5人分の朝食を作り始めた。藍の分は、油揚げを追加する。朝食を作り終え、リビングへ持っていく。

「」「」「いただきます。」

みんな朝食を食べ始める。みんなとの会話も弾む。やっぱり、食事はみんなですったほうがおいしい。

朝食を食べ終え、俺は食器を洗っている。これを終えれば、人里に

行けるため自然と手が速くなる。

「範人、今日人里に行くことだけど。橙がいつしよに行きたい、って言っているのよ。あんまり大人数で行くわけにもいかないじゃない、どうする?」

俺が食器を洗い終え、支度をしていると姉さんが話しかけてきた。

「なら、2組に分けたらどう?」

「でも、分け方はどうするの?」

「橙はきつとデューと行動したいんだろ。俺と姉さん、デューと橙と藍に分ければいいんじゃないか?」

「その分け方ならいいわね。」

今日の人里訪問の組分けが決まった。昨日、チルノに奇襲されたため、奇襲にあつてもすぐに対処できるようにベルトに付けたポーチにマグネシウムの粒を入れ、左肩の上にはタングステンの粒を大量に浮かばせておく。準備もできたし、出かけよう。

「準備できたぞー。」

みんなにそう伝え、俺は外に向かう。

外には既にみんなが集まっていた。

「今日はお兄ちゃんといっしょだよー。」

「こらこら、あんまりはしやぎ過ぎるなよ、橙。」

「こんなに喜んでもらえるとは、嬉しいな。」

はしやぐ橙、それを落ち着かせる藍、とても嬉しそうなデュー。それを見ているとこっちも嬉しくなってくる。

「貴方たちも楽しんできなさい。」

「行ってきます。」

姉さんがそう言うとき3人は人里へ向けて飛んでいった。

「私たちも行きましょう。」

「そうだな。」

俺と姉さんも人里に向かって飛び立った。

少年、少女? 移動中

人里に着いた。人里だからもちろん人はいるが、妖怪がたくさんい

た。俺は思わず声に出す。

「すごい、人と妖怪が共存している。」

人と人以外の存在が共存する世界、俺は幻想郷に感動した。

今日は良い一日になりそうだ。

第十二話

寺子屋と天才

俺と姉さんは人里を見て回っている。すごい、向こうの世界では見られなかったものばかりだ。すべてのものが共存することですら元いた世界ではありえないことだったのに、ここには昔の文化がきれいに残っている。

「ここは何だ？」

俺はとある建物の前で足を止めた。

「ここは寺子屋さ。」

突然、白髪の少女が現れ、そう答えた。

「寺子屋、なんだそれ？」

「貴方が元いた世界の学校のようなものよ。」

姉さんが教えてくれた。

「なるほど、つまり学問を学ぶ場所か。」

「あんまり見ない顔だな。あんた外来人か？」

「そうだよ。俺は旅行 範人だ。」

「私は藤原 妹紅だ。よろしくな。」

「ああ、よろしく。」

ん、待てよ。藤原って確か……。そうだよ！この人、日本史で有名な藤原氏だよ！しかも、かぐや姫の物語で出てきた藤原 不比等の娘さんだよ！あれ、でもなんで生きているんだ？すごい昔の人だよね。

「あの一、妹紅の父親って藤原 不比等さん？」

「ああ、そうだよ。なんで範人が知っているんだ？」

「ご本人だったよ。幻想郷ってすげー。」

「向こうの世界には、かぐや姫っていう物語があつてね。それに書いてあつたんだよ。でも、まさか本人とはね。」

「そうか、そんな話が……。」

妹紅は少し悲しそうな顔をした。当たり前だろう。その時代の貴族の男たちは、すぐに女を見捨てては、新しい女を見つけていたような馬鹿ばかりだったのだから。かぐや姫はそんな男たちを姫がふつていく物語なのだから。妹紅はその時代に育ったのだから。何か悲

しいことを思い出させてしまったのだろう。

「ねえ、妹紅。範人が寺子屋に興味があるみたいなの、入れないかしら？」

「お安いご用さ。この寺子屋は私の知り合いがやっているからな。丁度、今は休み時間だろうしね。ついて来な。」

俺と姉さんは妹紅についていった。

「慧音、来たぞー。」

「おお、妹紅か。いらっしやい。そいつは誰だ？紫様はわかるけど。」

「こいつは旅行 範人だ。」

「よろしく。」

「ああ、よろしく。私は上白沢 慧音だ。で、どうしたんだ？」

寺子屋にいたのは、水色の髪をした女性だった。

「範人が寺子屋の授業を見てみたいそうさ。授業を見せてやってくれないか？」

「それは別に構わないぞ。」

「ありがとう。」

やったね。いままでは授業を受ける側だったから三人称視点の授業がどんなものか知りたかったんだよね。

「その変わり頼みがある。問題がわからない生徒がいたら問題の解き方とかをアドバイスしてやってくれ。」

「それくらいなら別にいいよ。」

人にものを教えるのって楽しそうだし。

「私は1人でその辺をうろろしてくるわ。1時間後に戻ってくるわね。」

「わかった。」

「じゃあ、授業しに行こうか。」

俺は慧音のあとに続いて教室に入る。

「さて、授業を始めるけど、その前にちよつと紹介する。この授業を手伝ってくれる旅行 範人だ。」

「旅行 範人だ。よろしく、みんな。」

俺は教室を見渡す、するとあいつがいた。

「あれー、なんで範人が寺子屋に来てるのさー？」

ルーミアはいい。問題はその後ろのやつだ。

「あー、昨日アタイを吹っ飛ばしたやつ！」

チルノである。こいつは苦手だ。いちいち相手をするのが面倒くさい。表情に出そうだが俺は感情を押しさえ込む。

「わからないことがあったら、聞いてくれ。」

「紹介が終わったから、授業を始めるぞ。今回はかけ算だ。」

慧音は解き方を上手く説明してくれた。今は渡された問題を解く時間だ。

「範人ー、これはどうやって解くのさー。」

「ああ、 3×5 か。人が3人住んでいる家が5つある村がある。村に人は何人いる？」

「えーと、人が3人でそれが5つだから、わかった15人だ。」

「よくできたな、ルーミア。正解だ。」

「ありがとうなのだ、範人。」

俺は周りを見渡す、問題がわからなくなっているやつはいないだろうか。ふと、チルノの問題用紙を見るとほとんど書いてなかった。面倒だが教えてやろう。

「チルノ、ほとんど書いてないじゃないか。どうしたんだ？」

「だって、わからない。」

「なら、俺がいつしよに解いてやるよ。」

「別にいい。」

「はあ…。」

俺はため息をつく。少し気が引けるが仕方がない。

「昨日は悪かったな、バカだなんて言っつて。」

「え…。」

「これからは天才って言っつてやるよ。」

俺は遠回しにバカだと言う。

よく言うだろ、バカと天才は紙一重だ、つて。

「範人…。ここ教えて。」

問題用紙には《りんごが8個入った箱が10箱ある。りんごは何個あるか?》と書かれている。

「これは 8×10 か。りんごを8個それぞれ10切れに切ったら、りんごは何切れある?」

逆転の発想である。既にあるものを増やして数えるのではなく、既にあるものを分けて数える。

「えっと、8個を全部10切れに切ったから……。わかった。80切れだ。」

「正解だ、チルノ。俺の説明でよくわかったな。おまえは天才だ。」

「天才だなんて、アタイったらサイキョーね。」

チルノが問題を解き終えると同時に慧音が言う。

「今日の授業は、これまでだ。」

俺は慧音に続いて教室を出た。

「おまえの教え方、なかなか良かったぞ。」

「それはどうも。慧音の説明も上手かったよ。」

「ありがとう。範人、ここで働いてみる気はないか?」

正直、教えるのは楽しかった。子供達の笑顔も見れたし、本当に良かった。しかし、研究所を捨てるわけにはいかない。

「遠慮させていただくよ。俺は生物研究所を持っているからね。」

「そうか。なら今度、社会科見学に行ってもいいか?」

「別に構わないけど、刺激が強いと思うよ。」

「別にいいさ。そういうことも知っておかないとな。」

慧音が何を考えているかはわからないが、俺の研究所は体を切る、潰すなどの血がブシャーな実験が行われていたため、マジで刺激が強い。そんなところへ社会科見学をさせるのはどうか、と考えていたところへ姉さんが戻ってきた。

「範人どうだった。楽しかったかしら?」

「とても楽しかったよ。慧音、ありがとう。」

「また、いつでも来てくれ。子供達も喜ぶだろうし。」

「ああ、気が向いたら来るよ。」

「範人は博士号持っているからね。」

「何っ！それは本当か？」

「本当よ。生物学とか地学とかいろいろ。」

姉さん、俺の自慢をしないでくれ。恥ずかしい。

「また是非来てくれ。あ、それと社会科学見学のことが行くことが決まったらまた連絡する。」

「ああ、いつでも連絡してくれ。」

「じゃあね、慧音。」

「じゃあな、慧音。」

「じゃあな、範人、紫。」

俺と姉さんは寺子屋を後にした。

第十三話

紫の友達

俺と姉さんは寺子屋を後にして、食べ歩きをしていた。鰻の屋台の前を通り過ぎようとする、屋台から桃色の髪の女性が姉さんに声をかけてきた。

「あら、紫じゃない。こんなところでどうしたの？」

「食べ歩きの最中よ。貴方は相変わらずだね。」

「姉さん、この人は？」

「冥界の主、西行寺 幽々子よ。」

えー冥界の主？ハデス？やばい、下手な話し方すれば殺される。

「西行寺 幽々子よ。貴方は紫の弟さん？」

「初めてまして、旅行 範人です。姉さんと呼んではいても実の弟ではありません。よろしくお願いします。」

「別に敬語じゃなくてもいいわよ。」

良かった。かなり優しい人だった。やばい人ではなさそうだ。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらうよ。」

「ふふ、素直ね。妖夢も挨拶しなさい。」

「魂魄 妖夢と申します。よろしくお願いします。」

(やばい、かわいい。)

妖夢と呼ばれた少女は頬を赤らめながら礼儀正しく自己紹介をした。俺は自分の心臓の脈が速くなるのがわかった。

「旅行 範人だ。よろしくな、妖夢。」

「よろしくお願いします、範人さん。」

私が幽々子様と屋台で昼食を食べていると紫様と誰かがやってきた。幽々子様は少年の声との話を終え、私に言う。

「妖夢も挨拶しなさい。」

幽々子様に言われたため、紫様たちの方を向く。

(かっ！いいい。)

紫様の隣に立っていたのは、金髪の少年だった。私は自分の顔が熱

くなるのを感じた。

「魂魄 妖夢と申します。よろしくお願ひします。」

少し落ち着かなかったが自己紹介ができた。

「よろしくな、妖夢。」

「よろしくお願ひします、範人さん。」

範人と妖夢が自己紹介を終えた。二人とも少し落ち着いていなかったような気がする。

(これはもしかしたら……。)

私は嬉しかった。人をあまり寄せ付けなかった範人が人を好きになったのだから。

(少し何かしてみましよう。)

「範人、幽々子と少し買い物してくるから妖夢といっしょに少し何かしててね。」

「えっ、姉さん!?!」

幽々子を買う物に誘う。幽々子も二人のことに気づいたのか、買物の誘いを受ける。

「妖夢、そういうわけだから範人といっしょにいてね。」

「幽々子様!?!」

幽々子が代金を支払い、私たちは商店街に向かうフリをしてスキマに入った。

(どうしよう。)

二人きりである。しかも妖夢といっしょ。話しかけたいが、恥ずかしくて上手く話しかけれない。

「妖夢、どこか行きたいところあるか?」

「みよん!?!?」

驚いた妖夢は奇妙な声を出す。少ししてから妖夢が言う。

「お昼を食べたので食後にお団子が食べたくなりました。」

「なら、行こうか。」

俺は妖夢といっしょに団子屋へ行くことにした。

少年、少女移動中

団子屋に着き、俺と妖夢は椅子に座った。俺も妖夢も三色団子を頼む。

「範人さん。」

団子が運ばれてきたとき、妖夢が話しかけてきた。

「なんだ？」

「範人さんも半人半霊なんですか？」

「なんだそれ？」

半人半霊なんて聞いたことがない。妖夢が説明をする。

「半人半霊はその言葉の通り、半分人間で半分霊体の人のことです。私はその半人半霊なんです。」

「そういうことか。俺は違うぞ。」

(まあ、俺も同じようなもんだがな。)

「じゃあ、左肩の上に浮いているものは何ですか？」

妖夢はタングステンの粒を指差しながら訊いてきた。

「これはタングステンという金属の粒でね、俺の能力で浮かばせているんだよ。俺の能力は『粒子を操る程度の能力』だからね。粒を浮かばせたり、粒子に分解したりできるんだよ。」

「そうなんですか。」

妖夢が悲しそうな顔をする。

「どうしたんだ？」

「自分と同じ種族の人がいたと思ったんです。私は自分の種族のせいであざけがられていましたから……。」

妖夢は自分の半霊を指差しながら言う。

「そうか？俺は別に平気だぞ。」

「えっ、本当ですか？」

「ああ。それに俺も半人みたいなものだからさ。」

「そうなんですか！種族名は？」

「生物兵器だ。」

「生物兵器って何ですか？」

「生物兵器ってのは、生物を改造して作り出した兵器のことだ。俺はもともと人間だったが大怪我をしてな。それを治療するために父さんが改造を施したんだ。そのせいで俺も気味悪がられていたんだ。」

「そうだったんですか。私も別に平気ですよ。」

「ありがとうございます。それより早く食べようか。」

「そうしましょう。」

気づけば、俺と妖夢と自然と打ち解けて普通に会話をしていた。きつと過去が似ていたからだろう。

範人と妖夢が会話をしているのを私たちはスキマから見ている。

「二人ともいい感じじゃない。」

「そうね。」

「そうだわ！今日の夕食うちで食べない？妖夢の料理美味しいわよ。」

「それなら範人も料理上手いわよ。」

「それは気になるわね。」

「なら、二人に作ってもらいましょう。」

今日の夕食は白玉楼で食べることに決定だ。あ、デューも忘れてはいけない。

「幽々子。私と範人もう一人来るけどいいかしら？」

「別に構わないわよ。こっちももう一人いるし。」

「そう。あ、二人が動いたから私たちも戻りましょう。」

範人と妖夢は代金を支払い、店から出る場所だった。

俺たちがもとの場所に戻るともう既に姉さんたちがいた。

「ごめん、待たせた？」

「私たちも戻ったところよ。」

「なら良かった。」

「今日の夕食は白玉楼で食べるわよ。範人も来なさい。」

「!?!?」

妖夢が驚いた顔をしたが何故かわからなかった。気にせずにごたえる。

「わかった。でも、場所知らないよ。」

「私が連れて行くから安心して。」

「じゃあね、紫。待ってるわよ。」

「また後でね。」

「妖夢、帰るわよ。」

「はい、幽々子様。」

その時、俺は理解した。白玉楼は幽々子の家であり、そこで妖夢も暮らしているのである。つまり、白玉楼に行くということは妖夢の家に行くことと同じなのだ。

「さあ、帰るわよ。」

「ああ。」

俺と姉さんは家に向かった。

少年、少女移動中

家に着くと既にデューたちが帰っていた。

「ただいま。」

「お邪魔するわね。」

「おかえり。」

「お邪魔しています。」

「藍、橙。貴方たちは帰りなさい。夕食は食べて帰るからいらさないわよ。デュー、白玉楼に行くからスキマに入りなさい。」

「わかりました。」

「だそうだ。藍、橙。またな。」

「範人様、デューレス様。さようなら。」

「範人しゃま、お兄ちゃん。また明日。」

「また遊ぼうか。」

藍と橙はスキマに帰っていった。俺とデューは紫のいるスキマに入っていく。

スキマから出るとそこは白玉楼の目の前だった。白玉楼には幽々子と妖夢、そしてもう一人懐かしい人物がいた。

第十四話

範人の師匠

白玉楼には幽々子と妖夢の他にもう一人驚くべき人物がいた。

「師匠！」

懐かしい思い出が込み上げてくる。俺に武術を教え、困った時はいつも相談に乗ってくれた人物。ジャック・クラウザーがそこにはいた。

「おう、ハント久しぶりだな。」

「なんで師匠がここにいますか？」

「ここは冥界だ。別に死人がいてもおかしくはないだろう。」

「確かにそうですね……。俺が言っているのは何故幻想郷にいるのかということですよ。」

「ああ、なるほどな。今回だけ特別に冥界の果てから来たんだ。それぞれの世界は分かれていても、冥界はつながっているからな。」

「なるほど、納得しました。」

「さて、話は夕食の時にしましょう。」

「妖夢、ごはん作って。あと、範人もね。」

「わかりました。」

「なんで俺も？」

「紫が範人の料理は美味しいって言ってたからよ。」

「範人さんもいっしょに作りましょう。」

「……わかった。」

妖夢の頼みだ。断るわけにはいかない。俺と妖夢は台所に向かった。

「さて、どのくらい作ればいい？」

「だいたい、五十人前くらいですね。」

「は？」

今、妖夢がとんでもないことを言ったような気がした。確か、師匠は二人前くらいしか食べないし、デューでさえも五人前が限界だったはずだ。

「妖夢、それ冗談？」

「いいえ、本気です。幽々子様がたくさん食べますので。」

「なんだそれ？たくさん食べるっていうレベルじゃないよな。ていうか、あの腹のどこにそんなに入るんだよ！やばい人じゃないっていうの訂正。幽々子はやばいやつだ。」

「まあ、それなら仕方がないし作るか。何作る？」

「それぞれの得意なものを作りましょう。美味しくて速く作れるのを。」

「わかった。」

もうどうにでもなれ。俺は炒飯と青椒肉絲、中華スープ、困ったときの卵焼きを作り始める。別に和洋中なんでも作れるが速く作れるのはこの辺だ。妖夢の方を見ると和食を作っているが向こうも焦っているようだ。幽々子よ、料理する方のことも考えろ。

しばらくして

「できたー！」

「できました。」

俺と妖夢はほぼ同時に夕食を完成させた。こんだけ疲れたんだ。残すのは許さん。

「運ぼうか。」

「はい。」

俺と妖夢はでき上がった料理を運び、並べていった。料理を並び終えると同時に幽々子が食べ始めようとする。

「幽々子様。いただきますと言ってからですよ。」

「みんなで言おうか。」

「」「」「いただきます。」「」「」

同時に幽々子は夕食を食べ始める。速すぎだろ。もう一人前消えたよ。

「範人、おまえしばらく会わないうちにますます料理の腕を上げたな。」

「ありがとうございます。」

師匠は過去に俺の料理を食べたことがあるため、そう言ってもらえると腕が上がっていることが実感できて嬉しい。

「この炒飯美味しいわね。範人が作ったの?」

「そうだよ。」

「うちで暮らさない?」

「!?」

妖夢が幽々子の発言に驚いている。突然何を言い出すんだ、この人は。

「そう言ってもらえるのは嬉しいけど、研究所を離れるわけにはいかないから。それに来たくても場所がわからないし。」

「そうなの……。紫、どうにかならぬかしら?」

「私に聞かないですよ。まあ、来る方法はあるけど。」

(あるのかよ!)

「その方法って?」

「範人にこれを渡すわ。」

姉さんが取り出したものは封力石だった。父さんが能力をコピーして閉じ込めた石。

「これには私の能力が入っているわ。つなげられる場所は二箇所だけになっているけどね。白玉楼と研究所を既につなげてあるから、これですべてでも行き来できるわよ。」

「姉さん、ありがとう。」

「お礼ならアルバレストに言いなさい。彼が作ってくれたんだから。」

(父さん、ありがとう。)

「これでいつでも範人のごはんが食べられるわー。」

訂正する。父さん、なんてもんを作ってくれたんだ。妖夢に会えるのは嬉しいけど……。

「妖夢、範人。デザートお願いね。」

「!?」

気がつけば、幽々子は料理を食べ終えていた。

「まだ食べるのですか?」

「まだ食うのか?」

「もちろんよ。あつ、三十人前ね。」

本当にどんな腹してんだか。俺も妖夢も疲れてクタクタだが台所に向かう。

幽々子が普段どれだけ食べるのかが気になったため、訊いてみる。

「幽々子って、普段どのくらい食べるんだ？」

「だいたい、十人前くらいですね。今日は気分が良いのでたくさん食べているようです。」

普段からそんなに食っているのか。妖夢も大変だ。

「大変だな。これからは毎日手伝いに来てやるよ。」

「えっ、いいんですか？」

「ああ、さすがに大変だろ。来れない日もあるだろうけど。」

「ありがとうございます！」

そう言う妖夢はとても嬉しそうだ。

(やった。範人さんに毎日会える。)

私と範人さんは、デザートを作り終えて運ぶ。もう疲れが限界だ。

「ふふふ、ありがとうね。二人とも。」

その後、三十人前のデザートは10分もかからずに消えた。

「「「「ごちそうさまでした。」「」」」」

この言葉の直後に私と範人さんは疲労で意識を手放した。

目が覚めると布団の上だった。外は朝である。ああ、そうだ。昨日、夕食の直後に疲れて気絶したんだ。ふと、横を見ると隣で妖夢が寝ていた。

「えっ!?」

俺が驚くと妖夢も起きてしまった。自分の顔が熱くなるのがよくわかる。妖夢も顔が真っ赤だ。

「お、おはよう。」

「おはようございます。」

恥ずかしさのあまり、目をそらして自分の枕のほうを見る。すると、手紙が置いてあった。

「なんだこれ？」

「どうしたんですか？」

その手紙は師匠からのものだった。

「我が弟子ハントへ」

俺は他の世界に転生することになった。転生すれば、おまえと過ごした日々の記憶も忘れてしまうだろう。だから、おまえがこの世界に来たのを知ったとき、おまえに一度会っておきたかった。こんな俺を師匠と呼んでくれてありがとう。さようなら。妖夢と幸せにな。

最後に

おまえは俺の特訓に耐え、俺を超える存在になった。それをここに証明する。

ジャック・クラウザー」

手紙を読み終わったら、涙が溢れてきた。

「師匠ありがとうございます。俺は師匠のことを絶対に忘れません。」

俺はもう届かない言葉を師匠に言った。

「あ、裏に何か書いてありますよ。」

「なんだろう？」

「おまえたちを運んだのは俺だが、これを考えたのは幽々子と紫だ。すまない。」

俺と妖夢は顔を見合わせる。

「……妖夢。」

「そうですね、範人さん。」

「あの二人朝食抜き。」
俺と妖夢は怒りで恥ずかしいことも忘れた。

第十五話

剣術勝負

まだ朝早いため、俺は剣の練習をすることにした。庭に出て覇剣クリムゾンを振っていると妖夢がやってきた。

「範人さんも剣士だったんですか？」

「ああ、剣が専門ってわけじゃないがな。おまえもか？」

「はい、私も剣士です。後で私と一本勝負してみませんか？」

「俺は別に構わないぞ。」

「ありがとうございます。」

範人さんと剣で勝負することになった。

(楽しみだなあ。)

範人さんの剣は大剣だった。非常に重いはずなのに彼は片手で軽々と振り回していた。とてつもない力である。

ひとまず、朝食を作ろう。もちろん、幽々子様と紫様の分は無しで。

俺がしばらく練習をしていると妖夢に呼ばれた。

「朝食ができました。」

「作ってくれたのか？」

「はい。デューレスさんも起きてきましたよ。」

「そうか。すぐに行くよ。」

「二いただきます。」

俺、妖夢、デューレスの三人での食事である。自然と会話に花が咲く。

「妖夢の料理って美味しいな。」

「そうですね。ありがとうございます。」

「昨日はあんまり味わえなかつたからな。」

「そうですね。まあ、あの二人は朝食抜きですからゆっくり食べま

しよう。」

「二人とも昨日はご苦労様。俺も手伝ったほうが良かったか？」

「いや、手伝わなくても良かったよ。」

「デューレスさんも料理できるんですか？」

「一応な。」

デューも俺や妖夢ほどではないが料理ができる。

「今度は三人で作るか？」

「そうですね。次はそうしましょう。」

「それは楽しみだけど、昨日みたいなことはもうごめんだよ。」

「それは全くです。」

「あれだけの量を二人で作ったのか。すごいな。」

そこへ幽々子が起きてくる。

「あら、三人で食事しながら会話？私も混ぜて欲しいわ。妖夢、ごはんお願い。」

「幽々子様の分はないですよ。」

「え？」

「昨日の夜あれだけ食べたんだ。別に今日の朝は食べる必要ないだろう。」

「食べ盛りなの。」

（何言ってるんだか。）

「なんで私と範人さんを同じ布団に寝かせたんですか？」

「面白いことになると思ったからよ。」

そんな理由で同じ部屋に寝かせたのか。自分からいつしよに寝るのはいいけどそれはやめてもらいたい。

「それに二人とも、お互いのことg」「黙れ、成仏させるぞ（させますよ。）」はいー！

俺は妖夢のことが好きだということを言われそうになったため、幽々子を黙らせた。そういうことは自分の口から伝えたい。

私は目が覚め、幽々子の後をついていった。幽々子がみんなのいる

部屋に入ると範人と妖夢の怒った声が聞こえた。

(やばい、範人と妖夢めっちゃ怒ってる。逃げなきゃ。)

私はスキマで白玉楼から逃げ出した。

何？二人とも超怖い。二人とも互いのこと好きなのはずなのにおかしいわね。まさか、まだ相手の気持ちに気づいてないの？お互いに鈍すぎるでしょ。

これ以上刺激したらとんでもないことになりそうだったため謝まる。

「ごめんなさい。」

「わかればよろしい。」

「わかればいいですよ。」

「じゃあごはんは？」

「昼まで我慢してください。」

「そんなの嫌よ。三度のごはんは私にとって命と同じくらい大事なもののよ。」

「もう命ないだろ（ないですよね）。」

しまったわ。地雷を踏んだ。こうなったらストレートに頼むしかないわね。

「頼むからごはん作ってちょうだい。」

「そんなに食べたいなら、私以外の人に頼めばいいでしょう？」

「範人。」

「……。」

駄目だ。すごい剣幕で睨まれた。

「それなら、俺が作りましょうか？」

「え、いいの？」

「はい。範人や妖夢みたいに上手くはないですが……。」「お願いするわ。」

デューレスありがとう。もうはらぺこで倒れそう。

朝食も終わり、食器も片付けた。これから、妖夢と剣で勝負だ。俺が庭に出ると妖夢は既に待っていた。少し練習してから声をかける。

「さあ、勝負だ。」

「女だからと言って手を抜かないでくださいね。」

「それなら、本気で行こうか。」

「始めのかけ声は俺がかけるぞ。」

「おう、頼んだ。」

「では、両者構え……」

デューが声をかけ始めた。俺は覇剣クリムゾンを構える。妖夢も刀を構える。

「始め！」

妖夢はかけ声と同時に突っ込んできた。妖夢は刀を横に一閃させる。俺はバックステップでかわした。更に妖夢は斜めに斬り上げてくる。俺はそれを左にかわす。今度は刀を縦に振り下ろしてきた。俺はそれを剣で受け止める。

「いい太刀筋だ。」

「避けてばかりでは勝てませんよ。」

俺と妖夢は後ろに跳躍し、互いに距離をとった。今度はこちらから仕掛ける。俺は妖夢に突っ込んだ。

範人が突っ込んできた。大剣を残像が残るような速度で振るう。私はそれをすべて受け止めていく。範人の剣は非常に大きく、重そうに見える。しかし、範人はそれをまるでナイフでも振り回すかのようにな軽々と振り回す。範人の連撃は素早く、一撃一撃が重い。だが、一撃が軽くても剣士の戦いでは一発決まれば、ほぼ勝ちである。私は範人の剣をかわして後ろに跳躍、刀をもう一本抜いた。

二刀か、面白い。俺は剣を握る手に力を込めた。すると大剣が真ん中で分かれ、双剣になった。覇剣クリムゾンの特徴である変形機構だ。俺と妖夢は同時に突っ込み、先程よりも更に素早い斬り合いを開始した。俺も妖夢も全速力で剣と刀を振る。刃がぶつかり合うたびに火花が散る。しばらく打ち合っていると俺の腕に黒い甲殻が現れた。妖夢との戦いでテンションが上がったことにより身体が勝手に変異したのである。俺の攻撃速度は更に速くなり、ついに妖夢の刀を両方弾いた。俺は妖夢の首に剣を突きつける。

「そこまで！」

デューの声が響いた。

「勝者 旅行 範人。」

勝負が終わった。俺は妖夢に声をかける。

「妖夢、おつかれ。いい勝負だったよ。」

「範人さんは強いですね。」

「そりやどうも。妖夢の太刀筋も良かったよ。」

「ありがとうございます。」

「でも、少し引つかかることがあるんだよな。」

「何ですか？」

「妖夢って対人練習してる？妖夢の攻撃、かなり避けやすかったんだけど。」

「そのことですか。実はもともと祖父が剣術を覚えてくれたんですが、祖父がいなくなってから対人練習の相手がいなくなってしまうて、対人練習ができなかったんです。」

「そうか。なら、ここに来たときは剣術の練習相手もしょうか？」

「いいんですか？」

「ああ、いいよ。ここに来てもらうことが料理だけだと暇になるからね。」

「ありがとうございます。」

デューも会話に混ぜてくる。

「二人ともすごい勝負だったね。最後なんて剣がほとんど見えなかつ

たよ。疲れなかった？」

「疲れたよ。すごい汗だ。」

「私もです。」

俺も妖夢も汗だくである。当たり前か、冥界といっても季節は夏だし、あんな猛スピードで剣術勝負したんだから。

「二人ともいっしょにお風呂に入ってくれば？」

疲れている俺たちに向かって、幽々子がとんでもないことを言った。俺は顔が真っ赤になる。やめてくれ、出会って2日目ですんなことできるわけがないだろ。

「幽々子様。」

そうだ妖夢、何か言ってやれ。

「いいんですか？」

(何訊いちやってるのー！)

「もちろんよ。」

「範人さん、いっしょに入りましょう。」

真つ赤だが嬉しそうな顔で妖夢もとんでもないことを言う。

(なんでそんな顔できるの?)

「はあ!?？」

「私とでは嫌ですか？」

「嫌じゃないんだけど……。」

嫌じゃないよ。むしろ、好きになった人といっしょに風呂入れるってすごく嬉しいよ。でもね、すごく恥ずかしいんだよ。ああ、そんな悲しそうな顔しないでくれ。はあ、もういいや。

「わかった、いっしょに入ろう。そのかわり、俺を気味悪がったり、嫌いになったりするなよ。」

「別に気味悪がることはないですし、嫌いにもなりませんよ。」

「そうか。」

ああ、大変なことになった。

第十六話

告白は突然に

大変なことになった。幽々子の提案のせいで妖夢と風呂に入ることになってしまった。

「家に着替えとタオル取りに行ってくる。」

「わかりました。」

「待ってるわよ。」

俺は姉さんから貰った封力石を使って研究所に戻った。このまま逃げてもいいのだが妖夢に嫌われるのは嫌なので俺は覚悟を決める。自分の部屋に行き、着替えと替えの包帯、タオルを引き出しから取り出す。タオルは体に巻く用二枚、体を拭く用二枚、予備二枚の計六枚を持つていく。そして、封力石を使って白玉楼に戻る。

「戻ってきたわね。じゃ、楽しんできてね。」

(なんで幽々子はこんなにノリノリなんだよ。)

「範人さん行きましようか。」

「あ、ああ。」

俺は妖夢についていく。

「妖夢、風呂入るときはタオルを体に巻いてくれ。そうしてくれないと直視できないから。」

「私は別に見られても大丈夫ですよ。寝るときいつしよでしたから、もう裸くらい見られてもいいって思っています。」

「妖夢がよくても俺がアウトだから。」

「それにお風呂では裸の付き合いが当たり前ですよ。」

「……わかった。でも、俺は巻いていいか?」

「範人さんもですよ。」

「ええー!?!?」

それはいけない。本当にいろいろアウトだから。俺も妖夢のこと好きだよ。でも駄目だから、それは本当に駄目だから。

「頼む。妖夢のことはもういいから、俺だけでもタオルを巻かせてくれ。」

「仕方ないですね。わかりました。」

よかった。わかってくれた。

「そのかわり、私の体を洗ってください。昨日の夜お風呂に入れてないので。」

「は!?？俺が妖夢の体に触れと?」

「はい。全身お願いします。」

おい、嘘だろ。何だこのすごく恥ずかしい取捨扱一は?」

「どうしますか?」

「うう……。」

やばい本当に困った。どっちもすごく恥ずかしい。こうなったら、ストレートになんていっしょに入りたいか訊いて話をそらそう。

「そういえば、なんで妖夢は俺といっしょに風呂入ろうとしているんだ?」

俺みたいなのと入って何が得なんだろうか?

範人さんがストレートに訊いてきた。なんでいっしょに入りたいか?と。私は自分がなんでいっしょに入りたいかを考えて顔が真っ赤になった。もういい、言ってしまうおう。

「それは……」

範人さんのことが好きだからです。」

言ってしまった。会って2日目でこんなこと言うのは自分でもおかしいと思う。だが初めて会ったときから好きだったのだ。範人さんに嫌われてしまうかもしれない、それが怖くて言えなかった。

俺は突然の告白に驚いたが嬉しかった。なんだ、そうだったのか。妖夢は俺のことが嫌いじゃなかったんだ。妖夢は俺のことを好きになっってくれたのか。こんな俺のことを。

「そうか、俺も妖夢のことが好きだよ。」

俺も妖夢に自分の気持ちを伝えた。

「えっ？」

「実は初めて会ったときから、好きだったんだ。」

「そうだったんですか？私もいっしょです。」

「二人で風呂に入ることだけど、少し抵抗があったんだよ。嬉しかったんだけどね、自分は好きでも相手がどう思っているかはわからないから。普通に恥ずかしいこともあるんだけど。」

「そうですか。なら、互いに好きだとわかった今はどうしますか？」

「妖夢がいいなら、喜んでいっしょに入るよ。でも、タオルは巻かせてもらおうよ。俺も見られたくないものがあるからね。」

「なら、体を洗うのは？」

「……仕方がないから洗うよ。そういう条件だからね。」

「でも、体を洗う用のタオルはありませんよ。素手で洗ってもらってもりでしたから。」

（妖夢は何を考えていたんだ。）

「予備でタオル持ってきたから。」

俺と妖夢は脱衣所に入る。

「ちよつと、向こう向いてて。」

俺は少しの間妖夢に向こうを向いてもらい、その間に服を脱ぎ、包帯を外し、タオルを体に巻く。

「もういいよ。」

妖夢は俺の格好を見て驚いているようだ。

「どうした？」

「なんでタオルをそんなに上に巻いているんですか？」

「見られたくないものは背中にもあるからな。」

「そうですか。私も脱ぎますので先に入ってください。」

「ああ。」

俺は先に風呂場に入る。白玉楼の風呂場はかなり広い。少しして妖夢も入ってきた。俺は妖夢の体を見ないように逆を向く。見たくないわけではないが、自我を保てる自信がないため見ないようにした。

俺は自分の体を洗っている。しかし、背中にはうまく手が届かない。どうしたものか。妖夢には極力、背中の傷痕を見てもらいたくない。魔理沙たちのような反応をされるのは嫌だ。

「範人さん、背中に手が届かないなら私が洗いましょうか？」

妖夢に声をかけられてしまった。背中はまだ見られたくないが妖夢の好意も無駄にしたくない。

「上半身だけでもタオルを外すなら、私の体を洗うときもどちらか半身だけでいいですよ。」

よし決定、洗ってもらおう。さすがに妖夢の下半身を洗うわけにはいかない。

「頼むよ。気持ち悪いかもしれないけど。」

「私は気味悪がることはないと言ったじゃないですか。大丈夫です。」

妖夢にタオルを渡す。妖夢は俺の背中を見ても別に驚く様子もなく、普通に洗ってくれた。

「次は範人さんがお願いします。」

俺は覚悟を決めて妖夢の体を洗い始める。背中を洗うときは別にいいのだが、前を洗うときはどうしても胸に当たってしまう。胸を洗うときにいたっては揉むような感じになってしまった。だが、なんとか自我を保ち続けることができた。

「終わったよ。」

「ありがとうございます。」

俺は風呂にはいる。しばらくして妖夢も風呂に入ってきた。

「別にこっち見ても平気なんじゃないですか？もう触ったんですし。」

「そういうもんかな？」

「そうだと思います。それにそのうち見ることになると思いますよ。先に慣れておいてください。」

そのうちに見ることになるとか、何かやばい言葉が聞こえた。それに、そういうのに慣れるのも問題だと思う。

俺は妖夢のほうを向く。

「そういえば、背中の傷痕見ても平気だったのか？」

「はい。範人さんのことが少し心配になったくらいです。」

「ならいいんだけどな。」

「そろそろ出ましようか。」

「そうだな。」

俺も妖夢も風呂を出て、体を拭き、服を着る。気がつけばかなり時間経っていた。

「範人さん、これからどうします?」

「何を?」

「この後、何しますか?」

「もう昼だし、昼食でも作るか。」

「そうですね。幽々子様も待っているでしょう。」

俺と妖夢は台所に向かった。

昼食を作り終え、並べる。デューは橙と遊びに行ったらしい。姉さんは逃げたのだろう。俺、妖夢、幽々子の三人での昼食だ。

「「いただきます。」」

幽々子は猛スピードで食べる。もちろん、十人前だ。

「そういうえば、二人は互いの気持ちわかった?」

「はい。」

俺も妖夢も互いに好きなことがわかったため、そう答える。それを聞いた幽々子はかなり嬉しそうだ。

「じゃあ、どこまでいったの?随分と長く入っていたみたいけど。」

「互いに体洗ってもらいました。」

(ド直球に答えるな!)

妖夢、もうちよつといい言い方はないのか。それはさすがに直球すぎるぞ。

「それなら、結婚とかは考えているの?」

「「け、結婚!?!」」

俺も妖夢も一瞬で顔が赤くなる。しかし、俺はすぐに落ち着き冷静に答える。

「俺はまだ十六歳だから、結婚はまだ先だな。」

「そう、妖夢はどう考えているの?」

「私は範人さんのことを待ちますよ。」

「ふふ、楽しみね。妖夢と範人が結婚すれば、美味しいごはんがいまま
でよりもたくさん食べられるわね。」

「妖夢、結婚したら、うちに来い。ここにいたら大変だから。」

「是非そうさせていただきます。」

「待って、それは困るわ。」

「冗談だよ（ですよ）。」「」

「びっくりさせないでよ。本気で焦ったわ。」

（まだどうするかは決めてないけど。）

「ははは。」

「ふふふ。」

三人での昼食はとても面白い。午後は何をしようか。

第十七話

紅魔館の試練

1

俺はあの後、毎日白玉楼に通った。白玉楼では妖夢と剣の特訓をしたり、昼食や夕食を作ったりした。姉さんは謝ってきたので許した。そして、今日は紅魔館を再び訪れる日だ。俺は午前で白玉楼を去り、紅魔館へ向かっている。もちろん、デューもいっしょだ。

「範人、遠くないか。かなり時間がかかっている。」

「すまないな。でも、おまえだつてずっと研究所に住むわけにはいかないだろう?」

「それもそうなんだが、遅くないか?もう夕方だ。」

「今向かっている館の主は吸血鬼なんだ。だから遅いほうが良いかなと思つてね。」

「なるほどな。吸血鬼は日の光に弱いからな。」

「そういうことだ。見えてきたぞ。」

湖のほとりに建つ紅い館。やはり目に優しくない色をしている。俺とデューはその館の門の前に降り立つ。門の前には咲夜と門番がいた。今日、門番は起きている。

「すみません。遅かったですか?」

「いえ、お嬢様は夜のほうが好きですので今の時間でちょうど良いかと思えます。そちらの方は?」

「デューレス・タイラントと申します。」

「私はこの紅魔館のメイド長 十六夜 咲夜です。」

「では、案内をお願いできますか?」

「すみません。お嬢様からのご命令でこの私と門番の美鈴を倒せたらご案内するようにと言われておりますので、私たちを倒してからでお願いします。」

ああ、面倒くさい。まさか戦うことになるなんて思っていなかった。この主はかなりの遊び好きらしい。

「では、私は館の中でお待ちしています。」

そう言い残すと咲夜は消えた。門番だけが残っている。

「では、早速戦いましょうか?」

「待ってください。先に自己紹介と謝罪をさせてください。」
「どうぞ。」

「私の名は紅 美鈴です。先日は居眠りをしてごめんなさい。弾幕勝負は苦手なので格闘で戦っていただけと嬉しいです。」

なるほど、弾幕勝負は苦手なのか。弾幕で戦ったらつまらなそう
だ。ここはデューに任せよう。

「わかりました。では、格闘戦にしましょう。」

「ありがとうございます。」

「デュー、頼んだよ。」

「おう、任せろ。」

「ええ!?？」

美鈴はかなり驚いている。まあ、そうだろう。デューはタイラント
で身長が2m60cmもあるのだから。しかし、美鈴に恐れる様子は
なかった。

「戦いましょうか。」

「相手にとって不足はありません。」

「戦闘開始の合図は私がとります。二人とも少し距離をとってください。
い。」

デューと美鈴は互いに三歩ずつ下がる。

「では、始めましょう。両者構えて、……始め！」

俺の合図でデューと美鈴は同時に走り出した。

範人の合図と同時に俺は走り出す。そして、美鈴と拳を打ち合う。
美鈴は俺よりも背が低いがすごい力である。気を抜けば拳が押し
返されそうだ。

今度は逆の拳を打つ。美鈴もそれに合わせて拳を打ってきた。

俺は拳と拳がぶつかった衝撃を利用して後ろに跳ぶ。美鈴も後ろ
に跳んだ。

今度も走るがそのスピードを少し落とす。美鈴は先程と同じス
ピードで走ってくる。

美鈴が拳を打ってきた。今度はスピードを落としていた分、しっかりと踏み込んで拳を打つ。

俺の拳は美鈴の拳にぶつかるとは止まることはなく、美鈴を吹っ飛ばす。美鈴はうまく受け身をとり、地面にぶつかることによって発生するダメージを少なくした。

(すごい。)

相手は私の拳を受け止めるだけでなくさらに押し返した。なんと
いう怪力だろうか。

私は拳だけでなく、脚も使うことにした。

格闘でこんなにワクワクするのは久しぶりだ。

私は相手の懐に突っ込む。

拳を体制を下げることによってかわし、鳩尾に膝蹴りを打ちこむ。

相手は呻き声を上げ、体が少し宙に浮いた。

私はすかさず跳び上がり、顔面に回し蹴りを叩き込んだ。しかし、これは腕でガードされる。

危ないところだった。少しガードが遅れていたなら、首を折られていただろう。しかし、ガードはできても吹っ飛ばされたため地面に叩きつけられた。痛い。

美鈴が走ってきて蹴りを放ってきたが転がって回避する。

転がりながら軸足を蹴って態勢を崩し、その間に起き上がる。

美鈴も態勢を立て直し、拳を放ってきた。俺はバック転の要領で地面に手をつけて拳をかわし、そのままドロップキックを放つ。

キックは美鈴の腹に直撃し、美鈴は吹っ飛んで壁にめり込んだ。

私は壁から抜け出す。腹部が痛いが大したことはない。

私はまた、相手の懐に飛び込む。そのまま拳を打とうとしたが、す

ぐに後ろに跳ぶ。

目の前を腕が通り過ぎ地面に拳が叩きつけられ、砂煙が舞い上がった。私は相手の後ろに回り込む。

私は回し蹴りを放つが、裏拳で止められた。衝撃波が発生し、砂煙が吹き飛ぶ。砂煙が晴れると地面が陥没していた。

今度は連続で拳を打ちまくる。相手も拳を打ち全て相殺した。

私が距離をとるために後ろに跳ぶ。相手は体をひねった。次の瞬間、相手の姿が目の前に現れた。

この攻撃を使うのは久しぶりだ。俺は体をひねり、力を溜める。

足に力を込め、踏み込んだ。地面にヒビが入る。

俺の身体は一瞬で美鈴の近くに移動した。そのまま勢いは落とさず、腹に掌打を叩き込む。

美鈴の体は吹っ飛び、地面で数回跳ねてから停止した。美鈴は立ち上がろうとするが立ち上がることができない。

「降参です。もう動けません。」

美鈴が降参する。俺は勝利した。

デューの掌打が決まり、美鈴に勝った。

「では、中へ進んでもよろしいですか？」

「どうぞ。あ、動けないので運んでもらってもよろしいでしょうか？」

「わかりました。デュー頼むぞ。」

「おう。では、失礼します。」

デューはお姫様抱っこで美鈴を運ぶ。

「ありがとうございます。」

「別にこれくらい構わないですよ。」

俺とデューと美鈴は門を跳び越え、入り口の大きな扉を開けて、紅魔館に入った。

第十八話

紅魔館の試練

2

「来ましたね。」

咲夜は紅魔館に入つてすぐの場所にいた。

「美鈴さんはデューが倒しました。今度は咲夜さんが相手ですね。」

「そうです。それと言葉遣いを普段通りにしてもいいですよ。私は仕事でこのような言葉遣いをしているだけですから。」

「じゃあ、お言葉に甘えさせていただけよう。」

俺は言葉遣いを普段通りに戻す。向こうでの仕事でも敬語を使つてたから、自分は違和感なかったんだけどね。

「戦いを始める前にちよつといいかな?」

「何でしょう?」

「美鈴がデューとの戦いで動けなくなっちゃったみたいだから、どこかで休ませてあげてよ。」

「そうですね。では少々お待ちください。」

咲夜が消えた、と思つたらすぐに現れた。

「デューレスさんでしたね。美鈴をあちらの部屋に。」

デューは美鈴を咲夜に教えられた部屋に運んでいった。少しするとデューが戻つてきた。

「美鈴も安全になったようですし、戦いましよつか。」

「そうだな。」

咲夜はナイフを取り出す。俺は覇剣クリムゾンを構える。

「いきますよ。」

「Come on!」

咲夜がナイフを投げる。するとナイフの数が増えた。俺はナイフを剣で叩き落としていく。攻撃を受けるばかりでは戦う意味がないのでこちらも弾幕を放つ。ほとんどの弾幕はナイフを撃ち落とさないから飛んでいく。それらが咲夜に掠る。

「なかなかお強いですね。」

「そりやどうも。」

「しかし、紅魔館のメイド長として負けられません。」

幻幽『ジャック・ザ・ルドビレ』

咲夜がスペルカードを発動した。咲夜がナイフを投げる。すると突然、咲夜の手元に他にもナイフが出現し、こちらに飛んできた。俺はそれらを打ち落とす。量が増えてもこのくらいならまだどうにかなる。だが、突然現れるナイフにはうまく対処できずに数本が掠つた。しばらくして、ナイフの数が元に戻った。スペルカードの効果時間が切れたようだ。

「そつちもなかなか強いじゃないか。」

「ありがとうございます。」

「まあ、負ける気はしないけどね。」

粒符『パーティカルストーム』

咲夜に向けて粒子の竜巻を撃つ。それらは咲夜の周りを回って弾幕を放つ。しばらくして、それらが消えた。俺は驚く。なんと咲夜はすべてをかわしきつたのだ。咲夜が消える。

「私には当たりませんよ。」

「!?」

なんと咲夜は俺のすぐ後ろにいた。咲夜は俺にナイフを突き出してくる。俺はそれを剣で弾き、斬りかかる。しかし咲夜がまた消え、離れた場所に現れた。

「幻世『ザ・ワールド』」

咲夜が新しいスペルカードを発動した。先程のスペルカードと同じようにナイフが出現するが、今度は俺の周りに出現した。俺は剣を高速で振り回すことによりなんとか対処する。

（どんな能力だよ?）

咲夜の攻撃について考え、観察する。すると、妙なことに気づいた。打ち落としたりはずのナイフが消えているのだ。さらに、咲夜のナイフの数が圧倒的に多いことや咲夜やナイフが突然現れることもつなげて考えてみる。なるほど、咲夜の能力がわかった。

（『時間を操る程度の能力』か、もう少し本気に近づけたほうがよさそうだな。）

私はナイフを回収し、範人さんの周りにナイフを設置する。時間を止めているため彼は動かない。設置が完了したため、また時を動かす。ナイフは彼に向かつて動き始める。しかし、時を動かした途端に彼の姿が消えた。

「一体何が!? 範人さんはどこへ？」

「俺はこつちだ。」

声が出たほうを向くとそこには肩から鎌を生やし全身に黒い甲殻を纏った不気味な生物がいた。

俺はナイフが出現した瞬間に全身を一瞬で変異させた。服が破け、黒い甲殻が体表に出現する。変異したことにより身体能力が上がり、瞬間移動のような速度でナイフの包囲から脱出した。

「一体何が!? 範人さんはどこへ？」

「俺はこつちだ。」

「……貴方は……範人さんですか？」

「ああ、そうだ。俺は生物兵器なんだ。これは変異したときの第一の姿だ。」

「そうでしたか。すぐに再開しましょう。」

咲夜が時間を止めて移動しようとする。しかし、遅い。時間を止められる前に近づき、拳を打つ。移動しようとしていた咲夜はそれになんとかかわす。

「接近戦ですか。では、

メイド秘技『殺人ドール』」

咲夜は自身の周りに浮かせた大量のナイフで斬りかかってくる。俺はそれに防ぐために全身の甲殻の隙間から炎を噴き出した。咲夜に距離をとらせてからスペルカードを発動する。

「炎舞『紅蓮爪拳舞』」

俺は腕に炎を纏い咲夜に突撃した。俺は拳と鎌、咲夜はナイフで攻

撃を行う。時折、咲夜が時間を止めて移動し、俺が追いかける。周りから見れば、間違いなく残像が見えるだろう。しばらくすると、咲夜のスピードが落ちてきた。俺が拳を打つとナイフが全て弾け飛んだ。すかさず、咲夜の首元に鎌を突きつける。互いの動きが止まった。

咲夜がナイフを落とし両手を上げる。

「まいりました。降参です。」

咲夜に勝利した。俺は変異を解除する。服は再生繊維のため変異を解除すれば一瞬で元に戻る。

「じゃあ、案内をお願いするよ。」

「かしこまりました。どうぞこちらへ。」

移動中、咲夜に話しかけられる。

「範人さん、貴方の能力は何ですか？」

「俺の能力は『粒子を操る程度の能力』だ。」

「では、変異したときのあの炎は何ですか？」

「あれは生物兵器としての能力だよ。甲殻の内側に可燃性のガスがあつてね。それが常に燃えているんだ。それを噴き出しただけだよ。」

「なるほど、そうでしたか。つまり種族としての能力であつて、個人での能力ではないということですか。」

「そう考えてもらつていいよ。でも、これは生物兵器の中でも俺だけなんだ。生物兵器にはいろいろいるんだけど、量産されてない場合は同じ能力を持つものがないことが多いしね。」

「興味深いですね。他にもそのような生物兵器を見たことはありませんか？」

「俺の双子の兄のレイジだね。いちおうデューも生物兵器で成り方は特殊だったんだけど、同じタイプのやつが存在するから違うかな。」

「そういうえば、デューレスさんの能力は何ですか？」

「俺の能力は『つなぐ程度の能力』です。ものを物理的につないだり、心をつなぐことができます。」

「良い能力ですね。あ、到着しました。こちらがお嬢様のお部屋になります。」

館の主の部屋。そこには大きな扉があった。

第十九話

館の幼き主

扉の向こうから話し声が聞こえる。客人は扉のすぐ向こうにいるようだ。

「お嬢様にくれぐれも失礼のないようにお願いします。」

「ああ、わかった。案内ありがとう。」

「ありがとうございます。」

扉をノックされた。どうやら客人が来たようである。私はまだ、客人の運命を覗いてはいない。そのほうが初対面の場合どんな者が客人なのかを楽しみになるからだ。

「お嬢様、お客様をお連れしました。」

「入りなさい。」

「失礼致します。」

「失礼します。」

扉を開けて入ってきたのは、我が紅魔館のメイド長 十六夜 咲夜と金髪の少年、非常に背の高い大柄な男だった。

「ご苦労様、咲夜。下がりにさい。」

「かしこまりました。」

咲夜が消える。私は客人たちに話しかける。

「私がこの紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ。」

「こんばんは。私は旅行 範人です。」

「こんばんは。私はデューレス・タイラントです。」

「そこまで礼儀正しくしなくても構わないわよ。普段通りの話し方でいいわ。」

私は範人と名乗った少年のほうを向く。彼は似ている、475年前に私たちを助け、私が愛した人間に。

彼は顔も気配も髪の色も非常によく似ている。とても他人の空似とは思えない。彼の名前は偽名なのではないだろうか？

「貴方、範人と言ったわね。」

「ああ。」

「貴方の本当の名前は？今の名前は本物？」

俺は驚いた。今会ったばかりの少女に自分の名前が偽の名前であることがばれたのだから。俺もデューも警戒して身構える。

「何故そう思った？」

「まずは質問に答えなさい。」

俺は悩む。この名前は父さんが幻想郷で暮らしていくためにくれた名前である。手放したくはない。しかし、本当の名前をばらしても特に困ることはないことに気づいたため本当のことを話すことにした。

「ハント・ゴートレック。それが本当の名前だ。」

「そう、納得したわ。で、なんでそう思ったのかだけれど……、似ていたのよ。過去に会った人間にね。」

「そうか。なら、その人間の名前は何だ？」

「ジェイド・ゴートレックよ。」

「!?？」

俺はその名前に憶えがあった。自分の一族の家系に記してあった名前。ある代の当主の双子の弟。たしか、480年程前の人物のはずだ。

「そいつに会ったのは、480年くらい前じゃなかったか？」

「ええ、そうよ。なんで貴方が知っているのかしら？」

「俺の一族の中にその名前の人物がいたんだ。480年くらい前にな。」

「そうなの!?？」

途端にレミリアの表情が明るくなった。

驚いた、まさかゴートレック家の人間に会えるなんて。

(ジェイド、私たちの運命は途切れていなかったのね。)

恩人の一族の人間に会えた。こんなに嬉しいことはない。

「別に本当の名前がどうかは言わないから安心して。」

「そうか。それならいいんだが……。」

「もう気軽に話していいわよ。ところで用件は何？」

「デューの職についてだ。この門番をさせてやってくれないか？」

「咲夜たちを倒したんでしょ。いいわよ。そのままこの館に住んでもらっても構わないわ。」

「ありがとう。」

「ありがとうございます。」

「いいのよ。恩人の一族の人からの頼みだもの。それに今の門番は居眠りすることがあるから、二人いれば片方が眠っていても大丈夫になるからね。」

用件は終わったようだが、気になることがある。範人の身体からは強い血の匂いがするのだ。普通の人間なら怪我をして血を流せばこのくらいの匂いになるが、見たところ範人は怪我をしていない。まるで血を浴びてそれを洗い流したときのような匂い。

「範人、貴方からはすごい血の匂いがするのだけれど、何かしたの？」
「ああ。向こうの世界では戦闘を主に行うエージェントをしていたからな。血ならそのときにたくさん浴びたから、その匂いだと思う。」

「なかなかすごいことしていたのね……。」

自分自身も血まみれで戦ったことがあるため、血だらけで戦う範人の姿が容易に想像できた。

しかし、何故戦いで血だらけになるのだろうか。たしか銃という遠距離武器があったはずだが、そのようなものがありながらも血だらけになるなんて接近戦でもしていたのだろうか。

私が不思議そうな顔をしているとそれに気づいた範人が話しかけてきた。

「なんでそんなに血だらけになるような戦い方をしたかつて？」

「う、うん。」

「俺は完全に人間ってわけじゃないんだ。生物兵器っていう種族なんだよ。」

「生物兵器って何なの？」

「生物兵器っていうのは、生物を改造して作り出した兵器のことだよ。」

改造されると身体能力が飛躍的に上がるから俺はその身体能力を利用して接近戦で戦っていたんだ。」

「なるほどね。」

二人の能力は何だろうか。気になったので訊いてみる。

「範人たちの能力って何？」

「俺は『粒子を操る程度の能力』だ。できることは言葉の通りだ。」

「俺は『つなぐ程度の能力』です。ものを物理的につないだり、心をつなぐことができます。」

デューレスの能力を聞いて私は思いついた。もしかしたら、妹を救うことができるかもしれない。話からして範人は強いらしい。

「貴方たちに頼みたいことがあるの。」

「何だ？」

「妹を……フランを助けて欲しいの。」

「何が起きたんだ？」

「フランは狂気にとらわれて苦しんでいるの。狂気にとらわれて能力ですべてを破壊してしまうの。」

「そりや大変だな。いいよ、俺がどうにかしてみよう。」

「戦いは範人に頼むわ。」

「わかった。デューにはフランと俺の心をつないでもらおう。弱ってきたところでつなげば、狂気を取り除くことができるかもしれない。」

「大丈夫かしら？」

「任せてください。能力の正確さには自信があります。」

「じゃあ、頼んだわよ。フランのところまでは私が案内するわね。」

私は範人たちにフランを助けることを依頼し、範人たちを案内し始めた。

少年、少女移動中

俺とデューはレミアアに案内され、地下のある部屋に案内された。

「戦うときは館の外のほうがいいよな？」

「そうね。ちょうど夜だし、館を壊されたら困るわ。」

「じゃあ、行ってくる。」

「行ってらっしゃい。」

部屋の中には壊れた人形が散乱していた。

「お兄さんは誰？」

目の前のベッドに座っているかわいらしい少女が話しかけてきた。彼女がレミアアの妹だろう。

「俺は旅行 範人だ。君がフランかい？」

「そうだよ。ねえ、遊ぼうよ。」

「いいけど、外で遊ぼうか。今は夜だから太陽は出てないよ。」

「わかったー。外で遊ぶ。」

少年、少女移動中

俺とフランは館の外に出る。レミアアとデューも外に出てきた。

「じゃあ、遊ぼうか。」

「うん。……ねえ、お兄さん。」

「何だ？」

「カントンニコワレナイデネ。」

言葉と同時にフランが破壊力に優れた殺傷力の高い弾幕を放ってきた。俺は全身を変異させ、炎を腕に纏って弾幕を殴り、弾き飛ばす。これは弾幕勝負ではない、命がかかった遊びだ。被弾しても死ななければいい。

「こいつは……やばいな。」

第二十話

命のかかった遊び

フランは自身の弾幕を殴り飛ばした俺を見て笑っている。

「アハハ、オニイサンスゴイネ。」

「そりやどうも。」

「コレナラ、タノシクアソベルネ。」

そう言いながらフランはさらに弾幕を濃くしてくる。俺は全身の甲殻の隙間から炎を噴き出し、弾幕を全て焼き尽くす。

「スゴイスゴイ。禁忌『克蘭ベリートラップ』」

赤と青の弾幕が俺を取り囲む。それらは一旦止まった後に俺に向かって飛んできた。俺は弾幕を放ち相殺する。隙を見てフランにも弾幕を放つが避けられてしまう。だんだん押されてきて、数発掠ってしまった。だが、ダメージはまだほとんどくらくらってない。

「炎陣『フレイムライン』」

俺は身体を燃えている状態で粒子に分解し、フランの周りを取り囲んだ。その状態からマグネシウムの粒子をフランの周りに漂わせ、着火した。粉塵爆発が発生する。さらに内側に弾幕を放ち続ける。フランの弾幕が弱くなった。しばらくしてスペルカードの効果時間が切れ、俺は身体を組み立てた。

フランは弾幕や爆発をくらっているがあまりダメージを受けていないように見える。しかし、弾幕が弱くなったことを考えると途中でスペルブレイクしたらしい。ダメージがないわけではないようだ。

「スゴイスペルダネ。」

「これで立っていられるフランもすごいよ。」

「モットアソボウ。」

禁忌『レーヴァテイン』

フランの手に一本の巨大な炎の剣が握られた。それを見て俺も抜刀する。

「炎舞『紅蓮爪拳舞』」

剣と鎌に火炎を纏わせ破壊力とリーチを増加させる。

フランが飛び出すと同時にこちらにも飛び出す。レーヴァテインと

クリムゾンが衝突し、爆炎が発生する。そのままつばぜり合いに入る。俺は鎌で切りかかる。フランは剣を握る手にさらに力を入れて俺を弾き飛ばした。鎌はフランには届かず空を斬る。フランが剣を横に薙ぎ払ってきた。俺は剣で受け止めると鎌で連撃を始める。フランは連撃を受け止めようとするが、剣の数が違う。フランは受けきれずに弾き飛ばされた。同時にレーヴァテインが消えた。二回目のスペルブレイクだ。

「イタイナア。」

禁忌『フォーオブアカインド』

フランが分身して四人を増えた。

「分身か。面白いスペルだな。」

「二「ソウデシヨ。」」

「でも、分身くらい俺にもできるぜ。」

分裂『超再生の果て』

スペル宣言と同時に俺は自身の身体をクロスに切り裂いた。切れた身体と服が全て再生し、俺が四人になった。

「二「ははは。どうだ、これで四対四だ。」」

「二「スゴイスゴイ。モットタクサンコワセルネ。」」

四人のフランが弾幕を放ってくる。四人の俺は弾幕をかわしながらフランに突進し、四人を引き離れた。それぞれで一対一の戦いになった。

しばらくして一人の俺とフランに同時に攻撃が当たり、同時に消滅した。フランの表情が少し暗くなる。今度もまた一人ずつ消えた。フランは悲しそうになった。さらに消えた。フランは泣いていた。俺たちが一人ずつになったため互いのスペルがブレイクされた。

「なんでそんな顔しているんだ？」

「だって、壊れちゃったんだもん。」

フランが正気に戻った。しかし、一瞬でまた狂気に飲み込まれて怒りだす。

「コワレロコワレロ。ミンナコワレチャエ。」

もしかしたら、デューの力を使わなくてもフランを救うことができ

るかもしれない。俺はデューに向かって叫ぶ。

「デュー、お前の能力は使わなくてもいい。」

デューは手を振って、わかった、と返してきた。それを確認して、俺は変異を解除してフランに近づく。

「ちよつと！ 範人は何をしているの。」

範人は変異を解除して無防備な状態でフランに近づいていく。

「大丈夫です。範人は強いですから。それに、きっと考えがあるんだと思います。」

「でも、無茶よ。身体をバラバラに吹き飛ばされて死んでしまうわ。」

「さっきの再生を見たでしょう。範人は自然死以外では死にませんよ。」

「そう……なの。」

私はデューレスに説得され、範人にかけてみることにした。

「コワレロ、コワレロ。」

フランが弾幕を放ち俺を攻撃してくる。だが、避けずに近づいていく。反撃もしない。もちろん、弾幕は俺に当たり身体をえぐったり、風穴を開けたりした。しかし、傷はできた途端にふさがっていく。

「クルナ、クルナ。」

弾幕が俺を傷つける度にフランは泣いていた。

「来るなー！」

正気に戻ったフランが手を握った。

範人が近づいてくる。傷つきながらも近づいてくる。私はそんな範人が恐ろしく、狂気から一時的に解放された瞬間に能力を使ってしまう。

「来るなー！」

私が手を握ると範人の身体は内側から弾け飛んだ。範人の血や肉が降り注ぐ。私は自分のしたことが怖くなり、泣きだしてしまった。「う、うあああ〜!」

範人の身体が弾け飛んだ。しかし、デューレスは平然と私の隣に立っている。よくそんなに平然としていられるものだ。

「本当に大丈夫なの？ 範人が吹き飛んだわ。」

「大丈夫です。あんなことで死んだら私が過去の時点で殺していますよ。」

何故生きていると言えるのだろうか？ 範人は間違いなく身体が吹き飛んで死んだはずなのに……。

範人が死んだ。私が殺した。私の能力で殺してしまった。私は憎い、この狂気が、この能力が、この身体が、この自分が。範人は間違いなく死んだ。私の目の前で弾け飛んだのだから生きていたら、わからないはずがない。ただ、今は涙でその目の前も見えない。

「そんなんじや、俺は死なねえよ。」

範人の声が聞こえた。私は驚き、前を向く。するとそこには吹き飛んだはずの範人の姿があった。

ありえない。範人の身体が再生している。全身がバラバラに弾け飛んだはずなのに再生した。私たち吸血鬼でもあそこまでバラバラになれば、治ることはない。

「言った通りでしょう。範人は生きていますよ。」

「ありえないわ。あんな再生力。」

「それが範人という生物です。」

デューレスは笑いながらこたえた。デューレスの言う通り、範人は生きていた。

範人が近づいてくる。私はこの場で殺されてしまう。身体を吹き飛ばしたのだからそうされても仕方がない。私は覚悟を決め、じつとする。

(……………?)

範人は攻撃してこなかった。私は不思議に思い範人の顔を見る。こちらの様子を見て、範人は微笑んでいた。

「どうやら、今は狂気にとらわれてないみたいだね。」

「え、私を殺さないの?」

「別に俺は怒ってないよ。」

「なんで、私は殺そうとしたのに……………」

「俺は死と隣り合わせの仕事をしていたからね。別にこのくらい大したことないさ。」

どうやら範人は本当に怒っていないらしい。私はそれがわかると、範人が生きていたことへの安心と範人が怒っていないことへの安心

から、範人に抱きついて泣き出してしまった。

「うわあぁ〜！」

「よしよし。泣きたいときは泣けばいいし、笑いたいときは笑えばいいよ。自分に素直でいればいい。」

私は優しい言葉にさらに涙が止まらなくなった。そんな私を範人は優しく抱きしめてくれた。

「二人はつらかったよね。困ったら助けを求めればいい。きっと助けてくれる人がいるし、ここには君を突き放そうとする人もいないよ。だから、安心していいよ。俺はフランが泣き止むまでいつしよにいるから。」

感情が次から次へとあふれ出して涙となって流れていく。涙といつしよに私の中の狂気が流れ出していくように感じた。

その後、私は気がすむまで泣き続けた。

フランが泣いている。当たり前だろう。いくら力が強くても実際は心優しい少女なのだから。俺も自身の力のせいでまわりに恐れられたことがある。そのときは俺もとてもつらかった。だから、フランの心はよくわかる。

俺はフランが泣き止むまでその場にとどまった。

第二十一話

紅魔館での夕食

フランが泣き止んだため、俺は今、レミリアの部屋で話をしている。ありがたい。フランの狂気が無くなったわ。」

「どういたしまして。役に立ててよかったよ。」

誰かの役に立つことができた、それだけで俺は充分だった。

「デューのことは頼んだよ。」

「ええ、任せて。そういえば、今日の夕食は食べたの？食べてないならこちらで出すわよ。」

「なら、頼もうかな。みんなで話もしてみたいし。」

「決定ね。じゃあ、話でもして待っていますよ。咲夜。」

咲夜がすぐに現れた。すごい聞こえていたのか。

「はい、なんででしょうか？」

「夕食に範人とデューレスも参加するわ。二人分追加ね。」

「かしこまりました。」

すぐに現れてすぐに去っていく。かっこいい。

「フランを解放してあげなよ。狂気が無くなったならもう大丈夫だろう？」

「そうするわよ。閉じ込めていた分自由に過ごしてもらいたいから。」

やはり、レミリアは妹思いの優しい姉だ。

「ねえ、範人。生物兵器って全てあんなに再生力があるの？」

「あの再生力は俺と双子の兄だけだよ。」

「すごいわね。貴方って生物兵器としてはどのくらい強いのか？」

「政府には最高傑作だって言われたけど、よくわからないな。」

「最強ってことじゃない。」

「最強って言われても、あんまり嬉しくないんだけどね。」

「そうだ。お願いがあるんだけど。」

「何？」

「フランは私が起こした紅霧異変のときの宴会に参加してないのよ。明後日、フランのために範人の家で宴会開いてくれないかしら？」

「いいよ。他にも人呼んだほうがいい？」

「もちろんよ。たくさん呼んでくれたほうが良いわ。」

「家の場所はわかる？」

「一週間前にこの世界に來た研究所でしょ。」

「わかるなら大丈夫かな。」

明後日に宴会か。たくさん食材を買っておかないといけないな。

そんなことを考えていると咲夜が現れた。

「お嬢様、お食事の用意ができました。」

「そう。範人行きましよう。」

「そうだね。」

俺はレミリアについて行く。

食堂には紅魔館のメンバーが全員揃っていた。門番もいたが、デューが門を湖面につなげ、門以外は咲夜が空間をいじったため侵入することはできない。紅魔館での食事が始まった。

食事中はみんなあまり話をしようとしないため静かだ。その場の雰囲気壊すわけにはいかないため、俺も話すことはやめる。食事の後なら、普通に話ができそうだから別にいいけど。

食事が終わりレミリアが話し始める。

「知らない者はいないと思うけど、今日は客人が二人來ているわ。会うのは初めてだと思うから、パチュリーと小悪魔は自己紹介をしてちょうだい。」

「俺は旅行 範人だ。一週間前に幻想郷に來た。種族は生物兵器だ。よろしく。」

「私はデューレス・タイラントです。範人といっしょに幻想郷に來ました。種族も同じです。よろしくお願ひします。」

「私はパチュリー・ノーレッジよ。種族は魔法使いよ。よろしく。」

「パチュリー様の使い魔をさせていただいている小悪魔です。名前はないのでこあと呼んでください。よろしくお願ひします。」

「範人は名字が異なるけどゴートレック家の一族よ。デューレスとはこれから門番としてこの紅魔館でいっしょに過ごすことになるわ。この機会に理解を深めておくといいわ。」

レミリアすごい、場を完璧に取り仕切っている。パチュリーは紫髪の少女、小悪魔は見たままの小悪魔だ。小悪魔が興味深々の顔で話しかけてきた。

「範人さん、生物兵器って何ですか？」

「それは私も気になるわね。」

「生物兵器っていうのは、（以下略）」

「なかなかすごいわね。貴方はその実験に利用されて生物兵器になったの？」

「いや、俺の場合は怪我の治療法で生物兵器以外に治せる方法がなかったからだね。」

「そうなの……。貴方はそれでよかったの？」

「つい最近まで悩んでいたんだけどね。父さんからもらった力だし、捨てる気はないよ。」

「お兄様はすごいよ。私に身体を吹き飛ばされても生きていたんだもん。」

フランも会話に参加してきた。

「なんか今お兄様って呼ばれた気がするんだが……。」

「フラン、今お兄様って言ったか？」

「うん、言ったけど。」

「……」

レミリアに睨まれる。怖い、めっちゃ怖い。

「範人すごいわね。どんな再生力してるのよ。」

「たぶん、自然死以外では死なないレベル。」

「……範人、フランこっちに来なさい。」

やばい、呼ばれた。絶対殺される。死ななくても死ぬレベルのお仕置きが待っている。

「なーに？お姉様。」

いくな、フラン。俺も行かなきゃいけない。

「範人。」

パチュリーに声をかけられる。何か励ましてくれるのだろうか？
「何？」

「逝ってらっしゃい。」

パチユリー、少しは優しい言葉をかけてくれよ。ていうか、なんか字がおかしい。

「範人さん、幸運を祈ります。」

小悪魔は他人事だと思つてやがる。

(こいつら……。)

仕方がないのでレミリアの方へ行く。

「範人、フランに何かしたのかしら?」

目が赤くなっているし、絶対怒っている。背は低いがすごい迫力だ。すごく怖い。怯えながらも、俺はなるべく冷静にこたえる。

「俺は狂気から救つただけだけど。」

「フランは何かされた?」

「何もされてないよ。お兄様つて呼びたいからそう呼んだだけだよ。」
「なら、いいわ。」

助かった。マジで殺されるかと思つた、死なないけど。俺はみんなの所へ戻る。

「範人、大丈夫だったか?」

デューレスが声をかけてくれる。ありがとう。俺は心の底から友の存在に感謝した。

「心配してくれてありがとう。説明したら助かった。」

「なら、よかった。」

レミリアも戻ってきた。もう怒っていないようだ。

「範人、夜も遅いから今日は泊まっていきなさい。デューレスはこれから門番をしてもらうから強制ね。」

「お言葉に甘えさせてもらうよ。」

「咲夜、部屋まで案内しなさい。」

「かしこまりました。こちらへどうぞ。」

「お姉様。お兄様といっしょに寝ていい?」

おいコラ、ちょっと待て。なんてこと言い出すんだ。

「駄目よ、フラン。」

「そうだよ、フラン。君といっしょに寝るわけにはいかないよ。」

「えー、ジエイドはいつしよに寝てくれたのにー。」

そいつと俺を重ねられても困る。

「俺とジエイドは別人だから。」

「ねえ、お願い。」

「うっ……。」

フランが目ウルウルさせて上目遣いでこちらを見てくる。俺もレミリアもその顔を見て悩む。

「……わかったわ。」

「ええ!?？」

「お姉様ありがとう。お兄様は?」

どうしよう。妖夢のことがあるためいつしよに寝ることは避けたいが、断れば泣かせてしまいそうだ。

「……範人、つらそうだけど大丈夫?」

暗い表情で悩む俺にレミリアが声をかけてくれた。

「フラン、ちよつと離れててくれ。」

フランに離れてもらい、俺はレミリアに話す。

「実は俺は妖夢のことが好きで、妖夢も俺のことが好きなんだよ。だから、俺は妖夢のためにも今回は断りたいんだ。妖夢の許可がとれていないからな。」

「そうだったの……。ごめんなさいね。妖夢って冥界の半人でしょ?」

「ああ。」

「互いに好きなら仕方がないわね。フラン、範人は断るみたいよ。」

(レミリアありがとう。)

「ええー。」

「代わりに私がいつしよに寝てあげるから。」

「うー、……わかったよ。じゃあ、次はいつしよに寝てね。」

「寝れるかはわからないけど、訊いておくよ。」

「誰に?」

「範人の彼女よ。」

(ちよつと、レミリア!)

「なんだ、そうだったの。なら仕方ないね。」

「(チクショー、レミリアめ。) ああ、そうなんだよ。悪いね。」

「いいよ。お兄様に彼女がいて、勘違いされたら大変だもんね。」

「レミリア、ありがとう。」

レミリアにお礼を言い、俺は咲夜に案内されて部屋へ向かう。途中で咲夜に話しかけられる。

「驚きました。まさか、範人さんに既に彼女がいたとは、この世界に来てまだ一週間ですよね？」

「会って二日で告白されて驚いたよ。一目惚れって本当にあるんだね。俺も妖夢に一目惚れだったけど。」

「そうだったんですか。妖夢さんのどういったところが好みなんですか?」

「外見もあるけど心かな。話しやすいし、優しいし。互いの理解もしやすいかな。」

「なるほど。ここがお部屋となります。」

「案内ありがとう。」

「では、私はこれで。」

咲夜が消えた。やっぱりかっこいい。俺は部屋に入り、すぐにベッドで寝た。

第二十二話

研究所に侵入者

今、人里では噂が広がっている。数人の男たちが夜に化け物を目撃したらしい。

「夜に俺は見たんだよ。湖の上で全身から炎を噴き出す黒い化け物を。あんなの妖怪でも説明がつかねえ。」

「本当かい、骨本さん。向かいの栗里さんも同じこと言ってたぞ。」

「細川さんも同じこと聞いたんですか。化け物が出たって。」

「それ私も存山の奥さんから聞きました。夫が青い顔して帰ってきたって。」

私はそれを聞いてかなり気になった。これだけ大勢の人が話しているのだ。絶対に何かあったに違いない。

「これはネタの匂いがありますね。」

話を聞いて情報は充分だ。あとは正体を突き止めるだけ。そういえば最近、幻想郷に外来人が来たらしく同時に大きな建物も来たらしい。これは何か関係がありそうだ。

朝だ。目を開けると真っ赤な天井がある。起きて早々目に悪い。そういえば、紅魔館に泊めてもらったんだ。欠伸をして、部屋から出る。

「お兄様！」

「……！」

部屋を出た途端にフランに飛びつかれた。フランは吸血鬼だから力が半端なく強い。俺は吹っ飛ばされて、部屋へ後戻りする。

「イテテ……。いきなり飛びつくなよ、危ないだろ。」

「ごめんなさい。」

「普通の人間にはするなよ。絶対死ぬから。」

「はーい。」

「朝から大変ね。」

あきれた顔でレミリアが声をかけてきた。

「ははは、本当に大変だよ。痛いし……。」

「フランもやめてあげなさい。」

「わかったよ、お姉様。」

「なんだろう。返事はしているけど、これからやめてくれるとは思えない。」

「朝食食べるでしょ。食堂に行くわよ。」

「そうだな。」

「お兄様、おんぶしてー。」

「はいよ。」

これくらいなら妖夢も許すだろう。俺はフランを背負って食堂に向かった。レミリアが変な目で見えてくるが気にしないようにする。

食堂に入るなりみんなに質問される。

「範人さん、付き合っているんですか?」

「範人、昨日の話は本当?」

「本当だよ。付き合っているかどうかはわからないけど。」

「どこまでいったんですか?」

それは答えられない。

「……。」

「朝食にするから静かにしなさい。」

困っているところでレミリアがみんなを黙らせる。レミリア、ナイス。

朝食を食べ終わるとレミリアに話しかけられる。

「宴会のとき料理で困ったら咲夜を向かわせるから、いつでも言いなさい。」

「それは大丈夫だと思うよ。俺も料理はできるから。」

「そう。まあ、困るかもしれないから覚えておきなさい。」

「ありがとう。会場準備がある明日に手伝いは頼むよ。じゃあ、俺は帰るから。デューのことを頼んだぞ。」

これ以上ここにいと話さなければならなくなりそうさ。俺は封

力石を使用して素早く研究所に帰った。

研究所に帰ると何故か玄関が開いていた。誰か侵入者でもいるのだろうか？だが、姉さんが来た可能性もあるためあまり気にせず家の中に入った。

「さて、準備しないと。」

ガタツ

「ん？」

やはり、誰かがいる。俺はタングステンの粒子を家の中に漂わせる。いた。廊下に粒子が通れないところがあつたためそこに誰かがいることは間違いない。俺はそこへ向かった。

「何もないぜ。でかい建物だから何かあると思ったんだけどなー。」

私は特に成果も得られなかったため、帰ることにした。玄関に向かう。誰もいないから帰るのも楽だな。

「誰だ！」

「やばい、見つかった。」

誰もいなかったはずなのに誰かに見つかった。私は逃げようとして箒に乗ろうとするが体が動かない。全身に何かがまとわりついている。

「捕まえたぞ。誰だテメエは？」

声の主が現れた。粒子が集まって体が組み立てられていく。体が組み立てられるとそこには知り合いがいた。

「え!? 魔理沙、なんでここに？」

「なんで範人がここにいるんだよ。」

「なんでって、ここは俺の家だぞ。」

「……悪い範人、ひとまず離してくれ。」

「わかった。」

範人が了承すると私にまとわりついていたものが離れ体の自由がきくようになった。

「ここで話すのもなんだから、居間で話そうか。」

O H A N A S I ではないことを祈るぜ。私は黙って範人についていった。

魔理沙を居間に連れてきて尋問を開始する。

「さて、なんで魔理沙はここにいたのかな？正直に話してもらおう。」
「いや、飛んでたらでかい建物があったから、気になって入っちゃまったぜ。」

「目的は？」

「け、見学だぜ。」

魔理沙が目を逸らしながら言った。絶対に嘘だ。

「今の嘘だな。正直にこたえろ。」

「……本当は何かお宝があると思って入ったんだが、何もなかったぜ。」

「そうか。正直でよろしい。今回は見逃してやろう。」

「あ、ありがとう。」

「そうそう。何もないとか言ったが、研究所のほうには金になるものはいくらでもあるぞ。」

「なんだって!?!？」

「さて、この話は今はやめよう。」

「お、おう。」

魔理沙のところへ話しに行こうとしていたがちょうどいい。宴会について話そう。

「実は明日の夜に宴会を開くんだが……。」

「何！それは本当か？」

「ああ、紅魔館のフランが紅霧異変のときの宴会に参加できていないらしくてな。レミリアに頼まれた。」

「よし、みんなに伝えてくる。」

「ちよつと待ってくれ。料理とかは用意できるけど他に何を用意したらいいんだ？」

「酒を頼む。」

魔理沙の口からすごい言葉が飛び出した。

「はあ、酒!?!?お前ら何歳だよ?」

「十六だぜ。」

「おい、それ犯罪だろ。」

「ああ。お前のいた世界では酒を飲むには年齢制限が必要なのか。ここには、そんな法律なんてないから気にしないほうがいいぜ。」

「どうやら幻想郷では酒を飲むことに関して年齢制限がないらしい。なるほどな。それなら、俺のいた世界の酒を用意しておいてやるよ。」

「おう、頼んだぜ。てか、料理は誰が作るんだ?」

「俺だが。」

「範人、お前料理できたのか?」

「できるよ。」

「なら、あとで優も連れて来るから夕食作ってくれ。」

「わかった。じゃあ、みんなに宴会のこと伝えといてくれ。」

「おう、任せとけ。」

そう言うと魔理沙は箒に乗って飛んでいった。忙しいやつである。さて、やっと準備が始められそうだ。

「こんにちは。」

思った矢先にこれである。今度は誰だよ。準備が始められないじゃないか。

「誰だろ?」

ドアを開けるとそこには黒い翼を生やした黒髪の少女がいた。

「こんにちは。誰だ?あんた。」

「私は新聞記者をしている射命丸 文です。今日は取材に来ました。」

「そうか。まあ、立ち話もなんだから中で話をしようか。取材は受けるよ。」

「ありがとうございます。」

取材は面倒くさいが引き受けて、俺は居間へ案内する。

「で、取材内容はなんだ？」

俺はストリートに質問してみる。

「それよりもまずは名前と年齢を教えてください。」

「俺は旅行 範人、歳は十六だ。」

「なるほど、彼女はいますか？できれば名前も。」

そういうことも聞くのかよ。やっぱ、取材受けなきや良かった。

「いるよ。名前は出さないけど。」

「あやや、やはり名前までは教えてくれませんか。では、次の質問です。この建物は何ですか？」

「今、俺たちがいるのが家、廊下でつながっているのが別館、一番大きな建物が研究所だ。」

「研究所では何の研究をしていたのですか？」

「生物研究だ。見たければ明日の夜、宴会のときに案内する。」

「範人さんはもしかして偉い学者さんだったりしませんよね。」

「博士号なら持っているけど、自分が偉いのかどうかはわからないな。」

「そうですね。では、最後の質問です。炎を噴き出す黒い化け物って知っていますか？」

俺のことだ。でも、黒い化け物って……ひどいな。誰かが見ていたのだろうか？まあ、知られているなら正直に話したほうがいいだろう。

「知っているよ。ていうか、それ俺だから。」

「あやや、まさかの本人でしたか。いったい何があったのですか？」

「まずはこれを見てくれ。」

俺は全身を変異させた。全身が黒い甲殻に覆われる。

「今は室内だから炎を出すことはできないけどたぶんこれだろ？」

「おお、すごいです。範人さんは人間ではないのですね。」

『人間ではない』俺の心にその言葉は深く突き刺さる。だが、初対面ならばそう言ってしまうのは仕方がない。俺は少し落ち込んだが、すぐに気をなおす。

「俺は完全に人間ではないけど、人間ってことにしてくれ。これは生

物兵器の能力だ。俺は元々完全に人間だったが生物兵器に改造してもらったんだ。」

「そうでしたか。人外なんて言ってますみません。でもそれなら、彼女が誰かがもつと気になりますね。」

「教えないから。」

さすがにそれを教えるわけにはいかない。妖夢にも迷惑だ。

「そういえば、宴会を開くと言っていましたね。私がいみんなに伝えておきましようか？」

「それは助かるね。頼むよ。」

「では、私はこれで失礼します。宴会は明日の夜ですよね？」

「ああ、頼んだよ。」

「お任せください。」

そう言うのと射命丸は飛んでいった。これで準備ができる。

第二十三話 買い出し

やっと、宴会の準備ができる。宴会のこと白玉楼にも伝えに行くか。姉さんに手伝ってもらわなければ、外の世界には行けないし。ここにいないなら白玉楼にいるのだろう。財布の中にキヤツシユカードと千ドルくらいの詰め込む。俺は封力石を使って白玉楼に向かった。

「こんにちは〜。」

白玉楼には思った通り姉さんもいた。早速、用件を伝える。

「姉さん、明日の夜に宴会を開くんだが食材や酒とかを外の世界に買に行きたいんだ。酒は俺だけだと買えないからいつしよに来てもらってもいいか?」

「いいわよ。なら、これを渡しておくわ。」

そう言つて姉さんがくれたのは、また封力石だった。

「これは貴方のいた世界の研究所跡地と別荘、今の研究所をつなげてあるわ。依頼がきたときとかに使いなさい。」

「ありがとう。助かるよ。」

「ねえ、紫。外に行くなら私も連れてつてよ。外の世界の食べ物が気になるの。」

「いいわよ。これを付けておきなさい。外の世界でも実体化した状態で存在できるわ。」

「綺麗な腕輪ね、ありがとう。妖夢もついてきなさい。」

「わかりました。」

「じゃあ、準備はいいわね。」

姉さんがスキマを開き、俺たちはスキマに入った。

一週間ぶりに戻ってきたが、すごい久しぶりなような気がする。俺たちがついた場所は研究所の跡地、今では森になっている。元々、森の中に隠れるように建てられた研究所だったためか、違和感はなかった。木の種類が研究所の敷地の場所だけ異なっているが……。

「さて、森を抜ければ人里でそれもかなりの都会だ。はしやぎ過ぎて目立つなよ。あと、飛ぶことは厳禁な。」

この世界ではどうしてもエージェントスイッチが入ってしまい、口調が偉そうになってしまう。

「はい。」

「わかりました。」

「妖夢はその刀を隠しておけ、事件になりかねない。」

「でも、どうすれば……。隠し持つなんてできませんよ。」

「妖夢にはこれを渡すわ。」

姉さんが妖夢に渡したのは封力石。スキマを物置き代わりにするということだろう。

「こつちは範人の分よ。」

俺にも渡す。なるほど、これなら荷物が増えても持ち運べなくなる心配がない。

「ありがとうございます。」

「ありがとう。」

「じゃあ、行きましょう。まずはお酒ね。」

俺は酒を飲んだことがないがどこで良質なものが売っているかは知っている。まずは酒屋へ行く。

「着いた。」

「ここに来るのは二週間ぶりかしら。」

研究所跡地から、徒歩十分。顔馴染みのおじさんが店主をしている酒屋だ。居酒屋もやっていて姉さんはこの世界に来たときちよくちよく来ていたらしい。

「こんにちは。おじさんいる？」

「おお、久しぶりだなハントとゆかりん。」

「今日はたくさん買っわよ。」

「おう、ゆかりんのことだ。たくさんってことは大樽三つくらいは買うだろ。いつでも用意してあるぜ。」

(姉さん、いつもどのくらい買ってたんだよ！)

「今日はいつもの二樽と日本酒二樽、ウイスキーを一樽、あとは赤ワインを一樽お願いね。」

「あいよ。瓶六本おまけしとくよ。」

「ありがとうございます。お会計は？」

「いつもでもおまけして一万ドルだけど、今日はさらにおまけして九千ドルだ。」

「キャッシュカードで。」

「はいよ、毎度あり。代わりに支払うなんて、ハントはスゲエ金持ちだな。どうすりやそんなに金が入るんだ？」

「ははは、それは秘密だよ。」

姉さんはその場でスキマを開く。おじさんは姉さんの正体を知っているの特に驚く様子もない。俺もスキマを開き、そこに日本酒の樽とウイスキーの樽、赤ワインの樽を入れていく。

「次は食材だな。」

移動中に妖夢が話しかけてきた。

「範人さん、さっきの言語は何ですか？私には全く理解できなかったんですが。」

「そういえば、幽々子と妖夢はわけがわからず呆然としていたな。」

「あれは英語だよ。この国で使われている言語でこの世界の公用語だ。」

「そうなんですか。今度教えてください。」

「いいよ。幻想郷じゃ使わないだろうけど。」

「ありがとうございます。」

白玉楼での過ごし方が一つ増えた。

「さて、このスーパーマーケットでいいか。」

「範人ー、お菓子買ってー。」

幽々子が子供のように言ってくる。少しは大人らしくしてもらいたい。

スーパーでは野菜や肉などの食材、調味料、お菓子を買った。幻想

郷に海はないため、魚は海水魚を多く買った。たくさん買っても研究所に巨大な冷蔵庫があるから大丈夫だ。お菓子の占める割合がやけに多かったような気がするが気のせいだろう。かなりの金額になったため、俺がキャッシュカードで一括払いしたときの店員の顔はマジでおかしかった。今は買ったものをスキマに入れているところだ。

「範人ってお金持ちだったのねー。びっくりしたわー。」

幽々子はお菓子を食べながら言った。お菓子の割合が多かったのは気のせいではなかったようだ。

「妖夢は玉の輿ねー。」

「ゆ、幽々子様!?!」

「幽々子、妖夢をからかうのはやめてくれ。まあ、妖夢を誰かに渡す気はないがな。」

「範人ったらかつこいいわねー。良かったわね妖夢、範人は妖夢を嫁にする気よー。」

それを聞いた妖夢は顔が真っ赤になっている。かわいそうだし、少し幽々子を懲らしめないとな。

「幽々子、これから昼食にするつもりだったんだけど、幽々子の分はなくてもいいか?」

「ちよ、それは卑怯よ。」

「じゃあ、からかうのをやめてやれ。」

「はーい。」

「範人さん、ありがとうございます。」

これでしばらくは大丈夫だろう。食べ物に関係していれば幽々子も少しは懲りたはずだ。

スキマに荷物を入れた後、俺たちは適当に食べ放題の店を見つけてそこで食べることにした。普通の店だと幽々子の食費はバカにならないからな。

「食べ放題なんて気がきくじゃない。」

なんてことを幽々子は言っていた。しかし、幽々子、お前のためじゃない。俺の財布のためだ。お前の食欲の前では俺の資産が全て

消えかねない。

食べ放題の制限時間は一時間だったが、幽々子はその店の料理を三十分で全て完食した。もちろん、その店は臨時休業になった。幽々子は俺なんかに比べたら、とんでもない化け物だ。

昼食の後、俺たちは研究所跡地まで戻りそこからスキマで幻想郷に帰った。

白玉楼に戻ってきた。宴会のことを伝え、研究所に帰ろうとする。「じゃあ、明日の夜の宴会来てね。あ、今日の夕食は魔理沙が来るから来てもいいよ。まあ、妖夢だけならいつ来てもいいんだけど。」

幽々子が来たら、食費がやばい。

「そうですか。幽々子様、範人さんの家に行ってきたもいいですか？」
「いいわよー。なんなら、そのまま泊まってきたもいいわ。この前は範人が白玉楼に泊まったんだから。それに私は今日、紫の家に泊まる予定だし。」

「ありがとうございます。範人さん少し待っていてください。準備してきます。」

「おう。」

妖夢は白玉楼の中へ走っていく。少しすると帰ってきた。

「じゃあ、お願いします。」

俺は妖夢とっしよに家に帰った。

第二十四話

研究所案内

妖夢が客人として家に来た。食材を傷めないためにすぐに冷蔵庫に入れなければならない。

「買ってきた食材を冷蔵庫に入れてくる。」

「れいぞうこって何ですか？」

「冷やすことによつて食材が傷むことを防ぐ蔵みたいなものだよ。」

一般的な冷蔵庫の大きさは引き出しくらいだが、研究所の冷蔵庫は倉庫くらいの大きさがあるためそう教える。

「手伝いましょうか？」

「客人なんだから手伝ってもらうのは悪いよ。」

「いいんですよ。私も泊めてもらうだけでは悪いですから。」

「それなら手伝ってもらおうか。」

計画通り……。なんて思つてないよ。妖夢ありがとう。

妖夢が手伝いもあり、食材をスキマから取り出すことはすぐに終わった。することがないし、家の中を案内しよう。

「家の中を案内するよ。ついて来て。」

「範人さんの家って広いんですね。ここ以外にも建物がありましたよ。」

「まあ、研究所だからね。俺が寝起きしているこの家の他に客人を泊める別館、実験が行われていた研究所がある。」

「範人さんって学者さんですか？」

「学者じゃないけど、博士号は持っているよ。」

「範人さんってけっこうすごい人だったんですね。」

「すごいのかどうかはよくわからないな。ここが台所だよ。」

「わあ、すごいです。」

俺の家のキッチンって、ホテルや本格的なレストランみたいに設備が整っているんだよね。石窯や燻製器があったり、特定の食材にしか使わない特殊な調理器具があったりする。普通の器具でも普通に調

理できるんだけどね。

「範人さん、今日の夕食のときに使わせてもらっていいですか？」

「いいよ。いっしょに作ろうか。」

妖夢の目が輝いている。そこまで目を輝かされては断れない。まあ、俺も料理は好きだし妖夢といっしょにいられることが嬉しいから断る気もないけど。

「そろそろ、他も見ようか。」

廊下を歩いていると妖夢が話しかけてきた。

「廊下に飾つてある絵、美しいですね。誰が書いたのですか？」

「これらを書いたのは、全部デューだよ。あいつはああ見えて絵を描くことが趣味なんだよ。」

「人は見かけによらないんですね。」

正直、俺もなんでデューがあんなに絵が上手いのがわからない。しかも、よりによってタイラントになった後に絵を描き始めたのだから、見た目とのギャップがすごい。

「全くだ。」

話しながら歩いていると俺が普段寝ている部屋に着いた。

「俺はこの部屋で寝ているんだ。今日もここにいるから困ったことがあったら呼んでくれ。」

「範人さん、いっしょに寝ましようよ。」

まさかの誘い、正直なところすごく嬉しい。だが、今日は魔理沙たちが来るのだ。魔理沙が泊まっていくと言い出して、もしもいっしょに寝ているところを見られたら大変なことになる。

「妖夢、魔理沙たちが来るんだよ。泊まっていくとか言うかもしれないんだよ。見られたらやばいんだよ。それでもいいの?」

「構いません。仮に見られても範人さんを思う心は変わりませんか。」

うん、断つても無意味みたいだ。そうわかると、不思議と見られても平気に思えてきた。

「……わかった。そうしよう。」

「ありがとうございます。」

「別館に行こうか。」

別館は他の研究者たちがこの研究所を訪れたときにその研究者たちを泊めていた建物である。宴会ができる大きな部屋が和室、洋室のそれぞれ一部屋ずつあり、泊まるための部屋も和室、洋室がそれぞれ二部屋ずつある。宴会の会場も別館にしようと思っっている。

「で、本来は妖夢にはこの別館の部屋で寝てもらおうつもりだったが、妖夢は俺の部屋と別館の部屋、どっちの部屋で寝たい？」

「私は別館の部屋ですね。」

「わかった。じゃあ、別館の和室でいいな？」

「はい、お願いします。」

「ここが宴会の会場になる予定なんだけど、ここでいいかな？」

俺は広い和室の襖を開ける。本当になんでこんな広い部屋を父さんは作ったんだろう。

「かなり広いですね。これだけ広ければ充分ですよ。」

「それならよかった。この部屋と向かいの部屋以外に宴会をできるような場所がないんだよね。」

よかったー。正直なところすごい心配だったんだよねー。かなりの人数が集まりそうだったから。

「この二階に泊まる部屋があるよ。見とく？」

「いえ、それよりも研究所の案内をお願いします。」

「わかった。研究所はかなりやばい実験が行われていた場所だから、多少血の匂いとかがするかもしれないけど、我慢してね。しっかりと掃除はしたんだけど。」

「構いませんよ。行きましょう。」

研究所は最も大きな建物だ。生物を主に研究していた。もちろん、生物兵器も例外ではない。研究所には地下室がある。なんで、研究所の地下室なんだろう？理由がわからない。生物兵器などの危険な実験は地下室で行われていた。今、その部屋は綺麗に掃除されて野菜を育てる部屋になっている。他の研究室も魚の養殖施設やモノリスの

生産、加工施設になっている。まあ、簡単に言えば、今の研究所はいろんな物を作る工場になっている。ただし、最深部の研究室は過去のままになっている。家で電気が使えるのは発電機が研究所にあるからである。

妖夢に研究所の中を案内することは終わった。

「すごいですね。あれなら、食材に困りませんよ。血の匂いなんてしませんでした。」

「でも、過去を知ってしまうとここで作られた食材なんて食べたくなくなるだろ。」

「そんなことはないですよ。人里の畑には人間が妖怪に襲われて、死んだ場所もあります。」

「あ、うん。」

あまりの驚きにしつかりと返事ができなかった。幻想郷って結構危険なんだな。

「時間もかなり経ったし、そろそろ魔理沙たちも来るだろうから、夕食を作り始めようか。」

「そうですね。作りましょう。」

俺たちはキッチンに向かった。

夕食を作り終えたところにちょうど魔理沙たちが来た。

「おう範人、飯食いに来たぜ。」

「お邪魔します。」

「いらっしやい。夕食はもうできているよ。」

「それは助かるぜ。いろんなところ飛び回ってきたから、腹が空いているんだ。」

俺はリビングに魔理沙たちを通す。リビングには妖夢が既に待っていた。

「おう妖夢、なんでここにお前がいるんだ？」

「今日は幽々子様が紫様の家に泊まりに行っておりますので、こちらに泊まりに来ているんです。」

「なんだ、てつきり範人と同棲しているのかと思っただぜ。」

「まだ同棲なんてしていませんよ。」

妖夢は顔を赤くして答えた。まだって言ってしまった。そんなこと言ったら絶対に魔理沙が食いつくよ。

「え、まだって言ったか？」

案の定、魔理沙がまだという言葉に食いついた。からかわれるのはかわいそうなので、話をかえさせる。

「早く食べようか。」

「それもそうだな。」

「」「いただきます。」「」

夕食を食べ始める。

「これ、美味しいな。誰が作ったんだ？」

「それを作ったのは俺だ。」

「範人って本当に料理できたんだな。驚きだぜ。」

「俺の言葉を信じてなかったのかよ。」

これは少しショックである。信じてもらえていなかったとは。

「悪いな。優も料理はできるんだが、ここまで美味しいものは作れなくてな。勝手にそう考えちゃった。」

「そう言う魔理沙の料理センスはどうなんだ？」

「……」

「わかった。料理下手なんだね。」

魔理沙を同情の眼差しで見る。

「それは言わないでくれ。あと、そんな目で私を見るな。」

「それなら結婚したとき、魔理沙が嫁じゃなくて優が嫁だな。」

「け、結婚ってなんだよ。別に優とはまだそういう関係じゃねーから。」

「まだって、どういうことだ？ やっぱり、優のことが好きなのか。」

「そ、そんなわけねーだろ。」

魔理沙が顔を真っ赤にして言う。妖夢の分の仕返しができる。

「ははは、妖夢の代わりに仕返しだ。」

「範人てめー。」

「(ナイスです、範人さん。)」

「(いいってことよ。)」

魔理沙の言葉で優がすごい落ち込んでいる。

「魔理沙、俺のことが嫌いだったのか。」

「わ、悪い。別に優のことが嫌いってわけじゃねーから。」

「うう、それなら良かった。」

「逆に嫌いなわけないだろ。嫌いだったらいつしよに風呂なんて入らねーよ。」

「魔理沙、そのことは言うな！」

魔理沙、お前の頭の中は本当にどうなっているんだよ。こんなところでそんな話を出すな。

「(範人さんこの二人って普段何しているんでしょうか?)」

「(本当に何やってんだろうな。)」

俺と妖夢は二人の様子を見て聞こえないように話し合っていると思っていた通りのことを魔理沙が言い出した。

「範人ー、このまま泊まっていいか?」

「別にいいけど。」

「ありがとな。」

「泊まる場所は別館だよ。和室と洋室どっちがいい?」

「洋室で頼む。優と二人で同じ部屋に泊まるから一部屋でいいぜ。」

「じゃあ、案内しないとな。夕食が終わったら案内するよ。」

「なら、食器の片付けは私がしておきます。」

「ありがとう。頼んだ。」

夕食が終わった。片付けは妖夢に任せ、二人を部屋に案内する。

第二十五話

臆病者

みんなが夕食を済ませたため、片付けは妖夢に任せて二人を部屋に案内した。

「ここが二人の部屋だよ。風呂はもう沸いているから自由に入っている。両方が風呂を済ませたら、俺か妖夢に連絡してくれ。」

「わかつたぜ。優、早速だが……。」

「範人、俺すごく嫌な予感がするよ。」

「多分、俺とお前の考えていることは同じだ。でも、助けることはできない。優……頑張れ。」

「いつしよに入ろうぜ。」

「タオルは部屋にあるから。まあ、楽しんでこい。」

「範人ー!」

優がなんか叫んでいるのが聞こえる。ごめんな、優。俺が助けることはできないんだ。俺も経験があるが、こうなったら断つても無駄だから。

「いいじゃないか、優。私がお前のことを嫌いじゃないってことの証明だぜ。」

うん、ここで断つたら確実に魔理沙に嫌われるからな。優は断れない。絶対に押しきられる。優、楽しんでこい。

俺は急いでその場を立ち去ってリビングに向かった。

俺は今リビングで妖夢と話している。

「な、言った通りだろ。魔理沙が泊まっていくって言い出したぞ。」

「まさか、本当に泊まって言うとは……。驚きです。」

「なあ、妖夢。俺と話するときには敬語をやめてくれないかな。なんか話しづらい。それが無理なら、せめて呼ぶときにさんをつけるのをやめてくれないか?」

「わかりました。範人と呼んでいいならそうさせていただきます。敬語は続けますけど。」

「それだけでもいいよ。ありがとな。」

「あの二人は今何をしているのですか？」

「優と二人で風呂に入っている。」

「本当ですか？魔理沙さんって大胆ですね。」

「優が助けを求めてきたけど、魔理沙が相手じゃさすがに説得できないから戻ってきた。」

「それはなんとなくわかります。あの人は自分の意見をなかなか曲げないですから。」

「まあ、そもそも好きな相手にそう言われたら断るほうが難しいよな。」

「そうですね。私たちもいつしよに入りませんか？」

「俺は別に構わないよ。」

白玉楼でいつしよに入った後日にも二回ほどいつしよに入っているため、今の俺は妖夢と風呂に入ることは大分慣れている。

「ところで台所を使ってみてどうだった？」

「初めてでしたが使いやすかったです。範人のいた世界には便利な道具があるんですね。」

「ならよかった。」

「範人ー、風呂空いたぜー。」

話に区切りがついたところでちょうど、魔理沙の声が聞こえてきた。

「わかったー。」

「範人、行きましょう。」

「待てよ。着替えを取ってくる。」

「そうでした。私も取りに行かなければいけませんね。」

俺と妖夢は着替えとタオルを取ってきて、風呂に向かった。

魔理沙と部屋に向かっている今、俺は少し後悔している。確かに魔理沙のことは好きだが、いつしよに風呂に入るのはやっぱり恥ずかしかった。てか、互いに洗い合いはないだろ。SAN値が限界ギリギリだった。

「どうしたんだ？顔が少し赤いぜ。」

「少し恥ずかしかった。」

「私の裸に興奮しちまったか？」

するよ。魔理沙はかわいいんだから、するに決まっているだろ。でも、そんなことを言えるわけがない。俺はさらに顔を赤くした。

「ははは、優も男だな。」

「……」

俺たちは部屋に入った。いつも寝ている部屋よりは少し広い。魔理沙の家では部屋がないという理由で魔理沙と同じ部屋でいっしょに寝ている。だが、そのことにもまだあまり慣れていない自分がいる。

「優、今日はいっしょに寝てくれないのか？」

俺は無意識に魔理沙から距離をとっていたようだ。告白をすれば、慣れていないということも少しは楽になるだろう。だが、嫌われることを恐れて、それもできない臆病な自分がある。告白のチャンスならいくらでもあったはずなのに。

「……」

俺は返事をせずに魔理沙が座っているベッドに座った。

「優、大丈夫か？」

俺が話さなくなつて、魔理沙を不安にさせてしまったようだ。魔理沙が俺の手を握っている。

魔理沙は俺のことを気遣ってくれる、こんなに臆病な俺のことを。魔理沙が手を握ってくれたことにより、俺の覚悟は決まった。嫌われでもいい、ここで思いを伝えて、楽になろう。臆病な自分はもうやめよう。俺は魔理沙のほうを向く。

「……魔理沙。」

「なんだ？」

「俺、魔理沙のことが好きだ。」

緊張と恥ずかしさで顔が赤くなってしまふ。だが、顔が赤くなったのは魔理沙も同じだった。

「私も優のことが好きだぜ。」

これ以上ない嬉しい返し。心の中のモヤが消えていく。自分の中の臆病な部分が消えていく。

「実は正直なところ私も恥ずかしかったんだ。」

「……何が？」

「優といっしょに風呂に入ること。でも、振り向いてもらうにはそれくらいしか思い浮かばなかったんだ。」

「そうだったのか。これからもよろしくな、魔理沙。今まで以上の関係として。」

「こちらこそどうぞ、優。」

嬉しかった。自分みたいな臆病者が好きになってもらえるとは思っていなかった。好きという気持ちは自分からの一方通行で魔理沙から自分に向けられているはずがないと思っていた。

「……なあ。」

「ん？」

返事をする、魔理沙に押し倒された。妖怪と戦うときの癖で魔理沙と位置を移し変えてしまった。顔が近い。

「優、このままてやってくれてもいいんだぜ。」

状況を理解した。俺が魔理沙に覆い被さるようになっていたため、魔理沙をベッドに押し倒したような状態になっている。三人称から見れば俺が魔理沙を襲っているように見える。

「ダメだ。まだできない。俺はまだ十六歳だから。」

「つまんねーな。何歳になったらいいんだ？」

「十八だな。」

「じゃあ、それまで待つぜ。」

魔理沙、気が早い。俺も嬉しいがそれはまだできない。だけど、今日は記念すべき日になりそうだ。魔理沙の隣に寝転び、俺たちはいつも通りに同じベッドで寝た。新しい心を抱いて。

風呂から上がり、別館の部屋へ向かう。俺は寝るとき、だいたいは上下とも黒い服装だ。今日もそれは変わらない。妖夢がいっしょに

寝ること以外は。

「範人と同意の上でいっしょに寝るのはこれが初めてですね。」

「そうだな。前は幽々子と姉さんが無理やりいっしょに寝かせたからな。」

「あのお二人は本当にありがた迷惑ですね。」

「きつと、俺たちの気持ちに気づいていたんだろうな。」

「そうですね。ところで魔理沙さんたちはどうなったのでしょうか？」

「俺の勘だけど、たぶん今日が分かれ目だ。告白は優からかな。」

「なんでわかるんですか？」

「優は魔理沙といっしょに風呂に入ることが恥ずかしかっていたからな。告白すれば恥ずかしかる必要がないと思うじゃないかな、と。」

「なるほど、確かにそう考えれば納得できますね。でも、なんで今日なんですか？」

「環境が違うからな。ここは俺の家だし、場所が変われば心も変わるだろうから。」

「二人の様子を見てきていいですか？」

「それはやめようか。明日になれば、二人の様子でわかるだろ。もう寝ていると思うけどな。」

「そうですね。私たちも早く寝ましょう。」

俺たちは部屋に入るとすぐに布団を敷いて寝た。

第二十六話

宴会準備

目が覚めると妖夢の顔が近くて驚いた。寝ている間に抱きつかれていたようだ。このままでは身動きがとれないため、肩を叩いて妖夢を起こす。

「おはよう。」

「おはようございます。」

「起きて早々悪いんだけど、離してくれないかな。」

妖夢に離してもらい、自室に向かった。服を着替えてキッチンに向かう。リビングには既にみんなが集まっていた。すぐに朝食を作り、テーブルに並べる。

「いただきます。」

朝食を食べ始めて既に魔理沙と優に質問する。

「お前ら、だいぶ雰囲気良くなったけどどうしたんだ？互いに告白でもしたか？」

「なんでわかった。」

二人とも息びったりだ。さすが恋人同士。

「お前らが互いを意識していたことなら、博麗神社でいっしょに昼食を食べたときから気づいていたぞ。優は俺に説明してくれたしな。」

「……ばれていたなら仕方ないな。」

「おい、魔理沙。」

「確かに私は優に告白されたし、それを受け入れたぜ。」

「良かったな。カップル成立おめでとう。」

「すごいですね。範人の読み通りです。」

「じゃあ、範人と妖夢はどうなんだ。妖夢が呼び捨てにしているから、かなり仲が良いんだろ。」

「まあ、話していいかな。お前たちのことを知ったんだから。妖夢もいいよな?..」

「私は構いませんよ。範人がいいなら。」

「ありがとう。なら、話そうか。俺と妖夢は恋人同士だ。」

「そうだったのか。いやー、よかったぜ。いっしょに恋話できるやつ

がこんなに近くにいたなんてな。」

その後はほとんどが恋愛についての話で朝食が終了した。

片付けを終わらせてみんなで会場の準備をしたが、優が能力で手伝ってくれたおかげで会場の準備はすぐに終わった。ものを運ぶ場合、優の能力は便利すぎると思う。会場の準備が終わったとき、俺はあることに気づいて一人で探し物をすることにした。

「俺はちよつと探し物してくるから、何かして暇つぶししていきれ。」

みんなにそう言い残し、研究所の倉庫へ向かう。確かあれは倉庫にあったはずだ。

範人が探し物をしに行つてしまい暇になってしまった。そこへ魔理沙さんが話しかけてくる。

「妖夢ー、範人と出会ったきつかけは何なんだ？」

「あつ、それは俺も気になる。」

「私も気になりますね。」

私は話そうとするが違和感に気づく。今の言葉、一人多かつたような気がする。周りを見るとこういう話を一番聞かれてはいけない人（人じゃないけど）がいた。

「なんで文さんがいるんですか？」

「何かネタの匂いがしたので来てしまいました。で、範人さんとのきつかけは何ですか？」

「話すわけないじゃないですか。文さんに聞かれたら記事に過大表現として書かれるから嫌です。」

文さんの新聞は決して間違つたことは書いていない。しかし、事実であっても過大表現や勘違いされてしまうような表現で書かれてしまふ。

「断つていいのですか？ 範人さんに妖夢さんの恥ずかしい写真を送つてしまいますよ。」

「どんな写真ですか？というよりも、そんな写真いつの間に撮ったんですか？」

「妖夢さんの裸の写真です。風呂に入っているときに撮らせていただきました。」

このパラッチめ……。それは盗撮だ。お巡りさんこの人を逮捕してください。だが、その写真は範人には意味がない。

「文さん、それはいっしょに風呂に入ったことのある範人には無駄ですよ。」

「!?」

「お、これはいいことを聞きました。どこまでいったんですか？もしかして、既にあんなことやこんなことをしたんですか？」

しまった。つい話してしまった。範人、ごめんなさい。

恥ずかしさと文さんの言葉で私は顔が赤くなってしまった。

「そ、そんなことしてませんよ。」

「そうですね。じゃあ、適当に書かせていただきます。」

「うわああ、話します。話しますから変なふうに書かないでください。」

私は半分泣きながら頼んだ。そこへ範人が戻ってきた。

「どうしたんだ？」

「おっと、ご本人が来ましたか。範人さん、妖夢さんとはどういったきっかけで？」

「妖夢、文が原因か？」

私は黙って頷いた。範人の顔は笑っているがその心には怒りが湧き上がっているだろう。

「文。」

「おや、話してくれるんですか？いいですねー、範人さんは話がよく通じて。」

「O☆H A☆N A☆S I☆しようよ。」

範人の体を黒い甲殻が覆い、炎を噴き出し始めた。

「おお、炎を出すところなるんですか。じゃあ、写真を一枚。」

「文、お前ふざけてんのか？」

炎陣『フレイムライン』

「ギャアアア。」

文さんが炎に包まれた。でも、範人なら殺さない程度に威力を抑えているだろう。炎が消えると体から煙を上げる文さんが倒れていた。それを見て魔理沙さんと優さんが呆然としている。

「は、範人。お前、すごいスペルだな。あと、さっきの姿も。」

「そりやどうも。」

「範人、文さんはどうしましょう?」

「ほっとけ、どうせすぐに復活する。」

そう言っただけで範人は笑う。どうやら、怒りは既に収まっているようだ。

「そーいや、妖夢が言っただけだ。妖夢と風呂に入ったことがあるって本当か?」

「本当だ。」

「マジかよ。恥ずかしくなかったのか?」

「最初は恥ずかしかつたけど、そのうち慣れた。」

「探し物って何だったんですか?」

「秘密だが、ヒントは紅魔館に関係のある物だ。」

「範人ー、時間もそろそろ昼だし、昼飯にしようぜ。」

「そーだな。妖夢、いっしょに作るか。」

「はい。」

私たちは家の中へ向かった。私を含めて三人はきつとこう思っただろう。範人は絶対に怒らせてはいけない、と。

昼食を食べ終えた頃に客人が来た。紅魔館のメンバーである。

「お兄様!」

会って早々、フランにまた吹っ飛ばされた。飛びつくな、と言ったのに……。

「手伝いに来てあげたわよ。」

「ごめん。会場の準備はもう終わったんだ。」

「何よ。せっかく手伝いに来てあげたのに。」

「ごめんね。レミリアの出番は宴会までほぼないよ。」

「うー。」

レミリアがカリスマに似合わないかわいらしい声を出してへこんでいるが無視しよう。

「おう、範人。相変わらず仕事が早いな。」

「デューも来たのか。」

「あー！お前は門番の巨人兵。」

「なんと！お前は本泥棒」

会って早々に魔理沙がデューに突っかかっていく。

「泥棒とは失礼な。死ぬまで借りるだけだぜ。」

「それを泥棒っていうんだよ。」

「お前がいたから、昨日は本を借りれなかったんだぞ。」

魔理沙、それを一般的に泥棒って言うんだよ。それと魔理沙がデューに突っかかっている理由がわかった。紅魔館の図書館に侵入しようとして、門を強行突破しようとしたらデューに追い返されたんだろう。

「お兄様、彼女って誰？フランが自分で交渉してみる。」

うん。交渉って聞いてなんかすごい嫌な予感がする。

「フラン、どうやって交渉するの？」

「もちろん拳でだよ。で、彼女って誰？」

妖夢逃げる。マジで逃げる。殺されかねない。

「範人の彼女は私ですが……。」

妖夢がフランの質問にこたえてこちらへやってくる。もうダメだ……おしまいだあ……。

「お姉さんは誰？」

「魂魄 妖夢です。私に何かご用ですか？」

「私はフランだよ。お姉さん、お兄様といっしょに生活していいかな？」

「！ それはどういう意味ですか？」

妖夢の表情が変わる。落ち着け、剣を抜こうとするな。それとフラ

ン、もう少しオブラートに包んだ話し方はできないのか。

「別にお兄様を独占するわけじゃないよ。お兄様といっしょに寝たりするだけだよ。」

「まあ、範人をどう思っているかによって変わりますね。フランさんは範人をどう思っているんですか?」

「お兄様はお兄様だよ。その言葉のまんまだよ。」

「そうですか。なら、いいですよ。範人を異性として見ていないなら。」

よかった。フランの好きと妖夢の好きは、ベクトルが違うことに気づいてくれた。

「わーい。じゃあ、これからお姉様って呼んでいい?」

「私は構いませんよ。」

「ありがとう。じゃあ、私のことはさん付けじゃなくてちゃん付けで呼んでよ。」

「わかりましたよ、フランちゃん。これからよろしくお願いします。」

「よろしくね、お姉様。」

「そんな、私以外に向かってお姉様だなんて……。」

レミリアがさらにへこんだ。なんか、レミリアがすごくかわいそうに見えてきた。

「範人さん、手伝うことはありませんか?」

「うーん、そうだね。じゃあ、宴会の料理を作るとき手伝ってよ。妖夢と俺だけじゃさすがにキツイ。」

「わかりました。では、そのときにお呼びください。」

「よろしくねー。」

咲夜はレミリアに駆け寄り、必死になぐさめ始めた。レミリアってカリスマ性に溢れているけど、心は結構お子様なのかもしれない。

俺たちは今料理を作っている。仕込みは昨日の夜や朝のうちでできるものはしておいたため、今は短い時間で作れるものか仕上げだ。咲夜はキッチンを見てすごく驚いていた。

「範人さん、できました。」

「範人、こっちもできました。」

「ありがとう。じゃあ、あとは俺だけか。」

咲夜も妖夢も仕事が早くて助かる。しばらくして、俺も料理を仕上げた。そこへデューとフランと優がやってきた。

「できたみたいだな。運ぶのは手伝おう。」

「フランも手伝うー。」

「俺も手伝うよ。」

「ありがとう。」

「じゃあ、運びましょう。」

料理や酒は全て運び終わった。気がつけば、もう少しで夕方六時である。宴会の参加者はもう集まっている。初めての宴会はどんな宴会になるのだろうか。

第二十七話

幻想郷の仲間入り

宴会の会場には既に多くの人が集まっていた。ほとんどの人が集まったみたいだし、宴会を始めよう。

「範人、私に乾杯の音頭をとらせてくれ。」

「ああ、頼んだ。」

特に乾杯の音頭が思いついていなかったため、魔理沙に頼むことにした。

「フランに正式な仲間入り、範人とデューレスの幻想入りを祝して乾杯！」

全『乾杯！』

宴会が始まった。みんなが料理を食べ始めたり、話し始めたりし始めた。俺も妖夢といっしょに幽々子のほうに行く。

幽々子は相変わらずの食欲だ。大量の料理があつと言う間に消えていく。俺もなるべく食い溜めするが幽々子のスピードには勝てない。充分に食べたところで魔理沙が話しかけてきた。

「おい、範人。お前は酒飲まないのか？」

「うーん……飲めと言われたら飲むけど、自分からは飲もうとは思わないな。今のところだけ。」

「なら、飲まないってことはないのか。範人も飲もうぜ。」

「わかった。妖夢も来るか？」

「いえ、私は幽々子様といっしょにいます。」

「じゃあ、行ってくるわ。」

俺が魔理沙についていくと霊夢と優、そして知らない少女がいた。

「久しぶりね、範人。」

「おう、霊夢。久しぶりだな。そっちの人は始めましてだな。」

「始めまして、私はアリス・マーガトロイドよ。」

「俺は旅行 範人だ。よろしく。」

「よろしくね。」

「さて、範人と妖夢が恋人関係になったことを祝して乾杯といこうか。」

「おい待て、魔理沙。お前も優と恋人関係になっただろ。それはどうなんだ？」

「範人、それは本当なの？」

「本当だ。なんなら、魔理沙か優に直接訊いてみれば？」

「範人、バラさないでくれよ。せつかく驚かそうと思っていたのに……。」

「悪い悪い。」

「まあ、いいか。範人の言った通りだ。てわけで飲もうぜ。」

みんなは日本酒を飲むが、俺はワインを飲む。ちよつと苦いが普通に美味しい。アメリカは未成年の飲酒に関して厳しかったけど、こんなふうに規制のない場所もあったのか。

「見たことのない酒だな。範人、分けてくれよ。」

俺は黙って瓶を渡す。

「ありがとな。」

うーん。酒を飲むと酔うって聞いたことがあるけど全然平気だ。たくさん飲んでいないからかな。

「範人、なんだこの酒は？色がおかしいぞ。香りは良いけど。」

「これは赤ワインだからな。元々そういう色をしているんだ。同じワインにも色が透明に近いものがあるぞ。お前らがいつも飲んでるのは日本酒だな。」

「ほー。外界の酒って結構種類があるんだな。」

そう言いながら魔理沙はワインを飲む。

「普通に美味しいな。なあ、他にはないのか？」

「ほらよ。飲み過ぎには気をつけろよ。」

ウイスキーの瓶を渡す。

「早速飲んでみるか。」

そうやって魔理沙は飲み始めたが全然平気そうだ。

「魔理沙、平気なのか？」

「平気だぜ。鬼の酒に比べたらまだまだだ。」

「うえーい、範人ー。いつしよに飲みましょく。」

魔理沙と話をしていると酔っ払った霊夢が割り込んできた。

「うわ!?? れ、霊夢どうしたんだ?」

「多分、飲み過ぎたんだな。」

「魔理沙、代わりに相手しといてくれ。紅魔館メンバーの方に行つてくる。」

「おう、任せろ。」

霊夢のことは魔理沙に任せて、紅魔館メンバーの方へ向かった。ああいうときは付き合ひ長い友人に任せた方が良い。まあ、第一に面倒くさいってこともあるけど。優は霊夢に大量に酒を飲まされて、既に倒れていた。

紅魔館メンバーのもとに着くと、早速フランに飛びつかれた。今回は吹っ飛ぶことなく受け止めることができた。もう注意しても無駄だろう。そこへレミリアが話しかけてくる。

「ありがとう。フランのために宴会を開いてくれて。」

「別にいいさ。頼まれたことだし。」

みんなとの友好関係も深めることができるから、宴会くらいなら頼まれればすぐに開く。

「範人も赤ワインを飲むのね。」

「初めて飲んだ酒だからな。普通に美味しい。」

「そうなの。ところでこの料理作ったのは誰?」

「仕込みは俺で、仕上げは俺と妖夢と咲夜だ。」

「料理上手だったのね。今度、何か作ってくれない?」

「お安い御用だ。あ、そういえばプレゼントがあった。フランもこっちにおいで。」

「なーに、お兄様?」

俺は倉庫のスキマを開き、とある薬品を取り出した。二人に説明を始める。

「これは光の粒子と水をはじく粒子で作った特殊な薬品だ。液体に見えるが水じゃない。これが体にかかると体の表面全体を光の粒子と

水をはじく粒子が数マイクロメートル離れて覆う。光の粒子が吸血鬼にとつて有害な光を遮断する。これらの粒子はすべて非物体だから、生活に支障はない。まあ、簡単に言えば吸血鬼の弱点をなくす薬だ。」

「なかなかすごい薬じゃない。どうやって作ったの?」

「俺の能力の応用だ。で、どうする?欲しいか?」

「そんなもの欲しいに決まっているわ。」

「私にもちよーだい。」

「じゃあ、渡しておくよ。効果時間は一週間だ。いくらでも作ることが出来るから無くなったら言ってくれ。」

「わーい、これで外を出歩けるよ。ありがとう、お兄様。」

「どういたしまして。それともう一つプレゼントがある。」

俺はスキマを開き、とある絵を取り出した。四百八十年程前に描かれたと言われている絵だ。

「これは!」

絵を見たレミリアの目から涙がこぼれる。その絵には、レミリアとフラン、そして金髪の男が描かれている。描かれた三人の顔には笑顔が浮かんでいる。

「ジェイド……。」

「欲しいだろ。その絵もあげよう。」

「範人、ありがとう。」

「いいんだ。その絵は俺じゃなくてレミリアが持つべきだ。」

「お兄様、しばらくお家に泊まっていい?レミリアお姉様からは許しはもらったよ。」

「俺は別に構わないんだが、妖夢に訊いてみてくれ。」

「それなら、いっしょに訊きに行こう。」

「構わないぞ。じゃ、俺はこれで。」

俺とフランは妖夢の方へ向かった。デューは美鈴と酒を飲んでいて。楽しそうだったため、声をかけるのはやめておいた。

妖夢の隣では幽々子が料理を食べ続けていた。本当にあの身体のどこに入るのだろう。幽々子の胃袋は宇宙にでもつながっているの

だろうか？幽々子を見ていると自分が生物兵器という化け物であることを忘れてしまいそうだ。

「お姉様。」

「何ですか、フランちゃん？」

「しばらくお兄様のお家に泊まってもいい？」

「いいですよ。範人がいいなら。」

「わーい、ありがとう。お兄様、今日はいつしよに寝てね。」

「今日は私もいつしよですよ。いいですか？」

「いいよー。」

交渉が成立したところで幽々子が横から口を出してくる。

「こつちから見ていると親子みたいねー。」

「幽々子（様）！？」

「ふふふ、ごめんなさいねー。」

驚いて声を出してしまった。親子じゃなくて兄妹って言うてもらいたかった。フランのほうが年上だけど。

「親子…それもいいなー。」

フランが小声で何か言っているがまあいい。妖夢とはまだ結婚もしていないから。俺と妖夢が幽々子に文句を言っていると、聞き覚えのある声が飛んできた。

「おい、範人。サイキョーのアタイが来てやったんだ。感謝しろ。」

「アー、ウン。ソウダネ。アリガトウ。」

チルノには言い返しても無駄なため、テキトーに返事をする。こいつはバカだから、テキトーに返事をしても気がつかない。

「範人、先生からの伝言だ。サイキョーのアタイが伝えに来たんだからよく聞けー。」

「ほう、で、どんな伝言だ？」

「三日後にしや…あれ？なんだったつけ？」

うん。こいつは相変わらずのバカだ。まあ、そういうところがこいつらしいんだが。

「社会科見学だよ、チルノちゃん。」

そんなチルノに大妖精のナイスフォローが入った。お前って本当

に良いやつだな。

「そうそうそれだよ。社会科見学に行くけどいいか？だって。」

「そういうことか。別に構わない、と伝えてくれ。任せたぞ天才。」

「ふふふ、この天才のアタイに任せろー。」

こいつ本当にバカだ。なんでこんなに単純なんだよ。俺の言っている天才バカなんだぜ。いい加減気づけよ。

「おう、頼んだぞ。」

俺がチルノとの話に区切りをつけると魔理沙が半泣きで助けを求めてきた。

「範人ー、助けてくれー。霊夢が酒に酔って暴れ始めたー。止めてくれー。」

「大変だな。気絶させてもいいか？」

「方法は選ばなくていいから止めてくれー。」

「わかった。」

霊夢のもとに行き、首の後ろに手刀を入れる。霊夢は意識を失いその場に崩れ落ちた。しかし、霊夢が暴れたことにより弾幕ごっこが始まってしまった。部屋が傷つかなかったために壁と畳をモノリスでコーティングした。宴会は弾幕ごっこが起きたことにより、ドタバタになっちゃった。魔理沙が流れ弾に被弾してしまい、気絶してしまった。俺は妖夢、フランといっしょに場の沈静を始めた。

「逃げたぞ。追えー！」

『おおお〜！』

俺は魔物の討伐の命を受け、山に遠征している。そして、今は魔物を見つけて追っているところだ。魔物の討伐依頼は珍しいことではない。人が魔物に襲われて、命を落とすこともよくある。

「取り囲んだぞー！」

討伐と言っても俺は命を奪うことを極力避けたい。取り囲んだときに降参して、人に危害を加えないことを誓ってくればそれでいい。

「人間ごときが我に敵うと思うなよ。」

魔物は衝撃波を起こして、兵士を数名吹き飛ばした。やれやれ、今回も降参してくれる気はなさそうだ。

「兵士たちよ、下がっていなさい。私が戦おう。」

俺は騎士長として、魔物の前が出る。

「俺も殺しはしたくないんだがなー。」

「貴様が相手か。ひとまず、名前を聞いておこう。これから、殺す相手の名前なんて覚える必要もないがな。」

「俺はジェイド・ゴートレックだ。あんたの名前も聞かせていただきたいな。」

「ふん。貴様なんぞに教える必要はないわ。」

「そうか？まあ、そこはあんたの自由だ。」

「死ねー。人間があー！」

魔物は叫びながら飛び掛かってきた。俺はそれを軽く躲す。そんな真つ直ぐな攻撃に当たるはずがない。

「遅い。」

俺は魔物の首に剣を突きつける。

「まずは一つだ。」

だが、魔物は剣を払い殴りかかってきた。俺はそれを躲しながら言う。

「これが三つ。つまりあと二回首元に剣を突きつけても降参しなかったら、あんたを殺そう。」

「調子に乗るなよ、人間。」

魔物はさらに殴り続けてくるが全て躲す。全てが遅い。こんなんでよく威張っていられるものだ。今度は蹴りを入れてくるが、蹴りで返す。こちらの方が力が強いいため、魔物はバランスを崩した。そこへ剣を突きつける。

「これで二つ目だ。降参してくれるか？」

「うるさい。降参するわけがないだろう。」

「そうか。」

魔物は妖力の塊を飛ばしてきた。これに当たるのはさすがにまずいため、剣で真つ二つに切り裂く。相手もこちらの行動に驚いたように一瞬だけ表情を変えたが、さらに撃ち続けてきた。だが、そんなもの幾ら撃つても同じことだ。俺は全てを切り裂いていく。魔物は怒り狂い突っ込んできた。そろそろ、三回目の質問といこう。

「死ねええー！」

拳が当たる寸前で魔物の動きが止まった。

「何故だ。身体が動かん。」

「ははは、どうした？」

俺が影を操り魔物の身体を束縛したのだ。魔物はそんなことには気づかず、身体を動かそうともがく。俺は動けなくなった魔物に質問する。

「さて、降参するか？」

「うるさい、黙れ。お前なんか誰が降参するか！」

「そうか。なら、死ねよ。」

俺は魔物の首を斬り飛ばした。切り口から血が噴き出す。降参してくれば殺さずに済んだだろう。俺は悲しい、本当は殺したくなかった。人間と魔物が共存していける世界はないのだろうか？そんなことを考えていると兵士たちが何かを見つけたらしい。

「騎士長、他にも魔物を見つけました。」

「そうですか、案内してください。」

「はい。」

「あ、魔物の死体は持ってきた棺桶に入れておいてください。」

「かしこまりました。」

俺が兵士についていくと洞窟があった。洞窟の中では兵士たちが何かを取り囲んでいた。そこに近づくと魔物の親子がいた。魔物たちは兵士たちに怯えている。

「私たちだけで話がしたい。兵士たちは洞窟から出てください。」

『はっ。かしこまりました。』

兵士たちが洞窟から出ていったことを確認すると俺は魔物に話しかける。

「ごめんな、驚かせちゃまって。あんたらを殺す気はないから安心してくれ。」

「助かった。騎士さん、ありがとうございます。」

「いいんだよ。俺はそもそも殺しが嫌いなんだ。あんたらは別に人を襲っていないだろ。殺す理由がないじゃないか。」

「はい、その通りです。なんで、わかつたんですか？」

「俺は普通の人間よりも五感が優れているからな。そのくらいのことはずぐにわかる。じゃ、俺は帰るから。」

「待ってください。名前を教えてください。」

「ジェイド・ゴートレックだ。困ったことがあったら、連絡してくれ。」

「はい。ありがとうございます。」

俺が洞窟を出ると兵士たちが迎えてくれた。

「騎士長、先程の魔物は？」

「放っておいてあげなさい。あの魔物たちは人間を襲っていません。城下街に帰りましょう。」

『はっ。』

俺たちは目的を達成し、街に向かった。

『兵士たちが遠征から帰ってきたぞー。』

街では多くの人々が出迎えてくれた。俺は出迎えてくれた人々にお礼の言葉を述べる。

「出迎えありがとうございます。」

兵士たちには街に入った瞬間から自由にしてい、と言つてあるため家族のもとに向かう者、行きつけの店に向かう者、みんなが思い思いの場所へ向かう。俺は棺桶を持って城へ向かった。

城主に依頼達成の報告をする。

「さすがだな、ジェイドよ。さすがは我が城の兵士たちの頂点だ。」

「いえ、ただ命令に従つて討伐してきただけです。」

「それがすごいのだ。ところで、報酬は何がいいかの？」

「しばらく、考えさせていただいてもよろしいでしょうか？今は欲しいものが特にありませんので。」

「構わないぞ。お主は本当に欲が無いのう。そういえば、バド兵長が吸血鬼を二体捕まえてきたぞ。地下牢に閉じ込めてあるから、見てきたらどうだ？」

「そうですか。では、失礼します。」

「ふおつふおつふお。いつでも報酬のことを伝えに来い。」

俺は城主の部屋を後にすると地下牢に向かった。バドは容赦が無いから悪くない魔物も捕まえてきてしまう。そのことが心配になったのだ。

私たちがあんな人間ごときに捕まるなんて。私たちが何か悪いことをしたのだろうか？おまけに両親を殺しやがって。

「お姉様ー。」

「フラン、心配しないで。私がいつしよにいるから。」

私はいつしよに捕まった妹を抱きしめる。本当は私も怖いのだ。でも、妹のためにも恐がつてはいけけない。今は妹の不安を少しでも取り除いてあげなければならぬ。

「捕まった吸血鬼ってのは、君たちかい？」

話しかけてきたのは、二十代前半に見える金髪の男だった。最強の騎士として名高いジェイドだ。私は彼に怒りをぶつけ、睨みつけなが

ら言葉を返した。

「どうせ、あんたも捕まった私たちを侮辱しに来たんでしょ？」

「おいおい、そんな怖い顔をするな。別にバカにしに来たわけじゃないから。」

ジェイドは笑いながら返してきた。

地下牢に捕まっていた吸血鬼はまだ可愛らしい少女だった。全くバドの野郎、容赦なさ過ぎだろ。吸血鬼って言ってもこの二人は人を殺してはいないぞ。

「まあ、お前たちが俺をどう思ってくれても構わないがな。俺はジェイド・ゴートレックだ、よろしく。二人の名前を覚えてくれないか？」
「私はレミア・スカーレットよ。私たちをバカにすることも恐れることもないなんて、貴方面白いわね。」

「私はフランドール・スカーレットだよ。よろしく。」

「お前たち、人殺しなんてしてないだろ。なんで、捕まったんだ？」

俺は質問をする。答えによつてはバドとO☆H A☆N A☆S I☆する必要がある。

「私たちは普通に生活していたわ。血液は仲の良い人間に分けてもらいながらね。でも、突然兵士たちが現れて私たちの両親を殺して、私たちを捕まえたわ。そして、今ここにいるのよ。私もなんでかはわからないわ。」

「なるほどな。お前たちは結局悪いことはしていないな。」

うん。バドとのO☆H A☆N A☆S I☆は決定だ。あの野郎、許さん。そういえば、今回の報酬を受け取っていなかったな。二人の解放にしようか。

「よし。解放を少し相談してこよう。たぶん話は通ると思うから準備しておけ。」

「えっ、いいのかしら？ 私たちは人間を憎んでいるのよ。」

「大丈夫だ。俺がお前たちの面倒を見るから。憎んでいても攻撃はさせねーよ。じゃ、行ってくるわ。」

俺は城主のもとに向かった。

ジェイドが行ってしまった。彼は私たちを解放すると言っていた。そんなこととしていいのだろうか？私が考えているとフランが話しかけてきた。

「お姉様、あの人って悪い人？」

「別に悪い人ではないんじゃない。」

「そうだよー。なんかあの人を見てると安心したよ。」

「そうね。」

そういえば、何故安心したのだろうか？人間を憎んでいる今、人間を前にすれば私は敵意を剥き出しにするはずだ。ジェイドは人間のはずである。しかし、ジェイドとは普通に会話ができた。そうすると、ジェイドは人間なのだろうか？そこへジェイドが戻ってきた。

「お待たせ。話は通ったから、二人を解放する。」

「ふふふ、ありがとう。家が焼き払われてしまったのだけれど、どうすればいいのかしら？」

「ああ、俺の家に来ればいい。面倒を見るって言っただろ。」

「じゃあ、お言葉に甘えさせていただくわ。」

「時間も遅いし、俺は家に帰るよ。二人もついてきな。」

私たちはジェイドについていくことにした。

家に着いたため、早速夕食を作る。今までは夕食も一人だったため寂しかったが、今日からは三人での食事だ。夕食を作り終え、テーブルに並べて、三人で夕食を食べ始める。

「ねえ、ジェイド。貴方って人間なの？魔物みたいな気配がしたんだけど。」

「ああ、そのことか。俺はこれまでにたくさん魔物と戦ってきたからな。そのときに被った魔物の血が体内に吸収されたんだ。一応、人間だぞ。」

「そうなの。納得したわ。」

「吸血鬼は夜行性なんだろう？これから出かけるならついて行くぞ。」

「今日はお出かけないわ。それに完全に夜行性ってわけではないわ。」

「そうか。なら、昼間に出かけることも考えてあれを纏わせておかないとな。食事が終わったら声をかけてくれ。」

俺は食器を片付ける。

しばらくして、レミリアたちも食事を終えた。しかし、二人は少し不満そうだ。疑問に思い質問する。

「どうしたんだ？」

「なんで、血が無いのかしら。」

「ああ、悪かったな。血か、どうしようか？」

そういえば、二人は吸血鬼だった。吸血鬼なんだから、そりやあ血が欲しいに決まっている。

「仕方がないわね。ジェイド、首をこちらにお願い。」

「あつ、なるほど。そういうことか。」

レミリアが何を考えているかがわかった。俺はレミリアが首に噛みつきやすいようにしゃがむ。首にチクリとした痛みが走った。少し痛いそのまま我慢する。

「……ふう、ありがとね。もういいわ。」

俺は顔を上げて、立ち上がる。

「フランもー。」

「ああ、そうだったな。」

再びしゃがむ。今度も首に痛みが走る。だが、なんとか我慢する。

「……ジェイド、ありがと。」

「どういたしまして。」

立ち上がると少しフラフラする。吸血されたのだから当然か。気になることがあったため質問する。

「吸血されると吸血鬼になるって聞いたことがあるけど、それは本当か？」

「普通はそうらしいけど、ジェイドは違うわね。魔物でもあるからで

しようね。貴方が望まなければ吸血鬼にはならないわ。」

「そうか。なら、安心だ。吸血鬼化は戦いの最終兵器だな。」

「そうね。」

「日光に当たっても平気にするからじつとしてくれ。」

俺はレミアアとフランの身体に影を纏わせる。こうすれば、日光に当たっても大丈夫だ。

「ジェイド、貴方って能力持ちなの？」

「そうだ。俺は『影を操る程度の能力』を持っている。」

「なるほど、『影の騎士』という二つ名はそこからだったのね。」

「そうなるな。でも、俺の能力を教えたのはお前たち二人だけだぞ。」

「それならこれは私たちだけの秘密になるわね。」

「そうだな。」

その夜は三人で楽しく話し合った。ずっと一人暮らしをしていたから、たとえ種族が異なっても家族ができてとても嬉しかった。

次の日、城に二人を連れて行くと兵士たちに驚かれた。中には、レミアアたちを攻撃しようとする者もいたがすぐに打ち解けた。城主も人と吸血鬼が仲良くしているところを見て、嬉しそうだった。バドとはO☆H A☆N A☆S I☆をして、レミアアたちに向けて謝罪させた。最初は怒っていたレミアアたちもしばらくすると打ち解けていた。この城は俺の求めていた人と魔物の共存する場所になった。

いっしょに暮らし始めて三カ月、私は優しいジェイドに惹かれていった。魔物たちからは恐れられていても本当の彼はとても優しくかった。

「お姉様、最近ボーっとしていているけど大丈夫？」

「さあ、なんでかしら？」

「お姉様ってジェイドのことが好きなの？」

「ちよ、フランやめなさい。」

フランの発言を聞いて私は顔が赤くなってしまった。否定はするがきつとそうなのだろう。

「別にいいでしょ。お姉様もいい年なんだから、そのくらい当たり前だよ。」

「うー……。」

確かに私はジェイドのことが好きである。だが、ジェイドは人間、吸血鬼の私とはどうしても寿命が違いすぎてしまう。私とジェイドの間には、種族という壁があった。

「どうしたんだ、レミリア？」

私がフランと話をして悩んでいるとジェイドが話しかけてきた。突然のことに私は驚いてしまい、同時にジェイドが話しかけてきたことで顔が真っ赤になってしまう。

「突然話しかけないですよ。びっくりしたじゃない。」

「ははは、悪い悪い。最近、レミリアがボーっとしてることが多いから心配になってな。」

「うー。なんでもないわよ。」

「そうか？なら、いいんだ。」

ジェイドは特に気にする様子もなく、フランと話し始めた。

「……なんでもないわけがないじゃない。」

私は小声で言った。

次の日、ジェイドからある提案があった。

「今日は俺も休みだから、三人の絵でも描いてもらいに行かないか？」
それは素晴らしい提案だった。もちろん、私はOKだ。

「俺は人間だから、二人みたいに長く生きられるかわからない。でも、この家族の記録をずっと残していきたい。種族を越えた素晴らしい家族の記録を。」

「いいわね。行きましょう。」

「わーい。お出かけだー。」

「じゃあ、準備してくれ。」

嬉しかった。ジェイドは私たちを家族と言ってくれた。私たちのことを家族として見ていてくれた。私はその時に種族なんて言葉だけであることに気がついた。

街に出ても人々は私たちのことを特に気にしなかった。ジェイドがいることからの安心か、私たちを受け入れてくれたのかどちらかはわからないが。しばらく歩いて、絵師のところに着いた。

「おや、ジェイドさん。今日は何のご用かな？」

「絵を描いてもらいたくてね。」

「そうかい。で、そちらのお嬢さんたちは娘さんかな？」

娘と言われて少しイラツときたがそこは我慢する。私はもう二十五歳なのだ。

「いや、俺は結婚したこともないよ。娘じゃないけど、二人は家族だよ。」

「おっと、これは失礼した。じゃあ、三人とも並んで。」

三人で並ぶと自然と笑顔になれた。絵師は絵を描き始める。しばらくして、絵を描き終えたらしい。絵には笑顔の私たちが描かれていた。私もフランもずっと座っていたせいで脚が動かさづらくなってしまう。

「ジェイド、肩に乗せてー。」

「いいぞ。」

ジェイドはフランを持ち上げた。羨ましい。私がジェイドのほうを見ると彼は私も肩に乗せてくれた。

「絵はレミリアが持っていてくれ。」
「任せなさい。」

私たちはそのまま家に帰ったが、途中で人々（特に女性）に睨まれた。家に絵を置いた後は三人で食事に行った。

その夜、私はジェイドに告白することにした。いつも通りの夕食の後、私はジェイドに話しかける。

「ジェイド。」

「何だ？」

「また、血をくれない？」

「わかった。」

ジェイドがしゃがみ、私はその首に噛みついた。いつもより長く噛みついているが、血を吸う量は変わらない。

「……はあ、ありがとう。」

「いつもより長くなかったか？」

「ねえ、ジェイド。吸血鬼の世界で異性に長く噛みつくことはどんな意味があるか知ってる？」

「さあ、知らないな。どういう意味なんだ？」

「好きな相手への求婚よ。」

「そうなのか……え!? それって、まさか。」

「そう。私はジェイドのことが好きなの。たとえば、種族が違ってもいい。私はジェイドが好き。だから、私と結婚してください。」

言った。私の気持ちはすべて言った。ジェイドがどんな返しをしてくれるかはわからない。だけど、私はジェイドに気持ちを伝えた。

「そうか。なら、答えはyesだ。俺もレミリアのことを愛そう。」

嬉しい言葉が返ってきた。私はジェイドに抱きつく。

「今日、絵を描いてもらって正解だった。実はレミリアの気持ちには既に知っていたんだ。フランから聞いてな。でも、レミリアは吸血鬼、俺は一応だけど人間。寿命が違うんだ。そこで絵は残るから、永遠の愛を誓えると思ったんだ。」

「ふふふ、ありがとう。」

私はジェイドと口づけを交わした。

「二人ともおめでとう〜。」

「フラン!?？」

なんと、フランに見られていた。

「今夜は二人で寝るよね。じゃ、おやすみー。」

「ちよ、待て。」

私たちが呼びかけるが、フランはいつもの寝室へ入って鍵をかけてしまった。

「……ジェイド。いっしょに寝ましょう。」

「ああ。」

私たちはジェイドの寝室に入り同じベッドに寝転がった。

嬉しかった。たとえ、自分の種族が何であっても自分のことを愛してくれる人がいた。

「なあ、レミリア。俺も吸血鬼になったほうがいいか?」

俺は人間だが体内に魔物の血が大量に蓄積されているため、吸血鬼になることもできる。結婚を決めたため、人間でいるよりも長い年月をいっしょに過ごすことのできる吸血鬼になったほうがいいのではないかと思っただのだ。

「それはジェイドの自由でいいわ。どんな種族になってもジェイドはジェイドだもの。」

「そうか。まあ、しばらく考えてみるよ。」

「ジェイド、キスして。」

「はいよ。」

レミリアとキスを交わした後、俺たちは眠りに落ちた。

次の日、俺が起きるとレミリアはまだ眠っていた。俺はレミリアにそっとキスをし、朝食を作るために部屋を出た。しばらくすると、レミリアとフランが起きてきた。ちようど、朝食が出来上がった。

「お姉様、おめでとう。」

「ありがとう、フラン。」

「ジェイド、これからはお兄様って呼んでいい？」

「別にいいぞ。」

「わーい。これで二人の結婚は絶対だね。」

「もー、フランったら。」

「まったたく。」

朝食のときの話はほとんどが俺とレミリアの話だった。

今日は城で新入りを迎える儀式があるため、兵士たちは全員が城に集まる。もちろん、俺は兵士たちのトップとして出席する。レミリアたちも戦い方を教えていたため、出席することになっている。儀式と言っても、城主と俺が話をしてから、宴会をするだけなのだ。

城主と俺の話が終わり、宴会が始まった。俺はレミリアといっしょに城主のもとへ行く。

「ジェイド、どうしたのだ？」

「実はレミリアと結婚することになりました、城主様がどう思っているのかが気になったのです。」

「そうか。それはめでたいことだな。レミリアは吸血鬼だが、今ではこの城にとっても街にとっても、必要な存在になっておる。わしはお主たちを応援するぞ。」

「ありがとうございます。」

「ふおおおおお、きつと皆も祝ってくれるだろう。どれ、わしから皆に伝えよう。お主たちはここで待っておれ。」

数十秒後、城主の声が部屋に響いた。

『わしはこの城の城主じゃ。突然だがめでたい知らせがある。我が城の騎士長ジェイドと戦闘訓練を教えていたレミリアが結婚することになった。皆で祝おうではないか。ジェイドとレミリアはわしの前へ。』

俺とレミリアは城主のもとへ向かった。

『二人が良ければ三日後にこの城で結婚式を挙げようと思うが、どう

かの?』

「ありがとうございます。是非、お願いします。」

『では、皆の者よ。二人の結婚式は三日後にこの城で決定だ。この儀式が終わったら、街で話を広めてくれ。』

城主の話が終わった瞬間、兵士たちから祝いの言葉がかけられた。

「騎士長、おめでとうございます。」

「種族の壁を乗り越える。愛とは素晴らしいものですね。」

「みんな、ありがとうございます。」

少し落ち着いてきたところでバドが話しかけてきた。かつて、レミアとフランを捕まえたバドも今となっては良い友達である。

「ジエイド、おめでとう。レミアもおめでとう。」

「ありがとうございます。バド。」

「まさか、結婚するとは思っていなかったぞ。俺も嬉しいがな。」

「そういうバドはエレカとどうなんだ?」

「俺もそろそろ結婚を考えているところだ。ところでジエイドは、人間と吸血鬼、どちらとして生きていくつもりなんだ?」

バドは俺の体内に魔物の血が蓄積されていることを知っている。

「それがよく決まっていらないんだ。バドはどう思う?」

「俺は吸血鬼かな。夫婦になったら、なるべく長い年月いっしょに過ごしたいからな。」

「そうか。じゃあ、俺が吸血鬼になったら、お前は俺を殺すのか?」

「殺すわけがねーだろ。魔物にもいいやつはたくさんいることがわかったからな。それに、お前が吸血鬼になっても俺たちは友達だからよ。」

「ははは、そうだな。バド、ありがとうございます。決まったよ。結婚式が終わったら、吸血鬼になろうと思うよ。」

「そうか。じゃあ、次の騎士長は俺だな。」

「吸血鬼になっても騎士長の座は下りねーよ。まあ、もし俺が騎士長の座を下りたら、お前を推薦するよ。」

「嬉しいねえ。それなら、早く下りてもらわねーとな。」

宴会は俺とレミリアの結婚の話でほとんどの時間が過ぎた。これまでの宴会の中で最も楽しかったと思う。

宴会から三日後、私たちは今、牧師の前に立っている。ジェイドは街での信頼が厚いため、街のほとんどの人々が結婚式に来ていた。若い女性の目はほとんどが何故か赤かった。まあ、ジェイドは格好いから彼のことが好きな女性が多かったのだろう。

「新郎ジェイド・ゴートレックよ。貴方はレミリア・スカーレットを永遠に愛することを神に誓いますか？」

「誓います。」

「新婦レミリア・スカーレットよ。貴女はジェイド・ゴートレックを永遠に愛することを神に誓いますか？」

「誓います。」

私は吸血鬼だから、神という単語は極力聞きたくなかったが我慢した。吸血鬼が神に誓うってというのはどうなのだろうか。

「では、指輪交換の儀を。」

ジェイドは私の薬指にルビーのついた指輪を通してくれた。私もルビーのついた指輪をジェイドの薬指に通した。吸血鬼たちの間ではルビーが一般的なのだ。

「では、誓いの口づけを。」

ジェイドはベールを上げて私の唇を自分の唇を重ねた。たった一瞬のことだったが私たちにとっては、とても大きな一瞬だった。

「互いを永遠に愛することを神に誓い、指輪を交換し、口づけをした二人を夫婦と認め、結婚が成立したことをここに宣言する。」

披露宴では、いろんな人が祝福の言葉をかけてくれた。私はこの街にとって大切な存在になっていたらしい。街のみんなが受け入れてくれていたことがとても嬉しかった。

「ジェイドよ。これでお主は吸血鬼の婿になった。これからは、吸血鬼になるのだろうか？」

「はい。」

「吸血鬼になった後もこの城で兵を率いてくれるか？」

「もちろんです。」

「ありがとう。では、この場で吸血鬼になってくれないか？」

「わかりました。レミリア。」

ジェイドがしゃがみ、私はジェイドの首に噛みついた。ジェイドの背中に羽が現れる。ジェイドが吸血鬼になった瞬間、ジェイドの体からはとてつもない量の妖力が感じとれた。

「では、これからもよろしく頼むぞ。ジェイド・スカーレットよ。」

「はい。」

城主は披露宴の群衆の中に戻っていった。ジェイドは羽を仕舞う。

「これで貴方も吸血鬼よ。」

「そうだな。これでレミリアの夫としてふさわしい状態になったのかな？」

「貴方はもともとふさわしい男だったわよ。」

話をしているとフランがやってきた。

「これでジェイドは私の本当のお兄様だね。」

「まあ、血のつながりはないけどな。」

「そんなことどうでもいいの。ジェイドはお兄様なんだから。」

「そうよ。私の夫になったんだから、フランの兄になったことに違いはないわ。」

「そうだな。フランは俺の妹だ。」

種族を越えた私たちは家族以上の絆でつながっている。

結婚式の翌日、俺たちは幸せな朝を迎えた。横ではまだレミリアが寝ていた。俺は吸血鬼になったため通常の状態では日光に当たることができない。そのため、起きてすぐに身体に影を纏った。

「あら、もう起きたのね。」

「おはよう、レミリア。」

「おはよう。」

「じゃあ、朝食作ってくるから。」

「待って、おはようのキスをお願い。」

「ああ、はいはい。」

俺はレミリアの唇に自分の唇を優しく重ねてから、キッチンに向かった。リビングには既にフランが朝食を待っていた。

「お兄様、朝起きてどうだった？」

「レミリアがいつしよに寝ていた。」

「それだけだった？」

「ああ、いつしよに寝たことは前にもあったからな。別に焦るってこともなかった。」

俺は朝食を作り、起きてきたレミリアもいつしよに三人で朝食を食べた。

食器を洗ってから、いつも通りに城に行く。城では兵士たちが出迎えてくれた。今日は城での仕事は特にないが、新入りたちの訓練が気になったため行くことにした。レミリアたちもそれが気になったためついてきたらしい。

『突く、守る。突く、守る。』

訓練所では新入りたちが槍術の練習をしていた。新入りたちの元気の良い声が響いている。今年の新入りたちはかなり質が良いようだ。全員、動きにキレがある。まだ、入ったばかりなのにもう実戦練習に入ってもいいかもしれない。

俺たちは新入りたち一人一人にアドバイスをしてから、城を後にし

て、城下街の探索を始めた。

城下街では、アクセサリー店を訪れた。結婚式のときに交換した指輪を買ったのもこの場所だった。実はフランにはまだプレゼントも何も渡していないのだ。だから、フランへのプレゼントを探すために訪れた。しばらくして、プレゼントが決まった。家族一人に一つずつラピスラズリの飾りがついたネックレスを買った。俺は二人には買ったことがばれないように家に帰った。

家に帰ってから、二人に先程買ったものを渡す。

「中身は同じだよ。開けてごらん。」

「わあー。ネックレスだー。」

「石はラピスラズリね。」

「そう。石言葉は永遠の誓い。これを身につけていれば俺たちはいつまでも家族だ。」

「ありがとう、お兄様。」

「お礼はいいよ。俺が好きで買ったんだから。」

さて、夕方になったから夕食を作り始めるか。

「待って。」

キッチンに行こうとする俺をレミリアが止めた。

「私に料理を教えて。妻として料理が作れるようになりたいの。」

「わかった。いっしょに作ろうか。」

「フランもー。」

三人で作った料理はあまり美味くはなかった。それでも家族の優しさが詰まった味だった。

いつも通りに食器を洗い終え、寝るために寝室に入る。寝室ではなぜかレミリアがベッドに座っていた。

「どうした?」

レミリアの隣に座る。

「ねえ、ジエイド。目をつむって。」

「わかった。」

俺は指示通りに目を閉じる。すると、自分の唇にレミリアの唇が触れる感触がした直後にすごい力で押し倒された。体を起こすことができない。

「ちよ、何をするんだ。」

「もう目を開けていいわよ。」

目を開けるとレミリアが俺を押さえつけていた。俺が言葉を発しようとするレミリアがまたキスをしてきた。今度はさつきよりも長い時間でしかも口の中に舌を入れてくる。

「……ふはっ、はあ、はあ。ジエイド、好きよ。」

「ああ。俺もレミリアのことが好きだ。」

そう言うと、レミリアは服を脱ぐ。俺はこれから何があるのかを理解した。

「えっっっ。」

焦ってはいるが俺はそこそこ落ち着いていた。結婚して夫婦になつたからだからだろうか？

「これが私の気持ちよ。受け止めて。」

「……わかった。受け止めよう、レミリアの気持ちを全身全霊で。」

俺は覚悟を決めて、後はレミリアに任せることにした。レミリアは俺の服も脱がした。

(自主規制でCUT！)

朝起きると隣には裸のレミリアが寝ていた。俺も同様に裸である。ああ、夜の間アレがあったのか。

「あら、おはよう。ジエイド。」

「おはよう、レミリア。」

「イタタ……、腰のあたりがまだ痛いわ。」

「自分からやっというて何言ってるんだ。」

「だって、初めてだったんだもの。」

「まあ、歩けないならおんぶするからな。早く服を着ろよ。」

「ええー、ジエイドが着させてよー。」

「まったく……。」

仕方がないので自分が服を着た後に俺がレミリアに服を着させた。レミリアは歩けないようなので俺がおんぶで運ぶ。

フランの生活瞬間はかなり整っているようで、俺たちがリビングに行くとき既に椅子に座っていた。

「二人とも昨日の夜は激しかったみたいだね。こっちの部屋まで声が聞こえてきたよ。」

俺もレミリアもそれを聞いて顔が赤くなってしまった。

「別に恥ずかしがる必要はないと思うよ。二人は夫婦なんだから。」

「……ははは。」

「……ふふふ。」

俺は逃げるようにキッチンへ向かい、朝食を作り始めた。

私たちが結婚してから三カ月。幸せな日々は終わりを告げた。吸血鬼狩りが街に来たのだ。街のみんなは私たちを守ろうとしてくれた。城のみんなもだ。だが、そいつらがよりによって私たちの家を訪れてしまった。

「失礼、旅の吸血鬼狩りです。この街に吸血鬼はいませんか？いるなら退治します。」

リーダーと思われる男はそう言って歪んだ笑みを浮かべた。

「別にいいわ。他の街をあたってくれる？」

「そうだ。この街には俺がいる。たとえば、いたとしても人を襲わせやしないさ。」

「そうですか。ところで二人はどういった関係で？」

「これでも夫婦だ。」

夫婦という言葉聞いた瞬間に男の表情が変わった。怪しまれている。

「ほう、そうでしたか。これは失礼、親子だと思ってしまいました。」

「まあ、そう思われても仕方ないかな。身長の違いがあまりすぎる。」

そこへ羽を仕舞っていない状態のフランがやってきてしまった。

「お兄様、お姉様、どうしたの。その人たちは誰？」

吸血鬼狩りのうちの一人が剣でフランに斬りかかった。ジエイドが腕を掴んでそいつを止める。

「お前ら吸血鬼だったのか！こいつらを殺せ！」

リーダーと思われる男が叫ぶ。その声を聞いた近所の住民たちが駆けつけてくる。

『やめろ。そいつらは悪い吸血鬼じゃない。この街にとって大切な存在だ。』

だが、その言葉を聞いた吸血鬼狩りのリーダーはとんでもないことを言い出した。

「黙れ！こいつらを守ろうとするなら、お前らも吸血鬼なんだろ。吸血鬼狩りたちよ、こいつら全員を殺せ！」

吸血鬼狩りたちは吸血鬼ではない住民たちにも斬りかかった。ジエイドは彼らを守るために影を操って、吸血鬼狩りたちの動きを止めた。

「やめろ！住民たちは吸血鬼じゃない。」

「黙れ！吸血鬼を守ろうとするならそいつらも敵だ！」

「みんなは逃げろ。ここは俺がどうにかする。レミアアたちも早く。」

その言葉を聞いても私はいっしょに戦おうと思った。ジエイドと離れたくない。

「嫌！私もいっしょに戦う。貴方と離れたくない。」

「ならば誓おう。俺の先祖がいた世界、幻想郷。そこでは妖怪と呼ばれる魔物と人間が共存しているらしい。待っていてくれ、幻想郷で必ず会いに行く。」

「そんなの嫌！お兄様といっしょにいたい。」

ジエイドは私たち二人を優しく抱きしめた。

「忘れたのか？ラピスラズリの石言葉は永遠の誓い。安心しろ。俺たちは必ず再会できる。俺たちの運命はつながっている。離れても家族だから。」

私たちはジェイドからもらったそれぞれのネックレスを握り締める。そうだ、必ず再会できる。家族の永遠の誓いだ。

「わかった。私、待つ。ジェイドとまた会えるときを永遠に。だから、必ず会いに来て。」

「当たり前だ！絶対に会いに行く。どれだけ年月が経っても絶対にだ。」

私はフランの腕を掴む。

「フラン、逃げるわよ。」

「でも、お兄様が……。」

「ジェイドは大丈夫よ。最強の騎士だもの！」

最強の騎士という言葉聞いてフランの表情が変わった。

「うん。わかった。」

私たちは走り出した、ラピスラズリに永遠を誓って。家に絵を取りに行く時間もなかった。ジェイドが必死になって私たちを守ってくれていたから、少しの時間も無駄にできなかった。

街から逃げ出して、私たちは紅い館に住み着いた。ジェイドと別れてから、フランは狂気に取り憑かれてしまった。でも、私たちは必ず会えると信じている。家族だから。

キャラ設定

名前 旅行 範人（タビユキ ハント）

身長175cm、体重85kg、年齢16歳

能力 粒子を操る程度の能力

専用武器 覇剣クリムゾン（武器は進化予定）

本作品の主人公。どうやら、旅行範人という名前は本名ではないらしい。また、人の姿をしているものの完全に人というわけでもないらしい。金髪、灰眼である。見た目はDMCのダンテの髪色と眼の色を金髪、灰眼にして全体的に若くした感じ。体格は標準（見た目はダンテほど筋肉はない）。体重が多いのは筋肉のせい。見た目とは、異なり家事は基本何でもできて、更に料理も上手い。

性格は本来なら明るく、優しいが、自分の危険性を知っているため、人々を近づけないために、話し方は少し暗くしている。

政府の特例ではあるが、大学を既に卒業していて、更に生物学の博士号まで持っている。研究所には、範人とテューレスしかいないという状態だが、所長である。この研究所は、範人の父親が所長を務めていた。紫とは、幼い頃から面識があったため、親しみを込めて姉さんと呼んでいる。

戦闘では圧倒的な身体能力と能力を生かして戦う。めちやくちや強い。

生体金属モノリスの加工、生産ができるのは範人だけ（今のところは）である。先祖は幻想郷にいたが、紫によって外の世界に飛ばされた人。服の素材は再生繊維。

粒子を操る程度の能力

その言葉の通り粒子を操ることができる。電子や素粒子も操ることができる。また、生物や魂のないものや自分自身を粒子に分解できる。もちろん、組み立てても可能。

生体金属モノリス

金属に生物の特性を持たせることによって、再生、成長という能力を金属に持たせた。もとの金属の圧倒的な硬度と強度も持つ。また、

繊維に生物の特性を持たせることによって作られた、再生する布もある。

覇剣クリムゾン

柄の長さ40cm、刃渡り130cmという両刃の大剣。刃の真ん中で2つに割いて、双剣（刃の長さが70cmまで短くなる）にして使用したり、それらを柄で合わせて槍（真ん中に柄、両側に刃、刃の長さはもとに戻る）にして使用できる。素材はモノリス。普段は小さくなって、範人のネックレスになっている。

名前 デューレス・タイラント

身長260cm、体重200kg、16歳

能力 つなぐ程度の能力

専用武器 激槌メテオ（武器は進化予定）

範人とは、幼い頃からの親友。もとの名前は、デューレス・タイラントではないらしい。

性格は明るく、優しい。自分の姿や力はあまり気にしていない。見た目はバイオハザードのタイラントにボサボサで長い黒髪が生えた感じ。

もとは普通の人間だったが8歳のときにバイオハザードに巻き込まれ、ウイルスに感染してしまい、タイラント化しかけたところを範人と範人の弟に助けられた。体はタイラント化してしまったが、範人の弟の能力で心は失わずに済んだ。この災害で両親を失ったため、それ以降範人の研究所で世話になっていた。範人と同様に紫とは幼い頃から面識があった。

紫のことは、礼儀正しく紫さんと呼んでいる。幻想郷へ連れてこられた理由は、紫と面識があったかららしい。

戦闘では、圧倒的な怪力と能力で敵を逃さないようにしながら戦う。服の素材は再生繊維。

つなぐ程度の能力

ものともものをつなぐことができる。物理的にだけではなく、心や関係もつなぐことができる。相手を心の中から潰すことができる。自分以外の人同士の心もつなぐことができる。そんじよそこの縁結

びの神よりは、よっぽど効果が期待できる。

激槌メテオ

柄の長さ150cm、ヘッドの形、棘の大きいスパイクボール
圧倒的な重さを持つハンマー。モノリスのワイヤーが仕込んであ
り、ハンマーチェーンにもなる。素材はモノリス。
普段は、デューレスのベルトにつるしてある。

第一章での新オリキャラ設定、追加設定

新キャラ

難波 優（なにわ ゆう）

種族人間、身長168cm、体重54kg
年齢16歳

能力 「移し替える程度の能力」

黒髪、眼の色は黒。普通にイケメンの日本人。魔理沙の家に居候している。魔理沙とは相思相愛。身体能力は平均より高いが突出しているわけではない。家事もできるが突出して上手というわけでもない。幻想入りした理由、幻想入り前の生活についてはあまり知られていない。作者が出番を少なくしたせいでよくわかっていない人物。

移し替える程度の能力

ものともものを入れ換えることができる。空気と自身を入れ換えてテレポートすることも可能。物体だけではなく、ダメージを入れ換えることもできる。実は入れ替えるものがなくてもダメージは移すことが可能。生活の中で何かと役に立つ能力。

ジェイド・ゴートレック↓ジェイド・スカーレット

種族人間↓吸血鬼、身長183cm、体重90kg
年齢レミリアとの結婚時25歳

生きているなら500歳（レミリアと同じ年）

能力「影を操る程度の能力」

金髪、眼の色は青（吸血鬼化後赤）。見た目は大人っぽくなった範人（眼の色は異なるけど）。レミリアの夫。範人の先祖の弟。圧倒的な強さを持っていたため、24歳という若さで騎士長を務めていた。戦いで魔物の血を浴びてきたため、身体が血を吸収し、吸血鬼に吸血されても自身が望ましい限り吸血鬼にならない身体になっていた。元々化け物じみていた身体能力もそれによりさらに向上した。レミリアの夫だがロリコンではない。（自分を地位など関係無しに受け入れてくれるなら誰でもよかった。）家事スキルは高い。戦いのとき、親

しいものと話すときは素の話し方になるが、他の兵士たちに命令、街の人たちに騎士長として話すときは話し方が変わる。

影を操る程度の能力

影を操ることができ。影を実体化させて攻撃に使用したり、防衛に使用したりする。さらに影の中に入り込み影から影へワープすることも可能。自分と同様に他の者も影に引きずり込むことまでできる。影に引きずり込まれたものは闇に耐性がない限り、一定時間で死に至る。

レイジ・ゴートレック

偽名 旅行 冷仁（たびゆき れいじ）

種族生物兵器、身長175cm、体重85kg

年齢16歳

能力不明

金髪、眼の色は水色。範人の双子の兄。左眼がうまく再生せず、真っ赤な球体になっているため、眼帯を着用している。十二歳のときに範人たちと別れ、他の世界に行った。その後の消息は不明。

アルバレスト・ゴートレック

種族人間、身長176cm、体重64kg

享年32歳

能力「閉じ込める程度の能力」

金髪、眼の色は青。範人たちの父親。生物研究者。アンブレラと少し関わりがあり、アンブレラ倒産後に殺害された。しかし、アンブレラのために研究していたわけではない。封力石は彼が作った。

閉じ込める程度の能力

ものを何かの中に閉じ込めることができる。物体だけでなく、能力も閉じ込めることが可能。能力を閉じ込める際に能力をコピーして、能力を奪うことなく閉じ込めることもできる。

新設定

旅行 範人

本名はハント・ゴートレック。妖夢と相思相愛。背中がうまく再生せず、一部が透けているため、包帯を巻いている。種族は生物兵器。複数の変異形態があり、一章では黒い甲殻に覆われ、炎を使用する形態になった。この形態での炎はテーベロニカウイルスが特殊な変異をしたために使えるようになっている。通常では、血が発火することはない。体内のウイルスはすべてが既に消滅している。使用されたウイルスは、テーベロニカウイルスとCウイルスであると考えられる。

第二章 咲かない桜と長い冬

第二十八話 化け物

「う、うう……。」

ふああ、眠い。もう朝か。窓から日の光が差し込んでいる。ここは……別館の二階か。うーん、この部屋まで来た記憶がないんだが。なんで、この部屋で寝ているんだ？

「うーん、範人……。」

「……お兄様……むにやむにや。」

「!??!」

なんだこの状況は。妖夢とフランに左右から抱きつかれている。昨日の夜に何があつたんだ？確か、三人で弾幕勝負を止めたところまでは記憶があるんだけど。うーむ、わからん。

「おはようー！範人。」

「うわ!??!……って、姉さんか。おはよう。朝から驚かさないでくれ。」

姉さんがスキマから飛び出してきた。びっくりしたー。朝だから余計に驚いた。

「どう、目が覚めたでしょ?」

「ああ、うん。ありがとう。」

覚めたよ。てか、覚めすぎだよ。朝からいきなり驚かすって、俺の心臓が止まりかけたよ。目が覚めるだけじゃなく、ショックで死にかけたよ。

「で、なんでこんな状況になっているんだ?」

「ああー、それはねー。」

姉さんの話によると、三人で弾幕勝負の沈静化の後に疲労で倒れたらしい。三人で寝ている理由は、宴会のときの話を聞いていたから姉さんがここへ運んだ結果らしい。

「じゃ、私は帰るわね。」

姉さんはスキマの中に戻っていった。よかったー、俺が部屋に連れ

込んだとかじゃなくて。

「うーん……あつ、おはようございます。」

「お兄様、おはよう。」

「おはよう、二人とも。」

さーて、どうしたものか？ひとまず、朝食でも作ってくるかな。

「二人とも、離してくれ。朝食を作ってくる。」

妖夢はすんなり離してくれた。しかし、フランが離れてくれない。

「あの一、フラン。離してくれないかな？」

「嫌だ。お兄様といっしょがいい。」

レミリア、頼む。フランをどうにかしてくれ。まあ、念じてもどうにもならないことはわかっているんだが。

「仕方ないな。おんぶしてやるから、背中にしっかりとしがみつけどよ。」

「わーい。」

はあ、しばらくフランといっしょなのか。あれ？ということとは、ほぼぼとおんぶか？まあ、気にしても仕方ない。我慢しよう。着替えのときぐらいは降りてくれるだろう。

朝食を済ませると妖夢は白玉楼に帰った。俺は今日何をするかについて考える。そういえば、明後日に寺子屋に通っている子達が社会科見学に来るんだったな。寺子屋に行って、その後は人里で何かすることにしよう。

「フラン。俺は人里に行くけど、ついてくるか？」

「行く行く。」

「じゃあ、早速だが薬の出番だ。頭から被れ。」

「はい。」

フランは薬品を頭の上から被る。すると、フランの身体を粒子が覆った。これで外に出ても大丈夫だ。

「じゃあ、出発しようか。」

俺とフランは人里に向かって飛び立った。

少年、少女移動中

人里に着いたらすぐに寺子屋に向かう。フランが肩車をせがんできたため、今は肩車をしている。そんな時に妹紅に出会った。

「範人じゃないか。その子は誰だ？」

「フランだよ。よろしくね。」

「ああ、よろしく。私は藤原　　妹紅だ。そういえば、新聞見たぞ。お前って本当は化け物だったんだな。」

「妹紅、完全に人間じゃないことを気にしているんだからその言い方はやめてくれ。」

「おっと、それは悪かったな。」

「わかってくればいいんだ。ところで何故人々は俺の方を見ているんだ？」

先程から気になっていたが、人々がすれ違う度にこちらをちらちら見てくるのだ。フランを肩車しているせいだろうか？

「それは新聞の影響だ。人々はお前のことを少し恐れている。」

「そんなことかよ。まったく、敵以外には攻撃しないってのに。」

「気にするな。すぐにみんなもわかってくれる。」

「妹紅がそう言うなら、そうなんだろうな。じゃ、俺は寺子屋に行つてくるから。」

「おう、またな。」

俺は手を振って応え、寺子屋の中に入った。

「おーい、来たぞー。」

「おお、範人か。久しぶりだな。何の用だ？」

慧音が出迎えてくれた。

「チルノが社会科見学について知らせてくれてな。それについて話をしに来たんだ。」

「なるほどな。その女の子は誰だ。」

「フランだよー。よろしく。」

「そうか。私はこの寺子屋で教師をしている上白沢　　慧音だ。よろしくな。」

「話なんだが、慧音だけじゃなくて子供達にも聞いてもらいたいんだ。」

注意事項だからな。」

「わかった。じゃあ、教室に行こうか。」

教室に入ると子供達は俺に怯えていた。ひどいもんだ。新聞の記事だけでこんなに反応が変わってしまう。前の授業の時は俺のことを頼ってくれていたのに。

「これから、範人が社会科見学について説明してくれる。よく聞くように。」

「今から話すことは注意事項だ。社会科見学で行く研究所はかなり気持ち悪い実験が行われていた。だから、人が妖怪に食べられるところを想像しても平気なら来てくれ。途中の場所までなら特に問題は無いんだが、実験の資料を見る場合は今言ったくらい覚悟が必要だ。話は以上だ。」

俺が注意事項の説明を終えると一人の子供が俺に向かって悪口を言った。

「気持ち悪いんだよ、化け物が。帰れ。」

その言葉は周りの子供達に広がって、最終的には帰れコールになった。俺はとても怒れたが我慢する。だが、フランは怒りに燃えていて、今にも子供達を破壊しそうだ。

「フラン、抑えろ。こうなることくらいわかっていた。」

「でも……。」

「いいから気持ちを抑えろ。俺が黙らせるから。」

俺はフランの頭を撫でて落ち着かせる。本当は俺だってこいつらをぶつ殺したいくらいに怒れているんだ。俺は殺気を放った。場が沈黙する。

「いいか、お前ら。俺は化け物だが、敵しか攻撃しない。ましてや人間なんて、滅多なことがない限り攻撃するはずがない。人やものを見かけで判断するな。家に帰ったら、今のことを親に伝えろ。自分たちのしたことだ。わかったな。人間が最上位なんて考えは捨てろ。」

俺が口を閉じたところで慧音が口を開く。

「そうだぞ。私だって完全に人間ってわけじゃないんだ。今のはお前たちが悪い。範人に謝れ。」

『ごめんなさい。』

子供達はほぼ全員が半泣きだ。ちよつとビビらせ過ぎたかな？でも、姿だけでものを判断してはいけない。俺は正しいことを教えたはずだ。

「じゃあ、社会科見学のときは待つているからな。」

俺は教室を出て寺子屋から立ち去った。気分はあまり良くない。

俺が人里を歩いていると人々の話し声が聞こえてくる。

『漆黒の化け物ってあれじゃない？』

『嫌、怖いわ。』

『あいつは化け物だぜ。』

『あんな奴は死ねばいい。』

「……」

人々が話している化け物とは俺のことだろう。怒りが湧き上がってくる。きつとすぐに怒りの限界が来るだろう。元の世界でもそうだった。周りの奴らのほとんどは俺のことを信じていなかった。上辺だけは俺のことを信頼しているようなことを言っ、本当は俺のことを化け物扱いしていた。

「……様。……お兄様。」

「なんだ？」

「どうしたの？怖い顔していたよ。」

どうやら感情が表情にあらわれていたらしい。悪い思い出は本当に嫌なことばかりだからな。

「ああ、周りの奴らが俺を化け物だと言っていたからな。昔のことを思い出しちまった。」

「そうだったんだ。じゃあ、どうするの？」

「どうもしない。我慢するだけだ。」

それでいい。何もしなければ、誰も傷つかずに済む。あのときも俺が動かなければよかったのに……。

「何か食べたい物はあるか？」

「別に。」

「なら、昼食は俺が決めていいか？」

「いいよ。」

「そうか。なら、そのそば屋でいいかな。」

蕎麦屋に入ると幽々子と妖夢がいた。この店は大変だな。

「いらつしやい。」

「天ぷらそば二人前ね。」

「はいよー。」

注文して金を渡し、妖夢の隣の席に座る。幽々子は猛スピードで食べている。大盛りのはずなのに椀子そばのようなスピードで器が増えていく。

「範人も人里にやって来たのですか？」

「ああ、寺子屋に行ってきたんだ。妖夢は？」

「私は見ての通り、幽々子様についてきたんです。」

「お姉様の膝の上に座っていい？」

「私は食べ終わっているのでもいいですよ。」

フランは妖夢の膝の上に移動する。そこへ注文したものが運ばれてきた。

食べ終わって腹も膨れた。幽々子はまだ食べている。

「大丈夫ですか？表情が暗かったですよ。」

「里の人間が俺のことを化け物だと言ってきてな。かなり心にダメージが来ている。原因は文の新聞だと思う。」

「それはつらいですね。今度文さんに会ったら、斬っておきますね。」

妖夢、お前のその言葉は冗談に聞こえないぞ。あとその笑顔も怖い。物騒なことを言いながら笑顔になるな。

「じゃあ、俺は帰る。フランも食べ終わっただろ？」

「うん。」

「妖夢もいつしよに行行って泊まってきてもいいわよ。」

「しかし、幽々子様。今日の夕食が」

「いいのよ。ここの三十分食べ放題で食い溜めしたから。」

「あ、そうですか。」

だから、あんなに夢中になって食べていたのか。今日の幽々子は白玉楼の財布にちよつと優しい。

「範人、私もいつしよに行きます。」

「そうか。」

妖夢もいつしよに来るらしい。そういえば、妖夢との会話で心がだいぶ軽くなったな。

「妖夢、ありがとう。妖夢との会話でだいぶ立ち直れた。」

「いえ、私はただ普通に会話しただけですよ。」

「これが愛の力ってやつだね。」

「ちよ、フラン（ちゃん）!?」

フランが子供らしくないことを言った。フランってそんなに大人だったっけ? あ、俺よりも年上か。

「いいでしょー。二人は相思相愛なんだから。」

フランに言われて顔が赤くなる。さすがに自分と妖夢以外に言われると恥ずかしい。

「早く家に行くぞ。社会科学見学の準備があるからな。」

俺たちは研究所に向かって飛び立った。

思いがけないところで範人と妖夢がいつしよにいた。

「お、あれは……。いい写真が撮れたわ。ついでに取材してみよう。もしかしたら、きっかけを聞き出せるかも。」

フランもいつしよにいた。こうやって見ると親子に見える。はっ、もしかしたらフランって二人の子供!? 私は取材のために範人たちを追った。

第二十九話

掃除

「さあ、準備を始めようか。」

妖夢とフランに声をかける。妖夢の服装はいつも通りなのだが、フランは違った。

「フラン、なんだその格好は？」

「掃除の時の正装だよ。」

フランは頭に三角巾を巻き、エプロンを着ていた。アニメとかでよく見かける掃除のおばちゃんの服装である。そんなものどこから持ってきたのだろうか？まあ、気にせず始めよう。

「じゃあ、フランと妖夢は研究所一階の掃除を頼む。俺は地下の掃除をしてくる。」

「任せてください。」

「頑張るぞー。」

妖夢には研究所のことを教えてあるから分担の割合について特に怪しむ様子はなかった。この研究所は地下が圧倒的に広いのだ。ていうか、研究所＝地下。なんでかって？知らん。研究所協会にでも尋ねてください。俺は地下に向かう。

範人が地下に行った。フランちゃんは不思議そうな顔で尋ねてきた。

「お姉様、なんでお兄様は地下を選んだの？こっちのほうが楽なのに。」

「それは地下には危険なものがたくさんあるからですよ。」

「そうなの。じゃあ、私も手伝ってくる。」

「今は一階の掃除をしましょう。終わったら、地下に行ってもいいから。」

「はい。」

研究所の一階は畑になっている。そのため、掃除する場所は廊下くらいしかない。私たちは掃除をすぐに終わらせてしまった。二人で

範人が向かった地下に降りた。

「うーむ。ここの掃除も終了か。なんかやけにきれいだったな。」

地下一階から地下三階全ての掃除を終わらせた。あまり使っていないせいかゴミはかなり少なかった。昔は血で真っ赤だった部屋も、今では染みが一つもない清潔な部屋になっている。

「お兄様ー。終わったよー。」

「かなり早かったな。すごいぞ、フラン。」

俺はフランの頭を撫でる。フランは嬉しそうだ。

「妖夢もありがとな。」

「いえいえ、このくらい朝飯前ですよ。それに範人のほうがすごいです。私たちの三倍の速度で掃除をしたんですから。」

平均的に見ると一番汚れていたのは一階なんだけどな。まあ、それでもいいか。

「すごいね。地下にこんな場所があったんだ。」

「本当ですね。まさかこんなに広がったとは。」

ん？今、フランとは別の声が聞こえたぞ。しかも、今一番憎いやつの声にすごく似ていた気がするんだけど。

「文さん、なんでこんなところに!?」

「私が飛んでいると三人が飛んでいるところを見かけたので取材をしようと思ひましてね。」

文だった。新聞に何を書いたかは知らねーが、少しO☆H A☆N A☆S I☆の必要がある。

「文ア……。」ゴゴゴゴゴゴツ

「なんででしょうか？そんな怖い顔してどうしたのですか？」

「O☆H A☆N A☆S I☆しようよ。」

「あつ、これはマズイですね。さようなら。」

文が高速で逃げ出す。俺は全身を変異させて追う。炎を噴き出してスピードを上げる。研究所の庭に出たところで捕まえた。さあ、質問開始だ。

「あやや、捕まっちゃいました。私が何かしましたか？」

「いやー。俺の記事をどんな風に書いたのかなって？」

「あれですか？私は、炎纏いし漆黒の化け物の正体を書いただけですよ。」

「ほう。何か余分なことは書いていないだろうなあ？」

「書いてませんよ。」

「そうか。ならいい。」

俺は変異を解く。どうやら人里のやつらの勝手な解釈だったらしい。

「新聞に俺が危険じゃないってことを書いておいてくれ。人里でいろいろ言われたから。」

「そうでしたか。大変でしたね。いいですよ。書いておきます。」

「頼んだよ。」

文は猛スピードで飛んでいった。文がいなくなってから妖夢たちが走ってきた。

「範人、速いですよ。文さんは？」

「逃がしてやった。人里の人々の勝手な解釈だったらしい。」

「そうですか。」

俺の勘違いで文を傷つけなくてよかった。ここでぶちのめしていたら本当に化け物だからな。

(時間を飛ばします。)

さて、風呂に入るか。今日は一人でゆったりできる。妖夢は幽々子が心配ってことで帰った。身体を洗い湯舟に浸かる。疲れが抜けていくような気がする。

「お兄様！」

突然、風呂の扉が開いた。なんでフランが来るんだよ。リビングで待っていると言ったはずだ。しかも、なんか服脱いでるし。

「フランもいつしよに入る。」

いや、ちよつと待て。吸血鬼って水ダメなんだから。なんでこいつは入ってこようとしているんだ？……あ、俺が渡した薬だ。あれで水が

平気なんだ。ああ、水の弱点は消さなきゃよかった。

「ち、ちよつと待ってろ。」

俺は急いでタオルを巻く。もちろん、傷は隠す。ダメだと言っても絶対に言うこと聞かないだろ。もう諦めるよ。

「ほら、入っていいぞ。」

「ウエイイ。」

「こら、ダイブするな。」

水しぶきが上がる。扉を急いで閉めたから、脱衣所は濡れてないだろう。

「お兄様ー、体洗ってー。」

はい、出ました。思った通りの展開だよ。逃げ場なんてどこにもないよ。まあ、ダメもとで断ってみよう。

「なんで俺が洗うんだよ。タオル貸すから自分で洗えよ。」

「えー、なんでー。お姉様の体は洗ったのになんで私の体は洗ってくれないのー。」

妖夢、余計なこと言ったな。これじゃ本当に避けられないよ。

「それとも、私のこと嫌いなのか？」

はい、最強の言葉。俺の負けだ。この言葉には勝てません。泣けるぜ。

「わかった。洗うから涙目になるな。」

神よ、こんな俺を許してくれ。異性の体を洗うことになってしまったこの俺を。俺は大急ぎでフランの体を洗う。え？身体の表面を覆っている粒子はどうなるか？この粒子は光の粒子と電子と陽子だから、物体の影響はあまり受けずにとどまる。電子と陽子は俺が無理やりとどませているけど。

「はあ、終わったぞ。流すからな。」

シャワーで石鹼を流す。この石鹼は俺が作った特殊なもので薬の影響は受けない。

「ふー、身体を洗うのって気持ち良いんだね。」

フランは気持ち良かったとしても、俺からすればスゲー疲れたんだけど。精神的にすごく疲れた。せつかく、ゆったりとしていたのに

……。疲れが減るどころか逆に増えた。

やはり、寝るときもいっしょらしい。今、フランは俺の隣に寝転がっている。

「ねえ、お兄様。」

「ん？」

「レミリアお姉様って私のこと、どう思っているのかな？」

「家族として愛しているんじゃないのか。」

「そうなのかな？ 私は地下にずっと閉じ込められていたんだけど。」

「それはフランのことを思っただろ。」

「違う。ソんなはずはない。オ姉様はワたしのコトガ嫌いダツたノヨ。」

「危ない。」

俺はフランを抱きしめる。狂気から救い出すにはこれが一番効果的だ。フランの狂気が落ち着く。

「フランは誰かを傷つけることを嫌っていた。レミリアはフランが誰かを傷つけることによつて、フランが傷つくことを防ぐためにそうしたんだ。」

「そうなの？」

「そのはずだ。それにフランを嫌いになるはずがない。フランとレミリアは家族だろ。」

「うん。そうだよね。お兄様、ありがとう。」

フランは一番の笑顔を見せてくれた。フランの狂気は完全に消えたようだ。でも、また現れる可能性がある。フランはレミリアと話す必要があるだろう。

「フラン、今度レミリアとそのことについて話してみろ。きっと、納得のいく答えが見つかる。」

「うん。そうしてみる。」

俺はまた自分以外の力になれたようだ。それがたまらなく嬉しい。

「お兄様って、ジェイドに似ているね。」

「前から気になっていたんだけど、そのジェイドってお前たちとどん

な関係なんだ？」

「家族だよ。」

「は!?!?家族?」

俺にはその言葉がよくわからなかった。家族の意味くらいはわかる。だが、何故フランたちが家族なのだろうか？

「ジェイドとレミリアお姉様は夫婦なの。つまり、ジェイドは私の義兄様。」

「あつ、そうだったのか。」

レミリアが既婚者ということには驚いたが、彼女も吸血鬼。かなりの年月を生きているのだから、結婚していてもおかしくない。

「でも、今は生きているかもわからないの。」

「それは心配だな。」

「全然。心配なんてしてないよ。」

「心配してないだ?!?!?なんでだ?」

「だって、家族だもん。絶対に生きてるって信じているから。」

「そうか。なら、きつとまた会えるだろうな。さて、そろそろ寝ようか。」

「そうだね。お兄様。」

……家族……か。

『幻想郷でまた会おうぜ!』

俺は兄弟の顔を思い出しながら、眠りに落ちた。

第三十話

生物兵器の脅威

俺は今、人里に向かっている。寺子屋の生徒に謝るためである。さすがに昨日は怒り過ぎた。あれだけの殺気を出したのだ。子供達も怖かっただろう。俺からすれば全然少ない殺気だったけどね。さて、そろそろ人里か。

人里に降りて、寺子屋に向かう。人々が落ち着いていないような気がする。ただ、俺が原因ではないようだ。何かあったのだろうか？

「おーい、範人ー。」

寺子屋に着かないうちに慧音に会った。妹紅もいつしよだ。人々も集まってきた。

「何かあったのか？」

「何かあったのか？じゃねえよ。この化け物が！」

一人の男が俺に向かって怒鳴る。本当に何かあったんだよ。一人の女が泣きながらに言う。

「お前のせいでうちの子供が……死ねえー。」

『そうだ。殺しちまえー！』

人々は包丁や槍など様々な凶器を構えて突っ込んできた。俺は驚き、躲すことができなかった。全身に凶器が突き刺さり、傷口から血が流れ出す。

「何すんだ、テメエら！」

俺は攻撃してきた人々を殺気を放って引き離す。全身に刺さった凶器を抜きながら訊く。

「本当に何かあったんだ？お前らおかしいぞ！」

「黙れ、化け物！お前がうちの子供をさらったんだ！」

「は？何言ってるんだ？俺がそんなことするはずがないだろ。そもそも、そんなこと知らねーよ。」

「うるさい！お前がさらったことはわかっているんだ！」

もう何がなんだかわからない。なんで俺がそいつをさらったことになってるんだ？

「待て。範人は知らないと言っている。一旦、落ち着け。」

「チツ、先生がそう言うなら仕方ないな。」

やっと落ち着いたようだ。本当に危ないところだったよ。あれ以上攻撃してきたら、間違いなく皆殺しにしていた。

「で、何が起きた？」

「昨日、範人を化け物だと言った子供がいたな？」

「ああ、いたな。」

おそらく、あの悪口を言った男の子のことだろう。

「実はその子が何者かにさらわれたんだ。」

「なるほどな。それで俺が復讐のためにさらったと？」

「そういうことだ。何か知らないか？」

「あいにくだが、何も知らん。」

「そうか。範人は何も知らないらしいぞ。お前たちも少し頭を冷やせ。」

『……』

人々は黙っている。反省はしているみたいだ。こんなことをしたやつにはお仕置きが必要だな。

「何か手がかりはないのか？」

「手助けしてくれるのか？」

「ああ、俺をこんなことにしてくれた原因がさらったやつだからな。お仕置きしないと気がすまない。」

「そうか。じゃあ、ついてきてくれ。」

慧音について行くと二つの大きな足跡と多くの小さな足跡が残っていた。

「手がかりはこれだけか？」

「そうなんだ。これだけしかわかっていない。……どうしたんだ？ 深刻そうな顔して。」

「ああ、これはかなりやばいかもしれない。」

俺はそれらの足跡を見てある生物兵器の姿が思い浮かんだ。俺の勘が正しければ、これは相当まずい。

「……慧音。」

「何だ？」

「人里の人々にいちおうだが警戒態勢を整えさせろ。」

「なんでだ？」

「いいから頼む。俺は犯人を殺す。」

「わ、わかった。すぐに伝える。」

慧音は急いで人里へ戻っていった。

「フラン。」

「なーに、お兄様？」

スキマが開き、フランが顔を出す。今日はスキマに入ってみたかったらしい。

「これから生物兵器の討伐に向かう。フランも手伝ってくれ。」

「いいよ。ちょうど、遊んでみたかったし。」

「今回は敵を壊してもいいからな。」

「本当にいいの？」

「ああ。今回は壊しても悲しむやつはいないし、悲しむ必要もからな。」

「ありがとう。少し壊したくなっていたの。お兄様が悪口を言われてイライラしていたから。」

「行くぞ。」

「うん。」

俺とフランは足跡を追って飛び始めた。

私は疑問に思っていた。あの時の範人はイライラして焦っていた。そして、私に命令したときはとても怖い表情だった。犯人はそんなにやばいやつなのだろうか？

「みんな、人里に広めろ。警戒態勢を整えて、家の中に避難してくれ。」

人々は戸惑いながらも指示に従ってくれた。店が閉まり、人々は家の中にこもった。妹紅が尋ねてくる。

「慧音、どうしたんだ？」

「わからん。でも、範人が警戒態勢を整えろと言っていた。」

「そうか。それなら、私たちも行こう。」

「ああ、最初からそのつもりだ。行こう。」

私たちは足跡を追った。範人のあの表情はいつたいたいどうしたんだろうか？ 範人はとてつもなく強いはずなのに……。

ここは森にある洞窟の中。人里にはうまく手がかりを残せた。あの化け物ならすぐに気づいて追ってくるだろう。私は生物兵器の頭を撫でながら言う。

「ふふ、よくできたわね。えらいわ。」

「グルルルウ〜♪」

ゴリラに似たその生物兵器は嬉しそうに唸った。さすがステインガールの毒だ。うまく改造したため素晴らしい幻惑薬になった。暴走していたこいつも今はとても忠実な部下だ。

「さて、あの男の子はどうしようかしら？」

「ん〜、ん〜。」

私は猿ぐつわをはめた子供のほうを見る。殺す気はないけど少し痛めつけておこうかしら？ 私は猿ぐつわを外す。

「グルルルア〜。」

「ヒイイ〜！」

「静かにしなさい。」

男の子に威嚇をしていたため、生物兵器を黙らせる。生物兵器はすぐに黙った、やはりこいつは操りやすい。

「ごめんなさいね。彼は少し気が立っているの。」

「黙れ！ お前なんか、怖くないやい！」

「ほう。威勢がいいわね。これならどうかしら？」

私は腕から刃物を出す。男の子の顔が青くなる。

「……………」

「どうしたのかしら？ 怖くて声も出ないの？」

「う、うるさい！ 怖くないって言っただろ！ お前も化け物だったのか

「？」

「あら、やっと気づいたのかしら？そうよ。私も化け物なの。」

身体から武器を出すことくらい、私にとっては大して難しいことではない。このくらいで化け物なんてね。私は男の子に猿ぐつわをまたはめた。

「ハント、あなたがどれほど強くなっているかが楽しみよ。……………」
必ず、私のものにしてあげる。」

あの生物兵器の力は私のものだ。誰にも渡さない。いつか手に入れた、私が全世界の支配者になる。

「さて、あなたはここにいてね。私は帰るから。ハントが来たらお相手してあげるのよ。じゃあね。」

「グルル。」

スキマを開き、私はその場を立ち去った。十八年前に取り込んだこの力も使いやすい。外にはハンターを大量に放っておいた。舞台は既に整っている。

「どんな楽しい戦いになるのかしらね。」

第三十一話

ハンターの森

足跡は森の中につながっていた。これでは空を飛んで追跡することができない。歩いて森の中を追跡するしかないだろう。俺とフランは地面に降りた。

「フラン、森の中を進むから、迷子になるなよ。」

「お兄様こそ。」

俺たちは森の中に入った。あいつは絶対に救い出す。

森に入って数分。俺は自分たちを観察する視線に気を配っていた。森に入った瞬間からずっと見張られている。

「お兄様。」

「ああ、何かいるな。」

フランも視線に気づいたらしい。突然、木の上から大きな緑色の生物が落ちてきた。

「ギエアー！」

そいつはかつてミツションでも何回か見かけたことのある生物兵器、ハンターだった。

ハンターはテーウィルスの力で人間とトカゲの遺伝子を合わせて作り出された生物兵器である。生物兵器としてはかなり成功の部類に当たり、今では多くの品種が作られている。見た目は尻尾が短く大きな爪を生やした二本足で立つ全身緑色をした大きなトカゲである。このハンターは見た感じ原種に近いようだ。

ハンターはこちらを爪で切り裂こうと飛びかかってきた。「遅い。」

俺はハンターの攻撃を躲し、変異した腕をハンターの頭に降り下ろした。グシャリという湿った音を立ててハンターの頭が潰れた。ハンターの身体が落ちた場所にはハンターの形をした穴ができた。フランはそれを見て気分が悪くなってしまったようだ。

「お兄様、スキマの中に入っただけでもいい?」

「戦いたくないならそうしろ。フランに死んでもらいたくない。」

「じゃあ、スキマの中にいるね。」

フランはそう言つて俺が開いたスキマに入った。フランが見えなくなつてからハンターたちに声をかける。

「さて、まだいるんだろ。まとめてかかつてこいよ。」

『ギエオアー！ギエオアー！』

周りのあちらこちらからハンターの声が聞こえて、大量のハンターが飛びかかつてきた。

俺は全身を変異させる。ハンターたちは俺の身体に爪を降り下ろすが強固な甲殻によつて弾き返される。俺は身体を高速回転させてハンターたちを弾き飛ばす。

『グギャア。』

ハンターたちは吹き飛び、悲鳴をあげる。しかし、起き上がるとまた飛びかかつてきた。今度は一頭ずつにパンチを加えていく。ハンターたちはそれぞれ一撃で絶命した。このハンターたちはウイルスは保有していないようだ。死んだ瞬間から身体が溶けて消えていく。珍しく優しい改造がしてある。

「まだ居そうだな。もう少し探そう。」

ハンターにはいろんな種類がいる。そのため複数の種類のハンターが同時に同じ場所に放たれることが多いのだ。

しばらく歩いてしていると風を切る音が聞こえたため、後ろに跳ぶ。鋭い何か掠め頬が切れて血が流れた。

「何だ？」

粒子を周りに漂わせるとハンターたちの姿が浮かび上がった。目には見えない。インビジブルだ。ハンターたちは気づかれていることも知らずに飛びかかってきた。脚を変異させて、顔面にキックを打ち込む。キックが当たり、ハンターたちの姿が一瞬だけ見えた。体色は黒っぽかった。おそらくヴェルトロの作った新型だろう。名前は確か……ファルフアレロ口だったはずだ。

「また面倒くさい生物兵器だ。」

俺はまた全身を変異させて鎌を構える。ハンターの動きは漂う粒

子の動きから読み取る。

「！、そこだ。」

今度はより殺傷力のある鎌で攻撃する。鎌はハンターの身体をきれいに両断し、周りに血が飛び散った。血が付いたことにより、インビブルをしてもハンターの位置がわかるようになった。身体をスピンさせながらハンターたちに突っ込むとハンターたちは細切れになった。思った通り、数種類のハンターがいた。

「よし、ハンターの駆除は完了だ。後は子供とあいつか。」

正直、戦いたくない。あいつは強いから普段の戦いよりも疲れる。ただ、子供を助けないわけにはいかないとため足跡を追う。

足跡を辿っていくと洞窟を発見した。子供はこの中に閉じ込められているのだろう。子供の血の匂いがしないため無事なようだ。中を見ると、洞窟はあまり広くなく子供もすぐに見つかった。

「大丈夫か？」

猿ぐつわを外し、縄を解きながら尋ねる。子供は俺が助けに来たことに驚いているようだ。

「なんで範人が助けに来たんだよ！俺はお前にひどいことを言ったんだぞ。」

「もう怒ってねーよ。人里のみんなにとつて、お前は大切な存在だからな。みんな心配していたぞ。まったく、迷惑かけやがって。」

俺が縄を解き終わると、子供は安心したのか泣き出してしまった。

「うわああ。怖がっだー！」

「お前は早く人里に帰れ。みんなが待っているぞ。フラン。」

スキマからフランを呼び出す。

「なーに？」

「その子と一緒に人里に行け。俺も少ししたら行く。」

「わかったよ。一緒に帰ろ？」

「グスツ、うん。ありがとう。」

子供は足跡を辿って、走っていった。子供のほうはもう大丈夫だろう。俺は洞窟の奥に目を向ける。

そこにはゴリラに似た生物兵器がいた。背中には多数の触手、四本の巨大な爪の付いた太い腕、尻尾のように身体から伸びた背骨、青い身体。俺の思っていた通りの生物兵器だ。

「さて、なんでこんなことをしたかは知らないが、ここでお前を処分する。」

「ゴアアアア―！」

その生物兵器の名はテイロス。テイロスは雄叫びを上げ、殴りかかってきた。

第三十二話

天獄

テイロス。

アンブレラのDr.セルゲイの作り出した生物兵器。アンブレラの生物兵器の最高傑作であるタイラントを基に作り出された。テイロスはタイラントよりも巨大な体躯を持ち、タイラントの怪力とコンピュータ制御による正確さを併せ持つ。俺の知る限りでは、アンブレラの最後の製品である。

今のこいつはコンピュータにつながっていない。タイラントシリーズでいうところのリミッター解除、スーパー化している状態だ。俺は全身を変異させてパンチで迎え撃つ。テイロスは生物兵器として俺の中では最高クラスの部類に入るため手を抜くことは少ししかできない。

肘から炎を噴射してパンチの威力を上げる。拳と拳がぶつかり合った瞬間に衝撃波が発生し、洞窟全体が揺れた。さすがの怪力である。だが、それでは俺のパンチに押勝ことはできない。

俺のパンチはテイロスのパンチを押し返し、腕を弾き飛ばすとテイロスの顔面に直撃した。

テイロスは吹っ飛び、洞窟の壁に激突した。しかし、テイロスは顔面以外ほぼ無傷で起き上がった。顔は凹んでいる。

「グガアアア……」

テイロスは怒りの雄叫びを上げた。今度は背中の触手を伸ばして攻撃してきた。俺は肩の鎌ですべてをさばく。

思っていたより攻撃の数が少ない。俺が違和感に気づいた瞬間に地面から触手が飛び出してきた。

触手は顎に当たった。俺は殴り飛ばされ、背中から地面に激突した。ダメージはあまりないがすごい衝撃である。脳が揺れて、意識がとびかける。

「グウツ。」

俺は胸にある甲殻の隙間に炎を集める。テイロスが突進してきたところに特大の拡散火炎弾を撃つ。

「爆散『ブレイズグレネード』」

弾はテイロスにぶつかりと爆発した。弾が爆発すると弾の中からまた弾が出てきた。爆発して拡散する弾幕。衝突からの爆発と分裂を繰り返してテイロスは炎に包まれた。

さすがのテイロスもかなりのダメージが入ったようで動きが遅くなる。俺はさらに連続キックを打ち込んで最後の1撃で吹っ飛ばした。

吹っ飛ばされたテイロスは頭から壁にぶつかりと沈黙した。首が折れている。

「よし、処分完了。」

俺は洞窟の出口に向かう。出口からもう一度テイロスを見るとテイロスの身体が突然発火した。火が消えると緑色をした不気味な蛹があり、テイロスを包み込んでいた。

「これは……Cウイルス!?」

高熱の体温による発火と蛹、これらはCウイルスの特徴だ。ありえない。テイロスにCウイルスは使用されていないはずだ。改造を施したとしてもそこまでうまく適応するのだろうか？

「また、面倒くさい改造をしゃがって。」

俺は身構える。蛹から新たに生まれた生物兵器は蛹になる前よりも強くなる。蛹の背に亀裂が入った。殻が割れ、テイロスが生まれ変わって出てきた。背中に生えていた触手は強大なものになり数が増え、手の平には口のような器官ができています。さらに背骨が脚のようになり、四つに分かれてそれで立っている。

「君、かなりイメチェンしたね。」

生まれ変わったテイロスが殴りかかってきた。脚の本数が増えたことにより、先程よりも威力のあるパンチを放ってくる。俺はそのパンチをパンチで受ける。すると、接近した状態で触手での攻撃もしてきた。

こちらのほうがスピードがあるといっても攻撃の数はテイロスのほうが多いし、パワーも上がっている。俺はだんだんと押されてきた。さすがはアンブレラの最後の製品だ。俺はついに触手に掴まれ

た。

四肢を掴まれ身動きがとれない。掴まれているため粒子化もできない。テイロスは四肢を別々の方向へ引っ張る。ギチギチという音を立てて筋繊維がちぎれていく。

「グアアアー！」

痛みに耐えられず俺は声を上げた。ついに腕と脚が全てもげた。傷口から大量の血が噴き出す。テイロスは四肢がなくなった俺を地面に何度も叩きつけた。全身の骨が粉碎しそうだ。テイロスは二十回ほど叩きつけてから俺を投げ飛ばした。

投げ飛ばしてもらえて助かった。空中で四肢が再生する。うまく受け身を取り地面に着地する。こいつはもう許さない。絶対に殺す。人が少し手を抜いていたら調子に乗りやがって。

俺はテイロスに高速で突っ込み、火炎を纏ったパンチをする。速すぎる攻撃は相手を吹っ飛ばす前に当たる。百発ほど打ち込んだらうか、テイロスはその衝撃に耐えられずに吹っ飛んだ。さらに先回りをしてキックを入れる。サッカーで言うところのトラップだ。

「昇拳『ライジング・レイブ』」

テイロスの動きが止まったところで最大の火炎を纏ったアツパー五十発を100ミリ秒で打ち込む。テイロスは洞窟の天井を貫通して上空に飛んでいった。

テイロスは飛ぶことができない。つまり、空中で身動きを取ることができないため、このまま最大の火炎技でトドメを刺す。

「天獄『ヘブンズ・ヘル・ファイア』」

テイロスの上下から特大の火柱を発生させる。さらに動けないテイロスに向けて、火炎のビームとグレネードの弾幕を放つ。もちろん殺傷力は抑えていない。テイロスの身体はビームで穴があき、爆発も受けてポロポロになった状態のまま燃え上がり、空中で消滅した。

俺は地面に着地し、変異を解く。さすがに疲れた。早く人里に行って報告をしよう。さっさと帰って休みたい。

慧音と妹紅がこちらへ来た。二人ともかなり焦っている。

「おい、大丈夫か？」

「疲れたけど大丈夫だ。ひとまず犯人は倒した。炎で燃え尽きたからもういないけどな。」

「そうか。無事で良かった。人里に戻ろう。」

「ああ。」

俺たちは人里に向かった。

人里に戻ると人々が出迎えてくれた。男の子のことが心配だったのだろう。チルノたちもいる。全員が笑っていることからすると、俺の疑いは晴れたようだ。男の子の親がお礼をする。

「うちの子供をありがとうございます。」

「まあ、無事で良かった。」

正直もう面倒くさかった。早く帰りたい。次は人々の代表が謝ってきた。

「すまない。みんなであんたを疑っちまった。」

「それはもういいんだ。ところで新聞にはなんて書いてあったんだ？」

今もまだ少し怒れるが誤解は解けたようなのでもう許す。それよりも新聞に何て書いてあったかが気になる。

「確か……凶悪な化け物って書いてあったな。」

文はもうマジで許さん。次会ったときは問答無用でお仕置きだ。今度は助けた男の子がお礼を言う。

「範人、ありがとう。」

「どういたしまして。今の俺をどう思う？」

「あんな化け物を倒したなんてすごいな。範人は化け物でも良い化け物だね。」

あ、化け物ってのは変わらないのか。まあ、ただの化け物から良い化け物にランクアップした分まだマシなんだろうな。

「じゃあ、俺は帰る。寺子屋の生徒たちは明日の社会科見学に是非来てくれ。今日のことについても話そうと思う。」

帰ろうとする俺を人々が止める。

「待つてください。お礼はどうしたら?」

「俺たちもだ。どう謝罪すればいい?」

正直、お礼なんてどうでもいい。早く帰ってシャワーでも浴びて休みたい。

「じゃあ、俺を人の仲間にしてくれるか?俺を人間として見てもらいたい。」

「そんなんでいいのか?」

「ああ、化け物としてではなく、人間として見てくれ。」

「わかった。今日はありがとな。」

「じゃあな。」

俺とフランは家に向かった。

次の日の文々。新聞には「漆黒の化け物が子供を救う。」という記事が掲載された。その新聞の筆者である鴉天狗は一週間の間、全身大火傷で寝込んでいたらしいが……。

第三十三話

社会科見学

暑い。とにかく暑い。気温は三十二度。九時の時点でこんなに暑いのだから午後はもつとやばいだろう。今日は社会科見学で寺子屋の生徒たちが研究所に来る。冷房をかけなければ絶対に誰かが熱中症で倒れる。リビングと研究所の冷房のスイッチを入れる。

「お兄様ー、暑いー。」

「すぐ涼しくなるからもう少し我慢しろ。」

俺とフランはリビングで倒れている。今、上半身には包帯以外何も身に着けていない。ジーンズはしっかり履いている。十時になれば、子供たちが来るのだから早く準備をしなければならない。

「ああ、涼しい。」

「さて、着替えないと。」

俺は白衣を着る。暑すぎて、もうシャツなんて着れない。白衣の前をはだけているため、胸元の包帯が見える。俺が美女だったら、世の男たちは歓喜するだろう。

「お兄様ー、フランにも白衣ちよーだい。」

「はいよー。」

クローゼットの中に子供のころに着ていた白衣があつた。それをフランに渡す。それを着たフランの姿は……うん、超可愛いかった。なんて言えばいいのかな？守りたくなるっていう感じだった。もちろん俺はロリコンではないし、一番は妖夢だ。

「似合うかな？」

「似合っていると思う。」

これでひとまず準備はできた。そろそろ研究所の中も涼しくなっているはずだ。

コンコンツ

「おーい、来たぞー。」

どうやら慧音と子供たちが来たらしい。俺とフランはドアを開け、庭に出た。子供たちのほとんどが暑さでぐったりしている。これはマズイ。チルノにいたっては解け始めている。

「早く研究所の中に入れ。熱中症になる。」

「まずは話を」

「話の中にする。倒れられたら大変だ。」

「わかった。研究所の中に入れ。」

子供たちは研究所の中にかけていく。俺も急いで研究所に入った。自分の炎は平気でも自然の熱には耐えられない。

チルノの身体が元に戻っていく。他の子供たちも気持ち良さそうにしている。

「じゃあ、説明をする。この研究所は元は生物研究所だ。今の設備を観ることは別に自由にしていい。ただし、危険だから機材には触るなよ。あと、かつての資料を読みたい場合は俺に言ってくれ。気持ち悪いことは覚悟の上でな。」

『はい。』

「じゃあ、後は自由だ。慧音の指示に従ってくれ。」

「よし、じゃあ、後は各自で自由に見学してくれ。」

子供たちは行動を開始した。俺も所内を散策しようと思ったがチルノたちに捕まった。驚くことに頼んできたのは大妖精だった。

「範人さん、案内をしてもらえないでしょうか？」

「構わないぞ。どこを見学したい？」

「じゃあ、アタイからだね。魚を見たい。」

「了解だ。地下三階の養殖場に行こうか。」

俺たちは研究所地下三階、養殖フロアに向かった。

養殖フロアではたくさんの種類の魚介類が養殖されている。ここでは水槽を横から見ることでもできる。チルノたちは泳ぐ魚をいつもとは違う角度から見ることでできてはしゃいでいる。

「わー、あれはなんて魚なのだー？」

「あれは鯖だね。海に生息する魚で焼き魚にしても煮物にしても美味しい魚だよ。」

「そーなのかい。初めて見る魚だったのだー。」

「幻想郷には海がないですからね。」

「ほう、そうだったのか。なるほど、人里の店で海水魚が売られていないわけだ。」

人里で売られていたのは鯉や鮎などの淡水魚ばかりだった。でも、まさか海がないという考えはなかった。

「うおー、そののでかいやつ、アタイと勝負しろー！」

チルノは鮫に喧嘩を売っている。鮫が喧嘩を買うはずがないだろうに……。あいつはバカだ。それに勝てることくらいわかりきっているはずだ。

「はっはっはー。さてはアタイが強いつてことに気づいて怖気づいたな。アタイったらサイキョーね。」

しかも、何か勝手に勝ったことにしている。まあ、いいんだけど。「範人、かつての資料を見せてくれないかな？」

そうやってきたのはリグルだった。よくシヨタに間違えられるがリグルはれつきとした女の子だ。なんで資料を見たくなったのだろうか、不思議だ。

「いいけど。なんでだ？」

「ここには虫がないけど、資料になら虫のことが書いてあるんじゃないかなって。」

「ああ、なるほどな。わかった。みんなもついてこい。資料室に案内する。」

俺は移動しながら所内にアナウンスを流す。

『これから俺は資料室に移動する。過去の資料を見たい人たちは資料室に来てくれ。』

資料室には元いた世界のほとんどの生物の資料がある。哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、植物、菌類など様々な生物の資料がある。

「虫の資料はどれ？」

「ここからここまでだな。自由に見てくれ。」

「ありがとう。」

資料を読み始めるとチルノたちのテンションが上がり、俺もいつしよに資料を閲覧する。ここの資料は本当に優秀だ。

しばらくすると全員が集まった。そろそろ生物兵器について教えてもいいだろう。

「全員集まったから、この際に生物兵器について教えようと思う。」

みんなが知っている通り俺は生物兵器だ。俺のいた世界で生物兵器は『B・O・W』、『バイオ・オーガニック・ウエポン』と呼ばれていた。一般的に生物兵器つてのは戦いの道具にするために改造された生物のことを示すんだ。それ以外にも元々戦いに使用できる生物のこととかもだ。

俺はとあるウイルスといっしよに多くの種類の生物の遺伝子を身体に打ち込まれた。そのせいで炎を出したり、身体の見え目が変化したりする。

さつき、戦いのための改造と言ったけど、俺の場合は怪我の治療としての改造だ。だから、俺の身体能力は戦いに向いていても俺自身を人を攻撃することはほとんどない。凶暴性が増す改造なんて施されていないから安心してくれ。」

俺は自分のことについて話し終えた。子供たちが興味深々といった様子でまじめに聴いてくれて良かった。昨日、洞窟に捕まっていた男の子が質問してくる。

「僕が昨日捕まったときにいたやつもその生物兵器なのか？」

「その通り。あれはティロスという名前の付いた生物兵器だ。人間を基にしてウイルスで強化した生物兵器だ。」

何故ティロスが幻想郷にいたのかわからない。そもそも、ティロスはまだ量産されていないはずだ。誰かがこちらに持ち込んだのだろうか？

「生物兵器の資料見せてよ。」

チルノからの要求。生物兵器の資料には読んで吐き気をもよおすような内容が含まれているため気をつけてもらおう。

「わかった。これが生物兵器の資料だ。読みたいやつはここに残って

くれ。血が苦手なやつは自由にしてくれ。」

残ったのはチルノ、リグル、ミスティア、ルーミア、昨日の男の子だけだ。俺は資料を開く。

「まず、これが君をさらったやつだ。」

「うん。こんなやつだった。」

「うわっ、何これ!?!?」

「すごい見た目だね。」

「こんなやつアタイにかかれば楽勝だよ。」

「こんなやつがいるのかー。食べても美味しくなさそうなのだー。」

みんなの反応はだいたい驚きだった。二名ほどおかしいのがいる。チルノは何を考えたのか知らないが絶対に勝てないと思う。ルーミアにいたっては美味い不味いという考えになっている。

「まあ、後は自由に読んでくれ。」

部屋を出た後にチルノたちの声が完全に聞こえなくなったけど、気にしないようにした。

社会科学見学も終わり子供たちが集まった。チルノたちの顔には表情がなかった。きつと、かなりショックの強いやつの資料を見たのだろう。キメラとかりサ・トレヴァーあたりかな?

「今日はありがとな。みんなも範人にお礼をしなさい。」

『ありがとう。』

「また資料が見たくなったらいつでも来な。」

寺子屋の生徒たちは俺にお礼を言っただけで帰っていった。これで社会科学見学は幕を閉じた。

第三十四話 二人目の門番

最近、紅魔館の主が門番を一日ごとに交代する体制をとり始めた。紅魔館の二人目の門番デューレス・タイラントは今日も門番として紅魔館を守っている。門番と言っても寝ることをせずに門の前に居ればいいだけのため、絵を描きながらの仕事だ。湖の風景はなかなか美しいため、彼はその風景を描いている。

「……はあ、今日も来たのか。」

デューレスは門の前に塀の上の空間をつなげる。すると金髪の魔法使いが現れた。不法侵入の常習犯 霧雨 魔理沙だ。

「ちくしょー。今日も捕まったか。」

「本は盗ませない。」

大柄な体格に似合う太く低い声で話す。本来、彼の声はもっと高い少年のような声で話し方も幼いのだが、この見た目と立場に合わせて声の高さ、話し方を変えている。

「盗むなんて人聞きの悪いことを言うな。私は借りているだけだぜ。」
「借りても返さないから盗むと言われるんだ。いい加減返したらどうなんだ?」

彼はあきれながら言う。魔理沙が言うことを素直に聞くはずがないのだ。

「あいにく今日は持つてきていないんだ。」

「そう言うと思った。」

「それよりも通してくれないか?」

「残念ながら、それはできない。」

「なら、弾幕勝負だ!」

彼は心の中で面倒くさいと呟く。なぜなら、魔理沙は彼に勝てたことがないのだ。何度負けても諦めずに勝負を挑んでくる。それが面倒くさいのだ。

「……はあ、仕方ない。その勝負、受けて立とう。」

「弾幕はパワーだぜ!」

言い終わるか言い終わらないかわからないうちに魔理沙が弾幕を

放つ。彼の意見を聞く気は元々なかったらしい。

「弾幕はパワーと言ってもパワーはこちらが上だ。」

デューレスはタイラント。故にパワーは鬼に匹敵、いや鬼を超えるだろう。彼は弾幕を躲しながら、パンチを打つ。拳型の弾幕が魔理沙に向かつて飛んでいく。彼はこの弾幕を飛拳と呼ぶ。連射力はあまりないが、拳の数だけ弾幕が飛ぶ。拳の衝撃が放たれるため、当たれば大ダメージだ。それでも紫に言われて威力は抑えるようにしている。

「うお、危ね。」

弾幕は魔理沙の右すれすれを通る。金色の髪が弾幕の起こした風で揺れる。初めて戦ったとき、彼女はこの拳の弾幕一発でダウンした。だから、非常に危険なのだ。

「負けられないぜ。」

魔符『スターダストレヴアリエ』

デューレスの身体は大きい。弾幕勝負において弾幕を躲すことはとても重要なことなのだが大きな身体はこの点で不利だ。魔理沙の発動したスペルカードは弾幕の数が多い。パワー重視の彼女には珍しい手数が多いタイプのスペルカードだ。だが、デューレスには当たらない。彼は身体こそ大きいものの非常に素早いのだ。

「どうした？俺みたいなかいかい的にも当たってないが？」

「そのくらい理解の上だぜ。これくらいで負けられたらこっちは困るぜ。」

避けられることくらい魔理沙も理解の上だ。これまでもこのスペルカードを使用したことが当たったことは一回しかない。これはあいさつみたいなものだ。

「こちらでも使わせていただこう。」

壊符『ハートブレイク』

魔理沙の周りを弾幕がハート型に覆う。魔理沙が包み込まれた瞬間にデューレスはパンチを打つ。拳の弾幕は彼女を覆う弾幕に当たり弾幕の包围を崩す。崩れた弾幕は彼女に向けて降り注ぐ。ハートが崩れていく様子はまさに壊れていく心だ。崩れるハートに合わせ

るように彼女のスペルカードも効果時間が切れる。

「うわ、うわわ。」

魔理沙は焦る。今までにもこのようなスペルカードを使用されたことはあるが今回の相手はデューレスなのだ。一発でも当たればダウンという怖さがあるため、焦りを感じている。しかし、きれいに躲していく。彼女は幻想郷の中でも実力者だ。心が焦っていても身体が覚えている。

「ふう、危ないところだったぜ。これは新作の出番だな。

恋符『ノンディレクショナルレーザー』」

魔理沙からレーザーが放たれる。マスタースパークよりは細い。デューレスはそれを躲すが何かがおかしい。すると、後ろからもレーザーが飛んできた。彼は宙返りで躲す。彼の周りは彼女の魔法陣やマジックアイテムで囲まれていた。

「なんだこれは!?？」

これにはさすがのデューレスも驚く。前後からの集中砲火。彼は躲そうとするが身体が大きいため掠つてしまう。直撃ではないため被弾ではないが痛みはある。

「イタタ。」

スペルカードの効果時間が切れたとき、デューレスの身体には大量の傷ができていた。全てかすり傷だが、それでも十分痛みがある。彼に少しでも弱音を吐かせたことで魔理沙が調子に乗っている。

「どんなもんだ!」

「まだ、決着がついたわけじゃない。油断しないほうがいいと前に言わなかったか?」

デューレスは激槌メテオからワイヤーを放つ。魔理沙がワイヤーを躲す。ワイヤーは遥か遠くにある大木に巻きついた。

「そんな攻撃当たらないぜ。」

「油断するなど言っただははずだ。」

デューレスは激槌メテオを投げた。魔理沙はそれも躲すがそれも彼の考えのうちだった。武器は遥か遠くへ飛んでいき、大木が武器に引っ張られてしなる。

「当たらないって言ってるだろ。」

「油断するなよ。」

ワイヤーが巻きついた木が元に戻り、その反動で激槌メテオが戻ってきた。武器は魔理沙の後頭部に直撃し、彼女は気絶した。

「だから言ったんだ、油断するなって。」

しばらくして魔理沙が復活した。

「また負けちまったぜ。」

「早く帰れ。」

「そんなこと言わずに通してくれよ。」

「お前は弾幕勝負に負けたんだ。言うこと聞いてさっさと帰ってくれ。」

弾幕勝負で負けたのだから魔理沙はデューレスの言うことを従って帰らなければならない。しかし、魔理沙はなかなか帰ろうとしない。

「次も勝負してやるから自分を鍛えてまた来い。」

魔理沙の表情が明るくなる。また弾幕勝負をしてもらえる。これは彼女の中では重要なことだ。彼女は弾幕勝負が好きで勝負できることが嬉しいのだ。どんなことも努力する彼女は次に勝負を挑むとき、さらに強くなっているだろう。

「よっしゃ。次こそは勝つからな。」

「まあ、頑張れ。そう簡単には勝たせない。」

魔理沙はどこかに飛んで行った。きつと、弾幕勝負の練習をするのだろう。デューレスは椅子に座り、絵を描くことを再開した。

「ふむ。今度、人物画でも描いてみようか。」

夕方になった。絵には美しい湖が描かれていた。風景画ばかりでは絵は上達しない。全てを描いて初めて上達するのだ。彼は努力を惜しまない。どんなことにおいても常に上を目指している。そう、絵であっても弾幕勝負であつてもだ。だが、上達するにはライバルが必要である。

デューレスは彼にとってライバルになるような人物を見つけたかと思っている。自身が守る紅魔館の主も本気の彼には勝てない。しかし、範人や冷仁、詩穩では強すぎる。魔理沙が一番のライバルになりそうなのだ。面倒くさいと思っていながらも実は弾幕勝負が楽しかったりする。

「夕食ここに置いていくわね。」

「ありがとうございます。」

咲夜が現れた。デューレスに夕食を作ってきてくれたらしい。デューレスはそれに心から感謝する。

「貴方は真面目ね。どこかの門番とは大違いだわ。」

「仕事は完璧にこなしてこそですから。」

「じゃあ、夜も仕事頑張つてね。」

「任せてください。お嬢様も貴女もこの屋敷の全てを守り抜いてみせますよ。」

咲夜の顔が少し赤くなり、すぐに消えた。しかし、デューレスが彼女の顔が赤くなっていることに気づくことはなかった。

彼は夕食を食べながら思った。

(やっぱり咲夜さんの作るものは美味しいな♪)

デューレスは夕食をすぐに食べ終えた。食べている間も敵が来る可能性があるため油断できないためだ。

「今日こそは吸血鬼に勝つぜ。」

見るからにザコ臭がプンプンする五人組の妖怪が館にやってきた。デューレスは門の前に座っている。

「おい！そこ退けよ。」

「御用はなんでございましょうか？」

デューレスは乱暴な話し方にイラツとしたが丁寧な口調で問いかける。今は仕事で、相手がどんなものであるとしっかりと対応しなくてはならない。

「今日はこの吸血鬼をぶちのめしに来たんだよ。早く退けや！」

「残念ながらそれはできません。どうぞお帰りください。」

「デメエふざけてんのかコラー！」

デューレスが丁寧な口調で対応できるのはここまでだった。今の彼の仕事は館を守るためにこの門を守ること、館を傷つけるものは誰であつても追い返す。彼の表情と口調が変わる。

「……騒ぐな。さつきから煩いんだよ。見栄張つて吠えることしかできない、ザコが。ふざけているのはお前らだろ？」

デューレスは立ち上がると五人組は動揺する。彼は背が高く迫力がある。彼が門の前にいるだけでも門番としては十分かもしれない。

「ア、アニキ。あいつやばいやつじゃないすか？」

「ひ、怯むんじゃないやねえ。殺つちまえ！」

五人組はデューレスに殴りかかる。しかし、それぞれパンチ一発でノックアウトされてしまった。

「立ち去れ。ふざけている暇があつたら大人しく家の手伝いでもしている。」

「チ、チクショー。覚えてやがれ。」

五人組は負け犬のセリフを吐いて一目散に逃げて行った。デューレスはあんなザコに用はない。もつと強い者と戦いたいのだ。だが、今は仕事をこなすのみ。

第三十五話

暴君の休日

朝七時、この時間で門番は交代する。朝食の後、紅魔館の門番はデューレスから美鈴に交代した。

「今日は頼みましたよ。」

「任せてください。」

「サボって寝ないでくださいね。」

「あれはシエスタですよ。」

「何を言ってるんですか。」

美鈴は門番の仕事によく寝ている。本人曰く、寝ていても気の動きで侵入者に気づくから大丈夫、ってことらしい。だが、咲夜からは仕事の態度としてどうかと思われる。絵を描くデューレスも問題なのだが……。

ここは紅魔館の地下図書館。魔法に関する本が大量に所蔵されている。魔理沙が紅魔館に来る理由はここの本を持ち帰るためだ。

「いつもありがとう。デューが門番をしている日は魔理沙の被害がないわ。」

「紅魔館への不法侵入を防ぐことが仕事ですからね。それが当たり前ですよ。」

「真面目ね。美鈴もそのくらい真面目なら良いのに残念ね。」

魔理沙はほぼ毎日紅魔館に来る。美鈴が門番をする日は必ず突破されて被害が出る。本はまだ返却されていない。パチクリーはそれに悩まされている。

「仕事のない日は基本的に応戦しませんからね。美鈴さんともあまり変わりませんよ。」

「そうかしら?」

「そうなんです。」

デューレスは本の整頓を始めた。きれい好きなのは本の並べ方はしっかりしていないと嫌なのだ。本の内容、題名に合わせて並べていく。何故かわからないが彼は魔法についての本も読むことができる。

本来、魔法関連の本は書いた者よりも優れた魔力を持たなければ、読むことができない。彼はタイラントであり、元は普通の人間である。魔力を持つはずがないのにそれらを読んでいるのである。

「では、俺は館の中をウロウロしてきますので、用事があったら声をかけてください。魔理沙が来ても呼ばないでくださいね。」

「ありがとう。本の整頓お疲れ様。」

デューレスが図書館から出ると魔理沙がいた。美鈴は突破されてしまったのだろうか？

「どうやって入ってきた？美鈴はどうした？」

「今日は普通に門から入ってきたんだ。美鈴はナイフが刺さって倒れてた。」

美鈴は居眠りしていたところを咲夜に見つかり、お仕置きされてしまったようだ。デューレスは、だから注意したのに、と心の中で呟いた。

「まったたく……。」

図書館に行くんだろ？パチュリーが笑顔で待っているぞ。」

「おお、そうか。今日は本を少し返しに来たからな。あいつの気分が良いならちようど良かったぜ。」

「いつもそうやって返しに来れば、パチュリーだって素直に貸してくれるからな。たまに返しに来いよ。」

「家の中で見つかったら持つて来ることにするぜ。」

これまでは平行線のままだった本の貸し借りもなんとか解決しそうだ。しかし、デューレスは思った。優の能力を使えば探し物なんてすぐに見つかるのではないかと。それで見つけられないならもう本は存在していないのではないかと。

「返してきたら、弾幕勝負してくれ。」

「それは断る。俺が門番の仕事をしているときだけにしてもらおう。」
「ちえっ、つまんねーな。」

真面目なデューレスも休日くらいはゆっくりしたい。弾幕勝負は気が向いたときか、仕事中心くらいにしかない。彼も戦闘員なのだが戦いはあまり好きではない。

「じゃあな。」

「おう、またな。」

魔理沙は図書館に入っていった。その後、パチュリーはいつも通りに魔理沙に弾幕勝負を挑んで負けた。パチュリーが目を覚ましたときには返却された数の二倍の数の本が図書館から消えていたらしい。

廊下を歩くデューレスを見つめるものが一人。十六夜 咲夜。

主に仕える完璧なメイドである。彼女は最近デューレスのことが気になって仕方がないのだ。彼のことを考えるとどうも気持ちが落ち着かず、胸が締めつけられる感じがする。さらに自分以外の女性と話しているところを見ると何故かイライラしてくる。

誰かにこの気持ちがなんであるかを訊けばその者は間違いなく「それは恋だ。」と答えるだろう。

しかし、彼女は完璧すぎるが故に恋という気持ちを知らない。そのため、この気持ちがあるかわからず、なにもできないため、デューレスとの距離は一向に縮まらない。

「咲夜ー。」

そんなときにレミリアが彼女を呼んだ。彼女はデューレスの方を見てから主のもとに向かった。

「お呼びでしょうか？お嬢様。」

「デューレスといっしょに食材の買い出しに行ってください。」

「そ、そんなこと……。」

それを聞いた咲夜は赤面し、主の命令に反対しかけてしまう。

「あら、私の言うことが聞けないと言うのかしら？」

「そういうわけでは……。」

レミリアは顔をしかめたが、咲夜が赤面している様子を見てクスリと笑った。レミリアは優しい声で話しかける。

「大丈夫よ。デューレスは断らない。」

「……本当ですか？」

「ええ、私にはその運命が見えるわ。」

「すぐに行ってまいります。」

咲夜は笑顔でその場から消えた。レミリアも笑顔で見送る。

レミリアの能力は『運命を操る程度の能力』。運命を見通したり、運命を引き寄せたりすることが出来る。だが、全てが見えない場合や一部だけ見えない場合がある。さらに彼女は初対面の相手に能力を使うことはない。

咲夜がいなくなった部屋で自分の過去を振り返りながらレミリアが呟く。

「本当は運命なんて見ていないのだけれどね……。咲夜頑張りなさい。」

デューレスは買い出しの誘いを断らなかつた。休日とはいえ主の命令、断ることはできないのだ。また、彼自身も一日中暇なのは嫌なのである。暇でも絵を描いていればかなりの時間を消耗するのだが……。

咲夜にとつて楽しい時間はあつという間に過ぎてしまい、今は帰り道である。荷物は半分ずつ持っている。デューレスはもつとたくさん持つと言っていたが彼女は断つた。しかし、かなりの重量があるため遅れている。

「大丈夫ですか？重いなら私が運びますよ。」

「大丈夫よ。いざとなれば時間を止めて追いつくから。」

「そうですか……。」

そう言う咲夜の表情は険しい。

彼女にとつて、デューレスが気にかけてくれることはとても嬉しいことだった。彼女が彼に惚れた理由は彼の優しい性格と真面目さ、そして時折見せる無邪気さである。

彼女が重さでバランスを崩し倒れかけたところを彼が支えた。

「やっぱり辛かったんじゃないですか。」

「大丈夫よ。時を止めて休「駄目です。」……え？」

「時を止めているのは咲夜さん自身なんですから、息は落ち着いても体力や疲労は回復しないでしょう。」

「……。」

デューレスの言葉は真実だった。咲夜は完全に言い当てられて、黙ってしまった。

「咲夜さんが無理をして、体調を崩されたりしたら私は悲しいですよ。」

「え!?？」

「貴女のことを大切な人だと思っている者がいるんですから無理しないでください。」

咲夜の顔が真っ赤になる。彼女にはデューレスが自分のことを大切な人と言ったことが衝撃だった。しかし、彼はあくまで純粹に思っていることを言っただけである。

彼は彼女の顔が赤いことに気づいた。

「顔が赤いですが大丈夫ですか？」

「……。」

心配になったデューレスは咲夜の頬に手を当てて、すぐに手を放した。熱い。咲夜の体温が高くなっていった。

「もう既に体調崩して熱が高くなっているじゃないですか。」

「そうなの？」

「だから無理をしないでくださいと言ったのに……。」

デューレスはポケットからロープを取り出し、一つ一つのかばんにつなげる。そして、ひとまとめにしたかばんを肩にかけると咲夜をお姫様抱っこで抱き上げた。

「な、何をするの!?？」

「病人を歩かせるわけにはいきませんから。これで紅魔館まで帰ります。」

「……頼んだわ。」

「任せてください。」

咲夜は嬉しくて、でもどこか恥ずかしくてドキドキしていた。しかし、彼女には自分が何故ドキドキしているのかわからなかった。ただ、何かが前進したような気がした。

「これでいつもの恩返しができるばいいと思っっていますが、恩返しに

なっていますか？」

「……。」

咲夜はこたえなかったが考えていることはもちろんyesである。
彼らは紅魔館へ帰った。

第三十六話

依頼受注

今は十月。食欲、読書、運動……の秋。人それぞれに色んな秋がある。そんな季節、範人のもとにあるmissionの依頼が舞い込んだ。

ピロロロ!

範人がベルトに下げる特別な通信機から呼び出し音が鳴る。

「はい。こちらエージェント　ハント・ゴートレックです。」

『やあ、久しぶりだね。』

通信から男性の声が聞こえてきた。声の主はアメリカの政治家である。

「ご用件は何でしょうか？」

『ハント君、君にmissionを出す。今週の日曜日に私の息子が友達と遊園地へ行くことになった。君には子供たちがさらわれたりしないように監視してもらいたいんだ。最近是人質事件が多くてね。』

「わかりました。引き受けます。」

『頼んだよ。彼らがリラックスして遊べるようにしてもらいたい。カモフラージュになるように友達を連れてきても構わないからな。では、これで切るよ。』

通信が切れ、範人はホツと息を吐く。そして、どうすれば怪しまれずに済むのかについて考え始めた。

監視って言っても俺一人つてのはさすがに不自然だよなあ。第一、遊んでみたいアトラクションもないからな。どうしたもんか？

フランを連れて行けば多少は自然に見えるかもしれないけど兄妹で通るか？それにフランがいるなら絶対に監視どころじゃないからな……。

……なら、レミアアはどうだ？……ってダメだ。あいつ絶対に『そんな庶民の遊び場へ行くわけないでしょ？』って言うだろうな。それにあいつ夫いるだろ？他の男と遊園地なんて行くか？……絶対行かないな。

霊夢は神社を離れられないしな。

自然に見える方法、自然に見える方法……。魔理沙には優がいるからダメだ。ん？彼氏と彼女？

そうか、恋人同士なら別に不自然じゃないな。……。妖夢に頼んでみるか。一応フランにも。面倒くさくなりそうだけど兄妹作戦も考えておくかな。

範人はスキマを開き、白玉楼へ行った。

「妖夢、いるか？」

「はい、何でしよう？」

範人は妖夢に mission の内容を細かく説明し、同行をお願いした。そこへ幽々子が茶々を入れる。

「あらく、デートのお誘い？いいわね〜♪」

「幽々子、これは mission なんだ。デートじゃない。」

「え!?？」

妖夢が少し悲しそうな顔になる。今の発言は誤解を招くことに気づいた範人は急いで取り繕う。

「デートはまた違う機会に誘うから。」

「そうですか。びっくりしました。範人に嫌われてしまったのかと。」

「大丈夫、俺は妖夢一筋だ。」

範人の言葉に妖夢はホツとしながらも驚いた。彼女はまさかそこまで言ってもらえるとは思っていなかったらしい。

「幽々子様、来週の日曜日に休暇をもらってもよろしいですか？」

「いいわよ。……ねえ、妖夢。私に許可なんて求めずにもっと自由にしてもいいのよ。」

「そういうわけにはいきません。私は幽々子様に仕える者です。」

「もう……。」

幽々子は少し表情を曇らせる。彼女は妖夢にもっと自分に自由になっってもらいたいのだ。

「今週の日曜日な。あ、フランも来るかもしれないから。」

「はい、わかりました。」

範人はスキマを開いて、研究所に戻り、そこから紅魔館へ向けて飛

び立った。

範人は紅魔館の門の前に降り立つ。今日の門番はデューレスだ。今日は紅魔館の絵を描いている。

「おや、範人じゃないか。今日は何の用事だ？」

「お嬢様方二人に話があつてな。通してくれるか？」

「もちろんだ。ほら、どうぞ。」

デューレスは門を開いた。範人は紅魔館の中に入っていった。

フラン、レミアアとの話し合いはフランが賛成、レミアアが反対の意見を述べていた。だが、最終的にはレミアアがフランの涙目と上目遣いのコンボであっけなく押し切られた。範人は何かデジャブを感じたが、あまり考えないことにした。

「じゃあ、今週の日曜日だからな。」

「うん、楽しみにしてる♪」

「missionなんだけどなあ……。」

missionに妖夢とフランを連れて行くことに決まった範人はスキマを開き、研究所へ戻った。

mission当日、範人はフランと妖夢になるべく目立たないように注意してから、元の世界へのスキマを開いた。

「英語は覚えたよな？」

「はい、バッチリです。」

「私はもとから話せるよ♪」

「よし、行こう。」

妖夢には以前に元いた世界に行ったときから範人が英語を教えていたが、すぐに覚えてしまった。範人は確認のために質問したが大丈夫そうだった。フランが話せることはレミアアが言っていた。

範人たちはスキマに入った。

研究所跡地には手配しておいた乗用車が用意してあった。俺は運転席の隣に妖夢たちは後部座席に座った。運転手のリックに目的地を伝える。

「ほう、今日のmissionは護衛か。」

「じゃあ、頼むよ。リック」

「任せろ。交通ルールを無視した安全でクールなドライブを楽しみな。」

「安全はないだろ。」

リックがこう言うのはいつものことなのだが、妖夢たちはその中身について全然知らない。リックの運転を知っている俺は妖夢たちに注意をする。

「無理するなよ、今日は客がいるんだから。」

「ハハハ、シートベルトさえつけていれば大丈夫さ♪」

大丈夫じゃない、大問題だ、と思った。だが、俺の願いがリックに届くことはなく、車は目的地を目指して発進した。

今回の運転は前に乗ったときよりも派手で荒かった。一、二度警察に追いかけられたが余裕で振り切った。さすがリック、俺たちにはできないことを平然とやってのける。そこにしびれても憧れてもいけないけど……。こいつはよく運転免許を取れたと思う。

「ほら、着いたぞ。」

「お前、腕（悪い意味で）上げたな。」

「ふっふっふー、そうだろ。」

「さっきの楽しかったよ。ありがとう♪」

「お、嬢ちゃんも俺の運転の良さがわかるのかい？」

「なんか危なかったけど、そこが良かった。」

「な？やっぱリクールっていいだろ？」

よくない。フランは何故か楽しそうだが、妖夢はグツタリしている。あの運転で酔わないやつはすごいと思う。俺だって少し気持ち悪い。

「じゃあ、楽しんできな。」

「だから、これはmissionだつての。」

「あ、そういればそうだったな。俺は親子で遊びたいだけだと思つたぜ。」

「んなわけあるか！」

「え、あの金髪の嬢ちゃんハントと白髪のお嬢さんの娘じゃないのか？」

「俺まだ十六歳なんだけど……。」

「お！てことはアレか？スゲエ若い頃にやつちまったのか？」

妖夢の顔が真っ赤だ。そりや恥ずかしいよな。俺だつて恥ずかしいもん……。」

「リック、そんなに殴られたいのか？」

「ハハハ。冗談だ、冗談。お前に殴られたら死んじまうよ。」

リックは逃げるように去っていった。あのお調子者は一度死なないとわからないのではないのだろうか？交通事故でも起こして一度死ねばいいのに。

少しして、ターゲットが視界に確認できた。

「じゃあ、行こうか？」

「わーい。」

「は、はい……。」

「大丈夫か？」

「大丈夫です……。」

妖夢が辛そうだったため声をかけたが「大丈夫」という言葉が返ってきたため、missionを開始するにした。

「さあ、mission start だ！」

第三十七話 『mission』と書いて『遊び』と読む

俺たちは今ターゲットを尾行している。と言っても3人で話をしながら歩いているだけだ。こんなところでコソコソしながら歩いていたらむしろ目立つ。潜入ミッションのときは見つからないようにすることが大切だが、こういうったところでは周りに合わせて動く、周りに溶け込むことが大切なのだ。

「範人、こんなに堂々としていいんですか？目立ちませんか？」

「大丈夫だ。むしろこのくらいのほうがちょうどいい。」

「そうなんですか。でも、周りがこちらをチラチラ見てきますよ。」

「多分、妖夢がかわいいからだろ。」

「そ、そんなこと、こんなところで言わないでくださいよ。」

「ハハッ、本心なんだから仕方ない。」

そう、これは俺の本心だ。妖夢はかわいい。前に妖夢と風呂に入ったときに理性を保つのがどれだけ大変なことだったか……と、そんなこと考えている場合じゃないな。

もう本当に2人だけで来るならもつと気楽だったのだが、これは仕事だしフランもいるのだから気を抜くことができない。

話しているうちにターゲットに動きがある。俺は聴覚に意識を集中させてターゲットの話聞き取る。

「なるほど、2人ともジェットコースターに乗るぞ。」

「なんですか、それ？」

「スリルを楽しむ乗り物だな。リックの運転よりは全然マシだから安心しろ。」

「そうですか。それなら良かったです。」

そもそも、高速で空を飛んで弾幕勝負をする妖夢たちがジェットコースターごときを心配する必要はないだろう。それよりも心配されるのはフランの背の高さだが……多分大丈夫だろう。

俺たちは乗り場へ向かった。

俺と妖夢は問題なく乗れた。しかし、フランはそう簡単にはいかなかった。

係員が目測でフランの身長を測ったのだ。そしてさらにフランに向かつて「小さい」と言った。その後はかなり大変だった。フランが係員を能力で破壊しようとしたり、妖夢が刀を抜こうとしたりといういろあつた。結局はフランの身長を測ったところ、ギリギリ足りていたためなんとか乗ることができた。

かなり目立ってしまったと思うが、このくらいのトラブルがなければ面白くない。ここからどう溶け込み直すか、俺のエージェントとしての腕を試されているようだ。

ジェットコースターが坂道を登り始める。

地面が離れていき、このときが一番ドキドキする……はずなのだが俺や妖夢たちからすればこんな高さ日常茶飯事である。こんな高さ全然怖くない。

最高点に達して一瞬止まり、猛スピードで急降下する。

全然スリルなんて感じない。周りの人は悲鳴をあげているが俺にとってはこのスピードが心地良い。普通の人にとって、風と一体化するってこういうことなのだろうか？俺の場合は風なんて置き去って、光速なのだが……。

俺は妖夢のほうを見る。妖夢も俺のほうを見るとニコリと微笑んだ。

あ、やばい、これが天使の微笑みってやつか。破壊力極高だぜ。て、お惚気過ぎだろ、俺！もつとしつかりしろ！そんなんじや、ターゲットを守れねーぞ！

そんなことを考えていると嫌な音と匂いがした。銃弾の発射される音と火薬の匂いだ。

俺が音のほうを見るとスナイパーライフルが確認できた。銃弾は真っ直ぐターゲットのもとへ飛んでいく。こんなところで変異も能力も使うわけにはいかなかったため、俺は銃弾に手を伸ばし、銃弾を手で掴んだ。もちろん銃弾は実弾だ。手が弾け飛ぶがすぐに再生して銃

弾を掴む。銃弾はスピードを落として俺の手の中で止まった。血が飛び散ったがジェットコースターの猛スピードでどこにもついていないし、人々は恐怖で誰も気づいていない。

「グッ…アツツ…あんの野郎!」

向こうのスナイパーは当たったと思ったのかこちらを見ていない。捕まえて拷問をしたところで結局、雇い主の名前は出さないだろう。ならば、この場で殺してしまうのが良い。

俺はスナイパーの頭に狙いを合わせて銃弾をダーツの矢のように投げる。

「お返した。永遠の夢の中に落ちな。」

銃弾はスナイパーの頭に直撃し、頭蓋骨を内側から吹き飛ばした。その様子は頭が爆発したという言葉がぴったりだった。

ジェットコースターは乗り場に到着し、俺たちはターゲットの尾行を再開した。

というか、これはもう監視というレベルじゃない。思いつきり命を狙われている。本当に俺が依頼を引き受けて良かった。じゃないと今頃ターゲットの命はないだろう。

「範人、大丈夫ですか?」

「ああ、平気だ。…俺は平気なんだが、狙われている子供のほうが心配だ。」

「わかりました。気をつけます。」

「あつ、あの子がなんか変な建物に入っていくよ。」

俺はフランの指差す先を見た…がすぐに目を伏せてガタガタ震えはじめた。

嘘だ嘘だ嘘だ…なんであんなところに行くの?俺は絶対嫌だからな!絶対嫌だからな!意地でも嫌だからな!死んでも嫌だからな!おばけ屋敷なんて絶対嫌だ!

俺が妖夢のほうを見ると妖夢も震えていた。

「(なあ、妖夢も嫌なのか?)」

「(当たり前です!あんなところ絶対嫌です!うう。)」

「(泣くなって……俺も嫌だよ。怖い……でも……)」

「(でも……なんですか?)」

「(妖夢といっしょなら怖くないかもしれない。)」

「(……)」

「(頼む! いっしょに行ってくれ!)」

「(もちろんいいですよ。範人といっしょなら私もきつと大丈夫です。)」

「(ありがとう。)」

「2人ともー、早く行こうよ。」

「は、はい。」「」

俺たちはおばけ屋敷に入った。

第三十八話

お化け屋敷

フランは意気揚々と範人と妖夢は嫌々ながらもおぼけ屋敷に入った。彼らはお化けが苦手でどうしようもないのだ。範人はフランが自分たちを先導しているのを見て自分が情け無くなる。

ああ、やっぱ怖い。フランが先を進むって、俺って一体……。情け無え……。おいフラン、置いていかないでくれ……。

普段の範人はゾンビや突然の驚かしについては全然平気なのだが、霊的なことに関しては非常に弱く、どうしても慣れないのだ。また、シチュエーションによっては突然の驚かしにも弱い。故にお化けが非常に苦手である。幽々子や妖夢のような実体があるタイプは全然平気なのだが、他の幽霊なら多分逃げ出すだろう。

過去におぼけ屋敷で気絶したこともある。

妖夢は単純に怖がりで暗いところで物音がしたりすることなどが非常に苦手だ。今は範人と並んで歩いているのだが、やはり怖いものは怖いらしい。怖いのを紛らわすために範人と手をつないでいる。

うう、怖い。でも、範人もいつしよなんだから頑張らなきゃ！あ、フランちゃん、置いてかないで……。

二人の願いも虚しく、フランは意気揚々と先に進んでいつてしまった。

「は、範人。」

「な、何だ？」

「もう少し身を寄せてもいいですか？」

「あ、うん。いいよ。」

妖夢が範人の腕に身体を密着させる。範人の腕に妖夢の胸が当たっているが、二人にそんなことを気にしていられるほどの余裕はない。この恐怖に耐えることで精一杯なのだ。

そんなときに音楽室エリアのギミックが発動してピアノが鳴り始め、絵がカタカタと動き出した。もちろん、二人に効果はてきめん。

「キヤアア！」

「ウワアア！」

驚いた妖夢が悲鳴を上げて、範人に抱きつき、それに驚いた範人が叫び声を上げる。二人は駆け足でそのエリアを抜けた。

人物が変わってこちらはターゲット。名前をジエツトという。年齢は10歳。この少年もまた怖がりであり、おぼけ屋敷には友達に無理矢理連れてこられたという感じである。

ああ、マジで怖いよ。なんでみんなはこんなところ平気なんだよ？というか、そもそも入ろうなんて言ったの誰だよ？ああ、最悪。マジでないわ。

ジエツトはそんなふうに関心の中で文句をブツブツ呟きながらみんなについていていた……はずだった。気がつけば、いっしょに遊びに来ていた友達はみんな遥か先に進んでおり、視界の中には誰もいなかった。

「えっ!??何で!??みんなどこいったの?」

ジエツトは一気に不安になり、その場に座り込んでしまった。もう恐怖で一步も動けない。ジエツトは静かに泣き出してしまった。

「どうしたの?大丈夫?」

突然誰かに話しかけられた。ジエツトが顔を上げるとそこにいたのは見たところ自分とあまり歳が変わらない金髪の少女だった。

フランは男の子の顔を見て体に衝撃が走った。なんと、その男の子はフランの好みにどストライクだったのだ。

「グスツ……うん、うん、大丈夫。ありがとう。君は誰?」

「私はフランドール。フランって呼んでいいよ♪」

「僕はジエツト。よろしく。」

「よろしく。さあ、どんどん進もう♪」

「え!??ちよ!??え?」

フランがジエツトの手を引く。彼はフランの力の強さに驚いたが、特に不思議に思うこともなく進み始めた。

ああ、怖えー。本当に僕なんでこんなところ来たんだろ?外で待つてれば良かった。てか、フランちゃんよく平気だなあ?ハハハ、僕って男なのに情け無いな。

ジェットがフランに手を引かれて進んでいると新しいギミックが発動した。叫び声と共に天井から赤い塗料の塗られた人形が落ちてきた。

「ヒイイイ！」

「あつ！（ちよつと幸せかも）」

ジェットは恐怖の余りフランに抱きついてしまった。ジェットの身体にフランの控えめであるものの柔らかい胸が当たる。

「あつ！ごめん！」

ジェットは顔を真っ赤にして、慌ててフランから離れる。

ああ、ヤバイ。やらかしたよ。これ絶対嫌われるよ。こんなことするなんて僕変態じゃないか。

ジェットは恥ずかしさに押し潰されそうになって黙り込んでしまった。

「もう……。ジェットも男の子なんだね。」

フランは少し恥ずかしそうにしながらも軽く笑っている。

「うわー！ごめんなさいごめんなさい！」

「そんなに許してもらいたい？」

「うん……。」

「じゃあ、責任取ってよ。」

「……は？？」

ジェットは驚いた。フランは笑っている。

いや、フランは何を言っているのだろうか？責任を取れ？フランは何のつもりなのだろうか？て言うかどうすれば責任が取れるの？

「ねえ、フランちゃん。責任ってどうやってとるの？」

「ええ、それを私に言わせないでよ。」

「いや、取り方がわかんないから！」

「うーん……じゃあ、ジェットなりに見つけてよ。方法によってはダメだけど、私が正解だと思ったら許してあげる。」

ジェットにはわからなかった、責任の取り方もフランが自分に惹かれていることも。

ジェット気づいてくれるかな。♪まあ、私はさっきのでも充分に嬉

しいんだけど。ジエットの答えが楽しみだなく♪
フランはジエットの答えを楽しみにしながら、妄想を巡らせていた。

またまた人物が変わってこちらはリア充2人。範人と妖夢は半分パニックになりながらお化け屋敷を進んでいる。

なあ、フラン。フランは今、どこまで進んだんだ？俺と妖夢は今、地獄にいるぜ！

「ギャアアアー！」

「みよーん！」

2人はとにかくゴールを目指した。心はもうこんな怖い場所は嫌だ！という思いと互いに対する思いがほとんどである。2人は半泣きでゴールに向かった。

フランがどこまで進んだかって？お化け屋敷はゴール目前、恋はまだまだスタート直後。

第三十九話

表裏

ジェットが考え込んでいる間にいつの間にかお化け屋敷の出口についてしまった。そこに顔を真っ青にした範人と妖夢が合流する。

「お兄様、お姉様、大丈夫?」

「超駄目だ。」

「わ、私ももう駄目です。」

範人と妖夢は既に精神力が限界まできている。2人にお化けは効果抜群である。

ハ：ハハハ……冗談じゃねーよ。もう二度とお化け屋敷なんて行くもんか!

ジェットが範人に話しかける。

「すみません。」

「お、おう、なんだ?」

「貴方がフランちゃんのお兄さんですか?」

「ああ、一応そうだが……。」

範人は兄妹と言ってもらえたことで内心ホッとした。

こんな少年にまで親なんて言われたらどうしようかと思ったぜ。良かった、兄妹に見えるのか。

「しばらくフランちゃんと一緒に行動させてもらって良いですか?」

範人は驚いた。まさかそんな言葉が出てくるとは思っていなかったのだ。

「俺は良いけど…フランはどうだ?」

「私は全然構わないよ♪」

範人はまた驚いた。

な、何イ!??まさかこいつらもうそんなに仲良くなっていたのか?あのお化け屋敷で俺たちが気絶しかけている間に一体何があった?

「そうか。…OKだって、楽しんできな。フランは約束忘れるなよ。ほら、お小遣いだ。」

「わーい♪」

「ありがとうございます。」

フランとジェットが離れてから、範人は周りの様子を伺った。妖夢も範人と同様に周りの様子を見ている。不思議なことにこの園内に感じられる人に近い者の気配はフランとジェット、範人と妖夢の他に3人ほどだけだった。しかも、場所の特定ができない。

「あの2人、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だろ。フランがいるからな。」

……それに俺たちが一緒について行ったら、誰がこいつらを止めるんだ？」

範人が何も無いように見えるところに赤い塗料の粒子を飛ばすとコモドドラゴンとカメレオンを合わせたような生物とノビスタドルが大量に浮かび上がった。

「それもそうですね。」

妖夢は既に抜刀し、刀を構えていた。範人もファイティングポーズをとる。

「さあ、来いよー！」

クリーチャーたちは範人たちに向けて、一斉に飛びかかった。

うーむ……おかしい。

ジェットは今とても不思議に思っていることがある。それはフランも同様のようだ。

何で他に全然人がいないんだ？今日は日曜日だから、遊園地が人でいっぱいでもおかしくないはずだよな？それにお化け屋敷に入る前は人がたくさんいたのに……おかしいなあ。

……まあ、いいか。今は責任の取り方だよな。

ジェットはフランのほうをチラッと見る。フランは何故か上機嫌である。

うわー、誰もいないーい。これならジェットと2人きりだーい何しようかなあ？

「フランちゃんはどこ行きたい？僕はどこでもいいからさ。」

「私もジェットと一緒にならどこでもいいよーい責任の取り方を見つけてもらわないとねーい。」

それを聞いたジェットは自分がやらかしたことを思い出して顔を赤くする。

あんなことしたのに怒らないなんて……フランちゃん、君はすごいよ。はあ、本当にどうやって責任取ればいいんだよ。

「へえー、デートか〜♪いいね〜♪」

2人きりのジェットとフランに見知らぬ男が話しかける。フランはその男のただならぬ雰囲気につき、ジェットを守るべく立ち塞がる。

「突然話しかけてきて、なんのつもり？」

「おや？僕にとって用があるのは君じゃなくてその少年だよ。そこを退いてくれないかな？」

「え!?？僕?？どういうこと?？」

その言葉を聞いてジェットは戸惑う。

「耳を傾けちゃダメ!ジェットは逃げて!」

「嫌だ!女の子を置いて逃げるなんてできないよ!」

ジェットはフランの手を引いて走り出した。

ああ、これって……私すごく幸せだ〜♪

「おやおや、仲が良いね〜♪……逃げても無駄だというのにな。まあ、他の2人はあいつらに任せるとして……僕は2人を追うでしょう。」

男は2人が逃げるのを見て歪んだ笑みを浮かべるとジェットたちのあとを追った。

範人と妖夢は自分たちの武器に着いた血を払っている。彼らの背後にはクリーチャーたちの死体が山のように積まれていた。

「なんとかなりましたね。」

「ああ、結構な数だったな。」

2人は余裕に見えるが結構な体力を消費している。実際につきさつきままでは息が切れていた。

「この化け物たちは一体……ここって元の世界とは違いますよね?」

「厳密には間違っているけど、そうだな。多分、裏世界って感じだ。お化け屋敷にいたときに世界をひっくり返されたんだろうな。」

世界には表と裏がある。表から裏が見えないように裏からも表は見えない。つまり、範人たち4人は元の世界とは隔離された状態なのである。

範人はある確信を持っていた。

間違いないな。最近の誘拐事件の犯人は能力持ちだ。『世界の表裏をひっくり返す程度の能力』と言ったところか？これは面倒なことになったな。このままじゃ帰れない。早く犯人を見つけて降参してもらわないと。

「それにしても結構な量の血飛沫がかかったな。」

範人は自分たちの服装を見ながら言う。2人で200体近いクリーチャーを倒したのだ。身体に血は着いていないものの服は血だらけである。

「そうですね。帰りどうしましょう?」

「一応、替えの服は持って来てあるけど使う?」

「使います。」

「そうか。ほら。」

範人は妖夢に服を渡す。妖夢がよく着ている服に似せて範人自身が制作したものである。範人は案外、裁縫も得意だったりする。人は見かけによらない。

「ありがとうございます。」

服を受け取った妖夢はその場で着替え始める。範人はそれに見てかなり焦った。

「ここで着替えるのはやめてくれない?」

「大丈夫ですよ。範人以外に見ている人はいませんから。」

「いや、そういう問題じゃなくてな。」

範人は目のやり場に困ると言いかけたがやめた。それよりも犯人をどう探すかを考える。

「……全く、はやく済ませろよ。」

「もう着替え終わりましたけど?」

「はやっ!?」

範人が考え込んでいる間に妖夢は既に着替え終わっていた。その

間1秒足らず。

「範人は着替えなくていいんですか？」

妖夢は範人の着ている血だらけの白衣を見ながら言う。

「いいんだ。俺の二つ名は『Dr. blood』だからな。」

範人のエージェントとしての二つ名は『Dr. blood』。その由来はほとんどのミッションでミッション開始時に白かった白衣がミッションの終わるときには返り血で血塗れの真っ赤な白衣になってしまっていたことである。ちなみに範人はこれらの白衣を罪の償いとして着て（愛用して）いる。

「それはそうと、多分、能力持ちのやつが犯人だ。おそらく、誘拐事件の犯人も同一だと思う。」

「なるほど、じゃあその人を斬ればいいんですね。」

「……まあ、そんなところだ。」

言っていることは物騒だが、間違っただけではないため範人は頷く。

「じゃあ、手分けして探そうか。」

「はい。」

範人と妖夢は別行動で犯人を探し始めた。

……そんな2人を観察する何者かが2人。

「アイ…ツ…ラをこロ…セバ…いいノ…か？」

「その通りだ。行くゾ、クラッシュユ！」

「リョ…うかい…ダ、スラッシュユ。」

何者かは範人と妖夢を追い始めた。

第四十話 壊し屋

妖夢と別行動を開始して10分、範人はフリーフォール付近に来ていた。

「ここにもいないのか。霧も出てきたし……。犯人はどこに行ったんだ？」

霧は3分程前に出始めたが今では10m先が辛うじて見える程の霧になってしまった。この遊園地付近ではよくあることだが、今回はかなり濃い。

「ウアアー！」

「な、何だ！」

突然、化け物のような叫び声が響いたため範人は身構える。霧でよく見えないがその声は前方から聞こえてくる。

この声は……まさか！

範人はその声に聞き覚えがあった。かつて聞いた生物兵器の音声資料のそれにそっくりなのだ。

タイラントの身体をベースにネメシスという寄生体を寄生させてより高度な知能を持たせることに成功した。かつて、ラクーンシティで特殊部隊S・T・A・R・S.を全滅させるために送り込まれた人型生物兵器ネメシスⅧ型。

その声にそっくりだった。

何故だ？何故あいつがここにいる？

「グオアアアー！」

「うお!?？」

ドスツ！

範人の目の前に触手が突き刺さる。だが、その触手はネメシスのミズに似ているものよりも人間の手足に似ていた。さらにその触手には目がついていた。

「なんだこれは!?？」

「見ツけ……たゾー！」

霧の中から何者かが飛び出してきた。範人はその姿を見て目を見

張った。そこにいたのは皮膚がただれたネメシスよりも元のタイラントに似た生物だった。

「なんだこいつは!?!?」

「グオアアアアー! コロス、殺す!」

範人に向かつて巨大な爪が振り下ろされる。範人はとつさに変異をして鎌で受け止める。ぶつかり合った刃からギリギリという音がする。

くそッ、なんて馬鹿力だ。鎌が折れちまう……。

「ヌアアアアー!」

「ゴハア!」

生物兵器の蹴りが範人の横腹に入った。甲殻が軋む音と共に範人は吹っ飛び、フリーフォールの柱に激突した。

「グフフ……、ソの身体……お……マエも生物兵器……か? 面白い……面白いゾー!」

「ハッ!?!?」

範人が目を開けると目の前に相手の拳が迫っていた。範人の顔面に拳が直撃し、柱を貫通して吹っ飛ぶ。地面のアスファルトと甲殻が擦れ、火花が散る。

「俺……ノ名前は……クラツシユ……だ……。ガハハハハアアア!」

クラツシユは地面を滑る範人の元に走り寄ると顔面を蹴り飛ばした。範人は10m程吹っ飛び、柵に激突して停止した。

「もう終わりか。ガハハアアア!」

範人が起き上がる。その目には怒りの炎が燃えていた。だが、甲殻はボロボロで自身の攻撃の衝撃に耐えられない。それを感じた範人は身体に異なる変異を施す。

「っ……、生かそうと思ったけど、しゃあねー。殺してやるよ!」

「ガハハハ……ハ!?!?」

バキッ!

範人の右ストレートを受けてクラツシユの身体が吹っ飛ぶ、身体を動かそうとするが痺れて動かない。範人は回り込んでさらに蹴り上げる。クラツシユが上空に吹っ飛んだところを踵落として地面に向

かって蹴り落とす。

「ガフツ、グハツ……ハア……ハア……。な……ンダ、その姿ハ……?」

クラツシユの見つめる先には全身を白い甲殻に覆われ、狐のような尻尾を生やした生物兵器の姿があった。身体の表面を青白い稲妻が走っている。

「これか?これは俺の第二の変異形態だよ。電気を操ることができてね。さつき、あんたの身体が痺れたのはそのせいだ。」

「マサ……か……お前……?」『ハン「グシャツ!」ガアアア!」

「その名で俺を呼ぶな……。」

範人がクラツシユの腹を蹴り飛ばした。腹から背中に貫通する穴が開き、もがき苦しむクラツシユを見つめる範人の目は恐ろしいほどに冷たい輝きを放っている。

「さあ、立てよ。もっと痛めつけてやる。」

「グツ、チクシヨオオオツ!」

クラツシユは圧倒的な回復力で穴を修復すると範人に殴りかかった。範人はそれをスルリとかわすと顎にアッパーを打った。クラツシユの顎の骨がグシャリという湿った音を立てて砕ける。

「……ッ?」

「そうか、言葉にできないほど痛いか……。」

範人は横腹に裏拳を放つ。殴られた部分の筋肉と内臓がそのままズレて、断層を起こす。だが、範人もそのまま放っておくようなやつではない。ズレた部分を逆から殴り、元の位置に戻す。

「グ……アツ……。」

「もう終わりか?殺しちまうぞ?」

「ウ、ウワァー!」

クラツシユは範人に背を向けて逃げ出した。範人は尻尾の毛を寝かせて鞭のようにする。

嘘だ……。あんな化け物に勝てるはずがないだろ!なんであいつがここにいるんだよ?エージェント　　ハント・ゴートレック。通

称『Dr. blood』。生物兵器名『ハン……』

ドゴツ!

「ガアッ！」

範人が鞭のように振るつた尻尾はクラツシユの横腹に直撃し、クラツシユを転ばせる。

「丈夫だねー。いい玩具だよ。」

範人は尻尾をクラツシユの身体に巻きつけて電気を流す。死なない程度の電流が流れるように電圧を調整する。

「ギャアアアー！」

「さて、これから10秒だけ自由にしてやる。好きに逃げな。」

範人は尻尾を振ってクラツシユを投げた。クラツシユは一目散に逃げる。クラツシユをわざと逃がした範人には考えがあった。

さて、こいつはきつと増援を呼びに行くだろうな。そいつが犯人だ。さっさと見つけて降参してもらおうか。

10秒後、範人はクラツシユを追い始めた。

第四十一話

技と数

範人と別行動を開始して十分、妖夢はステージの近くまで来ていた。この場所、実はフランたちの近くである。

「霧が出てきましたね。フランちゃんは大丈夫でしょうか？」

妖夢が周りを見渡しても霧がかかっているせいではほとんど何も見えない。敵が近いのなら気配を感じることができるが、遠くにいるのか気配が感じられない。

「こういうときにはどうすれば良いのでしょうか？」

考える妖夢の頭の中に浮かんだものは師匠である祖父の言葉だった。

『目だけではない。心でも見るのだ。』

そうでした。何も目だけで探す必要はないですね。心の目があるじゃないですか。

妖夢は目を閉じて意識を集中した。するとフランとジェットがいるのが見えた。何者かに追われている。

「今、助けに向かいます。」

妖夢はフランたちの元へ向かって走り出したが少しすると自分の前に立ち塞がる者の姿が見えたため立ち止まる。大男の身長は2.5m程だろうか。フードのあるローブを着て、顔と両手、胴体を隠し、袴を身に着け、草履を履いている。

「待ちなされ。そこにお若いノ。」

「私のことですか？」

「ソウだ。お主は今、ナにをしようとしてるか？」

妖夢を止めた者はところどころ不自然ながらも流暢な日本語で話をする。妖夢は不審に思いながらも丁寧に返す。

「私はフランちゃんとジェット君を助けに向かっているところです。」

「……そうか。なら、我輩ハ戦わねばならぬな。」

男がそう言うと同時に男からとんでもない覇気が噴き出した。妖夢は少し驚いたが恐れることはなかった。ただ、あることがわかった。

「この人……かなり強いですね。」

「ほう、我輩ノ覇気に耐エるとは……お主、な力なか強いのか。」

「そう言う貴方も強いのでしょうか。」

「我輩ハ自分の強さにナド興味はない。常ニ上を目指して精進するコトが大切だからな。」

「その通りですね。良いことを学びました。」

周りから見れば、2人が普通に会話しているように見えるかもしれないが、会話の最中もずっと殺気の飛ばし合いが続いている。

「先に名乗つておこう。我輩はスラツシユ。お主の名前もお聞かせ願いたい。」

「魂魄 妖夢です。」

「そうか。では、斬り合いといこうか。」

妖夢は抜刀して構える。対するスラツシユはローブを広げた。

「え!?」

スラツシユの身体を見た妖夢は驚いた。

何!?……この人の身体……どうなっているの?

なんと、スラツシユには腕が6本あったのだ。それぞれの腕に1本ずつ刀を持っている。

「いざ、参ル!」

スラツシユが6本のうち3本を振り下ろす。妖夢はとっさに右の刀で受け止める。左の刀で斬りつけるが1本で止められ、2本の刀が妖夢に迫った。妖夢は背中を反らせてかわす。妖夢はそのまま脚を斬りつけようとするが、刀で受け止められたため後ろに跳躍して距離を取る。

「ほう、良い太刀筋だ。」

「そちらこそお強い。」

「なら、これはどうだ?」

真空雪『氷結晶の六角』

スラツシユが6本の刀をスピニングしながら高速で振るう。そのあまりの速さに空気が切れて真空波が発生する。さらに真空波が通ったところの霧が凍り、雪が降り始めた。

妖夢はそれらを流れるような動きでかわす。かわせないものは刀で叩き斬り、消滅させる。その動きは滑らかだが、あまり余裕がない。「すばらしい……スピードアップだ!」
「くっ!」

スラツシユはさらに回転するスピードを上げる。霧だけでなく空気まで凍りつき、身体に突き刺さるような寒さになる。妖夢は刀を動かすスピードを上げ、なんとか凌ぐ。

しばらくして、スラツシユの回転が止まった。妖夢には傷一つついていない。

「クハハハハ!お主の技術には驚かされる。面白い。」

「ハア……ハア……。」

「だが、これで終わりだ!」

死剣『タナトスの鎌爪』

スラツシユの腕が身体の両側でそれぞれ一つに纏まり始め、1秒後には刀が爪になっている巨大な腕になった。

「……」

スラツシユには妖夢が驚いて声も出ないように見えた。スラツシユは妖夢に駆け寄り、右腕を振り下ろした。

ザシユツ!

切り飛ばされた右腕が血を噴き出しながら宙を舞う。

「ギヤアアー!」

悲鳴を上げたのはスラツシユだった。切り飛ばされたのは妖夢の腕ではなく、スラツシユの腕だったのだ。妖夢は刀で振り下ろされた腕を切り上げたのである。

「冥陽剣『光晶の煌めき』」

スペルカードの詠唱。妖夢の周りに緋色に輝く剣が無数に浮かぶ。

「なん……だ、それは?」

「私の霊力です。」

妖夢が使用したスペルカードは範人と特訓して作り出した新しい技である。霊力を剣の形にした弾幕である。

妖夢は光剣を自分の周りで回転させながら、スラツシユに突っ込ん

だ。スラツシユの身体はどんどん切り刻まれていく。

「グアアア！」

スラツシユは左腕も切り飛ばされた。

なんだ!? この力は……? 我輩ではとても止められぬ。増援を呼ばなくては……。だが、相手に背中を向けては剣士の恥だ。……いや、そもそも何故、我輩は戦うのだ?

「降参しますか?」

「我輩も剣士! 退くわけにはいかヌ！」

「そうですね……残念です。貴方とはまた勝負がしたかったです。その腕もまだ治るのでしようから……。」

妖夢はスペルカードを解除して、刀を構えた。少し下がって力を溜める。その様子はスラツシユの目にしっかりと写っていた。

ああ……我輩はやつと死ぬのか……。

今までたくさんのことがあった。短い割には刺激があつて、楽しい人生だったのかもしれない。いや……アンブレラに捕まってからは、生物兵器生か……。

それにしても……良かった。最期にこんな強者と戦うことができた。剣の道に生き、剣士として死ねるなら……それも本望だ!

さあ、我輩を殺してくれ! もう……罪を重ねさせないでくれ!

「居合！」

妖夢は刀を構えて地面を強く蹴った。音も遅れてしまうようなスピードで刀がスラツシユの身体を一閃する。スラツシユはその場に崩れ落ちた。

「剣は数ではないですよ。」

絶命したスラツシユを見て、妖夢は刀をしまいながら、そう言った。

第四十二話

救世主

男はジェットたちを追い詰めた。ジェットは弱気になり、フランはジェットを守るべく立ち塞がっている。

「退いてくれよ。その少年に用があるって言っただろう？」

「退かない！お兄様と約束したんだもん！」

フランはすごい剣幕で男を睨みつけるが男は動じない。それどころか不敵な笑みを浮かべている。

何よ……こいつ。吸血鬼の迫力にも動じないなんておかしいわ。でも……絶対にジェットは守る！」

「おっと、申し遅れたね。僕はクロウ、素敵な誘拐者さ♪」

「名乗っても退かないよ！」

「っ……、そう言うと思ったよ！」

クロウはフランに向けて拳を振り下ろすが、フランはクロウの拳を軽く受け止めた。

吸血鬼にとつて、人間の拳を止めることなど造作もないことだ。

クロウは驚いた表情をするが、周りを見てからニヤリと笑みを浮かべた。

「強いお嬢ちゃんだ……でも、もう終わりだよ。」

クロウが見つめる先には大男の影が走ってくるのが薄く見える。そして、その大男のものだと思われる声が響く。

「クローウー！」

「ずいぶんと遅かったじゃないか。奴らは片付けたのか、クラッシュ？」

「ソ、それ……が大変ナ「ドゴッ！」ガアアア！」

クラッシュの影がフランたちに近づいてくるが、30m程まで近づいたところで吹っ飛ばされて、フランたちから5m程先に落ちた。クロウが驚愕の表情を浮かべ、クラッシュに呼びかける。

「あ……あいつガ……。」

クロウがクラッシュの指差す場所、クラッシュが先程までいた場所を見るとそこにはもう一つの影があった。その影はだんだんと近づ

いてくる。

「あいつがどうした!?？」

「電磁砲『パラケルススの魔剣』」

影から声が響く。その直後、影から電撃が発射されクラッシュの身体を貫いた。クラッシュの身体はクラッシュが悲鳴を上げる間もなく、電撃の破壊力で燃え尽きて、灰になった。

「な、なんだ!?？クラッシュ!?？」

クロウは焦った表情を浮かべる。フランは声を聞いて安心したが、ジェットは少し戸惑っていた。

え!?？なんで？なんでフランちゃんのお兄さんの声が聞こえてから電撃が飛んできたの？フランちゃんのお兄さんって人間だよね？

「誰だ、お前は!?？」

「エージェント ハント・ゴートレックだ。」

そこに現れたのは範人の姿とは似ても似つかない化け物。狐のような尾を持ち、全身を白い甲殻に包んだ生物兵器だった。

「嘘だ！そんなこと……聞いてない！」

「んなこと知らねーよ。そもそも、自分から『僕は化け物です』なんて情報流すか?！」

範人はわざと相手を挑発するように話す。クロウの背中を冷や汗が流れるが彼はすぐに立ち直る。

「フ…ハハ…ハハハハハ！」

「何がそんなにおかしいんだ？」

「僕はまだ、終わりじゃないってことさ！仲間ならもう一人いる！」

「スラッシュユさんなら、もう斬ってしまいましたよ。」

「ハハ…は!?？」

クロウの元に刀に着いた血を拭きながら、妖夢もやってくる。クロウの表情が固まり、動きが停止する。いわゆるフリーズだ。

「まあ、そういうことだ。お前は一人、諦めて俺たちを表に戻してくれないかな?！」

「そ、そんな……。僕の完璧な計画が……。」

クロウが崩れ落ちる。今までの行動が無駄になったことで力が抜

けてしまったのだろう。

「10秒以内に答えを出してくれ。あまり時間は取りたくない。」

範人は厳しい口調で降参を迫る。だが、クロウが元に戻る気配がないため変異を解除して、優しく言う。

「あんたを殺せば、裏から出れることくらい知っているんだ。俺なら今すぐにこの場であんたを殺すこともできる。でも、殺さない。……なんでかわかるか？」

範人の言葉にクロウが元に戻ったのだろうか。顔を上げて答える。

「……わからない。」

「そうか。……俺はあんたに生きてもらいたいんだ。あんたは人間だ。俺なんかとは違ってまだやり直せる。だから、生きてくれ。生きて、罪を償ってくれ。罪から逃げないでくれ。」

「……そうか。そう……だよな。」

範人の言葉がわかったのか。クロウは立ち上がり、範人たちの前に進んだ。

「わかってくれたか。」

「……わからなくて当然だ！僕の計画に従わない世界なんか、僕にわかるはずがない！」

クロウは範人の胸倉を掴み投げ飛ばした。範人はクロウの迫力に驚き、抵抗することもなく地面に頭から叩きつけられた。ゴキツとい

う音が響き、範人の首がありえない方向に曲がる。

「ウワァー！」

目の前で起きた惨劇にジェットが叫ぶ。そのとき、クロウの服から何かが落ちた。妖夢がそれがなんであるかを確認する。

「これは……注射器ですか？」

「触るな！」

範人は首が折れた状態のまま叫んだ。クロウの落とした注射器はウイルスの注射器。範人はそれに感染することを危険視したのだ。首の骨が再生し、範人が立ち上がる。

「全く酷いことしてくれるぜ。」

「だ、大丈夫なんですか？！」

「心配するな。俺は生物兵器だ。」

……それよりも、あのバカの処分だな。」

クロウの筋肉が盛り上がり、服を突き破った。肩からもう一对の腕が生え、心臓が浮き出る。変異が終わったとき、そこにクロウの面影はなく、新型タイラントの姿があった。

「さて、殺るかな。」

「待って。」

変異しようとした範人をフランが止める。フランの目は怒りで紅く輝いている。

「ここは私に任せてもらっていい？」

「……いいよ。好きに戦いな。」

「ありがとう。」

フランはクロウの前に出る。フランの背中から吸血鬼の翼が生え、正体が明らかになる。

「さあ、遊びましょう。」

「ウガアァー！」

クロウはフランに殴りかかった。

第四十三話

クロウの処分

フランはクロウのパンチを受け止め、勢いを利用して地面に叩きつけた。そのまま、地面で引きずりながらスイングする。

「ゴアアアア！」

投げられたクロウは悲鳴を上げながらフリーフォールに激突した。落下するクロウにフランはさらに連続パンチで追い打ちをかける。不思議なことにクロウには目が見つからなかった。

ジエツトは激闘の様子を見てぼーっとしていた。

「ぼーっとして、どうしたんだ？」

ぼーっとしているジエツトを見て心配になった範人が話しかける。ジエツトはとても驚いた。当たり前である。ついさつき、化け物を灰にしたり、首を折られても数秒で立ち上がったたりした化け物が突然話しかけてきたのだから。

「あ、ええと……フランちゃん大丈夫でしょうか？」

「心配いらぬ。俺はフランを信じている。お前も俺たちを信じてくれ。」

ジエツトは驚いた。

信じているだけであそこまで幼い少女に任せられるものなの!?？僕じゃあんなのと戦うなんてとても無理だよ。ていうか、この人たち人間？あんな化け物と戦って勝ちちゃったんでしょ!?？

ジエツトは範人に最も大きな質問をぶつける。

「失礼ですが、貴方たちって人間ですか？」

「ああ……やっぱりそうなるから。実を言うと、ここにはお前以外に完全に人間ってやつはいないぞ。」

「ええ!?？」

ジエツトはとんでもなく驚いた。多分、人生で一番驚いただろう。

「そもそも、俺たちは全員が種族自体異なるからな。フランも実の妹ってわけじゃないし。」

「ほ、本当ですか!?？」

「ああ、本当だ。俺は生物兵器、妖夢は半人半霊、フランは吸血鬼だ。」
ジエットの頭の中は混乱してしまつた。

あれ？ここにいる人たちはみんな種族が違つて、フランちゃんが吸血鬼で、妖夢さんが……何だっけ？そもそもなんで異なる種族がいつしよにいるの？

種族を超えたつながりが彼には疑問だつた。

「じゃあ、なんで『妹』って呼んでいるんですか？」

「フランが『お兄様』って呼んでくれるからだ。生物兵器はそもそも存在しても求められないからな。『お兄様』って呼んでもらえて、存在を求められてとても嬉しいんだ。」

「そう……なんですか……。」

少し暗くなるジエットに範人は明るく笑いかける。自分の言葉がジエットの心を照らし、道を示せる光になると信じて。求められないなら求められるようになればいい、範人はそう思った。

「ずっと信じるとは言わない。ただ、今は俺たちのことを信じてくれ。俺たちはお前の味方だ。」

「あ、ありがとうござい。待て待て。」え？

ジエットの口から自然に出てきた言葉は感謝だつた。範人はそれを遮る。

「礼なんて俺に言うなよ。それはフランに言つてやれ。」

「どうしてですか？」

「詳しくは言わない。でも、フランは今、いつも以上に頑張っている。だからお前はフランを信じて、応援してやれ。それが今のあいつにとって一番の力になる。」

「は、はいー！」

「そう固くなるなよ。普通でいい、普通で。」

ジエットには範人の言葉の意味がよくわからなかつた。だが、わかつたこともある。それは今の自分が応援することでフランの力になれるということである。ジエットは大きく息を吸い込んで叫んだ。

「フランちゃん！頑張れー！」

ジエットの叫びはフランの耳に届いた。その言葉が聞こえるとフランは少し顔を赤くしながら笑顔になった。

ジエットが応援してくれている。私、頑張らなくちゃ！絶対にジエットを守るんだ！

フランは攻撃の手を強めて、クロウの顔面に上から蹴りを入れた。クロウは頭から地面にめり込んだ。フランはクロウを地面から無理やり引き抜くとジャイアントスイングで投げ飛ばした。

範人はフランの様子を見て頷く。

「な！言った通りだろ？」

「そうですね。」

範人にはわかった、フランが頑張る理由が。フランは恋をしている。しかも現在進行形。その相手がジエットなのだ。

「さて、何か質問はあるか？」

「え!?？」

「いや、お前が何か悩んでいるみたいだったからな。俺でも何か力になれたらいいなと。」

「そ、それなら……」

ジエットはお化け屋敷で自分がやらかしたこととフランから提示された条件を範人に話した。範人はその全てを真面目に聞いた。

「なるほどな。責任の取り方か……」

「そうなんです。何か意見はありませんか？」

「うーむ……、特にアドバイスはできないな。フランはその答えをお前自身の力で見つけてもらいたいんだろ？だったら、俺が何をするかを決めることはできないな。」

「そう……ですか。」

ジエットが暗い表情を浮かべると範人は慌てて言葉をつなぐ。

「待て待て、ヒントになりそうなことを教えてやる。」

「本当ですか！」

「ああ、フランは謝ってもらいたいわけじゃないってことだ。」

ジエットにはその言葉の意味がわからなかった。自分だったら、あ

んなことをされたら相手を許さないと思う。

「えつと……どういうことですか？」

「うーん……簡単に言えば等価交換かな。フランは多分、（恋愛対象から）そういうことをされるのが初めてなんだと思う。（俺は兄だから、恋愛対象じゃない……多分。）それがヒントだ。」

「は、はあ……。」

「まあ、見つけられたら俺に言ってくれ。シチュエーションぐらいなら作ってやる。まあ、見つけられなくても最後は無理やりにシチュエーションを作るがな。」

「わ、わかりました。ありがとうございます。」

「いいってことよ♪お！向こうもそろそろ終わるみたいだぜ。」

フランは今、レーヴァテインを構えている。その切っ先はクロウに向いている。

「これで終わりするわ。さようなら。」

フランはクロウを空中に切り上げるとそこから滅多斬りにした。クロウの身体は見事に切り刻まれて、微塵斬りのようになった。さらにレーヴァテインの炎で灰になり、風に飛ばされて消えていった。

フランが降りてきた。範人たちはフランを笑顔で迎える。

「終わったよ〜♪」

「二「お疲れ様。」」

4人が振り返るとそこには空間の穴が開いていた。穴の向こうには表の世界が見える。

「じゃあ、戻るか。」

「はい。」

「うん！」

「そうしましょう。」

4人は穴を通って表に戻った。

第四十四話

ジェットの答え

範人たちが表に戻ると人間たちがいた。ついさっきまで自分たち以外に誰もいない裏にいたジェットにとってはその光景がとても眩しかった。

「さて、まずはジェットの友達を探さないとな。」

範人は園内中に粒子を飛ばし、監視していたときの記憶を頼りにジェットの友達を探そうとする。

「ちよつと待ってください。」

「ん？なんだ？」

ジェットが範人を止めた。

「この時間は多分昼食を食べていると思います。」

「そうか。場所はわかるか？」

「はい、大体の見当はついていきます。こっちです。」

範人たちがジェットについていくと赤い教祖様の某ファストフード店にジェットの友達がいた。だが、ジェットはみんなに会いに行けないでいる。

「どうした？行ってこいよ。」

「ごめんなさい。どんな風に会えばいいのかわからなくて……。」

突然消えて、突然現れた自分を友達がどう思うだろうか？自分をまた受け入れてくれるだろうか？ジェットにとってそれが心配だった。

「そんなの普通でいいんだよ。フランもいっしょに連れていっていいからさ。」

範人はジェットの背中を優しく押す。

「ありがとうございます。フランちゃん、行こっ！」

「うん♪」

ジェットはフランの手を引いて友達の前に行った。範人と妖夢はそれを暖かく見守る。

「ごめん、みんなー！」

ジェットの言葉に全員が振り向く。友達は全員が安心した表情を浮かべたが、すぐにフランに目を移して驚いた表情を浮かべた。

「無事でなによりだよ。何があったんだ？」

「いや、ちよつといろいろあつてね。」

ジエツトはテキストにはぐらかそうとしたがそんなことで引き下がる者がいるはずもなく……。

「はあ!?? いろいろつてなんだよ、いろいろつて！」

「え!?? いや、だから」

「その超絶美少女とデートでもしてたのか? いや、そうなんだろう！」

一名がフランを指差しながら言った。すると、ジエツトが言い訳をする間もなく、話が勝手に進んでいく。

「畜生め! 羨ましいぞ！」

「俺たちが知らないところでそんなことを!??」

「ジエツトがリア充になつちまつた!??」

「おめでとう！」

「妬ましいわー。パルパル……」

なんか一名変なのがいたような気がする。全員が思ったことを口にして、ジエツトが混乱しているとある一名が助け舟を出した。

「別にいいじゃねーか。幸せつてもんは誰にでもいずれやつてくるだろう。」

『……ん、それもそうだな。』

全員がそう頷き、ジエツトはホツと一息ついた。

「で、君の名前はなんて言うんだ？」

「私はフランドール。フランって呼んでいいよ。」

「そうか。よろしくな。と言つても俺たちはもう帰るんだけどな。」

『……!??』

ジエツトだけでなく、その場にいた全員が驚いた。「いや……でも」と反対しようとする者がいてもその少年は睨んで受け入れさせた。範人と妖夢だけがその少年の意思を読み取った。

なるほど、ジエツトとフランを2人きりにするつもりか……いいセンスだ。人の心がうまく読み取れるあいつはエージエントに向いているな。俺なんかとは違った優しいエージエントに……。まあ、少々自分勝手な気もするけど……。

ジェットの友達が席を立てて出口に向かう。範人はそこで少年を引き止めた。

「お前、良いやつだな。」

範人の言葉に少年は得意気に鼻の下をこすった。

「いいんだよ。あいつのためだからな。ダチのためならこのくらい安いもんさ。」

「そうか。」

範人はポケットから数字の書かれた紙を取り出し、少年に渡した。

「お前には素質がある。興味があれば、その番号に電話してみな。」

「ん…ああ、ありがとう。」

少年たちは範人たちに手を振って、去っていった。

範人たちが昼食を食べ終えてから5時間程が経過した。あれから、いろいろなアトラクションを回ったがジェットとフランに特に進展はない。あつたことといえば、フランがもう一度お化け屋敷に行こうと言ってそれを範人たちが断固拒否したり、フリーフォールでジェットが気絶しかけたこと（フランが誘った）ぐらいだ。

「そろそろ日没だな。」

「そうですね。なんだかんだ今日は楽しかったです。」

さて、日没だし、そろそろ作戦を実行するか。

範人はジェットのために作戦を考えていたのだ。遊園地で日没といえばテンプレートの展開があるだろう。そのテンプレートの観覧車である。範人はそういったテンプレートの展開が案外好きだったりする。（テレビドラマあまり見ないけど）

「観覧車にでも乗るか？」

「いいですね。乗りましょう！」

意外にも一番乗り気なのは妖夢だった。範人はその反応に驚き、かなり焦った。しかし、それもまた好都合だと考え直す。そのほうが理由が自然だ。

「んー、よし！2人1組で乗ろうか。」

「はい。」

「わーい♪ジェット、2人きりだよ！」
「う、うん。」

ジェットは一応答えを見つけていた。だが、フランがそれで許してくれるかはわからなかった。ジェットは不安な気持ちで観覧車に乗り込んだ。

こちらは範人、妖夢組。2人とも相思相愛のグループはジェットのことを心配していた。

「ジェットくんは大丈夫でしょうか？」

「まあ、大丈夫だろう。あいつはフランが惚れた男だ。きっと、良い答えを出すだろうさ。」

「……そうですね。彼ならきっと大丈夫と信じます。」

「それよりも景色を楽しもうか。」

「このシチュエーションは？」

「満喫しまくっております。」

「ふふふ♪」

彼らは互いの肩に寄りかかりながら外の景色に目を移した。その間、2人は心臓の鼓動が相手に届いているほどドキドキしていた。

どうしよう……。答えは見つけられた。けど、どうやって伝えよう？そもそも、こんな答えなんかでいいのか？

いや、これでいい。これが僕の見つけた答えだ。

「フランちゃん。」

「なーに？」

「答え……見つけたよ。」

「本当？じゃあ、私に教えてよ。」

ジェットは黙って頷くとフランに近づいた。心臓の鼓動がやけに大きく感じられる。

「目、瞑ってもらえるかな？」

「う、うん。」

フランが目を瞑る。ジェットはフランの頬に手を当てて、ゆっくり

と顔を近づける。おそらく、自分の今の顔は真っ赤だろう。だが、恥ずかしくてもしなければならぬ。それが自分の答えだから。

チユ……

フランは目を見開いた。目の前にジェット顔がある。そして、唇には柔らかい感触。まさか、そんなことをしてもらえとは思っていなかった。キスしてもらえとは思っていなかった。

ジェットはフランから顔を離す。

「ごめんね、こんな答えで……。」

フランは軽く放心状態になっていた。

いや、好きな相手に突然キスされて放心状態にならない者などそもそもいるのだろうか？

「でも、僕にはこれしか方法が見つからなかったから……等価交換できる初めてのものはこれくらいだったから。」

放心状態だったフランに心が戻る。

「これ、僕のファーストキスだからさ。……これで許してくれない「ジェット大好きー！」 why!?!?」

ジェットが言葉を言い終わらないうちにフランがジェットに抱きついた。フランの本来の力は普通の人間を軽く潰してしまうような力なのだが、今回は優しく抱きしめる。それでも普通の人間にとっては力いっぱい抱きしめられている状態とあまり変わらないのだが……。

「フ、フランちゃん……苦しい……。」

「あ、ごめんごめん。」

フランはジェットから手を離す。ジェットは苦しそうに息をしている。息が切れているがその状態でフランの答えを訊ねる。

「ゼエ……ゼエ……、答えはどうなの？……許してくれる？」

「もちろん。」

「それなら良か「ただし」ウエ!?!?」

「また、キスしてくれる？」

「ええ!?!?」

ジェットがフランの言ったことに対して反対の態度をとる。だが、

フランにはそんなこと関係ない。ジェットを半ば強引に引き寄せてキスをした。しかも、さつきよりも圧倒的に時間が長い。

「ん、フウ……」

「……ハア……ハア、突然何するの?」

「それはジェットが言えたことかな?」

「ウツ!??そ、それは……」

ジェットは顔が真っ赤になったことがわからないようにうつむく。しかし、耳まで真っ赤だったためフランにしつかりとバレていた。

「ねえ、ジェット。」

「な、何?」

フランも恥ずかしかった。こんなことを言うことは初めてだった。

彼女も姉と同じように人間に恋をした。彼女は吸血鬼。人間とは種族はおろか、寿命でさえも圧倒的に異なる。それは越えられない壁だ。だが、種族の違いは決して越えられない壁ではない。

種族の壁は越えられる。

それを姉と兄に教えられた。

「私……ジェットのことが好きなの。……私といっしょになる気はない?」

「え!??」

突然の告白でジェットは悩む。決して、嫌なことではない。むしろ、彼にとってフランは好きな人に当たる。だが、それは恋愛感情ではなかった。

大切な人。

フランは彼にとって純粋に大切な人だった。だが、それあくまで『だった』である。

「……喜んで」

そう。フランは彼にとって『とても』大切な人。大好きな人になっていた。そして、覚悟が決まったのはフランからの告白の直後。今までの彼は周りに迷惑をかけまい、周りに影響を与えまいとしてきた。

フランがいなければ、彼は自分から動けなかった。今、自分は夢を見ているのかもしれない。そう思ってしまうほどにジェットはフラ

ンの告白が信じられなくて、同時に嬉しかった。

「うわーい♪ジエツトありがと〜♪」

フランはまたジエツトにキスをしようとする。が、ジエツトはそれを右手の指2本で止めた。フランが少し悲しそうな顔をする。

「うう……。」

「今度は2人とも同意の上なんだからさ。いっしょにね。」

「うん！」

2人は抱き合い、目を閉じてゆっくりと顔を近づける。夕焼けをバックに2人の唇が重なった。それはまた1組の者たちが種族の壁を越えた瞬間だった。

第四十五話

兄貴降臨

範人が観覧車から降り、フランたちのほうを見ると2人が仲良く手をつないでいた。フランの恋が実ったようで安心した。

「良かったな。」

「えへへ……。」

範人が声をかけると2人は少し顔を赤くして、照れ臭そうに笑った。

「それじゃあ、帰らないとな。」

「今日はありがとうございました。」

ジェットのもとから立ち去るとき、ジェットが範人たちにお礼を言う。

「お礼はいい。それよりもジェットのお父さんに伝えてもらいたいことがある。」

「何ですか?」

範人は自分のミスを認められるようになっていた。恋をすると人は変わると言うが、きつとその通りなのだろう。範人の口からこんな言葉が出たのだから。

「エージェント ハント・ゴートレックはミッションを完璧にはこなせず、ターゲットと接触した。ってな。」

「いいんですよ。範人さんと会わなければ、フランちゃんにも会えませんでしたし、僕はきつと死んでいましたから。」

「そう言ってもらえるのは嬉しいんだがな。言っておいてくれ。」

「わかりました。」

「あと、これを渡す。」

範人はポケットから紙を取り出してジェットに渡した。ジェットはそれを不思議そうに眺める。

「もし、フランといっしょになりたいならそこに電話しろ。俺の電話番号だ。その後、ゴートレック生物研究所の住所の場所に行けば、迎えに行く。」

「ありがとうございます。」

「ただし、それは戻れない一線だ。もうわかっていると思うが、俺たちはこの世界の者じゃない。この世界に未練を残さないように覚悟を決めてから電話しな。」

「わ、わかりました。」

範人たちは遊園地から去ろうとした。その範人たちにジェットがお札を叫ぶ。

「今日は本当にありがとうございましたー！」

その言葉に範人は背を向けたまま、無言で右手を振って応えた。妖夢とフランは言葉で返す。

「またお会いしましょう。」

「またねー！」

駐車場に向かう途中で妖夢が範人に話しかける。

「それにしても、今日は大変でしたね。」

「ああ、そうだな。」

「でも、楽しかった〜♪」

フランは範人たちに満面の笑みを見せる。

本当に今日はいろんなことがあった。フランに恋人ができたし、ジェットコースターにも乗った。B・O・Wも処分した。お化け屋敷は……思い出したくないな。

そういえば、こんなに楽しかったのは何時ぶりだろうか？こんなにあの時を忘れられたのは何時ぶりだろうか？あの悲劇を……俺が本当の化け物になったときを忘れられたのは……。

あれ？何か忘れていているような気が……。確か、行きは車だったよな……それなら帰りも車って……。

「うわー！」

「ど、どうしたんですか？！」

妖夢が驚き、範人の方を向く。その範人は顔を青くしている。

「ヤバイ、帰りもあの運転手だ……。」

その時、妖夢の脳裏に行きの悲劇が浮かんだ。スリル満点の安全な運転とか言っておきながら安全なんて言葉はどこにも見当たらない

運転手。二度と乗りたくないあの車。考えただけでも吐き気を催す。

「ああ……また、リックさんですか？」

「多分……。」

気分が沈み込んでいる2人とは反対にフランは目を輝かせている。

「またあの人の運転？ やったー♪」

「Oh……。」

2人の気分はフランの喜ぶ顔を見てもあまり回復しなかった。

すまない、妖夢。恨むんだったら俺の交渉スキルの低さを恨んでくれ。あの運転手以外にしてくれと何度頼んだことか……。

「そんなにヘコんでどうしたんだ？」

そこにかけられた陽気な声。だが、それはリックのものではなかった。しかし、範人には聞き覚えのある声だった。自分を弟と呼び、どんなときもジョークを混ぜて話した話し方で周りを安心させてくれた人。

「あ、兄貴……。」

レオン・S・ケネディがそこにいた。

「久しぶりだな、ハント。」

「なんで、こんなところに？ それよりもリックは？」

「リックからお前がいるって聞いてな。それでここに来たんだ。帰りは俺の運転だぞ。」

その瞬間、範人と妖夢は歓喜の叫びを上げそうになったがなんとか呑み込んだ。それほどまでにリックの運転は2人にとってトラウマになっていた。

「まあ、早く乗れよ。」

4人は車に乗り込んだ。

いや、やっぱり安全な運転っていいよな。クールな運転も悪くないけど、さすがにリックの運転は勘弁だ。車両は安全第一、これ大事。

「それにしても驚いたな。まさか、ハントに子供がいたとは……。」

「そういうタチの悪い冗談はやめてもらえない？」

「いや、俺は本気でそう思ったぞ。」

「なんだこれ？俺って年齢不明なの？せめて、姪ならわからないでもないけど……。この年齢で子持ちって……。俺ってそんなに悪い奴に見えるのか？」

「はあ……。大人と子供で見られ方がこんなに違うとはな。」

「本当にもうおかしいだろ。ちびっこたちから見れば、俺はお兄さん。大人たちから見れば、俺は父っつあん。訳がわからん。兄貴、笑わないでくれよ。」

「それにしてもかわいい娘が彼女になったな。」

「は、はい!?？」

兄貴の言葉に妖夢が顔を赤くする。まあ、妖夢がかわいいのは俺も同感だ。というか、そうじゃなきゃ（多分）付き合っていないの。「弟のハントがお世話になっています。」

「いえいえ、こちらこそ範人がお世話になっています。」

あれ？俺の立場って何？俺は何時から世話をされる方になったんだ？

「はあ……。ハントにも彼女か……。俺はまだだっというのによ。」

「エイダさんがいるよね。」

「エイダは確かに美人だが、逃げられる気がする。最近会ってないし。」

いや、そんなことはないと思う。前に研究所に来ていたときなんて、兄貴の話ばかりだった。エイダさんは逃げているわけじゃなくて恥ずかしいだけだと思うんだけどな。

「それならクレアさんは？」

「ダメだ。あいつの心はあの青年に向いている。もう会えないことはわかっているはずなのにな。」

脳内に浮かんだのはステイブ。実際に会ったことはないがかなりの好青年だったらしい。俺自身にも使用されたt-Veronicaを打ち込まれて生物兵器になってしまったらしい。しかも、遺体をアルバート・ウエスカーに回収されたため、遺体もない。

「それは気の毒だな。……。復活させることもできないわけじゃないん

「だけど。」

「それは望まないだろうからな。命は一つだけだからこそ美しいんだ。」

「その通りだよ。」

俺が言えたことではないが、全くその通りだと思う。命が失われればもちろん悲しい。消えてもらいたくないときだつてある。でも、みんな命を燃やして生きている。それはいつか燃え尽きる。限られたときを全力で生きるからすばらしいのだ。

「私もそう思います。私の言えたことではないんですけどね。」

「俺の言えたことでもないよ。」

「ははは、よく考えたら俺もだ。普通の人間だったら軽く死んでいるようなミツシヨンをこなしてきたわけだからな。そっちの娘も死にかけたのか?」

「いえ、半分死んでいるんです。」

おい、ちよつと待て!それはこの世界で言つちやいけないことだろ!そんなこと街で言つてみる、頭おかしいと思われるぞ!

だが、兄貴はそれを笑わなかった。もしかしたら、妖夢が何者であるか、気づいているのかもしれない。

「あれ?笑わないんですか?」

「何を言っているんだ?ハントの彼女ならそのくらいおかしくない。それに幻想郷から来たんだろ?別に不思議でもなんともないさ。」

ああ、そうだった。兄貴は姉さんとも仲が良かったんだ。てことは姉さん、幻想郷の話をしたんだな。

「知つてたんですか?」

「紫から聞いてな。ほら、到着するぞ。」

俺は車内を見回した。フランが眠ってしまったことに気づき、起こそうとする。だが、それを妖夢が止めて、口の前で指を当てて「起こしてはダメですよ」と伝えてきた。俺は黙って頷いてフランをおんぶした。

「ありがとうございました。」

「ありがとな。」

「構わないさ。それよりも今度一緒にミツシヨン行こうか。」

3人で静かに話をする俺たちはその場を後にした。スキマを開いて幻想郷に帰る。

範人たちが幻想郷に去り、1人になったレオンが呟く。

「あいつにも彼女か……。俺だって彼女とか嫁とか欲しいのにな。」

そんなレオンを背後の少し離れた場所から見つめるアジア系アメリカ人の女性が1人。エイダ・ウオンである。

「その願い、私が叶えてもいいわよ、レオン。」

エイダは妖しげに笑うとフックショットを使用して夜の街へ消えていった。レオンが気配に気づいて振り向いたがそこには何者の姿もなかった。

「また、逃げられたか……。泣けるぜ。」

1人だけになったレオンはそう呟いた。

Jet story

ジェット・アルカード。エージェント ハント・ゴートレック 通称 Dr. bloodの監視ミッションのターゲット。彼は遊園地から家に帰ってきた。

「ただいま〜♪」

「おかえり。」

ジェットを出迎えたのは彼の父親。政治家をしており、バイオテロの対策を考案したりしている。今回の監視ミッションを依頼したのも彼である。

「やけに上機嫌じゃないか。何かあったのか？」

「今は秘密だけど、すぐに教えるよ。」

「なんだよ？気になるじゃないか。」

ジェットはハントに言われたことを実行する。父親にハントのミッションの様子を伝えるということだ。上機嫌になっている理由はそれ以降に教えることに決めている。

「まずはハントさんからのメッセージだよ。」

「何!?!?ハント!?!?」

ハントという名前を聞いた瞬間に父親の表情が変わる。ジェットはそれを不思議に思ったが、あまり気にせず、話を続ける。

「エージェント ハント・ゴートレックはミッションを完璧にはこなせず、ターゲットと接触した。だってさ。」

「ハ、ハント……あの野郎……。」

父親の表情が怒りに包まれ、身体が怒りで震え始める。

彼はもともと、生物兵器が嫌いだった。そのため、ハントのことももちろん気に食わなかった。それでも、ハントは伝説的な最強と言われるエージェント。だから、彼はハントにミッションを依頼したのだ。

そのハントがターゲット…自分の息子に接触した。それが許せなかったのだ。

生物兵器は汚らしいもの。彼の中ではそう定義付けられていた。

「だ、大丈夫だったか？何かされなかったか？」

「何もされてないよ。」

一度否定されるがそれを認めずに再度問い詰める。

「いや、何かされたんだろ？」

「されてないって。」

二度目の否定。それでも認めることができない。生物兵器は完全に悪、という考えが彼を動かす。

「きつと、されたんだ。口封じされているんだろ？」

「……だから、されてないって。」

三度目の否定。それでも認めることはできない……いや、認めてはいけない。何か酷いことをされて、それで口封じをされている。彼はそう思い込んでいる。

「されたんだろ？何か酷いことをされて、口封じされているんだろ？」

「うるせー黙れ!!されてねーつってんだろ!!!」

『仏の顔も三度まで』という言葉がわかるだろうか？今のジェットはまさにその状態である。

目の前の父親は自分を救ってくれたハントを否定している。その否定を否定する自分の意見になんて耳を貸していないということがわかった。

初めは普通に許せた。だが、二度、三度と問われるうちに怒りが湧いてきた。三度まではなんとか許せた。だが、四度目。もう許せなかった。怒りが爆発した。

「ハントさんは僕を助けてくれたんだぞ！その人を否定するな！」

父親の動きが止まる。5秒間程のフリーズ。その時間があれば、あの時、自分だけだったなら10回は死んでいただろう。

フリーズの後、父親が頭を冷やしたのか。落ち着いた様子になる。

「……悪かった。されてないならそれで良い。」

「その言葉は僕じゃなくてハントさんに言ってもらいたいよ。」

「で、どうだった？楽しかったか？」

父親が逃げるように話を変える。ジェットは少し気に入らなかったが、会話が安定した話題に戻ると考えるとどうでもよかった。この

話題なら、先程のようになることはないだろう。

「とても楽しかった。楽しすぎて他に言い方がわからないくらい。」

「そうか。それは良かったな。」

「新しく友達ができたしね。」

「それは誰だ？」

「ハントさんと妖夢さん、あとはフランちゃんだね。」

それを聞いて父親は頭を抱えた。当然といえば当然だろう。まさか、自分の嫌いな生物兵器が息子の友達をなるとは思うまい。しかも、それがミツシヨンを依頼したエージェントとも。

「……それで大丈夫だったんだよな？」

「うん、大丈夫だった。化け物に襲われそうになったときに3人が助けてくれたんだ。みんな強くて優しかったよ。」

父親は安心したがやはり生物兵器は信じられない。でも、少しなら心があるのだろうか？と彼は思いつつあった。

「良かった……お前が無事で本当に良かった。」

「それでね……お父さん。」

「どうしたんだ？」

ジェットがモジモジしている。父親は不思議に思い、彼に問いかけた。

「…僕ね、好きな人ができたんだ……。」

父親は驚いた。それはもう頭にかぶっている鬘が吹き飛ぶくらいに。まさか、自分の子供が恋に落ちるとは思っていなかった。父親は再びフリーズした。

「……。」

あまりの驚きに言葉を発することもできない。なんとか聞いたことを理解できるといった状態である。

「それでね。告白したら……OKもらったんだ。」

『OK』という言葉で父親の意識が復活、フリーズから解放された。だが、未だに『OK』の言葉が信じられない。もしかしたら、弄ばれているのかもしれないと思ってしまう。

「それは弄ばれているんじゃないか？」

「それはないと思うよ。向こうからの告白だったから。その後こっちが伝えたんだから。」

「そ、そうか。それは良かったな。」

我が子の恋が実ったことは嬉しい。だが、それは同時に悲しい複雑な感情が絡んでいた。もしかしたら、我が子が離れてしまうかもしれない、そう思えてしまう。いや、実際にそうなのだろう。

「……でも……。」

「どうした？」

「その人にまた会うには僕はここからいなくならなきゃいけないんだ……。」

「……そうか。」

やはり、そうだった。いつかは離れていってしまう、いつかは離れなければならなくなってしまう。喜びの背後にはいつも悲しみがついて回る。我が子の恋の成就是愛する我が子との別れを示唆するものでもあった。

「お父さんは僕がいなくなったら悲しい？」

「もちろん悲しい。」

悲しいに決まっている。悲しくないはずがない。それは互いに同じだ。だが、悲しみを乗り越えて人……いや、生物は成長する。父親にはそれがわかっていった。

「……だけど、それはいつか必ず起きることだ。それが今なのか、一週間後なのか、一年後なのかは誰にもわからない。……未練を残すなよ。」

「それって……。」

「ああ。」

決めていた。いつか来るとわかっていたから、そのいつかがいつなのかわからなかったから覚悟はしていた。彼はそのときには必ず子供の背中を押すことに決めていた。

「父さんはお前を応援する。お前の好きにすればいいさ。一度きりの人生だ。後悔しないようにやりたいことをすればいい。」

「ありがとう。」

「父さんの決めていたことだ。いつ、ここからいなくなるんだ？」

「それはそのときになったら言うよ。それまで、未練を残さないように精一杯楽しむ。」

一緒にいて欲しい。だが、独り立ちもして欲しい。愛するが故の悲しみは父親の心に深く染み込む。しかし、ジエツトもまた覚悟を決めていたのだ。我が子への愛でその邪魔はできない。

「今日は疲れたからもう寝るよ。おやすみ。」

「ああ、おやすみ。」

ジエツトがいなくなつた部屋。2人で使うには…いや、3人で使うにも、もともとのこの部屋は広過ぎた。だが、今はより一層広くなつたような気がする。

ジエツトの話を聞いたからだろうか？ジエツトが去つてしまうことを知つたからだろうか？いつかは離れてしまうことが再認識できたからだろうか？

きつと全てだろう。

「ジエツトは良い子に育つたよ。……エマ、今も見てくれているかい？」

1人だけになつた部屋で彼が呟く。彼の心に浮かんでいるのは一年前にバイオテロの街で生物兵器と共に焼き消された妻の姿だった。悲劇の街に消えた大切な人の姿だった。

「さて、私も寝るか。」

彼は立ち上がり、寝室に向かう。その心では我が子の独り立ちへの喜びと悲しみが複雑に絡み合っていた。だからこそ、それらの感情はどんな天秤で測つてもどちらにも傾くことがない美しい愛なのだ。彼は親になって初めて知つた。

第四十六話

春が来ない!??

今日も雪が降る。もうずっとこんな様子だ。外は銀世界。俺は相変わらず、魔理沙の家に同棲させてもらっている。

気温が低いせいかな最近は妖怪退治の依頼が来ない。妖怪つて冬眠するのかな？スキマ妖怪が冬眠するっていうことは聞いたことがあるのだけれど……。まあ、被害が無いのは良いことだ。

……て、ちよつと待て！そもそも雪が降っていることがおかしい。今は何月だと思う？五月だぜ！Mayだよ、May！それなのに雪が降るってどこの極圏だよ？どう考えてもおかしいだろ！

「魔理沙ー、これ絶対おかしいだろー。春が来ないなんて間違いなく異変だぜ。」

「私もそうだと思うんだけどな……。どうしよう？」

「いや、どうしようじゃなくてだな。解決しないのか？」

いつもの魔理沙なら、もう既に箒に乗って飛び回っていてもおかしくない。それに春が来ないなんて大問題だ。人里の人々も困っているはずである。

「いやー、こうしていると優と一緒にいられる時間が長くて嬉しくてな。」

「それは俺も嬉しいけどな……。それで解決しないのはどうかと思うぞ。」

いつもの魔理沙はどこへ行ったのやら……。家の中でコタツに入っただけのんびりしているなんてらしくない。俺ものんびりするのは嫌いじゃないんだが、寒いままっというのは困る。花見もできない。

「花見できなくてもいいのか？」

俺がそう言った瞬間に魔理沙の目が変わった。コタツから飛び出て、そのコタツの上に片足を乗せる。

「そうだぜー！春が来ないと花見ができないじゃないか！」

魔理沙がそう叫ぶ。それでこそ魔理沙らしい。騒がしいことが好きで豪快。こういうかつこいいところがあつて魔理沙なのだ。……だが、今は少し問題がある。

「……カツコつけているところ悪いんだけどさ、スカートの中見えちゃってるから。」

こちらはコタツに入っているのである。その目の前でコタツに片足なんて乗せられたら見えないはずがない。魔理沙は顔を赤くしてコタツから離れる。

「と、とにかく、異変だ。行こうぜ！」

あ、誤魔化した。まあ、それでもいいや。今は異変を解決しないといけないな。人々も困っているだろう。

「おう！」

俺は魔理沙の後に続いて飛びたった。

今日は休日。今は湖の絵を仕上げたところだ。凍りついた湖は幻想的である。しかも、これが五月なのだから驚きだ。凍りついた湖にほとりの建つ紅い館。こんな絵はなかなか描けない。

「デューレス、お嬢様がお呼びよ。」

「わかりました。すぐに伺います。」

そんなときにお嬢様に呼ばれた。まあ、絵はちやうど描き終わったところだから問題ない。それに主の命令だから聞かないわけにはいかない。僕は画材を片付けて主の部屋に向かった。

「お呼びでしょうか？」

「入りなさい。」

僕は主の部屋に入った。お嬢様が正面の椅子に座っている。小さいのに主なんて、さすがだ。吸血鬼のカリスマは半端じゃない。

「……何か失礼なこと考えなかつた？」

「いえ。ご用件はなんでしよう？」

僕が何かヤバイことでも考えたのだろうか？しかも、それが顔に出ていたのか？……思い当たる節がない。ひとまず、用件を訊く。

「もう五月だというのに外は一面の銀世界。これが何を意味するかわかるかしら？」

「異変……でしょうか？」

前に紫さんから聞いたことがあるが、この世界ではこういった不思議なことが起こるらしい。それらを総称して異変と言うらしいが僕はこれが初めての異変だった。

「そう。これは異変よ。」

「私に異変を解決してこい、と？」

「その通り。春には花見が行われるのだけれどね。今年はまだ、春が来ていないのよ。早く花見がしたいからこの異変を解決してきてくれないかしら？」

うむ。お嬢様らしい。カリスマ溢れる吸血鬼であつてもやはり考えることは見た目相応だ。花見がしたいから異変を解決してこい、つて……まあ、花見を待っている人妖は多いだろうし、いかない理由はないけどね。

「わかりました。」

「やっぱり、失礼なこと考えなかった？」

「いえ。」

「そう……。咲夜を連れていきなさい。二人で協力した方が良いでしょう。咲夜！」

お嬢様が咲夜さんの名前を呼んだ瞬間に咲夜さんが現れた。やはり、時を操るのはすごいと思う。

「お呼びでしょうか、お嬢様？」

「デューレスと一緒に異変解決に行ってください。」

「かしこまりました。」

「ありがとうございます。では、行ってまいります。」
「行ってらっしゃい。」

僕は咲夜さんと共に主の部屋に後にした。そのとき、咲夜さんの表情が笑っていたような気がしたけど、気のせいだろう。

俺と魔理沙は博麗神社に来ていた。目的はもちろん、霊夢の協力を求めるためである。魔理沙が神社の裏へ走っていく後を追う。

「霊夢、これは異変だぜ！」

魔理沙が障子を勢いよく開ける。霊夢はギョツとした表情を浮かべたが、すぐに厳しい目で魔理沙を睨みつけた。

「相変わらず騒がしいわね。今年は単純に春が遅いだけじゃないの？」

「何を言っているんだぜ！もう五月じゃないか！いくらなんでもこれは遅すぎるだろ！」

「私は行く気ないから。」

その言葉に魔理沙は怒りを隠せない。幻想郷の管理者なるものがバランスを保とうとしないとはどういうことだろうか。俺も怒りが湧いたが、心の奥に押し留める。

「何を言っているんだぜ！幻想郷のバランスを保つのが霊夢の仕事だろ！」

「私がこれだいいと思うのだから、今はこれがいいのよ。魔理沙の言う通りなら、私がバランスの基準だからね。」

「ふざけるな！」

魔理沙が怒りに任せて霊夢に掴みかかろうとする。俺はマズイと思いい、後ろから羽交い締めにして止める。これはこれで充分マズイと思うが、魔理沙のことだから許してくれるだろう。

「落ち着け！」

「はーなーせー！」

魔理沙は逃れようともがく。俺はさらに力を強めて魔理沙の抵抗を止める。霊夢はそれをくだらなそうにして、見ていた。10秒程して、魔理沙がおとなしくなる。

「……悪い、離してくれ。」

俺は無言で魔理沙を解放する。魔理沙は霊夢を軽蔑の眼差しで見つめるが、霊夢は何の反応も示さない。それを見てさすがの俺も頭にくきた。きつと、今の俺の表情は怒りが現れているだろう。

「……行こう。」

「でも……」

「俺たちで異変を解決してやろうぜ。」

俺がそう言うのと魔理沙の目が輝いた。何も異変解決は博麗の巫女だけの仕事ではない。俺たちにだってできる。それに知り合いにはもっと強いやつがいる。

「じゃあな。遅れて来て、いいところ取りは許さないからな。」

「じゃあなー！」

魔理沙が障子を勢いよく閉じて、バシン！という音が鳴る。俺たちは同時に飛び立った。気持ちはまだムシヤクシヤしていた。

「で、今度は誰に頼む？」

「範人はどうだ？」

俺が知っている中で最強の生物…いや、人間だ。範人が一緒なら大抵の異変ならすぐに解決できるだろう。

「範人か…いいな。行こうぜ！」

俺たちは範人の研究所を目指した。

俺たちは範人の家の前で沈黙した。何故か？それは玄関のドアに貼られていた紙が原因である。その紙にはこう書いてあった。

『向こうの世界でミッションがあるため、今日は午後3時までいません。』

いないってなんだよ、いないって！こんな肝心なときにいないってどういうことだよ！あの『単身バイオハザード』め！おかしくない？最強クラスの2人に断られたんぜ！範人はミッションで仕方ないからいいけどさ。霊夢はなんだよ。私がバランスの基準だから！？ふざけんなよ！こんなに思い通りにいかないのって超稀だよ。こんなにも頼みを断られることって普通ある？

「まあ、いいじゃないか。行こうぜ。」

「そうは言ってもなあ。本当に俺たちだけで大丈夫か？」

「大丈夫だ。……多分。」

この人、今、多分って言ったよ！？いつもの自信はどこへ行った？本格的に心配になってきた。……まあいい。当たって砕けるだ。砕けちゃダメだけど、当たるだけ当たってやる。

「わかった、行こう。」

「よし、それでこそ優だぜ。」
俺たちは異変の主犯の手がかりを探し始めた。

第四十七話

氷精と雪女

俺と魔理沙は吹雪の中を飛んでいる。つい1分くらい前までは雪がちらつく程度だったが、今ではかなり強い吹雪になってしまった。この吹雪が俺たちにとってはかなり煩わしい。視界は狭くなるし、風でバランスが崩れる。飛ぶことに支障をきたす。

「グウウ……これは困ったな」

「本当だぜ。スピードが出せない」

それでもなんとか進んできたのだし、霊夢にも偉そうなことを言っ
てしまった。後戻りはできない。吹雪の奥に目をやると人影が見え
た。

「魔理沙、人影が見えるんだけど」

「本当か？ どれどれ……本当だな。誰なんだ？」

魔理沙がこちらを見ながらに言う。誰なんだと訊かれてもわかる
はずがない。こんな吹雪で相手を特定できるはずがないだろう。

「もしかしたら、この異変の主犯かもしれないな」

「それはさすがに無いと思うぜ」

「そうだよな。まだ一面に入ったばかりだし」

「一面……ってなんだ？」

「こちらの話だ。気にしないでくれ」

なんだろう？ なんか言っちゃいけないことを言った気がする。

まあ、ここは流してもらおう。作者の文章力のためにも。

……今、どっかの人がメタイとか言っているかもしれない。

「まあ、進んでいけば、何か見つかるだろう」

「行き当たりバッタリかよ」

そういや、この異変について手がかりなんて何も見つけてないな。

……早く主犯を見つけて解決しないと。

「わからないから進んでみるんだろ？」

「それもそうだな。早く「ビュン！」……へ？？」

耳元を何かが掠めていった。周りを見ると氷の弾幕が飛んできて
いた。すぐに体制を整えてかわす。全てをかわし終えると何者かが

近づいてきた。

「アタイの攻撃をかわすとはなかなかやるわね」

「お前はチルノ！」

近づいてきた者はチルノだった。俺の中では『The・バカ』または『M s. バカ』という認識になっている。いいやつということはおかっているのだが、誰彼構わず攻撃するのはやめていただきたい。

「あのさあ、俺たち今異変解決中なの。だから、邪魔するのはやめてくれない？」

「そうなの？？ わかった、やめる」

おや、案外素直に諦めてくれた。……いや、待てよ。そもそも、こんな簡単に諦めてくれるって、おかしくないか？ ここでチルノが諦めてくれたということは何かのフラグだったりしないよな。

「あら、その異変はこの長続きする冬のことかしら？」

そんなことを考えていると誰かがやって来た。白い服に白いマフラー。見た目だけでは何者かはわからない。この世界のほとんどの者に言えることかもしれないが……。だが、間違いなく妖怪だろう。妖怪の力……妖力だっけな？ それを感じる。

「初めまして、かな？」

「そうね」

「そうか。じゃあ、とりあえず自己紹介。俺は難波優だ。よろしく」

「よろしくね。私はレティ・ホワイトロックよ。魔理沙は前に会ったわね。……それで質問に対する答えは？」

「Yesだ」

俺がそう答えた瞬間にレティを中心に魔方阵が出現した。

戦う気だな。まあ、俺は構わないけど……。ていうか、さっきのはやっぱりフラグだったよ。こういうとき、俺はフラグブレイカーになりたい。

「こんなに心地が良いのよ。この冬は終わらせないわ」

レティはそう言うと言幕を放ってきた。だが、そんなものにやられる俺と魔理沙ではない。軽くかわしていく。

「そんな攻撃当たらないぜ！」

「軽い、軽い！」

「っ……、チルノ！」

レティは小さく舌打ちをするとチルノを呼んだ。なんのつもりだろうか？ チルノがレティの方にやってくる。

「何？」

「魔理沙と優はこの冬を終わらせるつもりよ」

「なんだって!?？」

「だからチルノも協力しなさい」

「わかったよ。……さあ、アタイが相手だ」

Oh……さすがMs. バカだ。もう既にレティのことなんて忘れて自分一人で戦う気だよ。そのレティは……おお！ 見事なorz体勢。空中でよくそんなポーズとれるな。

「あのー、チルノさん。誰かを忘れちゃいませんか？」

「ん？ 誰かって誰？」

「チルノ……あんたね……。」

ウワオ！ さらに見事なorz体勢だ。

おい作者！ 頭に落ち込んでいます的なのつけるの忘れるなよ！

何!?？ 挿絵はつかねーだど!?？

え？ メタいつて？ ……気にすんな。

「なんか寒気がしたぜ……」

「うう……アタイも」

「お前ら……」

まさか、俺までorz体勢になるとは……。こいつら言葉にとんでもない破壊力を持ってやがるぜ。心が一撃で叩き潰された。

「チルノ、私と一緒に戦うのよ」

「あ、そうだったの。ごめんね」

「いいわ。水に流してあげる」

「トイレか？」

「バカにしているの？」

こいつらはなんだよ。氷関係のコンビだからチームワーク抜群だと思っただけ、そんなもの全然感じられないぞ。ああ、こいつら見て

たらなんか回復したみたいだ。

「まあ、ここではその水も凍りつくけどね！」

「それなら私たちがその氷を溶かしてやるぜ！」

「その言葉、いいセンスだ！」

「アタイたちのチームワーク見せてやる！」

チルノとレテイが弾幕を放ってくる。さすがに2人同時となると密度が濃い。だが、そんなもの効かない。俺と魔理沙も弾幕を放って応戦する。俺の弾幕はクリスタル形だ。形に合わせて飛ばせば、スピードも出るし、破壊力も上がる。そして、一番の特徴は半透明であるというところだ。

「協力なんて初めてだな。」

「私もだぜ。……それよりも」

「足引つ張るなよ！」

俺たちは弾幕をさらに濃くした。すると、レテイはその場に留まり弾幕で相殺、チルノは上空へ飛んでかわした。

「くらいなさい。」

寒符『リングリングゴールド』

雪の結晶のような弾幕が飛んでくる。弾幕勝負では美しさも大切だと聞いたがこういうことなのだろう。自然のものは美しい。だが、かわし易い。魔理沙は箒で叩き落している。

「そんなものはこうしてー」

俺は弾幕を発射するのではなく腕に纏わせた。弾幕が目前に迫ってきたときに腕を前に出し、弾幕のアーマーを傘のように広げる。

「こうじゃー！」

腕を軸に弾幕を回転させ、飛んできた弾幕を弾き返す。そして、防ぎきった後に発射。腕を軸に回転させながらのため、ガトリングのように発射される。

「何よ!?…?…?これ!?…?」

レテイは焦りながらもかわす。

スゲエ！銃弾並みのスピードの弾幕をかわしてやがるぜ！機械と対立している人間のみなさん、ここに救世主がいます。

「危ない危ない。……やってくれたわね」

「へへへ♪」

「どんなもんだい!」

「そんなあなたたちに注意よ。これから天気が変わります。」

「それがどうした「ヒュン!」ウオ!?」

気がつくと電が降り注いでいた。しかも、普通の電ではない。一つ一つが攻撃性を持つ弾幕の電だ。そういえば、あのときからチルノの姿が見られない。あのときにチルノは上に飛んで……、

「まさか!?」

「そのまさかよ」

俺が上を向くとチルノが弾幕を精製していた。弾幕は電のように落ちてくる。

ちなみにスカートの中は見えない。逆光で見えなかった。いいか、俺は見えていないんだ!見ようともしていないからな!

とまあ、ふざけたことを考えているわけではない。

こいつら、最初からこんな作戦を持っていたのか……。

思わず驚きの表情を浮かべてしまう。それは魔理沙も同じだった。

「アタイを忘れてもらったら困るよ。アタイはサイキョーだからね!」

「さあ、上からと横からの攻撃をかわしきれるかしら?」

レティからは通常の弾幕が発射、チルノは特大の電を降らせてくる。

かわすことは無理。

直感でそう感じた。だから跳ね返す。

「魔理沙! こっちへ!」

「おう!」

魔理沙が俺の近くに来たところでスペルカードを発動する。レティとチルノの弾幕はもう10cmのところまで迫ってきていた。

「反符『リフレクションスペース』」

俺は能力を使用し、周りの空間を移し替えた。空間の壁が俺と魔理沙を包み込む。それは見えない反発の壁。あらゆるものはそれに触

れたときに抗力を受けて跳ね返る。そして、跳ね返ったものはこちらの攻撃になる。

「何!?? 弾幕が返される!??」

「そんなの常識的に卑怯だぞ!」

「ハハハ! 何を言っているんだ? 戦いつてもんは常識を超えないと勝てねーんだよ! それにここは幻想郷だろ。常識なんてもんはそもそも存在しねーよ」

俺はそう言い切つて、反発力を強くした。と言っても、さらに強い反発力を持つ空間に移し替えた。だけなのだが……。

空間は全ての弾幕を跳ね返し、その弾幕はレティとチルノに向かつていく。だが、もともとそこまで速い弾幕ではなかったためあっさりとかわされた。まあ、牽制くらいにはなっただろう。

「くつ……、やるわね」

「今更気づいた?」

「チルノ!合体技よ!」

「うん!」

「『大寒波『冬將軍の軍勢』!」

レティとチルノが詠唱すると氷の彫刻が大量に現れた。これほども美しい弾幕だ。俺が氷の彫刻に見惚れていると氷の彫刻たちが意思を持ったかのように動き出した。

「さあ、行きなさい」

「やっちやえー!」

彫刻たちが突撃を開始した。その数はおよそ300体ほどだろうか。人型をした騎士のような彫刻が斬りつけてきた。弾幕で防御を試みるが、氷の剣はそれをあっさりと叩き落した。俺は紙一重で剣をかまし、腹部に蹴りを入れた。だが、氷であっても鎧は頑強なのか、傷一つつかなかった。そこへ鷹の形の彫刻が急降下で突っ込んでくる。

「ヤバイ!??」

とっさに自身と鷹の位置を能力で移し替えた。なんとかかわせたが次に飛んできたらどうなるかわからない。

「キヤアアア!」

「魔理沙！」

気がつくとも魔理沙が騎士の彫刻たちに囲まれていた。俺は咄嗟に位置を移し替える。騎士たちのうちの一体と魔理沙の位置が入れ替わり、剣を振り下ろされた騎士は砕け散った。そんな俺のところへ馬に乗った騎士が槍を構えて突っ込んできた。

「な!?？」

「恋符『マスタースパーク』」

助かった。魔理沙のマスタースパークで騎士は溶けて消えた。強力な破壊力を持つ魔理沙の魔法の前では頑強な鎧も意味を成さないらしい。

……それなら！

そこで俺はあるスペルカードを思いついた。そのスペルカードなら、この場の敵を全滅させることができる。俺は能力で魔理沙をすぐ背後の彫刻と入れ替えた。

「魔理沙！今、空白のスペルカード持っているか？」

「ああ、持っているけど……どうするんだ？」

「今この場でスペルカードを作る！」

「何イ！」

「勝つにはそれしかない。今から俺の言う通りに想像してくれ」

「……仕方ないな。こうなったら付き合ってやる」

「よし！じゃあ……」

……という感じだ。できたか？」

「ああ、できたぜ」

俺たちの手の中には新しいスペルカードがあった。

「何度も言うがこれは合体技だからな。うまく合わせてくれよ」

「おう！」

「じゃあ、行くぞー！」

「『鏡乱光球』『マッドネススパーク』」

まず、俺が大きめの弾幕を放つ。この弾幕は通常の弾幕とは異なり、角ついた球体である。その後、魔理沙がマスタースパークを俺の弾幕に撃ち込んだ。

マスタースパークは光と熱の魔法。俺の弾幕は半透明だ。半透明ということは空気とは光の透過率が異なるということ。そして、光は元の物体とは透過率の異なる物体に入るとき、屈折または反射する。わかるだろうか？ マスタースパークは光と熱の魔法であるために俺の弾幕の中に入るのだ。さらに俺の弾幕は入った光が少し出にくいように精製してある。つまり、弾幕の中で反射を繰り返すのだ。光は反射したものが集まるとエネルギーが大きくなる。そこでエネルギーが大きくなったところで弾幕の中からランダムに増幅されたマスタースパークが飛び出す。その様子のまさに鏡乱光球だ。

「うわー、スゲエ破壊力」

「こんなのを思いついたのかよ……」

彫刻たちは光に当たると一瞬にして溶けて消えた。……いや、浄化されたと言った方がいいだろうか。そして、ランダムに飛び出す攻撃の対象は彫刻たちだけではない。その攻撃はレティとチルノに向かって飛んでいく。

「キヤアアアアー！」

「うわー！」

2人は見事に被弾。真つ逆さまに落ちていく。あまりの威力に一撃でダウンしたのだろう。俺たちはスペルカードを解除した。

「戦う相手を選ぶときは相手の潜在能力も考えな」

俺はレティとチルノに向かってそう言った。聞こえているかどうかは知らないが……。

「何を言っているんだ？ 早く先に進もうぜ！」

「おい、待てよ魔理沙！ 折角、画面の向こうのみんなにかっこいいところ見せようと思ったのに……」

「本当に何言ってるんだよ。早く行こうぜ！」

「はい……」

魔理沙に急かされ、俺たちは先に進んだ。

そういえば、挿絵がつかないんだから、そもそもかっこいいところなんて見えないよね。

第四十八話

迷ひ家の猫叉

フハハ、ついに吹雪を抜けたぜ！あれは本当に面倒くさかった。周りが全然見えねーんだからよ。飛びづらいつたらありやしない。

「さーてきて、今回は誰に会うのかな？」

「何言ってるんだ？」

「気にするな！」

フツフツフツ……これは主人公格にしかわからないものなのだよ、魔理沙君。そうは思いませんかね？画面の向こうの友達よ。

「いいんじゃない？」

「壁が破られた……。」

「お前に主人公は無理だ。」

あんまりだー！こうなったら、範人に勝ってやるぜ！オラア！

「お？あんなどころに家なんてあったっけ？」

魔理沙が指差す方を見ると確かに家があった。

俺はあまり遠出はしないし、家から出ることもあまりないからそんなことはよくわからない。

「この引きこもりが。」

「引きNEET。」

うるせえ！余計なお世話だ！俺はやるときはやる男なんだよ！そんなに言うなら依頼の1つや2つ持って来いや！この俺様がすぐに解決してやるぜ！

……と、魔理沙の質問に答えないといけないな。

「俺も知らないな。」

「引きこもりにはわからないか。」

「魔理沙もそう言うのかよ。」

『も』って、他の誰かにも言われたのか？」

「あ、それはスルーしてくれ。」

ふふふ、やはりこれは俺の特権なのだよ。『壁を越える程度の能力』でもあったのかもしれないな。

「それはないだろ。」

「温泉で欲しいな。」

やっぱり、そんな能力あるはずないよね。あつたら応用が強そうだけど。それと2人目、覗きは犯罪だ。お巡りさん呼ぶぞ、白狼天狗の。

「おい、寄っていきいぜー！」

「なんで？」

「お宝があるかもしれない。」

あ、やっぱりそうなるんですね。まあ、家を見たときからなんとなくわかつてはいたけど……。これは借りてもこの作品中には返さないな。作者が魔理沙を生かすだろうから……。

「……わかった。行こう。」

俺たちは知らない家に降りた。

さーて、ここでは何が起きるかな？ イベントの匂いがプンプンするぜえ！

「おおー！スゲー！なんだこの料理は!?？」

違った。イベントの匂いじゃなくて飯の匂いだった。ていうか本当に美味そうだなオイ！でも、こういうのは食べちゃいけない……。っってお婆ちゃんが言ってた。なんだっけな？ 確か帰れなくなるんだっ たっけ？ とにかく、食||厄介事になる。

「お前の思い通りになると思うなよ。」

「それはフラグだろ？」

ああー！ やっちまったー！ 自らフラグ建てちまったー！ どうしよう……。これは終わったか？ 終わったのかー！

「優は食べないのか？」

「食べちゃダメだ！」

「なんでだ？」

「帰れなくなる。」

「……わかった。なら食べるのはやめるぜ。」

ふいー、危ないところだった……。下手に食っていたら間違いなく終わっていたぜ。魔理沙が確認で声をかけてくれて良かった。

「チツ……ここで食べてりや俺たちはメシウマだつてのによ。」
「フラグブレイカーだ。」

こいつら……まあいい。さっさと異変解決に戻るか。

「魔理沙、異変解決に戻ろうぜ。」

「そうだな。」

俺たちは出口に向かう。

いやー良かった。面倒くさいことに巻き込まれずに済んだぜ。さあ、範人が帰ってくる前に異変解決して驚かしてやろう。

「侵入者発見でしゅ！」

……そんな簡単にいくはずがなくてね。目の前にはロリ猫ちゃんがいるんだよ。やっぱりこうなるのかー。なんか違う面倒くさいイベントに巻き込まれたらしい。

「フハハ、やっぱりお前はフラグ回収機。」

「ざまあww」

コノヤロー！俺の扱いはどうなってやがるんだ！おい作者！どうなっている？

「知るか！とにかく頑張れ！」

俺に救いはないのか？

『ない。』

みんな口を揃えて言わなくてもいいじゃないか……。

「退いてくれ。俺たちは今から帰るところなんだ。」

「ダメでしゅ！何かを持ち去ろうとしている人がいましゅ。」

「何イ!?!？」

俺は反射的に魔理沙の方を向く。俺の中では泥棒＝魔理沙になっているのだ。案の定、魔理沙の帽子から何かのアイテムが飛び出している。

「大丈夫、借りていくだけだぜ。」

「死ぬまで一生返さないでしようが！」

「よくわかってるじゃないか。あばよ♪」

魔理沙は箒に乗って猛スピードで玄関から飛び出していった。今、『とつつあん』と言いかけた人はいいセンスだ。

「逃げられちゃいました。」

「まあまあ、気を落とすな。」

「そうでしゅね。もう1人いましゅから。」

「へえ!?？」

そう言った途端にロリ猫ちゃんは弾幕を放ってきた。この子危ない。俺はすぐに外へ逃げた。

ふう……外なら広いし、だいぶ安全に戦えるな。家の中で戦ったら、家が崩れて共に下敷きだよ。俺は能力で逃げられるけど、向こうが危ない。

「カモーン、ロリ猫ちゃん。」

「誰がロリ猫でしゅか！私には藍しやまから貫った橙という大切な名前がありますしゅ！」

「おお、怖いね。じゃあ、橙ちゃん。Let's battle。」

「もうさつきから戦っていましゅ！」

なんてツツコミのセンスだ！一回一回的確に飛んできやがる。しかも、サ行の言葉の発音が……。

「超かわいい！」

「橙ちゃん……ハアハア。」

ロリコンどもめ……その気持ち分からなくもないよ。男の俺が言うのもなんだけど、ああいう子は母性本能をくすぐるよね。守りたくなっちゃう。

「くらえー！」

ムムム！普通の弾幕……軽いわ。そんなものはシャッフルしてくれる。早速、スペル宣言だ。

「換符『ランダムバレット』」

弾幕を大量に放ち、俺の能力で視界の中にある全ての弾幕の位置を移し換える（シャッフル）する。換えるものは位置だけのため、向きは変わらない。弾幕は不規則な動きをし、橙を取り囲む。

「うわー！危ないでしゅ！」

おいおい、危ないとか言いながらかわすなよ。ギリギリだけど

……。でも、そんなんじやあ俺のスペルはかわしきれないよ。
避けたところに弾幕が配置されており、橙は被弾した。

「ニャアアー！」

はい、一発目の被弾。いやー軽いねー。

「そんなに余裕かましていると当たるぜ。」

「当たれ当たれ♪」

おやめください。フラグが建ってしまいます。

「もう建っているぜ。」

おう……そういえば、ついさつき軽いつて思っちゃったよ。これはフラグ成立ですね。……そんなもんへし折ってやる！

「仙符『鳳凰展翅』」

スペルカードの詠唱後、卵が現れた。

なんかこれスッゲー嫌な予感がする。スペルカードの名前からして卵から出てくるものってアレだよ。幻のアレだよ。

卵が孵化し、中から出てきたものはデカイ……鶏？だった。

「コケコッコー！」

「プハハ！なんだよそれ！アハハ……。」

「失敗したけど……被弾でしゅ。」

「え？……あーう。」

鶏？が炎の弾幕を吐き、見事に当たってしまった。

騙し討ちだど!?？ヤバいこいつ……できる！ていうか、鶏が火を吐くってなんだよ!?？化け物かよ!?？

「お前も十分化け物だ。」

「最近の鶏は怒ると襲いかかってくるんだぜ！」

そういえば、そうだったな。能力持つてる時点で俺も十分な化け物だよ。襲いかかってくる鶏って何ですか？某緑の勇者ですか？

「次で決める。」

「こちらもそのつもりでしゅー！」

俺も負けるわけにはいかないんだよ。勝手に戦うことになっちゃったけど、人里じやあみんなが困っている。困っているやつらがいるからこの異変を早く解決しないといけないんだよ。

「くらうのでしゅ！」

翔符『飛翔韋駄天』

「うわー！」

これは避けにくい。弾幕が波になって襲いかかってくる。間違はなく橙の右側で避け続けるのは無理だ。左寄りには左右に動いて避ける。だが、それでも避けきれず、弾幕の波が目の前に押し寄せる。

「ダアア！面倒くせえ！」

腕に弾幕を纏わせる。飛んできた弾幕を縦に一閃。俺の弾幕は剣のような形状の隊列になり、弾幕を相殺した。弾幕の波は縦に裂け、俺の横を流れていく。

「な!?？」

橙は怯み、弾幕を放つのを忘れてしまった。まだ残っている弾幕があるが十分に避けるスペースがある。それにこれなら余裕がある。

「よしーくらえ

言霊『発言実現』

おい、誰かなんか言えよ。

「えー、面倒くせえよ。」

「ラストアタックだ！」

「橙ちゃんお持ち帰りしたい。」

うん、ありがとう。こいつらがあれば十分だ。それと3人目よ。やめとけ。デューレスと藍のツインドライブが飛んでくるぞ。マジで死ぬぞ。

俺の周りには言葉が実体化して浮かんでいる。その内の1つを手に取る。

「くらえー！」

頭に向かって「橙ちゃんお持ち帰りしたい。」を振り下ろす。言葉は橙の頭に直撃した。橙は軽く脳震盪を起こし、スタンした。今使った言葉は溶けるように消えてなくなった。

「クウ……。」

「よっしや、ラスト！」

「ラストアタックだ！」を手に持ち、橙が落下してくるであろう地点に

テレポートした。橙が落ちてくるタイミングに合わせて一本足打法でフルスイング。橙に直撃し、ピチューンという音が出る。

「ニャアアー！」

あ、全力で振り抜いたはずなのに吹っ飛ばないんだね、これ。ていうか、ピチューンって……おかしくないかな？

『気にするな！』

あ、そう。それなら気にしないようにする。なんか、これを言ったら、『スカイフォール』が飛んできそう。気をつけないと……。

「うわーん！」

橙は泣きながら、どこかへ走り去っていった。

あ、逃げた。……まあ、いいか。

「なんで俺を使わなかった？」

だって、面倒くさいって言ったからね。使わなくてもいいのかな？って思ったんだ。

「チキショー！」

そんなことよりも異変解決だ。魔理沙はどこへ行った？

俺は特に当てもなく、魔理沙を探し始めた。

まさかこんなところにいるなんておもわなかったよ。スタート地点に戻っているなんてね。

「ん？どうした？」

「なんで、家にいるんだよ。」

「この宝物っぽいやつを調べるためだ。」

それはわからんでもないが……困るぜ、本当。せめて行き先くらいは教えてから逃げてくれ。敵を倒した後に俺が追えなくなる。

「大丈夫だ。もう終わった。それに次に誰のところに行くかは決めてある。」

「あ、そうですか。」

まあ、それならいい。こつちに戻ってきたのが無意味じゃないならそれでいい。俺の探索は無駄なことになったがな……。

「さあ、行こうぜ！」

「あ、おい待てよ！」
俺はもうスピードで飛び出した魔理沙を追った。

第四十九話

魔法人形使い

僕は現在、お嬢様の命令で咲夜さんと共に異変を解決中です。しかし、主犯の手がかりなどあるはずもなく、そういったことに詳しい人の家に向かっています。

「本当にこっちでいいの？」

「何故？」

「だって、魔法の森よ。」

「仕方ないです。あの人は魔法使いですから。」

咲夜さんが言うのも無理はありません。普通の人間からすれば、魔法の森の瘴気は有害で近づく人間なんてあまりいません。

しかし、それは普通の人間ならばの話です。魔法使いからすれば、魔法の森の瘴気は魔力を高めてくれる有益なものでそれがあれば、普段の何倍もの力が発揮できます。パチュリー様のように例外もありますが、魔法使いが魔法の森に住んでいることは普通なのです。

「あ、ここの家です。」

降り立った場所はある家の前、ここにあの人が住んでいます。早速、ドアをノックしましょう。

コンコンツ

「はい。どちら様で？……あら、デューレスね。今日はどんな用事かしら？」

ドアから出てきたのはアリス・マーガトロイドさん。通称 七色の魔法使いです。

本人曰く、僕とはかなり仲が良いらしいです。何故仲が良いのかと訊くと、研究所での宴会で知り合った後、僕が人形のデザインを考えたり、絵に描いたりすることが何度かあったから、だそうです。

アリスさんは頭がいいので、今回の異変について何か知っているかもしれないということまでここを訪ねたわけです。仲が良い人たちの中で今回の異変について知っていきそうな人がアリスさんだけだったということもあります……。

「今回の異変で何か知っていることはないかと思いましたが……どうで

すか?」

「そうね……お茶でも飲みながら中でゆつくり話しましょう。いれてくるわ。」

「ありがとうございます。」

僕たちは家の中に招き入れられた。

「この終わらない冬についてだったわね。」

「はい。」

「これを見て。」

「これは……何ですか?」

アリスさんが取り出した瓶に入っているものは桜の花弁に似た何かでした。感じたことのない不思議な気を放っています。僕はこんなものを見たことがありません。

「これは春度というものよ。簡単に言えば、春のエネルギーの塊ね。普段は誰しもが持っているものだけれど……」

「何か気を感じます。」

「そうなのよ。今は幻想郷でこの春度が減っているの。だから、今の貴方たちはこれを感じる事ができるのだけれど……それが異常なのよ。」

「なるほど、今回の異変は春度の減少が原因ということですか。……でも、春度を集めて得をする者がいるのでしょうか?」

この異変は春度の減少が原因ということがわかりました。つまり、春度を奪っている者がいるということですよ。

しかし、ここで疑問が発生しました。何故、春度を集めるのか、ということですよ。春の陽気を浴びて自分も陽気な気分になろうとでもいうのでしょいか?

「それはわからないわ。……ただ、緑色の服を着た少女が春度を集めているのを見たという話を聞いたわ。主犯と関係あるんじゃないかしら?」

緑の服……考えたくはないけど、妖夢さんでしょうか?僕の知っている人たちの中では妖夢さんくらいしか思い浮かびません。橙がそ

んなことするはずはないでしょうし。ひとまず、妖夢さんのところは訪ねてみましょう。

「……有力な情報ありがとうございます。では、僕はこれで……。」
「あら、もう少しゆっくりしていけばいいのに「ヒュンー」……何のつもり?」

アリスさんの背後の壁にはナイフが深々と突き刺さっています。そして、僕の隣にはナイフを構える咲夜さんの姿が……いったいどうしたというのでしょうか?

「アリス……私と勝負しなさい!」

アリスさんに勝負を挑む咲夜さん……本当に何があったんですか!??

この気持ちはなんなのだろう? デューレスがアリスと仲良くしているのを見てると怒りというか悲しみというかそんな気持ちが湧いてくる。本当に私はどうしてしまったのだろうか?

「有力な情報ありがとうございます。では、僕はこれで……。」
「あら、もう少しゆっくりしていけばいいのに。」

そのとき、私の中で何かが切れ、ナイフを投げていた。ナイフはアリスの後ろの壁に突き刺さった。

何よこいつ……デューレスを取るつもり? ……あれ? 私は本当に何を考えているの? さつきからイライラしているこの気持ちは何? それに私はいったい何をしているの? ……何のつもり?」

いや……何のつもりと訊かれても私も何でこんなことしたのかわからないのよ!?? 私は何故かイライラしたのよ? 何故かなんてわかるわけないじゃない!

戦う意思がないことを伝えようと口を開いた。だが、私の口は勝手に動き、思いもしないことを口走る。

「アリス……私と勝負しなさい!」

本当に私は何を言っているの? アリスも人形構えているし、もう戦

う気満々じゃない！あれ？私もナイフを構えてる……。ええい、もういい！向こうが戦える気ならこっちも戦ってやる！

本当になんでこんなことになったんでしよう？目の前では咲夜さんとアリスさんが激闘を繰り広げています。咲夜さんのナイフをアリスさんが避け、人形を召喚して反撃、それをかわした咲夜さんがまたナイフ投げる、という流れをもう20分くらい繰り返しています。「貴女……なかなかやるわね。」

「そちらこそ。」

2人とも……弾幕勝負が楽しいのはわかりますが、その笑顔はやめてください。怖いです。真っ黒です。

そもそも、何が原因で咲夜さんはナイフを投げたのでしょうか？アリスさんの発言に何か問題があったのでしょうか？

「うわーんー！」

「ん？」

誰かの泣く声が聞こえました。その方向を見て見ると橙がいました。向こうもこちらに気づいたようでこっちに走ってきます。

「お兄ちゃーんー！」

橙が飛びついてきました。橙がブラコンではないことを祈ります。少なくとも僕はシスコンではないですからね。咲夜さんがこちらを睨んだ気がするけど……気のせいでしょう。

「なんでここに？」

「迷ひ家で泥棒を捕まえようとしたんだけど……逃げられちゃった。それにその泥棒といっしょにいた人に勝負を挑んだら負けちゃった。」

「それは大変だったね。」

橙は黙って頷くと僕の肩に乗ってきました。本人曰く、僕の肩の上は特等席らしいです。なんででしょうね？人混みで遠くまで見えるからでしょうか？……わかりません。

泥棒って絶対に魔理沙ですね。わかります。

「ねえ、お兄ちゃん。なんであの人たちは戦っているの？心当たりは？」

「知らないなあ。」

「もしかしたら、お兄ちゃんをめぐっての争いかもしれないね。」

「それはないと思うよ。」

さすがにそれはないだろう。僕のことを好きになるようなことはないだろうし、僕も惚れられるようなことをした覚えはない。

「そうかなあ？あるかもしれないよ。お兄ちゃん、かっこいいし。」

「そりやどうもありがとう。」

我が妹ながら嬉しいことを言ってくれます。僕がかっこいいんのであるのでしょうか？どちらかという避けられる方ですよ。生物兵器ですし、身体が大きくて恐く見えるらしいですから。

「おおー、派手にやってるじゃねーか。」

「魔理沙……頼むから待って……。」

おや、魔理沙と優もやってきましたね。……早速尋問でもしましうか。

「さて、魔理沙……泥棒したのは本当かな？」

「あ、そのことでその猫又に話があったんだ。」

「わ、私でしゆか？」

「ああ……ほら、返すぜ。」

魔理沙が取り出したものはどこかで見たことのあるような剣でした。白い刀身に紫色の柄……確か、某緑の勇者が使っていたような気がします。

「最初はすごい魔力を感じたんだが、私が持つとダメになっちゃまった。」

「すぐに返させていただきましゆー！」

橙は剣を受け取ると大急ぎで走り去っていきました。

「おい、デューレス。お前も一緒に異変解決しろ！」

「こちらもちょうど解決しようとしているところだ。咲夜さんがいいならOKだが？」

「よし！それなら、あの戦いが終わるまで待とうぜ。」

「わかった。」

咲夜さんとアリスさんの勝負に決着がつきました。結果は咲夜さんの勝利、本当に何のために勝負していたのでしょうか？全くわかりません。

「デューレス、さっきの少女はどこへ行ったの？」

「橙なら帰りましたよ。」

「あの泥棒猫……まあいいわ。」

何がいいんでしょうか？それに泥棒猫って……橙はそんなに悪い子じゃないです！泥棒なんてしませんよ！それに、もしそんなことをしているのなら、兄の僕が責任を持って止めさせます。

「提案なのですが、魔理沙たちも一緒に異変解決なんてどうでしょう？」

「仕方ないわね……デューレスの提案だからよ。」

「お、咲夜がデレたか？」

「デレた？はて、どういった意味なのでしょう？僕にはわかりませんが……。優は何を言っているのでしょうか？まあ、そんなことは置いておきましょう。」

「アリスさんから気になる情報をいただきました。緑色の服を着た少女が春度なるものを集めていたそうです。」

「緑色の服……妖夢か？」

「そうです。だから、冥界に行ってみることを提案します。」

「よし、その案もらったぜ。それじゃ、4人で異変解決だ！」

魔理沙が先頭を切って飛び立ちました。僕たちもそれに合わせてついていきます。目指すは冥界、白玉楼です。

第五十話

冥界チート庭師

現在、冥界を目指して飛行中の優だ。

さつき頭の中ハッシーセットの春告げ妖精を魔理沙がフルスピードで追突して吹っ飛ばしちやつた。春告げ妖精さん、うちの魔理沙がごめんなさい。

デューレスの話じゃ妖夢が今回の異変に関係がありそうということなんだが……正直なところ、そうであつてもらいたくない。友達が悪に走るのは辛い。

さらに妖夢の彼氏である範人は現在ミッションで幻想郷にいない。範人がいれば、戦うことなく交渉でどうにかなるかもしれないが、その範人がいないのである。

「おーあれが冥界の入り口か。」

そんなことを考えているうちに冥界の入り口までたどり着いてしまった。

向こう側に少し見える冥界は暗く冷たい感じがした。だが、違うものがある。それは薄いピンク色をした花びらのような物体。冥界に行くものの中でそれだけは暖かい感じがした。これが春度なのだろう。

すぐに戦いになる可能性もあるためみんなも少し緊張しているみたいだ。

♪~~~~♪

「ん？」

突然、楽器の演奏が聞こえてきた。

トランペットにキーボードあとは……バイオリンだろうか？3種類の楽器の音が組み合わさつてちようどよく美しい音色になっている。

音の方を向くと3人の少女がいた。空を飛んでいる時点で普通の人間ではないのは確かだ。妖力も感じないためおそらく幽霊だろう。

「やあ、いい音色だね。」

気がつけば、話しかけていた。

魔理沙もいるのだ。断じて浮気ではない。

演奏が止まり、3人の少女がこちらを向いた。

「あら、ありがとう。」

「わーい、褒められた！」

「どうせそんなこと思ってないのよ。本当は心の中でバカにしているのよ。」

今の話し方で3人の性格が大体わかった。言葉を発した順に悪戯好き、明るい、鬱だろう。

……鬱はどうかしようか。こつちも悲しくなってくる。

まあいい、この異変について少し訊いてみようか。

「春が来ないことについて何か知っていることはないかな？」

俺が尋ねると3人は少し考え込んだ。これを真面目に考えてくれているのだから、根は良いやつらなのだろう。

明るいやつが口を開く。

「そうだ！」

「何か知っているのか？」

「冥界の主さんからね。お花見のときの演奏を頼まれたの。その日が今日なんだ♪」

これはあまり聞きたくなかったことだ。地上はこんなに寒く、雪が降り積もっているというのに冥界でお花見とはどう考えてもおかしい。冥界の方が早く桜が咲く、または、春が早いというのだろうか？

……どちらも違う。間違いなく今回の異変の原因は冥界にある。そして、主犯も間違いなく冥界の者だ。

「Damn it！」

友達が悪に走ってしまった。その実感が俺の心に重くのしかかる。それは魔理沙たちも同じようでも表情が暗くなっている。

範人ならもつと辛かっただろう。何しろ、あいつは妖夢の彼氏なのだから。

覚悟を決めろ、俺！こうなってしまうことがないわけがないんだ。だから、友達が悪の道に入ったら、死んでも元の道に引きずり戻す。それが友達だっていつも思ってきたじゃないか！

「情報ありがとう。」

「いいのいいの♪じゃあね〜♪」

「さようなら。」

「さようなら……二度と会いたくないわ。」

鬱よ。それはあまりにひどくないか？心にすごくグサリと来た。めっちゃ痛い。ル〇フェルが刺さって爆発したときくらい痛い。

俺たちは吸い込まれるようにして、冥界に入っていった。

たどり着いた場所は真っ暗な場所。真っ先に目に入ったものはどこまでも続くような長い階段。両脇に建てられた灯籠？がその建築物を不気味に浮かび上がらせる。そして、春度はその階段の先へと流れている。

「ここが冥界か。その名の通り、不気味な場所だな。」

周りには靈魂が漂っている。いかにも冥界らしい冥界だ。暑さも寒さも感じない。悲しいほどに無表情な世界だ。

この場所に主犯がいる。それは間違いないようだ。冥界がどうであるかなど関係なく、それが悲しい。

「さて、早く解決といきましょうか♪」

みんなを元気づけるために明るく言う。それが俺にできるせめてもの優しさだ。明るい気持ちで行かなければ押し潰されてしまいそうなほどにこの場所の空気は重すぎる。

「そうだな。霊夢を驚かしてやろうぜ！」

「そうね。」

「そうしましょう。」

みんなの表情が明るくなったような気がする。俺の行動がみんなの役に立ったようだなによりだ。俺もより明るい表情を作れる。

「行くぞー！」

「「おうー！」」

全員の士気が高まったところで俺たちは階段を飛んで上り始めた。

この階段長すぎだろ！飛んでもかなり疲れるレベルで長い。それ

と、だんだんと暖かくなってきた気がする。おそらく、春度が集まっている場所に近づいてきたのだろう。

「長い階段だぜ……」

「少し疲れてきたわ。」

「背中に乗ります?」

「遠慮しておくわ。もう少しで着きそうなもの。」

……デューレス、お前まさか…Mだったのか?

背中に乗るか? って、どっかの戦国武将じゃないだろ? いや、体格も似ているけどさ。踏んでくれ、って言ってるみたいで……なんかね。

そんなことを考えていると誰かが階段の上にいる。

「ん? あれは?」

「どうした?」

「……妖夢だ!」

「何イ!?」

妖夢は階段の上から、こちらを睨みつけている。その眼差しには強い意志がこもっており、こちらを通してくれそうな雰囲気はなかった。だが、少しでも残っているはずの確率を信じて交渉する。

「妖夢、そこを通してくれ。」

「理由にもよりますが、基本的に無理です。」

思った通りの返答だった。理由にもよる、と言ったがここで嘘を吐いても仕方がないだろう。結局、主犯は妖夢の主人である幽々子であることは確定してしまっているのだから。それなら、ここで正直に言っただけの方がいい。

「異変を解決しに来た。」

「そうですか。それならば、無理です。」

妖夢は刀を抜く。

これが従者というものののだろうか? 主人である幽々子を守るために友達にすら刀を向けてしまうのか?

ごめん、妖夢。俺たちはお前と戦わないといけないみたいだ。

「お帰りください。この場で立ち去れば、戦う必要はありません。」

「それは無理だ。春を返してもらおう！」

「残念です。」

妖夢は刀を下ろし、脱力した。

「さあ、皆さん同時にかかってきていいですよ、スペルカードも無制限で。」

「え!?？」

まさか、そんなことを言うとは思わなかった。こちらは4人、妖夢は1人である。勝てる可能性があるなどはとても思えなかった。その挑発に乗ったのか、魔理沙が弾幕を放つ。

「くらえー！」

妖夢は避けようとしないう。弾幕が近づいてくるのを待っているようだった。そして、弾幕が妖夢に当たる寸前まで近づいたとき、妖夢が動いた。

「「「な!?？」」」」

その場にいた者全てが言葉を失った。魔理沙の弾幕が刀の一振り……たった一振りですべて消えてしまったのだ。そして、妖夢の周りにはキラキラとした物体が漂っている。それは魔理沙の弾幕の破片だった。

「……もう終わりですか？」

妖夢の言葉に俺たちはハッとした。今は戦いの最中。にも関わらず、俺たちは目の前の出来事に驚き、ボツとしていた。それほどまでに妖夢が俺たちに与えたインパクトは大きかった。

「……なめないでちょうだい！」

今度は咲夜がナイフで斬りかかる。時を止めての攻撃だ。普通なら避けられるはずなんてない。だが、妖夢はそれもまた、刀で的確に防御する。まるで、次にどこに攻撃が飛んでくるのかがわかっているような動きだった。

目視してからの防御なんてありえない。防御するには野生的なとても鋭い勘が必要なはずで、それでも防ぐことは難しい。それを防御してしまっただのだ。

「ならば……咲夜さん！」

「ええー！」

デューレスも妖夢に攻撃するために飛び出した。手に持っている武器は激槌メテオ。重量武器のハンマーだ。

咲夜はナイフでの細かい連撃、デューレスはハンマーでの重たい攻撃を繰り返す。見事に連携が取れた攻撃に俺は勝てるかもしれないと思った。

「いっけー！」

だが、妖夢がそんな簡単に負けるはずがなかった。咲夜のナイフもデューレスのハンマーも全てかわしてしまおう。

「甘いです。」

「キヤア！」

妖夢のカウンターの蹴りが咲夜の腹部に直撃した。咲夜は吹っ飛ばされて、白玉楼の扉にぶつかり停止した。

「よくも咲夜さんをー！」

デューレスはハンマーを振り上げ、妖夢に向けてフルパワーで振り下ろした。ハンマーは唸りをあげて、妖夢の頭に向かう。

マズイ！あれが当たれば、妖夢が死んでしまう。

俺は、止める！と言いかけた。だが、そのハンマーが妖夢に触れることはなかった。

「何!?？」

「……」

妖夢は刀を使って、ハンマーを受け流したのだ。ハンマーはその勢いのまま地面に突っ込み半径5m程を陥没させた。デューレスはそれを引き抜こうとするがその隙をついて、妖夢が蹴りを放った。デューレスの巨体が地面から少し浮き上がり、こちらに飛んできた。

「ぐっ……」

「大丈夫か？」

「なんとか……」

「妖夢ってあんなに強かったか？」

そう言われればそうだ。妖夢は前まで魔理沙に勝つことができなかったはず。短期間でこんなに強くなることはありえない。

……いや、ありえる。妖夢の彼氏は範人だ。妖夢の使う武器は刀。範人の使う武器は剣だから、練習しやすいはずだ。それに範人は間違いないく最強クラスの實力だ。その範人に稽古をしてもらっていたなら、ここまで強くなることも十分にありえる。

「ええい、面倒だ！くらえ！」

恋符『マスタースパーク！』

魔理沙がマスタースパークを放った。やはり、妖夢は避けようとしていない。それどころか、笑みを浮かべている。妖夢は剣を握る手に力を込め、剣を前に突き出して、マスタースパークに突っ込んだ。

「タアアア！」

マスタースパークは妖夢の刀に切られ真っ二つになって飛んでいく。妖夢はマスタースパークの中を駆け抜け、魔理沙の前で刀をふりかざした。

「優！」

そのとき、魔理沙の声に重なって、誰かの声が聞こえた。俺はとっさにその声の主と魔理沙の位置を移し換えた。その声の主は死ななような気がしたからだ。

魔理沙が消え、誰かが妖夢の前に現れる。妖夢はその者に刀を振り下ろした

が、その刀は一本の剣に受け止められた。俺たちはその者を見て目を疑った。

「遅くなって悪かったな。」

「え!?？」

「なんで……3時までのはずだったのに……」

『範人！』

この場にいる者は皆驚き、妖夢は刀を鞘に収めた。範人はこちらを見て、フツと笑った。

第五十一話

帰還

ミッションは思ったよりも早く終わった。だが、今回のミッションはとてもハードだった。まさか、タイラント10体を同時に相手するなんて思っていなかった。しかも、潜入した研究所で改良された新型だったため、従来のタイラントと比べて非常に強かった。「疲れたー。」

俺は家の扉を開ける。かなり汗をかいたため、シャワーを浴びようと風呂場に入る。服を脱ぎ、シャワーのバルブをひねるとぬるいお湯が出始めた。五月とはいえ、まだ寒いのでこのくらいがちょうどいい。

「ふいー、さっぱりした。」

「あら、帰ったの?」

「そうだよ……ふおお!?」

シャワーを浴びていると、背後から姉さんが上半身だけをスキマから覗かせる。俺は現在、素っ裸。これが恥ずかしくないわけがない。思わず叫んでしまった。

「すぐに上がるから出てっくれ!」

「あら、悲しいわ。昔はいつしよにお風呂入ったのに……」

「それを言わないでくれよ。頼むから出てっ。」

「はいはい。」

姉さんが出ていってから、顔を赤くする。今となっては、昔のことを思い出すと恥ずかしくなる。しかも、姉さんの見た目がずっと変わっていないから余計に恥ずかしい。

今も身体とか考え方とかあの頃のまんまだからなあ。妖怪ってすごいよな。そういえば、どこで待っているか聞いてないな。

俺は身体を拭き、下着とジーンズをはいた。そして、胸に包帯を巻いてから姉さんが待っているであろうリビングに向かった。

リビングでは予想通りに姉さんが待っていた。

「で、何?」

「貴方は最近の気候についてどう思う？」

「異常だな。」

異常。それが俺の率直な意見である。過去に雪が四月下旬まで降っていたことがあると聞いたことがあるため、今回も春が遅いだけだと思っていた。だが、五月まで雪が降っているのはさすがに異常だ。ここは大した高地であるわけではないため、雪が降り続けるのは絶対におかしい。

「そう、異常なの。そして、私はその原因を知っている。」

「本当か？どんな原因だ？」

「幽々子……いや、西行妖ね。」

「西行妖……だと!?？」

西行妖。まだ、向こうの世界にいた頃に姉さんから聞いた桜の木の名前だ。人々を死に誘う力を持ち、多くの人々を殺した。

あるときに1人の女性の命によって封印されたと聞いたが……まさか、復活させようとしているのだろうか？しかも、その女性は俺の知っている人物である。その人の死を無駄にするわけにはいかない。

「まさか、復活か？」

「違うの、まだ復活はしていないの……けど……」

「けど？」

「幽々子が復活させようとしているの！西行妖と自分にどんな関係があるのかも知らずに……お願い！彼女を止めて！お願いだから……」

「姉さん……」

姉さんは俺に泣きながら抱きついてきた。姉さんは震えている。

こんなに弱そうな姉さんは始めて見た。少しでも力を込めれば、壊れてしまいそうだ。……いや、今なら常人の力でもきつと砕けてしまふほどに心は脆くなっているだろう。

何かを失う。姉さんは長く生きている分、その辛さをたくさん知っている。俺は姉さんにこれ以上その辛さを覚えてもらいたくない。

俺は優しく抱きしめ返す。

「大丈夫、必ず助ける。」

「……いいの？」

「当たり前だ。頼みを聞いてくれるとわかっていたから俺に言ったんだろ？」

「わかっているじゃない。」

まあ、本当はそれだけじゃない。俺の個人的な理由もだいぶ含まれている。幽々子は友達で妖夢の保護者だ。存在してもらわなきゃ困る。

「行くぞ！」

「まずは博麗神社に行くわよ。」

「なんでだ？」

俺は疑問に思った。博麗神社に何の用事があるというのだろうか？こういうときは元凶を叩くのが一番ではないのだろうか？

「霊夢がまだ出勤していないのよ。」

「ああ、なるほど。」

「じゃあ、行くわよ。」

俺の足元にスキマが開く。スキマの中に落ちていく中で俺はどうでもいいかもしれないが俺にとっては大切なことに気づいた。

ヤベエ！俺の服装って今の上半身は包帯だけじゃないか！俺って露出狂じゃないよな？

俺は博麗神社の裏口に落ちた。すぐに障子を開ける。霊夢は炬燵に入ってダラけていた。

「霊夢、異変解決に行くぞー！」

「え!?？何!?？範人!?？」

霊夢は俺を見て驚いた表情を見せた。

当たり前だろう。俺の今の服装、上半身はほとんど裸に近い状態なのだ。しかも、外には雪が降り積もっている。これを見て驚かないはずがない。

だが、今大切なのは時間だ。今、一秒が過ぎる間に幽々子が手遅れになってしまうのかもしれないのだ。俺の服装なんて気にしている場合じゃない。

「面倒よ。私は行く気ないわ。それよりも何、その格好？変態なの？」

「服装については気にしないでくれ。それよりも異変解決に行くぞ！」

「行かないって言ってるでしょ。」

そんなことはわかっている。人間は面倒なことを嫌い、やりたくないことは基本的にしようとしたくない。だが、それでは困るのだ。今は霊夢の力が必要なのだ。

「頼む！この通りだ！」

「私からも頼むわ。」

俺が霊夢に頭を下げると、姉さんもやって来て頭を下げた。プライドの高い姉さんかそこまでするのだ。幽々子という大切な友達を失わせるわけには尚更いかない。

「……はあ、仕方ないわね。わかったわ。」

「ありがとう、霊夢〜！」

「ちよ、紫、離れなさいよ。」

姉さんが霊夢に抱きつく。霊夢は迷惑そうに引き離そうとする。俺は苦笑いするしかなかった。ひとまず、霊夢の協力を得ることはできそうである。霊夢が助けてくれという目でこちらを見てきたため、姉さんを引き剥がした。

「紫も頭を下げるなんてことがあるのね。」

「私だってそういうことするわよ！私をなんだと思っているの？」

「胡散臭いスキマ妖怪。」

「そんなのひどいわ。ゆかりん悲しい……」

霊夢の言葉に落ち込む姉さん。助け舟を出してやろうと思ったが、胡散臭いというのは否定できないためやめた。霊夢は姉さんを見つめて進める。

「じゃあ、すぐ行くわよ。面倒くさいけど……」

「ありがとう。」

「仕方ないわ。まさか、紫が頭を下げるなんて思っていなかったもの。あそこまでされたら私も行動するしかないからね。」

俺は封力石を使ってスキマを開き、霊夢といっしょに白玉楼へ移動した。

白玉楼に落ちた。すぐ近くには春度を吸収する西行妖が見えた。その木は美しくも禍々しいオーラを放っていた。花はまだ咲いていない。俺は霊夢に指示を出す。

「霊夢は幽々子のほうに行ってくれ。できればあの桜の封印もしてもらいたい。俺は妖夢の相手をしてくる。」

「わかったわ。」

「気をつけろよ。今の幽々子はきつと化け物だ。」

「貴方がそう言うなんてよっぽどの化け物なのね。わかったわ、気をつける。」

俺と霊夢は別行動を開始した。俺は妖夢がいるであろう階段の踊り場へ向かった。

階段を降りていて、目に入ったものは魔理沙に斬りかかる妖夢の姿だった。助けるために身体が動く。本来なら、光の粒子に自分の粒子化させた身体を乗せて光速で移動できるが、冥界は暗すぎるためうまくいかない。だから、俺に向かって叫ぶ。

「優ー！」

優がチラッとこちらを見て手をかざした。俺の身体の位置は魔理沙と入れ換わり、俺は刀を剣で受け止めた。その場にいた者は俺以外全員が驚いた表情を浮かべている。

「遅くなって悪かったな。」

「え!?？」

「なんで………時までのはずだったのに………」

『範人！』

みんなは俺の存在を忘れていなかったようだが、さすがに来るとは思っていなかったらしい。俺にはそれが滑稽に見えて鼻で笑ってしまった。

第五十二話

春雪大戦 開戦

俺は剣をネックレスに変え、首にかけた。そして、周りを見回すとデューレスのハンマーが落ちていているのを見つけたため、それを地面から引き抜きデューレスに投げた。

「お、おい範人……」

「なんだ？」

「その格好……どうしたんだ？」

「ああ。」

やっぱりそこを気にしてしまうのか。まあ、こんなに寒いときに上半身ほぼ裸っていうのはどう考えてもおかしいだろう。俺自身は身体から炎を出せるから別に平気なんだけど……普通の温度感覚を持つ者たちからすれば異常なんだろうな。

「シャワー浴び終わってすぐに連行されたからな。白衣を着る暇がなかったんだ。」

「そりやご苦労だぜ。」

「それよりも早く幽々子の所に行け。霊夢がもう戦い始めていると思う。」

「は!?？なんで霊夢が？」

魔理沙は非常に驚いた様子だ。そこで俺は気づいた。魔理沙も霊夢に協力を頼んだことに。だが、断られたため霊夢無しで異変解決に臨んだのだろう。まあ、あの面倒なことが嫌いな巫女がすぐに言うことを聞くわけがないはずなのだが……

「クツ……、いいところ取りは許さないぜ！」

「行かせません！」

「おっとー！」

魔理沙は白玉楼に向けて走り始めたがそれを妖夢が止めようとする。俺は全身を第一に変異させ、炎の粒子となって妖夢を取り囲んだ。妖夢が身動きの取れない間に魔理沙たち一行が白玉楼に向かった。

「さて、問題はこっちだな。」

俺は全身を組み立ててから妖夢のほうを見ながら言う。さすがに妖夢も諦めたようで刀を鞘に収めておとなしくしている。

「範人、何故来たのですか？」

「春の陽気に誘われてね。」

俺は事実などとは全く異なることを言った。だが、それでいい。この場の空気は重すぎる。呼吸は十分できるが美味しくない。俺の冗談に空気が少し軽くなり、妖夢の表情も優しくなった。

「では、何故止めたのですか？」

「それは戦いが終わってから話すよ。まあ、妖夢もわかっていると思うんだけど？」

「どういう意味ですかね？」

そう言つて妖夢は刀を構えた。その様子はまるで、わかっていることを知らないと自分自身に思い込ませているようだった。俺もネツクレスを剣に変異させるがまだ構えはしない。

「姉さん、いるんだろ？」

俺が呼びかけると背後の空間にスキマが開き、姉さんが現れた。その顔はどこか悲しげで俺を止めようとしているようだ。だが、今止まる気はない。止まってしまえば、失ってしまうものがあるからだ。

「死なない空間を作ってくれ。」

「範人……本気で戦うのね。」

「ああ、俺も悲しいが、そうしなきゃいけない。」

俺がそう答えた瞬間に周りの色が変わった。身体が特殊な空間に飲み込まれたのだ。目に見えるもの全てに紫がかって見えるのは少し違和感があるが、特に障害はない。むしろ、力が湧き上がってくる。「この空間の中では死ぬことはない。致死量のダメージを受けたら無傷で外に放り出されるって感じた。気を失ったらどうなるか知らないけどな。」

「なるほど、本気で戦えますね。」

「そういうことだ。」

妖夢の顔が少し笑顔になって、すぐに厳しい顔になった。きつと、俺と剣を交えたくてたまらないのだろう。俺は全力を出せるか厳し

いところだが、妖夢に失礼のないようになるべく本気で行こう。

「では、始めましょうか。」

「そうだな……shall we dance！」

「魂魄 妖夢……参ります！」

俺たちは剣を構えて、同時に飛び出した。

霊夢は直感で勝てないと思った。

範人の言っていた巨大な桜の木。それを封印しようと近づいたら目の前に幽々子が立ちはだかった。しかも、様子がいつもと違う。

意識のないようなフラフラとして、それでも無駄のない動き、目は虚ろで光がない。そして、全身からどす黒いオーラを放ち、死の気配を撒き散らしていた。

「（あり得ない。これが幽々子なの？とてもそうは思えないわ。幽々子が放つオーラはこんなに鋭くて暗くなかったはず……もつとふわりとしていて明るかった。いったい何が起きたの？）」

霊夢は幽々子を倒すことを頼まれていたがそれを実行するにはまだ早かった。異変の主犯が幽々子と言えど、春度を吸収しているのは目の前にある巨大な桜。戦うことが面倒な彼女は桜の封印を優先した。なにより、幽々子に勝てる気がしない。

「どきなさいー！その桜を封印するわー！」

「……」

霊夢の言葉に幽々子の返事はなかった。それどころか、歪んだ笑みを浮かべた。霊夢の心に浮かんだものは恐怖だった。バカにされて笑われているとは思わなかった。だが、恐怖を感じてもなお、霊夢は前に進むもうとする。

「どきなさいー！それ以上邪魔をするなら、貴女を倒して進むわー！」

「……」

幽々子はさらに笑みを深くした。霊夢は弾幕としてお札を投げた。幽々子は蝶形の弾幕で迎撃し、お札を撃ち落としした。

地面に落ちたお札は朽ち果て崩れるように消えていく。それはま

さしく死。幽々子の弾幕を受けたお札は強制的に死を迎えたのだ。

「うつ……」

「ふふふ……」

死んだお札を見て、幽々子は笑い声をもらした。その笑いは死を楽しんでいるようでとても不気味だ。いや、幽々子は死を楽しんでいる。今の幽々子には元の優しさなど微塵も感じられなかった。彼女が今求めているものは死と西行妖の復活だけだ。

「……死…ネ。」

「え!?？」

幽々子は低い声でそう言って、弾幕を放った。霊夢もお札で迎撃するが全てが死の弾幕。全てのお札が当たった瞬間に朽ち果て、霊夢がはった結界もお札が死んだことで解除されてしまった。さすがの霊夢もこれには苦い顔になる。

「ならー」

霊符『夢想封印』

霊夢の周りに光る球体が出現し、幽々子に向かって飛んでいく。狙いが多少外れてもそれらにはホーミング性能があるため幽々子が避けることはできない。

今まで、だいたいの相手にはこれで勝ってきた。その自信が霊夢に勝ちを確信させた。

「蝶符『バタフライフェザー』」

詠唱の後、幽々子の背中に光輝く蝶の羽が出現した。幽々子はその羽で自身の身体を覆った。夢想封印の弾幕が羽に突っ込み、巨大なエネルギーの衝突により爆発が起こる。

「クツ……」

霊夢は激しい爆風に吹き飛ばされそうになったがなんとか耐えてその場にとどまった。爆発で巻き起こった煙で幽々子の様子は見えないが、霊夢は勝ったと思ひ、油断していた。そのとき

「アハハハハー」

煙の中から笑い声が聞こえ、同時に光る羽根のようなものが霊夢に向かって飛んできた。霊夢はそれらをなんとか避けたが、それらに当

たった桜の木は枯れて倒れた。

煙が晴れたとき、そこにいたのは幽々子だった。光輝く蝶の羽はところどころ穴が開いているがほとんど無傷に近い状態だった。

「サスガネ。殺シテアゲルワ。」

幽々子が羽を振るわせると鱗粉のような光る弾幕が霊夢に襲いかかった。その密度の濃さに霊夢は驚きながらもなんとか避ける。だが、限界はすぐに訪れ、霊夢に弾幕が当たりそうになる。

「そんな……」

霊夢は迫り来る死に恐怖を感じ、目を瞑った。だが、光輝く死は瞼を閉じても視界を赤くした。

「チエンジー！」

そのとき、何者かの声が響き、霊夢の視界から光が消えた。痛みはなかった。

「まったく……結局、解決に来るんじゃないか。」
「え?。」

霊夢は自分が死んだと思っていた。だが、違う。霊夢は生きていた。霊夢が目を開けるとそこには優たちがいた。優は半分呆れたような表情、魔理沙は拗ねたような表情、デューレスと咲夜は笑顔だった。

「あら、やっと来たのね。」

「やっと来たとはなんだ！私たちが解決するって言っただろ！」

「貴女たちだけでできたことかしら?」

「ゲツ!??それは!??」

「はいはい、そこまで。」

このままでは味方の中で戦いが起きそうだったため、優が2人を止

める。デューレスと咲夜はそれを見て苦笑いする。

「では、私たちも参戦させていただきますでしょう。」

「そうね。よろしくね、霊夢。」

「言われなくてもわかってるわよ。」

真正面から頼まれたことに霊夢は思わず冷たい返事をしてしまう。こういうときに霊夢は素直になれない。だが、それを見た魔理沙は納得したように頷く。霊夢の親友（多分）の彼女は霊夢の心情がわかっているのだ。

「よし！みんな私に着いてこい！」

「なんであんたが仕切っているのよ！」

「2人とも、協力しようよ。」

「優は黙って！」

「ひどくない!?？」

優がorz体勢になり、それをデューレスと咲夜が必死になって慰める。そこへ痺れを切らした幽々子が弾幕を撃ってきた。だが、優の放つ負のオーラに阻まれ、消滅する。デューレスと咲夜は霊夢と魔理沙を無理矢理引き離した。

「内で言い争いしますしているときじゃないでしょう。今は協力して幽々子さんを倒すことにしてください。喧嘩なら後ですればいいですから。」

「……わかったわよ。」

「……仕方ないぜ。」

そこで優が復活して、全員の表情を見る。若干不満そうな者もいるが、それでもいいだろう。優は全員に指示を出す。

「絶対に死なないこと、それが絶対条件だ。みんな、異変を解決するぞ！」

「もちろんだぜ！」

「任せてください。」

「OKよ。」

「はいはい。」

優たちは一斉に弾幕を撃ち始めた。

第五十三話

剣士と狩人

範人の剣と妖夢の刀がぶつかり合い、火花が散る。互いに生半可な攻撃は通じない相手だとわかっていてるために全力だ。二人は仕切りなおすために斬り下がりで後ろに飛ぶ。

妖夢の刀は範人の頬を掠め、範人の剣は妖夢の脇腹を掠める。範人の頬から赤い血が流れ出し、妖夢の服は脇腹の部分に切れ目が入る。

「俺に血を流させるなんて、強くなったじゃないか。」

「範人こそ、相変わらずの強さですね。」

妖夢も範人も笑顔を浮かべる。強い相手と戦うことができ、剣士として嬉しいのだ。互いに好きな人と戦うのは辛い、それよりも戦いの喜びの方が大きいのである。

妖夢と範人は斬撃を飛ばす。それらは空中でぶつかり、消滅している。妖夢は二刀、範人は剣一本。この勝負、本数の多い妖夢の方が有利なのだが、範人は妖夢の2倍の動きで互角に渡り合う。

結局、この勝負は決着がつかなかった。

範人と妖夢は同時に飛び出し、得物を振り回す。剣と刀がぶつかり合い、火花が飛ぶ。一本、二本と打ち合っていくが、その攻撃が互いの身体に届くことはない。そこで、剣一本では厳しいと判断した範人は妖夢の刀に剣のフルスイングを当て、妖夢を弾き飛ばした。妖夢は吹っ飛んだが、地面に刀を突き立ててブレーキをかける。

「変形機構、ジャベリン！」

範人が剣の中心を縦になぞると、剣が割れて双剣になった。さらに、それらの柄を組み合わせることで槍に変形させた。そこに妖夢が刀を構えて突っ込んできたが、範人は槍を降り回して牽制しながら手ごたえを確かめる。範人は満足したように頷くと妖夢と打ち合い始めた。

二本刃の槍に変形させたことにより、範人の攻撃は手数が多くなり、妖夢は防御に徹する。

十数秒の打ち合いの後、妖夢は範人の突きを刀で逸らした。範人はバランスを崩して少し前のめりになる。妖夢はこれを好機と思い、範人に斬りかかる。

だが、範人もそれくらいでは攻撃を受け付けない。第一の変異をして、甲殻の隙間から噴き出す炎の火力を調節。空中でドリル回転することにより、刀を受け流した。さらに、範人の噴き出した炎が妖夢に襲いかかる。妖夢はとっさに距離を取り、炎から逃れた。

「楽しいなあ……妖夢もそう思わないか？」

「私も同じ思いです。」

「そうか。やっぱり、俺たち……」

「二気が合うな（合いますね）！」

範人たちはまた同時に飛び出した。だが、今回は先ほどまでのような真っ直ぐな動きではない。相手を惑わすような横に揺れながらの動きだ。だが、行動まで同じなのか、二人の得物は空中でぶつかり合い、互いを後ろに弾き飛ばした。

二人は互いの距離を保ちつつ横走りしながら、斬撃と突撃を飛ばし合う。斬撃と突撃はこれまで通りにぶつかり合うがそれぞれに工夫が施してある。

範人の炎を纏った突撃はぶつかり合った瞬間に爆発。周りの斬撃を巻き込み、消滅させた。さらに爆煙による目くらましの効果も期待できる。

範人は爆煙の中から飛び出してきた斬撃を避けてから槍を構えて妖夢の方へジャンプした。その瞬間に範人の立っていた場所を何かを通り抜けた。範人が目を凝らして見るとそれは妖夢の斬撃だった。その形はブーメランのように折れ曲がっている。妖夢は刀の動かし方を工夫して斬撃を折り曲げたのだ。

「へえ……すごいじゃないか。」

「そちらこそ、まだこんな技があったのですね。」

「なら、もっと驚かしてやるよー！」

範人は妖夢に向けて槍を降り下ろした。案の定、そんな真っ直ぐな攻撃は刀で受け止められてしまい、妖夢は刀を振って範人を上へ弾き飛ばした。しかし、これも範人の計算の内である。範人は全身を第二に変異させた。

「くらえー！」

雷符『エレクトリックウェブ』

範人は金属の粒子を放ち、それらに電気を流した。電気は粒子から粒子へと流れ、電気の網を形成した。電気の網は何層にも分かれて妖夢へと襲いかかる。妖夢はそれのわずかな隙間をぬって避けるが、さすがに部が悪いと思えばスペルカードを詠唱する。

「冥陽剣『光晶の煌めき』」

妖夢の周りに刀の弾幕が現れ、回転を始めた。弾幕と言ってもこれらは飛ばすことが目的ではない。もちろん、飛ばして攻撃することも可能だが、重要なのは耐久性と威力が普通の弾幕よりも圧倒的に高いことである。

妖夢はそれらを網に向ける。すると、網は刀に当たった部分が消滅し、きれいな円の穴が開いた。妖夢がさらに続けると、ちょうど刀が消えたときに網の最後の層が妖夢を通り過ぎた。

「あまり驚きませんでしたね。」

「そうか？それは悪かったな。……まあ、それだけ妖夢が強くなったってことだ。」

「そう言ってくれるとは、ありがとうございます。」

範人は地面にいる妖夢に向かって槍を突き出しながら飛び降りた。妖夢はそれをかわし、槍は地面に突き刺さった。妖夢が範人に斬りかかる。しかし、範人に当たる寸前で刀を止めた。範人の身体は先ほどよりもさらに強く青白い光を放っている。妖夢が後ろに飛ぶと範人が放電し、辺りは昼間のように明るくなった。

「よく気づいたな。」

「危ないところでした。あのまま斬りつけていたら、私は確実に感電していました。」

「それでも、俺には勝てない。」

「私は負けるわけにはいかないですよ！」

範人は上空に跳躍。妖夢は刀を鞘に収めて、居合いの体勢に入った。そして、二人同時にスペルカードを詠唱した。

「天雷『ヴァジュラズレイン』」

「時空剣『輝きの残月』」

範人は槍に電気を込め、妖夢に向かって五月雨のように連続で突いた。槍の先から雷が発生し妖夢に向かう。

妖夢は居合い斬りを放った。妖夢と雷の間に緋色の斬撃の軌跡が発生し、範人に向かう。

巨大なエネルギー同士がぶつかり合う。それぞれは盾と攻撃となり放った者を守り、敵を滅しようとする。双方とも守ることはできず、相手を滅することはかなわず、同時に消滅した。しかし、スペルカードの時間が切れたとは言っても、戦いは終わらない。

範人は落下して地面に足が着いたと同時に地面を蹴った。範人のあまりの力に地面が陥没する。妖夢はそれを迎え撃つべく刀を構えた。範人が5m以内まで迫った瞬間に妖夢が動いた。目にも止まらぬ速さで範人の横を通り抜けた。しかし、その一撃に手応えはなかった。

妖夢が不思議に思った瞬間、目の前に槍が迫った。妖夢は後ろに跳んでその一撃を回避した。槍は地面に突き刺さったが、攻撃は止まなかった。

範人は槍の柄を両手で掴んで、スピンした。両脚での蹴りが妖夢に迫る。しかし、範人は寸前のところで止めた。妖夢は刀を立てた状態で構えていた。あのまま、蹴りを降り抜いていたら範人の足首から先はオサラバしていただろう。

妖夢は範人が止まった瞬間にすかさず刀を降り下ろした。しかし、範人は槍を使って後ろに跳躍してそれをかわした。その顔には余裕の表情が見られる。妖夢はさらに斬撃を飛ばしたが、範人はバツ宇宙を繰り返して全てかわし、距離を取った。

「……もう、終わりにしましょう。」

「……ああ、わかった。」

妖夢は範人に終了の提案をし、範人もそのことがわかっていたかのように返事をする。範人は槍を剣に戻し構える。妖夢も片方の刀を鞘に収め、残った片方を構える。

「これで終わりです。」

「そうだな。」

範人と妖夢は距離を詰めることも離すこともなく、ただ、相手の様子を見ながら横歩きをする。すさまじいまでの気の飛ばし合い。先ほどまでの激闘とは打って変わり、嘘のように静かになる。ここでは虫の羽音すらもジェット機の騒音に聞こえてしまうほどだ。空気は鉛のように重く、ナイフのように鋭い。

妖夢が刀を構えて駆け出した。同時に範人も剣を構えて駆け出す。妖夢の刀は気を纏って緋色に、範人の剣は電気を纏って青白く輝き出す。妖夢と範人はすれ違いざまに得物を振り抜いた。

緋色の閃光と青白い閃光が交わった瞬間、世界は動きを止め音が消えた。鮮血が宙を舞う。しかし、2人は何事もなかったかのようにすれ違い、互いに背中を向けた状態で停止した。

2人がすれ違った場所に何かが落ちる。それは範人の左手だった。範人の左手首からは血が噴き出している。だが、範人はそれを特に意識することなく変異を解除すると、剣をネツクレスに戻し、首にかけた。そして、呟く。

「…………お前の負けだ。妖夢…………」

範人がその言葉を言い終わると同時に妖夢の服の腹の部分に切れ込みが入り、血が滲んだ。妖夢は手から刀を落とす、口から血を流して、うつ伏せに倒れた。ドサツという音の直後に妖夢は空間の外に弾き出され、範人も空間から解放される。しかし、数歩も歩かないうちに意識を失い、倒れてしまった。

第五十四話 迫撃の死

優たちの放つ弾幕が幽々子に向かう。しかし、幽々子も実力者。全ての弾幕をフラフラとした動きで避けられてしまう。ヒラヒラと舞い落ちる落ち葉が掴みにくいように幽々子には当たらない。弾幕から発生するわずかばかりの風圧を利用して避けているのだ。

幽々子も弾幕を放って優たちに攻撃する。しかし、多勢に無勢。いくら幽々子が強くても、弾幕の数で圧倒的に劣るため、幽々子の弾幕は優たちに届く前に相殺されてしまう。それに、幽々子の弾幕には当たれば死ぬということもあり、優たちも必死だ。

「フッフ、死ンデ。

幽曲『リポジトリオブヒロカワ―神霊―』」

スペルカードの詠唱の直後、幽々子から数えきれないほどの弾幕が放たれた。黄緑の弾幕が拡散して逃げ場を奪い、青の弾幕が狙い撃つ。霊夢たちは相殺を試みるが、その圧倒的な量の差と威力の高さにだんだんと押しされ始める。

咲夜の目の前に弾幕が迫り、咲夜は死を覚悟した。彼女は死の恐怖に目を瞑った。

「咲夜さんー」

咲夜と弾幕の間にデューレスが入る。そして、その弾幕を裏拳で消し飛ばした。

デューレスはタイラント、ウイルスで一度死んだ身である。そのため、死は効かないし、タフさも半端ではない。大抵のダメージなんてほとんど響かない。

弾幕に当たってもデューレスが引き下がることはない。生死がかかっている戦いではもはや弾幕ごっこのルールなんて適用している暇なんてないのだ。故に霊夢や魔理沙も殺傷力を抑えることなく攻撃をする。

「手加減無用ですね。殺す気で戦ってやりますよー！」

デューレスはハンマーを手に持ち、柄を強く握った。モノリスで作られたその強靱なハンマーはデューレスの握力にも潰れることなく、

デューレスの思いに応えた。特殊機構が作動し、柄と槌をつなぐチェーンが伸びる。

「殺つてやりますよ！」

鎖槌『逆襲の亡霊』

デューレスがハンマーを回転させると槌が弾幕でコーティングされ、そこから弾幕が放たれた。弾幕が辺りに広がる。さらに、その槌自体も攻撃となり幽々子の弾幕を叩き壊す。コーティングしている弾幕にもデューレスの特性が宿り、死を受け付けない。

幽々子のスperlカードの効果で切れた瞬間、デューレスのハンマーが幽々子の向かって飛んだ。槌は幽々子の胴に直撃する。

「ガハア……オノレ、許サナイー！」

幽々子はどこからともなく薙刀を取り出し、デューレスに斬りかかった。優は危ないと思い、デューレスに手を向けたが、デューレスは笑顔で首を横に振った。幽々子の薙刀が振り下ろされる。しかし、それはデューレスが指2本で挟むことによつて簡単に防がれた。優はホツとし、その戦いを目で追った。

幽々子の薙刀とデューレスのハンマーがぶつかり合う。

武器自体のリーチは薙刀の方が圧倒的に長いが、デューレスは背が高く、そのぶん手足も長い。手足も合わせたリーチでは、幽々子が若干秀でているが、これだけなら勝率はほとんど五分五分だろう。

デューレスは自慢の怪力で薙刀を押し返すと、幽々子の胴を狙つてハンマーを振った。しかし、幽々子はサマーソルトでかわし、薙刀を地面に突き立ててドロップキックを放った。それはデューレスの腹に直撃し、デューレスの身体少し後ろにずらした。デューレスはわざとらしく腹を押しえると幽々子にデコピンする。

幽々子が吹っ飛んだ。すると、幽々子の身体からどす黒いオーラが溢れ、実体化した。オーラは鉤爪の形になると、地面に突き立ててそれ以上吹っ飛ぶことを阻止した。

止まった幽々子は怒り狂い、怒声を放ち始める。

「オ前ラ、許サン！死ネ死ネ、消エテナクナレ、死ナナイナラ、私ガ殺シテヤル！」

幽々子は元の彼女からは想像できないような言葉を発する。幽々子から放たれるオーラがさらに暗くなり、大きく膨れ上がる。

その姿は紛れもなく死の化身。全てを死に誘い、死なぬ者は殺し尽くす。生物はそれらから目を逸らし、無意識のうちに恐れを忘れる。命が最も恐れる邪なるもの。

「マズイわね……」

「どうしたんだ？」

「あれは幽々子じゃないわ。」

「何を言っているんだぜ!? あれはどう見ても幽々子だろ！」

霊夢がおかしなことを言ったと思い、魔理沙はそれに反論する。

別に互いにおかしくはない。霊夢たちの目の前にいる者の姿は間違いない。幽々子で声も幽々子である。しかし、その者から溢れるオーラは本来の幽々子とは極めて異なるものだ。

「確かにあれは幽々子ね。でも、中にあるものが違うわ。」

「中が違う……どういうことだ？」

「今、幽々子は何かに取り憑かれている。あのオーラはそいつが放っているものよ。そして、そいつが死を求めるせいで幽々子の能力が暴走しているの。」

「なるほど……」

幽々子の能力はもともと相手を一瞬で殺すわけではない。死に誘い、誘惑されて自身の心に負けた相手を殺すのだ。しかし、今の状態では瞬殺になっている。何者かの力が影響して能力が強化、暴走させられているのは明らかだ。

「じゃあ、そいつを倒せばいいんだな。どうするんだ？」

「とにかく、幽々子にダメージを与えて、そいつが身体を放棄するのを待つのよ。大丈夫、幽々子は死なないから。」

「もう死んでいるもんな。」

魔理沙は苦笑してから幽々子を見る。いや、正確には幽々子に取り憑いている何かを見ているのだろう。

魔理沙はミニ八卦炉を構え、ちよつとしたレーザーを撃つ。案の定、幽々子はそれをかわし、魔理沙を殺そうと黒いオーラを腕に纏っ

て巨大な爪を作り、斬りかかった。しかし、幽々子の身体を何かが貫いた。

「一度かわしたくらいで完全に避けた気になっちゃダメだろ。」

「キ、貴様…何ヲ…」

「簡単なことさ。」

優は右手の上に弾幕を作り出す。すると、先程に魔理沙が撃ったレーザーが弾幕に右手の上の弾幕に当たり、反射した。

「光は透明な物体でも角度が浅ければ、反射することがあるんだ。中学生も知っていることだぞ。」

「中学生ガ何トカハ知ランガ…貴様モ死ネエ！」

幽々子は優に爪で斬りかかるが、それは投げナイフで止められた。幽々子の腹部にナイフは深々と突き刺さり、黒いオーラが傷口から溢れ出す。ナイフはすぐに錆びてなくなったが、ナイフの与えたダメージは大きかった。

「私を忘れられては困りますよ。」

「グ…貴様ヲ…ブツ殺シテヤル！」

死界『デスゾーン』

幽々子の身体から溢れる黒いオーラがさらに強大なものとなり、魔理沙たちを飲み込まんとする。

避けるための隙間もなく、逃げ場もない。弾幕ごつこのルールが適用されるのなら、反則もいいところなのだが、このデスゲームにルールなんてないようなものである。

「生き残りたい人、この指止まれ♪」

優がそう言うのと全員が優の周りに集まった。その間にも死のオーラは広がり続け、優たちの5mほどのところまで迫ってきていた。優はスペルカードを詠唱する。

「反符『リフレクションスペース』」

優を中心にして、半径4mほどに異空間が展開される。オーラといえども、空間を乗り越えて攻撃はできない。空間の壁で跳ね返される。死のオーラは空間の壁の前には無力だった。

幽々子は空間の壁に突進し、オーラの槍で突き破ろうとした。しか

し、その攻撃も跳ね返される。幽々子は吹っ飛び、停止した後には技を解除した。優もスペルカードを解除する。

「咲夜さん、行きますよー！」

「ええー！」

デューレスと咲夜が幽々子に突っ込む。咲夜がナイフを投げて動きを制限し、そこをデューレスがハンマーで叩く。幽々子はそれらをかかわすが、その流れるような連携にだんだんと押され始め空中に逃げようとする。

「行かせません！」

地縛『グラウンドグリップ』

幽々子の足が地面とつながり、空中に逃げられなくなる。しかし、歩くことはできるため、地上戦で応戦しようとする。そこへ咲夜が突撃した。

咲夜はナイフで幽々子を滅多斬りにする。幽々子は薙刀でガードするが、時を操る咲夜の前では無駄な抵抗だった。瞬く間に幽々子の身体をナイフが斬りつけて、傷をつける。

銀は邪なる力を滅すると言われる。もちろん、死も例外ではなく、より多大なる効果を発揮できる。

幽々子はもがき苦しみ、隙を見せた。そこにデューレスが突撃し、走りながら構えを取る。

「いきますー！ウエスカー流武術 破岩掌！」

デューレスは突進の勢いを殺さぬまま幽々子の腹に掌を打ちつけた。デューレスの掌打、その威力は岩をも粉々に粉碎するほどである。

「破アー！」

瞬間、幽々子の身体にとつともないダメージが襲いかかった。内臓を直接殴られたような衝撃が幽々子に響く。

地面と足がつながって、空中に行くことができないため、幽々子の身体は地面を滑った。衝撃が空中に逃げない分、ダメージも大きくなる。それは幽々子の身体が破裂して血糊を撒き散らしてしまうような衝撃だったが、あまり変化はなく、幽々子が口から血を吐いただけ

だった。

「これで壊れないとは、丈夫ですね。」

「オノレ…オノレ！貴様ラー！」

グラウンドグリップの効果が切れたため、デューレスと咲夜は幽々子から距離を取る。その瞬間、幽々子がスペルカードの詠唱をする。

「反魂蝶―満開―」

幽々子は体内にオーラを閉じ込めて、増幅させ始める。優はそれを見て怯え始めた。死を知っている彼の魂は何よりも死を恐れ、最大限の警鐘を鳴らす。

「あれは……マズイ……」

「どうしたんだ!?？」

優は恐怖に目を見開いたまま動けなくなってしまった。それを見た魔理沙たちは動揺を隠せない。

さっきの攻撃なら、優自身のスペルカードで防ぐことができた。しかし、今度の攻撃はマズイ。避けることなんてできないだろうし、空間でさえも乗り越えてくるような量の死のオーラが幽々子の体内で渦を巻いている。

「死ネエエー！」

幽々子から死が翼のように噴き出し、辺りを飲み込み始めた。

第五十五話

難波 優は何度死ぬ？

幽々子の背中には死が翼のような形で現れている。優にはその姿が天からの使いに見えた。

(ハハハ……俺は死ぬのか。初めて……いや……これで二度なのかな？

……難波 優が死ぬのは……

※※※

俺は誰かの墓の前にいた。隣には父親の姿がある。

「ねえ、お父さん。」

「なんだ？」

「このお墓は誰のお墓なの？」

俺が訊ねると、父親は悲しそうに俯いてから、躊躇いがちに話し始めた。

「難波 優だよ。」

「でも、僕はここに……」

「優のお兄ちゃんの名前だよ。優が生まれる少し前にお兄ちゃんは病気にかかって死んじゃったんだ……」

※※※

なんで……今さら、こんなことを思い出すんだろう？俺はここにいて、あの『難波 優』は別人で、俺は俺という『難波 優』だっていうのに……あいつはもう死んでいるのに……)

優は周りを見る。魔理沙がこちらを見ている……いや、魔理沙だけではない。みんながこちらを見てくれている。全員の表情は恐怖ではなく、心配だった。

(やめろーなんで、自分の心配をしないんだ！俺はあいつのせいであいつが俺の中にいるから……人為的には死なないんだぞ!!？自分の心配をしてくれよ！俺よりも自分を守ってくれよ！)

「優……大丈夫か？」

優は心の乱れから息が切れ、荒い呼吸をしていた。魔理沙が声をかけたことにより、多少は楽になったが、まだ辛い。心の中には自分の弱さに対する怒りと憎しみが渦を巻いていた。自然と涙が溢れてく

る。

(クソツ……俺が強ければ、守れるのに……俺が弱くなければ、みんなと生きれるのに……)

優は心の中で叫び、地面を殴った。地面がそんな感情を優しく受け止めてくれるはずもなく、そのまま返してくる。優の手には血が滲んだ。それでも、優は止めることなく地面を殴り続けた。何者かの手が優の腕を掴み、自傷行為を止めさせた。

「優……やめてくれ。もう自分を傷つけないでくれ。」

「魔理沙……」

その時、優は気づいた。恐怖でも、怒りでもない。それはみんなからの思い……そして、自身の思いだった。

(俺は何をしていたんだ。みんな……自分のことを思っていたんじゃないか……俺を心配していたと思ったのは、ただの俺の自己満足だったよ。俺は……結局、自分が一番だったんだな。みんなが死ねば、俺が悲しいから……みんながいないと、俺の逃げ場がなくなるから……)

その時、優の心に声が響いた。その声は霊夢でも、魔理沙でもない。しかし、その声はいつも聞いている声だった。それなのに珍しくて、久しぶりに聞く感じがした。

(そんなに、強くなりたいか?)

(当たり前だ!強くなりたい!強くなって、みんなと生きたい!)

(そうか……わかった。お前に力を貸してやる。)

瞬間、優の意識が遠のく。いや、裏返ると言った方がいいだろうか?優の意識は板が裏返るように暗くなっていく。その意識の中で優はどうか訊ねる。

(……お前は誰だ?)

(俺は……難波 優だ!)

(そうか、久しぶり……ボタンタッチだ。頼むよ、兄ちゃん……)

(おう、任せとけ!)

優は裏返る意識の中でつぶやく。

「マインドチェンジ……」

その瞬間、優の意識は完全に裏となり、兄の意識が表に現れた。優

は何か吹っ切れたように立ち上がる。

「ハハハ、まずは幽々子を倒さないと！」

「お、おい、優……大丈夫なのか？ さつきと随分雰囲気が変わったけど……」

魔理沙たちは突然雰囲気の変わった優に驚き、動揺してしまう。優はそれを見て、納得したような表情をする。

「そうか……お前たちは俺に会うのは初めてだったな。俺は難波　優！ お前たちのよく知っている難波　優の兄貴だ！」

『ええ!?!?』

「まあ、驚くのは当然なんだけどな。まずは力貸してくれよ！ あの死を追い払わないといけない。」

魔理沙たちは未だに動揺を隠せないが、それでも、幽々子を倒すことが先決だと考えて、優に従うことにする。彼らには、幻想郷……いや、世界の命運がかかっていると考えるも過言ではないのだ。

「でも、何をすればいい？」

「俺に攻撃をぶつけまくってくれ。」

『はあ!?!?』

こんなところを側から見れば、優はドMだと勘違いされてしまうだろう。だが、優は本気である。優の目は魔理沙たちを見つめる。その目には決意と希望の炎が燃え盛っていた。

「俺の能力は『鉄壁剛神を宿す程度の能力』だ。耐久は異常にある。だから、俺にありったけの攻撃をぶつけてくれ。その後は、弟の能力を使って、幽々子にダメージを打ち込む！」

「でも……」

「今はこれしか方法がねえーんだ！ 早くしろ！」

優は怒鳴って、魔理沙たちを無理矢理納得させる。謝ることは後でいくらでもできるが今は時間がない。魔理沙たちは優の提案を受け入れて、それぞれ得物を構える。

「いくぜー！」

恋符『マスタースパーク』

「耐えてください。」

メイド秘技『殺人ドール』

「ウオオオー！」

巨神『星砕きの鉄槌』

「任せるわよ！」

霊符『夢想封印』

それぞれの最大クラスの技が優に炸裂する。優の身体はボロボロになり、切り傷、打撲、火傷、全身から大量の出血といった見るも無残な重傷の状態になる。しかし、能力のおかげか、優はその場に直立したままだ。地上を歩く、走るは辛そうだが、空を飛べばどうにでもなる。

「じゃあ、行ってくる。」

死はゆつくりとした動きながらもすぐ目の前にまで迫ってきていた。優は幽々子を目指し、躊躇うことなくそこへ突っ込んだ。全身が焼け焦げるような感覚がして、痛みが走る。しかし、止まることなく飛び続ける。世界の命運がその肩にかかっているのだ。優が止まることは決してない。

死の中ではだんだんと光が薄れ、漆黒の世界になる。しかし、幽々子がいるのはその中心。優は暗さを頼りに幽々子に向けてまっすぐ飛び、ついに中心部へたどり着いた。

「ウアアアアー！」

「そんな怖い声で鳴かないでくれよ。興奮しちまうだろ？」

優はジョークを言いながら、幽々子に近づく。そして、スペルカードを詠唱する。

「全反射『不平等なる天秤』」

優は幽々子の頬に手を触れ、自分の受けたダメージを余すことなく全て幽々子に流し込んだ。それは周りにある死も同様である。死は優の中に入り込んで幽々子の中へダメージとして受け渡されていく。

いくら死なないからと言っても、死ぬレベルのダメージは相当なものである。幽々子はあまりの苦痛に叫ぶ。

「キャアアアアー！」

「いい声で鳴けるじゃねえか。幽々子さんよ！」

全てのダメージが幽々子に受け渡された瞬間、幽々子の身体は地面に落ちた。

優は笑顔で魔理沙たちの方に歩いていくが、時折表情を歪ませるところから、その笑顔の下には苦痛が潜んでいることがよくわかった。身体のダメージは受け渡せても心のダメージは受け渡せないようだ。

魔理沙は優に駆け寄って抱きつく。抱きつかれた優は苦笑する。

「おいおい、そういうのは弟にやってくれよ。」

「は!??しまった、つい……」

「まあ、いいか。俺も悪い気分じゃないし、これは弟の身体だし。」

「じゃあ、優との関係について話してもらおうか。」

「そうだな……あれは今から17年前だったな。俺は生まれつき身体ばかりは丈夫で怪我はしなくせに病弱だったらしい。そして、弟が生まれる2ヶ月前に病気で死んじまった。でも、魂は両親の元に残り続けたんだ。そんなときに弟が生まれた。俺は生まれたばかりの弟に手を伸ばしたんだが、それがマズかった。俺の魂は弟の身体に取り込まれちゃったんだ。そして、弟とは1年に一度くらいの頻度で意思疎通をしながら存在してきて今に至るってわけだ。」

優は一気に話し切る。彼自身もつと話したいのだが、弟の身体を借りているため、早くチェンジしないと弟に申し訳ないのだ。

「ほう……そういうことだったのか。じゃあ、これからよろしくなー」

魔理沙は優に手を伸ばすが、優はその手を取ろうとしない。その表情はどこか悲しげで目はどこか遠くを見つめているようだ。まるで抜け殻のようである。

「どうした?抜け殻みたいだぜ。」

「ハハハ、抜け殻か……あながち間違いじゃないな。俺にはもう時間がない。」

「どういうことだ?」

「最初からそういう契約だったんだ。俺は優が18才を超える前に消えなきゃならない。俺は死人だからな。」

そう言う優の表情からは耐えきれないほどの悲しみが読み取れる。拳を強く握りしめ、身体は震えていた。溢れ落ちる涙が地面を濡らしている。

「だから、ここによろしくなんて言うてはいけないんだ。出会ってすぐにはさよならなんて悲しすぎるだろう？」

「でもよ……せつかく会えたんだから……」

「出会いがあるから別れの悲しみがある。それなら、会わなかったことにした方が良い。」

……弟が良い彼女を見つけられてよかった。これで安心して成仏できる。じゃあな、さようならだ。

……魔理沙、弟を頼んだぞ。」

「優……ありがとう。」

優が魔理沙の肩を叩く。その瞬間、優（弟）の意識が表に現れ、優の身体から光が飛び出した。ここは冥界、地上よりは確実に成仏できるだろう。光は魔理沙たちの上を少しの時間だけ漂ってから、冥界の暗闇の奥へ消えていった。

「兄ちゃん……」

優は光の消えた方を見て呟いた。自身に死なない呪いを与えていたとしても、やはり兄の存在は大切なものだったのだ。しかし、今度は泣かなかった。優の中には兄の遺していったものがある。これ以上何かを求めることは彼にはできなかつた。

「私たち勝ったんだよな？」

「ああ、きつとな。」

『……ヨッシャアアー！』

優がそう答えると、その場の全員が喜びのあまりに叫んだ。勝った、異変を解決した、という実感が湧く。

しかし、彼らは気づいていなかった。西行妖はまだ封印されていない
かったことに……倒れた幽々子から噴き出た死が西行妖に吸収され
ていたことに……

墨染の桜が花開く。

n

霊夢は西行妖に近づき、封印を施そうとする。しかし、その行動は西行妖の枝に阻まれた。西行妖はその場の全員に向かって枝を伸ばした。

「ぐっ…うう…」

範人は目を覚ました。目は霞んでほとんど見えない。

どうやら、あの空間は死ななければ無傷で解放してくれないらしい。感触でわかるが、今は再生している左手首を中心に広がる血だまりがその証拠だ。さらに身体が重い。範人は思った以上に疲労を蓄積させてしまっていたようだ。

「早く霊夢たちのところに行かねえと…」

範人は起き上がろうとするが、何者かに頭を押さえられて起き上がれなかった。後頭部に何か柔らかい感触がある。霞んでいた視界が晴れ、くつきりと見えるようになる。それが何かわかった。

「目は覚めましたか？」

範人は妖夢に膝枕をされていた。柔らかい感触の正体は妖夢の太腿だったのだ。範人は驚いたが、それを表情に出さず、再度起き上がる。範人からすれば、妖夢の膝枕はとても心地よく、自分から離れることは惜しいのだが、今は西行妖の方が重要である。

「ああ。膝枕…ありがとな。」

「いえいえ、恋人が気絶しているときに看病するのは当たり前ですから。」

「さて、行かねえと…」

「待ってください！」

「え？」

妖夢は範人に向かって叫んだ。その叫びを聞いた範人はキョトンとした表情をして振り向く。妖夢の表情は真剣で、それを見た範人の

表情も真剣になり、目付きが鋭くなる。エージェントの顔だ。

「範人はどこまで知っているんですか？」

「何を？」

「幽々子様と西行妖の関係です。」

範人はそれを聞いて、少し驚いたような表情をしたが、すぐに元の真剣な表情になる。そして、真剣に、だが、少し躊躇うように話し始めた。

「昔、姉さんから聞いたんだ。西行妖が目覚めるとそれを封印する代償になったものも目覚める、つてな。現在、西行妖は目覚めかけている。つまりは代償も目覚めかけているつてことだ。そして、その代償が生前の幽々子。西行妖の下には幽々子の遺体が眠っている。」

「でも、それだけなら問題は……」

「ああ、それだけならな。ていうか、これくらいなら妖夢も知っているだろう？」

「はい。」

妖夢が答えたため、範人はさらに話を続ける。

「でも、問題があつてな。幽々子の遺体が埋まっつていてそれが目覚めるだけならまだいいんだが……幽々子の遺体は既に白骨化……いや、もう骨すらも残っていないかもしれない。こんなとき、行き場のない魂はどうなると思う？」

「成仏……するのでは……」

「成仏できればいいんだよな。残念ながら、これで成仏できる可能性はとてつもなく低い。ほとんどはまた亡霊としてやり直した。それどころか、記憶も失つちまう。もう……わかるよな？」

妖夢は非常に暗い表情をする。彼女の脳裏に浮かんでいるのはこれまで幽々子と過ごしてきた楽しい(?)思い出。幽々子はめちゃくちゃなところもあったが、従者思いの優しい主人だった。そんな思い出を失わせるわけにはいかないと決意した。

「範人……私も行きます。私も一緒に戦つて、西行妖を止めます。」

「そうか、それは助かる。」

「では、行きましようか。」

「ちよつと待て。」

範人が妖夢を止める。既に歩き出そうとしていた妖夢はキョトンとした可愛らしい表情を見せる。普段の範人なら、ここで表情が緩んでいただろうが、今はそんな余裕がないため真剣な表情を崩さない。

「ここに来た理由…まだ、言つてなかつたよな。」

「はい……」

「俺は守るためにここに来たんだ。幽々子との思い出も大事だが、もしも幽々子が消えたら、妖夢が狂ってしまうと思つてな。」

「そ、そんなことは……」

「はつきり言つて、お前は幽々子に執着し過ぎている。もつと自我を持った方がいい。もつと自我を押し通してもいいし、自分のやりたいことをしてもいいと思う。もつと素直になつた方がいいと思う。」

「……それは範人も同じじゃないですか!」

範人はそれだけ言つて西行妖の場所に向かおうとしたが、妖夢の言葉に足を止めた。ゆっくりと振り向くその顔には驚きと苦しみの表情がはつきりと見てとれた。

妖夢は範人の胸ぐらを掴み、持ち上げようとするが、範人の方が背が高いため、うまく持ち上がらない。仕方がないので範人の胸をポカポカと殴る。

「どうして泣きそうな顔をして戦うんですか?! どうして心を隠すんですか?!」

「誰かを殺すとき、苦しくないわけがないだろ!」

範人が叫ぶ。妖夢は驚き、手を止めて範人の顔を見る。奥歯をギリギリと噛み締め、必死に苦しみの感情を隠すその顔。しかし、その目からは涙が流れ、頬を濡らしていた。

「俺だつて辛いんだよ! だからこそ、平気なふりをしたんだ! 自分も騙せるつてな! でも…やっぱり、騙せていなかつた……妖夢を斬りたくなかつた……」

「なんで……今さらそんなことを言うんですか?! 私も範人を斬りたくなかつた……でも」

「だからだ!」

「え!?？」

「妖夢は幽々子を守りたかったんだろ。それなら、俺が邪魔するなんてできるわけがないじゃねーか！それがお前の信念だったなら、当たり前のことだ！」

……だから、斬るしかなかった。俺は最低だ。正義の味方でも、誰かを助けるヒーローでもなんでもない。結局は暴力で解決しちゃう……俺は、人間の闇から生まれた化け物だ……」

範人が地面に崩れ落ちる。身体的ダメージからではない。自分が妖夢を斬った、その事実が範人の心に多大なるダメージを与えていたのだ。

最初、範人は怒った。しかし、そんな怒りをぶつけるものなどあるはずもなく、自分を責めたのだ。自分が悪い、こうなったのは自分の責任だ、と。

範人は地に伏せて、嗚咽を漏らす。これまでに溜め込んでいた怒り、憎しみ、悲しみ……全ての感情を吐き出すように……

「範人、顔を上げてください。」

妖夢の言葉に範人は涙を拭き、顔を上げる。妖夢の優しい表情に範人は辛い気持ちが少し和らいだような気がした。

「今回はさすがに無理だったと思いますが、これからはもっと頼ってください。力になりたいです。それに……」

妖夢は少しうつむき加減で言う。

「範人が自分を化け物とっていても、私にとってはヒーローです。自分を悪く見るのはやめてください。」

範人はハツという表情をしたが、喜びから涙が溢れそうだったため、すぐに下を向いてしまう。

「妖夢…ありがとう。」

「もう、またそうやって下を向くんですから……」

仕方ないですね。元気にしてあげます。顔を上げてください。」

「はあ？うお!?？……!?？」

範人が再度顔を上げると目の前には妖夢の顔があった。範人は驚き仰向けに倒れてしまう。直後、範人の唇に妖夢の唇が重ねられた。

範人の顔が真っ赤になり、妖夢を引き離そうとするが、突然の出来事に焦っている上に、思った以上に強い力で抱きしめられているため離せない。

普通の人間なら、理性が麻痺してその先の行為に及んでもおかしくないのだが、エージェントである範人は心の芯がそこそこしっかりしているため辛うじて持ちこたえる。

十数秒の口づけの後、妖夢は範人から顔を離し、自身の唇を舐める。一方の範人は驚きのあまり息ができていなかったため、ゼエゼエと荒い呼吸をしている。

「……突然、何のつもりだ？」

「何って…範人がやりたいことをしてもいいって言ったから、やってみただけですよ。」

「こいつ……」

「そういうえば、これが初めての口づけでしたね。私の味…どうでした？」

「な…!??と、突然、何言ってるんだ!??」

妖夢の問いに範人は顔をさらに赤くして言う。妖夢はその様子を見て意地悪な笑みを浮かべた。このままでは弄られると思った範人はすぐに落ち着いた表情になり、感想を述べる。

「……甘かった。」

「それだけですか？」

「あれだけ焦っていたときにそんなにいろいろ考えられるか？」

「……それと…早く退いてくれ。いかがわしいことに勘違いされ兼ねない。」

「別にこのまま先に進んでもいいのですよ？」

妖夢は範人に覆い被さり、胸を押し当てた。そのまま身体を少し揺らす。柔らかいものが範人の上でフニフニと形を変える。その感触にこのままでは理性が保たないと思った範人は静止を求める。

「待って待って!??ストップ！ストップだ妖夢！俺はまだ年齢的にアウトだから！」

「あれ？思春期の男の子はいつも飢えていると聞いたことがあるので

すが……」

「俺はそんなに飢えてないから……せめて、10月13日が過ぎるまで待ってくれ!」

「何故、その日を過ぎればいいのですか?」

「その日が俺の誕生日で今度18才だからだ。」

「なるほど……わかりました。」

妖夢が理解してくれたようで範人は安心してホッと息を吐く。妖夢が範人の上から退き、範人は立ち上がる。その直後、範人のネットレスが光り輝いた。あまりの光量に二人は目を覆う。

数秒後、発光が終わった。範人がネットレスを首から外して手に乗せ、妖夢はそれを覗き込む形で見える。ネットレスは形状が変化しており、元の剣のような形から、額に赤いクリスタルの着いた髑髏のような形になっていた。

「範人……これって……」

「……クリムゾンが進化した。持ち主の成長と共に武器自体も成長するからさっきの戦いでクリムゾン自体が結構成長していたんだろうな。でも、最後の一押しは何だったんだ?」

「もしかしたら、範人が大人の階段を上りかけたからかもしれないですよ。」

「そんなことで進化してもらいたくはないんだけど……まあいい。進化したんだから、名前も変えないとな。」

範人は腕組みをして思考を巡らす。なるべくかっこいい名前がいいが、そう言ったものはなかなか見つからない。その様子を見て、妖夢が範人の肩を叩いた。

「範人、前に外界の文献を読んでかっこいいものがあつたのですが、どうでしょうか?」

「言ってみなよ。」

「アルゴス……世界を救うために戦った英雄の名前らしいのですが……どうでしょうか?」

「いいね。それにしよう。この剣の新しい名前は覇剛剣アルゴスだ。」
「いいのですか?」

「いいよ。俺もかっこいいと思ったしな。ありがとう。」

「えへへ…」

範人はネックレスを首にかけ直し、妖夢の手を取った。妖夢は少し顔を赤くしたが、範人の方を見て笑いかけた。範人は妖夢の様子を確認すると、西行妖の方に鋭い視線を向けた。

「さあ、行こうか。幽々子を救う。」

「はい、全てを救いましょう。」

範人と妖夢は西行妖の元に向かった。

範人と妖夢は西行妖の元に辿り着いた。しかし、2人が見たものは死を撒き散らし、その巨大な枝を振るう妖樹の姿であり、あるべきはずの仲間たちの姿がそこにはなかった。西行妖は目覚めてしまった。

第五十七話

災厄の最後

既に目覚めてしまっていた西行妖を前に範人と妖夢は立ち止まる。別に封印云々関係なく叩き斬ってしまったでもいいのだが、それでは木自体があまりにもかわいそうなため、死を撒き散らす邪なる存在だけを消そうと考えたのだ。

弱点を探す範人たちは西行妖に近づこうとするが、西行妖は枝を振るって近づくことを許さない。範人たちは縦横に攻撃をかわす。避けに徹する中でも、目だけは弱点を探して忙しく動き続ける。

ふと、範人が地面に目を向けたとき、赤い何かが見界の端をかすめた。範人がその方向を注意して見ると真っ赤な中に下地と思われる青色があることに気づく。そして、驚いた。倒れていたものは幽々子で真っ赤な色は血によるものだったのだ。範人は急いで救出に向かうが注意を逸らしたのがまずかった。

西行妖の巨大な枝が範人に迫り、その手足を拘束する。そのまま引っ張り、範人の手足が挽げた。範人は痛みに顔をしかめるが、挽げた手足は捨てて手足を再生させる。すぐに幽々子を脇に抱えて西行妖から距離を取った。

「フウ〜♪クレイジーなまでの殺気だなあ。妖夢、一旦幽々子を安全な場所まで運ぶぞ。」

「わかりました。作戦もそこで話し合いましよ。」

範人と妖夢は西行妖に背を向け、その場を立ち去った。

範人と妖夢は白玉楼の中に駆け込んだ。西行妖自体は動けないようだが、枝はかなり伸びることができるようで2人のすぐ後ろまで迫っていた。扉を閉め、奥の部屋に逃げ込み幽々子を床に寝かせて初めて安心できる。

「おい、範人、妖夢……」

そのとき、隣の部屋から2人にとって聞き覚えのある声があった。2人が不思議に思ってそちらを見ると、魔理沙たちが襖を開けて範人たちを見ている。気絶している幽々子を除き、その場の全員が安心して

ホツと息を吐く。

「お前たち、無事だったのか。」

「ああ、なんとかな。生きているって素晴らしい。」

友の心配をしていた範人は優の言葉に安堵する。死というものはどこにでも転がっている石ころのようなものだ。もちろん、突然の死も悲しいが、原因が明確にわかった状態での死ほど悲しい死はない。

「範人、あれは一体なんだ？」

「ああ、あの妖樹は簡単に言うとお幽々子の棺桶だ。」

「はあ!? 棺桶!?」

範人の返しに魔理沙はとても驚いた様子だ。他の4人も少し驚いた表情を見せるが、薄々感づいてはいたらしい。特に霊夢は霊力を感じていたことから、もともと気づいていた。

「幽々子の遺体が木の下に埋まっているんでしょ？」

「そういうことだ。」

「なんだ。びつくりしたぜ。」

「ところで妖夢、アレの準備はできているか？」

「アレですか……今も気を高めているところです。だいたい、あと5分くらいかかると思います。」

『アレ』の意味がわからず、霊夢たちはポカンとした表情を浮かべるが、妖夢は理解したようで気を高め続ける。

「わかった。じゃあ、ここで作戦を説明する。作戦は……」

……といった感じだ。この作戦では妖夢が最も重要な役割を持っているが、他の全員も重要だ。妖夢の技が決まれば、間違いなく勝てる。行くぞー!

5分後、作戦の説明が終わり、妖夢の気も十分に高まった。彼らは幽々子をその場に残し、西行妖を倒しに向かった。

「準備はいいな？」

「ああ、バッチリだぜ！」

魔理沙が答え、全員が西行妖から30m程の位置についた瞬間、範人は全身を第一に変異させて地面を蹴った。あまりの脚力に地面は爆発するように吹き飛ぶ。足の裏から炎を噴き出し加速する。西行妖は範人を殺そうと枝を動かしたが、範人は枝が行く手を塞ぐ前に通過して真っ直ぐ飛ぶ。

範人は西行妖の幹に突撃した。漆黒の獣は樹皮を砕き、繊維を割いて幹の中に突入。そして、幹の中心に辿り着くと同時に全身から炎を噴き出した。西行妖の幹が破裂してしまいそうなほどに膨らむ。範人が幹の反対側から飛び出したとき、木に火が広がった。

生木と言っても、燃えないことはない。西行妖は苦しそうに枝を震わせて消火する。

「投げ辛いわね、これ！」

その隙について咲夜がナイフを投げた。その柄には博麗のお札がくくりつけてある。何十本ものナイフが西行妖の幹に突き刺さった。

ダメージがほとんどないとは言え、身体に何かが突き刺さっているというのは快くない。西行妖は身体を震わせて振り払おうとするが、深々と突き刺さったナイフは抜けない。怒り狂った西行妖は咲夜に枝を伸ばした。

「やらせねえよ！」

範人が枝にドロップキックをし、それを阻止した。枝は砕け飛び、燃え尽きた。その背後では魔理沙がミニ八卦炉を構えていた。

「行くぜ！」

光符『ライトロード』

ミニ八卦炉からチューブのように穴の開いたレーザーが発射される。阻止しようとした枝は折れて飛んでいった。それが西行妖の幹に当たる寸前で変化が起きた。お札が輝き、レーザーを吸収し始める。光の輪が固定され、道ができ上がる。

「妖夢さん、行きますよ。」

「はい、思いきりお願いします。」

「任せてください。ウオオオオー！」

デューレスが妖夢を光の輪の中に全力で投げ込む。妖夢が猛スピードで輪に突入すると同時に優がスペルカードを詠唱する。

「反符『リフレクションスペース』」

ライトロードの内側に重力の壁が形成される。さらに、等間隔で特殊な重力空間も形成された。妖夢は重力の壁で軌道を安定、スピードを加速させながら西行妖に近づく。そして、音すらも遅れてしまいそうなるスピードで西行妖に突撃した。

「滅断剣『絶界』!!」

妖夢は断迷剣を横薙ぎに振り抜いた。刀は木を傷つけることなく西行妖の魂だけを斬る。それも、死を求める悪しき部分だけを斬った。

西行妖は苦しげに枝を伸ばすと、元のよう沈黙した。

「……勝ったのでしょうか？」

「ああ、多分勝ったと思うぜ。」

妖夢と魔理沙はそんなことを話しているが、範人と霊夢は浮かぬ顔をしていた。霊夢はひとまず西行妖にお札を貼って封印を施した。西行妖の中の悪しきものは消え去っていたが、一応のためである。

「これで大丈夫かしら？」

「わからないな。霊夢が封印した本体は間違いなく大丈夫だと思うが……」

範人は最も活躍したであろう妖夢の方をチラリと見た。妖夢はその視線に気づき、範人の方へ行く。

「範人ー、私やりましたよ。」

「ああ、よくやったな。」

範人は抱きついてきた妖夢を優しく受け止めて、頭を撫でる。周りの者はそれをジト目で見るが、妖夢はそれを気にすることなく範人のたくましい身体に自身の身体を押し付けた。

(許さない許さない許さない許さない許さない……)

私を斬ったあの女は許さない。せめて、あの女……あの女だけは殺してやる。)

そのとき、妖夢の背後に落ちている西行妖の枝が肥大化し、妖夢に向かつて猛スピードで伸びた。周りの者たちは範人たちを見ているせいでそれに気づいていない。背を向けている妖夢は尚更だ。妖夢の背後に視線を向けていた範人だけがそれに気づいた。

範人は避けようと妖夢を持ち上げようとした。しかし、先程の戦いで体力を消耗し過ぎたせいで持ち上げられない。仕方がないため範人は妖夢を横に投げた。

「突然何をするんですか!？」

妖夢は地面で数回バウンドし、必死で受け身を取った。動きが止まったときに顔を上げると腹部を西行妖の枝に貫かれ、口から血を吐き出す範人がいた。

(チツ……しくじったか……まあいい、こいつは使える。)

範人は力を振り絞り、西行妖の枝を無理やり引き抜く。傷口から鮮血と内臓が溢れ出て、地面に広がった。その場にいた全員はその光景に目を瞑り、口を押さえた。

通常、こういうった怪我をしたときは刺さったものを抜くと出血しかえって危険なのだが、範人はそんなことはお構いなしにすぐに引き抜いた。それにはしつかりと理由があり……

「がああアー！」

「範人!?!？」

範人は突然、叫び声を上げて、苦しみ始める。妖夢たちは範人に近

づこうとしたが、霊夢が片手でそれを制止した。枝が貫通したときですら、声ひとつ上げなかったにも関わらず、今は苦しんでいる。

「何で止めるんですか!？」

「あれよ。」

「……………あれって……………」

霊夢は範人を指差す。妖夢たちが範人を見ると範人の全身から幽々子と同じような不気味で黒いオーラが噴き出ていた。

第五十八話

暴走？

範人は地面でのたうち回る間に自身の意識が遠ざかるのを感じていた。体内に邪なるものが入り込み、頭の中に声が響く。

（殺せ殺せ殺せ！全て奪え！全てを無に返せ！）

その声はだんだんと大きくなり、範人の意識を蝕んでいく。

光と闇は同じ存在。ただ、光が弱くなり、闇に変わるだけである。それはとても簡単なことでとても残酷なこと。

範人の心が闇に染まり、範人がただ、死を求める化け物モンスターに変わっていくだけである。自身が何よりも恐れた自分に変わる。

範人が立ち上がる。しかし、そこには範人の面影など無いに等しかった。

全身は黒緑色の甲殻に覆われ、それぞれの隙間からは赤黒い炎を噴き出している。肩から背中にかけては4対の鎌が生え、周りの命を刈り取らんと動き回る。さらに尻尾まで生えた。姿勢は前屈みになり、首が伸びた。顔の形も変わり、まるで西洋のドラゴンを思わせるような形態になる。首から落ちたネックレスは勝手に斧の形態になり範人はそれを両手で持ち上げた。

範人……いや、人間であつたことを示すものは二足歩行していることだけであり、他は完全に異形の存在であつた。

「そんな……範人……」

「なんだこれは!?!」

「殺ス…殺ス……」

その場の全員は変わり果てた範人の姿に驚愕し、目を見開く。

つい先程まで、自分たちを率い、リーダーとして戦っていた者が突如として化け物に変身してしまったのだ。驚くのも無理は無いが、変身してしまうことはもつとありえない。

範人はその手に持った斧を振るう。炎が衝撃波となつて飛ぶ。狙いはめちやくちやで誰かに当たることもなかったが、その威力は全員に恐怖を覚えさせるには十分だった。

(キヤハハハハ！最高だ！まさかこんなにヤバいやつなんて思っていなかった。殺せる、たくさん殺せる！)

「ウアアアアー！」

範人が咆哮した。その声は大気をビリビリと激しく震わし、とんでもない風圧を起す。その口からは上空に向けて、巨大な火の玉が発射された。その火の玉は爆発し、並の花火とは比べ物にならないような大爆発を起す。

「止めてください、範人！」

「グオオオー！」

範人は妖夢に向かって火を吐く。妖夢はそれを刀で斬り払い、範人に向かって直進する。他の者はそれを止めようとしたが、彼らの手が妖夢の手に届くことはなかった。

範人は斧を振り下ろした。妖夢はそれを刀で受け流し、股の間を滑り抜けながら足払いをした。範人はバランスを崩すが、尻尾を足代わりにして転倒を防いだ。宙に浮いていた足を地面に全力で叩きつける。地響きが発生し、衝撃を受けた妖夢は空中へ弾き飛ばされた。呆気にとられている妖夢に範人の燃え盛る拳が迫る。妖夢は死を覚悟して、目を閉じた。

しかし、その拳が妖夢に当たることはなかった。妖夢が目を開けると目の前に紙一重で止められた拳があり、火も消えていた。範人が口を開く。

「逃げ…口…俺は…危…険だ。殺シタ…くくない。」

獣のようなその声の中には微かに範人の声が混じっていた。異形と化した範人は目から燃える涙を零した。それは地面に落ちると土を焦がして消える。

妖夢は範人の指示に従って魔理沙たちのいる場所まで移動する。

妖夢が離れた途端、範人は溜め込んでいた力を解放するかのよう
に暴れ始めた。全身から炎を噴き出しながら、地面を転げ回り、止ま
ったと思えば宙返りする。

範人の体内で殺戮欲求が暴れ、範人はそれを止めることができな
い。さらにその欲求の元凶ですら、それを止めることはできなかつ
た。

(なんだ、これは!?? 制御できん!??)

「ゴアアアー!!」

範人から噴き出す炎がさらに強くなる。半径10m以内は軽く焼
け焦げ、咄嗟に50m程離れた妖夢たちにも熱波が伝わってくる。そ
の温度はだんだんと上がり、範人を覆う甲殻が輝きを放つようになっ
た。

(熱い熱い熱い! 身体が焼ける!?? 燃え尽きる!??)

死ぬ? 消える? そんなのは嫌だ! 私はまだ、殺し足りない!

甲殻の輝きがさらに強くなったとき、範人から噴き出す炎が止まっ
た。反対に、周りの炎と高熱を吸収し始める。そして、吸収が止まっ
たとき……

ドゴオオーン

範人の体内で大爆発が起こった。甲殻の隙間から槍のような火柱
が何本も飛び出す。範人の体内で爆発が起こったため、爆風はそこま
でではなかったものの、甲殻を通して地面や大気に伝わった衝撃は絶
大なものであり、冥界を揺らした。妖夢たちは足に力を込めて転倒を
なんとか防ぐ。

(私…ワタシ…ワタ…ハ…殺シタ…リナイ…)

ダカラ……

ワタシ…コロス!!!)

邪なるものは範人の体内で消滅、空中で霧散した。しかし、誰もそのことには気づかなかつた。

範人の身体を覆っていた甲殻が消滅し、元の姿に戻る。腹部に大穴を開けた彼は静かに倒れた。

妖夢は範人に駆け寄り、頬を軽く叩いて意識を確認する。しかし、反応はない。急いで彼の胸に耳を当て、心臓が動いているかを確認する。

動いていなかった。彼の心臓は止まり、呼吸もしていなかった。

妖夢は一瞬放心状態になる。ついさつきまで、生きていた大切な人は彼女の手の届かないところまで行きかけていた。

妖夢の様子から範人が非常に危険な状態にあることを察した霊夢は紫を呼ぶ。

「紫、範人が大変なことになっているわよ。」

霊夢の呼んでも紫は来ない。霊夢の言葉が聞こえていないのか、はたまた聞こえていても来る気がないのか。それは紫にしかわからない。友が死んでしまうことを恐れた霊夢はイライラが隠せない。

妖夢は範人の傍らに膝をつき泣きだしてしまう。

「範人、範人！起きてください！こんな傷いつもみたいに一瞬で直し

て、いつもみたいに笑ってくださいよ！私と生きるんじゃないですか!? 範人は最強の生物兵器じゃなかったんですか!?

「……こんなところで別れるなんてあんまりじゃないですか……死んじゃうなんて嫌ですよ……ねえ、起きて……起きてください！目を開けてくださいよ！」

それでも範人は目を覚まさない。覚めるはずなどないのだ。彼の心臓は止まり、呼吸も止まっている。だから、ほとんど死んでしまっているのだ。

しかし、そんな中にも光はある。範人の心臓が動きを止めてからあまり時間は経過していない。心臓を動かせば、まだ生きることのできる確率はあるのだ。

「生きてください、範人！」

妖夢は範人に胸骨圧迫をした後、範人の顎を上げ、口を合わせて人口呼吸をする。もう一度、胸骨圧迫をしたとき、範人の肌にも赤みが戻ってきた。傷口から血が流れ始めるが、その傷口も少しずつ塞がり始めた。

範人の心臓が活動を再開したのだ。しかし、範人は目を覚まさず、傷の治りも遅い。それでも妖夢にとってはそれで十分だった。

妖夢は安堵し、地面に崩れ落ちる。そのとき、妖夢の背後にスキマが開き、紫が現れた。

「ちよっと用事があつて遅れちゃったけど……ひとまずは安定したみたいね。良かったわ。」

「遅いわよ。」

「ごめんなさいね。」

「それは範人に言いなさいよ。」

紫は一瞬だけ嫌そうな顔をして霊夢を睨みつけたが、すぐに地面の範人に目を向けた。そのボロボロになった痛々しい姿を見ても彼女は顔色一つ変えなかったが、心を痛めていた。紫は範人に謝罪する。

「……遅れてごめんね、範人。」

まあ、安定したみたいだけど、やっぱり安心はできないわね。永遠亭に連れて行くわ。」

そう言つて紫はスキマを開こうとする。しかし、妖夢がその腕を掴んで止めた。紫は妖夢を見るとニツコリと笑つて、頭を撫でる。

「妖夢も来たいのしょう？ついてきていいわよ。」

「……………ありがとうございます。」

「ふふふ、恋人の心配をするのは当然のことだもの。最初から予想していたわ。」

そつちの5人は幽々子をお願いね。」

「ちよつ……………待ちなさいよ！」

「じゃあね〜♪」

妖夢は紫の隣に移動する。紫は3人のいる地面にスキマを開き、3人は永遠亭に向かった。

霊夢は不満な顔をしていたが、魔理沙たちが白玉楼に向かったため、しぶしぶあとをついていった。

範人の過去話

人間を辞めた子供たち

1993年、アメリカ某所、ゴートレック生物研究所。

「ハハハ♪」

「待ちやがれ！」

資材置き場に幼い男の子二人の声が響く。ハント・ゴートレックとその双子の兄レイジ。ハントの髪型は腰まで届く金髪。レイジの髪型は肩までギリギリ届かない金髪。

ハントは全力で走り、レイジがそれを追いかける。二人だけの能力禁止鬼ごっこはレイジが鬼だ。

この場所は二人の遊び場。父親のアルバレストはこの場所を危険だと言っているが二人の息子が可愛いため注意できず放置している。そんな彼は今、サイボーグ化した一歳の息子の相手で手が放せない。「確保だ。交代して十秒したら再会な。」

「ちえっ、捕まっちゃった。」

ハントが捕まり、鬼が交代する。十秒後にまた再開、ハントはレイジを追いかける。

「待ってよ、兄さん。」

「待てと言われて待つ逃走者はいない♪」

レイジは猛スピードで走る。三歳児にしてはとても速い。いや、人としてもだろうか。そのおかげでハントが鬼になるといつもハントが鬼のまま遊びが終わってしまう。しかし、今日の彼には秘策があった。

(あそこに隠れば……。)

レイジはハントが視界の中に行かないときにある決まった場所を決まったルートで通る。ハントはそのルートを記憶したのだ。曲がり角に隠れて待ち伏せる作戦をたてた。

ハントが隠れてすぐにレイジがやって来た。逃げられる可能性があるため、できるだけ引きつけてから捕まえる。

パシッ

「よっしゃあ、hunting成功だ。」

「な……、初めて確保されたぜ。今度は俺が鬼な。」

二人だけの鬼ごっこは日が暮れるまで続いた。

今日もまた二人は鬼ごっこをしている。しかし、今日は研究するところが一時的になくなっているため、研究員のカノン・ウエスカーが監視を行う。

「待つてよー。」

「いつも言っているじゃねーか。待てと言われて待つやつはいないぜ。」

二人の会話を聞いてカノンの顔に笑みが浮かぶ。

彼女はウエスカー計画で訓練されたウエスカーではない。アンブレラ出身であることは違いないのだが、そのウエスカー計画の後に訓練されたウエスカーだ。まともな心があったアンブレラの研究員がウエスカーたちの暴走を恐れて訓練した女性である。そのため、強く優しい。

そんなときに事故が起きた。

レイジが積み上げられた資材に触れたとき資材が少し動いた。資材自体は崩れなかったが資材が隠れていたスイッチを押した。

資材を持ち上げるためのクレーンのアームが動き出す。しかし、残念なことにそれを支えるワイヤーは錆びていた。動き出したアームの重さに耐え切れず、ワイヤーは切れてしまった。アームが落下する。そしてその下にはレイジがいた。

「兄さん、危ないー！」

待ち伏せ作戦で隠れていたハントが走り出し、レイジの体を突き飛

ばそうとした。

しかし、遅かった。

アームはハントたちの肩に当たりその場に倒した。それはハントの右半身を押し潰し、同時にレイジの左半身も押し潰した。さらにレイジはうつ伏せに転んでしまい左目に落ちていた鉄パイプが刺さった。二人はその場で気を失った。

カノンハントとレイジをアームの下から助け出し、研究室のベッドに休ませるとアルバレストを呼んだ。母親の望美は話を聞いた瞬間に気絶してしまった。

今は二人で研究室に急いでいるところだ。

「博士、速くー！」

「わかっているー！」

扉を開けると機械につながれ、大量出血を起こしているハントとレ

イジがいた。機械の力で呼吸を行い、輸血も行なわれている。

アルバレストは二人のもとに駆け寄り、声をかける。

「ハント、レイジ、大丈夫か？」

返事はない。二人に意識はなく、返事など返ってくるはずがないのにアルバレストは声をかけ続けた。やがて、瞼すら動かさない愛する我が子の変わり果てた姿に泣き崩れた。

「博士、二人は生きています。医師でもあるんですから頑張つて治療しましょう。」

「……無理だ。できるはずがない。」

諦めているアルバレストの様子にカノンはイライラしてきた。だが、感情を抑えて話す。

「博士ならできますよ。」

「無理だよ……」

「諦めないでください。」

「僕には無理だ。できっこない。」

「ふざけんじゃねえ！」

感情を抑えて話していたカノンも限界だった。思わず怒鳴つてしまう。

2人が生まれたばかりの頃から研究所にいたカノンにとってハントとレイジは我が子のようなものなのだ。そんな子供たちの本当の親であるアルバレストが諦めている姿に彼女は我慢できなかった。

「博士が諦めてどうするんですか！こんなになっても……こんなにロボロになつても二人は生きていますよ！治療すればまだ生かすことができます！治療しましょうよ！」

「……わかった。」

アルバレストは覚悟を決めた。しかし、彼には懸念があった。

「治療するのはいい。だが、私は二人に身体の不自由なく生きてもらいたい。傷をふさぐように普通に治療すれば、二人は普通に歩けなくなる。それが嫌なんだ。」

「でも、そんなことできるはずがないです。失ってしまった身体の一部はもう潰れてなくなっているんですよ。そんなものを再生させる

なんてそんなこと………まさか!?!」

カノンは気づいた、彼が何を考えているのかを。

普通に治療すれば失った一部が再生するはずがない。そう、普通ならば。彼が考えているのは普通ではない治療法。つまり、

生物兵器への人体改造

カノンは反対しようとした。しかし、彼の願いは二人が身体の不自由なく生きられることだ。彼女は彼に任せることにした。

「生物兵器化ですね。私は反対しません。博士に任せます。」

「よし!すぐに取り掛かる。僕が作った新しいやつがあるはずだ。それを使おう。」

改造と言ってもサンプルを注射器で打ち込むだけだ。ハントには赤いサンプルを、レイジには青いサンプルを打ち込んだ。サンプルが入りきった瞬間に二人の身体がビクリと動き、沈黙した。

「適合するのに三日、傷が治るのに一日かかる。二人が意識を取り戻すのは五日後になると思う。それまでは安心できない。」

彼らは五日間寝ずに二人の様子をうかがった。

「う、うーん。」

ハントの目が覚める。今の彼には自分を襲った強烈な痛みのことまでしか記憶がない。

彼が今いる場所は鋼鉄製の壁に囲まれた実験場。鋼鉄製のはずなのに壁は所々に傷がついたり、凹んだりしていた。

何故ここにいるかわからない。何故ここにいるのかを考えているとアナウンスでアルバレストの声が聞こえてきた。

『ハントー、大丈夫か?』

「父さん！僕は大丈夫だよ。それよりも、どうしてここにいるの?」

『それについてはこちらに来てから話す。ゲートから出て研究室まで来てくれ。』

「はい。」

ハントは研究室に走って向かう。彼は気づかなかったが、走る速さは人外じみたスピードだった。

研究室には研究所の者が全員集まっていた。

「よし！ハントも来たことだし話そう。」

まず、ハントとレイジは生物兵器になった。完全な人間には戻れない。

「え!??」

ハントとレイジは驚いたがそれ以外の者の表情は変わらなかった。「ハントとレイジは五日前の事故で死にかけた。だから、その治療のために改造したんだ。二人の意見を聞かなくてごめんな。」

それを聞いた二人は微妙な心境だった。自分は人間をやめさせられたのだ。それも自分の父親によってだ。少し怒りがわいたが自分が結果的に助かったことがあるため、なってしまったものは仕方ないと納得したことにしてお礼を言う。

「父さん、ありがとうございます。」

「うん。二人が納得してくれたみたいで良かったよ。これから生物兵器としての名前を発表する。レイジは『バスターキング』、ハントは『ハンターキング』だ。」

（僕は『ハンターキング』か、なんかかっこいい。）

（僕は『バスターキング』か、傍若無人なる王……悪くないな。）

「2人は昨日暴走して戦っていたんだ。次もいつ暴走かわからないから気をつけて生活してくれ。」

「ああ。だからあの部屋は壁がボロボロだったんだ。」

「そういうことだ。ハントとレイジの戦いはすごかったぞ。」

「結果はどうだったの?」

ハントは期待しながら訊ねる。訊ねこそしなかったが、レイジも目を輝かせている。

2人にとって最大のライバルは双子の兄弟であるそれぞれであり、その相手に勝てたときはとても嬉しいのだ。

「引き分けた。それぞれのパンチがそれぞれの顔に当たって同時に気絶だった。」

2人は「またか」というような表情になる。今までに2人がしてきた勝負ではどちらかが勝っても異なる勝負で違う方が勝ち、五分五分なのだ。

自分の勝利で決着をつけたいレイジは提案をする。

「よし！ハント、これが終わったら後で勝負だ！」

「はいよ〜♪」

「ほどほどにしてくれよ。」

「はい。」

「じゃあ、話はここまでだ。解散。」

話が終わり、全員はそれぞれの仕事に取り掛かった。研究員たちは研究を再開し、ハントとレイジは実験場に向かった。

この日、後に最高傑作と言われることになる一対の生物兵器が生まれた。

俺はモノリスを素材に新しい武器を作っていた。

加工方法を父さんから教えてもらったばかりの頃に比べたら、最近は大分上手くなったと思う。と言っても、実際に武器として作るのは初めてのことになるのだが……

まあ、こんなに加工の難しいものを加工しているだけでも充分すごいのではないのだろうか？

熱して叩いて形を整えながら鍛える。こんな作業をかれこれ5時間もしているのだが、そろそろ完成である。

「うしっ！できたー！」

出来上がった刀を持ち上げて、蛍光灯の光にかざす。その鋭い切っ先は光を反射して美しく輝く。先に作っておいた鞘に刀を収める。寸法をしっかりと調整した刀はぴったりと鞘に収まり、最後には鍔と鞘の当たるチャキンという心地よい音が響いた。

我ながら良い出来映えである。

「大変だー！」

「うわっ!?？」

俺が刀の出来映えに満足しているとレイジが作業場に飛び込んできた。驚いて刀を落としそうになってしまう。

騒がしいやつだ。作業のときくらいは静かにしてもらいたい。モノリスはとても重いため床なんかには落としたり、床に穴が開くのはほぼ確定事項である。邪魔はしないでいただきたい。

俺が不機嫌な顔をして振り向くとさすがに反省したらしく、シユンとしてしまった。

そこまで怖い顔をしたつもりはないんだが……まあいい。機嫌取るか。

「丁度良いところに来たね。今、レイジに頼まれた日本刀が出来たところなんだけど……欲しい？」

「え？マジで？サンキュ！大事にするぜ！」

「ちよ……おい！やめんか！」

つい先程まで暗かったレイジの表情が一気に明るくなり、俺の頭をガシガシと力強く撫でる。

本当に単純なやつだと呆れてしまうが、常に頭の中で色んなことを同時に、しかも冷静に考えているレイジの性質故だろう。

コロコロと表情が変わる彼を見ると、こんなのが自分の双子の兄ということに少し納得がいなくなるが、それが彼の良いところだとも思える。現に、そんな彼を見ていてもあまり悪い気分ではないし、大抵のことは許すことができる。

レイジは刀を鞘から抜くとその刀身に指を這わせた。指は刃の表面を滑らかに滑り、すぐに先まで到達してしまった。次に、彼は刀を構える。青を中心とした色合いのその刀はレイジの手に握られたことにより、さらに輝きを増したようにも見える。彼は満足したように頷き、刀を鞘に収めた。

「すごいでしょ？まだ、機能があるんだよ。」

「それは本当か？」

「うん。刀に血を吸収させてみなよ。」

「お、おう……」

レイジは自身の手首を刀で軽く切った。大量の血が流れ出てリストカットに見えてしまうが、生物兵器である彼にとっては大したことではない。レイジは冷静に血を刀に注いだ。刀は血を吸収し、青が一瞬だけ紫に染まり、すぐに青に戻る。

「すごいな。こんな機能があるなんて……」

「ふふふ、今度は刀から少し離れて、刀にこちらに来るように念じてみてよ。」

「なんでまた……」

ブツブツと愚痴をこぼしながらもレイジは俺に協力してくれる。彼は刀を床に突き立て、作業場の端まで移動した。刀に向けて手をかざす。すると、刀はひとりでに床から抜け、彼の手に向けて飛んでいった。

レイジはギョツとした表情を浮かべるが、そんな状態でも刀をしつかりとキャッチする。キャッチした後も表情が変わらない彼は実感

が湧かないようだ。

「刀が思い通りに動く気分はどうかかな？」

「……すげえ……なんだよ……これ……」

「上手く扱えているよ。絶刀“蒼牙”はレイジに適合したみたいだね。」

「刀の名前くらい俺に決めさせてくれよ。」

「ダーメ、製作者は俺だもん。」

「ところで、何が大変なの？」

「あ、そうだ！すぐにテレビつける！」

レイジが急かすため、言われた通りにテレビをつける。そこには煙を上げる街の様子が映し出されていた。カメラがある建物を写した瞬間、俺はハツとした。そこは俺の知っている街ですぐ近くだった。

「ここ、隣街だよな……」

「うん、そうだね。」

カメラが写している街は俺が住んでいる街のすぐ隣の街だった。

カメラは街中を進んでいく。すると、あるところで立ち止まった。どうやら、生存者を見つけたらしい。

道路に倒れた生存者らしき者は手足がピクピクと動いている。カメラマンがそれに近づくとそれは上体を起こした。しかし、それは助けを求めることなく、彼の喉元に噛み付いた。彼の首から血が噴き出し、そいつは彼を一心不乱に食い始める。

そいつが顔を上げ、カメラの方を向いたとき、そいつの血塗れの顔と白濁した眼が写った。カメラのレンズに血が滴り落ち、カメラの映像はそこで途切れた。

俺はその映像にただ唾然とした。最近、他の場所でも起きたというのに、こんなに近くでもこれが起こるのだと思った。

「さっきのあいつ……ゾンビ……だよな。」

「ああ、そうだ。」

「バイオハザードが起きたってことはデュークが危ないんじゃない？」

「その通りだ。助けに行くぞ。」

「うん、わかった。」

俺たちは外出の許可を得るために父さんの元へ向かった。

俺たちは父さんに今起こっていることとデュークを助けたいという話を話した。父さんはその意見を否定することもなく、最初から最後まで真剣に聞いてくれた。

「とうわけなんだ。許可をくれない？」

「もちろんいいよ。」

「やった「そのかわり！」…え？」

「シオンも連れて行くこと。この救出だとシオンの力はきつと重要になってくる。」

「うん、わかった。」

「じゃあ、車に乗って。すぐに出発するよ。」

父さんは車庫に向かう。俺たちもシオンを連れて車庫に向かった。

父さんが送ってくれたのは街の入り口まで。街の中に入ってしまくと、ゾンビたちが彷徨っていることは明白なため、ワクチンを持っているとしても、生身の人間である父さんにとっては危険すぎる。俺たちは車から飛び出すとデュークの家を目指して走り出した。

街に入って数十mほどで最初のゾンビに遭遇した。20歳くらいの男性である。

たった数十mで遭遇とは、父さんの判断は正しかった。まあ、1匹くらいなら俺たちでどうにでもなる。でも、ここで1匹なんて、中心のほうではもつと多いんだろうな。気を引き締めて行かないと！

俺はゾンビの腹にパンチを1発打ち込んだ。俺の拳はゾンビの身体を最も簡単に貫通してしまった。腕に血のヌルヌルとした感触がまとわりつき気持ちが悪い。

俺が腕を振るとゾンビから腕が抜けて、ゾンビは飛んでいった。ゾンビはコンクリートの塀に頭から激突し、脳漿をぶちまけて絶命した。塀には素敵な赤い落書きが残る。

「赤い花が咲きました、っと。」

「もっと派手なものは咲かないのか？」

「ゾンビの数もつと多くないと無理だね。」

「……噂をすれば、お出ましのようだな。」

見ると通りの500m程先に30匹くらいのゾンビたちが彷徨っているのが見えた。

この通りを直進するのが最も早くデュークの家に着く道筋のため奴らを殺すのは当然のことだ。1匹だけじゃ殺し足りなかったし、丁度良い。

俺は地面を蹴り、全力で走る。ゾンビの集団が目前に迫り、殴るために腕を構えたが、俺の拳がゾンビたちに当たることはなかった。

突如、俺の横を何かが駆け抜け、ゾンビの集団に突っ込んだ。そのあまりのスピードに衝撃波が発生し、通りに面した家々の窓ガラスがすべて割れた。

そのスピードはおそらく、光速を超えていただろう。ソニックブームまで発生し、木々は切り倒されていた。

ゾンビの集団に目を戻すとそこには一面に血をぶちまけられて赤く染まった道路があった。ところどころにゾンビだったと思われる肉の屑や砕けた骨が散らばっている。

その光景を見て、俺はため息を漏らす。これの犯人はわかりきっていた。

「レイジ、少しくらいは獲物を残してくれよ。」

レイジである。その彼は先ほどまでゾンビの集団がいた場所の先で蒼牙についた血を払っていた。

「は？なんでだ？こういうのは早いもん勝ちだろ？」

「早いもの勝ちって言うてもな……」

お前の速さは光速を超えるんだからお前より速いやつなんてほんどいないからな。」

「そういうハントも光速で動けるじゃねーか。」

「俺の場合は光の粒子だからいいの。」

レイジの場合は光速に自分のスピードを上乗せして、そのままの状態で動き回るから危険なんだよ。

見る、通りの家々を。ガラスなんて粉々だ。」

「やつちやつたぜ！」

「まったく……やつちやつたぜ！じゃねーよ。」

俺は何故かドヤ顔になっているレイジの元まで光速で移動し、頭にチョップをお見舞いする。別に本気でぶつけたわけではなかったのだが、レイジは頭を押さえた。

弟にツツコミを入れられる兄とはいかがなものか？

……いや、俺も兄なのだが、しっかりしていると思う。というより、しっかりしていると願いたい。

ふと、シオンの方を見ると、シオンが此方に片手を向けているのがわかった。その変形した手には黒光りする銃口が見える。彼が目を動かした方向に俺は首を傾けた。

その瞬間、俺の耳元を銃弾が掠める。後ろを振り返ると、どこから現れたのかわからないゾンビが眉間から血を流して倒れていた。

「射的の腕上げたじゃないか。」

「へへへ、ありがとう。僕だって成長するんだよ。あれくらい簡単さ。」

……お兄ちゃん、喧嘩はしないでよ。」

「悪い悪い。」

シオンは此方に向けていた片手を元の形に戻しながら言った。別に喧嘩していたつもりはないのだが、そう見えていたのなら仕方ない。素直に謝る。

……弟にツツコミを入れられる兄がいかがなものか？と思っただが、それは俺も当てはまっていたらしい。少し恥ずかしい。

兄弟姉妹は年下になるとしっかり者になるのだろうか？よくわか

らないが、俺たち兄弟を見ているとそう思えてくる。

まあ、兄弟の中で一番家事をするのは俺なのだが……

「早く行こうぜ！」

「ああ、うん。」

走るレイジのあとを俺は粒子化で、シオンはジェット噴射機能を使って追う。

あれから後はあつと言う間だった。2、3回ほどゾンビの集団に遭遇したが、研究所の資料で見慣れている俺たちは恐怖で怯むことなくゾンビたちを殺してデュークの家を目指した。

殺すことに躊躇いなど微塵もなかった。

今はデュークの家に着いたが大分マズイことになっている。

この街にタイラントが投入されていたのだ。しかも、6体。

ゾンビの群れを殲滅するなどと派手に暴れた俺たちがそいつらに見つからないわけがなかった。全力で逃げて、デュークの家の中に隠れたのだ。

「ウアアアア……」

「チツ……！」

「おい、嘘だろ!?？」

デュークの両親がそこにいた。しかし、既に人ではなく、ゾンビ化している。俺たちはこの街で初めて、殺しを躊躇った。それでも、殺らなければならぬ。生きるためには、死なないために殺さなければいけない。

「……めん。せめて、痛みは一瞬の内に……」

俺の拳は父親の頭を、レイジの拳は母親の頭をそれぞれ殴り、衝撃で破裂させた。

涙とともに怒りがこみ上げてくる。街をこんな風にしてしまった元凶が何かは知っている。ラクーンシティと同様、アンブレラだ。

そんなとき、近くのクローゼットから声が聞こえた。

「……グッ……ガハッ……ハント、レイジ……いるのか？」

「デュークか？」

俺とレイジはクローゼットの扉を開ける。そこには身体中至るところを噛みちぎられたデュークがいた。ところどころの皮膚が変色し、既に変異が始まっている。既に出遅れだと悟った俺はすぐにシオンを呼び、特殊な治療を始めさせた。

「今から、魂と身体を分離させる。姿は変わっちゃまうけど、中身はデュークのままだ。死ぬよりはよっぽどマシだろ？」

「ああ……早く治してくれ……」

「わかった。シオン、デュークを頼んだぞ。」

俺とレイジはあいつらを相手にしてくる。」

俺は窓の外を指差す。そこには3体のタイラントがおり、俺たちを探していた。こんなに近いのだから、見つかってしまうのも時間の問題である。

俺もレイジも死ぬのは嫌だ。でも、こんな家の中で見つかってしまえば、4人とも死ぬのは確実だろう。それなら、誰かが犠牲になっても誰かを生かした方が良い。今回は偶々死ぬ可能性の高い役を俺たちがするだけだ。

「デューク、待ってろよ。この地獄からすぐに助け出してやる。」

俺の声がデュークに届いたのかはわからない。だが、聞こえていたと信じた。魂だけになった彼は目に見えなくとも、きっと、俺たちのことをすぐ近くで見ているはずだから……

俺とレイジが庭に出た瞬間、1体のタイラントが此方に気づいて咆哮した。他のタイラントもその声に反応し、此方を振り向いた。

出し惜しみなんてしている場合ではない。俺とレイジは一番近くのタイラントに狙いを定め、跳躍した。左右から同時に頭を殴り、叩き潰す。頭の潰れたタイラントは地面に崩れ落ちた。

「ナイスタイミングだ！」

「お前もだろ？」

俺とレイジは全身に力を込める。俺の身体は黒い甲殻に覆われて炎を、レイジの身体は青と白の毛皮に覆われて冷気を噴き出す。

「しゃあああー！ノってきたぜー！」

「充電たいりよくが切れる前に片付けるぞ。」

俺は肩から生えた鎌を構えて、タイラントに突進した。タイラントの鉄拳が唸りを上げて迫ってくるが、俺は鎌で腕を切り飛ばし、首を刈り取った。鎌には炎を纏わせていたため、傷口が再接合することはない。

レイジは飛びかかってきたタイラントの両腕を掴んだ。タイラントの身体がだんだんと凍りついていき、最終的には完全に凍結してしまった。彼はそれを空中に放り投げ、落ちてきたところを尻尾の一振りバラバラに叩き割った。

俺は手に持ったタイラントの頭を他のタイラントに投げつける。しかし、タイラントからは仲間意識など微塵も感じされず、飛んできた頭を叩き落として踏み潰した。

つくづく可哀なアンブレラの子供である。感情など一つも持たず、ただ命令だけに忠実に従う。対象を壊すことだけに生きる意味を持つ悲しい悲しい子供たち。

今……殺楽にししてあげる。だから、動かないで……動く痛いから……

「レイジ！」

「おう！」

俺はレイジに向かってドロップキックをする。すると、彼は俺の足首を掴んで勢いを利用し、ジャイアントスイングを始めた。俺は身体をくの字に曲げ、鎌を目一杯伸ばす。十数回の回転の後、レイジは俺をタイラントに向けて投げ飛ばした。

俺の鎌は行きでタイラント2体の首を刈り取り、帰りで身体を真つ

背後からレーザーが飛んできた。そのレーザーはタイラントの胴体を貫き、炎上させる。しかし、タイラントは構わず突進してきた。シオンが俺たちとタイラントの間に割り込み、前面の全砲門を開放する。そのわずか数十分の1秒後、シオンの身体から無数の弾丸が発射され、タイラントの身体を蜂の巣にした。

シオンが此方を振り向き、手を差し伸べてくる。

「無茶し過ぎだよ、お兄ちゃん。」

「ハハハ……悪いな。」

俺はその手を取り、立ち上がる。レイジは今さっき助けてくれたタイラントに手を貸してもらって立ち上がった。

そのタイラントにはボサボサの長い黒髪があり、目は白くなってしまったものの表情がある。俺はその髪と表情に見覚えがあった。

「シオン……あいつって……」

「うん、デュークだよ。」

「助けてくれてサンキューな。」

「そうか。命だけでも助かって良かったよ。」

まずは服を着ないと。これを着てくれ。」

俺はバッグの中から黒緑色のトレンチコートを取り出した。普通の人間からすれば、大き過ぎてとても着れたものではないのだが、タイラントになったのなら、サイズはぴったりだろう。

デュークは文句を言わずにそのコートを着た。

「さあ、帰ろうか。」

「え？どこへ？僕の家はもう無いんだけど……」

「何言ってるんだ？俺たちの家に決まってるんだろ。そもそも、この街にはもう誰も住むことはできねーよ。結局、政府が滅菌作戦とか言って、核ミサイルは無いにしろ、空爆とかさせるために適当な軍隊は送ってくるんだろうし。」

「ねえ、行こうよ。」

「みんな……ありがとう。」

「お礼はこの街から出て、安全が確保されてから言えよ。」

「さあ、回復したみたいだし、走るぞー！」

俺たちは街の出口を目指して走った。近づくゾンビたちは容赦なく捻り潰し、とにかくこの街から逃れることを考えながら走った。

父さんの車に辿り着き、全員が乗り込む。トラックを改造した父さんの車なら、デュークも軽々と乗ることができた。

数分後、家に着いてから、空を見上げると上空を多数の戦闘飛行機が飛んで行くのが見えた。そして、その翼には傘を広げたような忌々しいマークが描かれている。

名誉挽回しようとしているのだろう。哀れな奴らだ。

アンブレラがいくら人助けをしようと、それはもう手遅れでしかない。自分たちが実験で奪ってきた命と、漏れたウイルスで失われた命、そして、壊れた街はもう戻らないのだから。

実に素晴らしく愚かで醜いクソ野郎共だ。

空を見上げるデュークの目から一滴の涙が溢れ落ちた。太陽光の関係でその表情は見えない。

「Damn it!」

デュークのその呟きは哀しい嘔きとなって、俺の耳の奥深くに強く残った。

範人の過去話

別れ

2002年3月19日……父さんが死んだ日。

俺はいつものように武器を作っていた。しかし、今回は誰かのためではない。

今までは誰かがその人自身を守るために武器を作り、与えていた。それで自分にはつきりとした利益があるとは限らない。その誰かがその武器を持って俺を殺しに来るかもしれないし、その誰かがその武器で事件を起こして俺も共犯になってしまいう可能性さえあった。しかし、それで良かった。

俺にとつての宝物はその誰かとの友情であり、つながりであり、絆だったからだ。例え、上辺だけでもいい。誰かに認めてもらうこと、誰かに友と言ってもらえること……それで十分だった。

しかし、今は違う。俺はその誰かを守りたい。

最強の武器は何か？

それは最高に合う武器を持った者だ。

俺の作った武器は俺が製作したものであつて、その誰かが製作したものではない。結局は俺自身の判断で作られたものだ。

恋愛小説とかで「私は貴方よりも貴方のことを知っている」とか言うことがあるが、結局は思い込み。自分のことを一番よく知っているのは自分であり、他の誰かではない。だから、例え、自分にとつてどんなに強い武器を与えてもそれは一定までしか強くなれない。

ならば、何故に武器を作ってもらうのか？

それは、そいつらに作る技術がないから、誰かの強さにすがりたいからである。

「こいつの武器だから強い」「俺なんかには武器なんて作れない」そんな

な思い込みがあるのだ。

しかし、それは間違いだ。確かに武器作りが上手いやつが作った武器は強い武器だろう。でも、違う。それぞれが作った武器がなんであれ、その者が自分のために作った武器ならば、自分にとって何よりも上手く扱えるはずだからだ。

俺は自分のために最高の武器を作り、最強の武器となる。守るために俺は強くなる。

……つまらないことを長々と考えてしまった。気がつけば、俺は武器を作り終えて両手に握っている。巨大な剣だ。しかし、あまりのぴったり感に握っていることも忘れてしまいそうである。

素振りをしてみると、まるで腕を振っているような感覚で重さも丁度良い。握りながら念じると、それはネックレスになった。俺はそれを無言で首にかけ、ニヤリとしてしまう。

「……最高だ。」

そう呟き、虚空を見つめる。こんなことを嬉しく思ってしまうのは研究者である父さんの影響なのだろうか？

とにかく、製作が上手くいったことは嬉しくて仕方がない。「これで守ることができる」そう思った。

そんなときに電話がかかってきた。俺は手を粒子化させて伸ばし、受話器を取る。

「もしもし。」

『おお、ハントか。丁度良かった。一週間ぶりに帰るからな。夕食の準備は頼んだよ。』

「わかったよ。何でもいい？」

『もちろんだ。ハントの作る料理は何でも美味しいからね。』

「それはありがとう。じゃあ、切るね。」

『ああ…『バン！』何？！』

俺が受話器を耳から離し、台に置こうとしたとき、扉が勢いよく開く音がした。電話の向こうの父さんの声が焦りを含んだ調子に変わる。

『ゴートレック博士だな？我々を裏切った罪、ここで償ってもらおう！』電話の向こうからマシンガンが連射される音が聞こえる。それほど同時に父さんの悲鳴が聞こえ、血糊がべつとりと付着した肉塊が壁や床に飛び散る音も聞こえてくる。

状況が飲み込めない。いや、きつと飲み込みたくないのだろう。状況を理解してしまうことが恐ろしいのだ。

裏切った？誰を？

父さんが裏切ったのは間違いなく向こうの男が関係しているだろう。しかし、男は「我々」と言った。

我々とは何だ？！

男が属する、または属していた集団であることは間違いないはずだ。しかし、その集団が何かわからない。

わからないことだらけだ！

しかし、そんな中でもわかっていることがある。

父さんは何者かの襲撃を受け、マシンガンで撃たれた。つまり、父さんは帰ってこれないということだ。

希望なんてないことくらいわかる。それでも、俺は受話器に向かって叫ぶ。

「父さん！何があつたんだよ？！応えてくれ！父さん！」

向こうに聞こえたのかどうかはわからない。俺の言葉に対する応えなのかどうかはわからないが、受話器から消え入りそうな父さんの声が聞こえてきた。

『レイジ……ハント……シオン……デューレス……僕は…帰れないみたいだ。こんなお父さんでごめんね……もっと一緒にいたかった……ありがとう。』

「おい！父さん！気をしっかり持！全てはアンブレラのために！…クソ野郎が……」

俺は叫ぶ。

父さんに死んでもらいたくない。もう失いたくない。失わないために俺は最強の武器になったのに……あんまりじゃないか!?!俺は遅すぎたのか?俺は結局守ることができないのか?

心の中で感情が暴れ回り、俺の心の海に波を立てる。その波は津波となつて、俺の心を荒らした。

俺の叫びが終わる前に電話の向こうで襲撃者が狂気じみた叫び声を上げた。そして「アンブレラ」と言ったのが確かに聞こえた。

ただでさえ荒れていた俺の心はその言葉でさらに荒れる。しかし、悪態を吐きながらも、俺は冷静だった。自分でも驚くほどに冷静だった。冷静に父さんの言葉を聞き取ろうとする。

受話器から聞こえる声とても近いのに、地球の裏のように遠く感じられる。

『僕の机の引き出し……上から2番目……黒い石……みんな……』

父さんの言葉が途絶え、受話器に何かが当たる音が聞こえた。普通の生物なんかよりよっぽど耳が良い俺にはわかってしまう、受話器に当たったものが何かが。

「そんな……父さん……」

受話器に当たったものは父さんの手だった。父さんは宙に手を伸ばしていたのだ。きつと、死という名の液体の中から誰かが助け出してくれるとでも思ってしまったのだろう。

だが、誰も助けなかったし、誰も助けられなかった。俺がいれば、間違いなく助けようしただろう。しかし、俺は父さんの近くにはおらず、大切なものを失ってしまった。

俺が絶望のドン底に叩き落とされかけたとき、さらに追い討ちがかけられた。カランという音の後、受話器から爆音が響き、俺の鼓膜を破らんばかりに振動させた。あまりの音量に頭が痛くなる。

手榴弾だった。死んだ父さんに向かってさらに手榴弾が投げられたのだ。爆音からして、きつと、父さんの身体は微塵も残っていないだろう。

俺は泣いた、もう絶対に会うことのできない父さんの姿を思い浮か

べながら。受話器を台に置くことすら忘れてしまった。

俺の泣き声に気づいた研究所のメンバーが集まってきた。

そこにもう両親の姿はない。ついさつき死んだ父さんはもちろんいないし、母さんも4年前に死んだ。カノンも2年前に研究所から去った。

俺は泣いていたことを知られないように涙を拭い、わざと冷静に振る舞う。自分の目が真っ赤に腫れていることなど知らずに。

「ハント、何があった?」

「父さんが死んだ。」

「何?」

みんなが驚いた表情をするが、俺は表情を崩さず平静を装う。

「どういうことだ?!冗談だったら許さねえぞ!」

「本当だ。電話をしているとき、向こうで死んだ。」

レイジが俺の胸倉を掴み、壁に押し付けて持ち上げる。レイジの気迫に押されて少々ビビってしまうが、それでも平静を貫く。そうしなければ、悲しすぎて苦しすぎて狂ってしまいそうだ。

「犯人は…犯人はどこのだいつだ!」

「アンブレラの関係者だ。だが、誰かはわからない。」

「…チツ……」

レイジは舌打ちをして俺を投げ飛ばすと出口に向かって能力も使わずに走り出した。叩きつけられた背中が痛むが俺は粒子化で出口の扉の前に移動する。猛スピードで突っ込んできたレイジの肩を掴んで止める。

「どこへ行くつもりだ?」

「決まっているだろ!アンブレラの関係者を皆殺しにするんだよ!」

「落ち着け！」

「これが落ち着いていられるか！そもそも、なんでお前は平気なんだ！？」

「平気なわけがあるか！俺も辛いに決まっているだろ！」

俺はレイジの腕を掴む手にさらに力を入れる。骨がミシミシと音を立てるが、レイジは表情を崩さない。あまりの怒りに痛みを感じなくなっているのだ。俺は話を続ける。

「でも、殺しを正しいとは思わない。もし、俺たちがアンブレラの関係者を殺したとすれば、今度はそいつらの家族が悲しい思いをすることになる。それに、もしも、そいつらを殺せば、俺たちはそいつら以下のクズになっちまう。それでもいいのか!？」

レイジの目つきがさらに鋭くなる。真っ直ぐ睨んでくるその目を俺も睨み返す。

しばらくして、ため息を吐いたレイジは手を振り払った。どうやら先に折れたのはレイジのほうだったようだ。ついでに腕の骨も折れたが……

俺は安堵して一息吐いた。

「父さんの机、上から2番目の引き出しに何かがあるらしい。今はそこから手掛かりを探そう。」

「……仕方ねえな。」

レイジは父さんの部屋に行き、3秒足らずで戻ってきた。その手には黒い石と3枚の紙が握られており、石は不気味ながらも美しい輝きを放っていた。3枚の紙にはそれぞれ漢字で「冷仁」「範人」「詩穩」と書かれている。

レイジは躊躇なく石を叩き割った。すると、割れた石から声が聞こえてくる。

『レイジ、ハント、シオン、君たちがこの声を聞いているとき、僕はきつと死んでいると思う。だから、ここに僕の願いを残す。』

一つ目、この研究所はみんなに任せたい。

二つ目、レイジ、ハント、シオンが幻想郷に帰ること。知つての通り、僕たちの先祖のルーツは幻想郷だ。だから、先祖たちの願いを叶

えて幻想郷に帰ってほしい。その紙には幻想郷がある日本での君たちの名前が書いてある。名字は「旅行」だ。

僕は寿命まで生きていないと思う。きつと、アンブレラに殺されるからだ。だから、アンブレラと僕の関係も話しておこうと思う。

君たちの母親、望美はアンブレラの研究員だった。望美と結婚した僕はアンブレラの研究員になることを迫られたけど、僕は合衆国政府側についたんだ。だから、アンブレラは必ず僕に仕返ししてくる。今日まで生きてきたことすらも奇跡のようなものなんだ。

みんな、今までありがとう！そして、さようn「バリン！」

レイジが石を粉々に叩き砕いた。きつと、その先の言葉を聞きたくなかったのだろう。俺も聞きたくなかった。「さようなら」なんて言葉を聞くのは嫌だった。

しかし、これが父さんから聞ける最後の言葉なのである。最後まで聞くのが正しいのではないのだろうか？

俺は父さんの言葉を遮ったレイジを殴りかけるが我慢した。レイジの行動が正しいとは思わないが、ここにはシオンもいるため最後まで聞くことも全く正しいとは言い難い。

「クソ親父が……どうして、言ってくれなかったんだ。守れたのに……」

「レイジ……」

「あんな親父の言うことなんて聞いてられるか！俺はこの研究所を継ぐ気は無え！姉さん、いるか？」

「はい」

「ぐほお」

突然現れた姉さんに俺は見事に吹っ飛ばされた。壁にぶつけた腕が痛い。まったく……みんなが悲しんでいるこんなときくらいは空気を読んでもらいたい。

「俺、この家を出て他の世界へ行く。」

「レイジ？？」「お兄ちゃん？」

「あら？レイジがそんなことを言うなんてちよつとびっくりしたわ。まあ、私は良いけど……なんで？」

「この研究所を継ぐ気はない。それだけだ。」

姉さんは少し驚いた様子を見せるが、そんなことわかっていたというような話し方で返す。シオンとデューレスがレイジの名前を呼んで止めようとしたが、俺は彼を止める気がない。

兄弟だからいつしよにいたいという気持ちになかったというわけではないが、彼の存在が自身と一心同体という気持ちになかったからだ。

双子なのだから似ていて当たり前。ただ似ているだけでレイジは俺の半身ではないし、俺もレイジの半身ではない。互いが考えていることが大体わかるなんてことも長い期間を共に過ごしていればたかが友達であつてもありえないわけではない。

その言葉は案外すんなりと口から吐き出された。

「いいぜ。」

「ハント…お前…。」

「行ってこいよ。お前がそうしたければ、そうすればいいさ。」

どうせ、お前にこの研究所は継げないからな。俺が継いでやるよ。」

「この野郎…。」

「だから、安心して行ってこい。」

俺はジョークも織り交ぜてレイジの判断を肯定する。レイジはこちらを睨んだが、すぐに表情を落ち着かせ、姉さんに向けて頷く。姉さんは無言で頷き返し、スキマに潜った。

「さて、姉さんは仕事が速いからな。すぐに準備するぞ。」

俺たちはレイジの部屋へ向かった。

レイジの引越しの準備は案外すぐに終わった。衣類や食器はあつと言う間にアタッシュケースに詰め込まれてしまい、自分たちの生活

していた空間の小ささを知ったような気がする。

俺たちがリビングで兄弟全員がこの世界で食べる最後の夕食を食べていると、姉さんがスキマから現れた。と言ってもスキマから手だけを出してフライドチキンを皿ごと持っただけというふうに見えるだけで全身は出さない。本人は隠れているつもりだろうがバレバレである。

「姉さん、バレてる。」

「上手くやったつもりなのに……」

「盗まなくても言えば分けてあげるからさ。」

「盗むから楽しくて良いのよ。」

「そうきたか……」

その気持ちはわからないでもないが、そこはこちらを信用して普通に言ってもらいたいものだ。昔から思っていたのだけれど、大人っぽいと言えば大人っぽいし、子供っぽいと言えば子供っぽい。姉さんは読めない妖怪でそこに不思議な魅力があるのだと思う。

男の俺が言うのもなんだと思うが、あの魅力には絶対に勝てないよ。うな気がする。

姉さんの気配が消える。きつと、スキマの中でこの部屋から外に出たのだろう。スキマに入られるとある程度近くなければ気配を感じない。周りをキョロキョロと見回してみる。

「ヤッホー！」

姉さんはリビングのドアから入ってきた。やはり、読めない人である。そこから入ってくるなら、さっきのスキマから入ってくれば良いのにも思ったが、それ以前に完全に意表を突かれてしまった。

「あと少しで移動するからさっさと夕食食べちゃいなさいよ。」

「わかった。」

レイジは能力を発動し、猛スピードで自分の分を食べる。その時間は1秒もかかっていなかった。発生するソニックブームはレイジの身体を粒子で覆うことになってなんとか防ぐ。

食べ終わった後は洗面所に直行し、歯磨きを一瞬で済ませた。

レイジがドヤ顔で戻ってきたとき、俺も既に夕食を済ませていた。他の2人はさすがに食べ終わっていない。

「レイジ、そこでちよつと待ってる。」

「ああ。」

俺は自分の部屋へ直行、クローゼットから今年レイジの誕生日にプレゼントとして渡す予定だったものを取り出す。それを抱え、すぐにリビングに戻った。

「レイジ、これを持っていけ。」

「なんだ、これは？」

「生体改造素材で作ったパーカーとジャケット、ジーンズが入っている。欲しかったんだろ？持っていけよ。」

「お、おう。ありがとな。」

プレゼントを受け取ったレイジは驚き、目を瞬く。渡す時期はずれてしまったが、これも嬉しいようだ。俺は思わず笑みをこぼす。別れの前だというのに俺は何を笑っているのだ、と自分を殴り飛ばしたくなるが、こんな悲しいときは笑ってないとやってられない。

「そうだ…お前ら、全員集まれ。」

レイジの言葉にキョトンとした表情を浮かべる。しかし、レイジが片手を握り拳にしていることから何をするかわかったようで、こちらにやってくる。

レイジが拳を突き出し、シオンとデューレスはそこ拳を合わせた。俺も拳を合わせる。

「お前ら、幻想郷でまた会おうな！」

『おうー！』

言い終わると同時に拳を打ち合わせる。レイジは先程のプレゼントをアタッシュケースに入れて持ち上げると、俺たちに背を向けて歩き出した。玄関のドアを開けると、そこには無数の目が瞬きする不気味な空間が広がっている。レイジは躊躇することなくその空間に足を踏み入れた。

「またな！」

俺が声をかけると、レイジは背を向けた状態で黙って右手を振った俺も右手を振る。その直後、スキマが閉じられた。

悲しい気持ちがないわけではない。だが、これでよかったのだと思

う。レイジは自分で決断をした。だから、彼の決断を否定したくないし、あいつは正しい判断ができる。そして、あいつにはもつと多くの世界を見てもらいたい。何より、レイジとは約束した。あいつは約束を守るやつだ。心配はいらない。

信じているから先に進ませた。ただ、それだけだ。

レイジが消えた場所には、いつもと変わらない玄関のドアがあった。ただ、いつもと変わらない景色なのに、それはどこか寂しさを感じさせる。きつと、その原因はここにあるべき姿が無くなったからだろう。2人の男の姿が……

『次はく上諏訪く上諏訪です。』

電車の走る音ばかりが聞こえていた車内に車掌のアナウンスが流れる。それは悲しき別れと新しい出会いを告げる鐘の音のようだった。

二章での新キャラ設定、追加設定

名前 ジェット・アルカード 性別 男

瞳の色 赤 髪の色 白

身長 151cm 体重 37kg

年齢 10歳?

アルビノ少年。フランの恋人。範人に届いた情報では10歳となっていたが……

学習面、運動面、両方優秀。性格は優しくして真面目。でも、少しおつちよこちよい。お化けが怖い。

範人に憧れを抱いている。

名前 カノン・ウエスカー 性別 女

瞳の色 緑 髪の色 金

身長 173cm 体重 秘密

年齢 29歳（範人8歳時）

ウエスカー計画により作られたウエスカーの暴走を止めるために訓練された女性。生物研究者。アルバレストのアシスタント。

常人とは比べ物にならない力を持ち、頭も切れる。普段から冷静を貫こうとするが、たまに感情が表に出る。

範人たちのことを自分の子供のように愛していた。現在、消息不明。

名前 旅行 詩穩（シオン・ゴートレック）

瞳の色 紺 髪の色 薄い金

身長 157cm 体重 約0.7t

年齢 14歳（小説スタート時。範人の2つ下。）

能力 魂を操る程度の能力

範人の弟。サイボーグ少年。先天性の筋肉が弱くなる病を持っており、その解消のために身体を改造した。なお、その病が遺伝することはない。使用されている金属はモノリスだが、（大きくなる意味

での)成長には限界があり、これ以上背は伸びない。しかも、これ以上老いることはなく、ほぼ不老不死。

機械の力によって怪力。さらに、全身に様々な武器が仕込まれている。アルバレスト曰く、自己防衛のためにつけたものであり、バイオニック兵器の実験ではないらしい。性格は優しいが少しボケている。

範人と冷仁のことは「お兄ちゃん」と呼ぶ。現在、消息不明。

魂を操る程度の能力

その名の通り魂を操る能力。生者の魂は相手の同意がなければ、基本操ることはできない。ただし、取り外しはできる。魂を持たぬものに魂を埋め込むことが可能。機械に魂を埋め込んだ場合、感情を持つ。

限界を突破する程度の能力

冷仁の能力。限界を上乗せすることができる。(例 速さの限界である光速を自身の速さに加算する)また、神経の限界を突破させて、身体から離れていても動かすということもできる。(例 絶刀を手元に引き寄せる)

範人の変異(第二)

全身を白い甲殻が覆い、狐のような尻尾が生える。電気を操ることができる。尻尾は毛を寝かせることにより、鞭のようになる。また、毛を束ねて先端を尖らせることによって圧倒的な貫通力を持つ武器にもなる。投与されたサンプルに含まれていたデンキウナギの遺伝子を上手く取り込んだため。

範人の変異(暴走)

全身を黒緑色の甲殻が覆い、首が伸びる。甲殻に覆われた尻尾、肩から背中にかけて4対の鎌が生える。甲殻の隙間からは赤黒い炎が噴き出す。西洋のドラゴンのような見た目。暴走形態。t—Veronicaの特徴が多く見られる。

冷仁の変異

耳が頭の上に移動し、全身が青と白の毛皮に覆われて、尻尾が生えることにより、狼のような姿になる。冷気を操る。全身の毛を逆立て凍らせることで身体に棘を作り出すことができる。尻尾はとても強靱。冷気能力はt—V e r o n i c aの突然変異によるもの。

範人の変異よりもパワフル。そのかわり、毛を凍らせるなどして鎧を身につけない限り、防御が低い。

絶刀“蒼牙”（進化します）

レイジの武器。製作者は範人。レイジの血を吸収したため、最早レイジの身体の一部のようなもの。凄まじい切れ味と熱伝導率を誇る。素材はモノリス。

第三章 Day break shadow 第五十九話 復活の狩人王

午後4時過ぎ。ここは永遠亭。正面玄関に1人の女と1人の男がいた。

「もう行ってしまうのね。」

「ああ。彼なら、あと1時間くらいで目を覚ますだろうからね。」

少し名残惜しそうに言う女。しかし、男はそれを特に気に止めることなく、足袋がしつかりと履けているかを確かめる。その女は彼がここに来る度に同じことを言うのだ。もう気にすることでもないと言い切っている。

「私にも劣らないレベルの良い薬なんだから。私の代わりにここで働いてもらいたいくらいよ。ねえ、ここで働かない?」

「やれやれ……いつもN.Oだと言っているだろう。僕にはほとんど妻と言ってもいいような女性がいるんだ。それに地底は喧嘩が多いことで怪我人も多いからね。離れるわけにはいかないよ。」

「お堅いのね。」

「当たり前だ。しかも、それはお互い様じゃないのか?」

「よくわかつているわね。まあ、いいわ。いつでも来なさい。雇ってあげるから……蜘蛛島さん。」

「フツ……じゃあな。」

コバルトブルー・タランチュラの妖怪の青年、蜘蛛島 平は手から糸を飛ばして竹にくつつけた。その糸を引っ張り、反動を利用して飛ぶと、竹を蹴って、竹林の奥へと消えていった。

「ぐ……うう……」

目が覚めると知らない天井があった。和風のため、白玉楼なのかも思ったが、匂いが違う。ここは薬の匂いがして、まるで病院のようである。

「……は？」

俺はさつきまで西行妖と戦っていたはずだ。なのにこんなところにいるのはおかしい。ここまで来た記憶もないし、ここ自体何処なのかわかりない。きつと、忘れてしまったのだと思い、記憶の海に網を投げるが、引つかかる記憶なんて何もなかった。

わからないことの苛立ちから頭を乱暴に掻く。頭皮が多少切れて血が出たが、特に気にしなかった。そんなとき、背後に気配を感じて振り向いた。

「誰だ!？」

誰もいなかった。いや、何も見えなかったと言った方が良いのだろう。目視はできなかったが、そこには間違いなく誰かがいる。生物兵器としての研ぎ澄まされた感覚があるからこそ成せた技だろう。

「ほう、儂に気づくとは……さすが、妖夢の認めた男というわけか……」

聞こえてきたのは老人の声。その直後、空間に切れ目が入り、1人の老人が姿を現した。

空間に切れ目が入ったと言っても、姉さんのスキマとは違う。まるで強引に切り開いたかのように空間が裂けていた。

俺が睨みながら老人の様子を伺っていると、老人はその場に腰を下ろして口を開いた。その目つきは鋭い。

「凄まじい迫力だな。生物兵器というものはここまですごいものなのか。」

「知らないな。でも、生物兵器だからじゃなくて、俺だからと言ってみたいよ。」

「ほう……だが、それもあるのではないのか?」

「それだったら良いんだけどな。」

ところで、何故ここへ来たんだ? 医療関係者以外立ち入り禁止のは

ずなんだが……」

俺の問いに老人は少し考える。おそらく、考えるふりをしているだけで何が目的なのかは決まっているのだろう。

そもそも、目的もなしに俺のところへ来るなんておかしい。第一に医療関係者以外立ち入り禁止になっているところにもわざわざ忍び込むことは普通ない。

数秒の後、老人は問いに答えた。

「孫娘が認めた男がどんなやつなのかが気になってな。場合によっては叩き斬るつもりだったけど……その必要はなさそうだな。」

「え!? 今、孫娘って……まさか、妖夢のおじいさん?」

「いかにも、儂は魂魄 妖忌。お主の言う妖夢は儂の孫娘だ。」

「な、何イ!? ……いやでも、確かに似ている……」

どこが似ているとは上手く言い表せないが、似ている。なんとなくか、雰囲気似ている感じがする。

「やっつと、気づいたようだな。」

……フツ、まあ良い。お主は妖夢と充分釣り合いそうだな。これは早くひ孫の顔が見れそうだな。」

「ちよ、ちよつと、俺は妖夢とまだそんなことしてないんだけど!?」

この老人、認めてくれたと思つたら、とんでもないことを言い出した。妖忌の発言に赤面する。

確かに妖夢のことは好きだし、向こうもこちらが好きだということを知っており、付き合ってもいる。しかし、俺はまだ17才。次のステップに進むにはまだ早過ぎる。

「なんだ? まだやっておらぬのか? もう17なら、体験していてもいいだろうに……」

「生憎ながら、俺は真面目なんです。」

「つまらないのう。もっと積極的に行かんか、積極的にな! 会つたら即押し倒すくらいで行けないのか? それともなんだ……お主は受けか?」

「押し倒す……って、そんなことできるか! 妖夢が死んでしまうわ!

それと、どつちが受けてどつちが攻めかなんて知らねえ！その時々で変化するだろうが！」

あまりの恥ずかしさに怒鳴ってしまった。しかも、かなり恥ずかしいことも言った気がする。俺がさらに顔を赤くすると、妖忌は大笑いした。その表情は先程のような厳しいものではなく、優しいものだった。

「はっはっはー顔は真っ赤でも、まだ青いのう、青春じやのうーああ、愉快愉快。これほど良い気分になったのは久しぶりだ。」

そのとき、妖忌の笑い声に気づいたのか、それとも、俺の怒鳴り声に気づいたのか、何者かが廊下を走ってこちらに向かってくる音が聞こえた。妖忌は無言で立ち上がると、空中を斬りつけて空間に裂け目を開いた。

「儂はそろそろここを立ち去る。妖夢の相手は頼んだぞ。悲しませて泣かせたら承知せんからな。」

「ああ、もちろんだ。」

「紫殿には儂から言っておくが、儂が来たことは妖夢には話さないでくれ。」

あと、お主は合格だ。紫殿には儂が結婚の同意を示したことも伝えておく。

さらばだ、妖夢の未来の夫よ！」

「じゃあな。元気で居ろよ、grandfather！」

妖忌は空間の裂け目の奥へ消えていった。

さようなら、未来のじっちゃん。

部屋の扉が開くのと空間の裂け目が閉じるのは同時だった。

「範人〜！」

開いた扉から飛び出して来た可愛らしい弾丸を俺は受け止め、優しく抱きしめる。本当は力一杯抱きしめたかったが、俺は怪力では妖夢の身体が壊れてしまうことが目に見えて明白だったためやめた。

「心配したんですよ〜!」

「ごめんな。」

「ところで何が起きたんだ?」

「やはり、覚えていないのですね。」

「何を?」

俺の質問に妖夢は残念そうに返す。俺にはその原因がわからなかったが、何が起きたのかすらわからないのだから仕方がない。なんとなく覚えているのは、西行妖に貫かれて枝を引き抜いたところまでだ。

「範人は暴走したんですよ。全身を黒緑の甲殻に包み込んで……」

俺は恐れていた事態が発生したことを知った。そして、思い出したくない光景を思い出してしまう。

逃げ惑う人間と暴れ回る捕食者。それらを容赦なく焼き尽くす炎の波。炎に包まれた街には悲鳴と死が溢れ、だんだんと命が消えていく。そして、その命を最も多く奪った炎を生み出した黒緑色の化け物……

「妖夢、それ以上俺に近づくな!」

俺は妖夢を突き離れた。妖夢は突然の出来事に呆然とした表情を浮かべ、数秒後には涙目になった。恋人を突き離すなんて俺も辛い。しかし、これでいいはずだ。俺はきつと、既に嫌われている。

「範人……どうして……」

「俺を嫌いになっただろう? 暴走して暴れ回る俺を見たはずだ。化け物を見ただろう。妖夢だって敵として襲っただろう。なあ、こんな最低な俺のこと嫌いになっただろう?」

俺は自身を嘲るように言う。目を閉じてうつむき、狂氣的に笑いながら泣く。

許せなかった。化け物になってしまった自身のが許せないのだ。妖夢が嫌いになったかどうかわよりも嫌いになってもらいたかつ

た。自分がまた暴れて、愛した人を傷つけるのが怖かった。だから、突き離れた。ここで2人の関係が壊れればいい、そう思った。

「どうして……何故また抱きついてくる？」

妖夢は俺に突き離されてもまた、俺に抱きついていた。

「範人を嫌いになんてなれませんよ。範人はいつも真面目で一生懸命にみんなのことを考えて自分を犠牲にしています。そんな優しい範人を嫌いになるなんて私には絶対に無理です。」

「でも……俺は……」

「別に範人が私のことを嫌いになってもいいですよ。それでも、私は範人のことが大好きですから！」

「あらあら、目が覚めたばかりだというのに見せつけてくれるわね。」妖夢の言葉に俺は泣きそうになってしまった。この少女はまだ俺のことを嫌いになっていなかったのだ。それがたまたまなく嬉しかった。

そのとき、部屋の入り口から声が聞こえた。そこには赤と青で半分半分というなんとも奇抜なデザインの服を着た女性がいた。俺も妖夢も顔を真っ赤にして離れる。

「あら、別に続けてくれても構わないのよ？」

「いや、誰かに見られながらじゃ、さすがに恥ずかしい……ていうか、誰だよ？」

「私は八意 永琳。貴方を助けた医者の人よ。」

「それは……どうもありがとうございます。」

自分の命を助けてくれた医者にかなり失礼な口の利き方をしてしまった。妖夢と抱き合っていたところを見られたことも恥ずかしいが、こちらもかなり恥ずかしい。自分が仕事中心じゃなくて本当に良かったと思う。長官にこんな口の利き方をすれば、即アングリーヴォルケイノだ。

「本当に生きていることに驚いたわ。貴方の生命力は一時的に0になっていたのよ。さすがは生物兵器ね。昆虫界の黒い弾丸Gもびつくりよ。」

「Gって……」

永琳の言い方では褒められているのか貶されているのかわからない。だって、黒い弾丸Gってあれだろ？ゴキブリだろ？生物学者としてはかなり興味をそえられる生物だけど、人間としてはどちらかと言うと出会いたくない存在だ。

「取り敢えず、意識が戻ったのなら退院よ。安静にする必要はないだろうけど無理はしないようにしてね。」

「あの一、代金は……？」

「本来なら貰うんだけど、今回は素晴らしい生物兵器の細胞のサンプルが手に入ったからね。それで充分。代金はいらないわ。」

「そうですか……」

「あと、貴方の治療に手を貸した医者は今もう1人いてね。その医者は地底に住んでいるのだけけど……一度顔を出したらどうかしら？」

「そうですね……ありがとうございます。そうさせていただきます。」
「彼はそこそこ有名だから蜘蛛島と訊ねればすぐにわかると思うわ。」

俺は布団から起き上がり、倉庫のスキマから取り出した白衣を羽織る。異変のときから格好は変わっていないため、俺の服装はいつもの通りだ。しかし、洗濯していない服は流石に気持ち悪いため、家に帰ることにする。時間も午後5時過ぎのため、帰って夕食を食べ、風呂に入るといふサイクルにはびったりだろう。

「では、さようなら。お世話になりました。」

「いいのよ、素晴らしいサンプルが手に入ったから。いつも足りないくらいだから、いつ来てくれても構わないわ。」

「ありがとうございます。」

俺は靴を履くと、家に帰るスキマを開き、その中に入る。妖夢もその中に入ってきた。

「あれ？妖夢、ウチに来るのか？」

「はい、向こう一週間分の休暇はもらっているので大丈夫です。」

「そうか。」

これでは本当に同棲しているみたいだ。そう思いながら、俺は妖夢と一緒に家へ帰った。子供という単語が一瞬だけ脳内に浮かんだが考えないことにする。地底には明日辺りに行ってみるとしよう。

朝起きて、正面には妖夢の顔。布団から起き上がり、背伸びをしてからもう一度彼女をみる。

妖夢が泊まりに来たときの大体の光景だ。俺の隣には半裸の妖夢が……え？半裸!?!?

俺は驚き、また妖夢を見る。俺の目は間違っていなかったようで妖夢は上に何も着ていない。慌てて自分の服装を確認する。良かった……夜中に何かあったわけではなさそうだ。包帯を巻いただけの上はともかく下はしっかり着ている。

「あのー、妖夢……」

「う……ん……何ですか?」

「服は?」

「暑かったので脱いじやいました。」

それとも、もっと熱い夜にした方が良かったですか?」

おお、なんともんでもないことを言う少女である。

確かに五月にしては暑かったし、俺も妖夢の身体が見れて嬉し……じゃなくて、俺の年齢が制限に達するまで待ってもらいたい。17才がR-18に踏み込むって相当な問題だろう。いや、側から見れば、布団の上に一組の若い男女が半裸で居るこの光景は充分にR-18臭がプンプンするだろうが……

「せめて、恥じらいは持つてくれていいんじゃないか?」

「別に私は恥ずかしくありませんよ。それに今すぐに襲つていただいても構わないですから……」

「お、おい!?!?」

妖夢は上体を起こすと、俺の手を掴み、自分の胸に押し当てた。妖夢の柔らかい膨らみが俺の手が当たったことで形を変える。妖夢の行動に恥ずかしくて赤面してしまうが、ここで手を離そうと動かしてしまうと胸を揉む結果になり兼ねないため強引に離れる方法は諦める。

「なあ、やめてくれないか?」

「いいじゃないですか。一度でも経験してしまえば、恥ずかしさなんて無くなりますよ。」

「そういうことじゃなくてだなあ……」

「お願いします。私……範人の全てが欲しいんです。」

妖夢は俺の手を掴んだまま後ろに倒れる。手を掴まれているため俺も倒れてしまう。そして、状況はさらにマズくなった。

俺が妖夢に覆い被さるような状態だ。これはもうほとんどR—18臭しかしない。側から見ればもう大惨事確定だが、上が俺で良かったと思う。妖夢に上を取られていたら、レッツドッキング！ということになっていたはずだ。

「あらあら、押し倒してくるなんて、範人は肉食系ですね。」

「妖夢が引つ張ったんだろうが……」

「知りませんね。ほらほら、今ならやり放題ですよ。」

そう言いながら、妖夢は身体を揺らす。それにつられて胸も揺れる。しかし、俺の心は崩れない。大丈夫、理性はまだ保つ！と言ったところだろうか。いや、実際のところは今すぐにでも崩れ去りそうなのだが……ここで負けないのがこの俺だ。

「来ないのですか？仕方がない範人ですね……」

「な……」

妖夢が上体を起こし、俺は言葉を言い切ることができなかった。俺の唇は妖夢の唇によってふさがれてしまったのだ。妖夢は俺の口の中に舌を突っ込んで此方の舌に絡めてくる。

もちろん、そんなことをされたら、思考に影響がないわけがない。口の中を這う舌の感触となんとなく甘く感じる唾液の味にだんだんと頭の中が真っ白になり、自身を制御する精神力が抜ける。理性が溶けていく。

「ふふふ…そうですよ。それでいいんです。そのまま私をイかせちゃってください。私の中でイっちゃってください。」

「…妖夢……」

俺は獣になりかけている。いや、人である部分が元々少ないため、獣になってしまったのかもしれない。何も考えられない。ただ、目の

前にいる妖夢のこと以外は何も考えられず、目に入らなかつた。

「範人く妖夢くいるく？」

「げげっ!??姉さん!??」

「紫様!??」

「あらあら、朝から盛んねえ。」

呼ばない限り神出鬼没である八雲 紫の登場。

妖夢も俺も同時に離れる。そして、理性が戻り、彼女の言葉に顔が真っ赤になる。

恥ずかしいが、正直なところは姉さんが来てくれて助かつた。あそこで姉さんが現れなかつたら、確実に一線を超えていたと思う。ひとまず、今回は感謝の一言だ。恥ずかしいけど……

「ね、姉さん……これは……その……」

「わかってるわ。子供……作ろうとしていたんでしよう?私がいることは気にせず続けてくれて構わないわよ。」

「うわー!言わないでー!」

「じゃ、ごゆっくり〜♪」

姉さんはスキマで帰っていった。俺と妖夢は呆然として、布団の上に残された。心は絶望の海に沈められ、口も動かなかつた。数秒後、やっと意識が復活し、口がきけるようになった。

「妖夢、お前……積極的になつたな。」

しかし、動くようになった口から出たのはこの言葉だけだつた。

その後、妖夢と一緒に朝食をすぐ食べ、身支度を整えると地底に続く大穴に向かつた。

現在はその大穴の前にいる。しかし、忘れてはいけななのがここが妖怪の山からそこそ近いであること、そして、妖怪の山にはその名

の通りに妖怪が多くいるということだ。つまり……

「ぐへへ……追い詰めたぜ、人間。さて、どこから食ってやろうか？」

はい、現在多数の妖怪に囲まれております。そして、大穴は自分のすぐ背後に控えて、ゴオオオという音が似合う状態で構えています。妖怪たちは俺たちをどう食べるかを想像して舌舐めずりをしている。本当なら、追ってきたときに叩き斬ってあげても良かったのだが、命懸けのマジな鬼ごっこがなかなか面白いものだったため、生かしておいてあげた。

「やれやれ、中々デカイ穴だな。それにかかなり深そうだ。」

「おい、人間。俺たちが怖くねえのか？俺たちはよおく、怖がって泣いている人間を食べるのが一番美味えと思うんだよなあ。だからよおく、怖がって泣いてくれねえか？」

呑気に話す俺に向かって、精一杯の脅しなのか何か言っている妖怪。

怖がってくれ、とは……笑わせてくれる。こんな雑魚妖怪など怖くもなんともない。俺は今まで数々のB・O・Wを相手に金稼ぎをしてきた。数を増やして常に自分たちが優勢だったこいつらには逆境がわからねえと思うが、逆境を乗り越えてきた俺からすれば、こいつらは可愛い盛りの子猫よりも怖くない。

「さあ、妖夢。行くか？」

「はい。」

「テメエらは俺たちに食われて逝くんだよ！」

「なかなか楽しい追いかけてこだったぜ。じゃあな、また遊んでやるよ。」

「テメエ……ふざけたこと抜かしてんじゃねえぞ、人間があー！」

俺の問いに妖夢が頷く。俺は包囲の輪を狭めてくる妖怪たちを揶揄うように言った。案の定、単純な妖怪たちは挑発に乗ってくれる。その方が俺も嬉しい。

何故なら、調子に乗った相手が悔しがる姿ほど面白いものはないからだ。バカって素晴らしいと思う。

俺と妖夢は同時に後ろに倒れた。もちろん、後ろには大穴があり、

そこに仰向けで落ちる。穴から見えるのは俺たちの行動を見て唾然とする妖怪たちの驚いた顔。まさに、目が点になるといった感じである。妖怪たちの驚いた顔が見れて最高の気分だ。

地底へと続く穴の中。俺たちはある一定まで落ちると体制を整え、飛んで地底を目指した。

「あれ？あの人たちは誰だろ？」

見ると白衣を着た金髪の青年と刀を持った白髪の少女が地底へと下っていく。2人の様子からすると恋人同士だろうか？

少女の方はともかく、青年の方は私の知らない人物である。半年以上前に新聞で漆黒の化け物について読んだがそれに関係あるのだろうか？そう考えると興味をそそられた。

「ついて行ってみよ〜♪」

私は気付かれないように能力を発動して二人の後を追った。あの2人について行くついでに地霊殿に帰ってみようか？この2人の後について行くとなかなか楽しそうだ。もしかしたら、お姉ちゃんに話す内容が見つかるかもしれない。

第六十一話

地底を目指して進み続ける俺と妖夢。この穴は本当に深くて、未だに底が見えない。向こうの世界でも洞窟に潜ったことはあったが、ここは向こうとは段違いの深さだ。これはもう地底の岩盤に届いていてもおかしくないのか？というほどである。

「大分深いな。」

「そうですね。」

暗いせいか、落ちていつているせいか、自然と気分も暗くなり、落ち込んでいく。会話もうまくつながらず、互いに一言で終わってしまうことがほとんどだ。

ところで、さつきから妖怪が落ちてくるんだが、あれは何故だろうか？最近は何も無いバンジーとかタマヒュンダイブとかが流行っているのだろうか？

ヒュー

「ん？」

何かものが落ちてくる音が聞こえる。それもさつきから落ちてくる妖怪たちのような歪な形とは違い、円形のもものが落ちてくる音だ。しかも、それが頭上から聞こえてくる。すかさず、片手を上に向ける。

バシッ！

「危な？」

「どうしたんですか？」

「いや、上から釣瓶が……」

とんでもないスピードで釣瓶が落ちてきた。しかも、中に何か入っているようでかなり重い。頭に当たっていけば大怪我は確定だろうし、キャッチしたとしても下手をすれば腕が折れていたはずだ。咄嗟に腕を変異させて助かった。

それはしてもこんなに重いとは、中には何が入っているのだろうか？恐る恐る覗いてみる。

「石と……子供……だと？」

「え？……本当ですね。」

「キスメ子供じゃないもん……」ボソツ

中に入っていたのは大量の石と緑髪ツインテールの女の子だった。そして、その女の子はボソツとつぶやく。こんなところに入っているとは……まさに箱入り幼女だ。

このままでは重たいので石を取り出して落とす。幼女は現在、俺の肩の上だ。石を全て落とし、幼女を釣瓶の中に戻そうとするが、肩から下りてくれない。仕方がないのでそのまま名前を問う。

「ところで君は誰だい？」

「キスメ……」

「そうか、キスメっていうのか。俺は旅行 範人だ。よろしくな。」

「私は魂魄 妖夢です。よろしく。」

俺が片手を上げるとキスメはその手を掴んで握手した。よろしくということなのだろう。妖夢の方に近づくと妖夢とも握手した。

「あの一、そろそろ釣瓶の中に戻ってくれないかな？」

俺の頼みごとに対して、首を勢いよく横に振るキスメ。完全に気に入られてしまったようだ。困った顔で妖夢の方を向くと、彼女は笑顔で頷いた。いいですよ、ということらしい。そこは反対の意を示してもらいたかったのだが、仕方がないため、俺は片手に釣瓶を持ち、キスメを肩車した状態で地底に下りることになった。

「こうして見ると私たち3人で親子みたいですな。」

「ん〜？まあ、髪の色が違うけどそう見えないこともないな。」

「範人がお父さんで妖夢がお母さん……良い……」

朝にあんなことがあったため、親子という言葉に敏感になってしまったが、もう面倒なので割り切った。

妖夢の見た目年齢が噛み合わないが、見た目が若い親だと考えれば確かにそう見えなくもないかもしれない。

今朝、久しぶりに自分の姿を鏡でじっくりと見たが、去年に比べて背が高くなっていることに気づいた。今の身長はおそらく、182cmくらいだろう。背は伸びたというのに、顔付きはあまり変わっていなかった。まあ、そろそろ成長は止まるだろう。生物兵器だから老いることはないだろうし。

気がつけば、かなり下りてきていたらしい。暗闇の中にうつすらと地面が見える。そして、そこには地面にぶつかって、あまりの衝撃に破裂したと思われる大量の妖怪の死体がバラバラになって転がっていた。頭を石か何かで潰されたような死体もあったが、原因はわからない。

「お二人さん、子供を誘拐かい？」

唐突にかけられる声。声のした方を振り向くと、壁につかまっている金髪の少女がいた。まあ、ここは地底なのだからまず人間ではないだろう。壁につかまっているところを見ると蜘蛛の妖怪だろうか？ 赤い全身タイツのヒーローを思い出させてくれる。

「これは誘拐じゃなくてな、キスメが肩から下りてくれないんだ。」

「範人の肩の上…良い……」

「……らしいです。」

「なるほど、そういうことかい。それなら誘拐じゃないね。」

勝手に誘拐と言われたこちらの身になってもらいたい。俺はただ単に地底を目指していただけで、危ないからとキャッチした釣瓶の中にいたキスメが勝手に肩の上に乗っているだけである。そう、俺は悪くないのだ……多分。

「ところで人間がここに来るなんて珍しいねえ。何が目的だい？」

「蜘蛛島というヒトに治療してもらったみたいだから、お礼を言いに来たんだ。どこにいるか知らないか？」

「ほお、なるほどねえ。平の言っていた生物兵器ってのはあんたのとだったのかい。」

この少女、その蜘蛛島という者と面識があるらしい。俺の話が出たということは、俺が気絶している間、もしくはそれ以後に会ったということだ。これは蜘蛛島という者に早く会えるかもしれない。

「知っているのか？」

「まあ、場所は知っていないね。でも、あたしはそいつと昼食を食べる予定だから、待ち合わせしてんだよ。だからさ、多少時間はかかるけど会いたいなら、あたしについておいで。」

「わかった。」

少女は地面に下りて、歩き始める。俺と妖夢も少女の後を追って歩き始めた。

横に続く長い洞窟。さつきは垂直の縦穴だったというのに今度は横か、と呆れてくる。しかし、道としては悪くないと思う。縦穴はともかく、横穴は通る側としてはかなり気が楽だ。決して最短距離ではないが、縦穴の紐無しバンジーに比べたら、重量に対して垂直な横穴の方がよっぽど良い。

「申し遅れたね。あたしは黒谷 ヤマメ。壁にくっついていた通り、土蜘蛛の妖怪さ。」

「俺は旅行 範人だ。よろしく。」

「私は魂魄 妖夢です。よろしくお願いします。」

「じゃあ、自己紹介も終わったみたいだし、平について話そうかね。」

あたしと平は簡単に言っちゃまうと夫婦みたいなものなんだ。まだ、結婚はしていないけどね。そんなわけであいつとはこの地底で同棲しているんだ。だから、範人について少し話してくれたってわけさ。

あいつはこの地底で医者をやっているんだけど、これが評判でねえ。今日は休みのはずだったんだが、地霊殿のペットたちの定期健診が入っちゃまってね。今は残念ながら、地霊殿に行っちゃまっているんだ。だから、この後待ち合わせをしているのさ。」

「なるほどな。」

俺はヤマメの話に頷く。大体のことはわかった。要するにヤマメと平は同棲している恋人同士で、医者の方の平は現在仕事で出かけているということだ。医者である平の貴重な休みを俺のせいで無駄にしてしまうと考えるとかなり申し訳ない気持ちになる。

「平さんとの間に子供はいないんですか？」

「ふおお!?」

妖夢が子供の話題を訊ねた。事情を知らない者が子供について言うことにはまだ大丈夫なのだが、妖夢が言うのと反応してしまう。朝にあったことは既に割り切ったのだが、昨日、妖忌に言われたことがまだ残っている。

「あたしも欲しいんだけど、残念ながらいないんだよねえ。妖怪ってのはちよつと悲しい身体でさ、なかなか妊娠しないんだよ。今までに数え切れないくらいヤったんだけどねえ……200年以上の付き合いなのにさ。」

「それはなかなか辛いですね。」

……範人?」

「は、はい?」

妖夢に声をかけられてしまった。これは終わったか?などと考えるつつ、恐る恐る返事をして妖夢の方を見る。

「ヤマメさんも頑張っているんですよ。私たちも子作りを頑張ってみましょうよ。」

「(やっぱりかー!) いや、だから年齢が……ね?」

「中に出さなければ、いいじゃないですかー。家に帰ったらやりましょうよー。」

「ダメだって。」

「やりましょうよー。」

妖忌の言葉も朝の出来事も、もう割り切ることは無理そうだ。

地底の都に向かいながらの俺と妖夢の言葉のキャッチボールはしばらく続くことになった。

「盛んだねく。」

「範人×妖夢……すごく良い……」

洞窟を抜けた先には川が流れており、橋が架かっていた。おそろく、川は地下水脈の一部だろう。その川の対岸には都が見える。都自体も大きく、かなり発展しているようである。

俺たちが橋の上まで進むと、貴公子のような格好をした少女に止められた。

「恋人がいるなんて妬ましいわね。」

「それなら、あんたも彼氏作ればいいじゃないか、パルスィ？」

「貴女には平がいるからそんなこと言えるのよ。妬ましい。今日もここで待ち合わせているんでしょう？妬ましいわ。」

「そうだけどねえ……」

「ここにはあんたがいるから待っている間も話ができ楽しいのさ。」

さつきから妬ましいとばかり言っている少女。しかし、ヤマメの言葉に黙った。不機嫌そうにしながらも口元がにやけている。ヤマメの言葉が嬉しいようだ。

「もう……その明るさが妬ましいわ。」

「おっと、範人たちのことを忘れるところだったよ。」

「こいつは水橋 パルスィ。妬ましい妬ましい言っているけど、本当は良いやつだから気にしないでやってくれ。」

「俺は旅行 範人だ。よろしく。」

「魂魄 妖夢です。」

「恋人同士でお出かけかしら？妬ましいけど、よろしく。」

「……ああ、妬ましい。」

未だに妬ましいと言っているパルスィ。まあ、気にしないでくれと言われたのだから気にする必要はないだろう。おそらく、妖怪の種類としての特性が原因のはずだ。何かにつけて、妬ましいと言うのはそのくらいの理由しか思い浮かばない。

「そろそろ平が来る頃だね。」

そう言っつて、ヤマメは家々の屋根を眺める。それにつられて俺も屋根の上を見ると、人型の何かが走っているのが見えた。それは軽快な

動きで屋根から屋根へ飛び移り、こちらへと近づいてくる。

「来たみたいだね。」

ヤマメがそう呟いた瞬間、それは屋根から大きく跳躍した。そのまま、こちらが立っている橋の上に着地して、片膝について衝撃を吸収する。ゆっくりと立ち上がる青年の格好はまさしく忍者だった。

「遅かったか？」

「大丈夫だよ。ついさつき来たところさ。」

「それなら良かった。」

忍者みたいな青年はホッと息を吐き、こちらを見回す。

髪の色が青く、瞳の色は紫というなんとも人間離れた色だ。額にはゴーグルを着けている。

おそらく、彼が俺を治療してくれた蜘蛛島だろう。

「ほう、生物兵器も来たのか。」

君を治療した蜘蛛島 平だ。よろしく。」

「旅行 範人だ。こちらこそよろしく。そして、ありがとう。」

「魂魄 妖夢です。範人を助けてくださり、ありがとうございます。ありがとうございました。」

「いいんだ。僕は医者だから、患者がいれば、助けて当然だ。」

ところで、これからヤマメと昼食を食べるつもりだったんだが、よかつたら一緒にどうかかな？」

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

「よし。それなら、行こうか。」

平はヤマメと並んで歩き出した。俺たちは2人についていく。キスメとパルスイも何故か一緒だが、それもいいだろう。食事はみんなで食べたほうが美味しい。

第六十二話

俺たちが平についていくと、そこそこ大きな焼き鳥屋があった。平はそこに躊躇なく入っていく。

ここは個室タイプの焼き鳥屋のようだ。

俺たちが廊下を歩いてしていると突然、襖が飛んできた。平は糸を張って襖を受け止める。同時に青鬼も飛び出てきたが、平の張った糸に絡め取られてしまった。今度は鬼が出てきた部屋から額に一本の角を生やした女の鬼が出てきた。

「ヒイイー！」

「負けたくせに逃げようとはいい度胸しているじゃないか？」

「……ん？平？」

「ゲツ!?？勇儀!?？」

女の鬼は逃げてきたらしい青鬼を睨みながら、まさに鬼の形相で近づいてきたが、平を見つけた瞬間に表情を変えた。一方の平は迷惑そうな顔をする。互いに顔見知りのようだ。他の面々はやれやれといった表情を浮かべている。

「はっはっはー！そうかい、平も来たのかい！よっしや、一緒に飲もうじゃないか！」

「嘘だろお!?？」

「嘘じゃないさ！鬼は嘘を吐かないんだよ！」

女の鬼に首の後ろを掴まれて個室に連れていかれる平と青鬼。覆面をしている平から表情を読み取ることはできなかったが、少なくともその目は死んでいた。

俺と妖夢は啞然としていて、動くことができなかった。数秒後、驚きから解放されたときには既に平が部屋に連れていかれた後であり、地底の面々が部屋にどんと入っていく。俺と妖夢も急いで部屋に入った。

平は女の鬼の正面に座らされていた。その隣にヤマメが座り、平に寄り添う。その隣ではパルスィがパルパル言っていた。俺が平の隣に座ると、膝の上にキスメ、隣に妖夢が座った。そして、女の鬼は青

鬼から金をぶんどっている。

「あのー……平、あの女のヒトつて、誰？」

「彼女は星熊 勇儀だ。鬼の四天王の一人だよ。良いヒトなんだけど結構強引なところがあって……からまれると面倒なんだ。」

「あ、なんとなくわかる。」

「じゃあ、あの青鬼はなんであんなつてるんだ？」

「多分、腕相撲に負けたんだろう。金を賭けていたんだろうな。」

俺と平が勇儀をチラチラ見ながら話していると、金のぶんどりが終わったらしい。貨幣を紐で連ねたものを片手に持っている。青鬼は逃げていった。勇儀はこちらの視線に気づき、話しかけてくる。

「なんだい？私の顔に何かついてるのかい？」

「いや、何もついてないが？」

「そうかい、それならいいんだけどね。」

さて、金も手に入ったし、みんなと一緒に飲もうじゃないか！

俺たちが勇儀の問いに答えると、彼女は勝手に納得する。そして、何故か、勝手に宴会が始まってしまった。

今、この部屋はみんなが酒に酔ってしまい、軽い地獄絵図だ。地底なんだから地獄だろ、なんてことは言えないレベルの状態である。

ヤマメと平が背中に隠していた4本の蜘蛛の脚を露わにして全身全霊で抱き締めあっていたり、キスメと妖夢が俺の膝を枕にして眠ったりしている。しかし、最も驚くべきは彼らでも、酔っていない勇儀でもなかった。

「えへへ、範人と妖夢って付き合っていたのね。良いわね。この水橋 パルスィ、全力で応援するわよ。」

そう、パルスイである。俺の背中に寄りかかり、俺と妖夢の関係を肯定しているだけでなく、後押しまでしてくれている。先程までの「妬ましい妬ましい」と言っていた彼女はどこに行ったのだろうか？驚きを通り越して、もはや恐怖すら覚える。

「範人と妖夢が…ムフフ…」

「ん…：範人…：ああ!?？そこはだめですう!…：10月14日って言っていたじゃないですか…：でも、範人がやるって言ったら…：私は今でも全然大丈夫ですよお…：あつ…：ああつ…：いいですよ…：もつと…：もつとお…：…!」

「ほら、彼女も言っているよ。もつとつながりを深めてみたらどうなのお? いっちゃいなよ。」

ブチッ

「ぎげんじゃねー!」

なんだこのとんでもない地獄絵図はー!カオスすぎるわー!キスマは何を考えているか知らんが、妖夢は何ちゆう夢を見とんのじゃー!パルスイも乗っかって「つながりを深める」とか言ってるじゃねー!こんな状況じゃ、変な意味にもなっちゃうだろうがー!

「あんたも大変だねえ。」

「本当だよ、まったく…」

「ここじゃ、あんたの今の言葉が唯一の救いだよ。」

「そりゃあ、良かったよ。ところで、平と一緒にいたけど、あんた誰だいつ?」

勇儀の言葉がここでの救いだということとは間違いないだろう。他のみんなは今日の朝に何があったのかを知らないのだ。しかし、その出来事をピンポイントで刺激するようなことをしてくる。対して、勇儀は知らないからとそこにはあまり触れないように言葉を選んでくれている。これがあるがたい以外の何だというのか?

ところで、今更気づいたのなら俺と妖夢が参加していることに違和感を覚えなかったのだろうか?

「俺は旅行 範人、ここで眠っているのが魂魄 妖夢で俺の彼女だ。」

「へえ、あんたがああ漆黒の化け物か。なんでこんなところに来たん

だい？」

「つい最近まで死にかけていたんだが、それを治療してくれたのが平だったんだ。そこでお礼を言いに来たら、食事に誘われて、この店に来て、今に至るってわけだ。」

「そうだったのかい。そりゃあ、ご苦労様。」

本当にこのヒトの言葉は助けた。さっきまでのカオスで汚されて不純になってしまった俺の心を浄化してくれる。

ありがとう、勇儀。

え？恋愛感情？それは妖夢以外には向かないけど何か？

「さーて、そろそろ切り上げて温泉でも入るかね。」

「え？温泉あるの？」

「あるよ。ここは地底だからね。そうさね……みんなで入ろうか。もちろん、男と女は別だけどね。行くかい？」

「もちろん！」

「よし、それならみんなの酔いを覚ましてやんないかね。確か、平が酔い覚ましの薬を持っていたはずんだけど……」

勇儀は平が腰につけているポーチを探る。数秒後、ポーチの中から取り出されたのは何故か元の世界でも見かけた酔い覚ましだった。

普通にあつたものが何故幻想入りしているかは知らないが、まあ、気にしたら負けってことだろう。きつと、酒好きたちに対する姉さんのささやかな気遣いだ。

勇儀は全員の口に薬を一粒ずつ入れて、水で流し込ませる。数秒後、全員が目を覚ました。パルスィがパルパル言い始めてしまったがこの方が彼女らしくて良い。

その後、全員で温泉へ向かった。当たり前だが、支払いは青鬼からぶんどった金である。

白い湯気に広い浴槽。温泉に入るのは久しぶりだ。今回は男だけのため隠す必要もないし、治療の上で背中中の傷跡は見られているだろうということでもタオルは巻いていない。平もゴーグルと覆面を外して入ってきた。

適当に全身を洗って湯船に浸かる。温度は高めめの42℃くらい。まあ、生物兵器の能力で熱いには慣れているため、全然許容範囲内だ。

「さっき思ってたんだけどさ、君って結構筋肉ある方じゃないかな？」
「どうだろうな？俺は自覚ないぞ。周りを見ると筋肉あるやつの方が多かったような気がするからだろうけど……」

「その身長で80kg超えるってなかなかだからな。しかも、太っているようには見えない。」

「体内で圧縮しているんだ。細い方がかつこいいだろう？」
「そうだな。」

兄貴も師匠も結構筋肉がついていたから、そこまで筋肉があるという自覚はない。クリスなんてほとんどゴリラだったし……そういや、冷仁も俺と同じくらいだったな。あいつどうしているんだろ？

そんなことを考えていると女湯の方から声が聞こえてきた。

『勇儀さんって胸大きいですね。』

『それで男の視線を釘付けに……妬ましいわ……パルパル……』

『見たけりゃ、勝手に見りゃいいのさ。気がつきゃ勝手にこうなっていたんだからね。』

『それに妖夢だつてそこそこあるじゃないか？』

『みよんぱい……』

『私なんて幽々子様には比べたらまだまだですよ。……これから範人に大きくしてもらいましょうか？そのまま、寝室にでも……』

『おおう、アピールするねえ。頑張りなよ。』

『アツハツハ！一番盛んなヤマメが何を言っているのさ？昨日の夜も「眠らせないよ」とか言つて、熱くなっていたんだろ？』

『妬ましいわ…fuck…』

『キスメもいつか…』

……うん。聞くんじやなかったよ。本当に貞操の危機だ。このままだと今夜もやばくね？

俺が平の方を見ると彼はやれやれといった表情をしていた。そりゃあ、あんな会話が耳に入ってくればそんな顔になるだろう。俺もそんな顔になっているだろうし……

「……範人…お前も大変なんだな。」

「お前もな。」

これはもう笑えない。これで笑えるときは心のバーが振り切れて狂ったときだけだ。あの話を聞いていると「この世界でまともなのは女より男ではないのか？」と思えてくる。

ところで、地底の入り口からずっと一緒に歩いてきている人がいるんだけど……ここにいちやいけなと思うんだよな。

「あの一、君。ここは男湯なんだけど、なんで女の子が入っているのかな？」

俺は一見誰もいないように見える場所に話しかける。平の目には俺がおかしいやつに見えるだろう。しかし、そこには間違いなく誰かがいる。粒子の通れない場所があるのだから、この情報は確実だ。しかも、形的に女の子である。

「あちゃー、バレていたんだねー。」

「判断の基準の間違いだ。」

「あはは、さすが生物兵器だね。」

「なんかもうその言葉で俺に対する全ての疑問が片付けられそうな気がしてきたよ……」

声が聞こえてきた直後、見た目年齢11歳前後の少女が現れた。驚くべきことにその少女、湯船に浸かっていたらしく裸である。俺も平もなるべく意識しないようにしたが、俺が言葉を言い終わると同時に少女は立ち上がった。目のやりどころがない。

「頼む、座っていてくれ。」

「え？私と一緒に入ってほしいの？」

「いや、そういうわけじゃなくてな。立たれると、目のやりどころに困ってしょうがない。」

「いいよー。おまけにもっと近づいてあげる。」

俺の頼みを勘違いしたのか、わざとなのか、こちらに近づいてくる少女。そして、平は距離を取る。

「おやめください。そんなサービスは要りません。妖夢に見られたらやばいです。」

平のほうをチラツと見ると、目で「ドンマイ」と言われた。まあ、こんな状況になったら、それくらいしかできないだろう。一部のやつは「そこを代われ!」とか「裸幼女キター!」とか言うかもしれないが……

「俺は旅行 範人っていうんだけど……君は誰だい?」

「こいしだよー。よろしくー。」

改めて、子供の純粹さはすごいと思う。こんな状況で普通に会話して、さらに自己紹介までしてしまうなんて純粹にもほどがある。気兼ねなく接してくれることが純粹なことの良いところなのだが……同時に純粹であることから問題が……

「君はどこを見ているんだい?」

「んー?男の人ってこんなのがついているんだなー、って。」

「な!?」

俺は急いでスキマを開いてタオルを取り出し、身体に巻いた。

わかりきっているが、こいしが見ていたのは絶対にアレのことだろう。そう、これが純粹なことの問題点だ。色々なことに興味を持つてしまうため、やばいものですら興味の対象なのである。

「えー、なんで隠すのー?」

「いや、そこは本当に勘弁して!頼むから、マジで!」

「私も同じところ見せるから。」

「それもダメエ!平……いないのかよ!背中 of 傷跡で我慢してー!」

本当に純粹って怖い。ソコは本当に好きな人にだけ見せてあげなさい。そして、俺には妖夢がいるんです。

ターゲットを平になすりつけようとしたが、そこに平は既にいな

かった。仕方がないので、背中 of 傷跡で我慢してもらおう。

「すごい傷だねー。内臓まで丸見えだよー。」

どうやら、興味の対象が傷跡に変更されたようである。これなら、こいしが背中側にまわったことで視界に入らないためまだいい。

……しかし、現実はそう甘くなかった。

「えいー!」ツン

「ひゃう!?!」ビクン

こいしに傷跡をつつかれた。内臓が見えるようになっていような場所のため、わかりやすいと言えればわかりやすいが、とても敏感である。そんな場所を突然つつかれようものならびっくりしないわけがない。案の定、ビクンとしてしまった。

「大丈夫?」

「た、多分……」

「ごめんね。」

そろそろ上がったら?」

「そうさせてもらおうよ……」

俺は急いで湯船から上がる。もう心が持たない。純粹って怖い。こいしが後ろをびったりとついてくるが、もう気にしていられない。こんな場所からはさっさとおさらばしたいというのが今の心境だ。

俺が脱衣所から出ると、既に全員が集まっていた。

平はともかく、女性陣はいつの間にながったのだろうか? 普通の生物よりも圧倒的に耳が良い俺にもわからなかったなんてすごい。

すぐにかけられる平の声。

「お疲れ！（ごめんな）」

「ハハハ……（逃げやがって、このやろう……）」

「さあ、帰りましょう。（愛の巣へ……）」

「ああ。」

みんな、ありがとな。今日は楽しかったよ。（思いつきり、建て前だけどな。確かに楽しかったけど……）」

『またね！』

俺は振り向くことなく、右手を振って応える。そして「今日の夜も理性との格闘なんだろうな」と考えながら、家に帰った。

今日の仕事も終わった。暴れ者が多い地底を管理するというのはなかなか骨が折れる。今日もどこかの鬼が金をぶんどられたらしい。まあ、賭けの上で取られたのだから別に対した問題ではないだろう。

「お姉ちゃん、たっだいまー！」

「あら、おかえりなさい。」

「今日ね、あの生物兵器に会ったんだよ！」

生物兵器。地上の新聞が偶々まわってきたときに記事で読んだ。なんでも、かなり戦闘に特化しているという。

その生物兵器に妹が会ったと言うのだ。なかなか興味深い。

「どうだった？」

「普通の人間と比べるとすごく背が高かった。でね、とても優しくかったの。全然怒らないんだよ。」

お姉ちゃんも優しく好きだけど、お兄ちゃんだったら、あんなお

兄ちゃんが欲しいな。」

「へえ、良かったわね。」

妹の無茶ぶりに怒らないとはどんな男なのだろう？しかも、何があったのかがなんとなくわかってしまう。温泉に入っているところにこいしが出現したのだろう。この地底ではよくあることである。……よくあつていいことではないが……

「ねえ、そのヒトをお兄ちゃんにするにはどうすればいいのかなあ？」
他人を兄にするなどとすごいことを訊いてくる。まあ、方法が無いわけではないため教えてあげよう。わからないことを教えることも姉である私の役目である。

「ん、そうねえ……そのヒトに弟がいればだけど、こいしがその弟と結婚するか、私とそのヒトと結婚すれば、そのヒトがお兄ちゃんになるわよ。」

「じゃあ、私とそのヒトの弟と結婚する〜♪」

「弟がいるとは決まっていけないわよ？」

「じゃあ、お姉ちゃんがそのヒトと結婚してよ。」

「ええー……」

妹は無邪気故にすごいことを言う。結婚なんて将来を決定するとても大切なことなのに簡単に決めてしまつていいのだろうか？でも、そんな無邪気な妹がとても可愛い。

その生物兵器と結婚する気なんて全くないが、さらに興味が沸いた。妹のために少し調べてみるもいいかもしれない。

第六十三話

擲揄いからの巻き込み

私は今、幽々子、永琳と一緒に小さな宴会を行っている。

あ、三大老って言ったやつ表出ろ♪ぶっ潰す♪

宴会での話の内容はテキトーな世間話だ。なかなか面白い。そんな話をしている中で範人の話になった。

「そういえば、範人って一応紫の弟なのよね〜?」

「ええ、私はそう思っているけど。どうしたの?」

「似てないなー、って思ってたね。少なくとも、私は似ているとは思わないわ。」

これには少しカチンときた。血が繋がっていないとは言っても、似ていないことはないと思う。彼が幼い頃から、家族同然に過ごしてきたのだ。似ていないはずがないだろう。私と範人は絶対に似ていないはずだ。

「似ているわよ!」

「へえ、どこが?」

私はすぐに答えることができなかった。似ているところなんて、すぐに見つかるものではない。よく似ているところなんてなおさらだ。見つけたいけど、結局は上手いものが見つからなかった。

「……金髪……とか……」

「金髪なんてたくさんいるじゃない。白黒の魔法使いも似ていると言うのかしら?」

「それは…違うけど……」

範人は私に似ているわよ!絶対に似ている!範人が男だからわかりにくいけどもん!範人が女になれば絶対に似ているってわかるもん!」

「あらあら、範人を女になんてできるのかしら?」

「うっ?」

私は黙ってしまった。言い返せない。幽々子に口喧嘩で負けてしまうなんて、かなりの不覚である。このままでは賢者の地位が危ういかもしれない。

ところで、ついさつきから永琳がポケットを探っているがどうしたのだろうか？

「あつたわ！」

「何…それ？」

永琳が取り出したものは何か薬品の入った注射器だった。どう見てもやばい雰囲気しかない薬である。色が青って時点でやばい。

「女体化薬よ。これを投与されると、あら不思議、あつと言う間に男が女になっちゃうわ。どう？欲しい？」

「欲しい！すぐ使おう！」

「実験への協力、感謝するわね。実は範人の細胞を見たときにわかったんだけど、結構不安定だったのよね。だから、範人に効果はてきめんだと思うわ。効果期間は一週間くらいかしらね。」

「ありがとう！」

この薬で範人と私が似ているってことを証明してみせるわ！絶対に幽々子をびつくりさせてやる。さて、私は途中離脱とさせていただこう。

私はスキマを開いて、研究所に向かった。

「オラァー！」

空気を切り裂き、ブオンという音を立てる拳。全力の拳ではないが、破壊力は申し分ない。そもそも、全力でパンチなんてしようもの

なら、ソニックブームが発生して、辺りが大惨事になってしまう。

目の前にいる半人半吸血鬼の少年はそれを避ける。そのまま、ラッシュにつながようと思ったが、やめて左側に粒子移動する。俺がその空間からいなくなった数十分の一秒後、その空間を少女の拳が貫いた。

「やっぱり当たらないですね。」

「当たらないかもしれないが、なかなかいいセンスしてるぜ。1人が囷、もう1人が奇襲。悪くない。だが、それじゃあ手数が足りない。」

「それなら、2人同時にいきます！」

「Come on baby s！」

新と白が飛び出すと同時に俺も飛び出した。

今日は異世界からお客が来る日だ。確か、5人くらい来ると言っていた。現在、新、白と勝負しているが、彼らが思った以上に早く来たため、時間潰しのようなものだ。時間潰しでも、かなり体力を使うことになると思うが……

そんなことを考えながら、2人の攻撃をさばいていると2人が武器スペルを発動する。

『真刀 氷夜』『真刀 白乱』

2人同時に斬りかかってくる。俺は全身を第一に変異させ、さらにアルゴスの変形機構を発動。大剣を割いて、双剣にした。鎌と剣を合わせて四刀流だ。

2方向からの攻撃を同時に受け止め、そのまま斬り合いに持ち込む。刀と甲殻がぶつかり合う心地よい音がカンカンと鳴り続ける。

数十秒後、このままでは落ちがあかないと思った俺は鎌を振り抜いて、刀ごと2人を弾き飛ばす。

「さすがですー！」

「そつちも腕上げたじゃねーか。」

「ありがとうございます。」

俺は粒子移動で2人の間に割り込み、全身の甲殻の隙間から弾幕を発射した。2人は距離を取りながら弾幕を放ち、応戦する。

弾幕は完全に相打ちだった。どちらかの弾幕がパワーで押し切る

こともなく、すり抜けることもなく、全て相殺される。

「弾幕の撃ち方もなかなかだな。」

「まだまだ、こんなものじゃないですよ。」

「良いね。」

俺の可愛い後輩たちは強くなった。本当に優秀な後輩たちだ。だから、今回は本気で戦ってやる！

俺は一枚のスペルカードを取り出した。まだ作ったばかりのものだが、現在の炎系最高防御を誇るスペルだ。そのスペルカードを見た瞬間、新たたちの目つきが変わった。

「狩人王『竜殺しの英雄』」

俺は口の中に圧縮したタングステンを放り込み、噛み砕いた。

通常の状態では何十立方メートルになるかもわからない量のタングステンなのだが、圧縮したためハンドガンの弾くらいの大きさになっている。

体内に吸収されたタングステンは融解してから甲殻の表面に液体として出現。それが固まってガツチガチの鎧を形成した。背中の一部では火力が強すぎるために液体のままだが、その液体も攻撃に使える。

「この鎧を貫けるのなら、貫いてみるよ。」

「やってみせますよ！白！」

「わかっているわ。」

白が消えて、新1人になる。こうなったら、何が起こるかはほとんど決まっている。

『リミットブレイク！』

そう、リミットブレイクだ。

新の姿が白になり、翼が生える。威圧感もパワーも先程とは桁違いだ。ぶつかってくる霊力と妖力が痛いほどである。全力の素晴らしさを感じる。

「最高の気分だな。」

『こちら先輩と全力で戦えて、最高です！』

1人になった2人がこちらに突撃、拳を突き出した。俺も負けじと

右の拳を突き出す。ぶつかり合った拳から伝わる衝撃は予想以上に強いものだった。あまりの衝撃に仰け反ってしまう。それは新たちも同じだった。しかし、彼らはこちらよりも仰け反りが小さく、すぐに体制を立て直す。

彼らは蹴りを放ってきた。俺はサマーソルトで蹴りを躲し、体制を立て直しつつ蹴りを入れる。しかし、蹴りを放った先には新たちの脚があり、そのまま足技の打ち合いにもつれ込んだ。

脚には腕の数倍の力があるが、それは俺も新たちも同じだ。ゴン、ガゴンという音が辺りに響き、だんだんと脚の部分の鎧が壊れていく。しかし、簡単には壊させない。この鎧は俺の身体に取り込まれたことよって、生体金属の特性を持っている。つまり、壊れてもまた修復されるのだ。

『きりがないです……ね!』

「む!?」

新たちのパンチ。俺は腕をクロスさせてガードしたが、あまりの衝撃に崩されてしまった。スキができた横腹に新たちの蹴りが入る。身体を貫く鋭い衝撃に吹っ飛ばされる。

「ゴハア!」

『まだまだ!』

新たちは俺の背後に回り込み、回し蹴りの体制をとった。しかし、そこはこのスペルで最も危険な位置。背中には鎧が液体になり、弱点となる部分があるが、同時にその液体は武器にもなる。

「かかったな!」

背中火力を一気に上げ、液体となった金属を熱風で吹き飛ばす。空気中に出た金属はもちろん冷えて固体化。風圧で細かくなっていたため、大量の金属の粒子が空気中を漂う結果となった。

『な!?? まずい!』

「そんなノロっちい動きじゃ、逃げれねーな!」

『竜殺剣グリム!』

弾幕となった金属の粒子が新たちの周りを飛び回り、動きを止める。脱出できるように通れる隙間を作っておいたはずだが、その隙間

も動くために脱出できないようだ。

大剣形態のアルゴスに液体となった金属の鎧を纏わせ、さらに巨大な剣にする。表面を高温の金属が流れ、オレンジ色の光輝くそれは狩人の王が持つに相応しい化け物のような剣だ。

俺が新たたちの首元でその剣を寸止めして、勝負に決着がついた。

勝負から10分後、新たたちは2人に戻っていた。リミットブレイクで消耗した体力も俺が用意していた救急スプレーで回復している。

「ははは、負けてしまいました。」

「いい勝負だった。あともう少しで俺も負けてしまうところだったよ。お前たちは本当に強くなった。」

「でも、本気じゃなかったんですよね?」

「最後のやつは本気だった。あの鎧にあれだけのダメージを与えたんだから大したものだよ。」

嬉しそうに笑う2人。まるで自身の弟と妹のように思える。新に詩穩の姿が重なって見えてきた。

弟は今どうしているのだろうか?無事なのだろうか?

そんなことを考えていると、スキマから姉さんがひよつこりと顔を出した。

「範人く、お客さんを連れてきたわよ。」

その言葉の直後、空中にスキマは開き、来訪者たちが次々と落ちてきた。女の子みたいな格好をした者もいるが全員男である。この部屋にいる女性は白と姉さんだけだ。

「イテテ…あの野郎落としやがったな。」

「アタタ…あ、着いたみたいですね。」

「ゆかりん…落とすなんてひどいですよ。いつものことですけど……」

「これで全員よ。」

「うん、ありがとう。」

来訪者の全員を見る。少し前に会ったことのある顔見知りもいたが、約1名知らない人もいた。まあ、出入りは基本自由でもいいかな、と思っっているし、知らない者が来てもあまり気にはならない。あのブンはスクープを求めて不法侵入してくる始末だからもう慣れた。

「えーと……顔見知りもいるけど自己紹介だ。俺は旅行 範人。元人間の生物兵器だ。合衆国のエージェントをやっていた。」

「え!?? 貴方も生物兵器なんですか!??」

俺が自己紹介をするとタイラントが着ているようなコートを着た少年が身を乗り出してきた。「も」ということは、まさか彼も生物兵器なのだろうか?

「ん? そうだけど何か?」

「僕も生物兵器なんです。名前は多目的想定型B・O・W。 試作型 No. 000 cord-U・パッチワーク。今の名前じゃ長いんでパッチと呼んでください。」

「なるほど……よろしくな。」

「はい、よろしくお願いします。」

やはり、彼も生物兵器だった。

そこで、少し不思議なことがある。彼が生物兵器だと言うのなら、何故ウチに資料がないのだろうか? ウチには表からも裏からも生物兵器の情報が大量に流れ込んでくる。それこそ、国が知らないことまで流れ込んでくるレベルだ。そんなウチに情報がないなんてことは滅多にない。

……まあいい。姉さんから聞いた話だと、パラレルワールドというものがあるらしい。パッチがその世界のイレギュラーだと考えればいだろう。

「俺はエレイ・スカーレット。吸血鬼だ。よろしく。」

「僕は仲光 絆です。能力持ちのただの人間です。よろしくお願いします。」

「俺は新・スカーレットです。半人半吸血鬼やってます。よろしくお願ひします。」

「私は白・スカーレットよ。新とは双子だと考えてくれるといいわ。よろしくね。」

全員の自己紹介が済んだ。俺は思うのだが、能力持ちってただの間とは言えないのではないのだろうか？能力にもよるが、だいたいは能力持っている時点で化け物だと思う。俺は能力無くても、生物兵器って時点で化け物なのだが……

全員の自己紹介が終わった後、パッチは部屋の中を見回していたが、ある一点を見た後に目の色が変わった。

「範人さん！ここって生物研究所なんですか!？」

「ああ、そうだけど……突然どうしたんだ？」

「あれです！」

そう言つてパッチが指差す先を見ると、部屋に貼つてあるポスターが目に入った。そして、そのポスターには研究所の地図が書いてある。いつ貼つたのは覚えてないが、多分、デューレスが貼つてくれたものだろう。剥がす気はない。

「研究所の中が見たいんです！所長に許可取らないと……所長は誰ですか？」

「見えてもいいよ。俺が所長だし……」

「ありがとうございます！行つてきます！」

「ああ、気をつけてな。資料も覗いていいぞー。」

部屋を出ていくパッチ。俺は黙つてその後ろ姿を見送つた。パッチと入れ違いになるように姉さんが入つてくる。

「はぁーい、範人♪早速だけど、これをくらいなさい！」

「え!??・何!??？」

突然の発言に驚き、咄嗟に身体を甲殻で覆おうとする。しかし、覆いきる前に背中の傷跡を触られてしまい、力が抜けてしてしまった。

力が抜けると同時に甲殻も消えてしまう。姉さんはスキマの中から取り出した注射器を俺の首に突き立て、薬を注入した。

薬が血流に乗り、身体中を巡る。薬の作用なのか、身体が熱い。まるで、細胞の破壊と分裂が同時に超高速で行われているような感覚だ。あまりの苦痛にその場にうずくまる。

1分くらい経っただろうか？身体が熱いという感覚は消え、普通に動くこともできそうだ。立ち上がると、少し肩が重い感じがする。周りをを見ると、みんなの視線がこちらに集中していた。不思議に思っ
て訊ねる。

「どうした？……あれ？声がなんか変だな。」

言葉を発して驚いた。声がいつもよりかなり高い気がする。服のサイズも少し変なような……胸に巻いていた包帯もいつの間にか取
れてしまっている。

「範人（さん）……」「先輩……」

「女になってる？？」

「え？」

俺はみんなの言っていることがよくわからなかった。

第六十四話

女性になっちゃった

バキバキッ！

木が折られる音が辺りに響く。しかし、倒れる音は一切聞こえない。まるで、木が消えてしまったかのように倒れる音は響かない。

それが通った後には何も残らない。あんなに命が溢れていた森の地面にも、虫はおろか、落ち葉さえも残っていない。それが通った後に残るのは、命のない乾いた土の大地。

その進むルート上に2体の妖精が現れた。彼女たちは木の折れる音に興味を持って近づいてきてしまったのだ。

好奇心は身を滅ぼすとはまさにこのことだろう。

それを見つけた彼女たちのうち片方はその不思議な何かを触ってしまった。直後、それは彼女を包み込み、捕まえてしまった。もう片方の悲鳴が辺りに響き、彼女は逃げ出した。

それは進行を続ける。音もなく、地を這い続けた。自分の向かう場所など何も考えずに……

俺はみんなが何を言っているかわからなかった。姉さんは後ろで

笑っている。そして、身体をみんなの方へ向けると全員が目を見つめた。

「いや…本当に何が起きた？」

「先輩…一回自分の状態を見た方がいいですよ。特に上半身…」

「ほら、鏡よ。」

俺はいつもシャツを着ずに白衣のボタンを全て外し、前をはだけた状態で着ているため、新の言った意味がよくわからなかった。そもそも、男の上半身くらい別に見てもなんともないだろう。

姉さんがスキマから大きな鏡を出してくれたため、そこに映った自分を見る。

「あれ？なんだこりゃ？」

鏡にはいつもどおりの俺の姿が映っている…はずだった。しかし、今映っているものはどうだろうか？服装は包帯が外れていること以外いつもどおりだが、それを着ている人物がおかしい。

鏡には身長170cmくらいの女性が映っていた。腰まで伸びた金髪、胸は姉さんと同等に大きく、顔もスタイルも姉さんのように整っている。ただ、瞳の色は俺と同じ灰色だった。かなり姉さんに似ている。

鏡に映った人物に驚き、急いで自分の身体を見る。視線を下に落とすと、大きく膨らんだ胸がある。ここで俺は気がついた。みんながこちらを見ないのは、俺が女体化したからであり、その格好がいつもの俺と変わらない前をはだけた状態のために見るのが恥ずかしいからだ。

「姉さん…これはどういうことだ？」

「あら、そのまんまよ。範人が女になっちゃったの。でも、良かったわ。これで範人と私が似ていることを証明できるわ。」

「なんだそりゃ…」

「ほらほら、せっかく女の子になったんだから、もっと女の子らしい話し方にしなさい。服も用意しておいたから♪」

姉さんはスキマから女物の衣類を大量に取り出した。床に女物の服が散らばり、新たちの目のやりどころがさらに無くなる。しかし、

白は性別が女性のため、それらの服は見慣れているらしく、目は伏せたままだ。

「泣けるぜ……」

「その言い方はレオン譲りね。でも、女の子らしくって言ったわよね？」

「わかったわよ。これでいい？」

「そうよ。さ、早く着替えましょう♪」

女体化している間はもう一人称も私でいいだろう。心と表を切り替えるなんて面倒くさい。

姉さんは私の手を取り、風呂の脱衣所に連れて行こうとするが、私はその手を払った。

「すまないけど、下着は嫌よ。」

確かに、女装してミツシヨンをしたことがあるため、口調を女らしくすることに抵抗はあまりない。しかし、女物の下着となると話は別だ。ミツシヨンのときに履いていたものは基本的にジーンズ。つまり、下着は男のままでもバレなかったため、下着は男のままにしたのだ。

「……仕方ないわね。白ちゃん、手伝って。」

「え……でも……」

「お願い♪(手伝え……)」ゴゴゴ

「はい。」

白は一瞬躊躇ったが、その後すぐに返事をした。きつと、2人にしかわからないやり取りが行われていたのだろう。しかし、この状況は非常にまずい。

今の身体は女性。つまり、元比べてかなり力が弱くなっているのだ。(アルゴスを振り回すくらいのは軽く出せそうだけど……)そんなときに最強と言われる妖怪と半人半吸血鬼に力で敵うはずがない。

案の上、私は2人に担ぎ上げられて、連れていかれてしまった。

「た〜す〜け〜て〜……」

「(胸大きいわね) 下着はピンクかしら?」

「灰色じゃない? 範人はいつも灰色のパンツよ。」

「なんで知っているの?」

↳紫の妹、着替え中↳

「このメイド服なんて似合うんじゃない?」

「あら、こっちのブレザーも良いわよ。あとはチャイナドレスとかも……」

「もうなんでもいいから早くしてよね。」

私は着替えて、みんながいる部屋に戻った。服装はいつもの服装の下半身を女性用ショートパンツと女性用下着に変えただけである。今更だが、もちろんシンボルはなくなっていた。

私の服装を見たみんなの反応は微妙である。

「なんか……」

「これは……」

「ああ…エロいな。」

「こちらも重々承知しているわ。」

正直、自分でもこの格好はエロいと思う。白衣の前をはだけているために胸を隠しているのは包帯だけで、しかもその胸がなかなかの巨乳である。

何故かわからないが、自身の胸が大きいのは違和感があって少し気

持ち悪い感じがする。見る分にはどうとも言えないが……

そんなことを考えていると、パッチが研究所から戻ってきた。

「ただいま、研究所の資料とても面白かったです。ありがとうございます。いましました。」

……あれ、範人さんが女性になっていきますね。tレデイにでもなりましたか?」

パッチが一瞬で私が範人であることを見抜いたことにその場の全員が驚いた。男性と女性では見た目がだいぶ変わるはずである。それを見破ったパッチの観察力に驚いてしまった。そして、さすが研究所生まれと言ったところか。例えとして、生物兵器の名前が飛び出した。

「そうじゃないわ。紫に女体化の薬を打ち込まれちゃったのよ。おかげで見た目も声も完全に女性になっちゃったわ。」

「先輩……かなり様になっていきますよ。エージェントの仕事のおかげです。」

「そうね。これは仕事のおかげね。あまり嬉しくないけど……レオンの兄貴に揶揄われたこともあったし……」

「レオン……ってまさか、レオン・S・ケネディさんですか!？」

「こちらを身を乗り出してくるパッチ。どうやら、「レオン」という言葉に反応したらしい。」

「え?ええ、そうだけど……」

「僕、レオンさんに憧れているんです!何かお話をしてくれませんか?」

「僕も気になります!」

「俺も興味あるな。聞かせてくれないか?」

「いいわよ。あれはたしか……私が政府の機関に入ったばかりの頃だったわね……」

……ということがあったのよ。」

「レオンさんは噂どおりですね。どんなときでもジョークを飛ばせるなんてすごいです。」

みんなは兄貴の話を聞いて、感動してくれたり、喜んだりしている。私は兄貴を心から尊敬しているが、その兄貴を褒められると自分のように嬉しく思う。

「そういえば、先輩の変異は大丈夫なんですか？生物が変わったことで変質していませんか？」

「たしかに調べてないわね……見たい？」

「姿が変わるっていうのが気になるな。見せてくれないか？」

「わかったわ。」

私は第一に変異する。しかし、甲殻が現れたのは手足だけだった。全身を変異させようと思ったのだからできない。これでは甲殻の鎧と言うよりも籠手とブーツである。しかし、火炎能力は健在のようで甲殻から炎を出すことはできた。

「やはり、t—Veronicaはあるんですね。」

「次は第二よ。」

全身を第二に変異させようとする。やはり、全身変異は不可能のようであらう。尻尾が現れず、尻尾が生えた。さらに、何故かケモミミまで生えた。そして、尻尾のモフモフ具合が何故か上がっているような気がする。

ふと、絆の方を見るとそこに彼は居らず、尻尾をモフられている感覚がした。首だけ動かして後ろを見ると、絆が尻尾を抱きしめている。

「あのー……絆？」

「ハ！す、すみません。こういうものを見るとついモフモフしたくなっちゃうんです。」

「別に変なところ触らなければ、モフモフしていいわよ。この姿を変えることはしばらくできなくなるけどね。」

「ありがとうございます。……ああ、モフモフです……」

気持ち良さそうに尻尾をモフる絆を見ているとなんだか彼がすごく可愛く見えてきた。と言っても恋愛的な可愛さではないのだけだ。

第一で火炎能力が使えたのだから、第二で電撃能力が使えなくなる

ことはないだろう。

「さて、じゃあ、範人がこうなった原因とその従者を連れてくるわね。」
姉さんはスキマに入り込んだ。数秒後、空中にスキマが開き、幽々子と妖夢が落ちてきた。姉さんは戻ってこない。

「あれ、ここは範人の家?」

「紫に落とされちゃったみたいね。」

妖夢と幽々子はそんなことを話しながら、部屋の中を見回す。妖夢がこちらを向いたとき、彼女の表情が大きく変わった。とても怖い表情だ。妖夢に怯えたのか、絆が尻尾から離れた。

「貴女は誰ですか?なんで範人の家にいるんですか?なんで範人の服を着ているんですか?ハントハワタシノモノデスヨ?」

あれ?妖夢ちゃん、なんで刀を抜いているの?誰を斬るつもりなの?最後の言葉何?ヤンデレ?ヤンデレルート入っちゃったの?

待て、冷静になるんだ私!まだ手遅れじゃない!話せばまだなんとかなる!

「私は…」

「ハントは私のものです!貴女なんかに渡しません!」

そう言っただけ妖夢は斬りかかってきた。こちらの話なんか耳に入っていないようだ。これはもう刀を避けるしかない。断言する。今からここは修羅場と化すだろう。

私は妖夢が振り下ろす刀を躲す。この身体が男だったのなら、動きにも慣れていて避け易かったのだが、今は女である。避け続けるために紙一重で躲そうにも、膨らんだ胸という当たり判定が存在しているため、避け辛い。

次々と振り下ろされる刀にだんだんと避けられなくなっていく。だんだんと追い詰められ、終いには部屋の隅にまで追い詰められてしまった。

終わりを悟った私はその場にへなへなと座り込んでしまう。

「範人さんは私の恋人です。私の邪魔をしないでください。だから……シンデレ?」

刀が振り下ろされた。

刀は私の身体を切らず、目の前で止まっていた。黒っぽい甲殻に受け止められている。甲殻は盾のような形をしていて、その発生源となっている者はパッチだった。妖夢はゆっくりと刀を下ろし、パッチも変異を解く。

「何故、邪魔をするんです？ 私は邪魔者を消そうとしているだけですよ？」

「どうも、初めまして。パッチと申します。」

貴女が誰かは存じませんが、さすがに命を奪ってはいけないと思います。僕も生物兵器であり、ヒトのことは言えません。それでも、彼女を殺してはいけないと思います。

それに、範人さんなら今この部屋に居ますよ。」

「え？どこですか？」

パッチは黙って、私の方を指差す。妖夢もこちらを見た。私は妖夢がこちらを見ているときに変異を解き、なるべく元の男の範人が変異を解いているときに近い状態になり、妖夢が驚いた表情を浮かべた。

「え？ 範人…なんですか？」

「そうよ。姉さんが無理矢理打ち込んだ女体化薬のせいで女性になっちゃったけど……」

「うわぁー、ごめんなさいいごめんなさい！ 私…範人の恋人であるにも関わらず、範人であることに気づかず、斬りかかってしまいましたぁ……」

「大丈夫よ。怪我はしていないから……」

私もすぐに言わなくてごめんね。気づいてくれると思っちゃったの。」

正直、最初から気づいてもらいたかったが、怪我はしていないので

よしとしよう。私のことをどれだけ大切に思っているのかもわかった。愛が重すぎるかもしれないが……

私は泣く妖夢を優しく抱き締める。妖夢も抱き締め返してくる。側から見れば、これは百合にしか見えないだろう。

「愛って良いですね。」

「これが百合ってやつか……」

「そうですねー。先輩が女体化しちゃっているわけですし。」

「僕も周りから見ればこんな感じなのでしょうかね？」

「一応言っておくけど、一人称を私にしても中身は男だからね！」

私は忘れてはいけないことを言う。身体の性別こそ女であれど、中身は思いつきり男なのである。だから、今この状態で妖夢に対して何か好きという感情があれば、異性に対しての好きであって、同性に対しての好きではないのだ。せめて、私を男の範人に重ねて見てもらいたい。

ところで、妖夢ちゃん。私の胸をジッと見てどうしたのかな？

「どうかした？」

「いえ……ただ、範人の胸大きいなあ、と。元々男の範人がなんで女の私よりも胸があるのかな？と思ひまして……」

「そうよねー、私にも負けないくらい大きいわよねー♪」モミッ

「キヤー！」

なるほど、確かに姉さんや今の私と比べると妖夢に胸は小さい……比べる相手間違っているかもしれないけど。別に私は胸のサイズはあまり気にしていないが、妖夢が気にしているということは年頃の女の子としては気になるところなのだろう。結局、大切なものは外見よりも心なのだが……

突然、姉さんが後ろから抱きついてきた。しかも、こちらの前に腕を回し、胸を揉んでくる。新たちは目を伏せた。

「ちよ、やめ……ああん！姉さ……うう……んああ……」

「ふふふ、やっぱり大きいわね。こんなワガママボディにはお仕置きしてあげるわ。」

ねえ、幽々子。私と範人って似ているでしょう？」

「そうねえ、目の色は違うけれどそっくりね〜♪私の負けだわ〜♪」

「みよおおん！範人が大変なことにー！」

「あ……ああ……」

幽々子、のんびりしてないで助けてくれ！妖夢も慌てるだけじゃなくて助けて！お願い、やめて姉さん！

そんなことを言おうとしても、次々と襲い来る刺激のせいで声が出ない。

胸の辺りが熱くなっていく感じがする。身体が熱くなり、紅潮していく。同時に脳内の怒りゲージもどんどん上がっていく。

「うふふ、だいぶ感じてきちゃったんじゃないかしら？固くなっていくわよ。」

「やめろって、言っただろゴルア！」

怒りに任せて、ついついエルボーをしてしまった。エルボーは姉さんの下顎に直言し、彼女は静かにその場へ崩れ落ちる。一発KOしてしまっただけらしい。幽々子が姉さんを引っ張って他の部屋へ連れて行った。

私はその場に膝をつく。胸を揉まれる感覚がまだ残っており、胸がジンジンする。心配になった絆が声をかけ、手を差し伸べてくれた。

「範人さん、大丈夫ですか？なんか、声だけ聞く限り大変なことになっていましたけど……」

「多分大丈夫。ありがとう。」

私は絆の手を取り、立ち上がる。彼女……違った彼の優しさなら、葉が惚れるのもわかる気がした。絆がかっこよく見える。

私は立ち上がり、ドアの前を通ってソファまで行こうとした。

「大変だー！」「大変です、範人さん！」

「うわっ!?」モニユ

突然、ドアが開き、大妖精とチルノが飛び込んできた。当然、ドアの前にいた私に二人が直撃する。

元々は男なのだから当たり前なのだが、胸があつて良かったと初めて思った。そうでなければ、吹っ飛ばされていただろう。これがあつたために衝撃を抑えて二人を受け止めることができたのだ。

「なんですか？この柔らかい感触は……」

「わあ、柔らかーい♪」

「は!?まさか……」

「あ！範人のおっぱいだっただけ！」

大妖精は顔を赤らめて私から離れ、チルノもそれにつられて離れる。どうやら、チルノは私が範人であることに気づいてくれたらしい。恋人が気づかず、天才的なバカが気づくとはこれ如何に……バカって素晴らしい！

「はあ……別にいいわよ。ところで何が起きたの？」

「とにかく、大変なんです！ここじや時間が惜しいので、とにかく霧の湖へ来てください！話は道中で！」

「化け物でも出たのかしら？」

「そう！化け物です！だから、早く来てください！」

慌てて話す大妖精の様子から、並々ならぬ事態が発生したことはよくわかった。化け物という言葉聞いた瞬間にこの部屋にいる全員が目つきも変わった。訊く必要はないと思うが、一応訊いておこう。

「さて、一応訊くけど……行く？」

『もちろん（です）！』

「わかったわ。行きましょう。」

「ありがとうございます！」

あの部屋にいた全員が研究所をあとにして全速力で霧の湖へ向かった。

第六十五話 感染者

範人たちは霧の湖を目指して飛び続ける。その間に大妖精が現れた化け物について話してくれた。

「現れた化け物についてですが、私の場合は実際に見たわけではないんです。ただ、私は妖精の中でも力がある大妖精ですので、みんなが頼って勝手に情報が入ってくるだけなんです。

その化け物はとても大きかったらしいです。見た目は水みたくで目も耳もなく、ただ地面を這って移動していたらしいです。他の生き物がそれに触れたときは一瞬で包み込んでいたらしいんですが、最近、木が折れる音がよく聞こえていたんです。それでも、木が倒れる音はしなかったので化け物が原因かと……」

「アタイが見せてもらった研究所の資料にも似ているものはなかったからね。これは新種だよ!」

大妖精からの情報は範人とパッチ以外の全員に衝撃を与えた。生物兵器には周りの生物を無差別に殺戮、吸収してしまうものも少なからず存在するため、2人にとってはあまり驚きではなかったのだが、他の者にはそんなに危険な生物を知っているものはいなかったために、とにかく驚いた。

化け物の話を聞いた妖夢が妖精について疑問を持ったため、大妖精に訊ねる。

「そういえば、妖精は死んでもまた復活するんですよね。数は減らないというのに何か大きな問題ってありましたか?」

「あー……」一般的に妖精は死んでも生き返ると言われていますが、実は消えないわけではないんですよ。妖精はそれぞれに対応した環境がなくなると消えてしまうんです。だから、環境を無差別に破壊してしまう今回の化け物は私たちにとってとても大きな問題なんです。もちろん、死ぬときに苦しいということもありますが……」

「なるほど……それは困りましたね。」

今回の問題について納得する全員。しかし、その大妖精の言葉の最中も範人は今回の化け物について考え続けていた。生物学者として、

脳内研究ノートを広げる。

（水のような液体に近い生物なんてそうそういない。生物兵器ならば、そんな見た目のものがいくらいても不思議じゃない……けど、今回のやつは人によって意図的に作られたものか？ありえない。今回はおそらく偶々だ。前のハンターやテイロスとは違う。自然の中にいる液体のような生物……いた。）

範人はある結論に辿り着いた。いたのだ。液体のような身体を持った化け物のような生物が……

「粘菌……ね。」

範人の口から飛び出した言葉。その言葉にパッチがピクリと反応する。同時に他の全員もその聞き慣れない言葉を聞き、範人の方に注目した。

「確かに粘菌なら、特徴が被りますね。ウイルスの影響で大きくなることも考えられます。」

「範人さん、パッチさん。粘菌って何ですか？」

「詳しく言うと長くなっちゃうから簡単に言うけど、スライムみたいな形態とキノコみたいな形態を持つ生物よ。今回のやつはスライムみたいな方ね。森に行けば、そこらへんにたくさんいるわ。」

範人の説明に全員が頷く。粘菌の変形体なら、大妖精の説明と一致する。

突然、大妖精が全員を止めた。人差し指を立てて静かにするように指示を出し、一人地面に降りる。その瞬間、木陰から何かが飛び出して、大妖精に襲いかかった。

「危ない！」

絆がヤマメとの絆の能力を発動し、その何かに糸を巻きつけて引張った。何かの軌道がずれ、地面に落ちる。絆は地面に降り、糸で何かをがんじがらめにした。

絆の糸は蜘蛛の糸。大抵の力では切ることができない。身動きが取れなくなった何かはまだ糸を引きちぎろうと筋肉を膨張させる。しかし、皮膚に糸がめり込む痛みに膨張をやめ、動きを止めた。

全員が地面に降りる。

「何ですか……こいつ?!?」

「こんなB・O・Wを見たことないですよ?!?」

そいつの全身には目ができていた。その見た目から人型だったことが伺えるが、身体の形はだいぶ歪になり、左腕が肥大化している。妖怪の姿がどんなに不気味で不思議なものであろうと、この個体は異常だった。

生物兵器も同様である。この個体は様々な生物のパーツが組み合わさっていたと思われるが、それがここまでめちやくちやになっているものはそうそういない。

だとしたら、これは何か?それは……

「ウイルスに感染した妖怪ね。」

「はあ?!?妖怪が人間の感染するものにかかるはずがないだろ?!?」

「それがこのウイルスの恐ろしさよ。パッチは何ウイルスだと思う?」

「Gウイルスですね。この眼球が特徴に当てはまります。あと、保有はしていないみたいです。」

「なるほど……ありがとね。」

さて、お客様はまだたくさんいるようだけど……どうする?」

何時の間にか、範人たちの周りは感染妖怪に囲まれていた。その数32。感染妖怪たちは全て歪な形をしており、なんらかのウイルスの特徴を持っている。全員は早くも臨戦態勢を整えて、身構えていた。

「それは殺るしかないな(ですね)。」

「仕方ないですね。殺りますか……」

「え?戦うんですか?」

「氷漬けにしてやるう!」

「OK. Let's rock baby's!

……と、いききたいところだけど無理そうね。」

感染妖怪たちが飛びかかると同時に殺傷能力有りの弾幕が展開される。

しかし、敵がいる場所は地上だけではなかった。範人たちがいる位置の中心から巨大なワームが現れ、全員を弾き飛ばす。感染妖怪たち

は範人たち1人に対して、4匹のチームを組んで追いかけた。

幸いなことに全員ともそこまで遠くへ飛ばされなかった。味方は全員、目の届く範囲にいる。しかし、周りを感染妖怪に囲まれてしまっているために合流はできない。

「あわわ……みなさんと離れてしまいました。」

「まあ、今はこいつらを潰すことを考えようぜ。」

2人の周りを囲むのは8匹の感染妖怪。その全てに同じ姿のものはおらず、不気味で歪な姿をしている。

試しにエレイが魔法で発生させた火と水を飛ばす。妖怪たちはそれらをその姿に似合わない俊敏な動作で躲し、2人との距離を詰める。絆は諦めたかのようにその場に片手をつけて、しゃがんだ。調子に乗った妖怪たちはジリジリと距離を詰め、2人の逃げ場を狭めていく。

しかし、エレイはこのときに気づいていた、この妖怪たちは水よりも火を重点的に避けていたことに。そして、この結果からある結論に達していた。

「お前らの弱点……火……だな？……絆あ！」

「わかっていますよーよいしょ……つと。」

エレイの声の後、絆はおもむろに立ち上がる。その指には先程と同じ蜘蛛の糸が繋がっていた。瞬間、地面がめくれ上がり、妖怪たちの足元をひっくり返した。

絆は既に罨をはっていたのだ。先程しゃがんだのは罨をはるため、決して諦めたわけではなく、さらに妖怪たちの行動がそれをわかり辛くしてくれた。

妖怪たちは後ろにゆっくりと倒れる。

「さて、お前たちは地面に背中をつける必要がない。何故だか…わかるか?…お前たちはここで消えるからだ。」

紅蓮『烈火の竜巻』!」

エレイを中心に炎の竜巻が発生した。絆は弾幕を大量にはることでガードする。その竜巻は妖怪たちの身体を何度も焼き、組織を燃やして破壊した。

竜巻が消えたとき、そこに妖怪たちの姿はなく、ただ真つ黒な色をした炭のような灰が風に吹かれて舞っているだけだった。

「囲まれちゃいましたよ!?!」

「大丈夫だよ、大ちゃん。アタイはサイキョーだから!」

「これは強硬突破でいいよね。」

大妖精は普通の、チルノは氷の弾幕を放つ。大妖精の弾幕には大した殺傷力がないため、妖怪たちにはほとんどダメージが入らない。それでも、怯ませる分には十分だった。怯んだ妖怪たちに次々とチルノの弾幕が当たり、凍りつく。

2人は妖怪たちが完全に止まったと思い近づいた。ところが、凍りついたと思った妖怪たちは表面のみしか凍っておらず、身体を覆う氷を砕いて2人に殴りかかる。あまりの恐ろしさに死を覚悟した2人は目を閉じた。

「真刀『氷夜』」「真刀『白乱』」

しかし、妖怪は爪で引き裂くことも拳で殴り飛ばすこともできなかった。チルノと大妖精が目を開けると、そこには新と白が刀を手に立っていた。2人に攻撃を仕掛けた妖怪は四肢を切り落とされた、見

るも無惨な血だらけの姿で転がっていた。

「俺（私）のことを忘れてもらったら、困るな（わ）。

2人とも、大丈夫？」

「ありがとうございます。大丈夫ですよ。」

「アタイはサイキョーだからね！」

新と白の問いにチルノと大妖精は答える。2人の妖精が無事であることが確認できた2人はニツコリと笑い、妖怪たちの方に向き直った。その目つきは2人の妖精に向けた優しいものから一転、冷酷で恐ろしい目つきに変わっていた。

「さて、妖怪さん？本当の氷結で絶望を教えてくださいね。」

氷夜！」

「おう、任せろ！」

新が氷夜を横に一振りすると、妖怪たちは身体の芯まで凍りついた。しかし、ご丁寧に感覚神経と感覚器官、脳だけは生かしており、妖怪たちは生きたまま冷凍される結果になった。

「そして、私が本当の斬撃で死を教えてくださいね。」

白乱！」

「任せて！」

白乱に光が宿り、白はそれを横に一振りした。白乱は凍りついた妖怪の体組織などものともせず、チーズを切るように軽く切り裂く。さらに、真つ二つになった妖怪の身体を連続で斬りつけて、マイクロ單位のとても細かな肉塊と化させた。凍りついた肉塊は地面に落ちた瞬間に一瞬で解け、土と同化してしまった。

「飛ばされちゃいましたね。」

そう呟くパッチに応えるものはいない。ただ、ウイルスに感染した妖怪たちの苦しげな声が返ってくるだけだ。パッチは右腕をC―ナパドウ・アーマーに変異、左腕をベデム・Cに変異させた。変異してできたアーマーの穴から蒸気が噴き出す。

「ギユアアア―！」

妖怪たちは蒸気噴出の音に応えるように叫び声をあげ、パッチに殴りかかった。パッチはベデム・Cで攻撃を受け止める。彼の左腕に重い衝撃が走るが、生物兵器である彼には大したものではない。すかさず、アーマーの右腕で殴り飛ばした。拳は妖怪の左頬を直撃、骨を粉砕し、脳をぐちゃぐちゃに破壊する。妖怪は顔にある穴という穴から血と体液を噴き出しながら5m先の地面に落下、絶命した。

今度は、2匹同時に殴りかかる。パッチは冷静に盾で受け止め、跳ね返して怯んだところにシールドバツシュをかました。妖怪たちは仲良く一緒に吹っ飛んで膝をつく。パッチはそこに駆け寄ると、右腕のアーマーの蒸気噴出を利用し、妖怪たちの頭を超高速で殴って、振り抜いた。頭を失くした妖怪は地面に崩れ落ちる。

「あれ……もう1体いたはずですが……!?」

パッチは周りを見渡すが、視界の中に妖怪は映らなかった。困った彼は足元に視線を落とす。すると、自分の影が見えなくなっていることに気づいた。彼は急いで上を見上げる。

「ギユオオ―！」

妖怪の爪はすぐそこまで迫っていた。このままでは脳天貫通のコースだ。パッチの脳内に串刺しにされている自分の姿が映る。しかし、彼は冷静だった。

C―ナパドウ・アーマーから蒸気を噴出させ、一瞬で数メートルを移動する。妖怪は彼が立っていた場所に爪を突き立てた。妖怪は地面に刺さった爪を抜こうとする。

しかし、悲しいことにその妖怪の爪にはかえしがついていた。攻撃が決まった場合、刺さったものを抜けにくくしたり、内臓を掻き回したりと、かなり優秀な能力を持つかえしだが、今回は前者が仇となった。かえしのついた爪は地中深くまで刺さり、なかなか抜けない。

パッチは変異を解除すると、適当な石ころを拾った。彼は弾幕を発生させ、弾幕が石ころを覆ったことを確認してから、石ころを握る。石ころの角が彼の手の平に傷をつけ、血を流させる。直後、石ころに付着した血液が発火した。

「さようなら。これが本当の殺球^{デッドボール}です。」

パッチは炎に包まれて弾幕と化した石ころを妖怪に投げつけた。石ころは妖怪の頭に直撃し、大きなトンネルを造ると空中で燃え尽きた。

パッチは妖怪の屍たちに血を落とし、静かに火葬した。

「ああ、やっぱり飛ばされちゃったわ。」

「先に教えてくださいよ。」

「ごめんごめん。」

「まったく……」

範人と妖夢は呑気に会話しているが、忘れてはいけない。ここは戦場であり、現に2人は8匹の妖怪に囲まれている。

範人は第二の変異を発動させ、妖夢は刀を構えた。

「Come on baby s!」

「来なさい。相手になってあげましょう。」

妖怪たちは挑発に乗り、2人に殴りかかる。

しかし、妖夢の方に飛びかかった4匹は一瞬で両腕を切り落とされてしまった。刀と素手とは相性が悪すぎる。妖夢は腕を失ったことでバランスを崩して転んだ妖怪たちの首を切り落とした。

範人は電撃を混じえながら素手で格闘していた。

いつもなら、身体を覆う甲殻が存在するため拳を拳で受けられる

が、今回は甲殻がないほぼ生身の状態のため攻撃を避けながらの戦いになる。

4対1となると、範人であつてもかなりの苦戦を強いられ、なかなか攻撃のチャンスが見つけれられない。しかし、久しぶりの苦戦を彼女は楽しんでいた。

範人は妖怪のストレートを躲した僅かな隙に一本背負い。反対側にいた妖怪に投げつけ、吹っ飛ばした。残った2匹が拳を振るつてくるが、上へのジャンプで躲し、同時に顔面を蹴り飛ばした。怯んだところを正面の敵には頭へ指で刺突、背後の敵は頭に尻尾を突き立てることとどめを刺した。

「ギャオオー！」

吹っ飛ばされた2匹が縦一列に並んで範人に駆け寄ってくる。しかし、距離があるため、彼女には構える余裕が有り余っていた。彼女は軽い電撃を放って2匹をスタンさせる。動けなくなった2匹に範人はゆっくりと近づき、ハンドスプリングしながら足で1匹の頭を挟むとそのまま回転して首をへし折り、投げ飛ばした。もう1匹は頭を握り潰して、とどめを刺した。

「時間かかってましたね。」

「慣れてないからね。」

範人は第一に変異すると妖怪の屍に火を放って、火葬した。

それぞれの戦いが終わり、全員が無事に集合した。しかし、まだ全員は納得していない。自分たちをバラバラにした憎い敵は今、地面の中に潜って隠れているのだ。幻想郷の安全を考慮する都在这里倒すのが賢明だろう。また、心に怒りの炎を燃やしているものもいる。

「さて、ヤツスキのイモムシはどうしましょう?。」

「もちろん殺すに決まっているわ♪」

「先輩、笑顔ですごいこと言わないでください。俺も同感ですけど……」

「そこにあの虫の穴がありますよ。」

「幻想郷の安全も考えてここで処理してしまいましょう。」

炎の能力が使える者は穴の淵に近づく。その彼らの笑顔は恐ろしいもので巨大ワームに対する怒りから黒いオーラを噴き出しまくっていた。範人は第一に変異、絆は妹紅の絆を発動、新は「異次元からの救世主『旅行 範人』」を発動させる。

彼らは穴に向けて片手を向けると、同時に攻撃を始めた。範人と新からは「爆散『ブレイズグレネード』」、絆からは火の鳥、エレイからは炎の魔力弾、パッチからは燃える血液が放り込まれる。

数秒後、地中で大爆発が起こり、地面のところどころに開いていた穴から火柱が上がった。残念なことに巨大ワームの焼死体は確認できなかったが、燃え尽きたということ全員が納得した。

「さて、少々時間を食ってしまいました。霧の湖はすぐそこです。急ぎましょう。」

飛び立つ大妖精に続き、一同は再び霧の湖を目指した。

この日、幻想郷全体で地震が観測されたことは言うまでもない。

第六十六話

ウイルスに感染した妖怪たちを倒した範人たちは霧の湖まで来ていた。

湖は以前と変わりなく静かで美しい景観が保たれており、避難してきた妖精たちが飛び回っている。化け物がここまで到達していなかったことに全員が安堵し、ホッとため息を吐いた。

新と絆はチルノから遊びに誘われ、妖精たちの中に紛れていく。パッチとエレイは生物兵器について話し合っていた。

大妖精は遊んでいる妖精のうち1人に近づき、今の状態を訊ねる。

「化け物はどこまで来ていますか？」

「それが、こちらにはよくわからないんです。ただ、相当大きくなっているのは確かで、木が折れる音が聞こえる感覚が短くなってきました。」

「なるほど、そうですか。お留守番お疲れ様。」

大妖精はその妖精に礼を言うと、範人たちの方へ真っ直ぐ戻ってくる。その表情は深刻な事態を表していた。

「ダメです。場所はわかりませんでした。このままでは……」

「それは困りましたね……敵の位置がわからないとは……」

全員の気分が落ち込み、気分的な静寂が訪れる。しかし、その静寂はすぐに終わりを告げた。

木々が折られる音が聞こえてきた。しかも、すぐ近く。同何者かの時に慌てた声が聞こえてきた。

「うわあああー！」

森の中から妖精の少年が飛び出してきた。そのすぐ後に続いて木が倒れ、ゲル状の化け物が姿を現した。

その化け物を目にした妖精たちは一斉に湖の反対へ逃げ出す。辺りはパニック状態となってしまった。その中でも、新と絆は群れから脱出し、範人たちの方に戻ってくる。範人たちは武器を手に取り、魔法陣を発生させて身構えた。

予期せぬ対面だったが、絶好のチャンス。これ以上被害を拡大させ

るわけにはいかなかったため、範人たちが冷静さを欠くことはなかった。

紅魔館門前。今日は美鈴が門番であり、いつもどおりに居眠りをしている。そのすぐ近くでデューレスは絵を描いていた。

ここ最近は何やら騒がしく、レミリアは、注意するように、と門番たちに言っていた。それが現実になったのかどうかを門番の2人は知らないが、普段森にいるはずの妖精が湖まで出てきたため、2人は現実になったのだろうかと考えていた。

ふと、デューレスが美鈴の方を見ると眠ってしまったことに気がついた。彼は黙って日傘を広げると、塀に立てかけ、彼女のいる位置に日陰を作る。そして、再びキャンヴァスの前に戻り、絵を描こうとした。絵のバランスを確かめるために湖を眺める。すると、見慣れた人物とほとんど同じ服装をした者がいることに気がついた。

「ん？ 範人にそっくりだけど……あれは誰？」

デューレスの話し方は彼本来のものに戻っていた。非番の日は彼が本来に戻るリラックスできる日。彼の声は見た目に似合わずとても高く、口調は子どもっぽい。声だけなら、まるで少女のようである。

彼は興味津々といった様子で湖にいる範人とそっくりな格好をしている女性の様子を見る。そのとき、木が折れるようなバキバキという音が聞こえてきた。彼は驚き、その方向を見つめる。すると、対岸の森の中から妖精の少年が飛び出し、その後ろからゲル状の何かが見えた。妖精たちはパニックに陥りつつも、その何かから逃げるように紅魔館に向かってくる。

このままでは妖精たちが危険だと判断したデューレスはすぐに美

鈴の頬を軽く叩いて起こす。彼女は叩かれた頬をさすりながら、目を開けた。

「美鈴！今から僕は少し戦いに行ってくる。」

「え!?？何故ですか?」

美鈴はデューレスの気を見て、彼の心がとても慌てていることに気がつき、何があつたのかを訊き返す。彼は黙って対岸を指差した。彼女がそちらを見ると、ゲル状の化け物がいることが視認できた。状況が飲み込めた彼女は黙って頷く。

「ありがとう。」

妖精たちがこっちに避難してくると思うから、美鈴はその妖精たちを守って！最悪、あの何かがこっちに来そうだったら、紅魔館の敷地内に避難させてあげて！お嬢様もそういう理由なら許してくれるはずだから!」

「わかりました。でも、シエスタはお預けになっちゃいますね。」

「仕事なんだから、わかるとは言え、寝るのはどうかと思うよ?」

デューレスは化け物を討伐するために飛び立つ。

美鈴はその後ろ姿を見送った後、自身のいる場所が日陰になっていることに気がついた。上を見ると広げた日傘がある。気を観察していたわけでもないのに、彼女にはその日傘を誰が置いてくれたのかがすぐにわかった。

彼女はニツコリと微笑む。

「まったく……デューレスさんは相変わらず優しいですね。」

さて、彼の優しさに応えて、私も頑張りますか。」

美鈴は飛んでくる妖精たちに説明し、門の前に集め始めた。

範人たちは化け物と対峙していた。大きさは目測で60m、高さは1mと少し。粘菌としては規格外の代物だ。全員がその大きさに驚く。さらにパツチがあることに気がついた。彼は啞然として、その方向を指し示す。範人たちもつられてそちらを見るが、その光景に驚きを隠せなかった。

「木が…溶けている……」

その化け物に触れた木が触れた場所からどんどん溶けているのだ。さらに倒れた木がそいつの上に落ちた瞬間に木が消え、そいつの体積が消えた木の分だけ大きくなった。恐ろしい力である。触れた生物をかたっぱしからどんどん吸収している。

「これはいったい……!?」

「ん？あー、デューじゃない。そういうば、ここは紅魔館のすぐ近くだったわね。」

「ん？貴女は……あ、範人か。テレデイにでもなった？

……まあ、いいや。そちらの方々のことも気になるけど、今はこれを潰すことが最優先だよな。」

範人たちが気がつくのと、隣にはデューレスがいた。彼もまた、目の前の化け物を見て驚いている。範人と妖夢、パツチ以外の者は突然現れた大男の存在に驚き、こう思った。今日一番驚いたのは音もなく突然現れたあんなのことだよ、と。

デューレスは自身の呼び方で白衣を着た女性が女体化した範人であることに気づいた。そして、どこかで見たようなやりとりを終えるとメテオを構える。

「こんな強そうな相手、生物兵器タイラントの血が騒ぎますね。」

「強そう”じゃなくて”強い”だけだね。倒せるか不安だわ。」

「殺しは好きではないのですが……仕方ないですね。僕がとどめを刺していないとは言え、もう殺っちゃってますし……」

「俺の中の白が、戦え！と叫んでいます！」

「世界が異なれど、紅魔館は俺の家だ！絶対に守るぜ！」

「この楼観剣で斬り伏せてあげましょう！」

「幻想郷の安全のためにあなたを処分させていただきます。」
化け物は首がどこかはわからないが、鎌首を持ち上げて様子を伺っている。

勇者たちは化け物に死を与えるべく、化け物は食を手に入れるべく、戦闘を開始した。

這う。

2人の刀が粘菌を切った。2人の手に伝わった感触はまるで水を切ったような抵抗のないものだった。さらに、あまりの大きさに切断とまではいかず、パツクリと裂けただけですぐに傷がふさがる。

しかし、範人はその中で素晴らしいものを見つけた。腕一本くれてやった分の価値は充分にあるものだ。

「パツチ…確か、ウイルスはGだったわよね？」

「え……はい、そうですけど……」

範人の問いにパツチは驚きながら答える。その答えを聞いた彼女はニヤリと不敵に笑い「BINGO……」とつぶやいた。

粘菌は新と妖夢に向けて身体を伸ばす。遠くまで移動して獲物を食らうより、近くにいるものを食らったほうが楽だと考えた。そして、何より自分を攻撃した者が許せなかった。

妖夢と新は上空へ逃げた。

粘菌は本来、地面や壁を這って移動する生き物。木よりも高い位置まで逃げれば捕まることはない、2人はそう考えた。しかし、ウイルスに感染し、強化された生き物にそんな常識は通用しなかった。

粘菌の身体の形が変化し、まるで銃砲のようなものが背中(?)に形成される。そのコンマ数秒後、そこからショットガンのように大量の何かが発射された。発射された何かは粒状になり、新と妖夢へ真っ直ぐ飛んでいく。不意を突かれた2人に避ける余裕はなく、直撃はなかったもののほとんどがかすり、皮膚の表面を抉った。上空へ飛ばされた何かは粘菌の身体に落ち、粘菌に吸収される。

範人は目を見開いて驚いた。彼女は発射された何かは粒状になった瞬間から能力を使用し、操ろうとしていた。しかし、それらは操られることなく、2人を襲ったのだ。そのとき、彼女は思い出した。今、自分たちが戦っている生物は分裂することができることを。つまり、発射されて粒状になった何かはそれぞれが一つ一つの生命体だったのだ。

彼女は一つの生物がバラバラになった粒や粒子までなら操ることができる。しかし、それぞれの粒が一つ一つの生命体だった場合は別

だ。宇宙から見れば、ほとんどの生命体はちっぽけな粒子である。範人は宇宙としての視点で生命体を見ているが、それぞれの生命体を粒子として操れないように、粒子状になっていたとしてもそれぞれが一つ一つの生命体である場合は操れないのである。

新と妖夢はダメージにより落下する。範人は妖夢を、パッチは新を空中でキャッチして、粘菌から距離を取る。粘菌は逃さんと言うように身体を伸ばして、範人とパッチを追いかける。

「やめろおー！」

水難『水に濡れ雨に打たれよ！』

「やらせはしない！」

暴君『タイラントラッシュ！』

「危ないです!?!」

絆『マスタースパーク！』

エレイからは巨大な水の弾幕、デューレスからは弾幕を纏うことでより強力になった拳の弾幕のラッシュ、絆からは熱と光の魔法レーザーが放たれた。水の弾幕は粘菌の上で弾けて雨のように弾幕を降らせる。

範人は距離を取りながら、弾幕に対する粘菌の反応、当たった場所の傷を確認していた。先ほど、粘菌を殴ったときに彼女の片腕は吸収されてしまった。相手にダメージを与えたとしても、これでは自分の負うダメージが大きいため意味がない。さらに、彼女は自分の打撃からのダメージが粘菌にほとんど入っていないと見た。つまり、普通の攻撃や電撃ではダメージなどほとんど無に等しいのだ。だから、彼女は相手の弱点を探すことにしたのである。

最も効果があったものは絆のマスタースパークだった。それ以外は当たったときに動きを止めたが、特に気にしている素振りは見せなかった。それどころか、その状況を楽しんでいるようにすら見えた。しかし、マスタースパークだけは圧倒的に反応が異なった。当たった瞬間に身を振って苦しみ、傷の治りが遅かった。

これから範人は結論を導き出した。

「……やつの弱点がわかったわ。これは絶対に効く！」

「まさか……わかったんですか？」

「ええ、わかったわ。ついでに倒す方法も思いついた。

ひとまず、後退するわよ。弱点は離れてから話すわ。」

「わかりました。」

範人とパッチはそれぞれ妖夢と新を抱き抱えて粘菌から充分に距離を取った。粘菌は追いかけるのを諦めて、湖岸に沿って紅魔館に向かい始める。もしかしたら、粘菌には妖精たちが見えているのかもしれない。その場の全員はそう思った。

範人たちは紅魔館の門前まで移動した。粘菌の移動ルートを見ると紅魔館が最終防衛ラインだった。吸血鬼の感染者などが出来上がったら、幻想郷壊滅待った無しである。

範人は妖夢と新を救急スプレーで治療する。幸いなことにウイルスには感染していなかった。

救急スプレーは研究所に備蓄されており、範人も数本常備しているが、あまり使うことはない。それは範人の身体が生物兵器であるために化け物じみた耐久力と再生力を持っているからである。しかし、今回攻撃を受けた者は半人半吸血鬼と半人半霊だ。普通の人間より身体が丈夫であることは間違いないのだが、ダメージの回復には時間がそれなりに必要だ。今は1秒の時間も惜しい。だから範人は惜しむことなく救急スプレーを使用した。

救急スプレーの効力により、2人の傷はみるみるうちにふさがり、もとの無傷の状態に戻った。2人が復活したところでパッチが口を開く。

「範人さん、倒す方法を教えてください。」

「わかったわ。でも、先に弱点を話すわね。」

知つての通り、あれは粘菌っていう生物よ。粘菌には好きな環境があつて、それが多湿な環境なの。つまり、その逆の乾燥が苦手で、身体自体も乾燥に弱い。だから、高温で乾燥させちゃう火や強い光が弱点よ。」

「なら、炎で燃やし尽くしてしまえば「ダメよ」…え!?」

「さつき、絆のマスタースパークが当たったときに効いてはいたんだけど…傷の治りが遅くなるだけだったのよね。多分、完全に破壊しないと身体を再構築してしまうわ。」

だから、あの生物の核を見つけた。G生物は身体に核となる眼球ができるのだけど、あいつはそれが身体の中に生成されていた。狙うのは難しいけど、それを攻撃するしかないわね。核さえ潰せば再生はできないいわ。」

「でも、さつき範人さんが殴ったときに腕を奪われましたよ。身体の中にある弱点を狙うなんて身体を吸収されてしまうんじゃないですか?」

「大丈夫。それはさつきパッチが解決してくれたわ。」

粘菌の弱点の火なんだけど、吸収できなくする効果もあるみたいなの。さつき、パッチが粘菌を殴ったとき、腕は奪われなかった。そのとき、パッチの腕は炎を纏っていた。

おそらくけど、火傷したり、乾燥したりしている場所では吸収できない。原因は表面の細胞が死んで膜を作るからだと思うわ。」

範人の説明に全員が納得して頷く。しかし、範人の表情は優れなかった。

現在、彼女の頭脳は冴え渡っている。これは女体化により、考え方が少し大人になったからだろう。しかし、女体化によつて考え方が変わったと言っても、範人は同時に火力を失つてしまった。範人は粘菌を倒すための火力が足りないと思つたのだ。この全員が集まつても、だ。範人の心からは火が消えかけていた。

範人の表情に気づいたエレイが話しかける。

「そんな顔してどうしたんだ?まだ不安か?」

「私がパワーダウンしているから……これじゃ、勝てるかどうか……」
「おいおい、俺たちの力があの程度だと思ってるのか？」

あんなの軽すぎるな。まだまだいけるぜ。」

「俺もまだまだいけますよ。」

「僕にも奥の手がありますから！」

「諦めないでください。」

訪問者たちの言葉に範人は勇気づけられ、勝てるような気さえしてきた。

範人の心に再び強い火が灯る。

「ありがとう。やってみようと思えてきたわ。」

じゃあ、火力……それも熱に自信がある人は手を挙げて。」

謙遜しているのか、範人の言葉に手を挙げたのはパッチだけだった。範人はそれを見て頷く。

範人は他に強い者がいるかもしれないとは考えず、パッチを選ぶことにした。こういうときに手を挙げるのはバカか、実力者だけである。彼女は先ほどの戦いから、パッチが実力者であることを自身の中で確定させていた。たとえば、パッチが手を挙げたことが自意識過剰から来るものであっても、彼にはそれに見合った力があると思った。

「じゃあ、よろしくね……パッチ。」

「はい、任せてください。」

でも、準備に少し時間がかかるので、その間は皆さんで食い止めてください。こういう大技にはリスクが付き物で……」

『もちろん（です）！』

全員共、闘争心は燃え尽きておらず、返事は力強いものだった。

それぞれがそれぞれを強者として認め合っている。だから、全員は全員を信じたことができた。信じているからこそ、返事をはっきりとすることができたのだ。

唐突に、デューレスが妖夢に指示を出す。

「妖夢さんは美鈴と一緒に妖精さんたちの避難をお願いします。」

「……わかりました。」

妖夢の一瞬、ムツとした表情になるが、しゅしゅといった様子で指

示を受け入れて、紅魔館の敷地内へ誘導を始めた。

彼女自身、獄炎剣というなんとも炎らしい剣技を持っているのだが、それではさすがに力が足りないと判断したのか。あるいは、男(元男)たちの女性にこんな危険な戦いに参加してもらいたくないという思いを感じとったのかもしれない。

妖夢が妖精たちと共に門の内側へ姿を消した後、範人が口を開いた。

「さて、妖夢が行ったわね。もう始めちゃっていいかしら？」

「いいんじゃないか？早く片付けたほうが幻想郷のためにもなるだろうしな。」

「もうすぐそこですからね。」

男たちは立ち上がり、左を向く。30m先には既に粘菌が迫ってきていた。

第六十八話

生物吸収は終わる

「じゃあ、頼みますよ。」

『type—C 禁忌の繭』！

不気味な繭がパッチを包み込み、そして動かなくなった。

粘菌には妖精たちが見えていた。粘菌にはサーモグラフィのように妖精のいる場所が感覚的にわかる。その原因は粘菌自身にもわからない。おそらく、妖精を吸収したことで同族である妖精の位置がわかるようになったのだろう。

壁の向こうには妖精の姿が大量に見えていた。しかし、粘菌はそこからへは進まない。粘菌が進む先には2つの生物の姿が見えていた。妖精よりも圧倒的に強力、そして自身を傷つけた生物。粘菌には“3匹”の生物兵器が見えており、とりわけ背が低い個体：パッチを狙っていた。そいつは何故か身体を丸めており、動かない。

「……！」

粘菌は音にならない叫びを上げながら、パッチに向かって腕？を1本伸ばした。しかし、それは炎の弾幕によって防がれる。弾幕を放ったのはエレイだった。

粘菌は何が起きたのかわからない。ただ、標的を攻撃しようと伸ばした身体の一部が焼かれたということだけがわかる。攻撃手段、距離、放った者は一切不明。

粘菌は怒り、全身から棘のように身体を伸ばした。しかし、その攻撃は狙いを定めていないめっちゃくちゃなもの。ほとんどが範人たちにとって見当違いの方向に伸び、パッチに至っては伸びてこなかった。

「下手な鉄砲も数撃ちや当たるとか言うけど、それは敵が弱い場合だけだぜ。」

「俺も変異しよう。」

異次元からの救世主 旅行 範人、シンクロ！さらに変異ー！」

粘菌はまたも身体を伸ばし、今度は水平に振り抜く。しかし、それは燃える甲殻を手足に纏った生物兵器に掴み止められた。身体中に

伝わる火傷の痛みに粘菌はすかさず身体を引っ込める。だが、猛スピードで引っ込めたのがいけなかった。

範人はその身体の一部を放さずに掴み続け、さらに新までそれを掴んでいた。粘菌が引っ込めた瞬間に2人の炎を纏った蹴りがその身体を食い込む。粘菌はそのダメージに堪らず後退。蹴りは身体を10m以上陥没させていた。

「……p??」

粘菌は怒りを任せ、背中?に特大の砲台を出現させた。狙うはもちろん自身を蹴った生物兵器。その一直線上には動かない個体がもう1匹いる。

粘菌の砲台から粘菌が発射される。今度はショットガンのような拡散型ではなく、砲弾のような塊だ。範人と新は横っ飛びで軽く避ける。しかし、その後ろには動けないパッチがいた。

粘菌は心の中で笑う。このまま砲弾が動かない個体に直撃すれば、命はないだろう、と。死体から素晴らしい栄養を摂取できるだろう、と。

しかし、その考えは容易く崩れ去った。突然ぶつかってきた高温の何かによって、砲弾が受け止められている。

「絆『マスタースパーク』!」

粘菌の砲弾は絆の放ったレーザーにより水分が蒸発、乾燥して粉のようになり燃え尽きた。分離体に核は存在しないらしい。

そのとき、パッチの繭からパキパキという音が響いた。繭の背に当たる部分にヒビが入り、そこから巨大な羽が飛び出す。直後、繭から変異体が飛び出した。

背中に生えた巨大な羽、スナイパーライフルのような形状になった右腕、下半身では4本の巨大な触手が蠢いていた。顔と胴体はパッチのままだったものの、その姿は見る者を圧倒した。

粘菌には生命反応が突然大きくなったように見えていた。先ほどまでの最も小さな個体は突如として最も大きな個体が変わった。より多くの栄養を摂取できると考えた粘菌は他の個体には目もくれず、パッチに向かって巨大な手のようなものを伸ばした。

パッチは上空へ飛んだ。もちろん、粘菌の攻撃を避けるためである。しかし、粘菌の手はどこまでも追いかけてきた。彼は少し驚いた様子を見せる。

「おオツ!??よく伸びますネ。焼キ落とシマしよう。」

パッチは触手を粘菌に向けた。触手の先から炎が噴き出し、粘菌の手を燃やす。しかし、粘菌は手を引っ込めることなく、パッチに向けて手を伸ばし続けた。今、粘菌の考えていることは『食』ただそれだけである。

パッチはその食欲に思わず顔をしかめた。このままでは焼却が間に合わず、彼は食べられてしまう。

「魔炎『ターコイズフレア』!」

突如放たれた青い炎の弾幕に粘菌は手を止めた。いや、手が動かせないのだ。青い炎に燃やされた粘菌の手は痛みが伝わる前に灰と成って消えてしまった。

巨大な青い炎の塊は計3つ。使用者と青い炎の塊から弾幕が放たれる。時折、青い炎の塊からは剣のような形でレーザーのような弾幕が飛び出し、青い炎を中心に270度程回転した。

粘菌は灰になった手に驚きながら、炎の放たれた方へ意識を向けた。意外なことにそこにいたのは先程まで最も大きかった生物兵器の個体だった。

「助かりました。ア리가とウございます。」

「デューレスさん、魔法なんて使えたんですか?」

「使えますよ。パチュリー様に少し教えてもらって、魔道書読んだら、1時間で使えるようになります。まだ種類は少ないですが……」

「ハハハ……見た目どころか、才能まで化け物か。」

「じゃあ、僕も攻撃しましょう。」

滅却光『レギア・ソリス』

この技は時間がかかるので、もうしばらく耐えてください。」

パッチはライフルのような右腕を空に向けた。

粘菌は何が起きたのかわからなかった。しかし、たった今、炎を放った個体が脅威であることははっきりとわかった。それを理解し

た粘菌はパッチとデューレスを諦め、標的を範人に移す。粘菌には現在最も小さな彼女が最も捕食しやすい対象として映っていた。

粘菌は範人へと無数の触手を伸ばし、ラッシュをしかける。彼女は手足の甲殻に炎を纏い、それらの全てを拳と蹴りで受け止めていく。しかし、粘菌の方が手数が多かった。

範人の拳と蹴りをすり抜けた触手は真っ直ぐに範人の心臓へと向かう。だが、範人も防御手段を持っていないわけではなかった。甲殻は無くとも熱を持つことはできる。範人の皮膚が高熱になり、触れた粘菌の触手から水分を蒸発させる。しかし、粘菌も諦めなかった。痛みに耐え、触手を進める。すると、ゲル状の触手があるだろうか、範人の胸の谷間へ入ってしまった。触手は捕食しようと動き回る。

「あ!!?!…ちよ、なんで?!?!…なんで、そこ入っちゃうの?!?!…:ああん!だめえ……」

範人は自身の胸で動き回る粘菌に違和感と不快感を感じ、思わず喘ぎ声を上げてしまう。目の前の光景に新と絆は戦いの最中にも関わらず、手で目を覆った。まさかこんなことが起こると思っていなかったエレイは視界をずらすことができず、喘ぐ範人をガッツリと見てしまう。デューレスは特に何も感じることなく、冷静なままターコイズフレアを操り、触手を焼き切った。パッチはスペルに集中していたため、下で起こっていることには気づかない。

数十秒後、触手から全ての水分が蒸発し、粘菌の切れ端は消滅した。突然の触手プレイ?から解放された範人はハアハアと荒く息をする。皮膚は少し紅潮しており、ハリが出ていた。

「ハア…ハア…:やってくれたわね。」

「準備ができたんで発射しますよ。離れてくださいね。」

あれ?範人さん、どうしました?」

「なんでもないわ。気にしないで!」

範人たちは粘菌から離れる。それと同時に粘菌に向けて、天から光線が降ってきた。その光景は範人が過去に見たレギア・ソリスの資料と酷似していた。とんでもない量の光量によって、粘菌の身体が炭化し、ポロボロと崩れていく。その場の誰もが戦いが終わったと思っ

た。

しかし、粘菌は死ななかつた。パッチのレギア・ソリスの光が消えてからもその場に存在している。

粘菌は自身の核の色を白色に変化させて、なんとか死を免れたのだ。核を中心に全身が再生を始める。この核が持っている機能は何も核としての働きだけではない。吸収した栄養を貯めておく貯蔵庫の働きもしていた。今までに使っていた栄養は全体の約三分の一。粘菌はアツと言う間に出会ったときの三分の一程まで再生させてしまった。

しかし、その場の全員は諦めていなかつた。その場の全員がこんな逆境を何度も乗り越えてきた猛者だ。

猛者たちはスperlカードを構えた。

「まだ終わっちゃいねえ……そういうことだろ？ガッツあるやつは嫌いじゃないぜ！」

紅砲『アグニスパーク！』

「僕は別に粘菌あなたを嫌って居るわけではありません。むしろ、その力には尊敬に似た恐怖すら覚えます。しかし、幻想郷のためにここで粘菌あなたを消します。」

合絆『フラン人形レーヴァテイン！』

エレイから放たれた炎の魔砲は粘菌の身体を抉り、貫いた。絆から放たれたフラン人形はレーヴァテインを振るい、粘菌を切りつけた。その高熱に、粘菌は効果的なダメージを受ける。しかし、それは粘菌の体組織を壊し、焼き切ると共に、粘菌のリミッターを壊して、切つ

た。

「……！」

粘菌の身体全体に砲門が発生し、無数の粘菌弾が全方位に発射される。弾幕勝負に慣れている範人たちにも粘菌弾の量はかなり多かった。避けきれない程の数が彼らに襲いかかる。

「みんな、耳塞いで！」

咆哮『ハンターキング・ロア』！」

範人の言葉に全員が耳を塞ぐ。範人は息を大きく吸い込み、咆哮した。

「ゴアアアアア！」

咆哮と同時に大量の光子が粘菌に向かう。粘菌はそのあまりの音量に全身が痺れたように動かなくなる。範人は能力で光子を操り、振動も加えてマイクロ波を発生させた。空中の粘菌弾、粘菌の本体がマイクロ波に貫かれ、中の水分がマイクロ波加熱で熱を持ち、蒸発する。範人のスペルが終わったとき、全員の前には身体からプスプスと蒸気をあげる粘菌がいた。しかし、粘菌の生命活動はまだ停止しておらず、尚も捕食しようと身体を動かす。

「もう終わりにしましょう。」

炎精『シャイターン』！」

「これでラストアタックにしたいな。」

『大切な人 フランドール・スカーレット』！」

デューレスの魔法陣から炎の精霊が発生、デューレスの意識をつなげられた炎の精霊は粘菌にパンチラッシュをしかける。新の姿がフランに似たものになり、レーヴァテインで粘菌を焼き切っていく。2人の攻撃は粘菌の体組織を破壊して切り開き、ついに核である眼球を露出させた。

上空にいるパッチはこの瞬間を待つて、ライフル型の右腕を構えていた。

「Jackpot……です。」

パッチの右腕から炎を纏った骨の弾丸が発射された。弾丸は超速度で眼球のど真ん中に直撃、貫通して、その下の地面に穴を開ける。そ

のコンマ数秒後、眼球は弾丸の衝撃波により、木っ端微塵に吹き飛んだ。

数秒後、眼球から乱れた脳波が放たれたことで、残っていた粘菌の残骸も死に、再生能力が暴走して、爆発するように辺りにぶちまけられた。上空にいたパッチと空間操作をしていたデューレス以外に粘菌が降りかかる。

粘菌は確実に死んだ。

突然起こったことに最初は全員キョトンとしていた。ここは少し怒ってもいいはずなのだが、全員とも気持ち悪そうにしながらも、粘菌を倒した達成感から笑っていた。

「ハハハ：最後に以外なしっぺ返し食らっちゃったが、倒せて良かったな。」

「今には驚きましたよ。思わず能力でガードしちゃいました。」

「みんなベトベトですね。これは洗濯が大変です。」

「ああ、汚れちゃった。お風呂に入りたい気分です。」

「うう、もう変異できないわ。この身体は元に比べてかなり弱体化しているわね。」

「皆さん大丈夫ですか？」

上空から降りてくるパッチの言葉に全員は頷く。彼らの顔は達成感に満ち溢れていた。

あんな強敵が倒れたのだ。昼は宴会になるだろう。

第六十九話

訪問者との宴会

範人の家の風呂。範人は1人で入浴していた。他の来訪者たちは別館の方で入浴している。

範人自身は全員で入るつもりだったのだが、現在、範人は女体化してしまっている。そのため、恥ずかしいとの理由で来訪者たちに断られてしまった。

身体に着いた粘菌の死骸を充分に洗い流す。

洗う前は酷かった。全身にベトベトとした粘菌が付着しており、服の中にまで入り込んでいた。その様子はまるでエロ同人のようで、不快感を覚えた。そんな気持ち悪い粘菌を全て洗い流して、範人はホッと息を吐く。

髪が吸い込んだ水分を搾りながら、鏡を見る。鏡に映ったのは裸の女性。それは自分であって自分ではなかった。自身に打ち込まれた薬と紫を恨めしく思う。

5分程浴槽に浸かった後、範人は風呂を上がり、用意しておいた服に着替えて宴会の準備に向かった。

研究所の別館を会場にして、宴会が始まった。参加者は妖精代表のチルノと大妖精、来訪者全員、紅魔館メンバー、幽々子、妖夢、そしてどこからか情報を聞きつけてやってきた魔理沙と優だ。もちろん、会場提供者の範人も参加している。

範人は毎度のようにワイン片手に各メンバーの元を回る。

最初に訪れたのは紅魔館メンバーの元だった。レミリア、フラン、咲夜、エレイ、白の組とデューレス、美鈴、絆の2組に分かれて酒と料理を楽しんでいる。

「あら、範人じゃない。ごきげんよう。化け物退治お疲れ様。」

「お疲れ様です。」

「お兄様♪……あれ、お姉様かな？どっちだろ？」

範人に気づいて挨拶をしてくるレミリアと咲夜、フラン。フランは挨拶と同時に範人に飛びつく。範人はフランを優しく受け止めた。

力が落ちているとはいえ、フランの体重はそれなりに軽い。範人が受け止めることは造作もなかった。

「ふふふ、フランが甘えてしまつて申し訳ないわね。やめろと言つても聞かないでしょうけど。それにしても……」

レミリアの視線が範人のある部分に向く。つられるように咲夜の視線もその部分を向けられた。フランは2人の視線の意味がわからず、頭の上に？を浮かべていたが、自身に触れる柔らかい感触に何のことも気づき、範人をギューツと強く抱きしめる。そして、柔らかい感触に顔を埋めた。

「ちよつとフランどうしたの？抱きしめる力が強すぎて痛いわ。」

「お姉様のおっぱい柔らかくて大きく♪お母様みたーい♪」

「ちよ!??やめて!」

「嫌だよ♪こんなに大きくて気持ち良いの美鈴くらいだもーん♪」

フランは範人の胸を揉む。レミリアと咲夜は恨めしそうにしながら、フランの手の動きで形を変える2つの大きな果実を見つめる。エレイと白は不穏な空気を感じ取り、デューレス組の方へ移動した。

レミリアは自身の胸に手を当てて少し悲しそうな顔になる。咲夜が必死でレミリアを褒めるが、無いものを褒められたところで意味がない。そもそも「貧乳が好き男もいる」と言つたところで既に結婚しているレミリアには効果など皆無だった。

フランが胸を揉むことをやめた。顔を赤くしながらハアハアと荒い呼吸をする範人を見て、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべてい

る。

「良い触り心地だったよ〜♪」

「フラン……私は貴女が恐ろしいわ。」

範人は逃げるようにデューレス組へ移動した。

「あ〜ん♪デューレスさ〜ん♪なんで避けるんですかあ?」

「そりゃあ、妖怪に体当たりされたら避けるよね!?!?」

デューレス組では酒に酔った美鈴がデューレスに突進していた。最も、美鈴はデューレスに抱きついて、甘えたいだけなのだが……

圧倒的な体格差のある男女だが美鈴は妖怪。いくら怪力を誇るタイラントであっても、攻撃が当たれば痛いし、気を抜けば吹っ飛ぶ。

甘えたいだけの美鈴と本気で逃げるデューレスを見て、エレイと白が笑っていた。

「デューレスさん大変ですな〜♪」

「ほーら、美鈴も頑張れ〜♪」

「助けてくださいよ!?!?」

「ごめん、無理☆」

「んにゃあ、デューレスさ〜ん♪」

さすがは同じスカレット家の吸血鬼と言ったところか? ふざけるとときは息ぴったりである。

範人はそんな2人を見て苦笑いした。範人に気づいた白がジュース片手に話しかける。

「先輩、お疲れ様です。」

「ん、ありがとう。白も新の中で一緒に頑張っていたわね。」

「ふふふ、ありがとうございます。」

ところで、粘菌は大丈夫ですか？なんかヤバイ状態になってしましたけど……」

「大丈夫よ。少し気持ち悪かったけどね。」

気を使ってくれる白に範人は優しく返す。そこにエレイも参加してくる。

「悪いな。触手プレイ的なき見ちまった。」

「あれ？別に気にしないわ。あれは偶々だろうし、見られても減るものじゃないしね。まあ、入り込んできた粘菌は許せないけど……忘れなければOKよ。」

「ありがとな。忘れられるように頑張るさ。」

さて、まずは飲んで忘れるかな。」

「頑張つてね。」

範人は記憶に残っていないければ、恥ずかしの必要はないと思っていた。エレイに悪気があったわけではないことはよくわかっているため最初から許すつもりだったが、今のでさらに許すことができた。

実は、スキマから覗いていた紫が触手プレイや粘菌まみれの様子、更には脱衣所での様子までカメラで撮影しており、それが複製されて既に妖夢の手に渡っていたりするのだが……範人がそんなことを知るはずもない。

範人は紅魔館メンバーの元を立ち去……ろうとしたがすぐに戻ってきた。大切な友人を1人、完全に忘れていた。

絆がウルウルとした目で範人を見ている。

「ごめん。忘れていたわ。」

範人が謝っても絆はその顔を止めない。「ヤバイ……何この子めっちゃ可愛い！」という言葉が範人の脳内を駆け抜ける。

男の娘ということがわかっていてもこの可愛さはいけない。その上そんな目で見つめるのは最早反則だろう。

範人はいつの間にか親指を立てていた。

「いや、本当にごめん。許して。」

「本当に反省していますか？だとしたら、その親指がものすごく不自然なのですが……」

「だって、可愛いんだもん。身体が勝手に……ね。というか、戦いのときはかつこよかったし、これなら葉が惚れたのもよくわかるわ。」

そう言っただけで範人は絆を見る。そのメイド服姿はどっからどう見ても女の子である。しかし、顔をよく見るとちゃんと男だということがわかるし、戦いのときの絆は本当にかつこよかった。言葉の中に葉を出したのは本当に納得したからである。

範人の言葉に葉が出てきたことで気を良くしたようで、絆の表情が変わる。

「そう言ってくれれば嬉しいですね。」

ところで範人さん、モフモフさせてください。」

「む!??!? そうきたか。もちろんいいわよ。」

範人は救急スプレーと風呂で回復したため、再度変異できるようになっていた。第二に変異し、絆の目の前で尻尾を誘うように振る。絆は尻尾に飛びつき、モフモフと触り始めた。その様子が可愛らしくて、範人は思わず絆の頭を撫でていた。

数分間、尻尾のモフモフを満喫した絆は満足して尻尾から離れた。範人は変異を解いて、今度こそ紅魔館メンバーの元を立ち去った。

範人が次に向かった場所は妖夢たちの場所だ。魔理沙、優、妖夢、幽々子、そして新が集まっていた。

妖夢は幽々子の食べ過ぎを防止しており、気が抜けないため、範人は気を使って話しかけるのをやめた。魔理沙たちの方に目を移すと、魔理沙と話をしている新、なんとか酔わないように頑張っている優が

目に入った。

「優は大変ね。」

「ん？ 貴女は誰ですか？」

「あ！ 先輩！」

「あれ？ 先輩？ 範人？」

……おかしいな。目の前にいるのは女の人なんだけどな。」

そう言って優は考え込む。格好はほとんど同じだというのに女体化しているだけで目の前の女性が範人だということに気がつかない。新はクスクス笑いながら、ジエスチャーで「バラしていいか？」と範人に訊いてくる。範人は黙って頷いた。

「この女性が範人さんですよ。」

「は!!? マジで!!?」

優は反応は正しいだろう。魔理沙から宴会が開かれると聞いて宴会に来てみたら、そこには性別が変化した友人がいるという事態が起きたのだ。これで驚かないわけがない。

優は性別が変わった範人の姿をまじまじと見つめる。その視線に気づいた範人は友人を少しからかってみる。

「あら？ 優もこういうった身体がお好みで？」

「ち、違う！ そういうことじゃない！ ただ、どうしても目が勝手に……」

範人はわざわざ白衣の前を大きく開けて、胸を強調するようなポーズをとりながら訊ねる。優は顔を真っ赤にして、目を背けた。

あるものに目がいつてしまうのは仕方がない。男の性さがである。範人自身も（今は女性だが）男であるため、どういったことに反応するかはわかっている。そこを突かせてもらった。

ふと、範人はどこでこんなテクニクを覚えたのかが不思議になった。しばらく記憶の引き出しを開けていると、結局は八雲という苗字に行きついた。「さすがは天下の玉藻前だ。数々の男を相手に股を開いてきただけはある。」と感心してはいけなようなことに感心してしまう。

優が目を背けてまともに話もできないため、つまらなくなった範人

は白衣を元に戻した。それに伴って、優も顔を範人に向けるが、やはり見てしまったものは意識してしまうよう目で視線が胸の辺りにチラチラと向けられる。さすがにこれ以上追求すると嫌われそうだったため、範人は気にしないことにした。

「で、何でこんな宴会を開いたんだ？」

「強力な化け物を退治したからよ。あれを放っておいたら幻想郷壊滅は確定だったわ。」

「何イ!?? 何故それを霧雨魔法店に伝えなかった!?? 店のPRになる良いチャンスだったんだぞ!??」

「依頼人の大妖精が偶々私のところに来たからね。仕方ないわよ。」

それよりもタダで宴会に参加できていることに感謝しなさい。」

「酒は弱いんだけどなあ……」

優はしぶしぶといった様子で引き下がる。入れ替わるように新との会話になる。

「宴会を開いてくれてありがとうございます。」

「お礼なんてしなくてもいいのよ。この宴会は化け物を退治した自分たちの慰労会っていう意味合いもあるからね。私が好きで開いたっていうのもあるしね。」

ところで、成長した魔理沙を見てどう思った？」

「あ、それは……」

範人の言葉に新は顔を赤くしてうつむく。思わずそれを見て「いいめたい」と思ってしまう自分に範人は心の中で喝を入れた。

いつからSに目覚めたかはわからないが、それも性別が変わったせいで彼女は割り切る。もともとMではなかったが、性別がひっくり返ると同時に色々ひっくり返ったらしい。確かに自分から攻撃を受けることもあるが、それは勝つための作戦。範人は断じてMではないと自分に思い聞かせた。

新は顔を赤くしながら、口を開く。

「驚きましたよ。魔理沙が大人になってるんですけどもん。」

でも、やっぱり変わっていませんでしたね。なんかオーラがほとんど同じで可愛いってところもそのまんまで……美しいっていうのも

少し入ってきてました。

「こつちの世界では優さんのお嫁さんになっちゃうんですね。」

「さあ？確かに新の世界の魔理沙よりは大人だけど、優と結婚するとはまだ決まっていけないわよ。人生っていうのは色々なことが起こるからまだわからないわ。」

新も頑張りなさい。」

「うーん……よくわかりませんが、ありがとうございます。なんか、元気が出てきました。」

「どういたしまして♪」

気がつけば、範人は新の頭を撫でていた。いつものように新に詩穂の面影を重ねてしまっていたのだろう。範人は慌てて手を離し、背を向けて立ち去る。その背後からは魔理沙と楽しそうに会話をする新の声が聞こえてきた。範人は「ふふ♪」と笑みをこぼした。

範人が3番目に訪れたのはチルノ、大妖精、パッチの妖精組だ。

チルノが日本酒をガブ飲みしている。さすがに危険と判断した範人がそれを止めに入る。大妖精の協力もあり、チルノから酒瓶を没収することに成功した。まだ酔っていないところを見ると、もう少し放っておいても大丈夫だと思えるかもしれないが、その少しが危険だとわかっていいる範人はそれを許さなかった。妖精は死んでも復活するが、範人からすれば自宅で急性アルコール中毒を起こされて死なれたら困るのだ。

「なんで取り上げるのさー！」

「死なれたら困るし、お酒はゆつくりと飲むこと。OK？」

「OK！」

範人の言葉にチルノは元気良く答え、酒瓶を少々乱暴にひったくった。しかし、チビチビと飲んでいるところを見ると、範人の言葉をしっかりと飲み込んだようだ。大妖精が頭を下げているが、範人は「構わないわ」と軽く返す。「それよりも」と酒を飲まずにジュースを飲んでいるパッチに近づく。

「ジュースばかり飲んでどうしたの？お酒は嫌いかしら？」

「うわっ!?……と、びっくりした。範人さんですか。」

「人を化け物みたいに扱って失礼ね。」

「あ、すみません。でも、生物兵器は化け物ですよね。」

「う!??それは……」

範人に話しかけられて驚くパッチに少し文句を言ってみると、的確なカウンターが飛んできた。範人自身、予想はしていたが、本当に綺麗に返ってきたため、何も言い返せない。というか、最初から何か言い返すつもりもなかった。

「あ、質問でしたね。」

答えはいいえです。お酒は好きなのですが、あまり飲みすぎるとVeronicaが暴走して頭から火が出るんです。だから、慧音さんに飲まないように言われています。」

「あく……それは大変ね。Veronicaでそんなことが起こるなんて知らなかったわ。そもそも、上手く感染した個体自体あまりないし……まあ、気をつけてね。」

「はい。」

「僕も質問してですか？」

「いいわよ。答えられる範囲なら、答えるわ。」

「では、生物兵器になって後悔していますか？」

パッチの質問は範人にとって衝撃的なものだった。彼女は今までに生物兵器になったことをあまり深くは考えていなかったからだ。

自分の力で誰かを傷つけてもそれは自分が悪いし、原因は自分の弱さにある。食事は普通の人間と同じものが食べられるし、容姿も通常の形態ならほとんど同じ。範人はあまり生物兵器になったことにつ

いてはあまり考えていなかった。

しばらく考えた後に範人が口を開く。

「正直、後悔したこともあったわ。生物兵器つてことを知っている人には避けられるし、自分自身をネガティブに評価する材料にもなったし……歴史に残らない恐ろしい事件も起こしたし。」

でも、今は後悔していないわ。生物兵器にならなかったら私は死んでいたし、たとえ生きていたとしても五体満足ではなかった。だから、この生物兵器の身体で後悔するのはやめにしたわ。

言い方はおかしいかもしれないけど、今は安全な兵器になろうとしているの。傷つけるだけでは駄目だから、守るために傷つけるようにしているわ。

結論を言うと、後悔したことはあったけど、もう後悔していないってことね。

言ったら、何か今までに増してスッキリしたわ。完全には吹っ切れてなかったみたい。」

「そうですか。良かったです。」

「え？」

範人は自分の意見の後に出了たパッチの言葉に驚いた。「良かった」とはどういうことだろうか？何が良かったのだろうか？

「範人さんが自分の身体を否定していなくて良かったです。」

誰かが悲しむことも僕には辛いのですが、その悲しみを和らげることができないとなるともっと辛いんです。僕自身のためということもありますが、誰かのためになりたいんです。役に立てたよう良かったです。」

「貴方は優しすぎて生物兵器に向いてないわね。」

「最高の褒め言葉です。」

範人の言葉にパッチはにっこりと笑った。

宴会は昼の12時に始まり、終わったのは夕方5時だった。今更ながら「昼間から酒を飲むなんて」と思った範人だったが、地底の妖怪たちのことを思い出すとなんとも言えなかったため、酒について考えることは放棄した。

今は訪問者たちが帰るということで範人が見送りに来ている。

「今日はありがとうございました。」

「いいのよ。むしろお礼を言いたいののはこっちだわ。あなたたちがいなかったら、あの粘菌は倒せなかったもの。こちらこそ、ありがとう。」

「じゃあな。」

「あのことは忘れてくれたかしら？」

「何のことだ？」

範人の問いにエレイは？マークを浮かべる。その様子がおかしくて範人は笑った。範人に心を読む能力はないが「忘れてくれたようであつた」と一安心する。実際のところはエレイの記憶の引き出しの奥に少しでも綿埃のように残っていたのだが……

「次に会ったときは勝負してください。」

「もちろんOKよ。生物兵器同士、戦いを楽しませよう。」

「先輩、また会いましょう。」

「ええ、きつとね。」

別れの言葉を言いながら、紫のスキマに入っていく訪問者たちを範人は笑顔で見送った。

範人に別れを惜しむ感情はなかった。「また会える」そう思っていたからだ。

最後に1人がスキマに入った瞬間、スキマが閉じた。そこには何事

もなかったかのようにいつも通りの研究所の敷地が広がっていた。

第七十話

探訪

彼は世界の様々な地域を渡り歩いた。始めはヨーロッパ、次はアジア、その次は北アメリカといった感じだ。アフリカと南アメリカは関係ないため、この際省いた。

自身の地位は親友に譲り、自身の家も捨てて旅をしている。それらを捨てても、探さなければならぬものが彼にはあった。ある集団から逃した妻と義妹だ。

思い出すと恐ろしい。彼らは周りの者たちに何の迷惑もかけずに同意の上で生活していたというのに、存在しているというだけでその集団に殺されかけたのだ。しかし、結局は彼がその集団を返り討ちにして、皆殺ししてしまったのだが……気がつけば、あれから450年以上も経ってしまった。

彼が今いる国はアメリカ合衆国。季節は夏。容赦ない日差しが照りつける中を彼は汗を一粒も垂らさずに足早に歩いていく。季節に似合わない服装：彼の着ている黒いロングコートに人々の視線が集まるが、彼は全く気にしない。人々もまた、それが彼の趣味なのだろう、とあまり気にせずに元の行動に戻った。人々は気づかなかつた、彼の体が日向を歩いていくには暗いことに。

そのとき、彼に誰かがぶつかってきた。彼の身長は183cmだが、ぶつかってきた方の身長は190cm程。かなりの高身長だった。

「おお、痛え。これは骨が折れたかもしれないねーなあ？慰謝料払えよ。」
ぶつかってきた方は変な言いがかりをつけて彼に迫る。周りの注目が一気に集まった。ぶつかってきた方はこの街ではかなり名の通った不良だったのだ。しかし、彼はそんな不良を気にとめることなく歩き続ける。周りの人々はそれを見て見ぬふりをしていた。

「デメエ……何無視してんだあ？ぶつかつてよお。」
「ぶつかってきたのはそつちだろう？目障りだ、失せろ。周りの人々にも迷惑だ。」

「デメエ……ちよつとこつち来いや。」

彼はやれやれとため息を吐いた。ついてこられると面倒なため、その不良についていく。ザコの強がりにつき合うのは面倒だ。彼はそう考えていた。

連れて行かれた先は薄暗い路地裏。彼の背後を不良の仲間と思われる者たちが塞ぎ、逃げ場を無くしていた。しかし、彼にとつてそんな物は脆い肉の壁だった。

「デメエさつきから生意気なんだよ！まずはこの俺に土下座しろよ、土・下・座！」

「弱い犬程よく吠えるとはよく言ったものだな。」

彼は呆れて呟く。彼の言葉に不良はプツンしてしまった。

「いい度胸してんじやねーか。ゴラァー！」

不良は拳を振り上げ、彼の頬を殴り抜こうとした。拳は彼の鼻に当たる。彼は鼻血を噴き出しながら吹っ飛ば

はずだった。彼は平然とその場に立っている。拳はしっかりと鼻を捉えていた。しかし、彼の血の一滴も流さない。

不良の拳に伝わったのは普通の皮膚の感触だった。だが、その皮膚はある一定以上は凹まず、不良の拳を受け止めていた。

「威嚇するばかりで弱いな。」

「ク……このバケモンがああぁー！」

「さて、あんたが殴ったんだ。俺も殴らせてもらうよ。」

叫びながら殴りかかってくる不良。しかし、彼に当たる寸前で不良の動きが止まった。不良は指の一本どころか、口も睨さえも動かすことができない。突然の出来事に驚いた他の不良たちはパニックに陥り、逃げ出そうとした。しかし、彼らもまた足が動かない。影の中では動けない。

「瞬きせずにしつかりと見ておきな。これが本当のパンチだ。」

瞬間、彼は不良の顔面に右ストレートを打ち込んだ。不良は鼻血を噴き出しながら大きく吹っ飛んで、路地裏から飛び出し、その先にあった店のショーウィンドウに突っ込んだ。その鼻の骨は折れ、顔は誰かわからない程になっていた。

人々は驚いた。街でも腕つぶしが強いと知れ渡っている不良がボコボコにされて路地裏から吹っ飛んできたのである。

「全く……迷惑なやつだったよ。」

そう呟きながら、彼は路地裏から出てきた。そして、壊れたショーウィンドウの店に行き、店主を呼んだ。店主はショーウィンドウの前で伸びている不良を見て唾然としていた。

「すみません。あの不良が喧嘩をふっかけてきたんで返り討ちしたら、少し力を入れ過ぎちゃいました。これをショーウィンドウの修理代に当ててください。足りるとは思いますが、もし足りなかったら、その分はそこで倒れているバカに請求してください。」

そう言つて、彼は古い金貨を3枚取り出し、店主に渡した。歴史に詳しい店主はまた驚いてしまう。その金貨は500年近く前の物で現在の値段だと1枚1万ドルは下らない物だったからだ。

「こんな物タダではもらえません。何か、お返しをさせてください。」
「では、訊きたいことがあるのですが、よろしいですか？」
「どうぞ。」

「ゴートレック生物研究所がどこにあるか教えてもらえますか？」

彼がお返しに選んだものは簡単な質問だった。その研究所は1年程前にあることで有名になっていたため、店主は場所を知っている。ここからかなり近い場所にあるため、店主は簡単に説明した。

「ありがとうございます。では、私はこれで。」

「本当にいいのですか？あの場所に研究所はもうないんですよ。宇宙人が研究所を持ち去ったとかの噂が流れていますし……」

「いいんですよ。それに今のはなかなか良い情報でした。」

？マークを浮かべている店主に背中を向け、彼は研究所があった場所を目指した。宇宙人に持ち去られたという説があるということが

彼の中で幻想郷という言葉につながっていた。

研究所があつた場所に辿り着いた彼は早速ある痕跡を探し始める。

研究所という巨大なものを幻想郷に移したというのならば、移しただけの面積と同じ面積の土地をこちらに移してきたはずだ。この土地にないはずの木があるかもしれない。また、もしかすれば境界操作のミスで切れてしまった木があるかもしれない。彼は幻想郷へ行く方法を探すにあたって、これらの痕跡を探していた。

「あつた……」

今、彼の目の前にあるものは縦に割かれた木である。

綺麗に真つ二つに割られており、さらに存在しなければならぬはずのもう半分がない。切り口も鋸やチェーンソーで切つたようなガタガタしたものではなく、まるで日本刀で切つたような滑らかなものだった。

なんらかの能力が働いてできたものであることが彼の中で確定した。しかし……

「入り口は開いてないみたいだな。」

研究所のあつた土地を見渡して彼が呟く。ここで境界が開く、または開いたことがあるのは間違いないのだが、現在はそれが開いていなかった。

「スタートに戻ってしまったのではないのか?」と思い、落ち込む。ふと、そんな彼の脳内にここへ来るときに見かけた居酒屋が浮かぶ。そこは昼間から営業していたような気がする。

(仕方ない。境界が開くまで暇を潰すか。昼間から飲むのも悪くな

い。)

彼は居酒屋で時間を潰すことにし、居酒屋に向かった。

彼は居酒屋の扉を開ける。扉が開くと同時に扉に着いた鈴がカラコンロンという音色を響かせる。落ち着いた雰囲気店内に客は彼以外おらず、カウンターの向こうには店主と思われる男性がいた。

彼は店主と思われる男性の丁度目の前にあるカウンター席に座る。「適当な赤ワインを一杯。」

迷うことなく赤ワインを注文する。男性は赤ワインの瓶とピカピカのグラスを手に撮ると、店の奥へと消えていった。彼はその行動を少し不審に思ったが「隠し味でも入れるのだろう」と勝手に想像し、男性の帰りを待った。「そもそも隠し味などあるのだろうか？」という疑問が浮かぶが、触れないようにしておこう。

1分程待っていると、男性が戻ってきた。彼の前に赤ワインの入ったグラスが置かれる。血のように真っ赤なワインだ。

彼はグラスを手にとると、赤ワインを少しだけ口に含み、味わってから飲み込んだ。喉を通り抜ける渋味と鼻を通る葡萄の香りに彼は感動する。だが、感動は終わらなかつた。

彼の口の中には甘美な香りと鉄のような甘味が残っていた。身体が勝手にその香りと味に反応して、美味と感じてしまう。そう、まるで血のようなその味に……

彼は赤ワインを5分近くかけて飲み干した。

「ありがとう。今の赤ワイン、美味かったよ。」

「そうかい。ありがとうな、兄ちゃん。輸血パックを貰っておいて良かったぜ。」

彼は男性の言葉に眉をひそめる。男性が聞き捨てならない言葉を

言ったような気がした。

「……今、なんて？」

「輸血パックを貰っておいで良かったぜ、ってことだよ。あんた…吸血鬼だろ？」

彼は驚いた。目の前の男性がとんでもないことを言ったのだ。彼は最大限の警戒をしつつ、なるべく平静を装って男性に質問する。平静を装いつつも、その額には汗が浮かび、拳を握り締めていた。

「何故、そう思う？」

「まあ、そんなに身構えんなって。別に人間どもに突き出したりなんてしないからよ。」

俺の知り合いには人間じゃないやつらもそこそこいてな。せいつらと一緒に居るうちに人間とせいつらの違いに雰囲気だけで気づけるようになったってことだ。」

「……ッ、そんなに言われたら本当のことを言うしかないじゃないか。」

そうだよ。確かに俺は吸血鬼だよ。」

男性は怖気づくこともなく、普通に話した。最初は不安だった彼の心も説明を聞いてすぐにスッキリとした。同時に人間ではないやつという言葉に興味が湧いた。いや、興味が湧いたと言うよりは興味が確信に変わったと言った方が良さだろう。彼の脳内にはスキマという言葉が浮かんでいた。

彼の正体を聞いた男性は「ガッハッハ！」と笑い飛ばす。しばらく笑い続けた後に口を開いた。

「いや、悪いな、笑っちゃまって。あんたの目的がわかっちゃまったよ。」

幻想郷に行きたいんだろ？」

「ああ、その通りだ。向こうには俺のことを待っていてくれるヒトがいる。」

「ほほう、それは嫁さんかな？」

男性の言葉に彼の顔が真っ赤になる。それを見て、男性は再び大きく笑った。

「本当によく笑う人」それが彼から見た男性の印象になるのに時間はかからなかった。男性の笑い声を聞いていると自然と彼も一緒に

笑ってしまう。

「そんなあんたに朗報だ。今日の夕方に向こうの住人になった研究所の主ハントが研究所にやって来る。なんでも、吸血鬼の娘が婿を貰うらしくてな。そのお婿さんを迎えに来るらしい。」

「それは本当か？」

「ああ、本当だとも。だから、ハントが来るまではここで待っているといい。来たら教えてやるからよ。」

「そう言や、あんたはハントにそっくりだな。ご先祖か？」

「男性の質問に彼は少し考え込む。」

ハントという者が研究所の主と言うのなら、その苗字はゴートレットクで間違いないだろう。彼自身は子孫を残していないため、彼が直系の先祖ではないことは確かだ。そう考えると、それは彼の兄の子孫に違いない。

彼は言い方がよくわからなかったため、あいまいな言い方をする。

「先祖……って言えばいいのかな？そいつはたぶん、俺の兄の直系の子孫だ。」

「なるほど、そう言うことだったか。どうりで似ているわけだな。」

ところで、名前教えてくれないか？あんたって言い続けるのはなんかちよつと……な。」

「まずはそつちから名乗るべきじゃないのか？」

「おつと……これは失礼。フランクリン・ショットだ。よろしく。」

「ジェイド・スカーレットだ。」

その後、ジェイドとショットは過去に起こった歴史的な出来事について話し合い、時間を潰した。

第七十一話

W再会

範人の女体化が解けてから1カ月。彼は元に戻った喜びを噛み締めて生活していた。

女体化している間の一週間は彼にとって地獄だった。昼は人里に行けば男に求婚され、あるときは罪と書かれた袋を頭に被った変態集団に追いかけられた。夜は夜で、妖夢に女として犯され、搾られるという地獄を味わい続けさせられた。フランに会えば、胸を吸われる始末。彼は泣く泣く毎日を過ごすしかなかった。

しかし、今は違う。性別が元に戻ったことでそれが起こることはなくなつた。妖夢の誘惑は相変わらずだったが……

現在、彼はミッシヨンの帰りだ。隣にはフランの姿がある。実は今日の仕事はまだ終わりではない。3日前にジェットから連絡があった。「もうこの世界に未練はない、向こうの世界に行きたい」と。彼にはジェットを幻想郷につれて行くという仕事が残っていた。

「お客さん、そろそろ到着するぜ。」

「ああ、ありがとよ。リック。」

「へへへ、どうだ？俺もドライビングテクニク上げただろ？」

「ああ、最高の（乗り心地の悪さを誇る）ドライブだったよ。」

そんな会話の中、リックの運転する車は研究所跡地に乗り入れる。派手なドリフトをして車が止まり、範人とフランは飛び降りるように降車した。範人が報酬の入ったアタッシュケースをトランクから取り出すと同時にリックは車を発進させ、派手なドライビングテクニクを見せつけながら去っていった。

リックの車が視界から完全に消えたところで今度はフランクリンに連絡する。範人は彼にジェットが早く来た場合のためとして監視を頼んでいたのだ。

『もしもし……』

「もしもし、おじさん？ハントだけどき、ジェットは来なかった？」

『いや、まだ来てないが……』

「それだけわかればいいよ、ありがとう。バイイ。」

『おう、じゃあな！』

範人は通話を終了する。どうやら、ジェットはまだ来ていないらしい。間に合ったということでは彼がホッとしていると、研究所跡地に一台のタクシーが乗り入れてきた。タクシーは範人たちの目の前で止まり、1人の少年が降りてくる。この少年こそ、範人たちが待っていたジェットである。

「ありがとうございます。」

ジェットはタクシーの運転手にお礼を言う。タクシーの運転手も軽く頭を下げてから、車を発進させ、公道の方へと去っていった。

早速といった感じでフランがジェットに飛びつき、抱きしめる。普通の人間なら痛い程の力だったが、彼は痛がる素振りを見せず、ただ顔を赤くした。範人は2人の様子を見て「微笑ましい」と思いながら、ニヤニヤしている。

「ほどほどにしておけよ、フラン。どうせ、向こうに行っても大好きとか言いながら抱きしめるんだろ？」

「はい♪」

「よしよし。それじゃ、向こうに戻るかな。」

範人は封力石を何も無い空間にかざす。瞬間、そこにスキマが出現した。ジェットはギョツとした表情を浮かべるが、彼の隣には吸血鬼であるフランがいる。「ありえないことも起こりうるのだ」と、自分を納得させた。

ふと「ありえないこと」という言葉からジェットはあることを思い出した。

「範人さん、これが何かわかりますか？」

そう言っ、ジェットは上着の裾を少し上げ、腹部を露出させる。範人がそこを見ると、ジェットの腹部…右脇腹に黒い魔法陣のようなものがあつた。しかし、範人にはそれが魔法関連であること以外に何かわからない。

「わからないな。どうしたんだ？」

「今日の朝起きたらあつたんだ。お父さんに訊いたら、向こうに行けばわかる、って言われたんだけど…範人さんならわかると思って

……」

「いくら向こうの住人であつてもわからないこれくらいあるさ。それに、わからないことがあつた方が刺激になつて楽しいだろ？向こうに着いてからのお楽しみにとつておきな。」

「わかりました。」

「早く行こうよ♪」

フランが範人の白衣の裾を引っ張る。引っ張られている繊維が悲鳴をあげており、範人は「はいはい」と返事をする。

3人が幻想郷につながるスキマを潜ろうとしたとき、彼らの背後に何者かが舞い降りた。

「ちよつと待つてくれよ。」

「ん？誰だ？」

範人が振り向くと、そこにいたのは自身と同じくらいの身長、そつくりな顔をした男だった。異なるのは髪型と瞳の色くらいである。しかし、その背中には水掻きのついた人間の手のような羽があり、人間ではないことを示していた。

範人とジェットはその男に心当たりがなかったが、フランには一瞬で誰かがわかった。

「ジェイドだ♪」

「久しぶりだな、フラン。実に476年以上ぶりの再会になるな。」

フランはジェイドに飛びつき、ジェイドはそれを優しく受け止める。フランを受け止めるジェイドの姿がフランに飛びつかれたときの範人に重なつて見えるのは気のせいではないだろう。ジェットはそれを見て嫉妬したのか範人の白衣を握りしめる。

「こういうのはレミリアにやってもらいたかつたんだけどな……」

「お姉様ならみんなの前ではしないだろうけど、2人きりのときにたくさんすると思うよ。それとプラスでその後の色々と……」

「自分で思うんだけど、その色々がわかるつて怖い。」

フランの行動にジェイドは苦笑いする。

彼としては再会一人目の飛びつきは妻であるレミリアがよかつたらしい。それも、再会の後に多々あるとはわかつていたのだが、やは

り初めてが重要ということだろう。

ジェイドはフランを地面に下ろすと、範人の方を見た。2人の目が合う。

「君が今のゴートレック家当主かな？なかなか良い眼をしているじゃないか。」

「確かに現在の当主は俺だ。でも、苗字は変更したし、双子の兄貴もいるからよくわからない。ただ単に家を継いだだけだ。」

「まあ、いいや。それよりも、俺も幻想郷に連れて行ってくれ。レミリアが待っているんだ。」

「もちろんOKだ。スキマの中へどうぞ。」

範人たち4人はスキマに入った。

スキマを抜けると、そこはお決まりとなった研究所。

このまま、紅魔館に向かうのも範人にとってはありだったが、せつかくなので家が上がってもらうことにした。

「ほほう、現在の家はこういうものなのか。」

「少し待っていてくれ。紅茶を入れてくる。」

客人たちをリビングに招き入れ、範人はキッチンに向かう。ジェットは自身の身体に突然現れた魔法陣が気になり、右脇腹をしきりに気にしていた。その様子に気づいたジェイドが話しかける。

「どうした？」

「今日の朝、起きたら身体に魔法陣が現れていたんです。」

「なるほどな。見せてくれるかな？」

ジエットは無言で上着の裾を上げる。

ジエイドは多少だが、魔術に関しての知識があるため、魔に関するものに興味があったのだ。

彼がその魔法陣を見た瞬間、表情が一瞬だけ変わった。しかし、誰もその表情の変化に気づかなかつた。

「少年、君の名前は何と言うんだい？」

「ジエット・アルカードです。」

「なるほどな。(そういうことだったのか……) これは何かの封印だ。もしかしたら、すごいものかもしれないぞ。」

ジエイドの言葉にジエットは目を輝かせる。自分の中に何か特別なものがあるかもしれないということは、彼くらいの年齢の子供からすれば素晴らしいことだった。

そこへ範人が紅茶を持ってきた。ジエイドは一杯だけ飲み、ホッと息を吐く。

何かとは言ったものの彼は術式の全てを読み解いていた。しかし、封印されているものが何かは教えなかつた。衝撃的な事実にはジエットの思考が耐えうるかが心配だったためだ。「我、吸血鬼の記憶を封印す」術式にはそう書かれていた。

紅茶を飲み干したフランが口を開く。

「そうだ！せつかくジエイドがこつちに来たんだから、お姉様を驚かせてみようよ。」

「ほう……どうやってだ？」

「それはねく……」

「……てことだよ。」

「なるほどな。面白いかもしれない。」

ジエイドが幻想郷に来た翌日。幻想郷に明るい朝は訪れなかった。

第七十二話

Day break shadow

w

幻想郷に訪れた暗い朝。それは昼になっても変わらず、辛うじて昼と夜の区別がつくという不気味な1日になった。

人里では大騒ぎが起き、神の怒りだの天が崩れただけの様々な憶測が飛び交った。しかし、不思議なことに田畑や森の一部では日光が通常通りに差し込んでいる。そのわずかに開いた闇から闇の断面を見た人々は「影の衣が世界を覆ったようだった」と口々に話したという。

レミリアは喜んでいた。この世界にこんなに素晴らしいことがあるのだろうか？と、思えるほどに。しかし、彼女にとって最高のことは昼間に外を歩くことではない。今の彼女にとってはジェイドの存在が最高のものだ。しかし、今彼女の側に彼はいない。

彼女は久々に素の状態で昼間に外を歩くことができた。範人の作った薬も必要なく、暗くなつた外を歩いていた。昼間に外を歩くことが夢の一つだったというのに彼女はイマイチ満たされなかった。それも夫の存在故だろう。

「いつになったら来るのよ、バカ……」

レミリアはジェイドのことを考えながら呟く。それを窓から見ていたフランは口を手で押さええて、クスクスと笑っていた。

何万冊もの魔道書があるこの図書館で1人の少年と1人の少女がある封印を解こうとしていた。

「パチュリーさん、何のことですか？僕が…吸血鬼って…どういふことですか？」

「まあ、落ち着いて聞きなさい。貴方が吸血鬼でも、ここに貴方を傷つける者はいないわ。」

貴方はもともと吸血鬼だったのよ。その魔法陣は封印のためのものであり、同時に封印を解くためのものでもあるわ。おそらく、500年近く前に生まれたばかりの貴方にかけてられたものよ。」

「え？でも、そんな記憶…僕にはないし…。」

「当たり前よ。人間が300年以上も普通に生きていたらおかしいでしょう？この封印は大体80年毎にかけ直されているわ。最後にかけてられたのは10年前ね。」

落ち着けと言われてもそうそう落ち着けるわけがない。ジエットは、魔法陣について質問したら、突然に吸血鬼だと言われたのだ。いくら吸血鬼が実在しているとはいえ、こんな話が信じられるだろうか？

「それで、どうしたい？記憶を取り戻して心も吸血鬼に戻るか、それとも過去を知らずに半永久的な寿命を持つ人間のまま生きるのか？

貴方の人生だから貴方が決めるべきよ。」

「僕は…。」

ジエットは悩んでいた。彼の恋人であるフランは吸血鬼。寿命以外の力が封じられている人間の身体のままでは彼女と釣り合うのだろうか？と。

ジエットはフランのことを考えてみる。人間の身体は弱い。自分が人間のままでは彼女は強く抱き締めることも、本気で気持ちをつづけ合うこともできない。それが自分だったらどうだろうか？きつと辛いだろう。

ジエットは決意を固めた。フランを悲しませるわけにはいかない。

「決めました。封印を解いてください。」

「人間として生きることができないわよ。それでもいいの？」

「いいんです。僕はフランの力を受け止められるようにならないといけない。それに、僕には過去を知る権利があります。僕が何者だったのかを知らなければいけません。」

「わかったわ。」

「これを……くらいなさい！」

パチュリーはジェットの決意を聞き、ニヤリと笑う。彼女は自身の右手人差し指に魔力を込め、ジェットの魔法陣の中心に突き刺した。直後、魔法陣は崩れ、溶けるように消えた。魔法陣のあった位置から光輝く魔力が溢れ、ジェットを包み込む。

数秒後、魔力が消えたとき、そこには吸血鬼の少年が立っていた。その背中には吸血鬼らしからぬ白銀に輝く羽が生えており、その羽はコウモリと言うよりかはドラゴンに近い形状をしている。

吸血鬼に戻った彼は自身の姿を眺めた後、吹っ切れたような表情になった。

「ありがとうございます、パチュリーさん。全て思い出しました。」

「どういたしまして。」

でも、吸血鬼に敬語を使われるなんて慣れないわね。普通にタメ口でもいいのよ?」

「いえ、僕はこの方が慣れてるんで……それに貴女のごことは尊敬していますから。封印を解いてくれた恩人です。」

「なんか礼儀正しすぎて、逆に気味が悪いわ。」

ジェットの脳内に激流のように記憶が流れ込む。

彼は全てを思い出し、パチュリーに礼を言う。しかし、レミリアのこともあって、吸血鬼に敬語を使われることに慣れていない彼女は少し気味が悪かった。とはいえ、話し方を直すことなく慣れている言いかたを貫くという事は彼もまたプライドの高い吸血鬼なのだろう。

「僕の心はまだピュアです。悪いことなんて考えてませんよ。」

「自分でよく言うわね。」

「だって、ピュアですから。」

パチュリーはジェットの言葉を一種のジョークだと思い、笑っていた。当の本人はジョークでもなんでもなく、本気で言ったことだった。

のだが……

その日の夜、紅魔館。

吸血鬼は本来夜行性である。しかし、人間に合わせて昼間に活動するようになったレミリアたちは夜に寝る。

レミリアはぐつすりと眠っていた。今起きているのは地下室にいる妹夫婦とメイド長の咲夜だけだ。門番の美鈴は寝ていても気づくということ、毎度のごとく眠っていた。

ぐつすりと眠っていた美鈴だったが、強大な気を感じて目を覚ました。紅魔館の主にも似たその気を感じた部分に踵を落とす。ドンという大きな音が地面に響く。しかし、彼女の感覚神経に伝わった感触は地面だった。不思議に思った彼女は思わず呟く。

「あれ？何もいませんね。確かに気を感じたんですが……」

彼女は空を見上げる。昼間の現象がまだ続いているのか、星はおろか月も見えない。月明かりも届かないその世界はまさに闇と影が支配する世界だった。

来る者を拒む紅魔館のロビーに館の者ではない男が1人。その顔は仮面に隠されており、誰とは判別できない。金色に輝く髪だけが彼を判別する材料だった。

男は滑るようにロビーを移動する。目指す場所は地下室。かつて、狂気の吸血鬼が閉じ込められていた部屋。

「危ナイトコロダツタ。アノ攻撃ヲ受けテイタラ、骨ガ一本クライ逝ツテタダロウナ。咄嗟ニ避ケテ良カツタ。」

先ほど避けた美鈴の力に男は思わず眩く。そのマスクの牙の生えた口から発された声は抑揚のない機械音声だった。ロビーに悲しい機械音声が響く。

その音を聞きつけてやって来たのか、咲夜が一瞬で現れる。男は隠れるが、咲夜の時間停止に一瞬だけ反応が遅れた。その時間、たったの1マイクロ秒。しかし、咲夜はその姿を目で捉えていた。

「逃がしませんよ。」

咲夜は物影に向かってナイフを投げる。すると、床の影から手が伸び、ナイフを受け止めた。物影から男が姿を現わす。マスクのせいで表情は見えないが、その口からは時折抑揚のない笑い声が漏れるため、咲夜は気味が悪かった。

その男の目的が何かはわからないが、取り敢えず館の主とその妹、義弟を守るために、咲夜は時を止めてナイフを投げる。しかし、そのナイフは地面から飛び出してきた影の壁によって弾かれてしまった。

「ククク……ナルホド、時間ニ干渉スルタイプノ能力カ。ナカナカ強イ能力ダナ。」

「あら、判断が速いですね。」

「見エテイルカラナ、時ノ止マツタ世界デナイフヲ投ゲルアンタノ姿ガ。」

突如として、全方位から発射される矢の弾幕。咲夜は時を止めて安

全地帯まで逃げ、男が立っていた場所を見る。

いない。時を止めているはずなのに立っていた場所はおろか、ロビーの中を見回しても見当たらない。

咲夜は全力で探すが、男は全く見つからない。そして、時止めの時間が長くなるとインターバルが長くなって困るため、時止めを解除した。

ドッ！

「ウツ？？」

突然、首の後ろに走る鋭い衝撃。咲夜が薄れゆく意識の中で見たものは自身の後ろに立つ男の姿だった。

彼が来ない。今夜来るように言ったはずなのに彼が来ない。

フランとジェットはある男を待っていた。彼が今回の作戦の要なのだ。彼が来なければ、作戦自体が失敗してしまう。

「来ないね。」

「うん。」

「そうだ！良い時間潰しを思いついたよ。」

「へえ、どんなこと？」

フランが何か思いついたようだ。ジェットはそれについて聞こうと訊ねる。

しかし、返ってきた答えは言葉ではなくデーパーキス。ジェットが驚いている間にフランは舌を侵入させ、彼の口内を舐め回す。

突然のことにジェットは一瞬何が起きたかわからなかった。そして、何が起きたのかわかっても酸欠で力が出ず、抵抗できない。口内を這い回る舌の感触と酸欠で頭の中が真っ白になる。

数十秒後、フランが唇を離れた。2人の口に透明な糸の橋が架か

る。

「ね、良い時間潰しになりそうでしょ？」

「なんだろう……フランの考えていることと僕の考えていることは同じだと思うんだけど、それがやばいことなんだよね。」

「多分だけど、それは時間潰しでやることじゃないよ。」

「でも、時間はかなり潰せるよ。」

それに、もう既に身体が熱くなつて準備できちゃっているんだけど……」

見た目が小学校高学年くらいとはいえ、2人とも500年近く生きている。ジェットは昨日思い出したばかりだが、それでもこれから何をやるかくらいわかる。

ジェットの予想通り、フランは服を脱ぎ始めた。彼は思わず目を閉じる。恥ずかしい、ただそれだけの理由だった。

再びジェットが目を開けると、フランは下着姿で彼の目の前に座っていた。

ジェットがロリコンというわけではないが、フランは同年代の恋人。彼女の幼い肢体に彼の理性は揺れ動いていた。

「ねえ、フラン。」

「なーに？」

「理性をなんとか保っているんだけど……我慢するのやめていいかな？」

「もう崩れそうで……」

「もちろんOKだよ。おいで♪」

その瞬間にジェットの理性が崩れる

はずがなかった。

理性を保つ必要がないという解放感から彼は理性を支配した。

ジェットもフランに合わせて服を脱ぐ。理性を支配しているとは言え、彼の本心はフランとのつながりを求めていた。それに従ったのだ。

フランはまだ下着を脱いでいなかったため、ジェットも下着は脱がない。その状態で互いに抱きしめ合う。かつてのような骨の軋む音はしない。

抱き合ったまま、唇を重ねる。互いに互いの舌を絡ませ合い、味わい合う。クチャクチャといういやらしい音が2人の口から発せられて、2人だけの部屋に響く。唇を離すと透明な糸が引き、すぐに切れた。2人は混ざり合ってどちらのものともわからなくなった唾液を飲み込んだ。

フランの肌は先ほどよりも紅潮しており、息も荒くなっていた。変化は少しだけだが、それはジェットも同じであった。

「ねえ、ジェット。見てよ、これ。こんなにグシヨグシヨだよ。」

「僕も…こんなに元気になっちゃった。」

フランは自身の濡れた下着を指差しながらに言う。ジェットも自身のパンツを指差しながらに言う。

2人は互いに互いを求めていた。2人にとって、下着という薄い布でさえ、もう既に邪魔なものだった。

2人は下着を脱ぎ捨て、互いに抱きしめ合った。滑らかにしつとりと張り付く肌の感触が心地よい。しかし、2人にはもうそれだけでは足りなかった。

「ジェット、お願い……来て！」

「言われなくなっちゃって行くよ。」

ジェットがフランを押し倒す。ベッドが軋み、ギイイと音を鳴らした。ジェットはフランに身体を重ねようとする。

「オーウー！オ前ラア、待タセタナ！」

突然、扉が開き、仮面を被った男が2人の部屋に入ってきた。

2人の表情が一瞬固まる。それは男も同じで、表情こそ見えないものの仮面から見える目が驚きで見開かれていることはハッキリとわかった。

男は咄嗟に目を伏せる。間違いなく、これが普通の反応だろう。知

り合いの家に招かれて、扉を開けたら知り合い2人が絶賛ハッスルNOW!という状況だったのだ。

男は目を伏せたまま言う。

「服ヲ着ロ。スグニ行クゾ。」

「ごめんね。続きは今度にお預けみたい。」

「えー、今やりたいのにー……」

「向コウデ部屋クライ貸シテクレルダロウカラ、ヤルノナラソツチデヤレ。早くシロ。」

フランとジェットは不満のようだったが、しぶしぶと服を着る。男は少し呆れた様子で2人を視界に入れないようにしていた。

フランとジェットが着替えを終えたため、3人は紅魔館を出発した。

「貴方は恐ろしい人ですね。まさか、やっているときに来るなんて……」

「コツチカラスレバ、誰カガ来ルとワカツテイル上デヤルオ前達の方が恐ロシイヨ。」

夜の闇の中に抑揚のない機械音声が響いた。

第七十三話

お嬢様はお怒りのご様子です

紅魔館にある自室、咲夜はそこで目を覚ました。しかし、彼女は違和感を覚えていた。昨晚、この部屋まで来たときの記憶がないのだ。それどころか、昨晚自体の記憶が途中から全くない。思い出そうとしてみても視界に影の幕が張ったように真っ暗になってしまう。

咲夜はなぜか力の入りにくい身体を無理矢理起こして、新しいメイド服に着替え始める。メイド服を脱いだところで、ドスドスと誰かが走ってくる音が聞こえた。咲夜の部屋のドアがノックされる。

「デューレスです。咲夜さん、居ますか？」

デューレスという名前を聞いた瞬間に咲夜はパニックになる。彼女は何を思ったのかクローゼットの中へ隠れた。そして、隠れた後に後悔した。普通にドア越しに話せばよかったのではないかと。

「咲夜さん？……寝てるのかな？まあ、いいや。」

起きているのならですが、お嬢様が呼んでいました。妹様と義弟様が誘拐されたらしいです。図書館でお待ちしているそうです。

門番の仕事があるので、私はこれで失礼します。」

足音が遠ざかっていく。足音が聞こえなくなると同時に咲夜はクローゼットから出た。

デューレスのことを考えるとドキドキする。何故だろう？彼女は自身の胸に手を当ててそう思った。次に頬に触れてみる。頬は自分でも驚くほどに熱くなっていた。

彼女はそれらを体調が悪いせいだと決めつけ、急いで着替えると、主のもとへ向かった。

『親愛なる紅魔館の主レミリアへ

どうも、久しぶり……でも言っておこうか。

唐突ながら、貴女の愛する妹と義弟を誘拐させていただいた。安心したまえ、多少息はかかったかもしれないが、2人には傷一つどころか、触れてさえいない。

今は旅行という名の優しい青年に寝床を提供してもらっている。そして、2人も今はそこにいる。2人に何かするとうわけではないが、取り返したいと言うのなら来るといい。私も逃げずに待っている。ただし、1人で来ることを忘れるな。お話は2人だけの方が都合が良い。

p.s. 私は貴女を知っており、貴女も私を知っている。』

手紙の内容に咲夜は驚き、レミリアは怒りに目を血走らせ、身を震わせていた。パチュリーはいつも通り冷静に紅茶を飲んでいる。

「息がかかっただど？ フランは自身の息で怪我をするほどデリケートなのよ！」

「間違つてはないかもしれないけど、少なくともデリケートではないわね。狂気に囚われて周りを破壊していたんだもの。」

レミリアの発言をパチュリーはジョークと捉える。

確かにフランならば、自身の吐息で腕一本吹き飛ばしてしまうかもしれないが、さすがにそんな娘をデリケートとは言わないだろう。

咲夜はそんなパチュリーの冷静さに驚きつつ、レミリアに話しかける。

「お嬢様、どういたしましたでしょうか？ 私も同行する必要はございませんか？」

「必要ないわ。私1人で行く。喧嘩売ってきた向こうが条件を提示してきたんだから、こちらも喧嘩を買って条件に乗ってやるわ。」

「わかりました。では、私は留守番ということ……」

「ええ、それでいいわ。」

「じゃあ、行ってくるわね。」

いつになく戦う気満々のレミリアに咲夜は少し恐怖する。いくら愛する主と言っても、吸血鬼の本性をさらけ出して目を紅く光らせていたのなら、誰でも恐怖するだろう。今日のレミリアには、咲夜がこれまでに見たことないほどの迫力があつた。

咲夜の言葉に答えると、レミリアは走り出し、そのままのスピードで宙に浮いた。地下から地上へ続く階段を一気に飛び抜け、正面玄関のドアを弾き開けて外に飛び出た。

昨日に引き続き、外は夜のように真っ暗。まるで、吸血鬼が通るために暗くなっているかのように真っ暗だった。

レミリアは空気を割いて、猛スピードで宙を駆け抜けた。

霧の湖にいた妖精たちは風圧で吹き飛ばし、行く手を阻む木々は体当たりでなぎ倒した。

10分とかからないうちに研究所へたどり着き、インターホンを鳴らす。出迎えた者は範人だった。

「レミリアか……やつが待っているぜ。」

「案内よろしくね。」

「任せな。」

レミリアは範人について行く。彼女には前に行く彼の姿に夫であるジェイドの姿が重なって見えた。

レミリアが案内された部屋は研究所の奥にある実験場。壁、床、天井を強靱な生体金属で覆われたその部屋はかつて、生まれたばかりのハンターキングとバスターキングが死闘を繰り広げた部屋だった。

「ここだ。ここにあいつがいる。」

「ねえ、範人……」

部屋のロックを解除するため、タッチパネルを操作する範人にレミリアが話しかけた。彼女はずっと思っていた疑問を彼にぶつける。

「範人は今回の誘拐の協力者なの？」

「ん〜…なんて言うのかな……」

レミリアの質問に範人は悩む素振りを見せる。彼としては本当に悩ましいところなのだろう。しかし、すぐに顔を上げ、質問に答え始める。

「まあ、協力者って言えば協力者だ。誘拐自体に協力したわけじゃないが、俺はこの場所を提供している。実は、この誘拐を思いついたやつは俺でも、誘拐したやつでもないんだがな。そいつの名前を教えるわけにはいかねーが……」

「ふうん……じゃあ、なんで場所なんて提供したの？」

「俺自身拒まれ続けてきた存在だからな。拒まれることの辛さがわかるから、極力誰かを拒むってことはしないようにしているつもりだ。今回もそれが理由だな。」

「さあ、ドアが開いたから早く入りな。」

レミリアは促されるまま、部屋に一步だけ踏み入れた。後ろを振り向くと既に範人の姿はなく、ただの通路が広がっていた。

レミリアが部屋の中へ入ると入り口のドアが閉まり、一斉に明かりがついた。部屋の中にあるものは戦闘実験に使われていたであろう壁とその中心の椅子に座っている仮面を被った男1人だった。

男を立ち上がり、機会音声でレミリアに話しかける。

「来タナ、紅魔館ノ主ヨ。」

「まずは質問に答えてもらおうかしら。」

「フラン達は無事なんでしょうね？」

「モチロンダ。2人ニ怪我ハサセテナイ。少ナクトモ、私ハ：ダガ……」

男はモニターの電源をつける。そこにはベッドで一緒に寝ているフランとジェットットの姿が映っていた。2人共何故か裸だが、それについて知っている男は何も言わず、ただモニターから目を逸らした。しかし、レミリアはそうはいかない。男が妹と義弟に何かしたのだと、激怒した。

「2人に何をしたアア!?？」

「何モシテイナイ。私ガ誘拐スルタメニソチラへ行ツタトキモ既ニヤロウトシテイタヨ。」

サテ、勝者ガ何ヲスルノカ決メヨウジヤナイカ。」
「貴様アアアアア！」

男の言葉はレミリアに届いていなかった。怒りに任せ、男に向けて爪を振るうが、男はそれをバックステップで軽々と躲していく。怒りに燃え、紅く染まったレミリアの目を見て、仮面の奥に見える男の目がニヤリと笑った。

「消えろオオオオオ！死ねエエエエ！貴様アアアアア！」

「ナルホド、ソレガ貴女の望ミカ……」

デハ、私モ望ミヲ言ワセテモラオウ。私ヲ紅魔館ニ住マワセテモライタイ。」

レミリアは男の望みを全く聞いていない。男が話している間も爪を降り続ける。男は冷静に、仮面の下の顔にニヤリと笑みを浮かべながら、冷静にバックステップを続けた。

男の冷静さから、バカにされていると感じたレミリアのスピードがどんどん加速する。ついには男の服に爪がかさるようになった。しかし、それでも足りず、まだまだ加速する。男がまずいと感じたときにはもう遅く、レミリアの蹴りが男の腹に入っていた。

男は吹っ飛び、部屋の中心にある椅子に激突した後、座るように停止する。レミリアはさらに追撃を加えるべく、妖力の槍を形成、男に投げつけた。男は首を傾げて躲そうとしたが完全には躲せず、槍は仮面の表面をかすめ、椅子の背もたれに突き刺さった。仮面にヒビが入る。

男は槍を叩き割り、椅子から立ち上がった。ヒビの入ったマスクは男が動くと同時に崩れ去る。男の素顔を見たレミリアは驚きで硬直してしまった。

「え……なんで……」

「やれやれ、仮面が壊れちゃったよ。まあいいか……」

今日はこんなにも空が暗いことから、本気で戦わせてもらおうぞ。」

男はモニターに映った外の光景を指差しながら言った。

第七十四話

真の夜王

レミリアは驚いた。

男の仮面が壊れ、その下から現れた素顔は自分の夫であるジェイドだったのだ。紅い瞳、輝くような明るい金髪、そして手のような羽が何よりの証拠である。

彼女は戦意のほとんどを失ってしまった。しかし、ジェイドは戦う気満々だった。

「なんで……こんなことを……ジェイド……」

「そうだな……再会に刺激が欲しかった、ってところかな。」

「刺激くらい、夜に再会したらすぐに味合わせてあげられるのに……」
「再会と同時にベッドへ直行なんて御免だからな。」

ジェイドは弾幕を渦のように撒き散らす。堪らず、レミリアはそれを回避、相殺した。レミリアの目に困惑と同時に闘志が宿る。

ジェイドはニヤリと笑みを浮かべ、レミリアに突撃した。彼は羽の爪でレミリアに斬りかかる。レミリアは自身の手の爪で応戦した。爪と爪がぶつかり合い、火花が散る。数十秒に及ぶ打ち合いは互いの蹴りがぶつかり合ったことで互いが吹っ飛び、引き分けに終わった。

レミリアが顔を上げる。その表情は戦闘者のものとなっていた。

「良いね。その顔だ！夫として一度本気で戦ってみたかったんだよ！」

「そんなに刺激が欲しいなら、とことん戦ってあげるわ！

だから、この後、私を満足させてよね？」

「……はあ、わかった。保証しよう。」

ジェイドの言葉に少し歪んだ笑顔で答えるレミリア。その後放たれた彼女の言葉に、ジェイドはため息を吐き、了承した。

ジェイドとレミリアは同時にスペルカードを取り出した。そして、同時に詠唱を開始。同時に発動した。

「影牙『テラードッグス・ハンティング』」「天罰『スターオブダビデ』」
ジェイドは影から犬型の弾幕が大量に出現、レミリアに向かった。レミリアからはジェイドを捕縛するかのようレーザーが、撃墜する

ために弾幕が展開される。ジェイドは弾幕を軽々と躲し、レミリアもまた弾幕を軽々と破壊した。

スperlカードの効果も切れても2人はほとんど無傷。2人の目には闘志の炎が燃え盛っていた。

「衰えていないな、レミリア。むしろ強くなったんじゃないか？」

「それは貴方もでしょう、ジェイド。」

2人は笑い合うと同時に突撃。猛スピードで拳を交えた。それぞれ、残像が残り、腕が増えたように見える程。しかし、互角に見えるその戦いでレミリアが少しずつ押されていく。

原因はそもそもの力。ジェイドは吸血鬼化以前から魔物相手に平気で肉弾戦をやつてのける筋力を持っていたのだ。そんな彼が吸血鬼化したらどうなるか。答えは簡単である。普通の吸血鬼を圧倒的に凌ぐパワーを持った吸血鬼の完成だ。

レミリア自身、吸血鬼としてかなり強い力の持ち主だった。それでも、圧倒的パワーを誇るジェイドには、パワーの差で押されてしまうのだ。

「くっ……」

「ウラウラウラウラ！」

「まだまだこんなもんじゃないぜ！」

ジェイドの拳の一発がレミリアの拳の間をすり抜け、彼女の頬に向かった。完全に一発KOのコースである。しかし、ジェイドは本気で殴り抜くことなどせず、当たる寸前で止め、風圧でレミリアを吹き飛ばした。だが、風圧と言ってもその源は吸血鬼のパンチ。衝撃は半端なものではなく、レミリアにかなりのダメージを与えた。彼女の頬が浅く切れ、赤黒い血が流れ出る。

「貴方……今のパンチ、世界狙えるわよ。」

「ああ……人間だったらな！」

ジェイドは接近と同時にレミリアの背後に影を回り込ませ、影の矢を発射する。

ジェイドの得意な戦い方は奇襲。背後へ回り込んでの攻撃など、あまり綺麗な戦い方とは言えないが、彼の能力には最も適している戦い

方だ。もちろん真正面から攻撃することもあるが、それは囷であることがほとんどである。

半年とは言え、ジェイドと同棲していたレミアにはその攻撃が読めていた。彼女は上に飛んで避ける。矢はジェイドに向かうが、直撃することなく彼自身の影に吸い込まれていった。

天井付近を飛行しているレミアをチラリと見る（このときにスカートの中が見えたのは内緒）と、ジェイドは影の中に潜る。

一見、影など全くないように見える天井にも影はある。灯台下暗し。彼がワープした影は蛍光灯カバーの裏だった。

「上に逃げようとも無駄だア！」

俺なら、地上だろうが空中だろうが360度全体から攻撃できるんだよ！」

ジェイドが影から飛び出し、レミアの背後から至近距離で弾幕を放とうとする。しかし、レミアも振り向き弾幕を放った。弾幕は互いに相殺。

それでも、ジェイドは止まらない。相殺された弾幕の後ろから現れると、羽でレミアに掴みかかった。レミアは羽を掴むと地面に向かって投げつける。ズドンという大きな音が響いた。

レミアが様子を確認するために地面に下りると、ジェイドが影から姿を現した。地面にぶつかる衝撃を影の中に潜ることで打ち消したのだ。

「あの攻撃がよくわかったな。」

「当たり前よ。夫婦としてはたった3ヶ月しか一緒に過ごしてないけど、夫の考えくらい簡単にわかるわ。それに行動がわかりやすい。貴方はワンパターン過ぎて、バリエーションに欠けるのよ。」

「そっちが成長したこともありそうだが？」

「そうでしょうか？私も成長しているのよ！」

そう言ったレミアは小さな胸を張る。ジェイドはそれを見て苦笑していたが、強くなったことだけでなく、あることにも気づいていた。そのあることが苦笑の原因なのだ。

「ああ〜…なんだ…胸、少し大きくなったな。」

「あら、そつちにも気づいてくれるなんて嬉しいわね。

そうよ。昔に比べてバストが3cm程成長したの。」

「めでたいことだな。

まあ、今は祝うよりも勝負だ！」

「そうね、戦りましょうー！」

ジェイドとレミアは同時に弾幕を発射。その弾幕は2人とも目くらましのためのものだった。ジェイドは影に潜り、レミアは無数の蝙蝠に化けた。

影は壁面全体に広がり、矢の弾幕を放ち始める。レミアが化けた蝙蝠も部屋の中央に集まり、壁面に向けて弾幕を放つ。無数の妖力弾が衝突、相殺、爆発した。

このままでは決着がつかないと考えた2人は元の姿に戻り、同時にスぺルカードを取り出した。

「暗黒『魔人の黒き太陽』！」「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

レミアの手元に妖力で作られた巨大な槍が握られる。ジェイドが手をかざすと影が集まり、巨大な球体を形勢した。彼はその禍々しいオーラを放つ球体をレミアに投げつける。レミアも巨大な槍をジェイドに投げつけた。

巨大なエネルギーの衝突。あまりにも大きな妖力に空気が震え、轟音を響かせる。

槍は球体を貫こうと、その矛先を影に沈めていく。球体は槍を吸収しようと、影を侵食させていく。ついに、槍は球体の中に完全に入ってしまった。

球体は落下を止め、空中で静止した。禍々しいオーラも動きを止め、微動だにしない。しかし、一瞬の後、球体にヒビが入った。

黒き太陽は神の槍を吸収し、あまりにも大きすぎるエネルギーに弾け飛んだ。

爆風はレミアとジェイドに襲いかかる。恐ろしい程の威力の爆風で壁に打ち付けられた2人の背骨が悲鳴をあげる。内臓に傷ができたらしく、2人とも口から血を吐く。

「クウ……すごい妖力だな。さすが、夜の女王だ。」

……いや、夜の姫君と言った方が良いかな？王は俺だ。」

「言ってくれるわね。王はこの私よ。夜王は1人で充分！」

「じゃあ、次で決着しようじゃないか！」

「言われなくてもそのつもりよ！」

ジェイドとレミアはスペルカードを取り出し、発動する。

「夜王『Daybreak shadow光破壊せし影の魔人』!!」「夜王『ドラキュラクレイドル』!!」

ジェイドの身体が影に包み込まれ、真つ黒…闇よりも暗い影の鎧を纏う。レミアの身体は紅い妖力に覆われた。

ジェイドは足元の影を爆発させて、レミアは高速で回転しながら、2人同時に飛び出した。漆黒の弾丸と深紅の弾丸が衝突する。

ジェイドはレミアにラツシュを叩き込み、スピードを削る。対するレミアは高速回転でジェイドの攻撃を削りとっていく。

レミアの回転が加速するにつれて、ジェイドのラツシュも加速する。そのスピードはもはや目視不可能。黒と紅が入り混じる。

「ソリャアアアア！」

「ウララララララ……！」

レミアの回転がさらに加速する。ついに、ジェイドの羽もラツシュに参加し始めた。ジェイドの羽がレミアに掴みかかる。しかし、その怪力を誇る羽も彼女の回転の前に弾かれてしまった。

「ぐあつ……まだまだア！」

「貴方に私の回転は止められないわ！」

「止めてやるさー！」

ジェイドは再度羽で掴みかかる。今度は弾かれることなく掴むことができた。しかし、回転は弱まることなく、ジェイドの羽を削っていく。掴まれてもなお、レミアは余裕の表情を浮かべている。

「ガアアアア！」

「え……回転が……」

ジェイドは全て削り取られることも恐れず、羽にさらに力を入れた。案の定、羽は削れ、赤い血が流れる。レミアの服も摩擦で破れていく。羽から流れた血がレミアに付着し、彼女はさらに紅くなつた。しかし、力を入れたことでレミアの回転が弱まる。あまりのス

ピードに、普段は滑る血液も抵抗の役割を果たしていたのだ。

「ウオオオオオ！」

「そんな……私が……負ける!?？」

「ウラアアアア!!!」

回転が弱くなったことにレミアが動揺したことで、回転はさらに弱くなる。ジェイドはクツションとして拳に影を纏わせ、レミアの頬を殴り抜いた。レミアは回転したまま、影で覆われた壁に激突、停止した。

「ゼエ……ハア……危ないところだった……ぜー！」

ジェイドはそう言ってあられもない姿で気絶しているレミアを見る。彼の羽は自身の血の色に染まっていた。

紅は黒に敗れた。

第七十五話

サプライズとつながり

紅魔館 主の部屋

紅に染まった館の自室でレミリアは目覚めた。勝負が終わったときの記憶がない。それで彼女は自分が勝負に負けたことを理解した。

レミリアは顔を横に向ける。ベッドの端にはジェイドが座っており、レミリアを見ていた。彼女は身体を起こし、窓の外を見る。外は夕方。空を覆っていた影は消えていた。

「あの…ジェイド……」

「ん？どうした？」

「おはようのキスをちようだい。」

「いや、外のは朝日じゃなくて夕日だからな。それと、楽しみは夜にとっておけ。」

ジェイドの言葉にプクーと頬を膨らませるレミリア。その様子が可愛らしく、ジェイドは彼女の頭を撫でる。頭を撫でられて表情を崩すレミリアだが、その様子がどこか犬のように見えるのはジェイドだけだろうか？主の風格が感じられない。

「さて、他の住人たちが大食堂に集まっている。行くぞ。」

「もつと撫でて〜♪」

「後でな。」

「ムウ〜……」

またもや頬を膨らませるレミリアだが、今度はジェイドに通用しなかった。ジェイドは無言でレミリアを持ち上げる。突然のことにレミリアは驚いた。普通に持ち上げられても驚いただろうが、その持ち上げ方がお姫様抱っこだったためより驚いた。

レミリアが頬を紅くする。それを見たジェイドが不思議に思っ
て訊ねる。

「どうした？これくらい、前に何度もやっただろ？」

「でも、久しぶりだし、突然だったから……（本当は違う意味で抱いてもらいたかったなんて言えない）」

「ほら、嫌なら自分で歩いて行けばいいんだぞ？」

ジェイドは意地悪な表情でレミリアを下ろそうとする。このままの方がよっぽど良いレミリアは「嫌だ！」とだだをこねる子供のよう
にジェイドに強く掴まった。その様子を見たジェイドはクスリと笑
い、大食堂に向かった。

『おめでとう（ごいいます）！』

大食堂に入った2人を待ち受けていたのは祝いの言葉だった。祝
いの言葉と共にクラッカーが鳴らされる。

大食堂には紅魔館の住人が全員集まっており、今回の誘拐の協力者
範人の姿もあった。その範人がジェイドとレミリアの前に歩み出
る。

「再会おめでとう！どんな気分だ？」

「未だにこの光景が信じられないわ。でも、嬉しい。」

「やっと約束を果たせてよかった。レミリアに会えて本当に良かった。」

「そうか、それは良かった。協力した甲斐があった。」

レミリアもジェイドも満足している様子だ。範人はニツコリと笑
顔を浮かべると、正面玄関に向かった。レミリアは引き止めようと声
をかけたが、彼は「仕事の打ち合わせがあるから」と言っ
て、紅魔館から出て行った。実際は仕事の打ち合わせなどあるはずもなかつた
のだが……自分はこの場に相応しくないと思ったのだろう。範人の
些細な気遣いである。

レミリアが振り返ると、咲夜が壇上に乗っていた。従者……裏方
であるはずの彼女が何故壇上に上がっているのか？とレミリアが不思議
に思う。すると、咲夜が壇上で口を開いた。

「今日、この紅魔館の主であるレミリア・スカーレット様とその夫ジェ
イド様が再会なされました。紅魔館使用人一同、お二人の再会を自身

の幸せのように嬉しく思っております。そこでここに宴会を開くことになりました。

お嬢様には勝手な行動で誠に申し訳ありませんが、窃盗の常習犯から『宴会が幻想郷流だ!』と聞きました。楽しんでいただければ幸いです。」

咲夜は大きく息を吸い込み……

「お二人の再会を祝って、乾杯!!!」

宴会が始まった。

レミリア自身、宴会は嫌いではなかった。先の読めない運命というものも好きだった。しかし、かなり落ち込んだ。何が起きるかを見抜けなかった自身が情け無いのだ。能力を使つてないのだから当たり前のはずなのだが……

落ち込むレミリアをジェイドが頭を撫でて慰める。そこにフランがやって来た。その隣にはジェットも一緒だ。

「どう?驚いた?」

「貴女はなんでいつも勝手なことを……嬉しいけど、驚きすぎたわよ!」

「えへへ、ごめんなさい。」

謝るフランだが、その表情からは全く反省の色が読み取れない。それを見たレミリアはため息を吐いた。ジェイドもやれやれといった表情を浮かべている。ジェットも申し訳無さそうな表情だ。

「2人共に楽しいならもっと楽しそうにしようよ!ほら、何か食べよう♪」

「あ、ああ。」「え、ええ。」

フランはあまりはつきりと肯定しない2人を席へと引きずっていった。

「デューレスさーん…抱きしめてください〜♪」

「Why!?!?」

「そ、それなら私を美鈴の代わりに……」

「どうしてこうなつたんですか……?」

デューレスは酒に酔った美鈴と咲夜に言い寄られていた。今はまだ軽い修羅場である。

デューレスはパチュリーに「help me」の視線を送る。しかし、彼女は興味がない様子でパイと目を逸らした。そんなパチュリーの隣では、これから映画でも見るようなワクワクした目の小悪魔がポップコーンを手にしている。助けてくれそうな範人も帰ってしまった。「ここに味方はいないのか?」とデューレスは泣きそうになる。

そんな彼を挟んで美鈴と咲夜の言い争いはエスカレートしていた。

「デューレスさんは私のことを好んでいるんですよ。咲夜さんはお嬢様の側で仕える身なんですから、付き合っつてイチャラブしている時間なんてないでしょう?」

「門番の仕事をサボって居眠りしている貴女にだけは時間云々について言われたくないわね。大丈夫よ。そのための時間は他を頑張つて削るわ。この気持ちが好きだという気持ちなら、そのくらい全然平気よ!」

「なんか話が勝手に進んでいるんだけど……何がどうした?」

状況が飲み込めず、デューレスは混乱する。彼を混乱させている要因は複数あるが、最も混乱させているものは先程より飛びかっている「好き」という言葉である。

デューレス自身、誰かに恋愛感情など抱いたことがない。美しい女性や可愛い少女を見ても純粋に「素敵だな」や「可愛いな」などと思

うだけである。そもそも彼自身、自身が恋愛対象になるとは思っていないのだ。

美鈴と咲夜は一触即発の危機。そこに欲しいけどいらぬ助け舟が出された。

「それなら、デューレスさんに直接聞いたらどうですか？」

声の主は小悪魔。彼女は意地悪な笑みを浮かべている。その様子はもう小悪魔ではなく悪魔だろう。隣りではパチュリーがため息を吐いていた。

美鈴と咲夜は互いに向き合うと首を縦に振り、デューレスの方を向いた。そして、同時にこう言った。

「私たちのうち、どちらが好みですか？」

「ええ!?？」

デューレスは焦った。どちらが好みと訊かれて、どちらかだと答えてしまえば、片方が傷ついてしまう。かと言って、答えないわけにもいかない。答えなければ、粘菌事件の宴会の時と同様に追い回される可能性があるからだ。あれはデューレスの中では一種のトラウマになっている。背後から怪力の生物が追いかけてくるなんて考えたくもなかった。

困りきったデューレスは酒を飲んだ。今更だが、彼は人外としては酒にあまり強くない。鬼との酌み交わしなど、おそらく1分程でギブアップだ。

彼は少し酔った。酔いのせいで彼の中で少しだけ存在している性癖が表に出た。ここで表に出した方がいいと思っただのかもしれない。

「すみません、咲夜さん。私、巨乳派です。」

「何イー!?？」

デューレスの抽象的な答えに、どこぞの大佐のような声を上げて驚く咲夜。ショックを受けた表情で固まる彼女からは魂が抜けてしまったようにも見える。そんな彼女の様子を見たデューレスは悲しい気持ちになった。自身の言動で誰かを傷つけてしまったことが堪らなく悲しいのだ。

悲しむデューレスと魂が抜けてしまったような咲夜を見て、小悪魔

はクスクスと笑っていた。美鈴はデューレスに背後から抱きついて
いる。恋愛には興味がない様子のパチュリーだったが、彼女も女性。
恋を侮辱するような小悪魔の態度にはさすがに怒りを覚えたようで
魔王のような形相で小悪魔を睨みつけた。途端に小悪魔は黙る。

「ごめんなさい、咲夜さん。」

でも、私は貴女のことを嫌いではありませんよ。むしろ好きです。」

「ほ、本当?」

「はい。」

恋愛対象としては(多分)見ていませんが……」

デューレスの言葉で咲夜に色が戻る。それと同時に彼女の中では
巨乳に対する憎悪に似たものが湧き上がってきた。咲夜は無言で美
鈴を睨みつける。美鈴もまた、咲夜を睨み返した。火花が飛んでそう
な程に激しい睨み合いにデューレスの顔がこわばる。小悪魔はまた
しても心の中でワクワクしていた。

「美鈴……」

「何ですか?」

「その胸切り取ってやらあ!」

「(これはマズイ!) 逃げるんだよお。」

咲夜の思考が暴走した。ナイフを持ち、逃げる美鈴を追いかけてい
く。2人は大食堂を抜け、廊下へと姿を消していった。能力を使っ
ていないのは咲夜なりの優しさだろう。それを見た小悪魔もこれから
女の戦いが見れるということを追いかけていった。その場には呆気
にとられていたデューレスと2人の様子に興味がないパチュリーだ
けが残された。

「デュー……」

「何ででしょうか?」

パチュリーに呼ばれたデューレスが彼女の方を振り向く。パチュ
リーは着ている服の襟元を少しはだけさせて、デューレスに見えるよ
うにしていた。その襟元から覗く胸はかなり豊満だ。パチュリーが
普段の彼女からは想像できないような甘い声でデューレスに言う。

「貴方…巨乳派って言ったけど、私のはどうかしら?何かそえられる

ものはない?」

「そうですね……ないと言えば嘘になります。」

「だったら、私を抱いてみない?」

「喜んで遠慮させていただきます。」

デューレスはパチュリーの質問に笑顔で答えた。パチュリーはデューレスの答えを聞いて「相変わらずブレない」と笑った。彼女は若干本気だったのだが、断られてもショックを受けないあたり、流石といったところだろう。頭の中で何度も「諦めない」とつぶやいている。

デューレスは質問に答えながら「自分も恋をしているのか」と思っていた。

レミアアの自室。レミアアとジェイドはそこにいた。2人共、宴会では酒を控えて、早めに切り上げてきたのだ。

何故か?

理由はこれから2人で行う夜戦で、よりしつかりと快感を得るためである。酒に酔っているにはアルコールが軽い麻酔の役割を果たし、100%の快感を得ることができない。

ジェイドが服を脱いでいる隣りでレミアアも服を脱いでおり、ほんの十数秒で2人は全裸になっていた。

ジェイドがベッドの上で仰向けになり、レミアアがその上に馬乗りになる。476年前とほとんど同じ体制である。

「実に476年ぶりね。」

「そうだな。レミアアはあまり変わってないみたいだが?」

「それは貴方も同じでしょう? 私だって、身体がもっと成長すると思っていたのよ。」

「そういうことじゃなくて、変わらず可愛いってことだ。」
「ありがとう。」

レミリアはジェイドと唇を重ねた。互いの口内に舌を侵入させ、舐め合い、絡み合わせる。粘着質なディープキスは互いの頭の中を白に染め、理性を溶かしていく。そのディープキスは数分に及んだ。唇を離れたとき、レミリアの身体は紅潮しており、荒く息をしていた。ジェイドはレミリアが馬乗りになっている自身の腹部にヌルヌルとした感触を感じていた。

「ジェイドお……おっぱい……揉んで……」
「わかった。」

ジェイドは言われた通りにレミリアの胸を揉む。レミリアの小さな胸……俗に言う貧乳はジェイドの手の中で小さく形を変え続ける。その中心にある乳首は興奮したレミリアの加速した血流により、硬くなっていった。それでも構わず揉みしだく。時折、指先で乳首をつまんだり、弾いたりするとレミリアは可愛い声で色っぽく喘いだ。その声にジェイドは興奮してしまう。

ジェイドがレミリアの胸から手を放したとき、彼女は準備万端といった様子でジェイドに言う。ジェイドの腹部にあるヌルヌルとした感触はさらに強くなっていた。

「ハア……ハア……ジェイドが上手だから、こんなに濡れちゃった。こんなにしたんだから……私を満足させてよね?」

「もちろんだ。476年分、激しくしてやるよ。俺もたまっているんだ。」

「ふふふ……孕ませてもらうかしら?子供が欲しいの。」

「お願いね、ア・ナ・タ♪」

「ああ、できたらな。俺だって子供が欲しいし……」

「じゃあ、いくぞー!」

ジェイドは身体を起こして、レミリアと唇を重ねる。レミリアの身体から力が抜けてくると同時にジェイドがレミリアを押し倒した。

その後、紅魔館の一室には主の喘ぎ声が朝まで響き続けた。

平の過去話

スパイダー転生！

アメリカ某所。とあるクリニック。

未来の蜘蛛島 平はここで育った。飼い主はこのクリニックの院長。そのクリニックがあつた街、及びその周辺では最高の腕前と言われる名医だつた。何故、大病院に行かないのかと言われていたが、それは彼の飼っていた蜘蛛が原因だったのかもしれない。

フラットと言う名前のコバルトブルータランチュラの朝はクリニックの玄関にあるケージの中で始まる。コオロギと呼ばれる餌をケージに入れてもらい、飛びかかって捕まえ、牙を突き立て、外骨格の中身を毒で溶かして吸う。クリニックに一番目の客が来たら、一番前の脚一對を挙げて挨拶し、迎えに来た飼い主の肩の上に乗る。後は、診察終了時間までずっと一緒に診察する。診察時間が終了すれば、ケージの中に戻され、夕食のコオロギを貰い、寝る。これが毎日のサイクルだつた。一週間に2日程ある休診日は一日中ずっと飼い主の肩の上。

同じサイクルの繰り返しだったが、フラットには全てが楽しく思えた。飼い主を含め、人間のことが大好きだつたからだ。人間たちはフラットに対して様々な反応を示し、様々な表情を見せてくれた。それが堪らなく楽しかつたのだ。

人間たちもフラットのことを好きだつた。幸せの青い鳥というのが存在するらしいが、彼は幸せの青い蜘蛛だつた。とりわけ、飼い主は彼を溺愛した。

フラットは賢い蜘蛛だつた。飼い主の診察に同行していたことで病気の名前、症状、毒の名前、それらに効く薬を覚えてしまった。彼は学ぶことも好きだつたため、毎日が天国のようだつた。

しかし、そんな日々がいつまでも続くわけがなかった。

冬のある寒い日。フラットのケージの周りにはクリニックのスタッフ全員が集まっていた。その中には泣いている者もいた。何が

起きたか？

フラットが死んだのだ。死因は老衰だった。院長はクリニックを臨時休業にし、クリニックの庭に墓を作った。彼は泣いた。いつか別れが来るとわかっていた。それでも、フラットの死はあまりにも悲しすぎた。院長は泣きながら、フラットの死体を墓に納めた。

気がつけば、彼は森の中に倒れていた。地面に両手をつき、立ち上がる。しかし、ここで違和感に気付いた。何も考えずに立ち上がったときに一番後ろの脚で地面に立っているのだ。というか、脚が少ない。4本しかない。

迷っていても仕方がないため、彼は現実を知るために川を探した。目線が高いことも気になるが、そんなことは気にしていられなかった。

しばらくすると、水の音が聞こえたため、彼はそちらへ走った。見つけたものは滝。流れる水は彼が元々いたクリニック周辺ではありえないほどに綺麗で透き通っていた。川の縁に立ち、水を覗き込む。

「なんだよ……これ……」

彼は自身の姿に驚くと共に自身から発せられた音……声に驚いた。水面に映った自分は自分ではなかった。人間……いや、人型の何かだった。

彼は恐る恐るといった様子でもう一度水面に映った自分を見る。やはり、人間ではない。青い髪と紫の瞳、額に一對の眼を持つ人型の何かだった。服装は忍び装束と言うのだろうか？彼の飼い主が読んでいた漫画に登場する忍者の服装にそっくりだった。腰に巻いた帯

にはどこで手に入れたのか、短い忍者刀が差してある。

「もう何も驚かないぞ……!?」

なんだ……頭が……グ……ガアア！」

彼は突然として頭痛に襲われた。脳が溶け、頭が爆発してしまいそうなほどに痛い。脳内に様々な情報が流れ込み、満たしていく。あまりの苦しさに彼は地面に頭を押さえて倒れこんでしまった。

『痛い』『食え!』『殺す……』『怖い』『無駄ア!』『斬る』『脚をもぎ取る?』『死ぬ』『嬉しい』『ザイザルを二週間分』『味は5種類』……

何分間倒れていたのだろうか？

頭痛が引き、彼は立ち上がる。脳に流れ込んでいた情報は彼の中に完全に取り込まれていた。そんな情報の中で一つだけ、彼の中に強く響く言葉があった。『蜘蛛島 平』。彼はこの名前を知らない。しかし、その名前は自分の中でどこかぴったりと来るものがあった。

「これは……俺の名前か？」

彼は自身の名前を『蜘蛛島 平』にすることを決めた。

周りを見ても、人が住んでいる気配は全くない。このまま、その場においても仕方がないと思った彼は人を探し始めた。

平は人間の少女を見つけた。しかし、その少女の前に出ることができない。額の眼は何故か持っていたゴーグルで隠したため、問題はなはずである。では、何故か？

何故なら、その人間が10体の異形たちに襲われていたからである。平としては大好きな人間が攻撃されていることは許せないことなのだが、戦ったことのない彼には戦う度胸がなかった。

(せめて、糸が出せれば……)

平が思い浮かべていたのは自身とは違う種類のナゲナワグモという蜘蛛だった。蜘蛛⇨糸というイメージだが、平はあまり糸を出したことがない。だから、糸など出せるはずが……

「おや？糸が出てる……」

出ないはずの糸がイメージしただけで出た。それは彼にとって、とても衝撃的なことだった。まるで、人々の想像から創られる幻想の中に迷い込んでしまったようだった。

彼は困惑したが、あまり深くは考えずに異形たちの前に踊り出た。

「女性を攻撃するのは感心しないなあ。しかも、集団でなんて……」

「なんだ、テメエは？俺たちは今、お楽しみ中なんだよ！」

「文句あんのかコラア！」

「ありすぎて言い表せないくらいだよ。」

不機嫌な様子で言う異形。威嚇する異形に対して、平は挑発するよりに返す。異形は簡単に挑発に乗り、平に殴りかかった。平は冷静にそれを避けるとカウンター……異形の顔面を殴り飛ばし、糸でがんじがらめにした。蜘蛛の糸はとてつもなく強靱。絡め捕られた異形は身動きが全く取れない。それを見た他の異形たちは目を見張って驚く。

「お前、妖怪だったのか!?？」

「妖怪？何のことかよくわからないが、確かに俺は人間じゃない。」

「構わねえ！やっちまえ！」

『オアアアア！』

残っていた異形……妖怪たちが一斉に襲いかかる。平はハアとため息を吐き、腰の忍者刀に手をかけた。先程流れ込んだ情報から、この武器の使用方法、名前はわかっていた。平は逆手持ちで抜刀、刀の名前を詠んだ。

「妖刀”千刃”！」

平は千刃で何も無い空間を自分を中心に円を描くように斬った。妖怪たちはその刀を恐れることなく、むしろ空を斬ったその剣技を笑いながら突っ込んだ。しかし、平に彼らの拳は届かなかった。

「ゴバア……☒」

「ギャアアアアー!??か、身体が…ゴポツ…」

妖怪たちの身体が突如として空中で真つ二つに切れたのだ。切り口から真つ赤な血液や内臓が溢れ出てくる。妖怪たちはその場に倒れ、鉄の匂いがする真つ赤なプールを作り出した。平はその匂いに思わず顔をしかめる。

死んだと思われた妖怪たちだったが、まだ一体だけ辛うじて生き残っている妖怪がいた。(平も妖怪だが…)平は真つ二つにされても尚生きているその生命力に感心してしまう。

「まだ生きていたのか?丈夫だな。」

「当たり前だ。俺ア、丈夫だからよ。この心臓さえ生きていれば死なないんだよ。」

「ほう…心臓を壊せば死ぬのか…」

「な!??やめろ!」

その人間ならお前が全て食べていい!だから、殺さないでくれ!」「人間を食べる」この言葉を聞いたとき、平の目の上の筋肉がピクリと動いた。「許せない…」その言葉が彼の中に充満した。

本来、妖怪は人間に恐怖を与えて初めてその存在を維持できる。だから、襲って食べるのだ。しかし、平にはそんな考えなど無かった。全く無いというわけではなく、脳内に流れ込んだ情報の中にはしっかりと「人間を食べる」という事項があった。それでも、人間のことが大好きな彼は受けいることができなかつたのだ。

許せぬ怒りは殺意に変わり、平の中で渦を巻く。

「腹は減ってないんだ。人間を食べる気はないな。食べたくもないし…」

「み、見逃してくれるよな!??」

「さすがにあんただけが生き残るっていうのは不公平じゃないのか?」

死ねよ、ゴミが…」

こんなゴミクズには触れたくない。そう思った彼は妖怪の露出した心臓に糸を巻きつけ、きつく締めつける。圧迫された心臓はいとも容易く破裂してしまった。妖怪は血を吐いて絶命する。

妖怪たちを殺した平は地面に座り込んで震えている少女に手を差

し出す。しかし、少女はその手を取ろうとはしない。

「大丈夫か？良ければ、家まで護衛するが？」

「妖怪なんて信じられないわよ！どうせ、あれでしょ！貴方も私を助けるふりして食べるんでしょ!？」

「…はあ……」

平は少女の返しにため息を吐く。もうわけがわからない。つい最近まで、街の人間に愛されていた自分が何故嫌われなければならないのか。不思議で悲しくて仕方がなかった。それでも、この少女には家まで安全に帰ってもらいたい。その考えが彼を動かした。

「俺は人間を食うことはないから安心してくれ。そもそも人間大好きだから、食べたくないし……」

「信用できないわね。」

「信用してもらわなくても結構。ほら、案内して、家まで連れていくから……」

「ち、ちよつと!?!?何するのよ!?!?」

平は突如として少女を背負った。少女は驚き、平の頭をポカポカと殴る。しかし、平からすれば、その攻撃は痒いくらいである。

「どちらにしろ、このままじゃ危険なはずだ。それなら、少しでも安全な方法を選んだ方が良いだろ？」

「……ホント…悪いヒトね。」

平は少女に案内され、彼女の住んでいる人里に向かうのだった。

人里の入り口に着いた平は少女を下ろした。少女は人里の門へかけて行ったが、くぐる前に立ち止まり、平の方を振り向いた。

「ありがとう。お礼だけ言っておくわ。」

「どういたしまして。」

少女はそれだけ言うと、門をくぐって人里の中へ消えていった。平はそれをただ笑顔で見送った。

少女の姿が完全に見えなくなったとき、平は人里に背を向けて歩き出した。当分の間はこの周辺に住むつもりだ。

平は人里からあまり離れていない場所に放置されている農作業小屋を見つけた。住めそうということを確認した平はそこに入るとすぐに掃除を始める。雨風をしのげれば、それでいいのだが、さすがに汚いのも好きになれない。

家の中の埃を全て外に追い出し、断熱材兼壁紙として粘着性の無い糸を壁に隙間なく貼り付ける。ほんの3時間で家の内装が出来上がってしまった。平からすれば、もう少し部屋が欲しかったのだが、屋根裏があっただけ良しとした。農作業小屋なのだから仕方がない。「さて、今日はもう遅いし……さつき捕まえたコオロギでも食って寝るか。」

平は備えつけてあったかまどでコオロギを加熱調理して食べると、糸で布団を作り、屋根裏で寝た。

平が幻想郷に来て1カ月。人里ではどんな病でも治す医者が入里の外に住んでいるという噂が流れた。しかも、人間ではないらしい。

人里の守護者、上白沢 慧音はその噂の真相を確かめるべく、医者

が
い
る
と
言
わ
れ
る
古
い
農
作
業
小
屋
へ
向
か
っ
た
。

平の過去話

コバルトブルーのお医者さん

平に能力が発現したのは全くの偶然だった。

偶々通りかかった畑でマムシに噛まれて苦しんでいる人間を見つけたため、助けようと手を差し出したら、その人間の体内に抗体を一瞬で作りに出したのだ。その後、人間は喜んで、野菜を少し分けてくれた。

家に帰ってから、平は驚いていた。まさか、そんなことができることは思っていなかったのだ。抗体を一瞬で作りに出し、更に強化するなどとは……

すぐに噂は広がり、平の元には毒虫に刺されたり、錆びた刃物で怪我をしたりした者、伝染病にかかった者が訪れるようになっていった。その度に病原体に合った抗体を作り出し、病を予防、治療してきたのだ。平自身、医者泣かせな仕事だとは思いますが、それが自身にできることだと仕方なく割り切っていた。

平は今日も治療をしていた。今回の患者はネズミに噛まれたという者だった。一見、可愛いイメージのあるネズミだが、むやみに触ってはいけない。ネズミは大量の病原体を保有しているのだ。今回の患者はその病原体を危険視しての来訪だった。

5分程で抗体の生成が終了し、患者が帰っていく。患者がいないため、今日の仕事はこれで終了。平が大きな欠伸をしたときに慧音が入ってきた。平は慌てて姿勢を正し、慧音と向き合った。平は慧音が誰かを知らない…初対面だ。

「いらっしやい。何があったのかな？」

「別に怪我をしたり、感染したわけじゃない。」

「じゃあ、俺に何の用だ？」

治療目的ではないとわかった瞬間に平の態度がガラリと変わった。慧音はそれに対して顔をしかめたが、別に平は商売人ではない。話し方はお年寄りや子供に恐れを抱かせないために優しくしているだけである。そもそも、治療自体も平自身が勝手にやっていることであって、商売目的ではない。平は普通の話し方に戻ただけである。しか

し、それを知らない慧音は少し機嫌を悪くしてしまった。

「お前は何故こんなことをしている？お前は妖怪だろう？」

「確かに俺は妖怪らしいな。妖怪は人間を蔑み、殺して食べるって聞いたけど……俺は人間のことが大好きなんだよなあ。この行動は単純に俺がそうしたいからだ。」

「人を食べた経験は？」

「無い。そもそも食いたくない。」

慧音の質問に答える平の目は真っ直ぐな光を放っていた。どこまでも真っ直ぐで正直なその目を見た慧音は疑ってかかった自分を殴りたくなる感覚を覚えた。妖怪を疑ったのだから、誰も慧音を責めることはないだろうが、それでも慧音は自分が許せなくなるほどだった。そして、同時に彼に人里の中で暮らしてもらいたくなかった。他人の慧音でもわかるほどに平は人間が好きなのだ。そんな彼にはなるべく人間の近くで暮らしてもらいたかった。

「じゃあ、人里に住んでみないか？」

「え!? マジで!?!」

「本当だ。ここまで人間と親しくできる妖怪は珍しい。それにいずれ来る伝染病のときはお前の力が必要だ。人里の長には私から話をしておく。来てくれないか？」

「いや、でも…人里の人間たちに迷惑じゃ……」

「そんなわけないだろう。みんな、お前に助けられているんだ。確かに妖怪が嫌いなやつもいるが、お前みたいな良いやつを嫌いなわけがないだろう。」

「お誘いありがとう。是非、行かせてもらうよ。」

慧音の誘いに乗った平はすぐに引越す準備を始めるが、あることに気づいて手を止め、彼女の方を振り向いた。

「そういや、自己紹介がまだだったな。俺は蜘蛛島 平。名前からわかる通り、蜘蛛の妖怪さ。あんたは？」

「私は上白沢 慧音だ。ワーハクタクの半人半妖で人里では教師をしている。」

「そうか、あんたが……」

よろしくな、慧音。」

「ああ、よろしくな、平。」

2人は互いに自己紹介を交わすと、小屋の中を片付け、人里へ向かった。

人里の長は20代後半。人々に選ばれて長になった彼は、まだ若いものの人々からの信頼は厚く、とても厳格な雰囲気を持つ男だった。仕事は早くて正確、性格は真面目、自分に対しても相手に対しても厳しいことがほとんど。ここまで聞けば、世間一般に言うカタブツという部類に入ってしまうと思われがちのだが、彼には弱点のようなものがあった。それは……

「慧音です。入ってもよろしいでしょうか？」

「どうぞ。」

「失礼します。」

「やはりお美しい……／＼」ボソツ

慧音が部屋に入ってきたと同時に長の顔が赤くなる。彼は慧音に惚れていた。真面目で厳しい長は慧音の前になると、(多少だが)途端に優しく、甘くなるのだ。

長は慧音を見て、いつも思うことを思わず小声で言ってしまう。慧音は何食わぬ顔をしているが、半人半妖の彼女は耳が良い。きつと聞こえているはずだ。

長自身、慧音に思いを伝えたいのだが、寿命が桁違いである。もしも、彼女が自分を愛したことで悲しむ結果になってしまうことを彼は恐れていた。なにより、長である彼が半人半妖とくつついてしまつては人里の人々に何を言われるかわからない。人里の人々の中には妖

怪を強く嫌う者も少なくないのだ。

長が用件を聞こうと慧音に向き合う（恥ずかしさのあまり、顔は伏せているが……）と慧音が口を開いた。

「今日はお願いがあつて来ました。」

「言つてみなさい。（慧音さんのお願ひなら、基本なんでも大丈夫だ。無茶なことを言うヒトじゃない。）」

「ありがとうございます。」

平、入つていいぞ。」

「失礼します。」

慧音が何者かの名前を呼ぶと、部屋に入ってきたのは青髪、紫眼、着ている服は忍装束というなんとも妖怪らしい青年だった。平と初対面の場合、大体の者ならば、恐怖を覚えるだろう。しかし、長は顔色を何一つ変えず、ただその場に座っていた。慧音が男を連れて来たことにはとても驚いたが……

「蜘蛛島 平です。名前の通り、蜘蛛の妖怪です。」

「お願いというのは彼をこの人里の中に住ませたいということですよ。彼には医学の心得があります。この里にはよく効く薬を売る薬売りは来ますが、医療技術自体はそこまで高くありません。流行病で犠牲者が大量に出る前に医師を置いてみてはいかがでしょうか？」

「うーむ……私としては人里に住むこと自体は構わないのだが、住む場所はどうするんだ？土地が空いてない。」

「それは心配ありません。私の家に住ませます。」

長としては害の無い妖怪が里に住むことは特に問題ではなかった。むしろ、平和主義者の彼からすれば、妖怪と人間が争っている現在の状態が問題だった。だから、慧音の意見に賛同したのだ。（私情も含むが……）そこに問題はなかった。そこに問題はなかったのだが……

慧音から放たれた言葉により、長はただ無言で驚愕の表情を浮かべてしまった。彼が感情を表に出すことはほとんど（と言うか、全く）ない。そんな彼でも（彼だからこそかもしれないが）感情を表に出すほどの驚きだった。今の彼を見た人々はこう思うだろう。「天変地異が起きた」と。それは慧音も例外ではなかった。

「あのー……長……大丈夫ですか？」

「！……いや、大丈夫だ。心配はいらない。」

その言葉が自身に向けて発されたものなのか、それとも慧音に向けて発されたものなのか、それは長自身にもわからなかった。しかし、彼の心の中で少しだけ反対の声が上がったことは間違いない。

これまでに様々な人間を見てきた平には長がどんな気持ちなのかはわかった。この人間は少しだけ、本当に少しだけだが自分にライバル心を抱いている。そう見抜いた。

「では、そういうことで平には私の家に住んでもらうことにします。」

それでは、私はここで失礼します。」

「あ……」

慧音は頭を下げると、長に背を向けて部屋から出て行った。長は慧音の背中に手を伸ばすが、彼女は振り向くことなく部屋を去ってしまった。しょんぼりとした様子の長に平が笑いかける。

「大丈夫ですよ。俺にも慧音さんにも互いに恋愛感情は存在しません。もちろん、彼女を犯す気も全くないので安心してください。」

慧音さんのことが好きなら、早く伝えた方が良いでしょう。時間は待ってくれませんかから。」

平はそう言い残すと、長の部屋を立ち去った。後には呆然とする長だけが取り残された。

平が人里で暮らし始めて1年。平が人里に来たばかりの頃から、彼の医療技術は好評だった。今では里の人気者である。

そんな彼は現在、人里のとある居酒屋に来ていた。その隣に座っているのはこの人里の長だった。

「はあ……あんだ、まだ気持ちを伝えてなかったのか？」

「まだ覚悟が決まらなくてな。フラれたときのことを考えると怖くて仕方がないんだ。」

「フラれるも何も、行動を起こさなきゃ何も起こらないだろ？」

大体、覚悟を決めたって言ってるやつも本当は覚悟できてないことがほとんどなんだからさ。その気持ちがある若いうちに伝えた方が良いぞ。年とってジジイになっちまったら、どうしようもないからな。」

「そう言うお前はまだ生まれて1年と1カ月だろ？」

（前世はあるけど）そうだな。俺はまだ子供だったぜ！」

長と平は「ハハハ！」と笑う。

カタブツの長も気を緩めて話せるほど、彼と平は良い友になっていった。笑顔すらも滅多に見せなかった長の笑顔を見て、他の人々は内心ホツとしていた。同時に、長が誰を嫁にもらうのか？ということも問題になっていた。

長には地位があり、人望がある。20代後半といういい年をした彼が誰を嫁にもらうかは人里の中ではかなり大きな疑問だった。団子屋の娘か、蕎麦屋の娘か、その他諸々まで様々な憶測が飛び交っている。もつとも、長自身は慧音以外の女性には全くと言っていいほどに興味がなかったのだが……

「まあ、人生は人それぞれでいいだろうさ。あんだ自身の言いたいときに言えばいい。ただ、後悔しないように一歩ずつ踏み締めて進みな。人間の寿命は短いんだからさ。」

「ありがとう。やっぱり、平と話すのは楽しいな。」

「れ、礼なんていらねーよ。俺は帰るからな。」

長の突然のお礼に驚いた平は自分の席にお代を置いて、そそくさと帰ってしまった。店内に居るもの全員が平の後ろ姿を見送る。そして、こう思った。「素直じゃないんだから……。」と。

平が人里で暮らし始めて50年。

その日の朝、平の部屋に彼の姿はなかった。そこには「ごめん」と
たった3文字だけ書かれた血だらけの紙が残されていた。

平の過去話

深き地に消えゆ

平は走っていた。絶対に振り向くことはできない。振り向けば、誰かを食らってしまったから……

消えたい。その言葉が彼の心を支配していた。そんな彼からはうつすらと血の匂いが漂っている。

平は50年もの間、人間を食べていなかった。純粋な妖怪である彼が我慢するのは辛かっただろう。それでも、ずっと我慢していたのだ。しかし、最近になってからは人間を食べたいという衝動が抑えられなくなってきた。無意識のうちに感じないようにはしていた衝動は、彼が感じる事ができる程に膨れ上がってきたのだ。

そんなときに彼が受け持った患者は死にかけ、本当に死にかけの少女だった。窮鼠に噛まれ、毒が全身に回ってしまったという。平はその死にかけの少女を見て不覚にも「美味しそう」と思ってしまった。しかし、彼は食の衝動には屈しなかった。衝動が強くなったときは自身の身体に千刃を突き立て、痛みで正気を保った。

数分後、治療は成功。抗体は少女の体内から毒を消し去った。しかし、平の我慢も限界に近かった。彼は自分の腕を切りつけた。蜘蛛は脱皮することで腕や脚くらいなら、また生えてくる。だからこの際、切り落としてしまっても構わなかった。そこまでして、平は人間に嫌われたくなかった。

平は手紙を書いた。紙が血で汚れることなど全く気にならないほどに必死だった。理性と食欲の衝突で必死に理性を勝たせ続けた。食べたくない。人間との仲を守るためには自分が人里を離れる以外に方法はなかった。それが悲しくて憎かった。

慧音から聞いた幻想郷の歴史。平はその中でも嫌われ者の妖怪が住むと言われる地底に目をつけていた。そんな場所ならば、人間はいないはず、いたとしても既に肉の塊になっているはず。彼の好きな人間は心のある命である。空腹もあり、今の彼には命無き屍や心無き人間はただの肉の塊に見えるだろう。

「ハア…ハア…ここが地底に続く穴か…」

地底の穴にたどり着いた平は荒い呼吸をしながら1人つぶやく。平は底が全く見えない暗い穴を覗き込む。ゴツゴツとした岩肌とそのあまりの深さから吸い込まれてしまうような感覚を覚える。

絶対に振り向かない。そう決めた彼は背中から2対の脚を出し、それらを使つて壁伝いにゆつくりと下り初めた。

平は地底へ下り続ける。いや、堕ち続けると言った表現の方が正しいのかもしれない。何故なら、彼は人間の友から、純粋な妖怪への仲間入りをしようとしていたのだから……

途中、岩肌に住む異形の妖怪たちが平に襲いかかったが、彼はブレることなく体術と千刃でねじ伏せた。追い詰められた獣ほど恐ろしいものはいないと言うが、妖怪と戦う彼は正にそれだった。

半分くらいまで降った頃だろうか。平は蜘蛛の巣に金髪の少女を見つけた。蜘蛛の巣に絡まっているように見えるその少女に平の優しさが反応した。平は糸を伝って少女の元まで移動し、千刃で絡まっている糸を断ち切った。

「糸に絡まっているようだったが、大丈夫か？」

「大丈夫だよ。でも、助かった。ありがとう。」

まさか、自分が張った巣に自分がかかっちゃうなんてねえ。」

「ハハハ、それは大変だ。」

「全くだよ。」

互いに笑い合う2人。なかなか気が合うようだ。

話からして、少女も平と同じ蜘蛛の妖怪のようである。それが気の合う原因なのかもしれない。

「俺は蜘蛛島 平。あんたは？」

「アタシは黒谷 ヤマメさ。」

……それにしてもあんた、いい男だねえ。」

「突然何を言うんだ。その言葉、お世辞とか冗談だろ？」

「ふふふ、冗談じゃないよ。焦っているところも良いねえ。お持ち帰りしたくなるねえ。」

ヤマメの言葉に冷静に返す平だが、その顔は赤くなっており、内心焦っていることは見え見えだった。ヤマメのペースに乗せられてしまっている。その様子を見たヤマメはニヤリと笑う。

「じ、じゃあ、俺はこの辺で……」

「蜘蛛が自分の巣に来た獲物を逃すと思うかい？」

「何を言って……足が動かない!?!?」

平はその場を立ち去ろうとしたが、足が動かなかった。彼が自身の足に目を向けると、粘着性のある蜘蛛糸が絡まっていた。ただでさえ、力が入らないというのにこれでは動けない。ヤマメはそれを見て笑っている。平はそこで思った。「この娘、やる気満々だ。」と。おまけに今は空腹でもあまり力が出ない。逃げられないことを悟った平は今が春だということを思い出し、心の中で自身の童貞に別れを告げた。

ヤマメは平に糸を絡め、肩に担いで家まで運んでいった。

平が投げ降ろされたのはいつの間に敷いてあったのかわからない布団の上。平は離してもらえたことでヤマメを傷つける心配が無くなったため、妖力を操り千刃の能力を発動、自身に絡まる糸を断ち切った。平も拘束プレイはごめんなのだ。

「へえー、そんなこともできるんだ。それだけの實力を持っているのになんでアタシから逃げなかつたんだい？」

「女性を傷つけるのは好かない。あと、生まれてこのかた一度も人肉を食ってないことが原因の空腹で、逃げ切るほどの体力が残っていない。」

「ふーん、状況の飲み込みが早くて助かるねえ。（逆に言えば、諦めが早いつてことだけど……）」

平の目の前でヤマメは見せつけるようにゆっくりと服を脱いでいく。平はそんなヤマメから目を逸らし、まだ逃げる事ができるかもしれないと、腰を浮かせたがすぐに力が抜けてぺたんと落ちてしまった。ほとんどの力が尽きてしまったようである。平の脳内に game over の文字が浮かんだ。

「あはは、本当に動けないみたいだねえ。これはアタシがリードしなきゃいけないのかねえ？」

「……もう好きにしてくれ。」

全裸になったヤマメは平の言葉にニヤリと笑みを浮かべて、平の服を全て脱がす。目元近くまで覆うマスクをとったとき、そこにあったのは美青年の顔と美青年らしい柔らかかそうで美しい唇だった。ヤマメはその唇を見て、舌舐めずりをする。

ヤマメは平のその唇と自身の唇を重ねた。貪るように、吸い尽くす

ようにヤマメは強く唇を重ね、同時に身体を擦り付ける。しつとりと、滑らかに張り付く肌の感触が気持ち良い。それでも足りず、今度は半開きになった平の唇を舌でこじ開け、平の口内を犯し始めた。相手の口内を舐め回し、舌と舌を絡ませる。

ディープキスは10分に及び、唇が離れた頃にはヤマメの肌には赤みがさし、息が荒くなっていた。平も口では興味無さそうにしていたものの身体は正直で、息子が既に臨戦態勢を整えていた。ヤマメはそれを見てニヤニヤといやらしい笑みを浮かべ、平は顔を赤くして目を逸らした。

「別に恥ずかしがることなんてないじゃないかい。アタシだって、初めてで緊張しているんだよ。」

「仰向けになった裸の男の上にもたがっているあんたが言えることか？」

「言えるか言えないかじゃないよ。言ったんだよ。」

「あ、そう。」

「さて、アタシもこんなに濡れちゃったし……鎮めてもらおうかねえ。」

ヤマメは平から腰を浮かせる。彼女の股間から透明な糸が伸び、すぐに切れた。ヤマメは平の息子に狙いをつける。そして……

コバルトブルーのお医者さん、蜘蛛島 平は医者として地底をかける。地底は喧嘩事が多く、いかんせん怪我人が多い。そんな彼らの傷を癒すために平は走るのだ。

最初は捕獲され、犯され、ヤマメと同棲を強いられたが、彼は今に満足している。さすがに性欲MAXのときのヤマメはごめんだが……

人間ではない妖怪たちにも心があり、感情があり、思いやりがあり……温かみがあった。妖怪も人間と何ら変わりはない。平はそう思っていた。

地上も素敵だが、地底も素敵。人間も素敵だが、妖怪も素敵。妖怪と人間は違うが、平の中では同じ友だった。彼は太陽を知らないかもかもしれない地底の友にとって、地上の生物を生かす太陽のように皆を助ける存在でありたかった。

「平ー、向こうにも怪我人がいるぞく。」

「わかった。すぐに向かう。」

コバルトブルーは今日も地底をかける。

三章での新登場オリキャラ設定、追加設定

名前 蜘蛛島 平 性別 男

種族 妖怪（大土蜘蛛）

身長172cm 体重65kg 年齢 約300歳

能力 抗体を操る程度の能力

使用武器 妖刀“千刃”

二つ名 コバルトブルーのお医者さん

コバルトブルー・タランチュラの妖怪。かつては医者に飼われている蜘蛛だったが、死んだことにより妖怪化し、幻想入りした。

ヤマメの恋仲…というかもう既にほとんど夫。結婚しているかどうかは不明。名字が変わってないだけかもしれないが、詳細は不明。

性格は真面目、冷静。人間大好き。（最近は地底にいたことで人間に関しては微妙になってきた）争い事を好まないが、それでも戦いは強い。少なくとも、鬼並みには強い。

「さすがスパ○デイ、俺たちにはできないことを平然とやってのける！」

戦闘スタイルは体術と剣術を合わせたもの。弾幕スタイルは広範囲拡散包囲型。

職業は医師。理由は飼われていたときに薬品の効能、用途、傷の手当、病の治療法を覚えたから。的確な治療をするため、なかなかの評判。

服装は忍者装束と額にゴーグル。ゴーグルのレンズの下には（人間で言う）普通の目とは別に目がある。背中には（人間で言う）普通の手足とは別に2対の脚がある。千刃は腰帯に差してある。服の色は青に近い色を中心としている。（青、紫、青緑など）

抗体を操る程度の能力

その名の通り、抗体を操ることができる能力だが、操るだけでなく瞬時に作ることもできる。抗体を操ることでアナフィラキシーショックも無くすることも可能。なんとも役に立つ能力。ウイルスに対しては正に最強の能力。

妖刀“千刃”

その名の通り妖刀。平が幻想入りしたときから、ずっと平の手元にあったが原因は不明。おそらく、飼い主の強すぎる思念が暴走、結晶化してできたものだと思われる。

能力は斬撃の保存。斬撃が当たらなくとも斬撃が太刀筋に残り続ける。設置した斬撃を飛ばすことも可能。一度に保存できる数は千。

ジエット・アルカード

人間と言ったが、正体は吸血鬼。日光耐性持ち。彼の父親が彼を拾ったのは10年前、記憶が消された直後だった。

年前は約500歳。シヨタジジイである。フランとは恋人…というかもう結婚していると云ってもおかしくない。

服装 紺のパーカーだったり、スーツだったりと色々着る。髪型はバイオハザードのステイヴ・バーンサイドに近いが、フードを被ったり、帽子を被ったりしているせいでよくわからない。

能力持ちだが、現在はまだ不明。

ジエイド・スカーレット

長く消息を絶っていたが、世界中を転々として生き延びていた。第一次世界大戦、第二次世界対戦にはイギリスとして参加していたらしい。彼が他の国として戦っていたら、歴史が変わっていた可能性有り。レミアアとは夫婦の関係。

服装 金と白の刺繍がある紫色のロングコートを着用。刺繍はレミアアが縫ったらしい。その下は黒いシャツと赤に近い色のジーンズ。前髪は真ん中を鼻の頂点辺りまで伸ばしており、目の上の髪は目にかからないギリギリにしている。横は耳を完全に隠し、後ろは肩に届いている。

範人が成長し、背が伸びました。身長182cm、体重89kgです。冷仁の身長、体重は範人と全く同じです。

第四章

狩人王と傍若無人なる王

第七十六話

彼岸へ

範人は夢を見ていた。

燃える街、火だるまになった人々、その爪と牙を血で濡らした化け物たち。街中に肉の焦げる嫌な匂いが漂い、響き渡る轟音と悲鳴はフライドチキンの骨にこびりつく肉のように耳から離れない。その様子は正に地獄絵図。

進みたくなくてもそこは夢の中。進みたくなくても夢の中の範人は勝手に歩みを進める。いくら念じてもその足が止まることはない。

ふと、範人が自分の手を見れば、その手は血で真っ赤になっていた。そして、靴を見れば、靴には誰のものなのかわからない：グチャグチャに混ざり合った体組織がべつとりと付着していた。一步踏み出す度にグチャグチャと不快な音と地面に吸い付く感触を伝えるそれに範人は苛立ちを覚える。「チクシヨオ！」と空中に蹴りを入れても、体組織が靴を放すことはない。範人は小さく舌打ちをすると、元のようにならなくなった。

しかし、その足が地面を離れることはなかった。足が上がらないのだ。靴に付着した体組織は地面をしつかりと捉え、吸着してしまっただ。ただ、それだけならまだ良かった。

グチャグチャになった体組織が再生するかのように増殖し、範人の身体を這い登ってきていたのだ。血に濡れてヌルヌルとした肉が：死んで冷たくなっている肉が肌に直接接触して、しかも動いているなど不快以外の何物でもない。

体組織はだんだんと範人の身体を包み込んでいく。そして、体組織はついに顎のすぐ下まで迫ってきて……

「ギヤアアアア！」

範人は目を覚ました。恐ろしい、極上に嫌な夢である。身体中が汗でビツシヨリだった。

時計を見ると、朝の4時。もう早朝である。範人は普段、二度寝は

絶対にしない。範人はすっかり覚めてしまった目を擦りながら、水を飲むためにキッチンへ向かった。



家の中には範人以外誰もいない……はずだったが、何故カリビングの明かりが点いていた。

最初、範人は紫だと思った。しかし、開いている窓を見て、そこにいる者が誰なのかを確信した。窓から入ってくる者など、この幻想郷では1人しか知らない。

彼の思った通り、リビングにいたのは赤髪の女性だった。

「誰だ？」

範人は威嚇するような低い声を出し、女性に覇剛剣アルゴスを背後から突きつける。振り向いた女性は範人の鋭い目付きと自身に向けられている刃物にギョツとした表情を浮かべた。しかし、一瞬で表情を落ち着かせ、範人に話しかける。

「範人、あんた……アタイの顔を忘れたのかい？」

女性の言葉に範人はフツと笑い、剣を下ろす。彼自身、攻撃するつもりは全くなかった。ただ単に、剣を突きつけた方が面白そうだったからで、そうした方が話しやすいと思ったからである。これくらいの冗談が彼らには丁度良かった。

「忘れるわけねえだろ、こまつちゃん。」

「楽しみを求めるその性格は相変わらずだねえ。」

女性：小野塚 小町は範人を見て苦笑する。そして、彼の様子を見て、ずいぶん成長したということを感じとった。

客を待たせては悪いと思った範人が提案をする。

「何の用かはお茶でも飲みながらゆっくりと聞こう。入れてくるから、待っていてくれ。」

「もちろん。ついでにマイ箸も持ってきたよ。」

「朝飯食ってく気満々かよ……」

範人は苦笑し、キッチンに向かう。数十秒後、紅茶パックの入った

ティーカップとお湯の入ったポットが範人によって、運ばれてきた。お湯をティーカップに注ぐと、数秒後には紅茶の香りが漂い始めた。範人は紅茶を飲むことなくキッチンに戻り、適当に朝食を作り始めた。朝食には少し早いのが、彼にとつては大した問題でもなかった。そもそも、お客を待たせることの方が彼にとつての問題だった。お客ではなく、不法侵入者とも言えるだろうが……



「なるほど、それでここに来たと……」

「ああ、そうだよ。映姫様が『会いたい会いたい』ってうるさくてねえ。アタイもおちおち寝てられなくてさ。」

で、来てくれるかい？」

「(仕事中に寝ているあんたが悪い。)ああ、良いよ。映ちゃんが待っているんだろ？」

「よしっ！ありがとうございます。さあ、早く行くよ！」

範人は小町の言葉に苦笑いしながら答える。その答えを聞いた小町は大喜びし、範人の腕を強く引つ張る。範人はその手を軽く振りほどき「準備がある」と言つて、シャワーや着替えなどの身支度に向かった。

数分後、戻ってきた範人の姿はいつもと少し違い、白衣の代わりに白いラバーコートに来ていた。本人曰く、ちよつとしたオシャレだと言う。前を開けている時点でそちらに目が行つてしまい、いつもと大して変わらないような気がするのだが……

「あの白髪の娘は連れて行かなくてもいいのかい？」

「ん？白髪……ああ、妖夢のことか。今日は休暇をもらってないらしいから、連れて行くことはできないな。」

「そうかい。じゃあ、行くよ。」

小町の言葉に範人は少し考えながらもなんとも普通に答える。範人としては一緒に居る時間が長いことは嬉しいのだが、さすがに本来の仕事をしたくないということを良いこととは言えない。幽々子なら普

通に休暇を与えそうだが、今日はしっかりと白玉楼で仕事をしてもらうことにしていた。

範人と小町は小町の能力を利用して、たった数歩で三途の川岸に辿り着いた。



コックリコックリと揺れる船。霧囲気のせいか、三途の川の水の色はどこか赤く見える。そんな川を横切る船の上には男女が一組。彼らが話に花を咲かせていたため、その周りだけは澄んだ水が流れているように見える。周りを通る船の死神や亡者たちはその様子を羨ましそうに眺める。

小町は良い話し相手だ。サボり癖を良くは思えないが、話し相手としてこれほど良い者はいない。聞き上手であり、同時に話し上手。彼女の話し方にはどこか惹かれるものがあり、聞き方も時折打つ相槌が話す者をリラックスさせる。

範人は元の世界での仕事のこと、そして、自身の起こした破壊について話した。小町はその全てを真剣に聞き、全てに対して的確に返した。全てを話し終えた範人はスツキリとした表情になっていた。

「範人も大変な仕事をしているんだねえ。やっぱり、あんたはすごいよ。」

「そう言ってもらえるとはね……ん？ありがとうございます？」

「なんでそこで疑問形になるのさ？」

でも、まさかあの時の大量の亡者たちの原因が範人だったとは……まあ、ほとんどが悪人だったから仕方ないね。」

話している内に船は岸に辿り着いた。どこを向いても目に入る色は赤が混じっている。その血ともトマトとも言えない赤は現世とは全く違う雰囲気醸し出していた。ある意味、Dr. bloodにはお似合いの場所だろう。

範人が岸に降り立った途端に周りの死神たちの視線が一気に彼に向けられる。何度も死にかけ、その度に圧倒的な生命力で蘇った範人

は彼岸で伝説として語られ、彼岸では超有名人なのだ。そして、彼岸の常連になったことで気がつけば、閻魔：四季 映姫・ヤマザナドウトも仲が良くなっていたのだ。

範人が映姫の元へ向かって歩いてみると、周りの死神たちが挨拶を交わしてくれる。中には酒を勧めてくる者もいた。有名人というものはこのように様々な特典が付くもののだが、それは同時に噂が立ちやすいということでもある。そのため、あるときは閻魔である映姫と付き合っているなどというかなり衝撃的な噂が立ったことさえある。現在はそういった噂も落ち着いてきたが、妖夢と付き合っているという事実が広がったせいだ……

「やあ、範人さん。妖夢っていう娘と付き合っているって聞いたけど、今日はその子を置いて、映姫様の相手をするのかい？」

いつの間にか立っていた噂を聞いて、範人は小さくため息を吐く。彼自身、噂が立つことは仕方がないことだとわかっているのだが、浮気をしているなんて噂はまっぴらごめんである。

範人は声をかけてきた死神に超速の弾幕を飛ばし、誰も気づかないように一瞬で気絶させた。死神はその場に立ったまま、白目をむいて気絶しているが、範人はそれに構うことなく歩みを進めた。



範人と小町が辿り着いたのは巨大な扉の前。その扉の向こうには映姫が居る。

範人が扉をノックすると、突如として扉が開き、1人の少女が飛び出してきた。驚いたことで動けなかった範人は飛びつきをモロに受け、仰向けに押し倒されてしまった。

範人は映姫の行動に苦笑する。体格故に決して重くはないのだが、恋人のいる身としてはその体制はなかなか危険なものがあった。

映姫は苦笑する範人の心などお構いなしに挨拶をする。

「範人さん、久しぶりです。」

「映ちゃん、久しぶり。口調と行動が噛み合っていないんだが？」

「ふふふ、お話は中でしましょうか。小町はここまででいいですよ。」
「え？は？？いきなり！？」

映姫の言葉に小町はそそくさとその場を退散しようとする。範人は助けを求めるように小町に手を伸ばすが、映姫に引きずられて扉の向こう側へと消えていった。範人の身体が扉の中に完全に入ったところで扉はボタンという音を立てて閉じた。

1人になった小町が小さく笑いながら、つぶやく。

「さーて、映姫様もしばらく出てこないだろうし、昼寝でもしようかねえ。」

第七十七話

範人は映姫によって、閻魔の部屋へ引きずり込まれ、その更に奥にある彼女の自室に連れ込まれた。見た目が幼女と言えども、映姫は閻魔：神の一種である。力は相当なものであり、範人はソファに無理やり座らせられた。

少女の部屋に少女と2人きり。今の様子を妖夢に見られたら間違はなく彼女のヤンデレが発動するだろう、と範人は思った。そんな風に内心ヒヤヒヤしている範人の隣に映姫が座り、普段の彼女には絶対にはありえない砕けた口調で話し始める。

「実際に会うのも、こうやって話すのも久しぶりだね。」

「そうだな。最後に会ったのは確か……2年くらい前だったか？懐かしいな。」

「あの頃はよくここに来てたよねー。何度も何度も死にかけて。」

「まあ、ミッシヨンに慣れてからは戦闘技術も上がったし、何より身体の再生能力が強化されたからな。死から遠ざかるのは仕方ないことだったんだ。」

2人は過去を振り返り、懐かしむ。過去を振り返るだけで2人は自然と笑みをこぼしていた。

かつての範人はミッシヨンが第一という冷酷なエージェントだった。その頃はミッシヨン遂行のためなら、躊躇うことなく殺したし、消した。その頃の範人にとって、敵となる人間は人間に見えず、生物兵器と同様にただの破壊すべき肉塊だった。その頃の範人には気の休まる場所があまりにも少なかった。そんな彼の休める場所が死にかけたときに辿り着ける場所……彼岸だったのだ。

最初、範人が彼岸に来たときの映姫は冷たかった。仕事とは言え、平然と殺しを行う範人は、映姫にとって正に黒だったのだ。もちろん、映姫は彼を裁こうとした。しかし、範人は裁かれる前に死にかけた身体を回復させて、元の世界に戻ってしまった。映姫が範人に伝えられた言葉は0、ただ冷たい目線と態度だけだった。しかし、その日から範人が変わった。殺すことを躊躇うようになり、相手を殺したこ

とに対して深く反省するようになった。映姫にとって、ここまで変わった人間は初めてだった。映姫は範人を認めるようになり、範人も気がつけば映姫と親しくなっていた。

思い出に浸る範人に映姫が質問する。その質問はある意味、してはいけない質問だった。

「でも、2年前から全く来てないよね。どうしてなのかなあ？」

「映ちゃん、それは聞かないでもらいたかったんだが……」

「えー？いいでしょう？教えてよ。」

「……わかった。だが、間違いなく映ちゃんから見た俺の評価は下がるからな。」

範人は話す、2年前に範人が初めて完璧にこなせなかったミツシヨンのことを。燃える街と本当に化け物になった自分のことを。知らない方が幸せだろう。知らない方が日々を安心して過ごせただろう。範人の罪はあまりにも大き過ぎ、奪った命はあまりにも多過ぎた。そして、そのときの範人は元よりも増して冷酷だった。

範人はなるべく速いスピードで話し終えた。起こした失敗は数あれど、あの失敗だけは思い出しなくなかった。

「それは……辛かったね。」

しかし、映姫は叱らなかつた。いつもの彼女なら、間違いなく叱っていただろう。どんな小さな罪も彼女にとっては等しく罪。だが、範人を黒にはしたくなかつた。心のダメージが復活している今の彼を叱責すれば、理性の崩壊と暴走は必然。だから、今だけは自身の能力さえも、うやむやにした。裁かれる者だけでなく、裁く者も辛いのである。

「それにしても、範ちゃんは大きくなったね。私なんてずっと小さいままなのに……」

「それは身体のことか？」

「そう……」

映姫は範人に悩みをぶつける。種族が種族なため、成長が遅いことは仕方ないのだが、やはり身体のことには映姫にとってコンプレックスだった。女性としては気になるところらしい。

シヨンボリとする映姫の頭を範人は優しくポンポンと叩く。

「まあ、胸の大きさとかあまり気にしなくていいと思うぜ。大事なのは心だし。それに今の映ちゃんも充分可愛いと思う。」

…って、これ妖夢に聞かれたら殴り飛ばされかねんな……」

範人は手を離すと、自分の頭を掻きながら言う。今の言葉は紛れも無く純粋な彼の本心である。映姫に対して恋愛感情のような好意は全くないが、大切な友としての純粋な意見である。

可愛い という言葉が映姫の心に深く、優しく、喜びとして突き刺さる。その嬉しさと恥ずかしさを隠すために映姫は範人に抱きつきたいと思ってしまう。普段は厳しい彼女も友である範人の前では可愛らしい普通の少女なのだ。

ふと、映姫は自身の中にある範人のイメージを考えてみる。大人っぽくてカッコよくて、でも無邪気な子供みたいなところもあって、強くて優しい。範人はその生物的な種類以外は世の女性にとって理想の男性像に当てはまるだろう。

映姫は何かを言おうとし、口をつぐんだ。ここでその言葉を言っても上手くいくとは到底思えなかったのだ。代わりに違う話題を取り出す。

「ところで、範ちゃんは恋人がいるんでしょ？どう思ってる？」

「妖夢のことか？」

あいつは俺が初めて心の底から恋愛対象的な意味で好きになった相手だからな。可愛いよ、本当。あいつは俺にとって最高の彼女だ。

本当に今更なんだが、誰かを好きになるってこんな感じなんだな、って実感している。こんなに素晴らしいことだなんて思ってたかった。あいつと一緒にいると、毎日が楽しくて、最高にハイってヤツなんだ。

…まあ、夜になる度に性を交えようとしてくるのは勘弁だけだな。」

映姫の質問に、範人は迷わず答えて苦笑する。迷わず答えられるということはそれだけ愛しているということなのだろう。範人の性質を知っている映姫はホッと安心し、同時に一部真面目すぎる彼に対し

て、他のことが心配になってきた。

「じゃあ、範ちゃんも童貞卒業したの？」

「いや、まだだ。年齢がまだ18歳に届いてないからな。」

「そう…それなら、童貞を失うことが怖い？」

「…正直、怖い。何があるかわからないから……」

映姫は「やつぱりか……」とため息を吐く。やはり範人はルールに対して忠実過ぎる。実際、範人くらいの年齢で付き合っているなら、卒業していても決して珍しくないのである。おまけに童貞を失うことが怖いときた。映姫は、チャンスが回ってきたのではないのか、と期待してしまう。

「じゃあ、私が教えてあげようか？」

そう言つて、映姫は服に手をかける。しかし、範人はそれを無言で止めさせた。映姫が見た範人の顔は真剣で、同時に威嚇するような鋭い気を放っていた。

「そういう関係になる相手は過去も未来も妖夢だけが良い。あいつのことが好きになったんだ。他の者とはそういう関係は絶対に持ちたくない。」

「ふふふ、わかっているよ。冗談だよ、冗談。範ちゃんがどれだけ真つ直ぐか調べたかっただけ。」

やはり、大切なところはとことん真面目な範人に他人からの誘惑は効果がない。彼に効果がある誘惑ができるのはやはり、妖夢だけなのだろう。妖夢が彼を好いている理由も彼の真つ直ぐなところがかなり大きいはずだ。見た目もかなり理由になりそうだが……

「さて、俺はそろそろ帰る。久しぶりに会ったけど、元気そうで良かった。」

範人は立ち上がり、扉に向かう。しかし、不意に歩みが止まった。その腰には映姫の腕が背後から回されている。映姫はもつと彼と一緒に話していたかった。彼の優しさと心に響く温もりを感じていたかった。

驚いた表情で背後を振り返っていた範人だったが、数秒間の沈黙の後、フツと微笑み、映姫の腕をふりほどいた。そして、歩き出す。

「安心しろ、また来る。」

長く使われるために作られたB・O・Wの寿命は長いし、死ねばここへ来ることになるんだろう？また会えるさ。

死んだときは正しい裁きを頼むぜ、閻魔様。」

範人はそう言い、右手を振りながら去って行った。

扉の向こうへ、現世の方角へ消えていく範人の後ろ姿を映姫はただ黙って見つめていた。範人がその視線に込められた意味に気づくことはきつとないだろう。彼の心は既に妖夢に向いてしまっているのだから。それが友として嬉しくて、でも、範人が離れてしまったようで悲しかった。映姫の胸の中にある悲しくも愛おしいモヤモヤした感情はきつと、そこから来るものなのだろう。

もう範人には妖夢がいるとわかっていても、もうこちらにその感情が向かないとわかっていても悲しい。だって……

「範人さん……貴方はやはり罪深い^黒です。私をこんなにしてしまうんですから……」

範人のことが好きだったから……

第七十八話

ドドドン！バリバリ！

雷が落ちたような音が鳴り響く場所は紅魔館の門前。パッチと範人が勝負をしていた。しばらく前に交わした戦いの約束を2人は今実行に移している。

辺りに飛び散る物は赤い炎と燃える血。この世界の終焉を絵に描いたような兵器の戦いは、もはや生物の戦いではなかった。

その戦いの中でも一際目を引くものがある。それは変異する彼らの身体でも、本当の意味で熱い血潮でもなかった。

「クハハハハハ！楽しいなあ、パッチ。こんなに燃える戦いは冷仁以来だぜえ。楽しすぎて狂っちゃまいそうだ！」

「そうですね。僕も楽しいです。こんなに燃える戦いなんて滅多に味わえませんよ。」

でも、範人さんは既に狂っていると思えますよ？」

一際目を引くもの、それは2人の笑顔だった。殺し合いという言葉では生温い…もはや戦争というレベルの戦いの中でも、2人はその戦いを楽しんでいたのだ。それを傍観しているジエツトとジエイドは啞然としていた。

「じゃあ、僕の新しい力を見せてあげます！」

トライコーン！」

パッチの左手が変異し、弓のような形になる。弓の中央…本来なら矢をつがえるべき部分なのだが、その部分には骨がセットされていた。

パッチは左手に力を込め、範人に向けてその骨を発射した。骨は高速で回転しながら、一直線に範人を貫こうとする。

だが、範人がパッチの飛び道具を警戒していなかったわけがない。すぐさまアルゴスを発現させて盾のように構える。

骨の弾丸はアルゴスに直撃し、弾かれる。剣を持つ範人の手には弾丸を受けた金属の振動による痺れが伝わり、範人はどこか気持ち悪いその感覚に呻き声を上げる。

しかし、パッチが攻撃の手を休めることはない。弓のようになった腕に次々と骨をセツトし、発射する。それらも範人は剣でガードするが、腕に振動が伝わり、だんだんと剣を握る手から力が抜けてくる。

「宣言しましょう。僕は次の一撃でその剣を弾きます。」

ストウレラツ！」

「Ha! Try and do it!」

パッチの言葉に、範人はニヤリと笑みを浮かべ、「やってみな」と返す。しかし、その表情に余裕はない。範人の手は度重なる振動に痺れ、震えていた。

パッチは左腕に力を込める。すると、左腕は弓のような形状から変化し、エリマキトカゲのような形状になった。

パッチは範人に狙いをつけ、その左腕にさらに力を込める。直後、パッチの腕からは1本の巨大な針が発射された。

針は範人の持つ剣に直撃。範人はその手に力を入れたが、そのスナイパーライフルを超えるほどの衝撃に剣はあつけなく弾き飛ばされた。しかし、範人の顔に浮かんでいたのはこの上ないほどの笑いだった。

「これほどまでのパワー・・・良い、実に良いぞ！」

もつとだ、もつと楽しませろオオオオ！」

範人の叫びとともに彼の身体が白い甲殻に包み込まれる。範人はその尻尾で地に刺さった剣を引き抜いた。剣は帯電し、青白い光を放ち始める。それを見たパッチの額には汗のしずくが一粒。範人は狂気じみた笑い声を上げていた。そんな範人を前にパッチは本気になることを決めた。

「いいですね。では、僕も本気になるとしましょう。」

『type—C 禁忌の繭』！」

パッチがその身体を丸めると、サナギが発生。パッチの身体を包み込んだ。

しばらくの沈黙の後、サナギから巨大な羽が現れ、サナギから異形が飛び出した。言うまでもなく、パッチの変異である。

目の前に現れた異形に範人は笑みをさらに大きくし、パッチに飛び掛った。そのあまりの脚力に踏み込まれた地面が爆発し、青年の姿は消える。その直後、パッチの頬が浅く切れた。パッチが振り向くと、そこには激しく電気を纏う範人の姿があつた。尻尾の剣には血が着き、燃えていた。範人は熱が伝わる前にその剣を投げ飛ばす。

範人は狂ったような満面の笑みを浮かべていた。

(恐ろしい程の狂気だ。まるで、狂乱を形にしたような……でも、殺気が全く感じられない。)

そこでパッチは気づいた。

今、範人が自身を制御するために使っている力は理性ではない。変異の力を限界まで使用するとき、理性では自身を抑えることができないのだ。範人は身体の制御を狂気に任せ、自身はその狂気の操作をしていた。例えるならば、狂気が増幅器の役割を果たし、大容量の身体を増幅させた理性で操っている状態だ。生物としては非常に危険な状態である。

(マズイー早く止めないと！)

パッチは右腕のライフルに弾を装填。範人に向け至近距離で発射し、後退した。しかし、それが範人に直撃することはなかった。

キュイーン……

金属と金属が擦れ合うような音を放つ部位は尻尾。尻尾の先で弾を受け止めている。範人が尻尾の先を尖らせて硬化させたのだ。尻尾は弾丸に刺さっていく。そして、弾丸の耐久力が限界に達したとき、ついに弾丸にヒビが入った。

ドオオン

瞬間の大爆発。範人は爆炎に巻き込まれ、パッチはホッと一息吐く。パッチの計略に範人はまんまと引つかかったのだ。

t | Veronicaの能力に血液の発火というものがある。感染者の血液は酸素に反応するのだ。

今回の爆発はその応用。骨の弾丸の中には発火する血液がたっぷり詰まっていた。骨にヒビが入ったことで、空気中の酸素に血液が反応したのだ。

爆炎の後に残る黒い煙。そのせいで中は見えないが、範人が動く気配はない。パッチは範人の行動停止を確信する。

「ふう……止まりましたか……!?」

しかし、それは甘い考えだった。

気がつけば、パッチは金属の粒子に囲まれていた。そして、黒い煙の中では青い稲妻が走っている。まるで、雷雲のように、煙からは電気の光が漏れだしていた。

「雷符『エレクトリックウエブ』」

煙から飛び出す青い稲妻。それは空中に浮かんだ金属の粒子を伝い、パッチを取り囲む。唯一通り抜けられる場所はパッチの正面、煙の方向。パッチはだんだんと逃げ場を狭めてくる雷から逃れるため、正面に進んだ。

瞬間、範人が煙の中から飛び出し、パッチにストレートパンチを放つ。咄嗟に、パッチは右腕でそれをガードした。しかし、予想外の力に押されたパッチはあっけなく上空へ吹っ飛ばされた。電気のネットが身体に直撃することは翼で防ぐ。それでもやはりダメージは大きい。電流で発熱した翼が何箇所も同時に弾けた。もちろん、機動力は低下する。

(マズイ……このまま長時間の戦いは流石に無理がある。早く決めないと……)

ここが勝負時であると判断したパッチは範人の様子を伺う。ところどころ焼け焦げた甲殻が痛々しいが、範人はまだピンピンしていた。その傷ついた甲殻も既に再生が始まっている。長時間の戦いになれば、パッチに勝ち目はない。

パッチはスペルカードを取り出し、詠唱する。

『リミッター解除 C―ガルダ』！』

パッチの身体から紫色の炎が噴き出し始める。今のパッチの最強モード。

パッチは身体の表面を包む靄の弾幕を自身の形で漂わせる。それは範人にぶつかる前に爆発。眼前での爆発に範人は思わず目を瞑り、後退した。範人は煙の中に後戻りする。

「よし！今なら……」ルウカ・カヴァタネ！

パッチにとつて、この変異は賭けだった。もしも範人が怯まなければ、パッチの次の一手はなかっただろう。

パッチは左腕を変異。ムカデのような形にして、煙の中に居るであろう範人に伸ばした。何かを掴んだ感触と同時に伝わってくる痺れるような痛み。パッチの左腕は範人を捕らえたのだ。しかし、掴んだままでは電気が伝わり、パッチ自身が危ない。パッチはその左腕を切り離し、右腕を空に向けた。

「ガアアアアア！」

煙の中から響く叫び声。

左腕は切り離しても燃え続ける。それにしつかりとグリッブされた範人は身体を焼かれていた。今の変異は炎ではなく電気。高熱に対する耐性はそれほど高くない。先ほどの爆炎に耐えた範人も直接の熱には耐えられなかった。熱はしつかりと伝わってくる。

左腕はあつと言う間に燃え尽きた。それが燃え尽きたとき、範人にはまだ意識があつた。しかし、炎に焼かれた胴体、パッチの左腕を外そうと必死に掴んでいた右腕は既にほとんど使い物にならなくなっていた。

「やってくれるじゃねえか……」

範人は使い物にならなくなった右腕を左手で掴むと、肩から引き抜いた。左手と口を使って右手を突き形にすると、煙の向こうにいるであろうパッチに向けて槍投げのように投げつけた。

煙の向こうで何かが突き刺さった音を聞いた範人はゆっくりと大きく息を吸い込み始めた。焼けた腹が痛むが、それは我慢。次で決める。

「うっ……!?？」

腹部に走る猛烈な痛み。その原因が腹部に突き刺さった範人の右腕であることにパッチが気づくには少々時間がかかった。

しかし、パッチがその右腕を下げることはない。晴れ始めた煙の中に電気を口内に溜めている範人の姿が見えたからである。

2人がスペルカードを詠唱するのは全くの同時だった。

「コレデ終わりダア！滅却光『レギア・ソリス』！」「勝てなくて
もオオオオオ！絶対に負けねエエエエ！電磁砲^{レールガン}『パラケルススの魔
劍』！」

上空からは破壊力抜群の太陽光線が範人に、地面からは致命的
高圧の電気がパッチに向かう。2人の位置関係はほとんど真上と真
下。2人の全身全霊の攻撃はぶつかり……

合わなかった。

電気と光ではエネルギーの形が違う。そのようなものが綺麗
にぶつかり合い、相殺し合うわけがなかった。

「ああ……やはり勝てませんでしたね。」

「言っただろう？負けないと……」

範人もパッチも変異を解く。（パッチの場合はスペルカードだ
けだが）パッチは腹部に大穴と左腕欠損。範人は胴に重度の火傷と右
腕欠損。2人とも、既に動けるような状態ではなかった。

攻撃は互いに直撃。2人は一瞬のうちに意識を失い、地に落ち
た。

勝負の結果は引き分けに終わった。



「……ん？」

「どうなさいました？」

「いや、向こうで何か光った気がしたんだが…気のせいか……」

湖の方で何か光ったような気がしたが、私にそんなことを気にしている時間はない。私は急がなければならぬ。

あの方が与えてくださった使命を果たすにはまだ兵が足りないのだ。譲り受けた兵の数は5000と α 。しかし、まだ足りないだろう。あの化け物の相手をするにはこれでもまだ心許ない。最終的には私自身も戦うことを覚悟しなければ……

いくら忠実でも戦闘になってしまった場合、勝てなければ意味がない。本当のところは戦わせること自体惜しい。

しかし、最優先はあのお方の命令。私の思いなど二の次だ。

「しかし…兵にできる者が居ない……」

兵たちに囲まれて、私は一人呟く。ある一定以上の大きさの生物が居れば、すぐにでも兵にできる。しかし、その生物が見当たらない。ここまで来ても私はついていけないのだろうか？

そんなことを考える私の上を何か飛んで行った。見上げれば、それは翼の生えた人間のような生物。俗に言う、天狗だろう。

……あの飛行能力、兵にできるなら最高だな。

私はその天狗が飛んで行った方向を目で追った。天狗ほどの知的生命体ならば、集団で生活していてもおかしくないだろう。もしもそうならば、飛んでいった方向には間違いなく集落があるはずである。兵を増やすにはもってこいだ。

方角を完全に記憶してから、兵たちに呼びかける。

「みんな…これから移動する。目的地に着いたら、すぐに戦闘するところになるかもしれないから準備しておいてくれ。」

私の呼びかけに兵たちは黙って頷く。本当に忠実な良いヤツらである。こんなにも良い兵なのに、話せる者が少ないことが嘆かましい。

私が指差した方向に向けて、兵たちは一斉に歩き始めた。その様子を見ながら、私はあのお方を思い浮かべて呟く。

「全てはファースト様のために……」

ハンターキングを捕獲する。

第七十九話

「む！あれは……」

望遠鏡を覗いているのは1人の白狼天狗。哨戒の仕事に就いている彼はある軍団の動きを観察していた。

軍団の人数……5000は下らない。ほとんどの者が人間のような姿だが、人間でない者も居る。

その軍団はまるで1つの巨大な生命体であるかのように統制がとれており、ゆつくりと此方……天狗の里へ向かって来る。その様子は恐ろしく不気味だった。

このままでは間違いなく何か悪いことが起こる。

そう思った白狼天狗は1人眩く。

「これは天魔様に報告を……」

白狼天狗は一体の紙で出来た式神を取り出し、それに向けて何か呪文のような言葉を唱えると、空中へ投げ上げた。瞬間、風が吹いて、天狗の里……天魔の屋敷の方へと式神が飛んでいく。

白狼天狗はホツと一息吐き、再度軍団の観察をする。直後、彼は驚き目を見張った。



天魔の屋敷。天狗たちを束ねるリーダーであり、鬼の居なくなった妖怪の山ではトップに立つ者の屋敷。その屋敷に1体の式神が舞い込んできた。

天魔はそれを拾い上げ、すぐに能力を発動する。天魔の脳内に式神を飛ばした白狼天狗の視界が映し出される。

天魔の能力は『感覚を共有する程度の能力』。決して戦闘向きとは言えないものの、仲間たちを見守るリーダーとして最適な能力である。天魔は全ての天狗たちと感覚で繋がっているのだ。

「な、なんだこれは!？」

天魔は映し出された光景を見て、それを実際に見ている白狼天

狗と同じように目を見張った。

人間？ 達の前に踊り出た複数の狼達。 大方、腹を空かせていたのだろう。 しかし、人間？ 達が恐れる様子は全く無かった。

人間？ 達は飛びかかってくる狼達を1匹残らず捕獲し、縄で縛りあげたのだ。 縄で縛りあげる、そこまでなら、まだ普通だった。

人間？ 達は狼達の口を無理やりこじ開け、自身らも口を開けた。 人間？ 達の口内から出てきたものは気持ちの悪い虫のような何か。 人間？ 達はソレを狼達の口に無理やり突っ込んだのだ。 ソレらは狼達の喉の奥へ消えていった。 直後、異変が起きた。

狼達が吐血し、地面に倒れ込んで一瞬動かなくなる。 しかし、すぐに立ち上がって、人間？ 達に甘えるように擦り寄っていたのだ。

凶暴な狼達が何故？

原因はわからないが、ともかく、これは恐ろしいことである。

恩を買いたくはないが、今は仕方がない。 天魔は妖怪の賢者：

八雲 紫の名を呼んだ。

「ハアーイ♪ゆかりんよお〜♪呼んだ？」

「う、うむ……」

紫は決して悪いヤツではない。 悪いヤツではないことはわかっているのだが、このテンションと何を考えているのか読めないところが天魔は好きになれないのだ。

「何者かがこの天狗の里へ侵攻してきているらしい。 こちらにも充分な勝機はあるが、いかんせん敵の兵が多く、敵の正体も明白ではない。 すまないが、応援と調査を頼めないか？」

天魔は何が起きたのかを詳しく説明した。 その光景の恐ろしさを一切も欠かすことなく。

「わかったわ。 丁度、そうだったことのプロフェッショナルも助けてくれそうな人たちも知ってるから、任せなさい。」

「かたじけない。」

天魔の頼みに対して、紫は自信満々にその豊かな胸を揺らして答える。 天魔はそれを見て苦笑いした。 紫は、ふふふ♪と笑うと、小さな天魔を抱き寄せた。 紫の行動に、天魔は驚きを隠せない。

現在の天魔は歴代の中で最年少。1000年生きているから怪しいほどに若い。それ故なのか、天魔は見た目が幼い。人間で言うところの小学生高学年くらいの少年の姿である。

天魔の背丈の対して、紫は背が高い。天魔の顔は紫の豊満な胸に埋まる結果となった。成人男性にとっては至福だろうが、少年にとっては拷問。その光景はどこかエロい。

数十秒後、紫は天魔を離れた。天魔はゲホゲホと苦しそうに咳をする。

「じゃあ、後は任せなさい。」

「う、うん……」

あまりの驚きに地位を忘れ、幼い少年のような返事をする天魔。紫はその反応に満足したようにスキマに潜っていく。天魔は彼女の後ろ姿を呆れ顔で見ることしかできなかった。



範人は紅魔館の一室で目を覚ました。傷は既に全快しているため、痛みはない。だが、相変わらず、部屋一面に敷き詰められた紅が目に痛い。

ぼんやりとする意識を覚醒させていると、部屋にスキマが開き、紫が現れた。

「範人、喜びなさい。バイオハザードが発生したわよ。」

「喜ぶことじゃねーだろ。」

で、どんなウイルスが相手なんだ？」

「それがウイルスじゃないらしいのよ。なんでも、寄生虫みたいなものらしいわ。」

「なるほどな……プラーガあたりか。」

プラーガ。生物の脊椎に寄生し、宿主を意のままに操ってしまふ恐るべき生物。ヨーロッパのとある山村で集団寄生が起き、村一つを壊滅させたという報告もある。

そんな生物が何故？ 外の世界でプラーガが忘れ去られたとで

も言うのだろうか？あるいは、誰かが持ち込んだ……

範人は考えることをやめた。考えても仕方がない。既に被害が出ていると言うのなら、被害を最小限に抑えることが最優先である。

「わかった。要は、寄生されたヤツを処理すればいいんだな？」

「まあ、簡単に言えばそう言うことよ。頼まれてくれるかしら？」

「その依頼、引き受けよう。場所は？」

「妖怪の山よ。今回は敵がだいぶ多いみたいだから、お友達も呼んでおいたわね。」

「は？友達？」

紫は、ふふふと笑って指を鳴らす。その瞬間、空中にスキマが開き、人間達（人外ばかりだが）が落ちてきた。その中には狩人王の顔見知りの姿もある。範人は、他人の扱いが相変わらずだと苦笑する。

十数秒後、現れた全員が何かに気づいたようにハッと表情を変え、範人の方を向いた。最初に口を開いたのは高校一年生くらいの少女……白だった。

「範人さん！お久しぶりです！」

「久しぶりだな、白。そして、他のみんなも久しぶり。」

……初めましてのヤツもいるみたいだが？」

「役に立ちそうだったから、連れてきたわ♪あと、志願兵も。」

範人の疑問に紫は自慢するかのよう胸を反らして答える。青年は不思議そうな表情を浮かべ、訪問者たちを見るが、ほとんどが首を横に振ったところを見ると志願兵は居ないらしい。そんなことだろうと思つた、と範人はため息を吐く。どちらにしろ、帰すのは紫なのだから、戦いには参加してもらうほかにない。

頭を押さえる範人を横目に紫はスキマの中へと帰って行く。

「ウチの姉がすまないな。どうにも自分勝手なヒトで……」

「いや、まあ……気にする必要はない。突然連れて来られたあたり、ここで何かが起こっているのだろうか？」

「私は少し面倒だけどね。」

「本当に申し訳ない……」

フオローされたと思つたら、そこからまた落とされる。範人のやる気は一瞬にして底まで落下した。しかし、彼のやる気など寄生虫退治には関係ない。

テンシヨンは低いものの範人は今回の状況、戦いについて話し始めた。



「なるほど、銃火器はあんたの持っているものを使えばいいのか。(あんたの家は武器庫かよ……)」

「その寄生虫、何匹かサンプルとしてもらつていいかな?」

「……好きにしてくれ。」

今回の戦いについての説明、それぞれの自己紹介が終わつた。明菜を除き、他全員が能力を保有していたり、体内に機械を仕込んだりしているという見事なまでの人外軍団である。もつとも、1人だけ最も人間らしい明菜も全く動揺していないあたり、彼女も人外に限りなく近いタイプの人間なのだろうか……

「説明は終了だ。銃火器はテキストに出しておくから、使いたいものを持つていつてくれ。」

「私はこれにするのだ!」

アンが手に取つた銃はコルトガバメントとシグP245。こんな小さい子がコルトなんて持つて大丈夫か?と思う一同だったが、本人が選んだのだから大丈夫だろうと自身に無理やり言い聞かせ、それぞれの武器を手を取つた。

そんなとき、部屋の扉が開かれた。

「その戦い、俺たちも参加させてもらえないかな?」

そこに居たのはジェイドとジェット。2人の吸血鬼は返事も聞かず、部屋の中に入ってくる。おおよそ、範人なら断るはずがないだろうという考えなのだろう。実際、その通りだった。範人は断る気が無かつたし、断る理由も無かつた。ただ、その参加理由が気になつ

た。しかし、それを訊ねる必要はなかった。

「ここしばらくは暴れてなくてな。少し暴れ足りなかったんだよ。生物兵器相手なら、ぶっ殺すつもりで戦ってもいいだろう?」

ジェイドの口から飛び出た恐ろしい言葉と紅く輝く瞳に、その場の全員は苦笑いするしかなかった。

数分後、全員の装備が整った。範人が指を鳴らすと同時に床にスキマが開き、戦士たちは戦場に導かれた。



パッチは紅魔館の一部屋：範人の居た部屋とはまた違う部屋で目を覚ました。ボロボロだった身体は既に元どおりに治っており、動くことに支障は無かった。

部屋の中を見回しても、目に入る色は赤赤赤……その部屋の中に1つだけ黒い物がある。それはパッチの着ていたコートである。パッチは壁にかけてあったコートを着て、部屋の扉を開けた。

少年は廊下に踏み出す。しかし、床を踏む感覚は全く伝わってこなかった。変わりにあるのは目玉だらけの不気味な空間。そして、いつの間にかその空間は自身の横にあった。目玉たちは上に登っていく。

「え!? あれ!?」

驚くパッチだったが、その声に応える者はいない。目玉が移動しているのではない、パッチが落ちているのだ。しかし、気づかないのも無理はない。スキマの中に上や下はあまりはつきりとは存在していないのだから。

パッチは戦場へと落ちていった。

第八十話

(紫殿はいったい何をしておられるのだ！)

天魔の部屋で天魔は1人焦っていた。

人間？の軍団は思った以上に進行が速く、天狗の里に踏み入るのに最早1分はかからないだろう。里の境界線上で見張りをしている天狗の視界から判断して、目測で1000mもない。

一応の措置で白狼天狗たちを配置しておいたが、やはり兵の数では圧倒的に劣る。向こうは5000、こちらは100。いくら質で勝る妖怪と言えども、圧倒的な数の差だった。

天狗たちの額には汗が浮かんでいる。全員が全員、不安でしよ
うがないのだ。そして、その全員の不安を和らげるために心に直接
エールを送る天魔だったが、その彼の心には100名分の不安がのし
かかっていた。結局、天魔自身も不安で仕方ない。

そんなとき、天狗たちの目の前にスキマが開き、戦士たちが現
れた。余所者が自分たち天狗に協力することに不安を覚える天狗も
いたが、今は状況が状況。天狗たちは戦士たちの登場に歓喜し、天魔
も安堵の息を漏らした。

「まったく……焦らせてくれる人だ。いつもスリル満点だよ……」

そう呟き、天魔は戦線に立つ天狗たちとの感覚共有を切った。



戦士の登場は戦闘開始の合図だったのか？

天狗たちは武器を構えて駆け出し、侵略者たちに攻撃を開始す
る。それは侵略者たちも同じだったようでそれぞれが思い思いの武
器を手天狗たちと衝突する。

長い歴史を持つ妖怪の山でも数回程しかない戦の幕開けであ
る。

「調子に乗るなよ、人間！」

1人の白狼天狗が大刀を振り下ろす。刀自体の重さに加えて

天狗の筋力を乗せた重い一撃が1人の侵略者の命を奪う……はずだった。

「ぬう……ぐう！」

人間の力では到底耐えきれないはずのその一撃を侵略者は片手に持った鎌一本で受け止めた。ほぼ同時に、白狼天狗の腹部に入る鈍い痛み。彼の腹には侵略者の拳がめり込んでいた。

人間とは到底思えない強すぎる力。気がつけば、彼は宙に居た。侵略者は全くの無表情だったその顔にある一つの表情を浮かべる。その表情は愉悦。

侵略者は白狼天狗の足を掴み、回転しながら投げ飛ばした。彼が飛んでいく先には小さな崖。小さいと言っても崖は崖。それなりの高さがあるし、棘のような岩が凶悪な顔つきで獲物を待ち構えている。

侵略者の持つ予想外の怪力に驚いた彼は妖力のコントロールに集中できず、飛ぶことなど到底できない状態になってしまう。このままでは確実に崖に落ちて真つ逆さま。死んでしまう。

しかし、徐々に近づいていた死は壁として立ち塞がった範人によって受け止められた。彼の表情は怒りに満ちている。この数の人間が改造されたことが許せないのだ。身を斬るような殺気が辺りを包み込んで離れない。

ガナードの意識はその強すぎる殺気を放つ青年たちの方に向いた。

「応援部隊、戦闘開始！天狗の里を防衛する！」

範人の一声と同時に戦士たちは戦闘を開始した。



ここは幻想郷。そのはずなのだが、飛び交うものは弾幕ではなく実弾。威力もスピードも弾幕に比べて遥かに上。殺傷能力など比べ物にならない。

銃の扱いがわかる者は狙いを定めて、わからない者たちは闇雲

に銃を使用した。中には弾幕や剣で特攻する者もいる。銃の扱いは、照準を合わせ、引き金を引く、照準を合わせ、引き金を引く……たつたそれだけの繰り返し。

外れる弾は少なくないが、紫がつけたであろうシステム……スキマシステムでも言おうか。スキマシステムによって、外れた弾はスキマの中へと外れた瞬間に回収されていく。

(ガナードと言えいいのか、それともマジニと言えいいのか?)
侵略者たちを撃ち倒していく中で範人はどうでもいいようなことを考えていた。

ガナードとマジニに大した違いはない。それは範人にもわかっていった。しかし、流石にしっかりとした名称で呼ばないことにはかわいそうである。

見たところ、侵略者たちはガナードともマジニとも少しばかり異なる。より筋肉質で、タフさも半端ではない。事実、敵は1人も倒れていない。撃たれても斬られても、全身から血を流しながら立ち向かってくる。その様子は正にアンデッド。おまけに知的で、ゾンビなどと言うチャチなものでは断じてない。

「クソ……きりがないわ!」

「うう……手が痛くなってきました。反動が強すぎます。」

「……コレもう殴った方が速くないか?」

「アハハハハ!撃ち放題よ!」

(どれだけ改良されたんだよ!!?)

数を減らすことのない敵に狂ったように笑う白が居れば、発砲の反動に弱音を吐く絆も居る。範人も驚きのあまり、心の中で驚きの声を出すことしかできなかった。

結果的に範人は敵の名前を決めることは出来ず、寄生虫の名前を「プラーガ タイプD」とだけ名付けた。1、2、3と来て、そのまま4は彼にとって面白くなかった。

しばらくして、ついに最強のチート男が動き始める。見てられないと言うことだろう。

零の手に片手剣が1本ずつ握られる。直後、侵略者たちに突

撃。手頃な1人を弾き飛ばすと、その心臓に剣を突き刺し、その状態から更に首を斬り飛ばした。

心臓に続く傷口から触手が伸び始めるが、即座に停止。しかし、首から伸び始めた触手は全く動きを止める気配がない。

そこで全員が気づいた。侵略者たちは1人につき、脊椎と心臓に寄生虫を1匹ずつ保有しているのだ。更に、寄生虫たちは互いを回復できるらしく、数十秒の後に心臓の寄生虫も活動を再開した。

「弱点は示してやったぞ。後はお前たちで戦え！」

あ、1000人貰ってくからな。100人斬りじゃ生温いから、10倍の1000人斬りをやらせてもらうぜ。」

「何て言うか…すごい理由で育児放棄されている感じだな……」

「誰がパパだ！」

(んなこた誰も言ってるよ！)

範人の一言に対する零の返しにその場の全員が心の中で全力のツツコミを入れる。零本人の言葉で折角のかつこいいシーンが台無しである。実際、零の年齢は幻想郷を超えるのだが、誰もパパなどとは思っていない。思っているとすれば、若くてもお祖父さん以上だろう。

零は多少拗ねながら、侵略者たちの中に1人突っ込んで行く。そんな彼を見て「あいつだけでコレ解決できるのでは？」と思うその場の全員であったが、活躍を全て奪われるのはどうも面白くない。おまけに弱点まで教えてもらったのだから、戦わないわけにはいかない。

「まあ、いいか。愛するパパに「誰がパパだ！」弱点も教えてもらったし、別行動だ！俺はおそらく敵方のリーダーがいると思われる正面奥に向かう。他の全員はペアを組むなり、単独行動するなりして他の化け物たちをどうにかしてくれ！」

範人は零のツツコミを完全に無視して指示を出し、返事も聞かずに真正面に向けて走り出した。どこかの吸血鬼が受けるような無視っぷりに零はしばらく動けなくなる。そんな異世界の幻想郷創立者を他所に、メンバーはそれぞれペアを組み、元の場所を離れていく。

動けなくなっていた零は物の見事に投げ飛ばされ、メンバーが居た位置に逆戻り。

気がつけば、そこに残っていたのはアンと零だけになっていた。取り残されたことに気づいたアン^の表情が強張る。

実を言うと、この2人は少し前に殺し合いをしたばかりなのだ。互いが互いに見せつけた強烈なイメージは2人の間に壁を造り出していた。

「ここは…最後の手段に決定。逃げるのだ！コソコソ……」

「おいコラ。バツチり聞こえているぞ」

「ヒイツ！ピタッ」

「自分で効果音つけてどうする……」

立ち止まったアンの首がブリキのおもちゃのようにゆっくりと後ろを振り向く。その首からはギリギリと音が聞こえてきそうな感じがする。恐る恐る振り向いた彼女だったが、後ろに居た零は決して嫌そうな表情はしていない。

「立ち止まってどうするつもりだ？」

行くぞ！

「ちよ、ちよっと待つのだ〜」

零は速度を全く落とすことなく斬り込んでいく。アンはその後ろをハンドガンを乱射しながらついていくのであった。



何故だろうか？敵が押してきている。たったあれだけの数の集団に私たちのプラーガ軍が負けている。

——ちくしよう、あのザコどもが……。

私は奥歯をギリギリと噛みしめる。ついさっきまでは良き同士だと言っていたのに今となってはザコ呼ばわりである。しかも、私はそのことに気づいていない。

遠くに見える同士たちは寄生虫を潰され、命の灯火が消えていく。どうやら、敵が攻^殺略^方法を見つけてしまったらしい。

「隊長…貴方ならば、こんな時どうしますか？」

私は呟いた。しかし、その問いに答える者は誰も居らず、疑問は空へと霧散し、儚く消えていく。たまらなく悲しくなってきた。

——やはり、私では貴方のように動くことは無理なのかでしょうか。

そんな私の心情を察したのか、黒い怪物が隣に立つ。

——そうだ、私にはまだ彼らが居る。そして、私自身にもファースト様から頂いた力があるじゃないか。まだいける。ハンターキングは捕獲できる。

何かが吹っ切れた気がした。

私は周りに立つ怪物に指示を出す。

「敵を皆殺しにしなさい。戦闘を許可する。」

『グルル♪』

人を失った者は軽く吠え、まだ人を捨てていない者はニヤリと微笑んで戦いの中に飛び込んでいく。

——さて、私も戦いましょうかね。

貴方は男性ですが、私たちを導く勝利の女神となってくれませんか。私たちに微笑んでください……ハント隊長。

第八十一話

タタタタツッ！グシャツッ！バキツッ！

調子良く響くサブマシンガンの発砲音と肉を叩き潰す湿った音が合わさり、戦場のリズムが完成する。

パッチとエレイはガナード達に囲まれた状態で戦っていた。

「パッチ、調子はどうだ？」

「大丈夫です。弱点さえわかれば、すぐに倒せます」

エレイがサブマシンガンで相手の膝を撃ち抜き、動けなくなつたところでパッチが首と心臓の寄生虫を殴り潰す。確実性を求めた結果に出来上がった戦法である。

不意に1体のガナードが飛びかかった。しかし、パッチは冷静に身をかわず。ガナードにはパッチの身体の影になって見えていなかったのだらう。その胸と首にはアサルトライフルの照準がしっかりと向けられていた。銃口から弾が飛び出し、脊椎と心臓を数十分の一秒の差で撃ち抜いた。ガナードの身体から力が抜け、崩れ落ちる。

仲間が一定数死んだことで危機に気づいたのだらう。ガナード達の動きが変わつた。ジワジワと包囲の輪を狭めることを止め、全員が一斉に飛びかかった。

「土人形『ゴーレム』！」

ガナード達は突如として地面から現れた土人形達に受け止められた。そのまま押し合いの力比べが始まる。

魔力によって仮の生命を吹き込まれた土人形と寄生虫によって化け物じみたパワーを手に入れ操り人形と化した人間達。どちらも決して弱者ではない。事実、パワーはどちらもほぼ互角であり、ゴーレムの身体が少し崩れると同時にガナードの骨が折れていく。

結果的に両者とも全滅だった。ゴーレムは吹き込まれた魔力が切れたことで土に還り、ガナードは全身の骨が限界を迎えて動けない。

エレイは動けないガナードに歩み寄ると、その口の中にショットガンの銃口を突っ込み、引き金を引いた。

ドガアン！

シヨットガンの1発はガンナードの上半身と寄生虫を粉々に吹き飛ばした。肉片がベチャベチャと飛び散り、周りに広がるが、エレイは全く気にしていない様子で全ての動けないガンナードを同じ方法で始末した。ガンナードの残骸はパッチが血液でしつかりと火葬する。「こ、これはどういふことじゃー！」

突如、叫び声が響き渡った。その音量に驚いたパッチとエレイが声の出所を見れば、立派な顎髭を生やした50歳程の大男が灰と化したガンナードを手にして泣いていた。

「骨も残さず……こんな灰にしてしまうなど……酷い、酷すぎるウウウ！あーんまりだあああ！」

どこかで聞いたような叫び声を上げて泣く大男を見て、エレイは呆れた顔をしているが、その隣に立つパッチは心が痛くなった。大男に近づこうとするパッチだったが、エレイに止められた。

しばらく泣き叫んだ大男は不意に静かになり、ムツクリと立ち上がると鋭い眼光で周りを見回した。そして、パッチとエレイが視界に入ると同時にその身体からとてつもない殺気が噴き出した。

「儂の仲間達をこんなにしたのは貴様らかあー！絶対に許さん！ぶつ殺してやーる！」

男は怒りに任せ、地面を殴りつけた。途轍も無い衝撃波が発生し、地面が割れる。さながら、某緑の巨人である。

咄嗟に跳び上がって衝撃波を回避するパッチとエレイだったが、パッチは動揺から少しだけ遅れ、衝撃波が爪先を掠めた。直後、パッチの足首がゴキリという音と共にありえない方向へ曲がった。パッチの身体に衝撃が走る。あまりの衝撃に、掠めただけで骨が折れたのだ。

足首を砕かれたパッチは着地に失敗し、その場に倒れた。

「ぐっ……あああ……」

「パッチイイイイイー！」

呻き声を上げるパッチと仲間の負傷に叫ぶエレイ。大男はそれを見て静かに笑みを浮かべ、ゆつくりと2人に近づくと。

「貴様らがしたことは命を奪う行為だ。こんな痛みでは裁きとしてはまだまだ緩いだろう？ 死んだ仲間の分だけ痛めつけてくれるわあ！」

瞬間、大男の姿が消えた。慌てて周りを見回すエレイだが、大男の姿はどこにも見当たらない。ひとまず、パッチを安全な場所まで運ぼうと、エレイはしゃがみこむ。そのとき、パッチが叫んだ。

「エレイさん危ない！」

パッチの声にエレイは顔を上げる。目の前には大男の拳が迫っていた。慌てて後ろに飛び退くエレイだったが、拳の方が速かった。エレイは顔を殴り抜かれ、よろけたところを更にアッパーで打ち上げられた。しかし、大男の攻撃は止まらない。

「これが僕のボクシングスタイルじゃアアアアアアアアア！」

拳のスコールがエレイに襲いかかる。1発1発のパンチがエレイを吹っ飛ばすほどに重い。しかし、大男はそれ以上のスピードで動き、パンチを打ち続ける。全てがエレイに直撃、完全にサンドバッグ状態である。

ラストの1発、大男はエレイを大きく打ち上げ、腕を大きく振り被ると、落下してきたところに最大クラスのパンチを打ち込んだ。

エレイはまるで野球のボールのように一直線に吹っ飛び、岩に突っ込んだ。

パッチはエレイの元に向かおうとするが、砕けた足のせいで上手く動けない。更に、気が動転していたために蒸気噴出による移動も忘れていた。

ガクリガクリとからくり人形のように歩くパッチのことを大男が忘れていたはずがなかった。大男はパッチに近づき、首を掴んで持ち上げると、首を握る手を力を入れた。パッチの気道が塞がり、呼吸ができなくなる。視界が暗くなっていく。その手を外そうと手首を全力で掴むパッチだったが、大男は表情を少し歪めただけで力を緩めない。それどころか、更に力を強めた。今度は呼吸だけでなく、血流まで止まる。見ている景色が遠くなる。

パッチが完全に意識を手放しかけた瞬間、大男はパッチを地面に投げつけた。気道が確保された直後に背中から叩きつけられ、肺か

ら空気が押し出された。パッチは激しく、苦しげに咳き込む。そんなパッチを見下ろしながら、大男が話し始める。

「殺しはせんよ、貴様もあの赤い小僧もな。命が消えるのは辛い、儂にはそれがわかるのでう……今は生かしておいてやる。」

じゃが、貴様らはやり過ぎた。これ以上無いくらいに痛めつけてぶっ殺してやるア！」

大男はパッチを蹴り上げると、自身も高く跳び上がり、両手でハンマーを作って、振り下ろした。パッチは隕石のようなスピードで轟音を立てて地面にめり込む。更に、大男はパッチの上に着地し、踏みつけた。

「ア”ア”ア”ア”ア”ア”アアアアアアアア！」

大男は狂気染みだ叫び声を上げながら、何度も何度もパッチを踏みつける。骨が折れ、砕ける音が響きわたる。パッチが意識を失ってもそれは続いた。



回復が追いつかず、パッチに死が近づく。エレイはそれを岩の中から見ていた。口からは血が流れ、全身が痛い。身体を動かそうにも、岩にびつたりとはまって指一本を動かすことがやつとである。それでも、仲間が傷つけられているところをただ黙って見ていることは性に合わなかった。

エレイは魔力を使い、自身がめり込んでいる岩から水分を奪った。岩は砂になり、エレイは岩から脱出する。脱出と同時に大男の足が踏み下ろされ、パッチが燃える血液を吐き出すが、大男は全く気にしていない。大男はゆっくりと振り返り、エレイを見つけるとニヤリと笑った。

「来たか小僧。ほれ、貴様のお仲間さんだぞ」

大男はボロボロになったパッチをエレイの方に蹴り飛ばした。「生きているから安心しろ？生きてなきや痛めつける意味がねーからなあ」

エレイは黙ったままパッチの胸に手を当てた。心臓は動いている。エレイは無言でパッチを木陰に移動させた。

大男に向き直ったエレイに表情は無い。それに違和感を覚える大男だったが、彼は恐れていなかった。なぜなら、彼もまたブラーガDの加護を受けた者。強大な力を手に入れたために既に恐怖という感情は無くなっていったのだ。

エレイが無表情ながらもはつきりと怒気がこもった声で話し始める。

「俺にあんたを殺す権利は無い。あんたも、俺達があんたの部下を殺さなければ、俺達と敵対することはなかった。それでも、幻想郷は俺の故郷だ。異世界の幻想郷であつてもそれは変わらない。幻想郷最大クラスの勢力を潰そうなんざパワーバランスの崩壊につながりかねん。そもそも、仲間がこれほどまでボロボロにされても怒らないいほど、俺はクールじゃないんでなあ。面倒だが、あんたを消すことにさせてもらう」

「ほう、儂を殺すのか。なかなか素晴らしい目標じゃないか。だがな……

儂を殺すなど、調子に乗ってんじゃねーぞ、小僧があああー！」

大男は額に青筋を浮かべ、エレイに殴りかかった。エレイはそれを片手で受け止める。辺りに衝撃波が発生し、地面が陥没するが、エレイはその場を動かなかった。拳を受け止められた大男は表情を変えろ。

「吸血鬼の筋力、なめるなよ?！」

「ククク：アハハハハハ！」

よかろう、第2ラウンドだ！」

第八十二話

大男はエレイを投げ飛ばすと彼に一瞬で接近し、拳を振り下ろした。エレイは片腕に魔力を流し、その腕を盾のように使用して拳を滑らせることで軌道を逸らす。

「はああああー！」

大男の拳を受け流したエレイのカウンターが大男の脇腹に入る。吸血鬼と言う種族故に元々凄まじい筋力を持っているエレイだが、その拳には更に魔力が上乘せされている。しかし、大男はゴムのように柔らかく拳を受け止め、自分から身体をくの字に折りまげて衝撃を逃がす。大男はそのままスピンし、エレイに裏拳を叩きこんだ。エレイは魔力を流した腕でガードするが、先程とは比べ物にならない衝撃波に吹っ飛ばされてしまった。しかし、エレイは何事もなかったかのように片手で着地する。

「ほう…まだ力が出たと言うわけか、面白い」

言葉と共に大男の姿が消えた。しかし、エレイは全く動じない。魔力を流して地面から水分を奪いとり、硬い地面を砂に変える。瞬間、地面に足跡が付き始めた。足跡はエレイを囲むように動き周り、彼の背後で途絶えた。エレイは背後に向かって回し蹴りを放つ。足に伝わってきたのは重い感触。直後、何かが滑って砂を削り、地面に跡を残した。その終端に大男が現れる。その顔にはくつきりと靴の跡がついていた。

「どうやらその透明化能力、まだ上手く使いこなせていないみたいだな。集中が少しでも途切れれば、すぐに姿が見えるようになる」

「ほう…見破っていたのか」

「仮定しただけだ。あんたの巨体を隠すにはこの場所の遮蔽物は小さいし、数も少ないからな。」

まあ、その反応を見る限り、正解だったみたいだが？」

そう言っただけでエレイは黒い笑みを浮かべる。その様子はどこからどう見ても悪役だ。しかし、大男は能力を見破られたと言うにもかかわらず、全く怯んだ様子を見せない。それどころか、笑みを浮かべ

ている。

「確かに、儂には透明化の能力がある。だが！そんなものはただの飾りではない！」

大男は地面を殴りつけ、衝撃波を発生させる。エレイはそれを避けようと飛び上がるが、そんな彼に岩石でできた槍が襲いかかる。大男のあまりのパワーに地中の岩が飛び出したのだ。エレイは魔力でそれらの軌道を逸らす、あまりの量に裁ききれず数本が掠った。薄皮が切れ、血が流れる。

「儂にはこのパワーがある！透明化など、使いこなす必要はない！」

大男は地面に手を突き刺し、力を込める。地面にヒビが入り、基と別れた岩盤が持ち上げられる。

「これでもくらえい！」

大男はその岩盤をエレイに投げつけた。直径約10m、高さ3mほどの円錐型の岩盤が風切り音と共に飛んでいく。いくら吸血鬼であつても直撃すれば回転する岩に全身を削り取られてジ・エンドしてしまうほどの破壊力があるだろう。

「流星『メテオストライク』」

さすがに危険だと判断したエレイはスペルカードを詠唱する。魔法により空中に隕石が出現。岩盤と衝突して相殺、砕け散った。エレイはフツと鼻で笑う。このくらい、やる気になれば彼にはどうとでもなるのだ。

エレイはアサルトライフルに改造パーツを取り付ける。取り付けたパーツはフルバースト、装填された弾の全発射である。

エレイは大男に照準を合わせ、引き金を引いた。発砲音と共に装填された全ての弾が発射されていく。

「なんのこれしきー！」

大男は両手を打ち合わせた。まるで爆発したような音と共に大男を中心にした衝撃波が発生する。大男に向かっていた全ての弾丸は衝撃波によって弾かれた。

しかし、エレイは止まらない。地面に降りると同時に大男に向かってダッシュし、至近距離でサブマシンガンを連射した。あまりの

早業に大男は反応できなかった。大男の身体には弾丸が次々と撃ち込まれ、穴を作っていく。

「ゴハアツ！」

大男が血を吐いて膝を着いた瞬間、エレイは相手の顔面に膝蹴りを打ち込み、そこから更に回し蹴りを打ち込んだ。あまりの破壊力に大男の身体に入り込んだ弾丸が全て叩き出され、新たな穴を作りながら四方八方に飛び散る。大男はまるで紙くずのように吹き飛び、宙を舞った。

「さあ、フィニッシュと行こうか！」

紅砲『アグニスパーク』！」

紅い光線が大男に向かう。銃弾を撃ち込まれ、吸血鬼に殴られてもなお意識を保っていた大男にとって、その光線は形となって迫ってくる死そのものだった。

光線が大男を飲み込むと思われた瞬間、大男の体内で脊椎が伸び、肩からは触手が生え、指の骨が伸びて鋭い爪を作った。迫り来る死に気づいた体内の寄生体が宿主の身体を次のステージへと進化させたのだ。

大男の上半身は伸びた脊椎によって押し出され、光線から逃れた。さすがに下半身は消し飛んでしまったが、大男は上半身だけで生きていた。

「まだ終わってなどおらぬわあ！」

大男は全力で地面を殴りつけた。地面が隆起し、彼方此方から岩の柱が生えて天然のアスレチックを形成する。もちろん、地面の隆起はエレイが居る地点にまで及び、彼が気づいたときには既に岩のアスレチックに取り囲まれていた。

ヒュン！

風切り音がエレイの耳元で鳴る。驚いて振り向くエレイだったが、そこには何もない。直後、右の下腿に痛みが走った。見れば脛脛に切り傷ができ、パツクリと開いた傷口から筋繊維が見え、血が流れていた。

「クソが！また透明化か！」

エレイの言葉を嘲笑うかのように風切り音が舞う。

相手が地面を移動するのなら姿が見えなくとも居場所の把握は簡単だった。しかし、大男は岩のアスレチックに触手を引っ掛けて移動している。地面に足跡がつかないため、居場所が掴めないのだ。

右脚に加え、左脚にも痛みが走り、エレイはその場に膝をついてしまう。今の攻撃で両脚の筋肉を削がれたのだ。

動けなくなったエレイを更に触手の追撃が襲う。

「ぐああー！」

苦痛に満ちた叫び。エレイの体表が切り裂かれ、血が周囲に飛び散る。だが、エレイはそれだけのダメージを受けてもなお立っている。大男はそれがバカにされたようで気に食わず、同時に切り易くて好都合だった。

「フハハハハ！死ぬエエエエエエー！」

大男はエレイの正面から飛びかかった。しかし、飛びかかった先で待っていたものは敵の死ではなく、ショットガンの銃口だった。

「吹き飛ばー！」

エレイはショットガンの引き金を引いた。至近距離での発砲は当然ながら子弹含めて全て命中。大男は吹っ飛ばされ、宙を舞う。すかさず、エレイはスペルカードを詠唱する。

「金殺『刺殺裁決』！」

大男の吹っ飛ば先に金属の檻が出現、大男はそのまま檻に飛び込んだ。檻の扉が閉まり、大男を閉じ込める。

「小僧が！出しやがれ！」

ガンガンと檻を蹴る大男だが、魔法で出現した檻はビクともしない。それでも大男は檻を蹴りつけ、喚き続ける。それをエレイは軽蔑を込めた目で観察し、鼻で笑った。

「クソ！クソ！クソ！クソ！」

何故最後に僕の居場所がわかった！透明化は完全だったはずだ！なのに何故！

「そうだな…教えてやろう。俺は吸血鬼だ。自分の血の匂いくらい楽に嗅ぎ分けられる。俺を切りすぎたのが仇になったな。強い血の匂

いがするぜ、あんたの鎌みたいな触手からな」

「……畜生が。どうせ透明化なんて役立たずの要らねえ雑魚能力じゃねーか」

説明など求められていないと言うのに勝手に説明したエレイ。しかし、案外その説明をしつかりと聞いていたらしく、大男は自身の能力に文句をつけ始めた。その文句にエレイの表情が変わる。

「あんたは今、透明化能力は不要だと言ったな。

……その通りだ。どんな能力も追加された力。所詮は元からある身体能力や精神力の補助にすぎない。

だが、どんな能力であつても使い道は何かしらある。戦闘中に女の裸やベツドインを想像するような下品な妄想を常にできる能力も、そこから生まれたピンクジョークが戦場の緊張感を和らげて士気を保つ要因になり得る。能力は持っているだけでも貴重なんだ、あまりバカにするんじゃない。

実際、あんたが一撃で殺すようにしていたら俺は間違いなく死んでいた。使い方さえ間違えなければ、その能力は相当強かつたぞ。弱いのは能力じゃない、あんた自身だ」

「小僧が……言ってくれやがる」

「そりゃあ、事実だからな」

エレイが言い終わると同時に大量の剣と槍が現れ、檻に刃を向ける。既に拘束済みとは言え、1度殺意を向けてきた相手を生かしておくつもりは毛頭無いのだ。

「ふふふ、じゃあな。能力の使いこなし方は俺からの宿題だ。地獄でやって来いよ」

エレイが言い切った瞬間、全ての武器が檻に向かって発射された。刃は檻の隙間から侵入し、大男に容赦なく次々と突き刺さっていく。しかし、大男は一つの呻き声も漏らさない。奥歯を噛み締め、必死に堪えていた。そこにあつたのは凶悪な侵略者の姿ではなく、部下達のために何でもないかのように振る舞うリーダーの姿だった。

やがて、全ての姿が撃ち尽くされた。大男は大出血したまま檻の壁にもたれかかり、ピクリとも動かない。

おそらく死んでいるのだろう。エレイは動かない大男を見て
そう思い、同時にまたあることを思い出した。

「そういえば、一応言っておくが俺は小僧じゃない。人間と比べたら、
俺なんてジジイも良いところだぜ」

言い終わると同時にエレイの身体から力が抜け、その場に膝を
着く。

「……っ！あの野郎、結構やってくれたじゃねーか。ダメだな、身体が
言うことを聞かん。」

……仕方ない。後は他のヤツらに任せるか。すまねえな、みんな――
」

言い終わるか否か、エレイは意識を手放した。同時に、魔力の
供給源を失った檻も消えた。



……死ぬかと思った。まさか全身を刃物で貫くなんて、あの小
僧……いや、吸血鬼もなかなか恐ろしいことをする。走馬灯が見え
た。

……あ、違うな。吸血鬼は元々恐ろしい存在か。生物兵器と同
じように……。

それにしても、どんな能力であつても何かしら使い道はある、
か……。能力が無くてもいいものなんて考えたことがなかった。な
にか大切なことを知った気がする。

「ゴハッ！ガハッ！」

咳をすれば、吐血してしまう。やはり、大きすぎるダメージを
受けてしまったようだ。この身体はもうダメだろう。

……仕方がない。この身体を捨てて、新しい身体に寄生体に移
そう。そうしなければ死んでしまう。丁度、目の前である吸血鬼が気
絶している。能力について教えてくれたなかなか良いヤツで気が引
けるが、俺も生きたいのだ。許して欲しい。

……そういえば、天狗よりも吸血鬼の方が強いのではないだろうか？

この吸血鬼は儂と同等の筋力を持っている。先ほどまでの戦闘を見た感じでは、天狗よりも吸血鬼の方で苦戦しそうな感じがする。おまけに、吸血鬼も空を飛ぶことはできるようだから、天狗よりもポイントが高いのではないだろうか？

そんなことを考えながら、儂は吸血鬼の元に辿り着いた。やはり、ダメージは大きすぎたようだ。触手もマトモに動かず、両手で地面を這うのがやつとである。

さて、身体を奪う前に一つ。この吸血鬼の名前は何と言っただろうか？

敵とは言え、悪い者ではない。むしろ、能力のことを教えてくれた恩人と言うべきだ。最低限の敬意は払わなければならない。

名は確か…エレイだったはずだな。

「エレイよ、すまない。これより、其方の身体を儂のものとする。他の者と同じように私も生きたい。仲間達と一緒に一つの村で暮らしたいんだ。だから、其方を殺して儂が生きる。だが、教えてもらったことは忘れない。もちろん、其方のことも。」

地獄で宿題をするつもりはないが、一刻も早く、新しい身体で宿題を完成させるつもりだ。だから、これから生きていく儂を許して欲しい。其方の身体を頂く儂を許して欲しい」

よし、言い終えた。これは紛れも無い本心だ。聞いていないとは思うが、天に届くほどに儂が有名になるから、どうか儂にこの気持ち届けさせて欲しい。

儂は寄生体に意識を送る。記憶を保つためにも、全ての意識を寄生体に込めて寄生するのだ。

儂はエレイの両肩に手をかけた。

ドスツッ！

……え？

身体が完全に動かなくなった。でも、感覚はあって、情報が入ってくる。身体に穴が開いて、大量の血が流れているのがわかる。

そして、儂（正確にはエレイだろう）に近づいて来る人影が見える。同時に人影が何か言っている。

「ごめんなさい。生きたいと言う気持ちはわかります。その感情はどんな生物にも必ず存在しているのですから……」。

しかし、悲劇を繰り返さないためにも生物兵器は死ぬべきなんです。死ぬべきなんて言うことが間違っていることはわかりますが、同時に世界のためなんです。許してください。

それに、僕は仲間に死んでもらいたくないんです。例え、姿が同じでも心が違えば、それは別人です。

貴方が決して悪いヒトではないことはわかりますが、ごめんなさい。僕はエレイさんにエレイさんであってもらいたいです。だから、ストウレラツで貴方を止めさせていただきました。

2度と悲劇として生まれてこないでください。生物兵器と言う名の悲劇として……」

暗くぼんやりと、色を失い冷たくなっていく意識の中で儂は涙を流す少年の姿を見た。

第八十三話

怒りに任せて殴り飛ばして、気がついた頃には死屍累々の光景が広がっていた。それでも侵略者たちはまだ生き残っている。影の矢で貫かれた侵略者は身体を捨て、引越そうとジェイドに飛びかかった。彼は飛びかかってきた寄生体を無言で叩き落とし、踏み潰した。爆ぜた寄生体から飛び散った赤い液体がブーツに着くが、そんなことは全く気に留めない。

「最強と言われた騎士さんはどうしてここまで非情なのかしらね？」

「狂ったように笑いながら銃を撃ちまくる貴女にだけは言われたくないんだが？」

「言ってくれるわね、ジェイドさん」

「あまり大人をなめない方が良くぞ、白」

普通に会話をしているようだが、この会話は周りにいる敵と戦闘しながらの会話である。弱点の発見はそんな余裕ができるほどの差を2人と寄生生物の間に作ってしまった。

白のアサルトライフルが連射され、寄生生物たちは次々と倒れていく。銃弾を受けた穴は全て心臓の位置と首の付け根に1発ずつ、恐ろしいほどの射撃センスである。

一方のジェイドは羽を広げて寄生生物の軍団へ突進、ある程度の頭数を集めると両の羽を手のように打ち合わせた。ジェイドの羽の中で多くの命が弾け、辺りに血しぶきが飛び散る。もちろん、血しぶきはジェイドにもかかった。しかし、ジェイドは特に気にする様子もなく新しい獲物を探した。

しばらく撃ち続けていたため、ついに白のアサルトライフルの弾が尽きた。包囲の壁の密度が増し、水平方向に抜け道は無くなる。

——まるで集団強姦ね。

白は静かに目を閉じた。侵略者たちはこれを好機と見なし、彼女に向けて一斉に飛びかかった。「こんな子供1人武器さえなければ軽い」そう思っていた彼らの余裕は白が目を開けた瞬間に吹き飛んだ。紅い眼光がその視界に入った瞬間、彼女に飛びかかっていた侵略者た

ちは何も感じなくなつた。

その様子はまさに猿の如く。白は驚くべき速さで侵略者の頭部を蹴り碎き、身を引き裂いた。白を取り囲んでいた敵は一瞬の内に肉塊と化してしまった。そんな敵の状態を見て、白は呟く。

「私の処女はお高いのよ、貴方たちの手が届くわけ無いじゃない」

そこへ侵略者の1人が吹っ飛んできた。地面に数回バウンドして、呻き声を上げながら立ち上がったところ、更にジェイドのドロップキックが顔面に炸裂した。あまりの破壊力に上半身がバラバラに弾け、辺りに散らばつた。

そんなジェイドの様子を見て、白はクスリと笑う。

「本当、吸血鬼の模範ね」

「それは…お互いさまだろう?」

それに、どちらかと言われたら君の方がよっぽど吸血鬼らしいんだけど?」

吸血鬼と言えば、年を取らないことから美男美女というイメージが強い。2人はそのイメージから外れない美しい身体つきと顔つきであり、また血塗れである。どう見ても派手に捕食を行った後の吸血鬼にしか見えない。紅い瞳と血で真っ赤に染まった2人の姿は初対面の者を気絶させるほどの恐ろしさを持っていた。

「——で、これからどうするの? 範人さんを追う? それともお話でもする?」

「どちらでも構わないぞ。この近くの敵は全員潰れてしまったみたいだからな」

ジェイドはハハハと笑う。そんな彼からはどんなに危険な状況でも笑っていられるような雰囲気を感じられる。そして、その雰囲気は白がよく知る者に重なつた。

似ている。異常なほどに範人さんに似ている。目の色はともかく、顔立ちも髪の色もほとんど一緒だ。雰囲気は育つた環境で変わるかもしれないけど、これもほとんど一緒。まさか血縁者だったり? ……でも、範人さんは吸血鬼じゃないし。

ジェイドは白が浮かべた疑問に気づいたようで、ニヤリと笑みを浮

かべる。

「俺が範人に似ていることがそんなに不思議か？」

「え!?そんなこと、ない……」

「まあ、否定するなよ。顔に『正解です』って書いてあるぞ」

完璧に言い当てられたことでムスツとした顔になる白だったが、ジェイドはそんなことお構いなしに話し始める。

「正確には範人が俺に似ているんだ。」

俺はゴートレック家——今の旅行家のことだが、500年くらい前の当主の弟だからな。吸血鬼化して今まで生きてるってわけだ」

「へえ：範人さんのご先祖様ってわけね。」

「じゃあ、なんで紅魔館に住んでいるのかしら？」

「おいおい、知らねーのか？俺はレミリアの夫だぞ」

白の表情が凍りつく。ジェイドはその反応を見て笑っているが、それはあまりにも巨大な衝撃だった。

——マズイ！この人お兄様だった！

白の思考は一瞬だけ完全に停止。そのとき、表情のなくなった彼女に黒い何かが飛び掛った。

「危ねえー！」

咄嗟に、ジェイドは白の前へ飛び出した。

衝突と同時に左肩に走る激痛。それをぐつところさえ、後ろを振り向く。

黒い何かは空中で何回か回転し、着地した。

人型の体を覆う黒い甲殻、脊椎からつながっているとされる虫の脚のような関節がある尻尾。虫と人間を融合させたようなその生物の名はヴェルデューゴ。プラーガを使用した生物兵器の中ではかなりの完成度を誇る種類である。しかし、問題はそこではなく、

「あのやろう：俺を食いやがった……」

ジェイドは左肩を押さええながらヴェルデューゴを睨む。ヴェルデューゴの口には血の滴る肉がくわえられており、口の周りは赤く染まっていた。肉は口の中へと消え、喉が上下する。直後、ヴェルデューゴの体がピクリと痙攣した。

——まずい。

本能的に危険を察知したジェイドはヴェルデューゴに肉薄、影の槍を腹部に突き出す。

「なっ……!? バカな……」

槍は尻尾に絡めとられていた。

呆気にとられるジェイドの横腹に強烈な蹴りがはいる。大の男であるはずのジェイドがまるで紙切れのように吹き飛ばされ、宙を舞った。

脇を掠めて飛んでいったジェイドに白がハツとしたとき、ヴェルデューゴの爪はすでに眼前まで迫ってきていた。咄嗟に召喚した白乱で受け止め、はじき返した。のけぞるヴェルデューゴの腹部に狙いをつけ、アサルトライフルを連射するが、

「!? ウソでしょ……弾が……」

ヴェルデューゴの甲殻はしなやかに変形し、銃弾を全て受け流してしまった。戦闘狂の白からしてもこれは予想外。

あわてて後ろに跳躍した直後、体勢を立て直したヴェルデューゴの巨大な爪が目の前を通り過ぎた。

——すごいパワーね。空気が切れたわ。

白は体勢を下げて肉薄、鳩尾であろう部分を柄で殴りぬいた。しかし、手ごたえはあったもののそれは軽く、甲殻が凹むだけ。交代を図る白だったが、突如としてふわっとした感覚に襲われた。

「へえ……なかなか抱っこが上手いのね」

ヴェルデューゴは掴み上げた白を捕食しようとする巨大な口を開ける。鋭い牙がずらりと並んだ口の匂いは鉄のみ。その口内に血以外の汚れは見当たらず、見た目の割には案外清潔的なのかもしれない。それでも矢張り、

「ファーストキスはあげないわよ」

白はヴェルデューゴの肩を蹴り、拘束から脱出した。

仰け反るヴェルデューゴだったが、捕食失敗の腹いせとばかりに尻尾に持っていた槍を投げつけた。白はそれを白乱で叩き落す。その直後、白の脇を何かが通り過ぎた。

槍を拾い、ヴェルデューゴに高速で接近したのはジェイドだった。
「オオオオルアアアアア！」

一撃、二撃、三撃……。まるで流水のような滑らかさで攻撃が叩き込まれる。

ジェイドが手にしている武器は槍だが、槍術は使用していない。彼のスタイルは棒術、斬るわけでも刺すわけでもなく殴る。攻撃の隙など与えず、蹴りや拳などの体術を組み合わせてひたすら殴り続ける攻撃特化型の棒術。

刃を当てても傷がつくことはないが、見る見るうちに甲殻は凹みだらけになっていく。

ここで白は気づいた。ポイントは凹みと凹みが重なることで生まれた甲殻の分厚い箇所。その箇所は殴られるたびに手ごたえの感じられる高い音を響かせている。甲殻は硬いのではなく、強靱で柔軟だったのだ。つまり、弱点は柔軟なものを硬く脆くしてしまうもの、

——極度の低温ね。

ジェイドがドロップキックを決めた瞬間、白が駆け出す。

「ジェイドさん少し代わって！ 『真刀 氷夜』！」

ジェイドが横に飛び退くと同時に白は氷夜を召喚、懐に飛び込んで腹部を斬りつけた。

氷夜の力はその名の通り凍結。甲殻が凍りつき、ヒビが入る。それを確認した白はさらに斬りかかろうとするが、ヴェルデューゴの振るった尻尾に阻まれた。

後退する白だったが、その顔には確信を掴んだという表情が浮かんでいた。

一方のヴェルデューゴはヒビの入った甲殻を押さえ、苦しげに息をしている。

「ナイスだ白」

そう言ってジェイドは白の頭を撫でる。撫でられた白は少し不機嫌そうな顔になるが、別に心底嫌というわけではなさそうだ。すると、ヴェルデューゴの目にはその光景がカップル（ただし、すさまじい年の差）として映ったのか「リア充くたばれ！」とでも言うかのよ

うに咆哮し、二人に飛びかかった。

「まあ、もう一度頼んだぞ」

あまりにもスツと手を話したジェイド、しかも完全に白任せである。白はそんな彼をジト目で見つめ、ため息一つ。優れない表情で詠唱する。

「凍てつかせろ、氷夜！」

瞬間、氷夜の刀身から冷気が溢れ出した。

冷気はヴェルデューゴを包み込み、凍結させた。空中で動けなくなった化け物はそのまま地面に激突する。捕食しようと体に力をこめても指先一つ動かさない。

二人の吸血鬼はそんな化け物を哀れみのこもった目で見下ろし、

「ジェイドさんコンビネーションいきますよ」

「は!?コンビネーション?ちよつと待て、俺達会ったば——」

「せーの！」

言葉と共に蹴り上げた。その白の行動に、

「おいおい……」

と、呆れるジェイドだったが、しつかりと槍を構えている。

ヴェルデューゴが落下してくると同時に二人は得物を振るう。流れるような二刀流と棒術のコンビネーションが化け物を襲った。

切り裂かれ、叩き砕かれ。ヴェルデューゴは木っ端微塵に砕け散り、消え去った。



思わぬ強敵との遭遇。一仕事終えたジェイドは、

「ふう……」

と、ため息を吐き、白を見ながらこう思った。

——あんなふうに突然行動するところフランにそっくりだな。

第八十四話

積み重ねられた死体の山の上に少年が一人。

「いやー軽い軽い、こんなに弱いパワーでよく幻想郷に喧嘩売れたものですね〜」

「お前、悪いやつだな……」

そう言いながら鉄次郎は侵略者の腹に発勁を決め、浸透頸で体内の寄生虫を殺す。死体の山にまた一つ死体が増えた。

鉄次郎は「ふう……」と一息吐き、周りを見渡す。

あれほどまでにラッシュをかけてきていた侵略者たちも目の前の軍人には迂闊に手が出せないらしく、だるまさんがころんだのように動きを止めている。それを確認した鉄次郎はジェットの方に振り向き、

「なんでお前は見ているだけなのにそんな偉そうなんだよ？高みの見物か？」

不機嫌そうな表情を浮かべる鉄次郎を見て、ジェットはため息を吐き、

「だって、見た感じ本当に弱いんですもん。なんなら、僕の戦いを見てくださいか？」

と、偉そうに返した。無邪気そうな見た目の割にはなかなかウザい。

イラッと来た鉄次郎は死体の山の横に腰を下ろして不機嫌そうに、

「ならやってみろよ」

「お任せあれ」

言葉と共にジェットは飛び降りた。侵略者たちが歓声に沸く。

背中から生えた翼が人ではないことを示しているが、ゴツイ軍人よりは華奢な少年の方が相手にしやすいのだろう。だから、忘れてはいけないことを忘れていた。少年が高位の吸血鬼であることを。

侵略者たちは一斉に武器を手にして殴りかかった。しかし、

「距離が離れすぎていますね。あなたたち将来は良い的になります

よ」

そう言つて妖力を練るジェットは全く怯んでいない。むしろ、向かつてくる敵を目の前にして愉快的気分になつていた。

全ての武器が同時に振り下ろされる。

「おい！避けるよー！」

——人間の細切れ肉なんて見たくない。

このままでは目に映るであろう恐ろしい光景を想像し、鉄次郎は叫んだ。しかし、

「いやあ、やっぱり弱点さえわかつてしまえば軽いものですね」

侵略者たちが全員倒れる。その中心には手を血塗れにしたジェットの姿。手についた血を払っている。

「ど、どうなっている!?」

「ふふふ、言ったとおりでしょう？彼らは弱いんです」

そう言つて、ジェットは余裕の表情で微笑んでみせた。

——これが吸血鬼か。

そう心の中で呟いた鉄次郎は目の前の少年に対して尊敬と畏怖の念を抱いていた。

「ところで、今は何をしたんだ？」

訊ねる鉄次郎にジェットは死体を見るよう促す。

死体を見てみれば急所である心臓と脊椎の部分に風穴が開いていた。未だに血を吐き出すその穴は見ていて気分の良いものではない。しかし、あまりにも不思議な光景に鉄次郎は食い入るように見てしまう。

目を離す鉄次郎にジェットは種明かしをする。

「この穴、実は単純にパワーだけで開けたわけじゃないんです」

「………どういうことだ？」

「幻想郷には能力を持つている人が多いんですよ。そして、もちろん僕も能力を持っています。僕の能力は『貫通する程度の能力』。その名の通り、どんな物でも貫通できる能力です」

「……なるほど、だから一瞬で全員の弱点を突くほどのスピードが出たのか。相手の骨や肉なんて完全に無視だもんな」

「そういうことです」

鉄次郎の言葉にジェットは頷き、

「でも、この能力の真価はこんなものじゃないですよ。ちょうど新しいお客様が来たみたいなので、彼らで試してみましよう」

振り向いた彼らの眼前には50は下らないであろう侵略者達が迫ってきていた。

鉄次郎が銃を取り出すと同時にジェットの手元には2丁拳銃が出現する。突如として銃が現れたこと、そしてそれらの銃が初めて見るデザインだったことに鉄次郎は目を見張った。

「お前……手品師かよ……」

「手品師？……ああ、この銃のことですか。これらは僕が妖力を練って実体化させたものですよ。家族には槍や剣を出現させる方もいますが、僕の場合、妖力の形は銃だったみたいです。本来なら1人につき1種類だけだと（僕は）認識していますが、使い方が撃つだけという分、僕の武器は種類が豊富にあるみたいです」

「……幻想郷のことはよくわからんぜ……」

さも当然のこのように説明したジェットに鉄次郎はそう呟いた。

自分達の道を阻む2匹の生物。侵略者達は障害を退けねばならぬと駆け出した。しかし、その道が辿り着く先に死以外無いことは2人の銃が表していた。

2人は銃口を敵に向け、何度も引き金を引いた。

鉄次郎の射撃は百発百中。的確に弱点を捉え、1人また1人と撃ち倒していく。それに対して、ジェットの射撃はとにかく撃つだけ。完全に全ての弾が弱点を捉えることは少ないが、それでも対象の身体から外すことは無い。侵略者達の身体は瞬く間に蜂の巣になり、動かなくなる。

敵を撃ち倒すことに快感を覚えているのか、ジェットの顔には喜色が浮かんでいる。それを見た鉄次郎は

「俺は今お前の将来が怖くなった」

と、小さく呟いた。もつとも、その言葉はジェットに丸聞こえ

だったが。



死体の山は更に高くなり、立っている侵略者の姿はほとんど見えなくなった。立っている者達も白狼天狗と戦っており、2人の方に向かってくる様子は無い。

「さて、残りはボスみたいだが……どうする？」

「……どうにもしない方が良いと思います。現在、首謀者の方には範人さんが向かっていますし、こういった場合は中ボスが来るのではないでしょうか？」

そう言った矢先だった。突如、地面が柔らかくなった。硬い地面は柔らかい砂地となり、2人の足が沈み込む。あつと言う間に2人は腰の辺りまで沈んでしまった。

「こりゃあ……なんかマズくないか？」

「だいぶ美味しくないですね。それに！」

「な……！」

ジェットはバズーカ砲を召喚、地面に向かって撃ち、その爆風で飛び上がった。直後、少年を追いかけるように巨大な影が飛び出す。しかし、ジェットは冷静にリロードし、その巨体の口内に照準を合わせた。

「発射！
ファイア」

砲口から発射された弾は口内に直撃、爆発した。巨体は地面に落ちる。数秒後、ジェットも着地した。ほぼ同時に鉄次郎も砂地から脱出する。

「な、なんだコイツは……トカゲのようにも見える。それに鼻先のコレは……機械か？」

「おそらく、デルラゴと言う生物兵器だと思います。前に研究所の資料で見たことがあります。地面の中から出てきたということは改良品でしょうか。鼻先の機械は振動で地盤を緩めて地中を掘り進むための物だと考えられます」

「なるほど、それなら確かに——」
「バアン！」

突如として響いた銃声。デルラゴの身体がビクツと痙攣し、血を流して倒れる。ジエットの隣では鉄次郎がデルラゴに銃を向けていた。

「何逃げようとしてんだ？そこでおとなしくしてろ」

デルラゴは2、3度ピクピクと動いてから絶命した。鉄次郎は満足そうに頷く。

2人がデルラゴについて考察していたとき、デルラゴは地面を掘って逃げようとした。しかし、鉄次郎に気づかれてしまったのだ。「僕の勘ではデルラゴはあと2、3頭いるはずです。さすがに敵さんもアレ一頭でこちらを潰せるとは思っていないでしょうし」「なるほどな……じゃあ、どうする？さすがに一頭ずつ倒すのは嫌だぜ？」

鉄次郎の言葉にジエットは少し考える素振りをし、

「それなら、一気に倒しちゃいましょう。確か、ロケットランチャーがありましたよね。アレ使いましょう」

「……構わないが、どうやって集めるんだ？」

「それは任せてください」

ジエットの手元のバズーカ砲がスナイパーライフルに変化する。それでも未だにその意味がわかっていない鉄次郎は頭に？マークを浮かべている。

「僕が今装備したスナイパーライフルには対象を追跡する特殊な弾を込めることができるんです。そして、僕の能力は貫通。……これでわかりましたよね？」

「……あ、そういうことか。貫通できるから対象が地中にいても関係ない。地中の対象をライフルの弾で地上まで逃げさせるのか」

「That's right. 正解です。作戦は敵が噛みつきに出てきた瞬間から始めましょう」

ジエットの顔に恐怖の色は浮かんでいなかった。そこにあったのは戦いを遊びだと考えているような余裕の笑顔。それを見て鉄次

郎は思う。

……ああ、これが人間と化け物の違いか……。

死に対する恐怖が薄すぎる。

生きるために様々な物を利用する弱い人間達と元々様々な物を持つている強者達。人間が繁栄する背景に存在した恐怖の感情は人間をはるかに凌ぐ力を持つ強者には宿り辛かったらしい。

恐怖は負にも正にも働く。鉄次郎は恐怖をほとんど感じていないジェットを少し羨ましく感じた。

——子供相手に嫉妬とは……らしくねえな、俺。

地面が砂になり、足が沈み始める。化け物が近づいているサイン。それでも鉄次郎は冷静だった。地面から飛び出してきた巨大な顎にさえ、鉄次郎は恐怖していなかった。

「狙撃『変幻自在のクロウ』！」

隣にはもつと巨大な恐怖の対象が居たのだ。

3発の銃弾が発射された。1発はデルラゴに向かい、他の2発は地中に潜り込んだ。

銃弾はデルラゴの身体を貫き、軌道を変え、更に貫く。巨体はあつという間に蜂の巣になり、動きを止めたが、銃弾は更に空中へと打ち上げた。

数秒後、他の箇所でも地面が砂になり、2頭のデルラゴが飛び出した。しかし、銃弾は追跡を止めず、デルラゴ達を空中で1箇所に集める。

「鉄次郎さん！」

「OK！」

ジェットの呼びかけに鉄次郎は間を置くことなく応えた。ロケットランチャーの弾は寸分の狂いもなくデルラゴ達に向かって飛んでいき、着弾と同時に爆発した。化け物の血や肉が辺りに飛び散る。それらも気にせず、鉄次郎は「フウーウ」と息を吐いた。

「これで一丁上がりってやつだな」

鉄次郎はやり遂げたという顔をしているが、ジェットの表情は優れない。化け物達が弾けた瞬間から「ウーン」と唸っている。

「どうした?」

「いや……なんかですね。……僕、すごく目が良いんですよ」

ジエットの返しに「それがどうした?」と?マークを浮かべる鉄次郎。

ジエットは口に1トンの重石がつけられているかのような錯覚を感じながら話す。

「今ですね……地面の中に黒い影が見えていて……なんか、その……動いているんですよね……。もしかしたら、まだ1頭……。しかも特大サイズが生き残っているかもしれません」

「あ?……マジで?」

「マジです……鉄次郎さんが一口サイズです」

「……逃げた方が良くないか?」

「多分もう逃げられないと思いますよ……そこにいますし」
「へ?」

思わず間抜けな声を出して振り向けば、巨大なサンショウウオが口を開けており――。

バグンツ!

鉄次郎に食らいついた。

「て、鉄次郎さああああん!」

ジエットの叫び声が辺りに響く。

鉄次郎は死んだ。そうとしか思えない。鉄次郎が巨大な口の中に消えるところを実際に見てしまったのだから。

しかし、デルラゴの様子がどうにもおかしい。地中に潜ろうとする様子を全く見せない。地上に口を出したまま固まっている。

——これはいったい……?」

ジエットがデルラゴに近づけば、違和感の原因がだんだんと伝わってくる。それは呻き声にも近い声だった。

「ウオオオ……」

「鉄次郎さん?」

鉄次郎は両脚を突っ張り棒のように広げ、デルラゴの口が閉じることを辛うじて阻止していた。

「……ジェットオ……援護は要らねえぞ……。こいつは俺が仕留める……任せておけ」

ジェットは驚愕のあまり動けなかった。化け物に食われそうになっている男が「任せろ」と言っているのだ。まるで映画のワンシーンのような状況を目の当たりにして固まっていた。

幾ら止められているとは言え、鉄次郎には余裕がなかった。先程の言葉もギリギリでの発言だった。それでも、子供にばかり良い顔をさせてはいられない。

鉄次郎はアサルトライフルを構え、

「さあ、ジャッジメントの時間だぜ化け物」

引き金を引いた。

ズドドドドッ！

銃口から飛び出した無数の弾丸はデルラゴの口内へと吸い込まれていき、喉の奥に突き刺さった。

痛みの原因がわかっていいのか、デルラゴは獲物を口に挟んだまま地上を泳ぎまわり、鉄次郎のバランスを崩しにかかる。しかし、鉄次郎も食われるわけにはいかない。脚を更に広げて安定させ、アサルトライフルを撃ち続ける。

「俺は……お前みたいな化け物には負けねーんだよ！」

獲物の喚きに興味などない。

デルラゴは更に顎の力を強め、今度は猛スピードで直進を始めた。

「こいつ……まだこんなに動けるのか……ゴハアッ！」

デルラゴが岩に突っ込み、鉄次郎は背中から岩に叩きつけられた。口の中いっばいに鉄の味が広がる。それでも引き金は引いたまま、照準も外さぬまま、デルラゴの顎を支え続ける。

銃弾は既に尽きかけている。次に叩きつけられたら死んでしまいかもしれない。この巨大な生物に飲み込まれ、ドロドロに消化されて汚い死体になるかもしれない。

恐怖は間違いない。それでも、鉄次郎の信念は彼を戦い続けさせた。

カチン……

悲しく響いた弾切れの音に鉄次郎は、

「——ッ！クソが……」

舌打ちをし、悪態を吐いた。

鉄次郎に残された武器はハンドガンとナイフ、そしてアサルトライフルの改造部に装填されたグレネード弾1発。普通の生物が相手ならば申し分の無い装備だが、この巨大な生物が相手では頼りないように感じられた。それでも、

——やるしかない。

鉄次郎は喉の奥にナイフを投げつけた。喉の奥にナイフが突き刺さり、血が流れる。更にハンドガンの弾倉が空になるまで一気に撃ち込んだ。狙いはナイフの柄。そして結果は全弾命中。ナイフは更に奥まで刺さり、多くの肉を抉り取って抜けた。

鉄次郎は後ろを振り向き、進行方向を確認する。

「おっと、こりゃあ別れは思ったより早そうだ」

進行方向に大木を視認し、鉄次郎はそう呟いた。

「じゃあな、化け物」

鉄次郎はナイフが抉り取った部分を狙ってグレネード弾を発射した。傷口にグレネード弾が埋まったことも確認せず、口が閉じる前に大急ぎで横に跳び、デルラゴに振り返る。同時に巨大な口が閉じ、

デルラゴの頭が弾け飛んだ。

デルラゴは勢いを殺さず、そのまま大木に激突し、停止した。頭だけが見事に無くなった化け物は身体をピクピクと痙攣させている。

もはや、すっかりとした確認は必要無い。

デルラゴ全滅。

後に残ったものはたった一つの結果。2人の戦いにおいて最小、そして最善の結果。

第八十五話

「ウガアアアアアア！」

「ヒイイ！」

バンという銃声と共に倒れる侵略者。絆はペタンと尻餅をついた。

その様子を見ていた明菜が一言。

「たった一人撃つたくらいでだらしないわね。本当に女の子なんじゃないの？」

「僕は男です！」

絆は絶叫した。

ここは戦場。メイド服姿の美少女：美少年——仲光絆と胸の大きいお姉さん系の美女——細木明菜はその真ん中にいた。

少年&美女+戦場という組み合わせは非常にアンバランス。当然、2人の姿はよく目立ち、すぐに侵略者達の標的になった。

「イヤー！来ないでくださいー！」

絆はまるで女の子のような声をあげて逃げ回る。そんな者に侵略者達が反応しないはずがない。ほぼ全員が絆を追いかける。

「モテモテねー、絆ちゃん」

「ちゃん付けしないでください！僕は男です！貴女わざと言ってるでしょう？？」

「……それがどうかしたのかしら？」

明菜はわざとらしく？マークを浮かべて答える。

「ああ……もう！とにかく助けてください！この人達さつきから鼻息が荒くていやらしいんです！」

絆は目で後ろを示しながら言う。

確かに侵略者達の鼻息は荒い。おまけに一部の顔はニヤけており、完全に変態だ。その様子はアニメでよくある場面の一つ、モテる女子とそれを追いかける男子達にそっくりである。絆は女子ではなく、男なのだが……。

「こっちは来ないでくださいー！」

「ウオオオオオ！」

絆が叫んだが、後ろの侵略者達はまるで聞こえていないかのよう
に追いかけて続ける。

「来ないでくださいー！」

「ウオオオオオ！」

「来ないでー！」

「ゴヘンローー！」

「何言ってるかわかりませんが本当に来ないでくださいー！」

「イエツサーー！」

「来ないでって言ってるでしょうがー！絆『マスタースパーク』！」

全く聞く耳を持たない侵略者達について絆がキレた。手から極
太のレーザーが発射され、侵略者達は容赦なく吹き飛ばされ、意識を
失った。

ゼエゼエと肩で息をする絆に明菜が言う。

「貴方って怒らせちゃいけないタイプだったのね」

「……それがわかったならもう揶揄うのはやめてください」

「わかったわ。でも、とどめを刺さないなんて腰抜けかしら？」

「行動不能にしたんですからいいでしょう？とどめを刺すなら貴女が
刺してください」

「……仕方ないわね」

明菜はため息を吐く。

もう何度聞いたかも忘れてしまうほど日常化した音——銃声が
戦場に鳴り響いた。



明菜が侵略者達にとどめを刺して数十分。相変わらず戦いは続
いていた。あれから起きたことと言えば、1人の侵略者が「おっぱい
のペラペラソース！」と叫んだ直後に首が消し飛んでいたことくらい
である。その時の明菜の顔は鬼のようだった。

「さて、絆くん。これから何か大きなことが起こるけど、それが何かわ

「かるかしら?」

「……随分唐突ですね。何か起きたんですか?」

「いいから質問に答えなさい」

「……仕方ないですね。……うーん……この人達とは比べ物にならないくらいの手相が現れるんじゃないですかね?ゲームやアニメでよくあるパターンです」

「……!」

目を見開いて黙り込む明菜。

絆は心配になり、

「あの……大丈夫ですか?」

「……ハッ!……ええ、大丈夫よ」

「随分驚いていたみたいですけど……もしかして正解だったりしますか?」

「それはすぐにわかるわ」

「……え?それって本当に——」

突然、地面がグラグラと揺れ始めた。絆は空中へ飛び上がり、明菜は「やっぱりね……」と呟く。

地面から巨大なハサミが現れ、それに続いて身体が這い出してきた。人間のような上半身と芋虫のような腹から生えたトカゲのような脚、更に尻尾にはハサミがついている。体高は2m?を超えるだろう。

「うわあ……気持ち悪いです。……何なんですかアレ?」

「アレはU—3ね。私もまさかあんなにキモい奴がいるなんて思っ
てなかったわ」

「僕あんなのと戦いたくないです!」

「私だつて嫌よ!……でも、生物兵器としての完成度はかなり高いから……わかるわよね?」

「……アレだけでも幻想郷は危機に陥ると?」

「そういうこと。というわけで行ってきなさい」

明菜は絆を引っ張り下ろし、U—23の前に押していく。

だんだんと近づいてくるその醜悪な姿に絆は、

「嫌アアアアアアア！キモいキモいキモいキモいキモいキモいキモい……」

と、叫ぶ。

見た目が完全に美少女の絆に「キモい」と連呼されれば誰でも傷つく。U―3もシヨックだったのか、地面に手をつけていた。

「あ……ごめんなさい……」

「敵に謝ってどうするのよ……」

そう言う明菜だったが、さすがにかわいそうだったためそれ以上は追求しなかった。

「それで……殺す……んですよね？」

「そうよ。……気の毒だけど、そうしなきゃいけない」

「……！」

「殺す」「そうしなきゃいけない」という単語が発せられた瞬間、U―3は後ろへ跳んだ。

絆と明菜はU―3へハンドガンを向ける。そのときにはU―3も既に臨戦態勢を整えていた。

「……ごめんなさいね。死んでもらうわ！」

明菜のハンドガンから弾が発射される。U―3はムチのようなその腕を振るい、飛んできた弾をまるでハエのように叩き落とした。明菜の表情が歪む。

——笑えない冗談ね。

落ちた弾はまるで熟れすぎて落下したトマトのように潰れていた。

「ヴオオオオオオ！」

明菜にU―3の腕が迫る。明菜は横へ跳んでかわし、伸びきった腕をナイフで突き刺した。しかし、

「……えっ？」

その筋肉は膨張することで突き刺さったナイフを掴んでしまった。

明菜はナイフを抜こうとするが、筋肉は掴んだまま放さない。「それならば……」と、明菜はナイフを踏みつけた。

ガリツ！

ナイフが骨に届いたことを示す音が響き、U-3はビクリと身を震わせる。

その瞬間、背中にも激痛が走った。

「僕のことを忘れてもらっては困りますよ」

「グ……グ……ガアアアアアア！」

U-3は怒り狂った。

背後はほとんどの生物にとって死角となる。そのため、背後からの攻撃はより強い恐怖を与え、より強いストレスになるのだ。

U-3は身体を1回転させる。尻尾の鋏とムチのような腕が前後の2人に襲いかかった。

「クツ……！」

「うわっ！！？」

背後に跳んで避ける2人だったが、空中で無防備になる。

U-3はもう1回転し、先程よりも更に伸ばした左腕で薙ぎ払った。2人の身体がくの字に曲がり、吹き飛ぶ。

2人は受け身をとったが、地面は固く、着地の衝撃を余すことなく伝えてくる。

「グギウウウウウー！」

U-3は2人に突進。

絆は迫り来る醜悪な姿に死を覚悟した。その瞬間、ドバン！

U-3の身体に無数の穴が開き、動きが止まる。絆の背後では明菜がショットガンを構えていた。

「私達は兵器じゃない。生身じゃ……あんたみたいな化け物には敵わない。……でも……強くあるための……恐怖を忘れるための兵器なら持っている！ 悪いけど死んでもらわないと……私達が作り出したから私達が責任を取るんだ！」

「……かっこいいこと言っただつても唐突すぎてどう反応すればいいかわかりませんよ」

あまりにも冷静な絆のツツコミに、明菜は顔を赤くしてうつむ

く。絆はそんな明菜の肩に手を置き、

「でも、貴女の言葉は間違っていますませんでした。僕達がここで問題を処理するのはおかしいかもしれないですけど、そもそも問題を作ったのは僕達人類ですからね。……後は僕に任せてください」

絆はU-3の前に踏み出した。その表情に恐怖はない。あまりの変わり様に明菜は思わず訊いてしまう。

「突然どうしたの!?？」

「僕だって男です。女性である貴女にばかり任せられるわけにはいきませ
ん」

「……それなら私がやる——」

明菜は踏み出そうとするが、すぐに力なく膝をついてしまった。

「さっきの一撃で怪我をしたのでしょう？ それなら、なおさら貴女を戦わせるわけにはいきません。僕がやりますので貴女は待っていてください。ここでやらなきゃ男がすたります」

「……ま、待ちなさいよー」

——あんなにかじや勝てない！

明菜は手を伸ばすが、絆の背中はまだ既に手の届かない場所にあった。



絆は明菜を守る形でU-3の前に立ち塞がる。空気を読んだのか、U-3は撃たれてからずっと固まっていた。

「待たせてしまいましたね。さあ、戦あそびいましょう?」

お辞儀をして微笑んだ絆。それが再開の合図だった。

U-3の腕が絆に向けて連続で振り下ろされる。絆は軽やかにステップを踏み、ヒラリヒラリと身をかわしていく。

先程の絆からは想像もつかないような動きに、明菜は驚き、そして見とれていた。

「ギュルルアー!」

U-3が一際大きな声で鳴き、その両の手を地面に叩きつけた。

そのあまりの馬鹿力に地面が隆起し、砂煙が舞い上がる中、絆は駆け出す。それに気づいたU-3が腕を引き戻そうとするが、時既に遅し。

絆はU-3の懐に潜り込むと同時に星熊勇儀の絆を発動。フルパワーで殴り抜いた。

「ギユ……ギ……」

苦しそうな鳴き声を出すU-3。

「まだまだ！ 絆『マスタースパーク』！」

絆は至近距離でマスタースパークを発射した。U-3がまるで紙切れのように吹き飛ぶ。

絆は更に追撃しようと足を踏み出したが、その身体は勝手に前へと進んでいた。足首にU-3の腕が巻きついている。

咄嗟に、絆は足を踏ん張った。しかし、能力でパワーを増しているとはいえ所詮は人間。U-3が少し力を込めて引っ張っただけで簡単に引き寄せられてしまった。

向かう先には鋭い大鋏。絆は地面を蹴って飛び上がる。直後、足元で刃が交差した。

バツンと音を立ててU-3の腕が切り落とされる。

——自分の腕ごと!?!?

腕から解放された絆は鋏を蹴って後退。距離をとりながらハンドガンを連射した。弾が当たるとはなかったが、U-3が怯む。絆は再び、

「絆『マスタースパーク』！」

マスタースパークを発射した。レーザーが射線上の地面を吹き飛ばす。しかし、

「……いない!?」

絆が目を見開く。なんと、U-3の姿が消えていた。あの醜悪な巨体が一瞬で消えてしまったのだ。

——いったいどうやって……?!

そう思う絆だったが、すぐに空中へ飛んだ。直後、絆の立っていた地面が巨大な鋏で切り裂かれる。

「地中は卑怯じゃないですかね？」

飛び道具を使う人間の方がよっぽど卑怯だが、絆にそんなことを気にしている余裕はない。

絆は弾幕をばらまいた。ダメージが無いことをわかりきっているが、興味を引けないことはない。

結果は成功。弾幕は地面から飛び出してきた鋏に当たり、U-3が地上に這い出てきた。

絆はU-3の背後に回り込み、

「絆『レーヴァテイン！』」

落下の速度をそのままに、レーヴァテインを真上から振り下ろした。

「ウアアアアアアアア！」

レーヴァテインは炎の剣。肉体に食い込んだ刃は肉を焼き、組織を破壊していく。そのあまりの痛みにU-3が叫び声をあげた。

——後少し……！！

本当に後少しだけだった。

尻尾の鋏でレーヴァテインは空高く弾かれ、絆の身体が宙を舞う。そして、無防備な絆をU-3の腕が薙ぎはらった。

「あつ……がつ……！！」

絆は地面を転がり、岩に激突した。

命を失わずに済んだのは偶然にも勇儀の絆を発動していたおかげだろう。しかし、それによって絆は残酷な終わりを迎えようとしていた。

グラグラと揺れる視界の中で、迫ってくる巨大な影。U-3は絆にとどめを刺そうと突進した。

「ゴアアアアアアア！」

U-3は絆を叩き潰そうとその腕を振り下ろした。絆は転がってギリギリで避ける。しかし、もう限界だった。絆は意識を手放した。そしてU-3もまた、腕だけで終わるはずがなかった。

U-3はその巨大な鋏を絆に向け、振り下ろした。

ザクッ！



結果から言えば、勝者は人間。U-3は死んだ。

それは偶然の出来事だった。U-3はレーヴァテインに貫かれて死んだ。空高く弾き飛ばしたレーヴァテインが落ちてきて突き刺さったのだ。

しかし、絆は自身が勝った瞬間を見ていない。見ていたのは明菜、たった1人だった。

勝者 細木明菜&仲光絆

第八十六話

「ゴヘー——」

「……」

「おっぱいのペラペ——」

「……」

「ウゝ オオオ——」

「……」

零——無月零は無言で侵略者達を斬り続けていた。その光景は正に死屍累々。百人斬りという言葉が可愛く思える量の死体がそこらかしこに転がっている。

そんな化け物のような少年（な見た目の超高齢者）の後を追う少女——アン。

「アヤレ——」

Bannon!

「……」

普段はうるさく感じるほど元気なアンも今は驚くほど静かで、黙って引き金を引いていた。

共に戦っている仲間だと言うのに、2人の間に流れる空気は岩すら崩してしまうほどに重い。

実はこの2人、以前に喧嘩（と言うよりもはや戦争）しており、元は完全に敵対関係にあったのだ。そのときのアンは世界（友達）を救うために能力を発動して暴走、零は零で暴走したアンから世界を救うために戦うことになってしまったのである。

「世界を救う」という同一の目的のためだったにもかかわらず、敵対してしまったことは運が悪かったとしか言えない。

ビシュッ!

また1人、首が飛んだ。

零は冷酷な表情を浮かべながら、鮮やかな剣技で侵略者達を葬っていく。その姿にアンは恐怖を感じてしまっていた。

——やっぱりこの人は危ない。私と真逆で私と同じ……。

そう心の中で眩きながら、アンは引き金を引く。また1人、敵が死んだ。

◇

「お前、いつまで黙っているつもりだ？」

相変わらず会話も無しに駆除を続けていたが、突然、零が質問を投げかけた。

驚いたアンはビクビクしながらも零の方を見る。しかし、零の視線はアンの方を向いていなかった。

気のせいだと思い込み、再び銃を構えるアンだったが、その目の前に死体が飛んできた。

「ヒイツッ?」

驚き、尻餅をつくアン。

死体には血文字で『いつまで黙っているんだ?』と書かれている。涙目になって再び零の方を見れば、その目は鋭い光を放ちながら、アンを貫いていた。

怯えるアンに零はため息を吐き、

「別に俺は怒ってねえから早く言え……」

そう言われても、さつきまで敵を平気で叩き切っていた男だ。怒ってなくても切られそうで、どちらにしる怖い。

アンを睨む目が更に鋭くなる。もう既にアンは失禁しそうになっっていた。

零の目は依然として鋭かったが、その零が突然俯いた。

「俺ってそんなに怖いかな……」

と、眩く。

その眩きを聞いた瞬間、アンの脳内にある言葉が流れた。

『めちやくちや怖いです、大長老!』

その言葉が何故流れたかはわからなかったが、あまりのバカらしさに自然と力が抜けてしまった。

——この人、本当は怖くないかもしれない。

「おら、早よ言えや！」

——前言撤回。やっぱり、この人怖い。

睨みつけながら言ってきた零に、アンは少し恐怖を覚えた。しかし、先程脳内に流れた言葉のせいか、怯えることはなく「フフツ」と笑ってしまった。

「何がおかしい？」

「あんたがあまりにも真面目そうに呟いたから少し面白かったのだ」

「この！……俺はやっぱり怖——」

「それに安心したのだ」

「……は？」

思わず間拔けな声を出す零。

アンはニコニコしながら、

「許してくれたみたいで嬉しかったのだ。私があんなに酷いことしたのに、許してくれたのだ！」

「ああ……そのことか……」

「そうなのだ。ありがとうなのだ！」

「俺、別に許したわけじゃないぞ」

「え……？」

天使のような笑顔から一転、アンは絶望のどん底に落とされたような顔になる。

アンが目には涙がうつつすらと溜まり始めた時、零は「まあ待て」とアンが泣き出すのを止めた。

零は決まりが悪そうに話し始める。

「そもそも、俺怒ってねえから。それに、許してないつつつても俺はそもそもお前を恨んだりもしてねーし。お前は友達……ひいては幻想郷を守るために能力使って暴走したんだろ？　なら、俺は怒んねえよ。友達傷つけるのは流石に怒ったけどな」

零は空を見上げ、

「俺は幻想郷を作った者だ。俺にとっちゃ幻想郷全部が子供みたいなもんでな。そいつらがどんな喧嘩しようがどうなろうが知ったこっちゃねえが、滅ぼすっていうのは許せねえんだ。お前は別に壊そうと

したわけじゃねえだろ？　むしろ守ろうとしてくれた。その点、俺はお前に感謝してんだよ」

——あくまで「その点」だけだがな……。

表情は相変わらずだったが、零の言葉は優しかった。その言葉はアンの心にこびりつき、固まってしまっていた罪悪感を溶かし、洗い流した。自然と溢れていた涙はその洗浄に使われたものだったのだろう。

突然涙を流し始めたアンに、零は戸惑う。そして、出した答えは……

「じゃ、じゃあ俺はこの辺で……」

逃走だった。

背を向けてそろりそろりと歩き出した零のコートの裾をアンが掴む。

「待つのだ……」

「ホホホホウ、キャツポウ!?　放してくださいええ!」

奇声を発して驚く零。

アンは零の胸に顔を埋め、泣き始めた。

「おい!　離れろ!?　鼻水つくだろうが!」

零が絶叫する。

しかし、零の言葉も全く聞こえていない様子でアンは泣き続ける。

「う、うぐう……ちくしようめ……」

——仕方ねえな。

零はアンを抱き寄せ、その背中を優しく撫でる。そして、泣き止むまで離さないのだった。



「ありがとうなのだ!　スッキリ爽快なのだ!」

十数分後、やっと泣き止んだアンが零に礼を言う。一方の零は無表情で、不機嫌そうなオーラを放ちながら黙っていた。

そんな零に、アンは不思議そうな表情を浮かべ、

「そんなオーラ放ってどうしたのだ？ ポッドを親父ごと投げ飛ばしたサイヤ人みたいなのだ」

「……そりゃあ、怒るだろうなあ。こんだけされりやあよ……」

「もしかして私が泣いている間、ずっと敵を倒していたのだ!?？ 悪いことしたのだ……」

——ちげえよバカ！

喉元まで出かかったその言葉を零はなんとか飲み込んだ。その代わり、申し訳なさそうな顔をするアンを、柱の下まで落ちた息子を見る某リサ×2先生のような目で見下ろしてやる。

確かに、零はアンが泣いている間、近づいてきた敵を全て蹴り潰していた。しかし、違う。零が怒っているのはそこではないのだ。

零は視線を自身の身体に落とす。白いコートの胸の部分はアンの涙と鼻水でベトベトになっていた。

アンは零が不機嫌になっていることなど関係ない様子で、「まあ、そんなことより改めてお礼が言いたいのだ！」

まるで今まで泣いていたことを全て忘れたかのような顔（目の周りは赤く腫れ上がっていたが）を零に向けた。

相変わらず謝罪の無さそうなアンに、零は顔を引きつらせる。

「零が戦っていてくれた分、私も頑張るのだ！」

「おう、頑張れよ……」

「……あ、そうなのだ」

零に背を向けたアンだったが、何か思い出したのか、振り返る。「私が泣いている間、服が汚れるのにずっと抱きしめてくれててありがとうなのだ。お父さんみたいで安心したのだ！」

「誰がお父さんだ！ てか、まず最初にコートのこと謝れよ！」

「そんじや行ってくるのだ〜」

アンは零のツツコミから逃げるように駆けていく。そんなアンの後ろ姿を見ながら、零は思う。

父親……か。俺の作った幻想郷の奴等はほとんどが俺の子供。

……あ、てことは……。

「とんだクソガキばつかじやねーか！」

零は絶叫した。最後に小声で「すごく良い子だけどな」と付け足して。

零は戦うアンをチラリと見る。能力を発動して周りに合わせ、銃を上手く使いながら戦う彼女を見ていると何故だか無性に戦いたくなってきた。

零は剣を握りしめる。

「この世界の子も助けないとな」

——今は戦って救うしかないか。

剣を片手に零は走り出した。狂気的な言葉のおまけ付きで。

「オラァ！ もっと斬らせろやァ！」



この日、侵略者達は酷く後悔した。何故、こんな場所に攻め込んではしまったのか、と。そして、その主な原因は合わせる力と無の力を持った2人のチートだったと言う。

侵略者達は2人の名前から意味を読み取り、暗示をかけてこう呼んだ。

「二進数」と。

第八十七話

戦場のど真ん中。

範人は敵の大將の元に最短距離で着くコースを走っていた。当然、戦場のど真ん中を突っ切るなんて「狙ってください」と言っているようなもので、敵はウヨウヨ寄ってくる。

ただし、範人からすれば大量にいる奴等は破壊可能なオブジェクトのようなもの。自ら肉の壁となつて目の前に飛び込んでくる者には容赦無くタツクルかダツシユ斬りをくらわせて粉碎していく。

「退け退け退け退け退けエエエエ！」

「退け」と言われなくとも、普通なら退く。と言うよりも、退けさせられる。

容赦無く粉碎すると言っても、そもそもそのスピードで衝撃波が発生しているため、本当に真正面以外は普通に吹き飛ばされる。

そんな暴走列車と化している範人の目に敵方の大將の姿が映る。しかし、その前に立ち塞がる影が5つ。

筋骨隆々とした身体に縫合された脛。ガラドール、それが彼らの名前だった。

更にスピードを上げて衝撃波で倒そうと考えた範人だったが、ガラドール達が地面を踏み締めて鋭く長い爪を露わにした瞬間に思考を変えた。

——このまま突っ込んででも止められる。

そう思った範人は両腕を第一に変異させた。

範人の両腕が漆黒の甲殻に包まれ、高熱を放ち始める。それを待ち構えていたのか、ガラドール達も構えをとった。

「プレゼントだぜえ！」

範人が脚に力を込め、地面を蹴った瞬間、ガラドール達にはその姿が消えたように見えただろう。直後、ガラドール達の全身をとてつもない衝撃が襲った。範人が指突で何度も貫いたのだ。

ガラドール達の身体に穴が開き、力無く倒れる。その背後で微笑を浮かべた範人が呟く。

「ノックインサイド……」

直後、ガラドール達の身体が風船のように膨れ上がり、爆発した。飛び散った破片も発火し、燃え尽きていく。

ノックインサイド。

文字通り、内側insideから叩くknock技である。

原理は簡単。第一変異の特徴である可燃性ガスを指突した瞬間に相手の体内へ流し込み、発火させただけである。北〇神拳は関係ない。

かつてはガラドールだった灰が風に吹かれて舞い上がり、煙幕となって視界を遮る。

範人は気にせず敵方の大将の前へと歩み出る。軽快なジョークと共に。

「正面げんかんくらい開けておけよ。少し時間がかかっちゃまったじやねえか」

「……弱点あながあれば突く。それが戦いの基本だと隊長から教わりました。大将として鉄壁の陣形を組んだだけですよ」

「その鉄壁は俺が貫いちまったけどな。その鉄壁の陣形とやら、弱点あなはガバガバみたいだな」

「下ネタですか？ いやらしい」

範人のジョークに極めて真面目な口調で答える大将。灰のせいで姿はぼやけているが、声ははっきりと伝わってくる。その中で範人は思った。

——こいつとは気が合いそうにないな。

「そんなことより姿を見せろよ。これから殺すんだから顔くらい覚えてやる」

「……気が早いですね。早漏は嫌われますよ？」

「俺はあんまり時間かけたくないんだ。あと、俺は早漏じゃない」

「せっかくなんですから、もう少し話しませんか？ 煙で姿もよく見えないわけです」

「これくらい一瞬で晴らすことができるんだよ。そっちが来ないなら、こっちから行かせてもらおうが？」

「どうぞい勝手に」

返答がきた瞬間、範人は地面を蹴った。あまりの力に地面が爆発したかのように吹き飛ぶ。

範人は飛び出した勢いを殺さず、アルゴスを振り下ろした。
ガキーン！

しかし、その一撃が受け止められたことを大きな金属音が告げる。

振り下ろす力と支える力。作用と反作用で発生した衝撃波は辺りに漂っていた灰を吹き飛ばした。

「さあ、これで改めてご対面つてわけだ。ツラ見せやが…れ…！」「やれやれ、せっかちな人です…ね…え…！」

2人は目を見開いて驚き、同時に後退した。あまりの驚きに一瞬だけ言葉を失う。

「…：…なんでここにいるんだ？」「…：…どう…：…して…：…？」
「ルーク！」「ハント隊長！」

2人は互いの名前を叫んだ。



ルーク——ルーク・バルドンはかつて範人の部隊に所属していた合衆国政府のエージェントだ。そして、範人が生物兵器であることを知っても逃げ出さなかった少数派の人間でもある。

性別は男。年齢は範人の2つ下の16歳で、黒緑の髪とこれまた黒緑の瞳をしている。

出身地は不明。両親の所在も、それらが誰かも不明。名前さえも政府に保護されてからつけられた。

彼は政府の下に就く前、中東で少年兵として活動していた。範人との出会いは戦場。偶然にもエージェントとして潜入任務にあたっていた範人が戦地で倒れていたルークを保護したのだ。

そんなルークは範人が初めて完璧にこなせなかったミッションで死亡したはずだった。

しかし現在、ルークは戦場で範人と剣を交えていた。

「なんでお前が……クソッ！」

「私はただ助けてもらった恩を返しているだけです。この場所へのアタックもその一つですよ」

「だからって侵略だと？ ふざけるな！」

「別に侵略とは言ってませんよ。目的さえ達成すれば、すぐに解放します。これはあくまで手順であって最終目的ではありませんから」

「手順……だと？ だったら最終目的はなんだ？」

ルークの剣が？ マークを浮かべる範人を吹っ飛ばす。範人は空中で数回転し、着地した。その完璧にも近い身のこなしにルークは「ホウ……」と感嘆の息を漏らす。しかし、その姿勢に隙は全く見られない。

ルークは全く隙を見せぬまま話し始める。

「教えてあげてもいいですけど、その前に前提となる条件があります」
「言ってみろ」

「ハンターキングって知ってますよね？」

ハンターキング。その言葉を聞いた瞬間に範人の表情が固まる。
「その表情、どうやら知っているみたいですね。……そうです。私達が最後にチームを組んだとき、街を丸々一つ焼き払った所属不明の生物兵器です」

……やめろ。

「あの時から私達は離れ離れ。隊長は政府の下を離れ、二度と同じチームになることはなかった。……そして、約束も果たせなかった」

……やめてくれ。

「そういえば、あの後副隊長とはどうなっ——」

「やめろオオオオオ！」

——思い出させるな！

気がつけば、剣を振っていた。

範人の薙ぎ払いを剣で受けたルークは勢いを抑えきれず吹っ飛ばす。そして、着地と同時に自ら跳んでバック宙することで衝撃を逃した。

「突然何するんですか!?!? 危ないじゃあないですか!?!?」

「……すまない。つい……反射的にな」

「まあ、隊長が反射的に行動するのは昔からの癖ですから構いませんよ。それに、やっと約束を果たしてもらえそうですから」

「約束……か……。確か、剣の稽古だったな」

「はい！ 隊長の剣技は私の憧れだったんです。それに、教官なんてもう相手にならなかったんです。でも、隊長はずっとOKを出してくれなかった。そして、やっとOKが出たのがあのミッションの時だったんです。ずっと心躍らせて待っていたんです」

満面の笑みを浮かべて剣を構える。しかし、範人の表情は優れない。

「なあ、まだ目的を聞いてなかったんだが？」

「あ……すみません。ついつい熱くなってしまいました。ハンターキングのところからでしたよね？」

「……ああ」

範人は頷く。

「じゃあ、最終目的を教えてくださいね。私達の最終目的は——」

瞬間、世界が止まった。

景色は色を失い、風は乗客を全て降ろした。すなほこり

「ハンターキングを捕獲、または死体を持ち帰ること」

その言葉に範人は絶句する。

直後、範人の胸をルークの剣が貫いた。



「つまらないですね、隊長。こんなに弱かったなんて……がっかりですよ」

剣に貫かれて静かになった範人を見下しながら、ルークは言った。

——剣の稽古をつけてくれなかったのはこの弱さ故か……。

ルークは勝手に結論に達して笑みを浮かべる。

「やはり、最強は私だ！」

——生物兵器も敵じゃない！

ルークに敵う教官はいなかった。現役のエージェントも元少年兵のルークに実戦経験の数で上回ることはない。だからルークは確信した。「自分が最強である」と。

「フフフ……フハハハハハハ！」

突然、範人の笑い声が響く。

ルークは驚き、咄嗟に範人から剣を引き抜いて後退した。貫かれた胸からは血が噴水のように溢れる。しかし、その傷もみるみるうちに塞がってしまった。

驚きが恐怖に変わって立ち竦むルークに、範人が話しかける。

「お前……何も知らないんだな」

「は、はあ!? えっ……あつ……」

「お前のお目当ての奴ならずと近くにいる」

「は、はい……! えっ……!?」

「教えてやろうか？ ハンターキングはこの俺だあ！」

言葉と同時に範人の全身を炎が包み込み、黒い甲殻を纏った化け物が現れる。

「お前はあの街で死んだ。街を焼き払った炎に巻き込まれてな。そう、俺に殺されたんだ」

「うっ……ぐっ……」

「お前だけじゃない。隊のみんなも、敵も、逃げ遅れた住民も全員死んだ」

「くっ……そ……」

「やったのは俺さ。俺が全員殺したんだよ！」

「くそがアアアアア！」

ルークは範人に斬りかかった。範人はそれを腕で受け止め、空いた手でルークを投げ飛ばした。

予想外すぎたパワーに、ルークは受け身に失敗。地面に背中から叩きつけられた。

身体の芯に走る痛み。歯をくいしばってそれに耐え、立ち上がる。そして、余裕の表情で佇む化け物に再度斬りかかった。

「死ね死ね死ね死ね死ね……」

——そうだ、それで良い。俺を恨め。俺を恨んで、自分の間違いを知ることなく死んでくれ……。

範人はひたすら斬撃を受け止める。ガンガンゴンゴンと大きな音が出て甲殻には傷一つつかない。

不意にルークが後ろへ跳んだ。剣を向ける先では範人がルークに手を伸ばしている。

「ほう、良い反応だ。昔より幾分かマシンになったんじゃないか？」

「……………何故です…………」

「あつ？」

「何故、反撃してこない？」

「そりゃあ、俺が反撃したら勝負が終わっちゃうからなあ。それに、反撃ならずつとしてしている。よく言うだろう？ 攻撃は最大の防御、防御は最大の攻撃だって。現にお前は疲弊してきている。相手の体力を消耗させる攻撃ってことさ」

「ふざけやがって…………オラアアアアア！」

ルークは再び範人に向かって飛び出そうと身構える。

しかし、

「はい、そこまで」

ルークが爪先に力を入れた瞬間、範人の甲殻の隙間から炎が噴き出した。あまりの火力と攻撃範囲に驚き、ルークは後退する。

そんな元部下に歩み寄る範人。

一步毎に炎が地面を溶かし、赤く輝かせた。感じたことのない威圧感と熱にルークの全身の汗腺から汗が噴き出す。

——手に持つ得物が滑り落ちてしまいそうだ。

自身の負ける姿が容易に想像できる。ルークには目の前の化け物がとても巨大なものに思っていた。剣を握る手にも余計に力が入ってしまう。

その時、ルークの頭の中に声が響いてきた。

——力を抜いて自然体で。お前の武器は経験の多さと高度なテクニクだ。

——なんで……こんな時に……。

——お前は強い。少なくともその辺の軍人には負けねえよ。恐れるな、自信を持って。

——ああ、そうか……。

——俺が強いつて言ったんだ。そう簡単に負けることは承知しねえぞ。

——やはり、私は……。

——俺の目の前で死なれちやかなわん。大切な部下だからな。

——ハント隊長が純粹に……ただ純粹に……大好きな憧れの人なんだ。

——ほら、飯でも食いに行こうぜ。

それは珍しく実践練習を見に来ていたハント・ゴートレック——現在の旅行範人がかけてくれた言葉だった。

化け物が地面を蹴る。漆黒の鎌が首に迫る。しかし、

ガキイン！ カアン！

「……りっ？」

ルークは受け止め、打ち上げた。

驚く範人の胴に剣の柄が打ち込まれる。ダメージ自体は無くとも衝撃は絶大。範人は吹っ飛ばされた。

ルークは追撃を加えようとするが、範人が姿勢制御のために噴き出した炎に阻まれる。しかし、その流れが完全に止まることはない。

「力を抜いて、自然体で……」

瞬間、ルークの身体が急発進した。範人は火炎弾を放つが、急停止と急発進を繰り返しに翻弄され、当たらない。

気がついた時、ルークは既に範人の懐に飛び込んでいた。

範人は拳を振り下ろす。高熱を発して赤く輝く拳がルークに迫る。しかし、ルークは剣を巧みに使って、その拳も受け流してしまった。範人の姿勢が崩れる。そこへ目にも止まらぬ速さで斬撃が叩き込まれる。

「くっ……」

あまりの攻撃に、範人は炎の壁を作りながら後退した。

呼吸を整え、再度攻撃を仕掛ける。今するべき行動はそんな簡単なことだったが、範人にはそれができなかつた。ダツシユしようと脚に力を入れた瞬間、全身の関節から血が噴き出したのだ。同時に襲いかかる激痛。それに耐えて前に進もうと必死に歯をくいしばるが、足は前に出ない。

「どうやら効いたみたいですね。全身が甲殻でガツガチの虫みたいだったから痛覚があるかどうかわかりませんが、あつたんですね。とりあえず、関節の裏は柔らかかったですよ」

「……なるほど、甲殻のない関節の内側から切つたつてわけか。腱まで切りやがって……」

「戦いにおいて相手の動きを阻害するのは当然のことです。それを教えてくれたのは貴方でしょう?」

「こんな使い方されるとは思っていなかつたがな」

話をしている間に傷口は塞がった。そして、ルークの成長した戦闘スタイルも記憶した。

範人は炎の向こうにかすかに見えるルークに問いかける。

「じゃあ、これは知っているか?」

範人は一瞬だけ全身から力を抜き、走り出した。

「なっ……!?」

先ほどの自身をも上回るスピードを見せられ、ルークは狼狽える。

踵から走り出す。

ほとんどの人間は走り出す時、爪先から——ふくらはぎの筋肉を使用するが、本来ここはブレーキをかけるための筋肉である。素早く走り出すには向かず、ブレーキをかけてしまう。だから、走り出す時に素早く走り出したければ、踵から走り出す方が良いのだ。

しかし、それくらいならルークにもできた。ルークを驚かせたのは踵から走り出したことではない。

「爆発を筋力に変えたのか!?」

範人は爆発を筋肉として使ったのだ。

筋肉は物を持つ時、身体を動かす時、常に身体を支えている。時

折、特殊な動作もするが、その基礎になることは支えることである。爆発は衝撃や爆風によって物を飛ばすことができる。そして、それは支えることができることも意味する。

例としてハネカクシと言う虫の仲間にはガス噴射を行うものがある。ガスを噴射することで猛スピードで移動するのだ。

しかし、これは制御のないエンジン。最初の噴射量で距離やスピードは多少調整できても細かい調整は出来ない。

そう、噴射は飛ばすだけなら簡単だが、調整が難しいのだ。そして、爆発の難易度はその更に上に行く。

これまで、範人は勢いに任せて攻撃を押し通すこと、そのときの簡単な姿勢制御に爆風や爆炎の噴射を行ってきた。それだけでも恐ろしい程のバランス感覚、精密性、動体視力 e t c ……。これらは天才と言うべき技術だろう。

そこへ、範人は更に爆発を自身の手足——正に爆発的なパワーを持つ手足として使う技術を使用したのだ。驚かないはずがない。

範人は爆発を自身の踵として使った。甲殻の閉閉、爆発の強さ、ガスの量を的確に調整し、爆発を自身の身体の延長として自在に使用。透明な筋肉で地面を打った。

ルークは目を疑った。急停止や急発進と言った優しいものではない。瞬間移動ですら生温い。まるで分身しているかのようだ。右を打たれたと思えば、次の瞬間には左を打たれる。猛スピードの攻撃に、あつという間にダメージが蓄積してしまった。

「くっ…そお……」

目の前で地面が吹き飛んだ。ほぼ同時に背後でも爆発音が響いた。こんな中で次の行動なんて読めない。

普通の人間なら発狂していただろう。しかし、ルークはまだ冷静だった。ただ、それでも範人の動きは全く読めない。それでも、ルークは挑戦した。

——人間の長所は常に新しいものを追い求めて、無にも見える中に可能性を見出して実現できることだけ。

ルークは正面に剣を構えた。本職が盾ではないにもかかわらず、

今の剣はその堂々とした立ち姿から鉄壁の守りに見える。

直後、ルークの腕に痺れるような衝撃が走った。剣が砕け、吹っ飛ばされる。そして、岩壁に背中から激突した。

「ぐう……痛え……」

血が喉の奥から登ってくるが、なんとか高速の一撃から命を守ることはできた。しかし、自分の得物は大破。少しだけ残った刃で戦っても勝てるとは到底思えない。

そんなルークの首筋に漆黒の鎌が当てられた。

「さあ、この場で潔く死ぬか？ それとも抵抗して苦しみながら死ぬか？ どっちが良い？」

範人の目はもはや人に向けられるものではなくなっていた。獲物を見る獣の目——ハンターキングの目がそこにあつた。

ルークは絶体絶命。しかし、希望は捨てなかつた。人間は捨てることになつたが……。

「どちらを選びませんよ。私が選ぶものは勝利！ 貴方を捕獲することです！」

「……そうか。死ぬよ……」

——死ぬのは1度だけが良い。でも、お前は既に1度死んでいく。だからせめて、3度目の死が無いように……。

「死ぬエエエ、ルウウウクウウウウウ！」

範人が叫ぶ中、小さなカリツという音が響いた。



ただ、鎌を少し動かすだけだつた。ルークの命を奪うにはたつたそれだけで充分だつた。しかし、できなかつた。おかしい、何かがおかしい。何故、地面が頭の上にあるのだろうか？

気づいた時、範人の身体は宙を舞っていた。甲殻の隙間から覗く目は何が起きたのかわからない様子で見開かれている。そして、その前ではルークが立ち上がっていた。

ルークの肩から力が抜け、頭が下を向く。直後、ルークの持つ剣は「ピピピッ！」という音を発し、新たな刃を生やした。それは生体認証が完了した証。ルークが変異し、身体が違う生物へと置き換わった証拠だった。

「ターゲット発見。捕獲シマス」

——ウィルスは生物兵器側への片道切符。

かつて散々言い聞かせられた言葉すら忘れ去り、ルークは無表情で剣を構えた。

◇

ルークの生体認証が終わった頃、範人の甲殻には緑色が混じり始め、記憶の中を彷徨っていた。そこにあるのはたくさんの死と傷、そして少しの友と幸福だった。

かつての範人は無慈悲な戦闘マシン。政府に仕えるエージェントであるにもかかわらず、仕事は戦地や危険地帯バイオハザード発生区域への派遣ばかり。もはや軍人だった。そして、そう言った場所では必ず、命が篩にかけられる。範人はひたすら戦った。無慈悲に、無感情に、ただ生きるために何も考えず戦った。

——今となつてはただの大量殺人だ。

範人は心の中で自嘲する。人間なんて忘れていたあの頃の自分を。そして同時に思った。人間の残虐さを持たずに戦っていて良かった、と。

贖罪は身体を蝕み、変えていく。背中には新しい鎌が生え始め、甲殻にもだんだんと緑が広がっていった。理性は溶け、心も身体もハインターキングに満たされていく。

反省も償いも散々した。それでも、もう足りなくなっていた。重ねた罪命があまりにも多すぎた。

——ああ、あの時も俺が捕獲されれば良かったなあ……。

そうすれば、街は消えなかったし、範人は心に大きな罪を背負うこともなかった。そして何より、かつての友——エレナが幸せになれ

た。

——もうどうなったっていいや。過去は変わらない。

思い出の数々が想像に変わりだした頃、ついに範人の心は罪を逃避した。まだ、それだけの余裕があったのだ。それは残った少しの幸せを抉り取られなかったからだろう。

暴走寸前、範人はギリギリで止まった。

——失ったものはもう戻らない。

範人の顔が前を向き、瞳が戻ってきた。甲殻の間から嘔き出す炎も元の火力を取り戻し、赤々と燃え盛る。

「——っしやあ！ 来やがれコリア！」

——何かを失った分、俺は人間を失い、生物兵器向に近づく。そして最後は……。



範人の知る限りでは、ルークは鍛え抜いた脚の機動力でスピードを生かした戦い方をする突撃型のエージェントである。故に、元々使っていた武器は銃よりも近接武器、それも、隠しやすいナイフではなく、相手により深いダメージを与える長剣や高周波ブレードだった。

だから、フットワークで素早く移動はできても上半身は重い武器に振り回されるはずだ。実際に、訓練では重さを支えきれずに動きにムラができていたため、重さを受け流して利用するようにさせていた。

しかし、今は身体状況が大きく異なっている。右腕の腕甲は片手に持った長剣と釣り合うほどの重さがあるように見え、バランスをとって振り回されることを抑えると同時に手数を増やす役割を果たしている。更に、剣士として打たれたくない肩は甲殻に覆われている。結局のところ実力は不明だ。

「まさかこんな加工を施すとは……どんな依頼主だよ？」

「私毛依頼主ノ名前ハ知ラナイ。タダ『ファースト』ト呼ンデイル。コ

プログラム
ノ指令モ身体ヲ強化シタ『Dウィルス』モ彼女ノ作品ダ」

「彼女？ そのファーストとやらは女性なのか？」

「私が見た姿ハナ。シカシ、何トモ言エナイ。彼女ハ全テヲ持ツテイ
ルヨウナ気ガシタ。サア、早くソノ身体ヲ寄越セ」

「わあつたわあつた焦んなつて。決着なんてすぐに着く」

「ウルサイ、寄越セ！」

範人が「やれやれ」とでも言うような仕草をとった時、ルークは既に懐へと飛び込んできていた。ルークの長剣が範人の首にめがけて振るわれる。範人はそれを2本の鎌で受け止め、胸部の甲殻の隙間から火炎弾を打ち出した。しかし、ルークはこれを右腕で弾き、そのまま範人の腹部を薙ぎ払った。重い衝撃が腹を貫くが、範人はなんとか踏みとどまり、左フックでルークの右頬を殴り抜いた。仰け反るルークにもう1発、範人は爪先から炎を噴射してその場で1回転し、脳天に踵落としを叩き込んだ。普通の生物なら確実に命を落としているであろう一撃。しかし、範人は気を抜かず、炎を噴射して高速で後退した。

それを高速で追いかける影が爆炎を切り裂きながら現れる。

「やっぱ丈夫だな」

ルークは範人を串刺しにしようとして剣を突き出した。範人はそれを爪先で蹴って弾く。しかし、剣は逸れてもルークの速度は衰えない。

ルークは右手で範人の首を掴み、地面に叩きつけた。範人が頭から地面に突っ込んだが、まだ離すことなく地面に潜り込ませたまま引きずり回す。

範人はルークの腕を掴み、身体を回転させてルークの首に蹴りを入れた。バランスが崩れた瞬間に指を外して逃げる。

ルークは足を踏ん張るが、腕甲の重さのせいで上手くバランスが取れない。地面に剣を突き立てて、なんとか止まったが、

「靴でも舐めてろ」

範人のドロップキックが顔面に入っていた。キックの衝撃だけでも相当なものだが、更に範人の足が爆発したため、あまりの衝撃に

剣を手放して吹き飛ばされる。

ルークは右腕を地面に突き立てて大きく距離が離れることを防ぐ。

ルークの動きは以前のものより早くなっていた。偶然か、それとも身体に慣れたのかはわからない。しかし、それは範人の不安を増幅させた。

範人が更にダメージを与えるために地面を蹴ると同時に、ルークも地面を蹴った。2人の拳がぶつかり合い、殴り合いにもつれ込む。

ルークは範人の左脚での蹴りを右腕でガードし、カウンターとして左脚で上段への蹴りを打つ。しかし、相手は既に体勢を低くしており、蹴りは空を切る。範人は低い体勢からルークの下顎を狙って右アッパーを打った。同時に、ルークも上げていた左脚を振り下ろす。2人の攻撃は衝突し、あまりの破壊力に足元の地面と上空に浮かぶ雲が吹き飛んだ。

そこからはパワーとスピードが合わさった打ち合いだった。蹴りと拳と防御と回避。4つの動作が2人の間でひたすら繰り返された。かわされ、あるいは打ち消し合って弾けた。

——このままでは勝負がつかない。

かつて同じ隊に所属していたからか、2人の考えることは同じだった。

2人は同時に手を合わせ、取っ組み合った。打ち合いでは勝負がつきそうもないことを悟った2人は相手を疲弊させる作戦に出たのだ。

純粋に力と力のぶつかり合い。

「もつと力を」と、大きな出力のために血流が加速し、2人の目は更に充血して赤く染まる。

「ハアアアアアア！」

力比べはルークに軍配が上がった。

範人の身体がズルズルと後退し、ついに持ち上がる。ルークは左手で範人を掴み上げ、発達した右手で殴り飛ばした。範人の身体が弾丸のようなスピードで吹っ飛ぶ。その先の地面にはルークの使つて

いた剣が。

範人は身体を捻り、なんとか剣をかわす。しかし、受身に失敗して地面を転がった。

ルークは走りながら剣を引き抜き、放り上げた。そして、自身もジャンプし、剣を空中でキャッチ。剣を構え、範人めがけてドライブ回転しながら落下した。

範人は地面を転がって剣をかわす。ルークはすぐに剣を横に払ったが、範人は片手で逆立ちしてかわし、そのままスピニングで剣の刀身を蹴り碎いた。更に、鎌でルークの脚を狙うが、ルークはすぐに後退して避けてしまった。

ルークは折れた剣を見つめる。範人は嘲るように笑いながら、「その自慢の剣、折ってやったぞ？　なあ、今どんな気持ちだ？　まだ続けたいのか？」

「……コノ剣ハ打ち合エバ打ち合ウホド、斬レバ斬ルホド硬ク、鋭ク、強靱ニ成長スル。ソシテ、ソノ成長ヲ最モ促スコトハ折ラレルコトダ」

「センチュリオン起動」と、ルークが呟くと同時に、剣からまたしても生体認証の「ピピピッ」という音が響いた。折れた刃が吹き飛び、新しい刃が生える。しかし、それは今までの剣とは明らかに違った。

刃には節ができ、その1つ1つを起点にウネウネと曲がるのだ。更に、先端には牙のついたムカデの顔のような物が付いている。その様子はかつてアンブレラ幹部養成所でトーウィルスの二次感染によって自然発生したB・O・W「センチュリオン」に似ていた。

センチュリオン。

ムカデがトーウィルスの二次感染によって進化し、巨大になった生物兵器。あくまで偶発的に生まれたものであり、その発生にアンブレラはトーウィルスでしか関わっていない。巨大になったが、周りの生物を積極的に襲う凶暴さは無いと見られている。

「ドウデス？　美シイデシヨウ？　機能が違イマスヨ」

どこかで聞いたことのあるような感じで訊ねてくるルーク。

一方の範人は、

「すごい！ マジで!?? 充填式!?? どうやって作ったんだ!?? 俺に作り方教えろよ」

驚き、感心していた。

ルークは「ククク……」と笑い、

「スゴイデシヨウ。コレモ『ファースト』様ノ発明ナンデス。ナカナカワカッテイルジャアリマセンカ。貴方、此方ノ研究所ニ——「あ、それはパスで」——デスヨネ……」

流れるように断られ、ルークはシユンとなる。

一方、範人は範人で充填式の剣を作りたかったが、さすがに自分から敵の組織に入るわけにはいかないな、ということとで残念そうな表情を浮かべていた。

「マア、私が殺シテデモ連レテイケバイイコトデス。センチュリオン！」

ルークが剣を振った。剣の刃が伸びて範人に向かう。

範人は一瞬、驚いた表情を見せたが、冷静に剣を殴って軌道を逸らした。地面に突っ込んだ剣が地を割く。

充填式蟲剣センチュリオン。

剣は肉を軽々と切り裂く強さを持つ反面、直しにくいという弱点がある。それはその刃の鋭利さ故に、研ぐ意外の方法で直そうとすると切れ味が落ちてしまうからである。欠けた部分に金属を埋め込むことなんてできない。

しかし、ある時ついにその弱点を克服する刃物が開発された。

カッターナイフの替え刃である。チョコレートのように刃先を折ることで鋭利な新しい刃が出現する。直すのではなく、壊れることを仮定して作るのだ。

充填式も替え刃である。表面が壊れれば、まるでサメの歯のように新しい刃が生えてくる。しかし、刃が違う。普通の替え刃は刃と刃をくつつけて、そのまま保存される。ところが、充填式は刃が元々あるのではなく、生えるのだ。それこそ、生物のように。普通にできる技術ではない。

センチュリオンはそれをウイルスが可能にしていた。範人の持

つ覇剛剣アルゴスにも使われている生体金属の生成すらも可能にするウイルス。そんなウイルスが甲殻類の甲殻を刃とする剣に再生能力を与えるなど、大して難しいことではなかった。

ルークはセンチリオンをまるで手のように振り回し、範人に的確に攻撃する。一方の範人も鎌と手でセンチリオンを的確に裁く。

ルークがセンチリオンを横薙ぎにした。範人はジャンプしてそれを回避するが、突然、刃だけが反転した。刃は範人の胴体を捉え、弾き飛ばした。

範人の身体が地面に激突する。その直後、センチリオンの刃先が範人の足に噛み付いた。ルークはセンチリオンを振り回し、範人を地面に何度も叩きつける。

連続して走る衝撃と痛み。更に、その猛スピードでの振り回しのおかげで、範人の方向感覚は狂ってしまった。

フラフラになった範人をルークは自分の目の前に吊り下げた。「貴方が悪いンダー！ 貴方が私達を裏切ツタ！ 貴方が暴走シナケレバミンナ生キラレタンダー！」

そう言つて、ルークは範人をサンドバッグのように殴る。

「コレモ！ コレモ！ コレモコレモコレモコレモ！ ミンナハモット痛カツタ！ ミンナ死ンダカラモット痛カツタ！ 死ニヤガレ、クソツタレガアアアア！」

ルークは全力で範人の頬を殴り抜いた。範人の身体が宙を舞う。範人は地面で何度もバウンドし、地面を抉って静止した。

ルークは荒い息を吐きながら、範人を見る。甲殻は既に凹凸だらけで隙間からは血も流れている。しかし、範人はよろめきながらも立ち上がった。まだ、その目から輝きは失われていない。

もはや生物の部類に含めてはいけないうようなあまりの丈夫さにルークは表情を歪ませる。

範人はゆっくりと腰を落とし、走り出した。一步毎に足の裏を爆発させて加速する。それを迎え討とうと、ルークは剣を構えた。範人も鎌に熱を集中させる。

「ウオオオオオオ！」

「ラアアアアア！」

炎の赤と百足の黒が交差した。

範人は足だけでなく、手も地面について止まる。

範人の鎌とルークの左腕が地面に落ちた。握られていたセンチュリオンは柄さえも粉々に砕け、もはや再生は不可能になっていた。

呆然としているルークの背後で、範人が話す。

「……死の痛みなんてわかっていているんだ。俺自身の危険さも、あいつらの最後も知っているんだ。でも……、仕方ないじゃないか。俺は生物だ。生きなきゃいけないんだ。父さんが引き止めてくれた命の限り、生きなきゃいけないんだ。こんな身体でも本能が生きたがってんだよ！ 死にたいほど苦しくても生きるのが義務なんだよ！」

ボコボコになった顔面の甲殻から表情は読み取れない。しかし、その頬には炎の筋ができていた。

ルークはゆっくりと振り向く。その顔には怒りと悲しみが同時に現れ、複雑な表情を作り出していた。

「本当に可哀想な人だ……」

そう呟いたルークは拳を握りしめ、範人に向かってダツシュした。

「ソノ義務、終ワラセテヤラアアアア！」

範人は微笑^{わら}った。元々付き合があつたため、わかつたのだ。不器用なルークが更に不器用になったプログラムの中から言葉を選んだことが。範人の嫌^{ただの殺戮兵器}う悪^魂に、範人自身^{の魂}がならず^に済むように殺そうとしてくれていることが。

範人はルークの拳を頬で受けた。拳が頬を捉える。しかし、滑った。範人の身体から発せられる熱が甲殻の表面に空気の流れを生み出し、風のバリアを張っていたのだ。

——その死は受け取れねえよ。

驚きに目を見開くルークの腹を、範人の拳が撃ち抜いた。ルークの身体が後ろへとずり下がる。

今度は範人が拳を握りしめた。ルークは右腕を正面に構え、脚を

踏ん張る。

範人の拳がルークに放たれた。ルークは腕に力を込め、脚を踏ん張って必死に耐える。強固で分厚いルークの腕甲は範人の拳を受け止めていた。

「まだまだ……」

範人の肘から炎が噴き出す。ルークは膝をつきそうになるが、歯をくいしばって耐え続ける。未だに、腕甲にはヒビすら入ってない。

この力くらべに負ければ、間違いなく死ぬ。範人とルークは確信していた。2人とも限界は目の前だった。

範人とルーク。実力は範人の方が上だったが、甲殻の強度によってその差はほとんど無いほどにまで小さくなっていった。

憧れ続けていた背中が横顔に変わったようにルークは感じていた。だが、これではまだ足りない。憧れに追いつき追い越せ。ルークは横顔ではなく、顔が見たかった。

ルークが一步、また一步と進み始める。越勝ちたいえたいという思いがルークを前に進ませた。範人の拳がまるで山のように感じられる。それでも、進み続ける。

「ウオオオオオオオ！」

範人の身体が後退し始めた。

——拳が痛い。

あまりにも強固な甲殻に、範人の拳は悲鳴を上げ始めていた。物理的にも、精神的にも。パンチは殴る方も殴られる方も痛い。

たとえ、人間を辞めているとしても、自分を越えそうになっている部下の姿は嬉しい。だから、範人は自分が死んでもいいとすら思った。しかし、脳裏に妖夢の姿が浮かんだことで考える。自分がいなくなったら妖夢はどうなるのだろうか？ と。愛する者を失う痛みを知っている範人は恐ろしくなった。

生物兵器の身体を持つ範人は死ねない。父親を失った後、最後のミッションの後、苦しみから自分の身体を切り刻んだ。生物兵器呪われの身体で生き続けた。しかし、もしも自分と同じことをすれば、半人半霊の妖夢では死んでしまう。彼女には死んでほしくない。だから、可能

性を少しでも潰すために、生きなければならぬ。

「まだだ……。まだ『まだ』が1個残ってるぜ！」

「何ッ……!?？」

範人の肘から噴き出す炎が勢いを増した。押されていた範人だが、少しずつ押し返していく。ルークの腕が少しずつ下がりはじめ、範人の身体はさらなる高熱を発する。

「ヌウ……ナントイウ火力ダ……」

ルークは歯を更にくいしばる。ルーク自身は気づいていないが、くいしばり続けた歯はより丈夫な甲殻に置き換わっていた。

2人の力が均衡し、再び動きが止まる。

「はああああああ！」

「ヌウウウウウ！」

2人の叫び声が大気を揺らし、山に響きわたる。巨大なエネルギーがぶつかり合い、地面に亀裂を生じさせる。もう限界寸前だ。

そのとき、範人の背中の甲殻がほぼ全体、一気に開いた。大量の炎が噴き出し、範人の身体を無理やり押しした。その様子はまるで炎の翼が生えたようで、同時に肘の炎も更に勢いを増した。

ルークも負けじと脚を踏み出す。しかし、

ピシッ！

ルークの腕甲にヒビが入った。ヒビはまるでドミノ倒しのように広がり、腕甲を侵食していく。そしてついに、

バリッ！

限界を迎えた腕甲は完全に砕け散った。範人の拳が甲殻の下の柔らかい肉にめり込み、ルークの身体を後退させる。

範人の炎が更に火力を上げた。同時に、ルークの腕自体も弾け飛んだ。ルークの胸に範人の拳が突き刺さる。

「オラアアアアア！」

瞬間、2人は急発進した。

範人は背中の爆炎ジェットエンジンのパワーも借りて猛スピードで、ただ真っ直ぐに飛んだ。あまりのスピードに衝撃波が発生し、地面を抉り取っていく。

——ああ……、やっぱり勝てないな。

急速に視界の奥へと消えていく景色を見ながら、ルークはそう思った。

範人^{隊長}に勝てなかった。その事実だけが頭の中をグルグルと駆け巡る。

自分にはもう、この経験を活かす次もない。

ルークは静かに目を閉じた。もう終わったのだ、と。

その直後、ルークの身体は岩壁に激突し、バラバラに弾け飛んだ。



範人はバラバラに弾け飛び、肉と骨の混ざったグロテスクな物体になってしまったルークを見下ろす。岩壁には人の形がくつきりと残り、血の匂いが辺りを包み込んでいた。

もう確実に聞こえていないだろう。それでも、範人は言う。

「俺は知っている。俺という存在の危険性も、お前らが死んだ時の最後の顔も、何もかも知っている。だから、生きなきやいけない。お前らが生きている場合を感じるはずだった幸福、苦痛、悲しみ。俺はそいつら全てを背負って生きている。俺が殺しちまったお前らの分も俺は生きなきやいけない。それが……俺の償いだ。……さようなら、ルーク。次はきつと生物兵器^呪にならない人生を送れるように願う」

範人は岩壁に背を向けて歩き出す。

——俺と一緒にいてくれてありがとう、最強の弟子よ。

最も大きな肉塊がグシャリと音を立てて崩れた。

第八十九話

範人がルークを殺したことで陣形が崩れ、そこを白狼天狗たちに叩かれたことで、侵略者たちはあつという間に殲滅されてしまった。妖怪の山侵攻事件は防衛成功という形で幕を閉じた。

◇

場所が変わってここは天狗の里、天魔の屋敷。

範人たちは戦いに協力した礼として、宴会に招待されていた。紫がいるのが少し不自然だが、一応協力者なので仕方ない。

部屋の一番奥に座る天魔が話す。

「皆の者、ご苦労だった。お主たちのおかげで妖怪の山は救われた。ありがとう、本当にありがとう。我々の勝利だ」

そして、天魔は一息吐き、

「では、我々の勝利を祝して、乾杯！」

『乾杯！』

乾杯を合図に、参加者たちはそれぞれ自分のグラス（とかコップとか杯とか色々）をぶつけ合い、口をつけた。

「かぁー、美味い！ 仕事の後の酒は最高だ！」

「ああ、良いもんだな。こうやって、みんなが集まって酒飲むってのは……。より一層美味く感じる」

「私は未成年だから飲めないけどね……」

鉄次郎とエレイが美味そう酒を飲んでいるのを明菜はジト目で見つめる。

「ハハハ！ お子様の明菜ちゃんには酒の味もわかるまい！ これは大人の特権だからなあ」

「お、お子様って……てか、なんで範人が飲んでるのよ！ 貴方、私と
同じ年でしようが！」

「まあまあ、明菜さん落ち着いて」

「絆まで飲んでる!?!?」

ほのぼのとした様子で当然のように酒を飲んでいた絆に、明菜は驚愕する。よく見れば、範人と絆だけでなく、それ以上に若いであろうジエツトと白、アンまで飲んでいた。

顔を引きつらせる明菜。

パッチはチビチビと飲みながら、

「それなら明菜さんも飲めばいいじゃないですか。こっちはお酒に年齢制限ありませんから」

「おう、飲め飲め！」

「僕がお酌しましょうか？」

「う、うぐう……」

パッチに続き、鉄次郎と絆にまで勧められ、明菜は狼狽える。

「や、やっぱりダメよ！ お酒は二十歳になってから！」

「なんじゃ、つまらんのう……」

「つまらないとかそういう問題じゃない！ 酔ったら困るでしょう！」

「……（容姿端麗な娘の恥ずかしい姿が見れると思ったんだがのう……）」

天魔ががっかりした様子を見せたが、明菜は酒に手を出さない。それどころか、言い返されてしょんぼりとする。

そんな天魔に、アンは酒瓶を抱えながら、

「そう気を落とすな、なのだ。あたしがお酒を注いでやるから元気出すのだ」

「アン殿……かたじけない」

「その代わり、あたしにもお酒を注いでくれなのだ」

自分の杯に日本酒を注いでくれるアンに、天魔は目頭が熱くなるのを感じた。

明菜はそれをつまらなそうに見つめる。一方、パッチは、

「微笑ましいですね。そうは思いませんか？ 明菜さん」

「別に……。ただ、ちよつと羨ましい感じはするわ」

「だったら俺が注いでやろうか？」

「結構よ。酔いたくないもの。どうせ、私が酔って動けなくなったら

同人みたいに乱暴するんでしよう？ 童貞さん？」

明菜の言葉に、範人含め、一部の男衆がピクリと反応する。零に至っては嘖いた。それはさながらヨガ○アイア（空中にある間に紫がスキマで回収してどこかの海に捨てた）。

絆は頭に？ マークを浮かべ、エレイの服をちよいちよいと引つ張る。

「ん？ どうした？」

「童貞って何ですか？」

「俺に聞くのか!?!？」

「エレイさんじゃ、ダメなんですか？」

「う、うむう……ダメとは言わんし、教えないこともないが……」

目をウルウルさせる絆に、エレイは言葉を濁らせる。そんなことを聞くためにその目を使わないでもらいたい。

明菜と白、ジェット、ジェイドはクスクス笑っているが、範人と天魔は死んだ目をしている。

しばらくして、もしかしたら面白いことになるかもしれないと思ったエレイは、

「童貞っていうのは性交したことの無い男のことなんだ。女の場合は処女と言う」

話を聞いた絆の顔がどんどん赤くなっていく。

エレイはニヤニヤとしながら、酒を飲んだ。

範人と零、天魔に続き、紫も死んだ目になる。

絆は顔を真っ赤にしながら、

「エレイさん、ごめんなさい！ 言いたくなかったですよね？ 恥ずかしかったですよね？」

「なかなか良いリアクションだな」

「僕で遊んでませんか!?!？」

「まあ、気にすんな。これでまた1つ賢くなったってことさ」

「こんなことで賢くなってどうするんですか!?!？」

「あ？ こんなことってどんなことだ？ 俺はまた1つ賢くなったとしか言っていないぞ?。」

エレイはとぼけた。

「こんなこと」と訊かれた絆はしばらく前に一緒に風呂に入った時の葉の姿を思い出してしまい、顔を真っ赤にして悶える。

そんな絆を明菜と白、ジエイド、エレイはニヤニヤしながら見つめていた。「初々しいなあ……」と。

悶える絆に、パッチがフォローを入れる。

「絆さん、大丈夫ですよ。好きな者と愛し合って子孫を残したいという本能は生物として当然のものでですから、恥ずかしくなんかありません！」

「……パッチ、それフォローになってない」

範人がツツコんだ。

——この問題点は「生物として」よりも「人間として」という点だぞ。

結果、絆はさらに顔を赤くしてうずくまってしまった。

「そういうえば、貴方さつき黙り込んでいたけど、どうしたの？ 天魔もだけど」

「ああ、少し考えごとをしていてな……」

明菜の問いに、天魔は目を逸らしながら答えた。

「ふうん、考えごとね……」

「そうそう、考えごと。だから気にすんな」

「もしかして、2人はさつき言ってた童貞って奴じゃないのか？ なのだ」

「ブフウ!?？」

アンの言葉に、範人と天魔は同時に噴いた。今度は波○拳（例により、紫が回収して捨てた）。

明菜は「なるほど」と手を合わせた。範人と天魔の顔に冷や汗が浮かぶ。

「あれ？ もしかして当たりだったのだ？」

「へえ……天魔はともかく、範人が童貞……ねえ」

「おいおい待って待て！ まだ童貞と決まったわけじゃねえだろ!?？」

「ともかくってなんじゃ、ともかくって……」

「そう言われてもねえ……。なら、証見せてくれない？」

「へ？ 証？」

範人はキョトンとした表情を浮かべる。

「そうよ。童貞卒業してるなら身体にどこかに紋章が浮かぶはずよ」

「そ、そんなものが浮かぶのか!? ……童卒すげえ。そんなの大学の資料にもなかったぞ」

「わ、我の家にもそんなものなかったぞ!?？」

「なんてウソよ」

「は？ ウソ？」

「そんなのあるわけじゃない。そんなに動揺するってことは貴方童貞ね。天魔はわかりきっていたようなものだけど」

「……騙しやがったな、コンチクショウ」

「我はそもそも童貞確定なのか。そうなのか……」

天魔は膝をつき、範人の顔には影が落ちる。

明菜は勝ち誇った顔になり、

「フッフッフ、私に手を出そうとするからそうなるのよ。白馬に乗って出直してきなさい」

「そもそも手出そうとしてねえぞ……」

「そういえば、範人さんには妖夢さんがいますもんね。手なんて出せませんよね。……ん？もしかしたら、既に妖夢さんとヤっちゃったりしてますか？」

「あら、そうなの？なら、その妖夢とやらの身体はどうだったのかしら？ 気持ち良かった？」

「よ、妖夢の……」

範人は妖夢の裸を想像してしまい、ボンツと音が出そうなほど顔が真っ赤になった。

裸くらいなら何度も見たことがある。と言うか、妖夢向こうから見せてくる。プルンとした柔らかそうな（と言うか実際柔らかい）おっぱいやモチツとした白い太腿、妙にエロく見える鎖骨etc……、何度もその裸を見せつけられた。

範人も今では慣れてしまったが、改めて想像してみるとエロい。自

己嫌悪に陥るくらいエロい想像をしてしまう。

全裸の妖夢がベッドに横たわり、こちらを見つめてくる。白い肌は紅潮してハリが出て、その表面にはうっすらと汗が浮かんでいる。そして、艶かしい吐息を吐きながら、「範人、大好き」と言いつて腕を広げるのだ。そんな妖夢に自分は我慢できずに――

「うわー！俺のバカ野郎！」

範人は自分の頬を殴った。その場にいる全員がビクツとする。

さすがに今の想像は脳にも心臓にも股間にも悪すぎた。童貞の範人にとっては恐ろしいほどの毒である。

明菜はニヤニヤしながら、

「ふふふ、やっぱり童貞みたいね」

「ああ、そうだよ！俺は童貞だよ！何か文句あつか！」

「も、文句なんてありません！」

範人のあまりの剣幕に、ジェットと白はビビりながら言った。

「でも、正直言つて、範人が童貞なのは意外だったわ。てつきり、何人も落として経験済みなのかと」

「おいそりやどういう意味だ？」

「だって、貴方モテそうな見た目してるもの。髪の毛金色だし、背高くて良い感じに筋肉ついてるし、顔もそれなりに整ってるし、その年齢としで大学卒業してるようなエリートだし」

「そりやどうも」

色々と褒められた範人は少し上機嫌に返す。

「はあ……なんでやってないのかしらね。意外過ぎるわ」

「上げといて落としてくるんですね。わかります。安定して安定しませんね」

「今や高校生ですら経験してるご時世よ。貴方みたいなのが未経験なんて驚きでしかないわね。なんでやってないのかしら？」

「そりや……は、裸見せるの恥ずかしいし、あまり素肌が触れ合うのもなんか……すぐくやバそうだし、俺まだ17から、そういうことするには早いかな、つて……。何より、妖夢を傷つけない……」

顔を赤らめて範人は言った。初々しすぎる。

そんな範人に、鉄次郎は、

「その髪の毛、モテるために染めたのか？」

「これは地毛だよ！俺一応アメリカ人だからな!?？名前漢字だけど」

「きつと女の子を落とすために染めたのよ」

「いや違えよ！」

「あら？そのルックスなら落ちる女の子はそれなりにいたはずよ」

「見た目だけで落ちてどうする？人は心だ！それに、俺はあまりモテなかったぞ。なあ、姉さん？」

「……」

それなりにマトモなことを言った範人は紫に意見を求めるが、範人に落とされた者が妖夢含めて少なくとも3人はいることを知っている紫は黙り込んだ。

明菜はつまらなそうに唇を尖らせると、すぐ隣に座っていたジェットに目をつけた。

「ジェット君も将来のことは気にした方が良いわよ」

「何のことですか？」

「何って、下手すれば一生天魔や範人みたいな童貞になるのよ」

「みたいなって何だ！みたいなって！」

「あ、結構です。僕もう卒業してるんで」

「はいいい!?」

驚く明菜に、ジェットは「ククク……」と笑いながら、

「こう見えて僕は500年近く生きていますよ。そのジェットドさんとほとんど同い年です」

「義兄様おにいさまと呼んでくれないかな？」

「……わかりました。まあ、僕たちは吸血鬼ですから、見た目が若いんですよ。義兄様は既婚者ですし、僕はそのお相手の妹とお付き合いさせていただいているんです。近々、結婚も考えています」

「えっ!?？嘘……。こんな子供なのにな？」

「子供扱いしないでください！僕は貴女よりもずっと年上です！」

「シヨタジジイ……」

「天魔さんにだけは言われたくないです！ この童貞シヨタジジイが！」

「それはさすがに言いすぎだ……」

一瞬キレたジエツトに、天魔は（しょぼんとした表情）「ω・ω・ω」になって手をついた。

さつきから散々童貞を揶揄っていた明菜も今のはさすがにかわいそうだと思います、哀れみの視線を向ける。

そんな中、紫は、

「大丈夫よ。私も処女だもの」

『ええ!?!?』

「なんでそんなに驚くのよ!」

『超意外!』

「私を何だと思ってるのよ! スキマ美少女ゆかりん☆よ♪」

『……』

「BBA」

全員が黙り込む中、零が禁句を言ってしまった。

紫はすごく良い笑顔になり、

「さあ、私とデートしましょう」

「嫌だ! やめろ! やめろオオオオオオ!」

「ダーメ♪ たっぷり遊んであげますわ」

「うわああああ!!?」

零は紫に手を引かれ、元特殊攻撃部隊員（コママシンドー）に崖から落とされた人のような叫び声と共にスキマの中へと連れて行かれた。範人たちはそれを黙って見ているしかなかった。

数秒後、範人が口を開いた。

「せっかくだから話題変えようぜ。このままだともっと犠牲者が出そうだ」

「そうね。それが良いわ」

「でも、何か良い話題ありますか?」

「あるぜ! 俺の手元に飛んできた紙飛行機に良い感じのが書いてあった」

「じゃあ、頼む」

「ああ、お題は『自分の名前の由来』だ」

「ほほう、これはなかなか……」

シヨタジジイ(童貞)の天魔が感心する。　そうです天魔さん、もつと褒めてください。

「ふむ……」と考えるように、範人は酒を一口飲んで手を上げた。

「じゃあ、俺からいつきまーす！　俺の名前は元々ハント・ゴートレックっていう名前だったんだけど、幻想郷^{こっち}来る際に変えた。元々のハントって名前は狩人のハンターから取ったらしい。狩人のように強く逞しく育ってほしいって思いを込めたそうだ。で、新しい方の範人って名前だけど、これは人の模範になる人になれってことで『模範』から『範』を、その下に『人』をくつつけることで『範人』になったらいい」

「おおー、真面目だなあ。良いじゃないか」

「ハンターってなかなかかっこいいのだ。羨ましいのだ」

「確かに模範にはなるけど人じゃないわね」

「緑のアレは関係なかったんですね」

範人の名前に、それぞれが感心した様子を見せる。いいぞ、褒めて褒めて。

範人の後に、アンも続く。

「あたしの名前は単数の a n、1 を意味するのだ。二進数で言う1は存在すること。つまり、あたしの名前は存在を表しているのだ」

「ほほう……なんか不思議な由来だな」

「どこことなくセンスを感じます」

範人と絆は名前の由来に好印象を受けていた。しかし、他の全員は名前の由来よりも、アンが思ったよりも圧倒的にわかりやすい説明をしてきたことに驚いていた。

と、そんな時にスキマが開いて1枚の紙が落ちてきた。

範人はそれを拾い、読み上げる。

「名前の由来も逆だったんだな。俺の名前は存在しない、つまり0から付けられた。そして、零になった。あ、ちよ、紫やめ——ギヤアアアア！　……なんだこれ？」

「さあ？　というか、最後のはわざわざ読まなくて良かったんじゃないかしら？」

「まあ、そうかもしれないがな。一応、書かれていたことだし」

「でも、さすがにエクスクラメーションマーク！　はいらなかったわよ」

「……それもそうだな」

「零ってかっこいい名前ですよ。なんか羨ましいです」

「そうだな。厨二くさい感じもするが……」

羨ましそうな顔を絆にそう言ったエレイだったが、忘れてはいけない。エレイ自身の名前にも『レイ』が入っている。

——もしかしたら、この人気づいてないんじゃないだろうか？

少し心配になる範人たちだった。

「他になんか自分の名前の由来がわかる人いるかしら？」

明菜の質問に、残っていた全員が首を横に振った（パツチは戦場から戻ってくる間に自己紹介していた）。

「まあ、そうよね。ただ単にかっこいいからとかで名前決める親もいるものね。実際、私も由来は知らないし」

明菜は溜め息を吐く。

「でも、かっこ悪い名前よりはマシですよ。太郎なんてなんか普通すぎてかっこ悪い感じがしますし」

「確かにそうよね。でも、貴方なんて名前の由来すぐにわかるかもしれないわよ」

白の言葉に、絆は「何故ですか？」と質問する。

「だって、貴方の場合は名前と能力——正確には性格のことろうけど、ほぼ一致しているもの。他人と絆を結ぶことで能力を手に入れるといったタイプの能力。貴方の人間性がそのまんまの名前被って歩いているようなものよ」

「なるほど、そうかもしれないですね。と言うことは、白さんの名前は見た目から付けられたってことなんでしょう。白さんって、髪の毛とか白いのですから」

「そうね。きつと、それだわ」

仮説であったとしても名前の由来がなんとなくわかり、白は納得し

たような表情を浮かべる。

と、

「なあ、俺の名前の由来はわかるか？ あと、義弟おとうとの名前も」

遠慮がちに手を挙げたのはジェイドだった。その横ではジェットも手を挙げている。

そんな彼らに、白は、

「知らないわ。500年前なんて、私まだ生まれてなかったもの。その頃のセンスなんてお姉様に聞くしかないんじゃないかしら？」

「いや、レミリアにもわからないらしい。おまけに、『それなら、改名しないかしら？ ダークネスとかどう？』って言われた。即断った」「相変わらずのセンスね……。さすが、お姉様」

「ああ、さすがにアレは引いた。かつこいい言葉並べるだけじゃ良い名前にはならないっての。むしろかつこ悪くなって名前だけで羞恥プレイできるレベルになるっての」

「ええ、和訳しなくても恥ずかしいレベルなのに、和訳したら『紅の闇』って、もう恥ずかしいのレベル通り越して精神崩壊するわね」

「ああ、子供できた時は絶対に俺が名前つけようって決めた……」

そう言って、ジェイドは疲れた表情を見せた。ジェイドパパはレミリアママに名前決めさせないようにすべく、嫁レミリアが妊娠する前から子供の名前決めに力を入れているのである。

一方、範人の頭の中には日本のえっちな漫画で出てくる殺し屋の姿が浮かんだが、あまり考えすぎると頭の中でエロシーンが流れそうだったので黙って記憶の引き出しにしまっておいた。

少し考えれば、話題は浮かぶ。宴会は夜遅くまで続いた。

◇

深夜、日付が変わった頃。

参加者のほとんど（零もボロボロの姿で帰ってきた）が戦いの疲れから眠ってしまった宴会場を後にして、範人は屋敷の縁側に座っていた。

秋の深まりを感じる冷たい夜風が酒で火照った身体に心地良い。と、そんな範人のすぐ隣にスキマが開き、紫が上半身を乗り出す形で現れた。

「デートは終わったのか？」

「ええ、なかなか楽しかったわよ。特に、零の泣きそうな顔なんて……」

「ああ、聞きたくないから止よしてくれ」

「つれないわね……」

紫はつまらなそうに口を尖らせる。

「まあいいわ。折角だから貴方と2人きりでお酒を飲むことにしましょう」

「いや、酒はもう……まあ、いいか。付き合うよ」

既に用意されていたグラスを見て、範人は溜め息混じりにそう答えた。

紫は互いのグラスに範人の家からテキトーに持ってきたベルギービール——デュベル・モルトガットのデュベルを丁寧に注ぐ。

デュベル専用のグラスに注がれた淡い金色の液体からレモンのような柑橘系の香りが広がった。

範人と紫はそれぞれ自分のグラスを持ち、

「それじゃ……」

「乾杯」

グラスを優しく打ちつけ合ってから、デュベルを口に含んだ。スパイスの香りが鼻を通り、口の中に苦味が広がるが、すつきりとした味わいでアルコールの甘味もあるのでかなり飲みやすい。

最初の一口が喉を通り過ぎた後、範人は感嘆の溜息と共に「さすが悪魔……」と呟いた。

「良いものでしょう？　この悪魔デュベル？」

「ああ、アルコール度数8.5%のわりには飲みやすい。それに、シチュエーションも良いな。こっちに来てても戦いが多いせいでこんなふう姉さんと話す機会はあまりなかったから……てか、なんで俺が妖怪とかと戦ってんだよ？　妖怪退治は霊夢の仕事じゃないのか？」

「あの子ども仕事ばかりじゃ疲れるのよ。巫女として修行もしなきゃいけないし」

「神社行っても、寝てたか、お茶飲んでいたか、掃除してた記憶しかないんだが?」

「気のせいよ」

「あ、そッスか……」

遠い目をして答えた紫に、範人はどうしようもない不安を感じながら、デュベルを口に含んだ。

しばらくして、

「ところで、話って何かしら?」

「ん? ああ、今日の戦いのことだ」

「今日の戦い?」

「ああ……」

範人は真剣な表情になり、

「実は、今日侵攻してきた集団のリーダーが俺の元部下だった。あの事件で死んだはずの」

「ええ!?」

「そんなに驚かないでくれ。問題はまだ後だ。どうやら、今回来たやつらはボスじゃなかったらしい。実際、その元部下は上の奴——あいつはファーストと呼んでいたが、そのファーストがいると言っていた。そのボスに引き込まれたんだろうな。死体を改造して、生き返らせたような感じだった。昔の記憶は普通にあったみたいだったし……。多分、俺たちの知らない新型の生物兵器——それも、アンブレラとは違う他の機関のヤツを使ったんだと思う。そして、ここからが一番の問題なんだが……」

真剣だった範人の表情が更に険しくなり、紫も身構える。

「狙いはハンターキング——いや、俺だったらしい」

「まさか……嘘でしょ?」

「いや、本当だ。今回の侵攻の原因は間違いなく俺だ。そして、俺が幻想郷に知っていることを知っているのは——」

「貴方と関係が深い者……ということね?」

「その通りだ。残念ながら……」

範人は心底残念そうな表情をした。そして、すぐに泣きそうな表情になり、

「なあ、俺は幻想郷こゝろにいちゃいけないんじゃないのか？」

「……え？」

「俺がいたら、また侵攻されるかもしれない。今回は運が良かったけど。もしかしたら、次は人里が狙われるかもしれない。今回は偶々みんなが集まってくれたおかげでそれなりに余裕があったが、もしそうなっちまったら、戦力の弱い人里じゃあ、とても耐えきれない。あるいは、圧倒的な力を持つボス自体が来て、幻想郷自体が壊滅するかもしれない」

「ぐう……」

「俺がいなくなれば、幻想郷は安全になるんだ。侵攻されて、誰かが死ぬことは無くなる。なあ、本当は俺って、幻想郷こゝろに存在しちやいけないんじゃないのか？」

範人は縋るように、俯きながら、紫を見つめていた。

確かに、範人の言うことは正しい。範人さえ、幻想郷から去れば、幻想郷は安全になる。幻想郷の母として、自分は範人を追い出すべきなのだろう。

しかし、紫にはそれができなかった。

やっと帰ってこれた先祖の土地。幻想郷に辿り着いた時の範人の、希望と喜びに満ちた顔。範人が生まれた時から、ずっとスキマで見守ってきた。そんな本当の弟のような彼を自分から突き放すなんて不可能だった。

「貴方が出ていく必要なんてないわよ」

紫は範人の頭を優しく撫でながら言った。俯く範人の頬を涙が流れているのが、紫には見えた。

「貴方、妖夢と結婚したいでしょう？」

「ああ、したい……」

「子供だって欲しいでしょう？」

「ああ、欲しい……」

「本当は幻想郷にいたいでしょう?」

「ああ、いたい……」

「なら、それでいいのよ。貴方が出ていく必要はない。むしろ、幻想郷には貴方が必要。貴方は遙か昔に欠けてしまっていたピースの1つなのだから。欠けていることに慣れてしまっていた世界に、欠けていたピースが戻ってきたことで何かが起こるなんて当然のこと。何か起きたっておかしくはないのよ。だから大丈夫、それで何かが起こるのなら、幻想郷はその何かに立ち向かうわ。1人でできないなら、みんなで立ち向かう。いざとなれば、私も戦う。だから、貴方は幻想郷にいて」

紫の優しい言葉が範人を復活させたのは言うまでもなかった。

範人は袖で涙を拭って顔を上げると、

「ありがとう。頼みごとがあるんだが、いいか?」

「ええ。協力するわ」

「じゃあ、俺がいた世界にある全ての生物兵器製造施設で作られた生物兵器で、各施設で一番最初に作られた個体と生物兵器各種の一番最初に作られた個体を調べてくれ。おそらく、その中にファーストがいる」

「……根拠らしい根拠は無いけれど、範人が言うなら可能性は充分あるわね。わかったわ、調べてみる」

「ご協力感謝する」

「貴方を生かすためよ。重要なことだから協力するに決まってるでしょう」

「ああ、本当にありが——」

礼を言い終わらない内に、範人は意識を失って倒れた。

縁側には範人の肩を必死に揺する紫が残された。



翌日、来訪者たちを見送るために集まっていた者の中に範人の姿はなかった。紫によると、心労が溜まって倒れてしまったらしい。

元の世界に帰る直前、意識を取り戻した範人が、冷凍保存されているヴェルデューゴとプラーガを明菜に渡し、彼女がそれを嬉々として受け取ったことにはその場の全員が驚いた。

そんな危険物がどこから出てきたのかは、また別の話。

第九十話

「頼むー！ 我らのために刀を打ってくれ！」

妖怪の山、天狗の里。天魔の屋敷にて。

天魔が範人に対して頭を下げていた。そして、周りには腰の刀に手をかけている天狗たち。

——どうしてこうなった？

時は1時間前に遡る。

◇

範人は研究所の第3研究室でとあるウイルスの研究をしていた。

そのウイルスの名前はDウイルス。つい先日、幻想郷に侵攻してきた集団のリーダー、ルークが「ファーストの作品」と言っていたウイルスである。

戦いの後、範人はルークの身体の一部、その手下の身体の一部、プラーガタイプDをサンプルとして研究所に持ち帰り、その中に含まれている物を調べた。すると、サンプルの全てからDウイルスが検出されたのだ。

Dウイルスはかつてラクーンシティを壊滅させたイーウイルスに近いウイルスということが判明した。試験体のマウスに感染させたところ、身体能力の著しい強化が見られたが、脳の機能が弱り、周りの生物に見境なく襲いかかって捕食するという行動が見られた。ウイルスの適合者ならば、脳の破壊は免れるだろうが、そんな者がない。つまり、制御が難しいのだ。

ここで、範人は気づいた。プラーガを使っている理由に。

世間に公表はされていないが、プラーガはヨーロッパのとある村を1つ崩壊させた記録がある。プラーガは様々な生物に寄生し、宿主を強化して操るのだ。おまけに、プラーガ同士は共存する意思がある。

侵攻してきた者のリーダーはプラーガタイプD自体ではなく、その中に含まれているDウイルスを共存対象として、何らかの方法でプラーガタイプDに教え込んだ。そして、プラーガよりも大きな進化が望めるウイルス感染体を制御していたのだ。

こんな物、全てのバイオテロリストや生物兵器開発者が喉から手が出るほど欲しがれる物である。

元いた世界にプラーガタイプDが解き放たれたら、と考えると、範人はゾツとした。普通の銃弾が効く相手ではない。

そんな時に、射命丸文がやってきた。しかも、範人の背後に突然現れる感じでやってきた。

「研究、捗りまっか？」

「ぼちぼちでんなあ……ってなんだテメエは!? 取材は男割り——じゃなくて、お断りだ！」

驚きのあまり、色々間違えながら範人は言った。

あまりの拒絶っぷりに、文は(こゝな表情)になりながら、

「今日は取材じゃないわ。天魔様の命令で、貴方を呼びに来たのよ」

「ならいい。で？ 俺に、自分の屋敷に来いと？」

「そういうこと。ほら、早くしなさい」

「待ってる。サンプルの保存をしなきゃいけない」

「それって、時間かかる？」

「あまりかからないが、とても重要な作業だ」

範人はサンプルの入ったシャーレに特殊なビニールシートをかけた。ながら言った。

このビニールシートは範人のオリジナルで、範人が粒子を操ることで作られた。ビニールシートの表面には空気だけを通す微細な穴が開いており、花粉や胞子は一切通さない。紫外線さえもシートに混ぜた薬品の色でガードする。おかげで、外部からの温度調整が簡単でき、サンプル自体は完全にガードすることができるのだ。

研究において、サンプルの保存は最も注意すべき点の一つである。特に、生物学において、サンプルは生物の身体の一部であり、生物なまものであることが多い。

生物なまものは劣化が激しく、すぐに腐ったり、酸化したりしてしまうため、保存には非常に気を遣うのだ。

不純物が入らないようにするのはもちろんのこと、温度や湿度を管理してそのままの状態を保たなければならない。

カビの孢子なんて入れれば、あら大変。カビが繁殖してサンプルは使い物にならなくなる。おまけに、それに気づかず研究を続ければ、それ以降の研究成果はパーである。同じサンプルで研究しなければ意味がないため、それ以前の研究成果も普通に無駄だったことになる。

範人は保存庫にサンプルを仕舞い、第3研究室に戻ってきた。

「OK、準備できたぞ」

「ありがとうございます。さあ、行きましょう！」

「あまりくつついてくるな。妖夢に斬られる」

全身で背中を押して急かしてくる文に、範人は顔を赤くする。

(妖夢よりも)大きなおっぱいが背中に当たって、ムニムニと形を変えるのだ。これに顔を赤くしない男はいないだろう。

「おやおや、顔が赤いですよ？　どうかしましたか？」

「うるせー！　ほら、早く行くぞー！」

ニヤニヤしながら身体をぶつけてくる文に、範人は誤魔化すように叫ぶのだった。

そんなわけで、範人は天魔の屋敷に来たのだが……。

「これは一体どういう……てか、断ったらどうするつもりだよ!!?」

範人は周りの天狗たちを見回しながら言った。

全員がこちらを睨みつけながら、刀に手をかけている。断ったら間違はなく斬りかかってくるだろう。下手をすれば、天狗と全面戦争である。いや、まあ勝てるだろうから問題ないんだが……。

依然として、頭を下げたままの天魔に範人が問う。

「別に武器を作るのは構わないんだが、それであなたはどうするつもりだ？」

「恥ずかしながら、今回の戦いにおいて我々の刀では力不足だと感じた。妖刀を持つ者がいても、それはほんの一握り。他の刀は普通の刀だ。そんな普通の刀ではこれからの未来、あんな奴らが来ればひとたまりもない。しかし、お主の刀は強かった。普通の刀とは圧倒的に違った。丈夫さ、重さ、切れ味、その他諸々にも強さを感じた。その強き刀——命を守る刀を是非、我々のために打っていただきたい」「ほう……」

範人は考えるそぶりをして、

「なら、見返りはなんだ？」

「……は？」

「お礼は何か？ と聞いているんだ」

「……お主の望むものをやろう。無理のない範囲でな……」

「ふむ、悪くないな」

「何なら、我の童貞をくれてやってもよいぞ」

「いらんわ！ 俺はそもそもホモじゃねーし、嫁なら妖夢がいる！」

迷いなき即答に、天魔は「そこまで言わなくても……」と、膝をつき、そのままショックで気絶した。

そんな天魔を尻目に、範人はお礼として貰うものを決め、

「お礼はこの山の通行証を頼む。あ、有効期間が無制限のヤツな。………天魔が起きないみたいだから、後でお前たちが伝えておいてくれ。俺は家に帰って、刀の設計をするから」

範人は部屋に待機していた他の天狗にそう言い残して部屋から出て行った。

後に残された天狗たちはポカンとした表情でその後ろ姿を見送るのだった。

◇

「貴方、タメ口なんてすごいわね。私たちは天魔様に頭が上がらないのに」

範人が屋敷の玄関から出ると、文が話しかけてきた。

範人は特に何でもないかのように、

「別に……。俺は俺のやり方を貫いただけだ。天魔に敬語なんて使いたくない」

「ほう、何故かしら？」

「目上とは思えないけど、尊敬しているから。童貞だし」

「それは褒め言葉？ それとも悪口？」

「……両方だ」

そう答えて範人は笑った。

文は「あちゃー」といった感じの表情をして苦笑いする。

「まあ、あの見た目だからね。可愛いんだけど……私たち女性からするとなんか犯罪してるみたいで微妙なのよ」

「だろうな。ジェットとフランみたいなものだ。……子供は嫌いじゃないが、さすがに恋愛対象にはならないってところだな」

「そうそう、そうなのよ。可愛すぎて汚せないの。……ところで、訊ねたいことがあるんですが……」

文の話し方が丁寧になった。範人の顔が引きつる。

「範人さんが言っていた『男割り』ってなんですか？」

「あれはただ言い間違えただけだ。むしろ、俺が意味を聞きたいわ」

「そうですか。何か面白いネタになると思ってたんですが……。そういえば、『男割り』って言葉と『女体盛り』って似てますよね。あんなこと言っただのはまさかそんなことが関係あったり……。妖夢さんにそんなことさせたりしてませんか？」

「さ、させるわけねーだろ、バカ野郎！」

範人は顔を赤くして叫ぶ。

「おやおや、してないんですか？ 範人さんなら、していてもおかしくないと思うんですがね」

「本当にお前らは俺を何だと思っているんだ……」

「ヤリチン生物兵器」

「なんでそんな認識なんだよ!? 俺はヤリチンじゃねえ！ もう心が折れそうだ……」

「処女膜を何度も破ってきた剛槍は折れないのに、心は折れるんですね」

「だから、俺はヤリチンじゃねえ！ まだ17歳の童貞だっつーの！」

範人は絶叫した。

——誰発の噂だよ……。殺したくなってきた——って、ダメだダメだ！

範人は自身の中に湧いた黒い感情を無理やり心の奥底に

押し戻す。こんなところで変異して暴れようものなら、即戦争である。勝つけど。

「まあ、いいでしょう。本当に、妖夢さんにはやらせてないですよね

「？」

「やらせてたまるか！」

「そう言っておいて、本当はやらせてみたいんじゃないですかー？」

「いやいや、そんなことあるはずが……」

「嘘だあー。男性の方々はほぼ全員、女性の裸が好きで、特に胸とお尻が好きという情報があるんですよ」

「そのほぼ全員の中に俺がいないとしたらどうなんだよ！」

「とんだ迷惑ですよ。酷い勘違いだと思えます」

「だろ？ だから、やめてくれよ」

「そうですね。……わかりました」

「そうか、わかってくれたか」

範人は安堵し、溜息を吐く。

——変な勘違いはされずに済ん——、

「つまり、範人さんは男が好きということですね！」

——でねえ!?!?——

「いやいやいやいや！　なんでそうなる!?!?　なんで俺がホモ扱いされにやならんのだ!?!?」

「だって、女性の裸は好きじゃないんでしょう？　だったら、もうそっちの線しか……」

「バカ野郎！　別に女の裸は好きじゃないと言っても、女が恋愛対象だって言う男が多いんだよ！」

「おや、そうでしたか。なら、新聞にはそれを誇張してホモと書かせていただきますね」

「結局変わってねえじゃねーか！」

範人がご丁寧の説明までしたというのに、文は改めるつもりが全くない。

別に文は新聞の売り上げを重視しているわけではない。あくまで、聞いたことを新聞に書こうとしているだけだ。そのくらい範人にもわかっている。しかし、そこは譲れない。

俺はホモじゃない。俺が好きなのは妖夢だ。魂魄妖夢は俺の嫁。

「さて、早速帰って書きましようかね」

「ま、待ちやがれ！」

範人が文を呼び止める。

文が振り返ると、そこには鬼の形相でこちらを睨む範人の姿があった。バケモノ

文の表情が強張る。

「文ア……俺はなあ……」

「は、はいいい！」

「女の裸が普通に大好きだ。身体の部位では特に太腿が好きだ」

もはや、明後日の方向に振り切れる範人だった。

◇

後日発行された『文々。新聞』には『妖怪の山侵攻事件』が見出し一面に載せられ、そのおまけと言った感じで『生物兵器、ハンターキングの性癖』が取り上げられていた。

そこには範人ハンターキングが『女体盛りをしている（本当はしていないことが新聞の端に小さく書かれていた）』ことや『太腿フェチである』こと、『ホモ疑惑』が書かれており、その結果として、周りの女性から、しばらく白い目で見られることとなった。

一方、範人の彼女である魂魄妖夢はこの日の夕食に女体盛りを提案した。範人が全力で断つたのは言うまでもない。……やってみたい気持ちも、ちよつとあつたらしいが……。

おまけに、この日から妖夢がショートパンツを履くことが増えたのだが、範人自身がそれについて特に何か言うことはなかった。

射命丸文がどうなったかはご想像にお任せする。

第九十一話

10月13日。

範人は少し不安だった。

というのも、範人の周りの者たちがここ1週間程前から、どこか冷たいのだ。

確かに、新聞にあんなことを書かれたのだから、距離を置きたくなる気持ちはわかるが、それを考慮しても異常な程冷たい。話しかけても避けられる。範人自身、こういうことには身体構造上の都合で慣れてはいるのだが辛い。

そんなわけで、範人はこの辛さを武器製作にぶつけることにした。手元にあるのは熱された生体金属——モノリスと、この数日間ですいついたアイディアをまとめたノート。

範人は両腕を変異させて、モノリスを適量、手にとった。それを金床に置き、

「死に腐れこのやろう！　なんで生物兵器つてだけで避けんだよ！　俺は安全な方なんだぞ畜生！　そもそもあのブン屋が原因だボケがア！」

暴言を吐きながら殴り始めた。

殴られたモノリスは瞬く間に形を変えていく。

テキストに殴りまくっているようにも見えるかもしれないが、モノリスの形はだんだんと整っていく。数十秒後には刀の基盤となる形が出来上がった。しかも、その元は怒りに任せての連続パンチである。

こんな光景を見たら、人里の鍛冶屋たちはすぐに武闘家を目指すだろう。そして、いざ叩こうと思った時に、高熱の金属には触れられないことを思い出して自身の行動を悔やむのだ。

——などとサディスティックでくだらない想像をしている暇は、範人には無い。

「オラオラオラオラオラオラオラオラ……」

範人はモノリスを殴り続ける。ちなみに、スタ〇ドは出していない

い。

乱暴に扱っているように見える——と言うか、実際わざと乱暴に扱っている。不安になるかもしれないが、これが範人のやり方——もとい、モノリスの鍛え方である。

生体金属であるモノリス製の武具はダメージを受けたり、使われ続けたりすることでより硬く、鋭く、強靱になるのだ。中途半端なダメージでは上手くいかない。無作為に殴ることが最も効果的なのだ。その殴り方で刀の形ができる理由は企業秘密である。

「オラァー！」

声とともに放った最後の1殴りで刀の形が出来上がった。しかし、まだ終わっていない。

これはあくまでモノリスを鍛え、形を作る作業。このままではあまり切れないのだ。

範人は刀の刃を人差し指と中指で挟むと、刀を引いた。甲殻と刃が擦れて火花が飛び、余分な部分が削り取られる。

一瞬にして、よく切れる刃が完成した。

範人は柄となる部分に生体繊維で作ったテープを巻き、あらかじめ作っておいた鞘に収めた。

時間にして30分、とんでもない早業だ。

「フウ、流石は俺だな。ハイスピード剣製。もしかしたら『無限の

アソリミテッド
ブレイドワークス

剣製』できるんじゃないか？」

範人はくだらないことを言っただけで笑う。

と、

「範人、出かけるから準備しなさい」

声をかけてきたのは紫だった。

ここ1週間、霊夢（こつち来んなオラがやばくて、近づいただけで殺されそうだった by 範人）や魔理沙（そんな目で俺を見るな by 範人）、妖夢にすら避けられていた（妖夢は文の新聞関連ではないと思うが、マジで泣きそうになった by 範人）中で、範人とこれまで通りに接していたのが紫だった。

紫は相変わらず、スキマから上半身を乗り出している。

範人は申し訳なさそうに、

「今は注文の品を作っているところなんだけど、待ってくれないかな？」

「だが断る」

「ですよー」

返答と同時に足元にスキマが開き、範人は強制移動させられるのだった。

◇

範人が紫に連れて行かれた場所は彼が元いた世界のシヨツピングモールで、紫からは「買い物に付き合え」とのこと。範人は渋々それを了承し、洋服選びを手伝う羽目になった。

「うふふ、これはどうかしら？」

「……俺に訊かれても女の服のセンスなんてわからないよ。男だし」

「同性よりも異性の意見が欲しいのよ」

「そうですかい……」

にっこりと微笑む紫に、範人は深々と嘆息する。

紫の言っていることもわからなくはないが、範人としては非常に困る。紫とは幼少の時期から付き合いがあるわけで、胸元の露出だの胸を強調するだのと言った女性的な部分を見せることに関しては、付き合いが長いせいで（紫と藍限定だが）どのくらいが良いのかわからなくなってしまうのだ。子供の頃に、しょっちゅう、風呂へ連れ込まれて髪を洗われたのは良い思い出である。

ただでさえ、大人の女性としてほぼ完璧な容姿を持つ紫なのだからよっぽど酷い物でない限りはだいたい似合うだろう。着ぐるみ、ダメ絶対。

以上のような理由で、範人には紫の求める『紫が着たら男を惹きつける』ような服がよくわからない。元々惹きつけているのに、更に上を目指す理由はもっとわからない。

「姉さんならだいたい似合うんじゃないの？」

「その中でも特に似合う物を探しているのよ」

「んなこと言っても、俺のセンスじゃ明後日の方向に大暴投し兼ねな

いぞ」

「なら、いつそのこと女になってみる？　今なら薬もあるし、私の能力を使えば一瞬よ」

「それは勘弁してください」

範人は咄嗟に断った。また女体化してしまったら、妖夢にナニされるかわからない。

怒って「素っ裸になれば男は惹かれると思う」と言いそうになる範人だったが、そんなこと言えば本当にナニされるかわからないため、「わかった。明後日の方向に大暴投するかもしれないけど、俺のセンスで選んでみるよ」

「助かるわ」

「でも、本当に俺が選んだのでいいのか？」

「もちろん。むしろ、貴方が選んでくれるだけで嬉しいもの」

「……！」

紫の言葉に思わずドキッとしてしまう範人だった。

——安心しろよ、妖夢。浮気はせん。絶対に浮気はせんからな。……ああ、やっぱり姉さん綺麗だなあ。

最終的に、範人がチョイスしたのは胸元が大きく開いたドレスだった。

太腿好きな範人としては、ショートパンツを履いてる女性がかなり良い感じ(女体化時の服装の原因もこれ)なのだが、紫にボーイッシュな格好は似合わないところかで確信していた。そのため、紫の持つ巨乳武器を活かせるドレスを選んだ。ミニスカートも良かったのだが、紫のイメージとしては、やはりドレスが強かった。

選び終わってホッとしていた範人に紫は、

「じゃあ、下着選びもお願いね」

「はあああ!?？」

絶叫する範人だった。

◇

「助かったわ。また今度見せてあげる。ありがとね」

「は……ははは……」

ご機嫌な様子で礼を言う紫に、範人はぎこちない笑いで応答した。ちなみに、範人は下着も真面目に選ぼうと思っただが、女性の下着を凝視するのはさすがに羞恥心でおかしくなりそうだったため、直感に頼って目を閉じて選んだ。しかし、それがよりによって黒のレースのすぐくエッチな物だったため、余計に恥ずかしい思いをする羽目になった。実際、その下着は紫に非常に似合っていたのだが……、ご丁寧に、後日になって見せに来るのはやめていただきたい。

範人は疲れ切った表情になって俯く。

と、紫は何か思いついたような様子で、

「そうだ。ここでお礼してあげるわ」

「……え？ ああ、うん」

「ほら、行くわよー！」

「お、おい！ ちょっと!?」

腕を掴まれた範人は慌てて振りほどく。

「行くってどこにだ？」

「男性用の洋服屋に」

「なんでまた、そんなところへ？」

「決まってるじゃない。いつもいつも白衣ばかり着てる研究者脳の弟に服を買ってあげるのよ」

「え!?？ 弟いたのか!?？」

「貴方のことに決まってるでしょうが!」

本気で驚いた様子の範人に、思わず叫ぶ紫。範人はビクツとし、店内の客全員が紫の方を向く。

紫は顔を赤くしながらも平静を気取り、

「年頃なんだから、おしゃれしなきゃダメよ。彼女さんにも失礼じゃない。それに、そろそろ冬でしょう?」

「いや、俺寒いのが平気だから。あと、この白衣は俺が開発した生体繊維で作った特別な物だから!?？ 毎日洗濯して違う物着て清潔にしてるし、俺自身の生活に合わせて着てるだけだから!?？」

「でも、いつも変わり映えしなくてつまらないわよ。それに、普通の繊維を生体繊維にする方法を開発したらいいじゃない?」

「なっ!?? それは……」

「ほら、今日は大人しく選ばせなさい」

「……わあーったよ。よろしくお願いします」

「それでよし」

範人は紫に手を引かれて、またしても連れて行かれた。

◇

結局、範人が幻想郷に帰ってきたのは夕方の6時過ぎだった。

範人の服装は白衣から白いコートに変わっており、それを止めるべ
ルトも着けている。更に、包帯のみだった胴体には灰色のシャツが着
せられていた。

「こんなもん買いやがって……。良いセンスしてるじゃねえか……」

範人は玄関先で呟いた。

と、

「範人、おかえりなさい!」

玄関のドアを開けて、妖夢が飛び出してきた。範人は驚きつつも、
それを受け止める。背中に腕を回して胸に頬ずりしてくる妖夢の頭
を、範人は優しく撫でる。その光景は恋人同士と言うよりは親子であ
る。

しばらくして、妖夢は顔を上げる。直後、後ろへ跳んだ。範人は頭
に?マークを浮かべる。

「は、範人がすっかりと服を着ている!??」

「……おいコラ、何驚いてんだ」

「こ、コレは異常事態です! 幻想郷に崩壊の危機です!」

「帰って早々失礼な奴だな!」

「……貴方、本当に範人ですよね?」

「範人だよ! 真正正銘、旅行範人だ!」

「ですよね。……良かった。範人以外の男性に頬ずりとかもはや切腹
ものです。そいつ殺して私も死にます。範人と一度やってから」

「愛が重い!?? あと、そこまでやるのが大事か!」

「大事です! 大好きな人とは繋がりたいに決まってるでしょう!」

「断言された!?? 間違っちゃないけど」

「というわけでやりましょう！」

「というわけ、じゃねえよ！」

「私じゃ……ダメなんですか？」

「うっ……」

涙目で言われ、範人は狼狽える。しかも、妖夢の方が完全に背が低いため、自然と上目遣いになっており、絶対に断れない。断ったら、男の恥である。

「……いや、ダメじゃないが……。むしろ、妖夢じゃなきゃダメだな！」

「ですよー！ やりましょう！」

「また今度な。まだ年齢的にダメだ」

範人は妖夢の言葉を受け流して、家の中へ入ろうとする。しかし、

「フッフッフ……、今日が何月何日お忘れじゃありませんかね？」

「は？ ……10月13日だろ？ ……あ……！」

「気づきましたね。そう、今日は範人の18歳の誕生日です！」

「そうだったー！」

「というわけです、範人。とりあえず、家の中へ入ってください」

「あ、ああ……」

妖夢に促されるまま、範人は家の中へ進んだ。

◇

誕生日、と言っても夕食は普段と何ら変わりはなかった。変わっていることと言えば、橙を除いた八雲家が夕食の席にいたことである。

ちなみに、本当は魔理沙や優、デューレスも来る予定だったのだが、魔理沙と優は「記事がアレだったから……」という理由で、デューレスは「橙の相手を頼まれてしまったので……」という理由でキャンセルしたらしい。橙の欠席も藍が文の新聞を読んだことが原因だろう。文エエイ……。

そんなことを考えながら、範人は自室のベッドに入った。今日は珍しく、妖夢は他の部屋で寝るらしい。

「はあ……18歳、か……」

ベッドに寝転がり、範人は呟いた。

18歳になれば、車の免許を取ったり、就職したりと責任が問われるようになる。そして、何より大きいのが、

「結婚、ねえ……」

愛し合う2人が惹かれ合い、結ばれ、共に生活するようになる。誰かを愛し、愛されることで初めて形になる出来事。互いを思い、求め合う心の具現化が結婚である、と範人は考えている。

——俺は妖夢のことが大好きで、思い、求めている。もちろん、セツクスしたいし、子供だって欲しい。ずっと一緒に居たい。

「お前が迫ってくる度に断ってるけどよお……。俺だって、お前のこと大好きなんだからな。……ごめんよ、妖夢。これまで散々突っぱねて、我慢させちまって……。これからは……。できる限りだが……。きつと……」

——幸せにする、絶対に。これまで以上に、2人で作れる最高の時間を一緒に……。

◇ そんなことを思いながら、範人は眠りにつくのだった。

◇ 日付が変わった頃。

「お邪魔しまーす……」

範人の寝室に妖夢が忍び込んできた。そして、寝ている範人に口づけをしたところで彼が目を覚ました。

その夜、2人は初めて身体を重ね合ったのだった。

第九十二話

ゴートレック生物研究所、耐熱実験室にて。
範人は刀を打っていた。

つい2週間ほど前に発生した妖怪の山侵攻事件。結果は範人達、幻想郷側の者の勝利だったが、状況は良くなかった。妖怪である天狗が相手でも互角に渡り合える力を生物に与えるプラーガDの存在。それはあまりにも危険だった。

事態を重く見た天魔は天狗達により強力な武器を持たせることにした。しかし、人間が打った普通の刀はおろか、それら普通の刀を基にした妖刀でさえも少々心許ない。そこで範人に白羽の矢が立った。範人のみが加工法を知っている生体金属モノリスに目をつけたのだ。食事とトイレ以外の休憩はほとんど取らずに三日三晩（誕生日の後、作り忘れていた）。注文された刀の最後の1本が今完成しようとしていた。

「ふう……」

範人は一息吐き、額に流れる汗を拭った。

赤々と燃える炉がある部屋の温度は50℃を超える。自身の能力故に高温に慣れており、死にはしないが、流石に長時間は辛いものがある。現に、全身汗だくだ。

しばらくして、ついに最後の1本が完成した。

「はあー、終わったぞー！ よっしゃアアアアアア！」

範人で完成した刀を鞘に収め、背を伸ばす。

100本以上の刀を僅か3日（それゆえ3日クオリティ）で作り上げた自分はまさに魔王クラスの強敵を打ち倒した勇者。何かを乗り越えたこの爽快感、達成感、優越感がたまらない。範人のテンションは一気に跳ね上がり、

「……寝よ」

あまりの暑さと疲労で一気に下がった。

この暑い部屋からさっさとおさらばして休みたい。

汗だくのまま寝るのは気持ちが悪いと、範人がシャワールームに向

かおうと椅子から立ち上がった。

と、

「終わったんです……か？……おやおっ!?」

扉が開き、妖夢が部屋に入ってきた。

「ん？ どうしたんだ？」

驚いた表情で固まる妖夢に範人は？マークを浮かべる。

「だって範人……包帯が……」

「……ああ、なるほどな」

範人は自身の身体を見下ろして頷いた。

今、範人の服装は上半身裸。いつも巻いている包帯も外し、若干細身（実際はガツチリとした体格だが、筋肉を圧縮させている）ながらも遅しい肉体を空気中に晒している。

「この部屋暑いし包帯も汗でグツシヨリになっちまってな。脱がせてもらったよ。この部屋来るのは傷痕見ても平気な奴らだけだと思っしな。……で、どうした？この格好は刺激が強すぎたか？」

ニヤリと笑う範人に、妖夢は「ふふふ」と笑い、

「もう……刺激が強すぎますよ。誘っているんですか？」

瞬間、範人の顔から血の気がサツと引いた。

こんなに疲弊している時に襲われたらまず逃げられないだろう。そして完全にリードを取られて気が済むまで搾り取られるのだ。気絶不可避である。

「じ、じゃあ、俺はシャワー浴びてくるから」

範人は壊れかけのロボットよろしく、妙にぎこちない動きで歩き出す。しかし、その行動は目の前に立ちはだかった妖夢に止められた。

「まだ質問に答えてもらっていませんよ？」

「え……いや、その……」

「誘っているんですよね？」

「誘ってない誘ってない！暑いから脱いだけ！」

「誘っているんですよね？」

「だから、暑かったただけだって」

「誘っている」

「……」

最終的には有無を言わさぬ口調で言われ、範人は黙ってしまふ。妖夢は「ふふふ」と笑い、

「冗談です♪」

「なんだ冗談かよ……（助かったぜ）」

ホツと一息吐く範人。その気が抜けた瞬間に妖夢は一気に接近し、身体を密着させた。しかも上目遣いのおまけ付きである。そのあまりの可愛らしさに範人は顔を赤くする。

「ところで範人？」

「……ん？ あ？ お、おう……」

名を呼ばれた範人は気の抜けた返事をする。

「私も脱いでいいですか？」

「ん、ああ……え、え!?? 脱ぐ!??」

驚く範人の横で妖夢は早くも服を脱ぎ始めていた。

「えっ、お、コラ！ 何脱ぎ始めてんだ!??」

「いやあ、この部屋暑いので脱ぎたくなつてしまいました……範人も脱いでいるからいいかな、と」

「よくねえよ!?? 男性と女性じゃ裸見られて失うもんが違いすぎるだろー！」

「範人に見られるなら全然オーケーです♪ それに失う物は範人で失いました」

「俺はオーケーじゃねえよ！ あと誇らしげに言うな！」

妖夢の発言にツツコミを入れる範人だったが、だんだんと疲れてきた。

——この体力はどこから湧いてきたんだ自分……。

息を切らしながら、範人は自身にもツツコミを入れる。

3日間ぶっ通しの作業で心身共に疲れ切っていたはずなのに口が勝手動いていた。

範人が自身にツツコミを入れている間に、妖夢は下着姿になっていた。範人は顔を引きつらせる。

「ふふふ、このまま夜の営みなんてどうですか？」

「夜の営みって言っても今昼だからな!?!?」

「……なるほど、それなら昼の営みにしましょう」

「名前変えたところでどうにもなんねーわ! 誰か来たらまずいだろ!?!?」

「大丈夫です。幽々子様と紫様は人里に行くとおっしゃっていましたし、魔理沙さんは紅魔館で怪盗魔理沙になってくる予定らしいです。あと、デューレスさんも門番の日です」

「クツ……そこまで調査済みか……」

——この子どれだけやりたいんだ……すげえわ。

妖夢の持つ溢れんばかり（もう溢れているかもしれないが）の性欲に、範人はもはや驚きや呆れを通り越して尊敬してしまっていた。

妖夢は範人にズイと詰め寄り、

「さあ……どうしますか? この家は言わば性の安全地帯ですよ」

「どんな安全地帯だよ!?!?」

「どんなに激しくしても見られることも聞かれることもなくやり放題ということですよ」

「とんでもない安全地帯だな!?!? てか、そんなもんに安全地帯なんてねーわ!」

「え? 周りは完全に安全……ああ、なるほど。確かに2人の股間はヤバイですね……」

「なんちゆう想像してんだよ……」

「範人との激しいエッチです!」

「ドストレートに言うなよ!?!?」

「それだけ範人のことが好きなんですよ」

「……いや……そりゃ……まあ、ありがとう……」

次々と出てくる妖夢の発言に、範人のツツコミが追いつかなくなってきた。

攻撃に対するガードが間に合わない。まるで某クツク先生の連続くちばしをガードした時の狩人である。

妖夢は範人に身体を摺り寄せる。

「ふふふ、どうですか? 私も暑くて汗かいてきちゃいました。下着

が大変なことになり始めてますよ」

範人は妖夢をチラッと見ると、すぐに顔を赤くして視線を逸らした。

汗だくの下着姿というだけでもかなりエロいのに、汗がジツトりと染み込んだ下着は肌にぴったりと貼り着き、布の下に隠しているものの形をくつきりと浮かび上がらせていた。

範人の反応に、妖夢はニヤリと笑い、

「どんな体勢が良いですか？範人のお好みの体勢でやってあげますよ？」

妖夢は前屈みになって谷間を見せつけたり、片足立ちで股を広げたりと、いやらしい体勢をとり始めた。

いくら生物兵器で合衆国政府のエージェントとはいえ範人も男の子。もちろんスケベなところもあり、目の前でそんなことをされて反応しないはずがない。チラチラと見てしまい、同時に色々想像してしまう。

「ふふふ、今想像しましたね？」

「なっ……っ!?？」

「汗だく下着姿の私が恥ずかしい体勢になって範人の雄の部分を受け入れる姿を想像したんでしよう？」

「……い、いや……そんなことは……」

範人は頬をピクピクさせながら否定する。

「ああ！ 範人の気持ち良い！ 範人の熱くて気持ち良いよお！」

突然、妖夢の口から喘ぎ声が放たれた。あまりにもリアルな——まるで本当にやっているかのような声に範人の肩がビクリと跳ねる。

「——とか、私が喘いでいるのを想像したんじゃないですか？」

「う……く……」

完全に凶星を突かれた範人の顔が固まる。

「さあ、どうなんですか？想像したんでしよう？」

「……………しました」

「えっ？ 何ですか？ 良く聞こえませんか？」

「妖夢の下着姿で色々想像しました！例えば——」

範人はやけくそになり、人前ではとても話せないような超過激な妄想を数パターン、大きな声で一氣に言い切った。

そして、現在は、

——何やってんだ俺……。

と、羞恥に顔を赤く染め、床に手を着いている。そんな範人に妖夢はサデイスティックな笑みを浮かべ、

「ふふふ、やっぱり範人も男の子ですね」

「……ごめんなさい……」

「おや？私は怒っていませんよ。むしろ、範人が私でそういうエッチな想像をしてくれていて嬉しかったです」

「……すごいなあおまえ……」

「どんな形であれ、好きな人に想ってもらえることは嬉しいことですよ。……まあ、他の女でそういうことを想像していたなら、そのムスコさんを切り落としていたところですけど」

——器はでかく、思いは重い……。

恐ろしいことを真顔で言う妖夢に範人は尊敬と恐怖を覚えていた。

範人は部屋から出ようと一歩踏み出したが、不意に後ろから抱きつかれる。後ろを見れば、抱きついた妖夢が荒く息をしていた。頬を紅潮させて荒く息をする妖夢の姿はかなりエロい。

「はあ……我慢できなくなっちゃいました……」

「……は？」

一瞬で範人の顔から表情が消える。

「やっぱり今ここでやつちやいましょう」

「……え？やる？……やるって……その……エ、エッチだよな……っ」

「そうですね何か？」

「断る」

さも当然のことのように言う妖夢に、範人は無表情のままきっぱりと断った。しかし、妖夢は続ける。

「いいじゃないですか。もう童貞じゃないんですし」

「よくねーよ！こんなに疲れてるときにやったら死んでしまうわ

！」

「何言ってるんですか。範人は自然死以外では絶対に死なない生物兵器って、前に自分で言ってたじゃないですか」

「ぐおっ!?? そうきたか……。……だがな、俺は疲れているんだ。これからシャワールームに行つてシャワー浴びた後にベッドまで行つて寝る以外では体力残ってないから明日まで動けない」

「だったら何故今ここで話せているんだ」と、ツツコまれそうなことを言うが、範人本人は全く気付いていない。そんな説得力のない疲れたアピールをする範人に、妖夢は親指を立てて、

「大丈夫です。範人が動けなくても私が動きますから。範人は仰向けになって天井のシミとか動く度に揺れる私のおっぱいを見ていればいいんですよ。そうしてる間に終わりますから」

「こ、こいつ……」

表情筋が完全に引き攣る範人。

妖夢は更に続ける。

「それにこの部屋にはベッドが複数ありますよね。炉のせいで暑いから全裸でも平気ですし、ベッドには拘束器具がついてますし……。やるにはうってつけですよね」

「おいコラ、この部屋の炉は暖房じゃねーよ。それにここのベッドは被験体の解体用に確かに拘束具もついちゃいるが、変なプレイ用じゃない」

範人が刀を打っていたこの部屋、本来はそういった目的で使用される部屋ではない。生物の皮や毛を燃やすことでその耐熱性、耐燃焼性を調べる実験を行っていた部屋なのだ。生物を生きたまま燃やしたこともある。今は範人が炉を改造して鍛冶場になっているが、元々はそんな恐ろしい場所なのである。

「範人？」

「嫌だからな！俺は逃げるからな！」

「……そうですか……。それなら仕方ありませんね」

「なっ……。!??」

妖夢は範人を押し倒した。

「私は剣士ですよ？ それなりに力がありますから疲れ切った貴方を押し倒すくらい簡単にできます」

「くっ……離せ！ 俺はもう体力が限界なんだ！」

「……往生際が悪いですね。そんな範人にはお仕置きです。それっ」

そう言つて、妖夢は脇腹を擦る。あまりのくすぐったさに笑いながら身を振る範人だったが、疲れ切った身体でその動作は相当辛い。すぐに体力が尽きて、笑おうにも笑えず、身を振ろうにも振れなくなつた。妖夢はそれを見て、範人の腹筋に指を這わせながらサデイスティックに微笑む。

「ケホッ……ケホッ……」

「ふふふ、範人が悪いんですよ？ 私にあんなエッチなことを話すんですから……。あんな話をしたから私が我慢できなくなっちゃったんですよ」

スルリという音を立てて妖夢の下着が落ちる。プルリとした形の良い乳房が眼前にさらけ出され、範人は自分の股間が熱くなるのを感じた。

妖夢は範人の胸に手を当て、

「心臓が速くなっていますよ。本当は範人も期待してたんじゃないですか？」

「……」

期待していなかったと言えば嘘になる（しかし、やりたかったわけではない）ため、範人は黙り込んだ。妖夢は愉快そうに笑い、

「範人のそういうところ、可愛いと思います………んっ……」

唇を重ねた。

妖夢は舌で範人の唇をこじ開け、無理やり舌を絡ませる。範人は何もしていないが、クチャクチャという卑猥な音は部屋の中に響く。

デープキスは確実に範人の精神をすり減らしていき、唇が離れる頃には「もうどうにでもなれ」と心の中で呟いていた。

「……んふう……範人のキスやっぱり美味しいです。それにしても……」

妖夢はスウと息を吸い込み、

「今日の範人はすごくエッチな匂いがします。でも、相変わらず体臭薄いですね。汗かいてても普通よりまだ弱いくらいで……なんか男らしくないですね」

「……男らしくないって失礼だな。てか、体臭は強くない方が良いでしょう」

「そうなんですか？」

「体臭が強いのはなんか不潔な感じがして嫌なんだよ。俺的には薄い方が良い」

「なら、私も体とかもつと洗った方が良いんでしょうか？」

「あくまで俺の場合だ。妖夢はこれまで通りで良いだろ（良い匂いだし……）」

「そうですか？ それなら良かったです」

妖夢はホツと胸を撫で下ろす。しかし、一方の範人は安心できない。

「じゃあ、メインに移りましょうか」

「……もういいから早くしてくれよ。シャワー浴びて寝たい……」

「じゃあ、お風呂では洗いつこですね」

「もうそれでいいから早く……」

何故か範人がおねだりしているようになっていたが、今の彼にはもうどうでもいい。範人が求めるのはシャワーと睡眠。今はたった2つのものである。ちなみに言うまでもないが、妖夢が求めるのは範人とのイチチャラブである。

「それでは……」

妖夢はベッドの上まで範人を運ぶと、彼のジーンズと下着を引きずり下ろし、

「いただきまーすー！」

範人の上に覆い被さった。

◇

次の日、天狗の里へ刀を納めに行った範人が見張りの白狼天狗に

「少し臭わないか？ イカっぽい」と言われて「これだから強い臭いは嫌なんだ」と顔を赤くしたのは別の話。

手の届かぬ距離

蜘蛛島平、約300歳。二つ名は『コバルトブルーのお医者さん』。腕の良い医者として地底で有名な彼は、今日も地底を駆け回り、怪我の治療をする。

どこからとも無く現れ、風のように去っていく。その姿がかなりかっこいいため、地底に住む妖怪、特に女性の間ではとんでもない人気を誇っていた。そのため、偶に困ったことが起こる。

「イタタ……。転んじやったわ……」

旧都、中心部にて。

頭に獸耳の生えた亜人型の妖怪の少女が段差を踏み外し、足首を捻挫してしまった。その直後、

「大丈夫か？」

屋根の上から平が現れた。

平はしゃがみ込み、少女の足首の様子を見る。

少女の足首は既に腫れ始めており、見るからに痛そうだった。鬼レベルの妖怪なら、この程度の傷くらいすぐに治るのかもしれないが、亜人となるとそこまで強力な自然治癒力は期待できない。

平は背負っていた鞆の中から木の板と包帯、痛み止めの軟膏を取り出した。平は慣れた手つきで少女の足首に軟膏を塗り、木の板と一緒に包帯で巻いた。

「コレでしばらくは痛みが消えると思う。だけど、その足は治るまで動かさないこと。とりあえず、1週間すれば治る」

そう言っ、平はどこからともなく取り出した松葉杖を足元に置き、屋根の上に跳躍。すぐにどこかへ消えて行ってしまった。

後に残された少女は呆然として、

「かっ……い……い……」

感謝も忘れて無意識のうちにそんなことを呟いていた。

——今度、お礼を言いに行かなきゃ……。

そんな少女（正確には治療しに来た平）を見ていた周りの女性たちは、

「羨ましいわあ」

「私も平様に優しく治療してもらいたい！」

「平様の手が直に触れる……ハアハア」

「フラットイズジャステイス！」

「平様の手が私の敏感なところに……ゴハツ……」

こんな感じで平にベタ惚れだった。——と言っても、あくまで憧れているだけであって、恋愛感情など抱いていない。アイドルに憧れると言ったような感覚だ。

しかし、ここまで人気だと、さすがに勘違いする者も出てきた。

◇

「クソオ！ 嫁が医者に盗られた！」

「ウチもだ。平って奴らしい」

「俺ん家も嫁が平って奴のことばかり話しやがんだ」

「僕だって彼女盗られたよ！」

「いったい何が目的なんだ。」

「あんにやろめ……あんにやろめ……」

旧都、とある居酒屋にて。

男たちが集まり、野郎だけの飲み会をしていた。しかし、ただの飲み会ではない。平に嫁や恋人を盗られた（と勘違いしている）者たちの飲み会兼対策会議——『コバルトブルー対策会議』である。

ちなみに、平に憧れる者たちの集まり——『コバルトブルーファンクラブ』という別の団体も存在する。こちらは男女混合である。そのため、この団体の中にはあっち系のお兄さんもいたりする。

「あいつの勢いをどうにかできんもんかね……」

「それができたら苦労しない」

「あの人気、俺たちの手の届かないレベルなんだよな……」

「俺もモテたい……。くそっ、リア充め！」

「ハーレムハーレム！」

「お前ら2人はフられても仕方ないな」

「え、え？？」

男たちの内2人が驚く。

と、

「なら、物理的に止めちやえばいいんじゃない？」

亜人の男がそう言った。

「彼がそんなに強そうに見えるかい？ あんな人間みたいな体格じゃあ、速さはあっても力自体は弱いんじゃない？ 僕たち全員でかかれば楽勝でしょ。それに、彼が負けるところを見れば、女性たちは彼から離れると思うよ。最悪、殺しちゃえば彼自身も消えるんだし」

「その手があったか！」

「そうだ。ぶっ殺しちまえば問題ねえ！ あいつさえ消しちまえばいいんだ！」

「よっしゃあ、殺っちまおうぜ！」

「あいつを消して、俺たちの時代だ！」

ほとんどの者たちが亜人の男の意見に賛同し、気がつけば「殺す」という意見に発展してしまっていた。彼らにとって、その案は名案だった。

その一方で、

「俺は降りるわ……」

「俺も……」

「それはちよつとなあ……」

会議から離れる者が僅かながらもいた。名案ではなく迷案だと気付いた者たちだ。

彼らは酒代を席に置き、店を出て行く。それでも、その場には20人近い男たちが残った。

「ほんと……恨み、妬みとは恐ろしいもんだねえ。……ククク……」

男たちが盛り上がる中、亜人の男は1人ほくそ笑んでいた。

◇

平はいつものように、屋根の上から旧都を見渡していた。

人通り（人じゃないけど）の多い道よりは屋根の上の方が動きやすいし、傷病者のところまで移動する時に速く移動できる。緊急時の対応に適した道、平にとってはそれが屋根だった。

そんな時、

「ギアアアアア!?」

男の悲鳴が聞こえた。

平は、やれやれまた仕事か……と思いつながら、屋根の上を走った。種別不明の妖怪の男を、様々な種類の妖怪の男たちが取り囲んでいた。種別不明の妖怪の男は足首から先が千切れ、骨と筋肉が露出してグロテスクなオブジェを作り出し、動脈からは血が噴水のように噴き出していた。

「な、何をしやがる……。あ、足が……」

「お前もあいつのことが憎いんだろう？ だったら、足の1本や2本くらい良いじゃねえか」

「ふ、ふざけんじゃねえ！ 同胞殺しなんて真つ平御免だ！」

「そうか……。それなら仕方無えなあ？」

「こんなの嘘だ……。 やめろ、やめろオオオオオ！」

取り囲んでいた男たちが種別不明を地面に押しさえつけ、その内の1人が頭を踏み砕いた。割れた頭蓋骨から灰色の塊が飛び出し、地面に染みを作る。

そこへ平が到着した。

「大丈夫……。じゃなさそうだな。貴様ら何をしている？」

いつもの医者表情から一変、平の目が細くなる

群がる男たちの足元には全身傷だらけになり、頭蓋骨を潰された男の身体があった。もう助けられない。

群がる男たちの中から1人、平の方へニヤニヤしながら歩み出た。

「お医者様あ、やつと登場ですか？ 随分と遅かったですなあ。ヒーローは遅れてやって来るってやつですかい？」

「まずは僕の質問に答えろ……」

下品な笑いをする男たちに、平が凄む。

しかし、

「おお、可愛い可愛い。そんなちっぴけな身体で睨まれても怖くねえな」

「いいから答えろ。そしたら僕も答えてやる」

「ハッ！ 何寝ぼけたこと言ってるんだあ？ てめえの答えなんざ聞く

「気無えんだよ！ 死にやがれ！」

男が平に殴りかかった。平は冷静にかわし、男の肘に裏拳を入れる。男の肘がありえない方向に曲がり、その手が男の肩を掴んだ。

「ア、アアア!? お、俺の腕え！」

「交渉決裂つてことだな、OK……」

「ひ、怯むんじゃねえ！ やっちまえ！」

腕を折られた男が他の男たちに声をかけた。男たちは平を取り囲む。その数、17人。

「俺らはお前に奪われた。だから、俺らもお前から奪う」

「何のことだ？」

「とぼけるんじゃねえ！ てめえが俺たちから女を奪ったんだ！ 俺たちにはお前から奪う権利がある！」

「よくわからないが……それで命を奪うと？」

「その通りだ！」

言うが早い、男たちは一斉に平に殴りかかった。平はジャンプして回避。そのまま正面の男の顔面に蹴りを入れる。

男は後方に吹っ飛び、壁に頭を強く打ち付けて意識を失った。

「まずは1人……」

平が呟き、男たちがどよめく。

平は後方の男に向けて両手から糸を発射。糸が男の両肩に張り付いたことを確認すると、空中に引き寄せた。男の身体が空中に引上げられる。

平は糸をくつつけたまま身体を縦回転させて男を振り回し、真下にいた男に向かって叩きつけた。あまりの衝撃に、2人の男は地面に埋まった。

「これで3人……」

平は地面に着地すると、左右にいた男たちにバツクナツクル風のパンチを入れた。

拳は両方とも男たちの胸部に直撃。強い力で胸骨が圧迫されたことにより、男たちの心臓と肺は一時停止に陥り、身体もろとも意識を吹き飛ばした。

「5人目……」

仲間たちの5人目が倒され、男たちはやっと今の状況を把握した。狩る側だったはずの自分が、いつの間にか狩られる側になっていたことに気づいた。

男たちは距離を取ろうと後ろに下がったが、3人遅れた。その3人の足首に平のスピローキックが入り、身体が空中に浮かび上がる。

平は地面を蹴って宙返りすると、そのまま身体を横回転させてオーバーヘッドスピキックを放った。

3人の身体が吹っ飛び、地面に転がる。

「8人……」

平は地面に着地して呟いた。

と、

「捕まえたぜ！」

1人の男がいつの間にか平のすぐ後ろに迫ってきていた。

男は平を羽交い締めにする。

「お前ら、早くやれ！」

羽交い締めになっている男の声で、平の周りに男たちが集まる。そして、平の横腹や鳩尾、顔面に拳や蹴りを入れ始めた。

平の身体には傷ができ、裂けた皮膚から透明感のある黄緑色の血液が流れる。しかし、平は呻き声一つ漏らさない。

男たちは殴りながら、口々に平を罵る。

「お前さえ……お前さえいなければ！」

「たかだか300年生きた程度で生意気なんだよ！」

「消えやがれゴミ虫野郎！」

「何が医者だ！ お前は俺を救うことなく苦しめた！」

「女誑しのヤリチン野郎が！」

「その見た目が気に食わねえんだよ！ 無駄にイケメンにすぎんだよ！」

「こんなふざけたもん着けやがって！」

男の1人が平のゴーグルとマスクを奪い取り、地面に投げつけて踏み潰した。

平の眉がピクリと動き、

「おい、貴様は今何をした……?」

「あ、あ!?」

「何をしたかと訊いているんだ!」

平は背後の男に頭突きして拘束を解除した。更に、怯んだ背後の男に肘打ちを入れる。肘は男の鳩尾に見事に入り、男の意識を刈り取った。

正面の男が激昂して平を殴るが、平は顔を少し下げて拳を口で受け、歯で男の皮膚を裂いた。

傷ついた男は更に怒って平を殴ろうとした。しかし、糸に引っ張られたように、身体が動きを止めてしまう。

「ば、バカナ!? 身体が、動かん!?」

「タランチュラは人を毒殺できると言われるが、実際の毒はそこまで強くない。タランチュラに殺されたと言われる場合、そのほとんどの原因は毒よりも噛まれた時に入り込んだ感染症だ。僕の毒にも殺せるほどの力はない。だが、痺れるだろう? 僕の毒は非殺傷性の代わりに即効性の高い麻痺毒なんだよ」

平は簡単そうに言うが、正面の男以外は未だに殴りかかってくる。しかし、平はそれらを見向きもせず、軽々とかわしている。

「クソッ! 何故当たらん!?」

「なんでだろうな?」

平はそう言うのと正面の男に糸をくっつけ、自分の周りを回転させた。あつという間にハンマーチェーンの完成だ。

平は男をハンマー投げのように振り回した。周りの男たちに振り回された男がぶつかり、周りの男たちは倒れていく。

平は男を引き寄せてホールド。そのまま空中へ跳んだ。

「な、何をやる気だ!?」

「ん? イヅナ落とし♪」

男の質問に、平は笑顔で答えた。

地面が離れ、岩の天井が近づく。まるで、ロケットのように真っ直ぐに上へと。届かない大空へと。

天井に届くかと思われたその刹那、男の世界が逆さになった。天井が下に、地面が上に。垂直落下。

地面が高速で近づき、男の世界がゆっくりになった。

「ラストオー！」

ドゴオオオン！

男の世界が激しく揺れ、意識は闇へ落ちた。

◇

平の周りには気絶した男たちが17人。かろうじて意識を保っている腕の折れた男が1人。死屍累々の光景。

平は身を屈め、ゴーグルを拾い上げた。ゴーグルはレンズが割れてしまっていた。おまけに、バンドまで切れてしまっており、もう着けることすらできない。

平は申し訳ない顔で、

「すまない、ヤマメ。お前のプレゼント、壊れちゃったよ……」

平がついさつきまで着けていたゴーグルは幻想入り当初に持っていた物ではない。幻想入り当初に持っていた物とはつくの昔に壊れてしまっていたのだ。今使っていた物はヤマメから貰ったゴーグル。大切な人から貰った、平の宝物だった。

平は悲しみに暮れて、俯いた。そんな時、

「ギャハハハハ！ ザマア！」

下品な笑い声が聞こえた。

平が顔を上げると、そこには亜人の男がいた。

「誰だ、お前は？」

「誰だ、お前は？ ……それは僕の台詞だあ！」

亜人の男は叫ぶと、平の腹を蹴り飛ばした。不意の出来事に、平はなすすべなく吹っ飛ぶ。

男は続ける。

「ヤマメちゃんは僕のものだ！ ずっと……ずっと、僕はヤマメちゃんのことを見てきた！ ヤマメちゃんは僕のお嫁さんだ！ ヤマメちゃん可愛いよクンカクンカスーハースーハー！ ……なのに、君がヤマメちゃんを奪った！ 僕のヤマメちゃんを君が奪ったんだ

！ 君なんかに奪られてヤマメちゃんは悲しんでいる！ 僕が！

僕がヤマメちゃんを救って、ヤマメちゃんは僕のところに戻ってくる！ 君が死ねば、ヤマメちゃんが戻ってくる！」

あまりにも醜い叫びだった。

平は立ち上がり、

「なるほど、つまり貴様はストーカーというわけか……」

「ストーカーじゃない！ 僕とヤマメちゃんは愛し合っているんだ！」

「黙れ。お前の言葉は一方的なものだった。ヤマメが貴様のものだと？ ふざけるな！ ヤマメはヤマメ自身のものだ！ ヤマメが誰の嫁になるか、ヤマメが誰を選んだか。それはヤマメ自身の判断だ。貴様の判断で決まることじゃない。そして、少なくともヤマメは貴様のものではない！」

「うるさいうるさいうるさい！ 僕のヤマメを君が奪ったんだ！ ヤマメは僕のものなんだ！」

亜人の男は狂ったように叫んだ。

と、

「勝手に決めないでもらいたいねえ」

屋根の上から声が聞こえた。

2人が見上げると、そこには黒谷ヤマメ本人がいた。

ヤマメは地面に降り、

「平の言う通り、あたしはあたしのもものさ。他の誰のものでもない。でも、あたしを貰ってほしい奴はいるねえ……」

「そ、そいつは誰だ!?? そいつを消せば、ヤマメちゃんが自由になるんだろ!?? 教えてくれ！」

「教えないよ。あたしはそいつと一緒にいれて幸せなんだ。てか、あんた誰だい?」

ヤマメは平の方を見てウインクしてから訊いた。

亜人の男は鼻息を荒くして、

「ほ、僕、ヤマメちゃんのこと大好きなんです！ ヤマメちゃんも僕のこと大好きだよね？ 付き合ってよ！」

「……なんとなく把握した。とりあえず、あんたには貰われくないねえ。初対面だし、気持ち悪いし……。やっぱり、あたしをあげられるのは平だけだね」

「そ、そんなヤマメちゃん……」

亜人の男ががっくりとうなだれる。

ヤマメは自身の胸が平の腕を挟み込むように身体をくつつけた。平は目を泳がせながら、

「ヤマメ、あまりくつつくな。人前でそんなことされると恥ずかしい……」

「いいじゃないか。あたしは外でやるのも歓迎さ。公開プレイ大歓迎」

「僕からすれば大問題だ」

「つれないねえ。仕方ないから家の布団で我慢するとしようか……」

「むしろ、それが普通だ」

「なら、今夜も付き合ってくれるかい？」

「……仕方ないなあ」

「よっしゃ、今夜こそは孕めそうな気がしたんでね」

平とヤマメは亜人の男を差し置いて2人だけの空間を作り出していた。

その空間が出来上がっていることは亜人の男にもわかり、感じたものとはとてもない疎外感。そして、それは自らの敗北を意味しており、

「ふざけるなあー！」

亜人の男は激昂した。

「おかしいおかしいおかしい！　こんな間違っている！　なんでヤマメちゃんはそのような男を選んだ!?　ヤマメちゃんにくつつくのは僕だったはずだ！　どうしてどうして!?　こんなのあるえない！　僕のヤマメちゃんがどうして僕以外の男なんかと……」

亜人の男は地面に膝をついてブツブツと独り言を言い始める。その言葉をフォローする者は誰もいない。

醜い叫びで男は人望を失い、ヤマメという好きな人が自分のものに

ならなくなったことを改めて知った。だからもう……、

「こんな世界じゃない！ 僕の思い通りにならない世界なんておかしいんだ！ 僕の思い通りにならない奴なんてじゃない！ 死ぬ！ みんな死んじやえ！ 死ぬ！」

「なんて奴だ……」

「うひゃあ、これは酷いねえ……」

「まずは君だ！ 僕とくつつかないヤマメちゃんなんていらぬ！」

亜人の男は懐からナイフを取り出し、ヤマメに襲いかかった。しかし、その行動は平とヤマメの放った蜘蛛糸によつて阻まれる。

平とヤマメは更に蜘蛛糸を放ち、男をがんじがらめにした。

「放せ！ 僕を解放しろ！ この間違つた世界を僕が直してやる！」

僕の世界に変えてやる！」

「うるさい、黙れ」

「あんた気持ち悪いから嫌いになつちやつたねえ……」

「ふん、僕のことを好きになってくれなくてもいいさ、このクソビッチ！」

この糸が解けたら、まず君をこら——」

ブオン！

突然の風切り音。亜人の男の顔面スレスレで平の足が止まった。

「黙れよ。気色悪いストーカーが」

「ふ、ふんっ！ 黙るもんか！ 用があるのはそのクス——

ギヤアアアア！」

平の蜘蛛糸が締まり、亜人の男が悲鳴をあげた。

糸は男の身体に食い込み、表面の皮膚を切り裂いていた。傷口から流れ出る血が、あつという間に男の身体を赤く染める。

「次は無いぞ」

「ぐう……」

平の言葉に、命の危険を感じた亜人の男は呻き声を上げて黙り込んだ。

「ヤマメは僕の大切な人だ。彼女を侮辱することは絶対に許さない。今からこの糸を解く。そしたら黙って帰れ。2度とその面見せるな」
そう言つて、平は亜人の男に絡まっている糸をほどいた。そして、

男を放置してヤマメと共に背を向けて歩き出した。

しかし、

「バカが！ 僕がああ程度で諦めると思ったか？ 諦めるわけねーだろマヌケ共！ これは序章だ！ まずは君だよ、黒谷ヤマメエ！ 君を殺して、その後平を殺す！ これから僕の殺戮シヨールが始まる！ 君たちはその最初の犠牲者だあ！」

亜人の男はヤマメに飛びかかった。その手に握られている物は毒液の滴る黒いナイフ。

ナイフがヤマメの頸部に迫る。

黒い刃がヤマメの首に突き立てられようとした正にその瞬間。男の身体に蜘蛛糸が絡まった。

「やはり貴様はどうしようもない大馬鹿者だな！」

平は亜人の男の身体に絡まった蜘蛛糸を引っ張り、男を地面に叩きつけた。

男は「グエツ」と蛙のような声を漏らす。直後、男の手からナイフが叩き落とされた。もう男に武器はない。

平は男を冷徹な目で見下ろし、その顔の上に足を浮かせた。

「貴様を見ているだけで吐き気がする。ゴミ——いや、まるで腐ってスープになった肉の塊を見ているような気分だよ。僕は『黙って帰れ』と忠告したはずだ」

「ふひひひ、そんなことしていいのか？ 僕を殺す？ 医者なんて聞いて呆れるね。僕を殺して、これから君は同胞殺しを犯した犯罪者として生きていくことになるんだ。もちろん、この旧都のトップも黙っちゃいない。君は旧都を追い出されて住む場所を失い、そのクソビッチと一緒に路頭に迷えカス野郎」

ズガアン！

平の足が踏み落とされた。亜人の男の頭のすぐ横に。

男は目を見開き、身体をガタガタと震わせている。

平はこれ以上無いほどに冷たい目で、

「僕が貴様を殺すことに何の問題がある？ 貴様は僕たち2人を殺そうとしたんだ。正当防衛だろ。それに、貴様は知らないかもしれない

苦しむ男をその場に残し、平はヤマメの隣に並んで歩き出した。

「さあ、帰ろうか？」

「仕事はもういいのかい？」

「ああ、嫌なもの見ちゃったからね。今日はもう働く気が失せた」

「そうかい。それじゃあ、今日はいつも以上に楽しませてもらおうかねえ」

「それよりも飯食いに行こう。もうお昼時だ」

「それもそうだねえ。じゃあ、勇儀も呼ぼうか」

「それは止よしてください」

2人のラブラブっぷりは息がつまるほどのリア充空間を作り出す。だから、地底の女性たちは平のことが好きでも、その感情が恋愛感情に発展することがない。わかっているのだ、恋をしても絶対にかなわないことが。

男たちの暴走はそもそも意味がないものだったのだ。男たちが捨てられた理由は、男たちが平に群がる女性たちを見て平を羨ましく思っていたから。既に相手がいる身でありながら、他の女性に思いを向けてしまったからである。

その中でも、1人を愛し続けた男はまだ良い方だったのかもしれない。しかし、時に愛は道を踏み外し、間違った方向へと進んでしまう。愛が強ければ強いほど、踏み外した時は間違った方向へと大きく進んでしまう。自身を変えて、周りを壊してしまうほどに大きく。

「僕を殺してくれえー！」

男の叫びが旧都に響いた。

第九十三話 し、新婚旅行ちやうし……

秋も終わりに近づいた11月の下旬。風もすっかり冷たくなったこの季節には暖かい避寒地に行きたくなるもの。生物は本能的に寒さを避けようと考えるのだ。

「ねえ範人、今日も冷えるわねえ」

「ああ……」

「こんな時は暖かいところに行きたいわねえ」

「ああ……」

「ねえ、せっかくだから2人であつたまらない？」

「ああ……」

「じゃあ、裸で温め合しましょう」

「断る」

紫の提案に、キッチンで皿を洗っていた範人は短く断った。つまらなそうに「ちえっ」と舌打ちする紫だった。

幻想郷、ゴートレック生物研究所本宅リビングにて。

「言つとくが、俺が姉さんの言葉をテキトーに聞き流してると思ったら大間違いだからな。姉さんのこと大切だから」

「あら、嬉しいこと言ってくれるわねえ」

「いや、当然のことだと思ふんだが……まあいい。もう1つ言いたいことがある」

「何かしら？」

範人は真面目な顔になり、

「姉さんは俺を誘ったけど、俺は妖夢がいるから姉さんを女として見ることはできない。でも、姉さんのことを恋愛対象として見るとすごく魅力的だと思う。文句なしで一番美しい」

「そんなこと言っちゃっていいのかしら？ 襲うわよ？」

「そうだったら全力で逃げるよ」

「それは少し傷つくわね」

「許せ、妖夢と俺のためだ」

範人の真つ直ぐつぷりに、紫は苦笑いする。

——正に範人まつしぐらね。

妖夢が人質にとられたら、この青年は世界をも壊すのではないのだろうか……と、紫は少し不安になる。

愛は強さであると同時に弱さでもあるのだ。愛情を持っているということは、諸刃の剣を手に握っていることとほとんど同義なのである。

紫はそれを知っている。知っているからこそ、愛というものの良さも悪さもわかっていた。

だから、紫は提案する。

「妖夢と一緒に旅行でも行ってきたらどうかしら？」

「はあ？」

範人は困惑した表情になる。

「2人きりで外の世界に旅行でも行って、恋人同士水入らずの時間を過ごしてきなさいな」

「いやいや待て待て。いくら俺が元政府の人間だからって無料で行ける観光地なんてないからな!?!」

「あら、何言ってるのかしら？ あるじゃない、ハワイの別荘が」

「……確かにあったな。でも、幽々子はどうなるんだ？」

「それなら心配いらないわ。幽々子1人くらい八雲家わたしたちで養えるもの」

あんな暴食モンスターを養えるのか……と不安になる範人だったが、紫なら本当になんとかしかねないため、もはや何も言わなかった。

「で、行くのかしら？」

「ああ、せっかくだからな」

「そう。それなら、幽々子のことは私たちに任せて新婚旅行楽しんでらっしゃい」

「まだ結婚してねえよ!」

全力でツッコむ範人だった。

そんなわけで、そういうことになった。

◇

スキマ移動の前に距離などほとんど関係なく、範人と妖夢はその日の昼過ぎに、ハワイのオアフ島にある別荘に到着した。

「範人と2人きりで旅行……2人きりで旅行……絶対に邪魔されない2人だけの時間……えへへ」

別荘を前にして、何か意味深そうなことを呟く妖夢。範人はそれを無視して玄関のドアを開けた。

「玄関が既に広いです……」

「実家よりもでかいからな……泣けるぜ」

ゴートレック家の別荘は大きな家くらいの大きさで、3階建て。範人の言葉通り、研究所の敷地内にある本宅よりも大きい。2階から屋上に出ることができ、その屋上を経由して、2階の上にある小さな3階に行くことができる。

別荘は2LDKで、寝室は4つ。1階のリビングはミニシアターにもなる。風呂は2つあり、内1つはジャグジー完備である。おまけに、屋上2階にはグリルが設置されており、BBQが楽しめるバーベキューという、かなり豪華な建物だ。さらに、プライベートビーチ付きである。

範人は玄関からすぐ近くにあったドアを開けてリビングに入った。そのすぐ後に入った妖夢は小走りに範人の脇を通り抜け、ソファに座る。

「わー、ふかふかですよー」

「ハハハ、そうだな。あんまり暴れるなよ？」

「そのあたりは心得ていますから安心してください」

そう言いつつもはしゃぐ妖夢に、範人は苦笑する。

——この笑顔、カメラに収めておきたい……。

そんなことを思う範人だった。

ゴートレック家は元々裕福な一族である。政財界の中心に身を置くことは少なかったが、政財界の中心からやや外れた位置に身を置いていたことが多かった。そのため、時代の流れに激しく揺さぶられることも、多くの敵対勢力を作ることもなく、安定して富を築いてきたのだ。

しかし、これだけが裕福さの理由ではなかった。

ゴートレック家の人間は汎用に長けていた。ある者は商売人として、ある者は騎士として、また、ある者は生物研究者として。1つの

事業にとどまることなく、まるでタコのように様々な事業へと手を伸ばし、成功した。故に、表に出るほど目立つことはなくとも、方々にパイプラインを持つていたのだ。

一族で1つの職業に留まらず、まるで風に揺られるかのように、僅かな代で新しい職業に就き、拡大させる。まさに、放浪の旅ゴートレックだった。ただ、自身の気の向くままに。

それがゴートレック家のモットーである。豪華な別荘もこのモットーを基にして、欲しいと思ったものを詰め込んだ結果である。そして、範人の父親にして生物研究者であるアルバレスト・ゴートレックが成功した証である。

「さて、これからどうする?」

椅子に座ってガイドブックを読んでいた範人が、ベッドで飛び跳ねていた妖夢に訊ねた。

妖夢は待つてましたと言わんばかりに、

「セックスしましょう!」

「却下」

「なんですか? これからしばらくは誰にも邪魔されないんですよ?」

「バーカ。なんで観光地来て昼間っからやるんだ? 観光が優先だろ」

「うぐつ、確かにそうですけど……」

妖夢は狼狽える。

「でも、範人は性欲が無さ過ぎます! 男の人なのに、まるでエッチなことに興味がないみたいないな感じじゃないですか!」

「なっ……!?? き、興味くらいはあるぞ」

「嘘を吐かないでください。男の人はいつも女の子のことを考えてムラムラしていると聞いたことがあります」

「俺は年中発情期のうさぎさんじゃねーから! ただのノーマルな男の子だから!」

「14歳で大学を卒業するやつはノーマルじゃない」とか言われそうなことを言う範人。妖夢は「むむむ……」と唸り、

「なら、範人は私に欲情しないと言うんですね！」

「話が飛躍しすぎだー！ 仮に欲情してなかったら誕生日の夜はなんだったんだよ？」

「偽りの愛です」

「んなわけあるか！ 俺がどれだけお前のことが好きだと思ってるんだ！ 同じ布団で寝た夜には手を出さないようにするのが大変なんだぞ！ ……あ……あ……」

ついうっかり漏らしてしまった言葉に、範人の額に汗が浮かぶ。

妖夢はニコニコしながら、

「なるほど、つまり私が押しまくれば範人の理性が折れて、私を襲ってくれると言うんですね」

「い、いや、そんなことは………逃げるんだよお〜！」

ジョ○ヨチックな声を上げて、範人は逃げ出した。妖夢の言葉は正にその通りだったからだ。

妖夢はそんな範人をサデイスティックな笑みを浮かべながら追いかけるのだった。

◇

結果的に範人は人の多いエリアまで逃げ切ったため、助かった。その後、妖夢も合流し、洋服屋を回ったり（アロハシャツを数着購入）、スーパーで買い物をしたり（ゼリーの材料の種類が多かった）してから帰宅した。

夕食はスーパーで買ったポキ（魚の切り身に醤油、塩、香味野菜、海藻などを混ぜ込んで調味した料理。案外簡単に作れる。美味しい。今回のポキはマグロと玉ねぎを使用したシンプルなもの）と電子レンジで温めた米飯、テキトーに買ったサラダで済ませた。

その夜、範人がどんな目に遭ったのかは言うまでもない。

第九十四話

ハワイ旅行2日目。範人達は……、

「海だー!」

海に来ていた。それも、人がたくさんいるワイキキビーチである。不思議に思う人がいるだろう。何故、プライベートビーチを持っているのに、わざわざ公衆の海水浴場に来ているのだろうか……と。

理由は簡単。人がたくさんいる場所の方が楽しいからである。

旅行に行った時に楽しいことは、自分達だけの時間を過ごせることだけじゃない。人がたくさんいる場所に来ることでも上手く場所取りをするか、多くの人がいる場所でも上手く楽しむかという駆け引きもまた楽しいのである。

特に海は、水着の美女がいたり、筋肉がかっこいいイケメンがいたり、水着の幼女がいたり……色々と美味しい要素があるため、人が多い場所の方が良かったりするのだ。

範人は空いている場所にパラソルを立てて、腰を下ろす。その隣に、妖夢も腰を下ろした。

「海だな」

「ええ、海ですね」

「どうする?」

「泳ぎましょう」

「そうだな」

2人は「海だー!」と叫んでいた少年を見ながら、妙にローテーションなやり取りをする。

何故、2人がローテーションなのか。その原因は2人を取り囲む人々である。

「ハイお嬢ちゃん、俺達と遊ばない?」

「お兄さん、あたし達とイイコトしない?」

「お姉さん、一緒に遊んでくれない……かな?」

「わ、私と一緒に泳いでくれないか?」

2人はナンパや逆ナンパを受け続けているのだ。しかも、チャラそ

うな男や男遊びしてそうな女だけでなく、弱気な男の子や恥ずかしがり屋の黒髪清純派美少女まで混ざっている。

確かに、範人と妖夢は平均水準の相当上に行くイケメン——じゃない、イケメンと美少女である。そのため、こうなることは決してありえないことではないのだが、やはり心が疲れる。しかも、その原因が自分達の格好にあるというのだから、どうしようもない。

範人の格好は短パン（水着）にアロハシャツ（前全開）である。おまけに、サングラスまで掛けていたときだ。金髪＋イケメン＋サングラス＋そこそこ長身＋良い筋肉＋前全開のアロハシャツ＋短パン水着。日本で言えば、ただのチャラそうな男だが、元が元だけに相当イカしている。

妖夢の格好はビキニタイプの水着の上に白いワンピースというシンプルなものだ。カチューシャはいつもと同じ物を着けている。見た目が若干幼いものの、やはり美少女は元から美少女のため、シンプルな服装が彼女自身を引き立てて非常に可愛い。

2人が「やめてくれ」という空気を出しているにもかかわらず、ナンパ軍団が離れる様子は全くない。

「邪魔だ……」

相変わらずしつこいナンパ軍団に、範人が静かにキレた。そのドスの効いた低い声と、見つめられただけで身体が両断されてしまいそうなほど鋭い目つきに、ナンパ軍団全員の顔が青ざめる。気の弱そうな少年は立ったまま気絶、清純派美少女に至っては失禁してしまった。範人はギョツとした表情になり、少女の手を取って「ごめん」と謝って、その場を離れる。その後ろに、つまらなそうな顔をした妖夢が続いた。

◇ 後には、ナンパ軍団——マイナス清純派美少女が残った。

「ごめん、怖かったよな」

海水浴場のあまり目立たない岩場で、範人は泣いている清純派美少女に謝る。

範人がこんな岩場に来た理由、それは自身の威嚇が原因で失禁して

しまった少女を大衆の前から逃がすためである。幸い、この岩場には潮溜まり（満潮時には海面下になるが、干潮時には水溜りのような状態なる岩のくぼみなどのこと。小さな魚やウミウシ、ヤドカリなどがあり、なかなか楽しめる。別名タイドプール）があり、水着を洗うこともできた。

少女は目をこすりながら首を横に振り、

「いえ、悪いのは私です。感情のままにナンパなどというはしたない真似を……」

「俺は怒ってないから安心しろ。それに、人によっちゃあ兄妹とか親子に見えることはあるだろうし」

「範人、それは私が幼いということですか？」

「そんなわけないだろ。俺はロリコンじゃないからな。とりあえず、高校生程度には……ああ、大丈夫だ」

黒いオーラを出す妖夢に、冷や汗を流しながら答える範人だった。

「お2人は付き合っていらっしやるんですね。恋人がいる方にナンパとは、私はなんと無謀なことを……」

「まあ、反省は大事だよな。とりあえず、今回のことでまた1つ賢くなったってことでいいだろ。ナンパなんてしない方が良いつてな」

「うう……本当にごめんなさい」

本当に申し訳なさそうに謝る少女。範人自身、悪いことはしていないはずなのだが、ここまで謝られるのはあまり気分が良くない。それは妖夢も同じ気分だったようで、

「……範人はあげられませんが、一緒に遊ぶくらいのことならできます。折角ですから、一緒に泳ぎましょうか？」

「はあ!?? 何言っ——」

「いいんですか!??」

少女は目を見開く。

「いいですよ。1人増えたところで問題はありませんから」

「よろしくお願いしますー!」

少女は先ほどとは打って変わり、嬉しそうに言った。妖夢も「ふふふ」と笑いながら頷いた。

「俺の意思は無視なのか。そーなのかー」

◆ ものの見事に発言を遮られ、いじける範人だった。

ワイキキビーチには海岸近くと沖を隔てる壁がある。壁の陸地側はそこまで深くなく、溺れづらくなっている。壁沿いは更に浅く、小学生でも足が着くほどである。しかし、この壁の外側は深く、普通に溺れるほど。おまけに、サメまでいる。壁が完全に隔てているわけではないため、時折内側にもサメが入ってくることもあるが、外側に比べると小さいサメのため、危険は大分少ない。

妖夢と少女はこの壁のすぐ内側にいた。範人は少し離れたところで潜水している。

遊び始めてから少し経った頃、互いに名前を知らないことに気づいた妖夢が、少女に名前をたずねたところ、シエルと答えた。東洋人の血が混じっているらしい。

「シエルさんは、何故範人のことが好きになっただんですか？ 貴女の見え目なら、寄ってくる男性の方々は多いと思うのですが……」

互いに気を許しあえるようになってきた頃、妖夢はシエルに最も気になっていたことをたずねた。

はつきり言って、シエルは美少女だ。それも、男たちが好みそうな清純派の美少女である。緩いパーマのかかった黒髪に、パツチリとした大きな目、綺麗な青い瞳。白く美しい肌にはほっそりとした女の子らしい手足。身体も程良く細い。これだけでも充分なのに、更に、同性の妖夢が羨ましく思うくらいおっぱいが大きい。どこからどう見ても最高クラスの美少女である。

そんなシエルは恥ずかしそうに頬に手を当てながら、「一目惚れだったんです。『この人だ！』って。彼を見た瞬間に、まるで電流が走ったかのような衝撃を受けました。もちろん、他にもカッコいい殿方は見てきましたが、こんなことは初めてでした。本能のままに、と言えば良いのでしょうか？ 気がついたら、彼に声をかけていたんです」

そう言って顔を赤らめるシエルに、妖夢は喜びに近い感情を覚えて

いた。まるで同志を見つけたかのような感覚だった。

「そうですね。貴女もなんですね」

「え……、『も』とは？」

シエルは驚いた様子で訊ねた。

「私も同じだったんです。範人を見た、その瞬間に惚れてしまいました。もちろん、見た目もあると思いますが、範人は大切な何かを持っている感じがしたんです。本人は『そんなことない』って言ってたんですが、信念というか何と言うか、とにかく何かが違うたのは確かです。きつと、大切な部分がしつかりしているんだと思います。おかげで、範人は私のハートを一発で撃ち抜いてしまいました。同時に、私も範人のハートを撃ち抜いていたらしいですけど」

妖夢ははにかみながら続ける。

「恋人として当然のことですが、範人は私のことを愛してくれているんです。他の誰にも揺れることなく、ただ真っ直ぐに私だけを。だから、私も彼に思いを真っ直ぐにぶつけられるんです」

そう言つて、妖夢は嬉しそうに微笑む。そんな妖夢の様子に、シエルは「負けた」と心の中で呟いた。シエルは既に負けていた。

恋というものにも、やはり早い者勝ちは存在する。というより、早い者勝ちということが非常に重要である。どれだけ早く行動に移して好意を持ってもらうか、それはライバル多き者にとつての最重要ポイントだ。

出会った時期、初対面での印象、行動に移したタイミング……。様々なポイントで、シエルはとづくに負けていた。奪うことなんて不可能。何より、範人の心が揺らぐことは絶対にならないことが、妖夢の様子からはつきりとわかった。

それでも、シエルは訊ねる。

「では、お二人の関係はどこまで行っているんですか？」

返答を聞くのが怖い。しかし、知っておかなければならない。シエルには、好きになってしまった者の責任があった。

「既に、男女の一線を越えました」

一番聞きたくなかった返答。悲しい。しかし、シエルは納得してい

た。絶望なんてしなかった。予想していた通りだったのだから。

「やはりそうでしたか。それなら、私が邪魔をしてはいけませんね」
本当は堪らなく悲しいはずなのに、シエルは微笑んでいた。

そのとき、

「ヒヤッホーイ！」

まるでイルカのように、範人が海面から跳び上がった。そのまま宙返りをし、水飛沫と共に海中へ消える。

シエルは啞然としてしまう。

「もう……目立つのはやめてほしいのに……」

妖夢は呆れた表情で、範人が潜っていったポイントを見つめている。

「妖夢さん、私達も泳ぎましょう！」

「は、はい、そうしましょう」

楽しそうに泳ぐ範人に触発され、シエルも無性に泳ぎたくなった。範人に手が届くことはもうないが、それならそれでいい。あつさりフラれた過去は忘れ、今この時を楽しもう。

シエルと妖夢は同時に水に潜った。

◇

範人が水面から連続で跳び上がった頃、ビーチでは、

「見てみるべえ、でっかい魚が跳ねただよ。これがハワイっちゅうもんかあ、すんげえなあ」

「なーに言うとするだあ。日本の海にも跳ねる魚ぐらいいるべえ。鯉も跳ねるっぺよお」

「んだけどよお、日本の魚を遥かに凌ぐでかさだあ。わしらよりもでけえんでねえか？」

「んお？ よおく見てみつと、ありやあ人なんでねえか？ 手えみたいなもんが見えたべえ」

「そりやあ人魚だべ。さすがハワイ、人魚も居るなんてすんげえなあ」
「これがハワイっちゅうもんなんだなあ」

その日、ワイキキビーチでは人魚らしき生物の目撃例が相次いだという。

第九十五話

旅行と言えば何か……。そう、ショッピングである。

旅行に行った先でショッピングを楽しむ者などまずいないだろう。少なくとも、海外旅行で記念品を何も買わない者はまずいないはずである。普通は、何か買って、地元の友達に見せびらかして自慢するものである。ただし、国内旅行では下手な物をお土産にしてはいけない。今の時代、静岡県のようなぎパイが東京駅で売られているなんてことはザラにあるのだ。そんなことはともかく、海外のお土産でハズレを引くなんてことは滅多にないだろう。ハリボーグミは日本でも普通に売られているが……。とにかく、旅行先でショッピングを楽しむことは、ほぼ確定要素なのである。

そんなわけで、範人と妖夢はアラモアナセンターに来ていた。

アラモアナセンターはハワイ諸島最大のショッピングモールである。言葉で表すなら、(日本のショッピングモールに比べて)とにかくでかくて広い。290以上の店があり、とりあえず迷わないようにしなければならない。

店の内容は日本とはあまり変わらず、ファッション、ドラッグストア、ギフト、スポーツ、トイ、ブックストアなど様々。もちろん、ゲームセンターもあり、日本でお馴染みのムシキングやマリオカートなどが普通に置いてある。

今回、範人が狙っているのはお土産のお菓子である。幻想郷は他とは断絶されているような世界であるため、あまり考える必要がないのが良いところである。

「これなんてどうですか?」

「ポテトチップスか。良いセンスしてるな」

妖夢が手に取ったのはポテトチップス“マウイオニオン味”。マウイオニオンとは、その名の通りマウイ島で栽培されている玉ねぎのことである。玉ねぎ味のポテトチップスなんて珍しいかもしれないが、トマト味のプリッツも出ているため、別に気にすることはないだろう。

このポテトチップスは日本のポテトチップスに比べて厚く、サクサクとザクザクが混じったような食感が特徴だ。玉ねぎの味は舌に乗せた瞬間からするが、このポテトチップスの本当の美味しさは噛みながら。サクサクザクザクとした気持ちの良い食感に、マウイオニオンの甘みと塩のしょっぱさが良い仕事をする。固揚げポテトのように、噛めば噛むほど味わいがあって美味しい。

幽々子はすぐに飲み込んでしまいそうで、あまり良くないかもしれないが、ゆつくりと食べる人——例えば、パチュリーにとっては良いお土産かもしれない。

「とりあえず、かごに入れておこうか。定番っちゃあ定番だし、嫌いな人はいないだろうし」

「そうですね。でも、白狼天狗の皆さんや橙さんは間違いなくダメですよね」

「そうだな。そいつら用のも探してみるか」

範人はそう言いながらカートのかごにポテトチップスを入れ、ケモミミ組用のお土産を探し始める。玉ねぎは多くの生物にとって毒なのである。

しばらくして、範人がチョイスしたのはチートス”チーズ味”。チートス自体は日本でも売られているが、幻想郷ではスナック菓子自体が珍しいだろうという算段である。

日本のスナックでも普通に売られていることのあるチートスは、サクサクと言うよりはサクサクと表す方が正しいように感じるパフの軽い食感と菓子自体の軽さ、細長い形が特徴のスナック菓子である。実は、アメリカと日本とは味が違う（気がする）。アメリカの方が濃厚な（気がする）味わいなのだ。チーズ味はチーズの匂いが強く、若干（と言うかかなり）臭いが、その濃厚なチーズ味は文句無しに美味しい（チーズ嫌いな人はつらいかもしれないが）。ちなみに、範人はアメリカの方が好きである。

範人はチートス”チーズ味”をかごに入れ、”フレーミン・ホット味”と”ワイルド・ハバネロ味”を手に取った。

「自分用にも買っとくかな……」

甘い物だけでなく辛い物も好き（と言うか、あまり好き嫌いしない）な範人がどちらを買おうかと迷っていると、

「なら、私の分も買ってください」

「……太るぞ？」

「大丈夫ですよ。太るほどは食べませんから」

「ならいいんだが……」

結果的に、両方とも買うことになる範人だった。

ちなみに、チートス”ワイルド・ハバネロ味”と”フレーミン・ホット味”はかなり辛い。”フレーミン・ホット味”に至っては、なんとかギリギリ食べられるというレベルで辛い。しかし、案外パクパクと食われてしまうのは、チートスの軽さと美味さ故だろう。

さすがに、お土産がスナック菓子ばかりではダメだろう。そう思った範人は、ゼリーの素を適当に数種類、かごに入れた。

ゼリーの素と言えばゼラチン。そう思う人が多いだろう。ゼラチンがお土産なんて……と引く人もいるかもしれないが、安心してほしい。幻想郷ではゼリーという食べ物はまだ珍しく、また、このゼリーの素にはたくさん味があるのだ。それも、数十種類。下手すれば、百種類を超えるかもしれない。その種類故に、商品の棚まるまる1つがこのゼリーの素で埋め尽くされるなんてことはザラにある。しかし、このゼリーの素のすごいところは種類だけではない。味も充分美味しいのだ。ライム味が特に美味しい（と筆者は思う）。更に、違う味を混ぜて新しい味を開発なんてことができなくもない（その新しい味が美味なのか不味なのかは組み合わせにもよるが）。

「このゼリー、牛乳で固めたら美味しそうですね」

「いや、それはやめといた方が良いぞ」

「なんでですか？」

「味によっちゃあ牛乳が固まらず分離しちゃうからな。見た目が美味しそうじゃなくなる。まあ、味をミスしなければ、分離しても普通に美味しいけどな」

ライム味で固まることなく分離してしまった牛乳を思い出しながら言う範人。ちなみに、分離してもライム味は美味かった。

「さて、粗方選び終わったし、他のはまた別の店で買うか」

「そうしましょう。ところで、次はどうしますか？」

「とりあえず、アクセサリーを見ていこうと思ってる。せっかくハワイに来たんだから、ハワイらしいアクセサリーをな」

「ほうほう……つまり、範人は可愛らしい物が欲しいと……」

「可愛らしいは大分違うかな……」

範人は苦笑した。

◇

アクセサリーショップに着いた範人が真っ先に向かったのは首飾りのコーナーだった。

着る服にあまり拘らない範人だが、拘りを持っているものはある。それは、アミュレットやペンダント、ネックレスなどの首飾りである。普段、範人が身につけているネックレスは、形態変化させた状態の”覇剛剣アルゴス”なのだが、これは範人が形態変化した状態のデザインを気に入っているからである。

しかし、最近になって問題が発生した。いや、最近と言うよりは、最初からわかりきっていたかもしれないことなのだが……。

ネックレスでは取り外しに手間取り、奇襲に対応できない。

範人がこれに気づいたのは今年の春にミッションへ行った時だった。

潜入した場所はアンブレラの元実験施設だった巨大な山荘。ミッションの内容は、そこに残されている研究データの回収及び廃棄だった。

そのミッションでは、生物兵器の研究という国家機密レベルの情報を扱っている。そのため、政府に直接つながっているわけではない軍人を投入することは憚はばかられたのだ。そこで、範人たちエージェントに白羽の矢が立った。

順調に最深部までたどり着いた範人たちだったが、データ回収後に調べ尽くさずに退却しようとしたのがまずかった。

廃棄場に送られたハンターたちが処理されずに生きており、廃棄場に潜んでいたことに気づかなかったのだ。

そして、出口目前。一頭のハンターが範人たちに追いつき、後ろから首刈りをしようとした。狙いは、一番後ろを歩いていた女性隊員。その時、ハンターの存在にギリギリで気づいた範人は女性隊員とハンターの間割って入り、剣でガードしようとした。しかし、剣をネックレスにしていたのがまずかった。

ネックレスを外すのが間に合わず、範人の首がハンターの鋭い爪に刈り取られた。

完全に切断された首からは、血が噴水のように噴き出し、周りの隊員や壁に降りかかった。

数秒後、ハンターは、復活した範人によって倒されたのだが、この経験は範人に重要なことを学ばせた。

——武器はすぐ使えるようにしておけ！

この経験から、範人は新しいネックレスを買うことに決めたのだった。アルゴスは近々腕輪に改造するつもりである。

妖夢はハイビスカスの形をイメージしたであろうネックレスを指し示す。

「これなんてどうですか？ 可愛いですよ」

「いや、可愛い物を探しているわけではないんだが……。それに、似合わないだろうし……」

「そうですか？ 可愛い範人に似合うと思ったんですけど」

「俺のどこに可愛い要素があるかわからん……」

困惑した表情をする範人。

一方の妖夢は寝顔のことを話そうと思ったが、それに色んな妄想を組み合わせてオカズにしていることや勝手にキスしていることなど、余分なことまで話しそうだったためやめておいた。

次に妖夢が見つけた物は髑髏かたどを象ったネックレスだった。ちよつと悪そうなイメージを持たせるリアルな髑髏は、かつこいい範人にぴったりである。

しかし、

「被りますね、これ」

アルゴスのデザインが髑髏のようなデザインのため、被りは避けよ

うと、背を向ける妖夢だった。

「お、これ良いじゃん」

範人が手に取ったのはゲッコーを象ったネックレスだった。クリスタルに金属製のゲッコーが巻きついているというデザインであり、なかなかイカしている。

ゲッコーとはヤモリのことである。漢字で『家守』と書くように、ヤモリはハワイでも守り神と言われている。ちなみに、ヤモリはハワイ語で『Mo^モo^オo^オ a^アl^ラa^ア』と言う。

結果、範人はゲッコーのネックレスを買ったのだった。

その後、範人と妖夢はゲームセンターで遊んでから帰った。

ところで、アメリカのゲームセンターではゲームのスコアに応じて景品交換券がもらえるのだが……。

次の日、とんでもないスコアを叩き出して大量の景品をゲットした金髪の男というニュースがアメリカ中のゲーマーの間に広まったのだが、範人がそのニュースを知ることにはなかった。

第九十六話 鯨を見に行こう

洋上に浮かぶクルーザー。範人と妖夢はその甲板にいた。

2人——いや、乗客全員の目的はホエールウオッチング。2人の周りにはスーツやアロハシャツなど様々な格好の人がいる。こういったクルーズは案外自由なのだ。

「さてさて、鯨さんはどこかな〜?」

範人は双眼鏡で水平線を見渡す。しかし、360度見渡しても鯨らしい影も潮も見当たらない。

範人は妖夢の方に振り向き、首を横に振った。

妖夢は残念そうな表情をするが、不満そうな様子は見せず、

「なら、中に行きましょう。中も退屈はしなさそうですよ」

見つからない時、鯨はとことん見つからない。時間を置いてからまた見に来ようということで、範人は船内に入るのだった。

◇

こういったクルーズでは、バイキング食べ放題などのサービスがセットで付いてくるのがよくある。

今回のクルーズも例外ではなく、食べ放題が付いていた。

船内の大部屋には数々の料理が並べられている。あくまでホエールウオッチングの付録のようなもののため、そこまで高級な食材はないが、それでもロブスター（日本に比べて、ハワイのロブスターは安価なのだ）やローストチキンなど、それなりの料理が用意されている。

しかし、範人が取りに向かったのは、ロブスターでもチキンでもなく、マッシュポテトだった。これには、妖夢も不思議そうな顔をする。「なんでそんなの取るんですか? こっちの海老の方が美味しそうですよ」

「ん……まあ、確かにそう見えるかもしれないが、一般的な人の舌で考えると、こっちの方が美味いんだよ。ほとんどの奴は豪勢な見た目に釣られて、そっち取るけどさ」

「そうなんですか。見かけによらないのは人だけじゃないんですね」

「そうだな」

そう言つて、範人は爽やかな笑みを浮かべた。

少しして、範人と妖夢はテーブルに着いた。範人の皿の上にはマツシユポテトとローストチキン、シイラのフライが、妖夢の皿の上にはポイルドロブスターとウニクリームパスタ、少しのマツシユポテトが乗っている。

日本以外の国では「いただきます」の文化があることが少ないため、範人と妖夢は声に出さず、手を合わせて、料理を口に運んだ。

「あ、美味しい……」

と、妖夢が意外そうな表情をする。

「だろ？ 俺も最初食つた時は驚いた。なんでこんなに美味しいのかなあ、つて」

「お肉の旨味でしょうか？ 馬鈴薯（ジャガイモのこと）を茹でて潰して、調味料と混ぜただけみたいなのに、お肉の味がします。あと、なにかフワツとしています」

「正解。このマツシユポテトは、ハンバーグやステーキを焼いた時に出た肉汁を混ぜているんだ。ここで扱っている肉はどれもそこそこ良い肉だし、同じ料理から出る肉汁を基本的に使っているから、変に味が混ざることもない。フワツとしてるのは、しっかりと混ぜてあるからだな」

範人はどこか自慢げに話す。

滅多に見せない鼻高な様子に、妖夢は「珍しいものを見た」と、カメラのシャッターを切った。

と、

「ほく、それなら俺も食つてみるかね」

不意に背後から声をかけられる。

範人が驚いて振り向くと、そこには、

「よう。久しぶりじゃねーか、ハント」

「げっ!? リック……」

「なんでえ、そんな嫌そうな顔しやがんだ？ 俺とお前の仲じゃねえか。……あ、ヨウムさんだっけ？ 久しぶり」

「お久しぶりですリックさん」

リック。

アメリカ政府の元で働くエージェントの専属ドライバーの一人。専属ドライバーとしては珍しく、荒い運転を好むが、実際は普通の運転もできる(らしい)。本人は「最高にクールなドライブ」などと抜かしているが、乗せられている方は堪ったもんじやない。範人が政府の下に入った時から、車に乗せることが多く、範人とはプライベートでも多少の付き合いがあった。

本来なら、アメリカ本土にいるはずなのだが……、

「なんでハワイに？」

範人が訊ねる。

リックは顎を撫でながら、

「休暇利用して遊びに来てんだ。本土むこうの方は寒いからよ。ワイハーでアツアツ季節無視ってわけ」

「ほー、お相手はいるのか？」

「ああ、いるぜ。嫁無し、彼女無し、女との関わりも泣グける状態イトな俺は、ダチと一緒に野郎2人旅よ」

「兄貴の口癖をパクんな」

範人はリックを睨みつける。

しかし、リックは全く意に介さない様子だ。

「で、お前の方はどうなんだ？ リゾート地で夫婦水入らずの時間か？」

「まだ夫婦じゃねーけど、そんなとこだな。別荘あるから格安でお泊まり」

「かー、羨ましいいねえ。世界的リゾート地で、毎晩毎晩ギシギシパンパンアンアンドピュドピュしてらんだろ。俺も相手が欲しいぜ」

「その擬音語がナニを指しているかは言わんが、毎晩じゃねーよボケ」

「んだとお？ お前、細胞分裂が速えからぜt——」

「その辺しておけ馬鹿野郎」

声と同時にリックが前につんのめる。

頭をさすりながら振り返ったリックの後ろにいたのは、

「よう、久しぶりだな範人」

「え？ ビリーさん？」

「おう。……にしても、こいつと言葉が被るのは嫌だな。俺まで変態になった気がする」

アロハシャツを着た筋肉隆々の男——ビリー・コーエンは、丸めたパンフレットでリックを突きながら言った。

「それにしても驚いた。まさか、お前がハワイに来てるなんてな」

「いや、それはこっちの台詞なんだけど……」

「そうか？ 俺だって旅行くらいするぞ」

「そうじゃなくて、なんでリックと一緒にいるかだよ」

「ん？ ああ。南米に行った時に知り合った。カーニバルを観に行った時だ」

「すごい偶然だな」

「サンバ衣装の女見て鼻血垂らしながら叫んでる奴がいれば、そりゃあ捕まえるだろう」

「確かに……」

サンバ用の際どい衣装を着た美女を見て、興奮のあまりに鼻血垂らしながら歓喜の叫びをあげるリックという光景が、容易に想像できてしまう範人だった。

「まあ、俺も踊りたかったけどな。久しぶりにハッスルした」

サンバ衣装を着て踊るビリーなどというおぞましい想像をしてしまい、範人はそれを慌てて振り払った。

ビリー・コーエン。

海兵時代に民間人23人の虐殺事件を起こしたことで、処刑のために基地へ移送される途中、装甲車が何者かに襲撃されたことで脱走。その後、S・T・A・R・Sのメンバー——レベッカ・チェンバースと行動を共にし、最後はアンブレラの施設から脱出した。レベッカの報告書では、ゾンビ犬に襲われて死亡したことになっていたが、実際は生きていた。

範人と出会ったのは、範人が政府を離れる半年前。素性を隠して生活していた彼だったが、同じバイオハザード経験者ということから意気投合した。

本来なら、範人はビリーを捕まえるべきだったが、ビリーの話から冤罪の臭いを感じ取った範人は何もしなかった。

「あのー、私を蚊帳の外に追いやるのはやめてもらえないでしょうか？」

昔話で盛り上がっている範人たちに、妖夢のジト目が向けられた。

「あー、悪いな。懐かしくてつい」

「まだそんな歳じゃないでしょうが……」

「あはは……ごめん」

「まあ、いいでしょう。話があるのはそちらの方だけです」

そう言って、妖夢はビリーの方を見る。

「なんで俺に？」

「範人の昔話を聞きたいんです。友達になら、範人もいくらか話しているかと」

「なるほどな。本人に聞いたら、話してくれないこともあると」

「そういうことです」

頷く妖夢に、リックは不思議そうな表情を浮かべる。

「なあ、ヨウムさん。何で俺には聞かないんだ？」

すると、妖夢は超がつくほど嫌そうな顔で、

「だって、貴方に聞いても、まともな話出来なさそうですから。すぐに下ネタに飛びますし。それに、私、貴方嫌いですし」

妖夢の言葉はリックの心に釘のごとく突き刺さり、打ち砕いた。

リックが凍りついたように動かなくなる。

その間にも、妖夢とビリーは別のテーブルで話し合いを始めていた。

範人がリックの肩を叩くと、リックはハッと我に返り、

「お、女の子にストレートに嫌いって言われると、傷つくんだな……」

「俺言われたことねーからわかんねーわ」

「ちくしょー!」

リックは絶叫した。

◇

「ううっ……俺が何をしたって言うんだ……」

「初対面でも下ネタぶちかましてたよな」

「アボウ!?？」

範人はリックを落ち着かせるため、甲板に出てきていた。ちなみに、料理は急いで食べたため、あまり味わえなかった。

リックはひとしきり言葉をぶちまけると、落ち着いた様子で、

「これからは、発言に気をつけることにするぜ……」

「お、おう……そうしろ……」

範人は若干ビビリながら言葉を返した。

ふと、リックは思い出したように、

「そういや、ヨウムさんとエレナさんって似てるよな。お前さ、もしかして、代わりとか思ってたねえか？」

「なっ!?？」 代わりなんているわけねーだろ！ 妖夢とエレナは違う！ そもそも、俺とエレナはそんなんじゃない……」

範人は一瞬キレたが、その言葉の最後は弱々しかった。

「だいたい、俺とエレナは——」

「同居人、だろう？」

「……ああ、そうだ。2人は違う、人間だ……」

範人は顔を下に向け、寂しげに言った。

範人の声をすぐ隣で聞いていたリックにも、その言葉が誰に向けられたものか分からなかった。

リックはどこか妥協したように、

「そうか……それなら、いいんだ……」

と、言った。

「でも、あいつはお前とそういう関係になりた——」

「範人おー！」

「へっ? ——あだっ!」

妖夢に体当たりされ、範人は船は手すりと彼女のサンドイッチになった。

「なんで昔のことを教えてくれなかったんですかー! ビリーさんから聞きましたよ! 昔の範人は髪が長くて女の子みたいだったって! なんてそんなに素晴らしいこと教えてくれなかったんですかー!」

！」

「いや……だって、恥ずかしい……」

「写真あつたら後でください！」

「ええー……」

妖夢の頼みに、範人は嫌そうな顔をする。

そんな2人のやり取りを見ていたリックは、

「つたく、こんなところでいちやつくんじゃねーよ……」

と、リックが海面に目を遣ると、

「おい！ 鯨だぞ！ しかも白鯨だ！」

リックが叫ぶ。

しかし、その声が聞こえている様子はなく、2人はなおも「見せてください！ わたしのこと好きにしていいいですから！」「だが断る！」といちやついていた。

「こいつら……」

2人の様子を見て、リックは満足気に呟いた。

◇

この日の夜、妖夢が別荘を漁った結果、範人の幼い頃の写真が大量に見つかってしまった。

それらを見て目を輝かせる妖夢に、範人は深々と嘆息したのだった。

第九十七話

範人と妖夢がハワイに来て一週間が経とうがしていた頃。幻想郷に帰る前日の夕方のことだった。

範人に一本の電話がかかってきた。

「はい、もしもし」

『おう、俺俺。俺だよ』

「オレオレ詐欺ですか？　ウチに子供はまだいませんよ」

範人は電話を切ろうとする。

「待て待て待て！　俺だよ！　リックだよ！」

「……わかってる。冗談だ」

「お前の冗談は冗談に聞こえねえんだよ……。ぶん殴るとか言う時なんて特に」

「アレは本気だ」

「本気なのかよ!?!」

「で、用件はなんだ？」

「……ああ、実はだな」

リックは徐ろおもむに口を開いた。

『4年くらい前か？　俺がお前に良い女知っているか訊いたことあっただろ。その時、ウエスカーの名前が出てきたじゃねーか。俺にババア趣味は無えから、そんな時は聞き流してたけどさ。まあ、お前の話から、老いを感じさせない美しさってのがはつきり伝わってきたもんで、逃げ道として特徴とか一応覚えていたわけよ』

ウエスカーとはカノン・ウエスカーのことである。範人が幼い頃は、ゴートレック生物研究所に勤めていた。

「ほう……で？」

『で？　ってお前……。まあ、いいや。最近、そのウエスカーの特徴に完全に当てはまる女が目撃されたんだよ』

「！……どこでだ!?!」

『家族の手がかりが手に入るかもしれないって興奮するのはわかるが落ち着け。クールダウンだ。とりあえず、目撃されたのはロシア』

「もつと詳しい場所はわからないのか？」

『はつきりとわかっているわけじゃねえが、モスクワの辺りだ。向こうロシアの政府にいるダチから聞いた』

「……お前はなんだかんだ言って人脈広いよな。ありがとう」

『いいってことよ。俺も、今さつき偶然思い出したただだからよ。じゃーな。俺はパターンゴルフ行ってくる』

「ああ……」

向こう側で電話が切られたことを確認し、範人は受話器を置いた。

厳密に言えば、範人とカノンは家族ではない。カノンは研究所に勤めていただけであり、来客用の別館に寝泊まりしていたとしても、範人との間に血の繋がりなど全くないのだ。しかし、カノンは範人達兄弟を、まるで自分の子供のようにかわいがっていた。そのため、範人とカノンの間には、家族にも似た絆があったのだ。

幼少時を思い出して懐かしむ範人だったが、やがて首を横に振った。

「会いに行くわけにはいかないな……」

——あいつが間違えるまでは、自由にしてやってくれ。アンブレラの最後の良心が消えるまでは。

父親の言葉を思い出しながら、範人は溜息を吐く。

と、そこへ妖夢がやってきた。

「範人範人！ 砂浜に行きましょう！」

そう言いながら、妖夢は範人のシャツの裾を引っ張る。

「引っ張るなよ。伸びるだろ」

「今は急いでください！ 日が沈んじやいます！」

「はいはい……」

妖夢に手を引かれ、範人は夕方のビーチに向かう。

この時、範人は既に選択を間違えていた。

◇

夕方のビーチは綺麗だった。

沈もうとする太陽が空を朱く染め、オレンジと青を混ぜたような色になった海に、その姿を映し出していた。

別荘に来るたびに見ていた景色のはずなのに、久しぶりに来たからだろう。今の範人には、その景色がとても神秘的なものに思えた。

人間の欲望が渦巻く穢^{けが}れた世界で、久しぶりに美しいものを見たような気がした。

「ねえ、範人……」

妖夢が範人の名を呼んで、シャツの袖を引っ張った。

範人は振り返る。

チユ……

頬に柔らかい感触。

一瞬、範人には何が起きたのかわからなかった。

理解不能の4文字に頭の中を埋め尽くされる。

「ふふ……」

妖夢の笑い声が聞こえたことで、範人の頭の中の理解不能が剥がれ落ち、みるみるうちに顔が赤くなっていく。

名前はわからないが、小中学生たちの間では肩を叩いて振り向かせ、頬を指でぶにと突く遊びがよく流行る。

範人が妖夢にされたのはそれに近いものである。しかし、衝撃のレベルがそれとは段違いだった。

「よ、よよよ妖夢?!? 何してくれちゃってんの?!?」

「え、キスですよ?」

「そ、それはそうだが……。不意打ちすぎるだろ……」

範人は内心ドキドキしながら言った。

「やっぱり範人さんはウブですね。いじめたくなっちゃいます」

「どSか!」

「はい。範人限定で」

「ぬう……」

あまりにも清々しい笑顔で言われ、範人は一瞬たじろぐ。

しかし、すぐに覚悟を決め、

「お返しだ」

「えっ?」

ズキユウウンと音がするようなキスだった。

範人の唇と妖夢の唇が重なり、ディープではないものの熱いキスを交わす。

どちらからだったのかはわからない。気がつけば、互いに舌を絡めあい、ディープなキスをしていた。

どのくらい続いていたのかわからないディープキスが終わり、2人は唇を離す。

日が沈みきっていないことから考えると、あまり長い時間ではなかったのだろう。

しかし、その短い時間でも、2人の理性は溶けてしまっていた。

「範人……準備……できちやいました……」

「はっ……っ?」

範人の間抜けな声に答えるが如く、妖夢は片足を上げ、範人にスカートの中を見せつけた。

「え……っ? ……ええっ?」

履いてない。

「ごめんなさい。最初から……そのつもりでした……」

妖夢は、範人に女の子特有のソレを見せつけながら言った。

範人の視線は、最初こそ妖夢のソレに注がれていたが、範人はすぐに顔を赤くして目をそらした。

「恥ずかしがらないでくださいよお……。私まで恥ずかしくなるじゃないですかあ……。そもそも、今まで何度もここに入れてきたじゃないですかあ……」

妖夢に泣きそうな顔で言われ、範人は難しい顔でビーチを見渡した。

もちろん、このビーチはゴートレック家のプライベートビーチであり、他の人なんているはずがない。そもそも、沿岸から侵入するにはビーチの両側にある岩山の影響で非常に入り辛い。

「仕方ないなあ……」

範人は努めて仕方ない風を装いながら、妖夢に近づいた。

「誰かに見られるかもしれないのに、こんなところでやりたいなんて、妖夢は変態だな」

「そ、そんなことは——」

言い終わらないうちに、範人の唇が妖夢の唇をふさいだ。さつきよりも熱く激しく、互いを求め合うキスをした。

辺りに卑猥な水音が響くが、それを盗み聞きする者は誰一人としていない。ただ、波の音だけが、その卑猥な音を掻き消すように響いていた。

唇を離せば、もうそこに自然以外の音はなく、人類の知恵に沈黙が訪れる。

範人と妖夢は岩場まで移動し、妖夢はそこで改めて服をはだけさせ、岩壁に手をつけて股を開いた。

範人もまた、ジッパーを下ろし、股間についた（標準よりも小さな）兵器を露出させた。

「ふわあ……範人の……もうこんなに……」

「うるせえ。妖夢だつてもうぐしよぐしよじやないか」

「だって……範人のキスがエッチすぎるから……」

「それなら俺は妖夢がエロすぎるからだな」

2人は控えめに笑う。

と、範人は真剣な顔になり、

「妖夢」

「はい」

「愛してる。他の誰でもなく、この世で、妖夢だけを」

この世で……この世界だけで。

範人の言葉に嘘はないと、妖夢は思った。

絶望を与えてくれた世界に愛せるものなどあるはずがないのだから。

妖夢は範人に笑顔を向け、

「私もです。私も範人を愛しています。ですから、来て……ください。

私のナカに、来て……」

太陽が沈み、夜の闇が訪れる。

何も見えない闇の中、聞こえていたのは波の音。夜目が利かない人間にとって恐ろしいはずの夜なのに、2人が恐れを抱かなかつたのは、互いの温もりをすぐそばに感じていたからだろう。

◇

次の日の正午頃。

範人と妖夢は幻想郷に帰った。

たった1つだけ間違えた世界。その間違いが時の流れと共に大きな波になり、いずれ世界の脅威となることを、この時の範人はまだ知らない。

第九十八話

それは初秋、ツクツクボウシがまだ鳴いている頃のことだった。

「いよいよですね……」

「ああ……」

緑髪の少女の言葉に、ババ——ゲフンゲフン、奇抜な格好をしたナイスバデーな女性が応える。

「まだ見ぬ土地なんて、ワクワクしますね。まるでファンタジーRPGみたいです」

「おお？ 早苗って、そっちで興奮するクチだったっけ？ ダンガムとか、イヴァの方は好きじゃなかったっけ？」

「確かに、ロボットが一番好きですが、ファンタジーも普通に好きですよ。最近の作品だと——」

「いや、そういう説明はいらないから」

「そうですか（・ω・）」

幼女にすっぱりと断られ、少女はしよんぼりとした顔になる。

「うう……やっぱり、こういう時に話を聞いてくれるのは冷^{れいじ}仁君ぐらいです」

と、少女は、ひたすら刀の手入れをしている青年の方を見た。

しばらくして、青年は少女の視線に気づき、

「……俺の顔に何かついていないのか？」

「そもそも、話すら聞いてないしっ！」

少女は頭を押さえる。

「まあ、俺もファンタジーは普通に好きだがな……」

青年が呟いた。

「聞いてんじやないですかー！」

「面倒なのは嫌いだ」

「め、面倒!?？」

「そもそも、パンデミックもののアクションホラーとか、スタイリッシュアクションの方が好きだから」

「めっちゃCAPCOM!?？」

「と言うよりも、ファンタジーなんてむしろ日常……」

「……あー、確かに……」

青年の言葉に、金髪の少女が頷く。

「私ら神だからねえ。信仰ないけど」

女性はそう言つてカツカツカと笑う。

そんな女性に青年は呆れた様子で、

「よくもそんなに気楽でいられるな。信仰がなくなったら、あんたらは消えるんだが？」

「それなら、私らは消えないさ」

「は？」

「だって、あんたが信仰をくれるからね」

「そうか……」

青年は努めてつまらなそうに返したが、その口元はニヤけていた。

それに気づいた少女は嬉しそうにしながら、

「まあ、こつちでの信仰は薄れてきちゃったからね。私たちの力も自然と弱くなっちゃったよ。近頃は、『神様なんて信じない』なんて言ってる子供も多いから。でも、冷仁1人だけでも信じてくれる。あんたがいるから、私たちは存在できるんだよ。それだけでも、充分なのに、場所まで提案してくれて……。ありがとう」

頭を下げる少女から、青年は目をそらす。

「別に、俺はあんたらに消えてほしくないだけだ」

「……………もおく、優しいんだから」

「あんたらが消えたら、早苗が悲しむだろ」

「このく、ツンデレめ」

「うるさい黙れ」

ニヤニヤしながら絡んでくる少女を、青年はテキトーにあしらいながら刀の手入れを続け、少女は不満そうな表情を浮かべて境内の落ち葉を片付ける。

そんな情景を肴に、女性は1人酒を飲んでいた。

◇

「天魔様にご報告します。外来人たちが山頂から出ていく気配は依然

としてありません。こちらの警告に対する反応がないことを見ると、こちらの命令に従う可能性もないと思われれます」

「うむ、ご苦労だった」

「はい。しかし、まだ問題があります。今回の件で、敵意を抱いている天狗は少なくありません。天魔様の対応に不満を抱き、怒りの矛先を天魔様に向ける者も出てくると考えられます」

「そうか……。そうだろうな。しかし、向こうが手を出して来ないのなら、こちらからも手を出すわけにはいかん。攻撃はせず、警告を続けるように。くれぐれも手は出さな」

「はっ！」

白狼天狗は天魔に頭を下げると、部屋から出て行った。

天魔は机の上に積み上げられた書類を見て溜息を吐き、窓から山頂を見つめる。

部下たちの気持ちもわかる。この山は大部分が我々天狗の領地であり、長きに渡る戦いの末に勝ち取ってきたものだ。そんな領地に、外の者が勝手に入ってきた。怒りを覚えないはずがない。

妖怪たち——特に天狗は、人間を見下している節が強い。人間ならば、何も考えず殺しても構わないと考えている者も多い。

最近、山頂に社ごと引越してきたのは人間だ。追い出すのが最善であることはわかつている。だが、忘れてはならない。山頂に越してきたのが神社であり、そこには神もいることを。

「本当……。どうすれば良いのか……」

その天魔の呟きに、答える者はいなかった。

◇

その日の夕方、天狗の里の酒場にて。

「まったく……。天魔様も優しすぎる。何故、人間に対してそこまで気を使う必要がある？ 邪魔なら追い出す。応じないなら殺す。それでいいじゃないか」

「それができれば苦労しないんだけどな。むやみに人間を殺すわけにはいかないらしい」

「何でえ？」

「スキマ妖怪との話し合いで決まっているらしい。逆らえば、スキマ妖怪との戦いになるとか」

「そんなの大丈夫だろ。天魔様がスキマ妖怪なんぞに負けるはずがないんだからな」

白狼天狗は当然のように答えた。

「バカを言うな。スキマ妖怪側には、あの博麗の巫女がいるんだぞ」

「……そのくらい平気さ。天魔様ならな」

一瞬ビクツとしたが、白狼天狗は自信ありげに答えた。

「それだけじゃない。この前は味方だったけど、あの白いのも向こう側だ。勝てると思うか？」

「……まあ、大丈夫なんじゃね。ハハハ………マジかよ……」

白狼天狗は答えたが、その顔には冷や汗が流れていた。

と、

「おお、お前もそう思うか？」

背後から太い声。

白狼天狗が振り向くと、そこには1人の烏天狗の大男がいた。

「あ、あなたは……」

「じゃ、ジャガさん」

八尺はあろうかというその大男は、ビクビクした様子の2人を見下ろすと、ニヤリと笑い、

「いかにも、俺は大天狗の邪我^{じゃが}能登^{あのと}。俺もお前の意見と同じ、『天魔様は緩すぎる』派の天狗だ。俺は先代の天魔様の頃から大天狗をしているが、あんなに緩い天魔様は文献でも見たことがない。優しすぎる。はつきり言つて、あんなの天魔様じゃない。法は俺たち天狗が作る。それが天狗じゃなかったのか？ 今の天魔様——いや、あいつは天狗の面汚しだ！」

能登は一気に言い切ると、器に注がれた酒をぐびぐびと飲み干した。

そして、ダルそうに机に上半身を預ける。

「もう命令なんて聞いてられないんだよ。天狗の名誉にかけて、もうこれ以上先延ばしはできねえんだ。早く、取り戻さねえと……」

能登は泣きそうな声で言った。

白狼天狗は驚いた様子で、

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ……大丈夫だ。申し訳ないな……。ダメだよな、こんなんじや……。俺は大天狗だつてのに……」

「そんなことないです！」

白狼天狗が叫んだ。

「ジャガさんはいつだって我々天狗のことを考えて、戦いでも必ず先頭に立って、俺たちを引っ張ってくれたじゃないですか！ 悪いのは人間です！ あなたが責任を感じる必要なんてありません！」

「そう言われても、俺じゃあ、天魔様に頭が上がりませんよ……」

そう言う能登は本当に申し訳なさそうだった。

どんなに身体が大きくても、気分が落ち込んでいる時は小さく見えるのだということを、白狼天狗は初めて知った。

「とりあえず、俺は今夜、仲間を集めて戦いに行くつもりだ。命令には背くが、このままではダメだと思う。よかったら、お前らも来てくれ……」

能登はテーブルに代金を置くと、出入り口に向かってとぼとぼと歩き出した。

その姿に元気はなかった。しかし、力強い意志が溢れ出していた。

◇

その夜、神社に続く山道にて。

「来てくれたことに感謝する。同志たちよ」

能登は集まった天狗たちの前に立ち、頭を下げた。

集まった天狗の数は百余。その誰しもが、迷いの無い顔で能登を見ている。

「今夜、我々は山頂に侵入した不屈き者を追い出す。敵の戦力は不明だが、数の利はこちらにある。勝機は充分。負け戦などと思うな。恐れることなく戦え！」

『はっ！』

「うるさい！ バレるだろう！」

『はっ……』

「気合いが足りーん！」

『はっ！』

「うるさい！ ……けど、まあいいか。行くぞ！」

『ウエーイ！（OWO）』

……何かおかしい返事が聞こえた気がするが、そんな感じで戦いに向かう一行だった。

しばらくして、

「むっ……！ 止まれ！」

能登の言葉で、全隊が停止した。

隊が止まった場所は神社の鳥居の前だった。

鳥居は境界線の意味も持つ。鳥居の向こうは別世界。完全なアウエーであり、何が起きてもおかしくはない。

しかし、能登が止まった理由はそこではない。

鳥居の陰に隠れている何者かの気配が進行を妨げていた。

「そこにいるのは誰だ？ 姿を見せろ！」

能登は鳥居の陰に向かって言った。

すると、左目に眼帯をつけた金髪の青年が鳥居の陰から現れた。

青年の左手には刀の鞘が握られており、まだ刀が抜かれてないにもかかわらず、青年から発せられる気には能登ですら身震いするほどの迫力があつた。

「うるさい。ウチの者が起きる」

青年は右目を瞑り、鬱陶しそうにしている。

その時、白狼天狗の1人が青年に飛びかかろうとした。しかし、彼は能登によって押さえつけられる。

「な、何するんですか？ 今、絶好の機会だったでしょう」

「バカ野郎！ 今行ったら、間違いなく殺られてたぞ！ しつかり見てみる！」

「へえ……？？」

押さえつけられた白狼天狗は不思議に思いながら、青年を観察する。

目を閉じているにもかかわらず、その姿勢には一切の無駄がない。そして、右手はいつの間にか刀の柄を握っており、その身体から鋭いすぎて気づけない程の殺気が出ていた。

「ひっ……………」

白狼天狗は恐怖で身が竦み、動けなくなってしまう。

その様子を見ていた能登は、

「名は？」

訊ねた。

「旅行冷仁」

青年は不愉快そうに答える。

「そうか…………。では、旅行とやら」

「何だ？」

「退け」

底冷えするような声。

並大抵の人間なら失神。妖怪ですら漏らす程の威嚇。

しかし、冷仁には全く効かなかった。

「…………何のつもりだ？」

「退去願いだ。聞き入れてくれぬのなら、ここで全員殺す」

「そうか。じゃあ、殺すといい」

ギーン！

鋭い金属音。

あまりの音に白狼天狗たちは耳を押さえ、目を閉じた。

数秒後、白狼天狗たちが恐る恐る目を開けると、そこでは信じられないことが起こっていた。

「どうした？」

「ぐぬぬ……………」

冷仁と名乗った青年が片手持ちの刀一本で、能登の両手剣を受け止めていたのだ。

能登は顔が真っ赤になるほど力を込めているのに対し、冷仁は余裕の表情で受け止めている。

その時、白狼天狗たちは自分たちの役割を思い出した。それは、相

手の隙を作って建物内に侵入すること。

役割を思い出した白狼天狗たちは、一斉に神社へと駆け出した。

しかし、

「Be gone!!？」
立 ち 去 れ

冷仁が冷たく言った。

その言葉とほぼ同時に、神社の中に向かっていた白狼天狗たちは一斉に倒れてしまった。その後も、一人また一人と倒れていく。

侵入を阻止しているのは間違いなく、打ち合いを続けている冷仁だろう。だが、冷仁がその場から大きく動いている様子はなく、白狼天狗たちが勝手に気絶しているだけのようにも見える。もしかしたら、速すぎて動きが見えないだけかもしれない。

能登は全力で両手剣を振り回すが、冷仁は相変わらず、表情を崩すことなく剣撃を受け切っている。

「ぬう……くそっ……い！」

「力任せじゃ勝てん」

「ふんぬあああああ！」

一瞬だけ身を引き、その後の踏み込みで全体重をかけての渾身の一撃。パワーもスピードも尋常ではない。

数ある戦いでも指折り数えられる程度しか使ったことのない技を、能登は放った。

しかし、

「——ッ!?？」

その一撃は空振りに終わった。

冷仁の姿は一瞬で両手剣の間合いの外へ移動し、能登には四肢を引きちぎる程の衝撃が襲いかかってきた。

能登は理解した。この神社には神だけではない、もつと恐ろしい者が住み着いているということ。傍若無人なる化け物が……。

◇

気絶した能登たちが山道から大きく外れた崖の下で発見されたのは、襲撃から二日後の正午頃だった。

第九十九話

「ふっふっふーん♪」

「ご機嫌だな」

「だってデートですよ、デート。しかも、範人から誘ってきたんですよ。わくわくします」

「デートって言ってもノープランだから、あまり過度な期待はすんなよ」

「一緒にいられるだけでも幸せですから」

範人が苦笑いしながら言うと、妖夢は上機嫌に答えた。

山頂の神社襲撃の翌日、人里にて。

妖怪の山でとんでもないことが起こっていることなど全く知ることなく、人々は普段通りの生活を送っている。通りは活気に満ち溢れ、店同士の勝負が繰り広げられていた。

今日、範人はデートと称して、人里まで日用品を買いに来ている。

範人の研究所では、動植物の研究を行っているため、飼育施設は充分に整っている。しかし、栽培、養殖おこなを行って食糧を作ることではできても、さすがに石鹼や塩を作る技術はない（改造する技術はあるが）。そのため、どうしても作れない物を買いに来たのだ。

「おーっす」

範人が声をかけると、雑貨屋の店主が振り向く。

「おう、いらっしやい。今日もいつも通りのオーダーで？」

「そうだよ。てか、いつの間にそんな素敵な横文字覚えてんだ？」

「あんたがウチの店に来るようになってからだな。移っちゃったぜ」

範人が幻想郷に来てから、もう既に2年以上の月日が経過している。

2年も同じ店に同じ物を買いに来ていれば、自然と顔馴染みになるのは当たり前。店の主人も範人の顔を覚えてしまい、今となれば、店に来る日まで当てられるほどだ。

「今日は彼女さんも一緒かい？」

「そそ。まあ、彼女って言うか、未来の嫁だけだな」

「未来設計図もバツチリか。浮気すんなよ」

「するわけないって。夜も共に過ごした相手だ。責任はしっかりと持つさ」

「見た目の割には責任感あるのな」

「見た目の割にとは失礼だな」

範人は笑いながら返した。

そんな風に行く先々の店で常連客らしい会話をした範人。買い物はすぐに終わってしまった。

その後、蕎麦屋でテキトーに昼食をとり、装飾品の店を回ったりしている時。

不意に、妖夢が身を寄せてきた。右腕はガツチリとホールドされ、柔らかい胸に少し埋まっている。

「近すぎないか?」

「近くにいたいんです」

妖夢は当然のように答えた。

「……胸、当たってるぞ?」

「当ててるんです。触りたいなら、鷲掴みにしてもいいですよ」

「……今はやめとく」

身体を密着させて誘惑する妖夢だったが、範人が今更動揺するはずもなく、華麗に受け流されてしまう。

妖夢は頬を膨らませて、さらに身体を密着させた。

そんな彼女の様子に、範人はやれやれといった感じに笑い、ホールドされていた腕を解くと、指を絡める形で手をつないだ。世間一般で言う、恋人つなぎである。

「……………」

妖夢は感動のあまり言葉も出ず、ただ無言で範人の顔を見た。

範人がその視線に気づいて妖夢を見るが、彼女は気恥ずかしさから思わず目をそらしてしまう。

もっと恥ずかしいことしてるのになんで……と自分に問いた結果、急に今までのことが恥ずかしくなり、顔を赤くする妖夢だった。

◇

手をつないで10分ほど経った頃だろうか。

ふと、範人がとある店の前で足を止めた。

「? どうしたんですか?」

妖夢が訊ねると、範人は難しそうな顔をし、

「いや、俺の気のせいかもしれないが……。その店からもすごい妖気っぽいものが出ているような気がしてな……」

「ああ、それなら大丈夫です。この鈴奈庵は貸本屋で、妖魔本も取り扱っているだけですから」

「妖魔本?」

範人が聞き返した。

「妖魔本というのは、妖怪が書いたとか、妖怪が関わった本のことです。魔道書グリモワールもこれに分類されますね。まあ、妖怪が関わっているので、多少の妖気が宿ってしまうんです。物によっては妖怪を封印していたりもするので」

「ほう……。危ないな」

「そうですね。なんなら、入ってみますか?」

「え、いいのか?」

「はい、範人が行きたいのなら。それに……」

「ん?」

範人は不思議そうな顔をする。

「そういう本……。欲しいですよ。範人も……。その……。男の子、ですから」

「は?」

「え?」

今度は2人揃って不思議そうな顔になる。

「いや、だって……。男の人って、するんですよ? えっちな本を見ながら……。気持ち良くなるために……」

……。オイ。

明らかに女の子の言っている言葉じゃない。

「あの……。妖魔さん?」

「はい、なんででしょう?」

「今の知識は誰から教わったんですか？」

「幽々子様からです」

「なるほど……」

——あのおっぱいピンクは何教えてんだ！ いや、ナニ教えてんだ！

範人は心の中で絶叫した。そして、範人は無駄に優しい顔になり、「俺は別にそんなことしてないからな。てか、そういう本を探すわけじゃないから」

「え？ でも、男の人って、そういうことしないと足りないんじゃないですか？」

「そんなことありません」

足りてます。充分すぎるくらいに。

「でも、性欲を持って余すとか……」

「持て余しません」

俺の性欲は毎度のごとく、一滴残らず貴女に搾り尽くされていきます。

「そんなまつさかあ………本当ですか？」

「本当です」

「あははは………ごめんなさい」

「ああ、許そう」

範人は表情を変えずに答えた。

その顔はとても優しい顔のはずなのに、目が笑っておらず、とてつもない恐怖を覚えた妖夢だった。

「さて、お店に入ろうか」

「……はい」

妖夢は内心震えながら答えた。

範人は鈴奈庵の中に入っていく。

と、その時。

「……………あれ？」

ふと、通りの方を向いた時、妖夢は並んで歩く一組の男女を見つけた。

男の方は気難しそうな印象で、女の方は快活そうな印象を持っている。それぞれ、年齢は青年と少女と言ったところだろう。

少女は青年の右腕を包み込むようにして青年に密着しており、青年は鬱陶しそうにしている。しかし、青年から嫌そうな雰囲気はせず、むしろ、嬉しくてもその気持ちを表に上手く出せていないような感覚があった。いずれにせよ、幸せそうな感じがする。

妖夢が注目したのは青年の方だった。

金髪碧眼で、身長は範人と同じくらい。季節外れの黒いレザージャケットを着ており、生地越しに見える身体のラインからして体型も範人とほとんど同じ。見た目が範人とそっくりだった。

違うところを上げるとすれば、瞳の色と左目を隠すようになっている髪型、その髪の下に見えた眼帯くらいだろう。

驚いた妖夢は鈴奈庵の中を見る。そこには、範人がいた。

愛する人を間違えるはずもなく、そこに範人がいるのだから、浮気しているわけでもない。

妖夢は不思議に思いながらも鈴奈庵の中に入るのだった。

◇

鈴奈庵の店内は薄暗く、余裕をもって置かれている本棚には大量の本が並べられていた。その本の中には本棚に入りきらず、床に積み重ねられている物もある。

範人は無造作に置かれた本の中でも外来の本——特に医学関連の本が比較的多く並べられている本棚の前にいた。

「ふむ、これはUウイルスの製造方法……何!?? こっちはGウイルスの製造方法だ?!? ……これなんて、ウチのオリジナルブレンドウイルスの作り方じゃないか!」

「なんか珈琲みたいな言い方ですね……」

「ウイルスに親しみが感じられるだろ?」

「いえ、全く」

「ぬー……」

妖夢に冷たく返され、範人は唇を尖らせて本棚に目を向ける。

と、一冊の本が、そんな彼の目に留まった。

「……んんんん!?」

範人は驚きながら、その本を手を取った。

本のタイトル、内容……軽く目を通す程度だが、読めば読むほど間違いない。

これは……、

「俺が学会に発表した研究データじゃねーか!」

範人が合衆国政府のエージェントをしていた頃——一般的には若き天才生物学者、生物研究者として知られていた頃に発表した研究のデータだった。

そして、その声に反応する者が1人。

「あなた、それを書いたって本当!?」

声のした方を見れば、そこには丸眼鏡をかけた少女がいた。

範人が戸惑いながらも頷くと、少女は眼鏡を取って詰め寄り、

「なら、外来人ですよ? お問い合わせします。この記事について教えてください!」

「お、おう……」

少女の勢いに押され、思わず了承してしまう範人。

苦笑いしながら、少女の持っている雑誌を見ると、そこには『ベルリンの壁崩壊』について書かれていた。

「たかが壁の崩壊で、なんでこんな大事として書かれるのかがわからないんです」

「ああ……なるほど……」

確かに、存在しない物のニュースを見ても、それがどれほどの事かわからない場合の方が多いだろう。

「これは街を分断していた壁の崩壊だな。戦の影響で、2つの国に領有権を主張されたんだ。その結果、街は無理やり2つに分けられた、って感じかな。そのおかげで家族と離れ離れになった人もいたから、こうやって大きく書かれてるんだ。この壁を建てた国は——」

うる覚えの知識で説明する範人。

対する少女はその話を熱心に聞いており、悪い気分にはならなかった。

一通り説明を終えた範人は一息つき、

「そういや、なんて呼ばばいい？」

「はい？」

「名前だよ。俺、君の名前知らないから」

「あ、申し遅れました。私は本居小鈴と申します。気軽に小鈴とお呼びください」

「ふむふむ、俺は旅行範人な。呼び方とかはそっちで決めて」

「はい。では、範人さんと呼ばせていただきます」

「おう。早速だが、俺の質問に答えてくれ」

範人の言葉に、小鈴はこくと頷いた。

「そのこの棚の書物だけどさ。どこで手に入れた？」

「出どころですか？ ……正直、わからないですね。ウチの本はそういう物の方が多いと思いますし……」

小鈴は申し訳無さそうに答えた。

範人は少し考える様子を見せてから、

「そうなのか。悪いな、妙なこと聞いて」

「いえいえ、秘密の研究資料だとしたら、気になりますよね」

「別に秘密ってわけじゃないんだけどな。結構危険な研究だからさ」

「へえー、どんな研究なんですか？」

「読めばわかる」

と、範人が研究データを差し出すと、小鈴はそれを受け取って読み始めた。

「ふむふむ……ナミウズムシが元なんですな……クローンに記憶は残る……。博士と合体していたヒルは博士の記憶を持っていた可能性が……記憶の移し替え……」

「そう、記憶の移し替えだ」

「でも、私の知り合いにそういう人いますよ？」

「それは能力だ。俺の研究では、能力がなくても移すことに成功した。誰でも移すことができる。もちろん、複製も可能だ」

範人は自慢気に言った。

「ところで、他にも研究資料があるんだが、欲しいか？」

「それって、ここにないものですか？」

「そうだな。あるものもあるかもしれないが、多分ないものの方が多いと思う」

「それなら、欲しいです。暇潰しに読めますから」

「そうか。なら、今度持つてこよう。処分に困っていたんだ」

「ウチはごみ捨て場じゃないですよ……」

小鈴がジト目を向けると、範人は慌てて、

「ご、ごみじゃない。貴重な研究データだ！ 外の学者達が喉から手が出るほど欲しがるデータもある！」

「ふーん、そうですか。ごみじゃないなら、いいんです。ふふふ、新しい本……」

小鈴の機嫌が直ったようで、範人はホッと一息吐く。

「じゃあ、今度持つてきたら頼むよ」

「はい。良いのを願います」

そう言うと小鈴は外来本の読書に戻り、範人は小鈴が意味を間違えている表現を見つけては正すことになった。

◇

その頃。

「おお、こんなやり方があるんですか……。こっちは……。少し激しすぎますね……」

妖夢はオトナの本を読んで、範人と過ごす夜をどのように楽しむのかを考えていた。

なお、この日の夜に、範人がどのような目に遭ったのかは、ご想像にお任せする。

第百話

カチャカチャという心地よい金属音。かき混ぜられているのは基本のおかずからケーキのようなデザートまで様々な料理に使われる奇跡の食材——卵。

程なくして、卵が馴染み、濃度が均一になった。それを、油をひいておいたフライパンに移し替え、火にかける。少し固まってきたら、既に炊いておいた米を投入した。

炒めながら、ヘラでかき混ぜて米をパラパラにする。そこに塩胡椒、鶏ガラの出汁と鰹節の出汁をブレンドした特製スープを投入して更にかき混ぜていく。最後はごま油を少し加え、一、二回かき混ぜて終了。

範人は出来上がった料理を皿に適当に盛り付けた。

「ほい、黄金チャーハン一丁上がり」

とある秋の日の昼下がり。霧の湖の畔に建つ館、紅魔館にて。

範人はレミリアと呼ばれ、簡単な料理教室をしていた。

範人は母親が亡くなってから家の料理当番をずっとしてきたため、料理が上手い。それも、店を出せるレベルで上手い。

それに対し、レミリアは料理が上手とは言えない。全くできないというほどではないのだが、両親がいた頃は母親が、昔の同居中はジェイドが、最近は咲夜が料理当番をしていたことが原因で、料理をしたことがあまりないのである。

レミリアも大人の女性^{レディ(笑)}として最低限美味しい料理くらいは作れるようになっておきたい。が、従者である咲夜に訊くのはプライドが許さなかったので、範人に白羽の矢が立ったわけである。

細かく言えば、レミリアが範人を選んだ理由はそれだけではない。

ジェイドの料理は簡単なもの——良い言い方をすれば、男の料理——であり、咲夜の料理よりは作りやすそうなものだった。しかし、最も食べて欲しい者であるジェイドに料理の作り方を教えてもらうわけにはいかない。そこで、ジェイドと同じ男である範人なら、簡単な料理を知っているはずと思ったのだ。

結果的に、その選択は正解だった。

範人は咲夜のように難しい料理も作れるが、レミリアに合わせて簡単な料理を教えてくれた。合わせてもらっているというのが少々気に食わなかったが、レミリアも仕方ないと割り切って、素直に従っている。

そんな時だった。

「ヴァンドザアアアン！」

射命丸文が慌てた様子で現れたのは。

◇

「ふう……。申し訳ありません。慌てていたもので……」

文は紅茶を飲み干すと、頭を下げた。

「安心しなさい。このくらいのこと、寛大な私が怒るなんてありえないわ」

「それを自分で言うか……」

「ええ。だって、私だもの」

そう言つて、レミリアは胸を張る。無い胸を張っても痛いだけ。

範人は苦笑し、

「で、用件はなんだ？」

真剣な様子で訊ねた。

「実は……」

文は、山頂に突然現れた神社とボロボロになって帰ってきた天狗たちについて、短く簡潔に話した。特に、邪我亜能登が天狗の中でも折りの実力者であることを強調した。

範人は溜息を吐く。

「それ、邪我亜つてやつが悪いんじゃないの？」

「確かにそうなんですよね。でも、ここで反撃しないとまずいんですよ」

「と、言いますと？」

範人が頭に？マークを浮かべて訊ねる。

「邪我亜さんなんです、先代の天魔様の時から大天狗を務めている方でして。歴が長いということから、とんでもない信頼度を持っている

るんです。おまけに、天狗は昔から他種族を見下す節があるので、人間を見下している者も多いんです。そんな立場の方が人間にやられたので、みんな殺気立ってしまい、反撃に出ないと暴動に発展してしまう可能性がありまして……」

「ちよつと待て。その邪我亜つてやつをぶちのめしたのつて、本当に人間なのか？」

「？ 私是人だと聞きましたよ。実物を見たわけではないので、わかりませんが……」

文は自信なさげに答えた。

山頂付近は現在立ち入り禁止なのだから仕方ないだろう。

範人はしばらく考えると、

「……まあ、大体の事情はわかった。手伝つてやるよ」

そう答えて、不敵な笑みを浮かべた。

「ありがとうございます」

「私も協力するわ」

と、今度はレミリアが手を挙げた。

「ウチのジェットを連れて行きなさい。大丈夫、強さは私が保証するわ」

「……いいんですか？」

「そんなに警戒することないじゃない」

「いや、でも、吸血鬼相手に取り引きなんて……」

「別に何も請求しないわよ。別に欲しい物なんてないから」

「は、はい……ありがとうございます」

文は半信半疑といった様子で、礼を言った。

レミリアに欲しい物はないが、欲しいものはある。それは、一人で料理を練習する時間だ。

幸いなことに、現在ジェイドとフランは人里に遊びに出ており、料理の練習をどうしても見られたくない人に見られる確率は下がっていた。しかし、レミリアにはどうしても見られたくない人がもう一人いる。それがジェットだ。

ジェットはフランと夫婦に近い関係を築いている。そのため、

ジェットに見られたら、フランの耳に情報が入ってしまう可能性が高いのだ。姉としても、それは防ぎたい。姉は、常に妹の一步先に立ち、そのための努力は知られていないところでおくものなのだ。

戦いにジェットを派遣して天狗を助ける。刺激を求めているジェットはストレス解消。助けた天狗には貸しができる。そして、レミアは一人集中して料理の練習ができる。

——我ながら、なんて完璧な作戦……。

レミアはニヤリと口角をつり上げた。

それを見た範人は、

「……何か悪いこと考えてないか？」

「いいえ、良いことを考えているわ」

「そうか。料理頑張れよ」

「バレた!?!?」

「なるほど、一人で料理に集中したいと」

「……計画通り」

レミアは悪い顔になる。

「やっぱ悪いこと考えてるだろ」

「うー☆」

「天狗に貸しができるから」

「うー☆」

「バカなことするなよ」

「うー☆」

「君の名前は？」

「うー☆」

質問に答えたら、ボロが出そうだったので、全て「うー☆」で乗り切るレミア。そこにカリスマはなかった。

◇

時同じくして、

「ほい、お賽銭だ」

「ありがとう。助かるわ」

「ウチの家計を削って金入れてるんだからな。大事に使えよ」

「あんたが稼いだ金じゃないでしょうが」

「家計を預かるのは嫁の仕事だぜ」

「そういうのは結婚してから言いなさい」

「そもそも、家計つけてるの誰だと思ってるんだ」

優は魔理沙にジト目を向けた。

博麗神社にて。

優と魔理沙、霊夢の3人が話をしていた。

魔理沙は相変わらず、週2回程の頻度で博麗神社に遊びに来てい
る。しかし、優が博麗神社を訪れる頻度は2週間に一度くらいにまで
減ってしまった。春雪異変の後、優は人里で仕事を見つけ、そこそこ
安定した収入を得ることに成功したのだが、仕事のせいで暇が少なく
なったのだ。

それから、優は神社を訪れる度にお賽銭を入れていつてくれる。し
かし、会う頻度が少なくなったことに、霊夢は寂しさを感じていた。

「ねえ、優。いつそのこと、ウチに婿に来ないかしら？」

「あ、それはお断りだ。俺は、大雑把なところも含めて魔理沙のことが
好きだから」

「それは残念ね」

霊夢は寂しげに微笑んだ。

別に嫌ではない。むしろ、他の男が婿に来るよりも、気心が知れて
いる仲である優が婿に来てくれる方が嬉しい。しかし、優は魔理沙の
恋人だ。もしも、優が霊夢の提案を受け入れていたら、ぶん殴ってい
たと思う。

腐れ縁とはいえ、魔理沙とは長い付き合いがあるのだ。魔理沙を悲
しませるやつは許さない。

優は期待通りの受け答えをした。それは嬉しいことだったが、同時
に自分が眼中にないということだ。少し悲しくもある。

そんな霊夢の様子を見て、魔理沙はニヤリとする。

「どうしたあ？ 優が釣れなくて悲しいか？」

「ええ、そうよ。私でも釣れないなんて……貴女は良い男を見つけた
わね。毎日が輝いているんじゃないかしら？」

「おうよ。優がいるおかげで、毎日幸せだ。きのこ以外のものが食えるし、研究に集中することもできるからな」

「家事くらいあんたがやりなさいよ」

「残念ながら、優に止められるんだ。掃除しようとしたら、『余計散らかるから俺がやる』って」

「……優の苦勞が思い浮かぶわ」

霊夢は溜息を吐く。

魔理沙は元々人里の人間だ。しかし、夢を叶えるために家出した。それから、優が現れるまでは一人暮らしをしていたため、家事スキルは決してないわけではない。

ところが、魔理沙は整理整頓を苦手としている。おかげで、魔理沙の家には本（死ぬまで借りている物を含む）や研究資料が散らかり放題だったのだ。

優はどんよりとした顔で、

「ほんと、アレは酷かったよ……」

「おう、毎度毎度ありがとな」

「少しは反省しろよな」

「片付けの時間よりも、研究や修行の方が大事なんだぜ！」

「こいつは……」

「でも、そういうところも？」

「好きだ」

なんだかんだ言って魔理沙を受け入れ、愛している優のことを、霊夢は「寛大な人」だと思う。同時に、魔理沙と長い付き合いの自分も「良いやつ」なのだと思った。

と、

「おお、ここが博麗神社ですか」

緑髪の少女が石段を登ってきた。

久しぶりの参拝客だろうか。

霊夢は期待を抱いた。

少女は、そんな霊夢の前に歩み寄る。

「貴女が、この神社の主ですか？」

「ええ、そうよ」

「そうですか。では、私——いや、私たちからお話があります」

◇

緑髪の少女は落ち着いた様子で石段を下っていく。

優と魔理沙は、それを呆気にとられて見ているしかなかった。

霊夢は怒りに燃えていた。

「魔理沙……優……」

「……おう」「……ん」

魔理沙と優が頷く。

「行くわよ。妖怪の山へ」

神社の譲渡。それが、少女の持ちかけてきた話だった。妖怪の山へ最近引越してきたばかりだと言う。

信仰心の少なさに、ただでさえ困っているというのに、そんな話を受け入れることはできない。

その旨を伝えたところ、少女は博麗神社を鼻で笑った。

「外の世界ではそこそこ有名で、昔はかなりの信仰があつたんですよ」とか二度と聞きたくない。

信仰心が少ないことを受け入れているとはいえ、博麗神社は自分の家。態度と内容にプツツンしてしまった。

お札とお祓い棒を持って宙に浮かび上がった霊夢。魔理沙と優も黙って続く。

目指すは妖怪の山、山頂。

あの神社の連中、絶対にぶん殴る。

第101話

妖怪の山、麓^{ふもと}。

霊夢、魔理沙、優の3人は山頂の神社を目指して飛んでいた。
と、

「その3人、止まりなさい!」
「ん?」

どこからともなく聞こえた声に、魔理沙が立ち止まる。それに続いて優も止まるが、逆上している霊夢は止まらず、先へ行ってしまった。

魔理沙と優が頭に?マークを浮かべていると、紅葉鮮やかな森の中から2人の少女が飛び出してきた。

優は、またかよと頭を抱えた。

幻想郷に飛ばされてもうそろそろ3年になる。そして、暮らしの中で優は思った。顔面偏差値が高すぎる、と。

おばちゃんやおばあちゃん、おっさんにもなると、さすがに何も言えないが、少女や青年はほとんどが当てはまる。美少女、美少年、美女、美青年ばかりなのだ。魔理沙も霊夢もアリスも美鈴も慧音も霖之助も、果ては外の世界から来た範人まで。萌え萌えウイルスやイケメンウイルスみたいな病原体でも流行っているのだろうか、と不思議になる。

森の中から飛び出してきた2人もまた、美少女だった。

二人共、秋っぽい落ち着いた雰囲気の色(茶色とか、薄い緑とか)の服を着ており、髪は明るい金髪。背格好からして、双子なのだろう。

「あなたたち、ここから先は通行止めよ!」

と、頭に帽子を乗せている方が言った。

「ですよー。お約束」

優は顔を引きつらせながら、やれやれと言った感じで呟く。

「なんで私らにはいつも邪魔が入るんだろうな? 霊夢はポンポン進んで行くのに」

「ここから、人に対して邪魔なんて言うものじゃないぞ」

「だってよお……、幽々子の時なんて、範人と一緒にスキマ使って移動してきたんだぜ。どう考えても卑怯だろ」

「霊夢はなんだかんだ言ってる人脈(妖怪も含む)が広いからな。あの時は、範人に便乗しただけだろ」

「ぐ……連の良いやツめ……」

魔理沙は心底悔しそうに言った。

それもそのはず、いつも美味しいところは霊夢に持っていかれるのだ。異変解決の大半を魔理沙がしたとしても、黒幕は霊夢が倒してしまい、天狗の新聞には『博麗の巫女、またしても異変を解決!』という記事が乗るのだ。魔理沙自身、自分が実力不足であることはわかっているのだが、やはり辛いものがある。

優は苦笑するしかなかった。

「あのー、お二人さん。私たちを空気にするのはやめてくれませんかね?」

「……ああ、ごめんごめん」

紅葉を着けている方に言われ、優は少女たちの方に向き直る。

「どうよ穰子^{みのりこ}。人間が私の言うことを聞いたわよ」

「姉さんが言うこと聞かせたのは1人だけじゃない。私の言うことを聞いたのは2人よ!」

「ま、負けたあ!」

「まあ、各1人ずつ無視されてるけど」

「それなら引き分けね」

「残念! 言うこと聞いてくれた割合は私の方が上よ!」

「うわあああああ!」

「どنگりの背比べはどうでもいいから、用件を早よ言えや」

「申し訳ありません!」

優が若干キレ気味になつて言うと、少女たちはビビって背筋をピンと伸ばす。

ランドセルのCMができそうだな、と優は思った。

「この先は天狗の土地よ。あなたたち、人間が入ったら、殺されてしまわよ」

「私たちは弱いけど、それでも神。私たちを生み出した人間が命を捨てるのは見たくないの」

2人の行動は優しさからくるものだった。

しかし、行かなくてはならない。霊夢に逆らったらどうなるかわかったもんじやない。

優は内心冷や汗をかきながら苦笑した。

「悪いけど、俺たちは山頂に行かなきゃならないんだよ。友達が先に行っちゃったんだ。そんなに危険な山なら、なおさら1人になんてできない」

「博麗の巫女なら大丈夫よ。彼女の強さは私たちも知っている。天狗なんて目じゃないはずよ。でも、あなたたちは普通の人間。殺されてしまおうよ」

少女の気遣い。

しかし魔理沙は、

「フフツ……」

鼻で笑った。

「私は小せえ頃からあいつと一緒に競いあってきた腐れ縁だ。いつもいつも、あいつは私の前を走っていた。私がどれだけ努力してもあいつには届かない。絶対に超えられない壁なんだよ、あいつは。私があいつより弱いことなんて痛いほど知ったんだ。だけど、あいつより弱いからって、実力が通用しないわけじゃない。現に、私はいつも異変の解決に参加してる。あいつが良いところばかり持っていくせいで新聞には載らないけど、私だって実力はあるんだ。行かせてくれ」

「……ダメよ」

「行かせてくれ」

「ダメ」

「通してくれ」

「諦めなさい」

「いやだー!」

魔理沙は叫んだ。その声に、少女たちはビクツと肩を震わせる。

「諦めるなんて絶対に嫌だ。私はあいつを超えたいんだ。どれだけの

時間がかかるのかなんてわからないけど、諦めなんてしたら、絶対にあいつを超えることはできなくなる。これは私の決めたこと、私の決断だ。死んだって別に構わない。私の実力そこまでだったってことだ。だけど、諦めて生きていくくらいなら、私は突き進んで死んだ方がよっぽど良い！」

魔理沙の声が響き渡った。

その強い意志に、流石の神も折れた。

「……仕方ないわね。行きなさい」

頭に紅葉を乗せている方はため息に言った。

魔理沙は「へへっ」と笑って神たちの横を通る。優もそそくさと横を通り抜けようとした。

が、

「あ、男の方はちよつと待ちなさい」

帽子を被っている方に引き止められる。

優は引きつった笑顔で冷や汗を流しながら振り向いた。

少女はそんな優の顔をまじまじと見つめ、少し考える仕草をし、

「やっぱり、あなた人里で会ったわね」

「……………」

「穰子、それ本当？」

「うん。人里で会ったことあるわ。確か、あそこは——」

ダツシュ。

優は逃げ出した。

しかし、その腕は何者かに掴まれる。

「そういや、最近はずつと帰りが遅いよなあ……。お前は『仕事で遅くなった』とか言うけど、実際のところ、お前が人里で何をしているか私は知らないんだよなあ。ちよつと気になるから、その神様に聞いてみようぜ……。☆」

黒い笑みを浮かべた魔理沙がいた。

優は腕を振りほどこうとするが、女性とは思えない強い力で掴まれて声にならない悲鳴をあげる。

——俺の店、終わったかも……。

優は若干白目をむきながら、神の前に引きずられて行くのだった。「すまないが、その話詳しく聞かせてもらえないか？」

魔理沙の言葉に振り向いた神たちはギョツとした。魔理沙から発せられるオーラが半端なく黒かったのだ。

「いいけど……大したことじゃないわよ？」

「大したことじゃなくても構わないぜ。教えてくれよ」

「は、はい……」

恐怖。圧倒的恐怖。ゴゴゴゴとかいう効果音が聞こえてきそうな迫力。

恐怖で唇が震えるのを我慢し、神は口を開く。

「その人が女の子の僕しもべみたいになつてたの」

「ほう……。優、どういうことだ……？」

魔理沙の目が赤く光った。……ような錯覚を、優は覚えた。

「お、落ち着いて。話を最後まで聞きなさい。なんか、黒っぽい服を着てて、『おかえりなさいませ、お嬢様』って言ったり、妙に高い位置から紅茶を注いだりしてたの」

何か違和感が……。

「その場所には同じような服装の人が他にもいて、お客さんのチェスの相手をしていたり敬語で談笑していたり……みんな落ち着いた雰囲気があつてかつこよかつたわ。いかにも、できる男、みたいな感じで。ちなみに、私はその人に相手してもらつたわよ」

そう言つて、少女は優を指差す。

「……おい、優」

「は、はい……！」

「お前の仕事は何なのか、正直に答えろ」

「せ、接客業です……」

「もっと詳しく」

「し、し……じ……」

「あん？ もっと大きな声で」

「執事……です。執事喫茶“雫”でオーナーをしています……」

「……ほう」

ニヤリ。

魔理沙の口角が上り上がった。

「あ、あの……魔理沙さん……?」

優は恐る恐る声をかける。

「すげえな、お前!」

パアアと字幕が出そうなほど目を輝かせて、魔理沙が言った。

「執事喫茶と言えば、今人里で話題の店じゃねえか! え、なんでだ?

なんでそんなところで働いてるんだ? しかもオーナーだと?

私、玉の輿じゃねえか! なんでそんな大事なことを教えてくれなかつ

たんだよお?」

「お、落ち着け……。順を追って説明する……」

胸ぐらを掴んでガクンガクンと揺さぶられ、優は泡を吹きそうになりながら話し始めた。

「最初は人里で普通に甘味処の手伝いをしていたんだ。そしたら、お菓子の作り方とか、美味しいお茶の入れ方を覚えちゃってね。そんな頃に、ちょうどその甘味処が潰れちゃって……。どうしようかなあ、つて悩んでいたら、身寄りのないご老人たちの家事のお手伝いをする仕事があったから、それを始めたんだよ。俺の担当はとあるお婆さんで、お爺さんには先立たれちゃったんだと。子供もいなかった。俺が手伝いに行くようになってから『孫ができたみたい』つて笑っていたのを覚えているよ。『お孫さんにあげなきゃねえ』とか冗談も言われてね。俺もお婆さんのところで手伝っていて楽しかった。でも……」

優は拳をぎゅつと握りしめる。

「お婆あさん、亡くなっちゃったんだ。老衰で……。そしたら、お婆さんの遺書が見つかって……」

シリアスな空気が広がる。

「家の相続人が俺になっていた……最後には『p.s. イケメン最高!』つて書いてあった……」

……シリアスが台無しである。

「だから、俺はお婆さんの意思に従って、その家を少し改装して執事喫

茶を……」

「執事Ⅱイケメンってか？」

「ああ……」

「お婆さん、今頃天国で笑ってるんだろな」

「仏壇見たら、遺影がすごく良い笑顔になってたよ……」

「しっかり見てんだな」

ジト目で天を見つめる魔理沙だった。

と、

「その男、ここを通りたければ条件があるわ！」

頭に紅葉をつけている方の少女が言った。

優はジト目になって少女の方を向く。

「何？」

「今度あなたの喫茶店に言った時に割引して」

「はあ!?!?」

「いいでしょう？ たったそれだけで先へ進めるのよ？」

「ぐぬぬ……」

優は悩む。

それもそのはず、いくら執事喫茶「雫」が人気の店だとは言え、開店してからあまり期間は経過していない。そのため、経営がしっかりと軌道に乗るまでは店側にとって不利益になることはあまりしたくないのである。

そんな優の服の裾を魔理沙が引っ張る。

「なあ……?」

「………はあー」

魔理沙に不安そうな顔で見つめられ、優は長い溜息を吐いた。

「わかりました。では、お2人のお名前をお聞かせください」

「もうどうにでもなれ」と言った感じの優。

少女たちは不思議そうな顔になり、

「なんで教える必要があるの?」

「お客様を判別する材料になりますので、お名前のご提示が必要になるのです」

「なるほどね。私は秋静葉よ。こっちは妹の穰子」

「静葉様と穰子様ですね。覚えさせていただきます」

優はにっこりと笑った。

その笑顔に、3人の少女はドキッとしてしまう。

「ねえ、なんでいきなり敬語なんて使っているの？」

と、穰子はドキドキしながら聞いた。

優は笑顔を崩すことなく、

「ご予約をいただいている時点で、お2人はお客様でございませう」

「そ、そう……」

「では、通していただけるとありがたいのですが？」

「え、ええ。どうぞ……」

静葉と穰子は顔を赤くしながら、道を開けた。

優は魔理沙の手を引いて、2人の間を通り抜ける。

そのすれ違いざまに、

「お帰りをお待ちしております。お嬢様」

優は姉妹の耳に顔を近づけ、そう言った。

そのイケボ+イケメン+至近距離のコンボに、

「ブフオツ!!?」

秋神姉妹は鼻血を噴き出して倒れた。

「……チョロいですね」

優は鼻で笑う。

と、不意に魔理沙が優の腕を掴んでぎゅっと抱き寄せた。

驚いた優が魔理沙を見ると、彼女は怯えたように身を震わせていた。

魔理沙は伏し目がちに、

「優は、私だけの優なんだぜ……」

顔が赤くなるのを隠して優の方に顔は向けなかったが、耳まで真っ赤になっていたため、バレバレだった。

優は口元に微かな笑みを浮かべる。

「わかっているよ。俺は魔理沙だけの俺だし、魔理沙も俺だけの魔理沙だ」

リア充オーラを漂わせ（というより、噴き出し）ながら、2人は霊夢の後を追うのだった。

◇

その頃、範人たちは天狗の里を目指して高速で飛行していた。

「範人さん、早く！」

「んなことわかってるよ！でも、ジェットを置いていくわけにはいかないだろうが！」

「優しいですね。まるでお父さんみたいです」

「うるせえ！ジェットも何か言ってやれよ」

「範人さんがお父さんなら大歓迎です」

「お前もかよ！」

地底の緑髪の子も含め、小さい子たちからすると範人は保護者に非常に向いているらしい。

第102話

優と魔理沙は山頂を目指す。

途中、下級妖怪が大量に現れたが、そこは実力者。下級妖怪など敵ではなく、軽々と無力化してしまった。霊夢を見つけるのには30分ほどかかってしまったが、この山の中でならかなりの速さだろう。

霊夢がいたのは山を流れる沢のすぐ近く。

誰かと話をしている様子だ。

「だからさー、この先行ったら危ないんだよー。やめといた方が良
いってー」

「お断りよ。私は上の巫女をぶちのめさなきや気がすまないのよ」

「そんなこと言っても、殺されちゃうよー」

「あら、博麗の巫女をなめないでもらいたいわね。天狗なんてホホイ
のホイよ」

「その効果音は何か違う気がするよ……」

霊夢と話す誰かの声は聞こえるが、その姿は見えない。

とりあえず、優は霊夢に声をかける。

「実際のところ、貧乏なんだから仕方ないだろ」

「あのねー、別に生活に困るほどじゃないから。……あ、追いついたの
ね」

「おう、待たせたな」

「この魔理沙様たちが追いかけてきてやったんだ。感謝しろよな」

胸を張る魔理沙。

霊夢はちようど良かったという様子で、

「ねえ、キュウリ持ってない?」

「は?」「あ?」

魔理沙と優が素で聞き返すと、霊夢は黙って水面を指差す。

2人が霊夢の指を目で追うと、その先には青いツナギを着た少女が
いた。

頭に緑色の帽子を乗せ、青い髪をツインテールに纏めてある。大き
な鞆を背負っており、とても重そうだった。しかし、特に気にしてい

ない様子を見ると、この少女が常人よりも力が強いことがわかる。つまり、この少女も妖怪である。

「おお、盟友がこんなに来るなんて珍しい！ 今日はお祭りでもあるのかい？」

「ないわよ。でも、これから戦争なら起こるかもしれないわね」
「ええー、なんだいそれ？ あと、そっちのも誰？」

少女は岩の上上がり、優と魔理沙の方を見ながら言った。

「私は霧雨魔理沙で、そっちのイケメンは難波優ってんだ」

「へえ、私は河童の河城かわしろにとりだよ。よろしく」

「おう。で、これはどういう状況だ？ なんで霊夢は頂上に行かないんだ？」

「……にとりに足止めくらってるのよ」

霊夢はため息を吐きながら答える。

にとりは慌てた様子で、

「だって危ないじゃないか！ この先は完全に天狗の領地なんだよ!!
？ 殺されちゃうよ!!？」

「だから大丈夫って言っているでしょう？ 私は博麗の巫女。弱くないわ」

「それでも危険だった！」

「うるさいわねえ。そのくせして、きゅうりさえ渡せば」

「通してあげるよ。きゅうりくれればね」

「いやいや、ちよつと待て！ 何故きゅうりで通せる!!？」

「ふっふっふっ、きゅうりは我ら河童の大好物。きゅうりか安全かと問われたら、きゅうりを選ぶに決まっている！ ……それに、大丈夫だって言ってるからね」

「結局はきゅうりが欲しいだけかよ」

幻想郷は美少女が多いが、その誰もがだいたいキャラクターが濃すぎると思う優だった。

「まあ、そんなわけだから通りたければ、きゅうりを寄越せ」

「ええー……。霊夢、なんでいつもみたいに強行突破しないんだよ？」
「だって、いちおう心配してくれてるのよ。そんな相手を倒そうだな

んで、ちょっとあんまりだなあ、って。でも、きゅうりがいいから困ってて……」

「お前にもそういう優しさってあったんだな……」

「何よ。文句ある？」

「いや、ない。むしろ安心した。でもなあ、きゅうりなんてこの季節になんてないからなあ……」

額に手を当てて悩む魔理沙。

今の季節は冬であり、夏が旬であるきゅうりなんてあるはずがない。よほど整った保管機能があれば、夏に収穫された物を保存しておくことができたかもしれないが、この幻想郷にそんな優れた技術は存在しない。もしかしたら存在するかもしれないが、そんなくだらないことに使用する輩が存在しない。

人里、紅魔館、香霖堂、永遠亭……。

考えつく限りの場所を頭に並べる。確かにありそうな場所がないわけではないが、優が訪れたことのない場所では移し替えることができない。飛行して取りに行くにしても、移動に時間がかかる。諦めるしかない。

そう思った時、優が手をポンと叩いた。

「そうだ。あそこなら……！」

「お、なんか思いついたのか？」

「ああ、あったよ。いつでも新鮮な野菜が採れる場所。あそこなら俺でも鮮明に覚えてるから、入れ換えるのは楽勝だ」

「……ああ、なるほどな。あそこか」

「え、あそこってどこ？」

魔理沙は優の言葉を理解できたが、霊夢には理解できなかった。

それもそのはず、霊夢はまだその場所には宴会での一度きりしか行ったことがないのだ。

その場所は、博麗神社よりも更に人里から離れている。しかし、決して人が来ないわけではない。むしろ、そこを訪れる人は博麗神社よりも多い。最近では、寺子屋の社会科見学を行う場所としても有名になってきている。

優と魔理沙はちよくちよくそこを訪れており、魔法実験をさせても
らったり、お茶の時間を過ごさせてもらっていた。

優の言っているあそことは、

「範人の研究所だ。あそこの栽培設備は完璧だから、一年を通してほ
とんどの野菜が採れるし、おまけに美味しい。俺の店だって、そこから
食材を仕入れている。きゅうりを仕入れたことはないけど、この前
きゅうりの栽培をしているところも見せてもらったよ」

「……あんたの店とか栽培とかについてはよくわからないけど、とり
あえず範人の研究所がすごいのはわかったわ。じゃあ、早速そこから
仕入れてくれないかしら？」

「ああ、任せとけ。支払いは俺の店でやっておく」

言うが早いのか、優は早速パチンと指を鳴らした。その瞬間、空中に
は空気と入れ替わりできゅうりが現れ、沢の綺麗な水の中に落ちてポ
チャンと音を立てた。

にとりは突然現れたきゅうりに驚きつつも、そのきゅうりを拾う。

「ウホッ、良いきゅうり……」

曲がりすぎることも真つ直ぐすぎることもなく、芸術的センスさえ
も感じさせるようなシルエツト。その緑色とツヤは、安定しないこの
幻想郷で育った普通のきゅうりを遥かに凌ぐ、食材としての美しさを
持っていた。きゅうりの表面には新鮮であることを証である棘が
残っている（実際、採りたてである）。

「ほら、食ってみろ。範人のきゅうりだ。どんな野菜も一部の例外を
除けば、採れたてが一番美味しい」

「うん。それじゃ、いただくよ……」
にとりはきゅうりを齧る。

カリッ……

きゅうり特有のちよつとした硬さが歯に伝わり、直後には少しずつ
壊れていく細胞の震えがついてきた。

壊れた細胞から水分が溢れ出し、同時にきゅうり特有の爽やかさと
香りがやってくる。

一齧りだけで美味しい。

シヤクシヤク……

噛むたびに細胞が壊れ、水分に混ざって爽やかさと香りが現れるその瑞々しさや爽やかさだけでも充分なほど美味いきゅうり。

しかし、口の中に広がる味はそれだけではなかつた。

微かな、本当に気のせいのような塩気と甘みが舌を刺激し、スツと消えていく。天然の美味しさだ。

ゴクツ……

飲み込む。

その風味はスツキリ爽やかで、食べる前よりも口の中がスツキリしたと感じるほど。

「美味しい……」

「だろ？ まあ、作ったのは俺じゃないんだけどな」

ポツリと呟いたにとりに、優はニヤリと笑ってみせる。

「何これって感じだよ。確かにきゅうりなんだけど、なんて言うかレベルが違う。菌応えも味も全くの別物みたいな。どんな技術で作られてるの？」

「詳しいことは俺も知らないが、栽培施設では温度や土壌、衛生の管理を徹底しているらしい。コンピュータ管理された最適な条件下で育てることで味を引き出しているんだとき。管理システムに細かい数値を入れたのは範人自身って言ってた」

「なるほど、是非とも会ってみたいね」

「何故？」

「そいつからきゅうり栽培について教えてもらいたいのさ。きゅうりは私たち河童の大好物だし、そういう施設についても知っておきたい。それに、発明家の血が騒ぐんだ」

そう言つて、にとりは腕を叩いた。

「まあ、そういうことなら俺が話を通しておくよ。……で、通してくれるかい？」

「もちろん。さあ、行つておいでよ」

にとりは山の頂上の方を指差す。

「くれぐれも気をつけてね。死なれたら、私が悪いみたいになっちゃう

うよ」

「大丈夫だ。俺には魔理沙や霊夢みたいに強い仲間がいる。範人みたいに1人で戦い続けることはできないけど、協力して戦い続けてみせるさ。なあ?」

「おう、もちろんだ。この魔理沙様の力を信じろ」

「その言い方じゃ、私も範人に勝てないみたいじゃない。……まあ、仲間っていうのは悪い気分じゃないわ」

魔理沙は自信満々、霊夢はやれやれと言った様子を見せる。

優たちはとりに一礼すると、頂上を目指して再度飛行を始めるのだった。

◇

一方、その10分ほど前。

範人とジェットは天狗の里に到着していた。

文は怪我人たちの元に向かい、今は別行動中である。

屋敷の前に来た時、範人は門番をしている白狼天狗に声をかけられた。

「お待ちしておりました。旅行さん、ですね?」

「ああ。天魔に呼ばれてな」

「ありがとうございます。……ところで、そちらの方は?」

「援軍だ。戦いになるんなら、必要だと思ってな。何か問題あったか?」

「いえいえ、それなら問題はありません。戦いでは数も重要ですので。

それでは、こちらへ」

「ああ、案内頼む」

範人とジェットは白狼天狗の後に続き、天魔の部屋へと急いだ。

第103話

「おお、来たか。まずは入ってください」

天魔は引き戸から顔だけを覗かせ、範人たちに入室を促した。範人たちは促されるままに、天魔の部屋へと足を踏み入れる。

ふと、天魔は思い出したように、

「ああ、お主は診療所に面会の許可を頼む。我々もすぐに向かう」「はっ！」

天魔に言われ、白狼天狗は部屋から立ち去った。

天魔が椅子に腰を下ろし、続いて範人たちも腰を下ろす。

「で、何が起きたんだ？ 侵入者とは聞いたが、俺を呼び出すなんてただごとじゃあないはずだ」

「……ああ、人間が侵入してきた」

「人間なんて大した問題じゃないだろ。少し威嚇すれば逃げていつてくれる。……それとも、逃げてくれないとでも？」

「その通りだ。彼らが逃げてくれない」

天魔は険しい顔で言った。同様に、範人も険しい顔つきになる。

「それはまずいな……」

「まずいつてレベルじゃない。非常にまずい。範人殿も知つての通り、天狗たちの中には人間を快く思っていない者が多い。その者たちが手を下さない我に対して反乱を起こす可能性もある」

「あー、わかる。お前弱そうだし」

「よ、弱そうって言わないでよ！ 僕だって天魔なんだぞ！ 強いんだぞ！」

幼い見た目に違わぬ可愛らしい声で叫ぶ天魔。

その様子に範人はニヤニヤと笑い、ジエツトは仲間が現れたと目をキラキラさせる。

2人の表情を見た天魔は一瞬ハツとした後、

「ゴホン……」 と、ともかく、このままでは天狗の里が分裂してしまう可能性があるのだ。そうなれば、山にいる野生の妖怪たちが勢い付いて暴れ始めるかもしれん。人里に被害が出るのは避けたいだろう

？」

天魔はキリツとした表情で言った。

しかし、範人の頭からは天魔の見せた幼い一面が離れなかった。

「おう、わかっ……プフツ……大丈夫だ。クク……シヨタ天狗……プフツ……」

「笑うなよお！」

「天魔くん、友達になろうよ！」

「え、いいの？ ……って、違う！ 頼みを聞いてくれれば考えないこともないぞ」

「わーい、やったあ！ 僕みたいな感じの妖怪の男の子ってあまり見ないから不安だったんだよねー」

クツ……、僕より可愛いなんて……！

まばゆいほどの笑顔を見せるジェットに、天魔は軽い嫉妬を覚えていた。

「では、2人とも協力してくれるのだな？」

「おう、もちろんだ。お兄さんに任せなさい」

「僕も友達欲しいから頑張るよ」

2人は頷いた。

「ありがとう。では、2人に……特に範人に見せたいものがある。ついてきてくれ」

天魔は静かに立ち上がり、部屋の出口にゆっくりと向かう。範人とジェットも立ち上がると、扉を開けて廊下へと歩み出た。

屋敷を出て里の中を歩き、たどり着いた場所は里の診療所の一室だった。

部屋の中央には全身を包帯でぐるぐる巻きにされた大男が横たわっており、苦しげに息をしていた。ひどい状態だが意識はあるらしく、目だけを動かして範人たちを見ていた。

「誰だ、こいつは？」

「邪我亜能登。天狗の里随一の戦闘班、第6戦闘部隊の隊長だ」

「随一……ということは、こいつが天狗の中で最強なのか？」

「能力や戦闘スタイルによって相性があるから一概にそうとは言えん

が、力だけなら間違いなく最強だ」

「なら、どうしてそんな実力者が……」

「わからん。だが、相手が相当な実力であることは間違いないだろうな」

天魔の言葉に頭を抱える範人。

いよいよもって面倒なことになってきたぞ、と心の中で呟く。

「諦めて土地を与えるっていう考えはないのか？」

「土地を与えるという考えはある」

「だったら、それで……」

「だが、諦めるといふ選択はありえない！」

天魔は強い口調で言い放った。

「我が防ぎたいのは天狗の株が下がることだ。諦めて土地を与えたとなれば、それは我々天狗の敗北を意味する。そうでなく、我は『勝利した上で土地を与えた』ことにしたいのだ。天狗の株を下げずに済むからの」

天魔の意見は理にかなっていた。

負けて土地を与えたのならば、それは奪われたと言うことになるが、勝った上で土地を与えたのならば、慈悲をかけたということになる。天狗の独占欲が強いという悪いイメージを弱めることにつながり、天魔の目指す人間との共存に近づくかもしれない。

しかし、人間との共存を望まない天狗はもちろんいるわけで、

「うぐう……天魔……それはダメだ……」

能登が苦しげに呻く。

「この山は俺たち天狗に代々受け継がれる大切な土地。人間風情にくれていい土地なんて、1坪もない……」

「怪我人は黙っておれ！ 今協力を時代だというのが何故わからん！ だいたい、今回の件もお主が勝手な行動さえせねば、我が自ら交渉に向いて解決していたというのに……。これだから頭の硬い古参は困る」

天魔はやれやれと首を横に振った。

確かに天狗は強い。身体能力は並みの生物を遥かに超え、寿命も桁

違いに長い。そのこともあってか、天狗はいつしか人間を見下すようになっていた。驕り高ぶっていたせいで、移り変わる時代の流れに追いつけないでいた。

「殺し、退けるといふのを間違った選択肢だと否定するつもりはない。しかし、逆に考えた時、何故我々はそういう選択肢しか選んでこなかった？ 同じ言葉を使い、同じような生活をしていたというのに、何故分かり合えない？ 我々が拒絶して逃げていたからだ。分かり合おうとしないのは、我々が弱いからだ」

天魔は鏡を取り出して自分を見る。その目は、まるで親の仇が死にゆく様子でも見るかのような、冷たい目だった。

能登は天魔を睨みつける。

「天魔……お前は首長でありながら、天狗を否定するのか？」

「否定はしない。だが、弱いとは思う」

「テメエ……絶対に殺してやる……！」

「相変わらず、物騒なやつだ……。力だけが全てではないのだぞ？」

「チツ……！」

能登は舌打ちをして黙り込んだ。一触即発寸前だった空気が薄れる。

「まあ、お主が武力行使に出てくれたおかげで良かったこともある」
「……え？」

「先に手を出したのが我々とは言え、仲間が傷つけられた。戦う理由としては充分だ。今回の件に関して、処分はないこととする」

「あ、ありがとうございます……！」

「よいよい。元はと言えば、迅速な対応をしなかった我が悪いのだ。必要以上に責めるようなことはせんよ」

いつの間にか、天魔の目は元の優しい目に戻っていた。

天魔は範人に顔を向け、

「して、範人よ。この傷を見てどう思う？」

「どう思う、と言われてもな……。何をどう思うんだよ？」

「何か感じたことはないか、ということだ」

「直接見なきゃわからん」

「ああ、そうだったの。包帯を剥がしてもよいぞ」

天魔に言われ、範人は能登に顔を近づける。

その時、能登の身体がビクツと跳ねた。

何事かと思つて能登の顔を見ると、恐怖の表情が浮かんでいた。

「な、なんでお前がここに……？」

「は？ 俺たち初対面だろ？」

「う、嘘を吐くな！ 俺はお前に……！」

「……？」

不思議に思う範人だったが、黙つて包帯を剥がす。

その傷を見た瞬間、範人の目がこれでもかと言うほど大きく見開かれた。

「どうかの？」

「……酷い傷だな」

骨折、打撲、裂傷、凍傷……。能登の身体には生きているのが不思議に思えるほどの傷がついていた。

裂けた腕、千切れた肉の間からは骨が見え、両脚とも骨が膝から外に飛び出していた。

しかし、何よりも目を引いたのは一目で重傷とわかるような傷ではなく、冬でもないのに何故か負っていた重度の凍傷と大して深くない切り傷だった。

……見たことがある。

すぐにわかった。自分の打った刀で斬られた傷なんて見間違えるはずがない。ほぼ全身にある凍傷も、範人には見覚えがあった。

「……天魔」

「ん、どうした？」

「相手が誰かわかったぜ。こりゃあ、本当にやばい相手だ……」

もともと険しかった顔がさらに険しくなる。

「そんなにまずい相手なのか？」

「話を通じるやつではあるから決してまずくはないが、勝てるかどうかかわらん。とりあえず、崖崩れくらいは覚悟しておいてくれ」

「それはまずいな。皆に知らせておこう。……相手の名前は？」

能力で天狗たちに意識をつなげつつ、天魔が訊ねた。
すると、険しい顔から一転、範人はニヤリと笑った。
「たびゆきれいじ旅行冷仁。俺の兄貴だ」

第104話

霊夢たち3人が滝を越えた瞬間、その一撃は飛んできた。風のうなり声が優の耳元を掠めていった。

驚いた一同が振り向けば、背後の岩に1本のクナイが深々と突き刺さっていた。

「散れー！ 狙われているぞー！」

優の叫び声がこだまし、3人がその場から飛び退いた。

岩陰に隠れて元いた場所を見れば、そこには大量のクナイが刺さり、地面を抉っていた。

岩陰に隠れるのがあと少しでも遅ければ、地面の役割を果たしていたのは霊夢たちだった。

「危ないところだった……」

全員の無事を確認し、優は安堵の息を漏らす。

岩陰からそつと顔を出して辺りの様子を伺うが、目の届く範囲内には自分たち以外に何者の姿も見当たらない。

相手からは自分たちのだいたい居場所がバレているのに、自分たちからは相手の居場所が全くわからない。まずい状況だった。

しかし、その程度で諦める3人ではない。

「魔理沙、霊夢。俺は岩陰に隠れながら進んでみる。安全が確認できたら俺が合図するから、その時に出てきてくれ」

「えっ!?? ダメだろ。相手は天狗だ。視力も聴力も私ら人間の比じゃない。一瞬でバレるぞ?」

「いや、問題ない」

魔理沙の注告に対し、優は首を横に振った。

「おそろくだけど、今攻撃してきた相手は飛び道具を使っても一直線上以外は攻撃できない。飛び道具はクナイか弾幕程度だ」

「何故そう言い切れる?」

「隠れているところを攻撃してこないからだ。相手のだいたいの位置がわかっている時、俺だったら爆弾使ったり、爆発する弾幕を撃つ。遮蔽物ごと吹っ飛ばすからな。でも、それをしてこないってことは遮

蔽物があつたら攻撃しても当たらないから意味がないってことだ。それに、俺にはこれがある」

優は手を広げ、半透明の霊力の塊を発生させると、両手で押し広げ、盾のように自身の前に浮遊させた。

霊夢と魔理沙は目を見張る。2人の視界から、突如として優の姿が消えた。

「消えちゃった……」

「いいえ、消えてないわ」

「ああ、俺はずつとここにいるぞ」

声が聞こえ、何もないとこころから優の顔だけが飛び出した。

「うわあー！ 生首だー！」

「生きている首という意味では正しいけど、首から下もすっかりつながってるぞ」

「喋ったー!?!?」

「そりや生首だからな」

そう言いながら、優は魔理沙に近づく。

「こつち来んな！」

「ひどい……(´・ω・´)」

一言のもとに撃沈した。

「まあまあ、落ち着きなさい。優もその程度で膝をつかない」

「そうは言っても、彼女の一言ってめっちゃ重いんだから……」

「何気ないリア充発言はやめてもらえるかしら？」

「すみませんでした！」

霊夢の額に青筋が浮かんだのを見て、優は咄嗟に謝る。女の嫉妬つて怖い。

「まあ、いいわ。透明化ってわけじゃないだろうけど、それなら敵の目を欺くのに充分だと思うわ。先の様子を見てきて」

「仰せのままに……」

霊夢をあまり刺激しないうちに、優は勢いよく岩陰から飛び出した。そのまま、一気に次の岩陰へ駆け込む。

クナイは飛んで来なかった。

優が手で輪っかを作ると、霊夢は手を振って「先に行け」と合図を出した。優は頷くと、岩陰に身を隠しながらさらに先へと進んで行く。

後ろからそれを観察する霊夢と魔理沙の目には、それははっきりと見えていた。

「なんで飛んでこないんだ……さつきよりもだいぶ前に進んでるって
いうのに……」

「簡単な話よ。敵からは優が見えてないだけ」

「どういうことだぜ？」

「さつき私たちに見せてくれたのと同じことよ。霊力で作った壁で光を屈折させて、自分の姿を消して後ろの景色を見せてるの。首だけに見えるのは壁の後ろから顔を出したから。優のいるところにはほんのちよつとだけ歪みが生じるから近くから見ればわかるけど、遠くから見ればまずわからないでしょうね」

光は透明度の差の境界面を通ると、屈折を起こし、時には全反射する。優は自身の弾幕に透過性があることを利用して弾幕の壁を作り、光を屈折させて相手が見ている風景から姿を消しているのだ。

ところが、残念なことに、優には力が足りない。姿を消すための精巧な弾幕は1つしか作れなかった。故に、正面からの視線は防げても背後から来る霊夢と魔理沙の視線を防げない。しかし、その背中はその存在を背後の2人に教え、安心感を与えていた。そして、姿が見えるということ、作戦の立てやすさにもつながっている。

「相手はそのうちしつかりと目視するために近づいてくるはずよ。気配はするのに、姿はまったくと言っていいほど見えないんだもの、直接近づいて調べるしかないわ」

「そこを私らが撃つわけか」

「その通り。こつちからは優の姿が見えてるから、誤射の心配もないわ」

「そうとわかれば、私らはただ待つだけだな」

2人からの期待の眼差しを背に受けて、優は岩の間を駆け回る。走って隠れて、走って隠れて。ただ、繰り返す。そうして、100メー

トルほど進んだ頃だった。

「来たわよ……い」

3人が目指している方向に、1人の白狼天狗が現れた。

1本の巨大な刀と真っ赤なカエデの葉が描かれた白い盾を装備したその白狼天狗は、辺りをキョロキョロと見回している。明らかに、優を探していた。

「よし、先手必勝だ……」

「待ちなさい」

攻撃を仕掛けようとミニ八卦炉を構えた魔理沙を霊夢が冷静に制する。

「向こうはまだ360度全方位を警戒しているわ。今撃てば、避けられる可能性は充分にある。警戒が一方のみに向いた瞬間を狙うわよ」

「……わかった。でも、どうすれば警戒を一方だけに向けられる？」

「それは、優が見つかった瞬間を狙うのが一番だと思うわ」

「優を犠牲にしろって言うのか!?!」

「大丈夫よ。あいつは能力2つ持ってたんだから。天狗に一撃でやられるほど弱くないでしょ。惚れたんだったら、どんな時でも相手を信じあげなさい。あいつの彼女なんでしょう?」

「……仕方ないか。わかった、信じようじゃねーか。お前が大丈夫って言うんなら問題ない」

魔理沙はミニ八卦炉を下ろし、再び様子を伺い始めた。

◇

「どこに行った?」

犬走権は呟いた。が、応えは返ってこない。

先程、人間の女2人と男1人を見かけ、咄嗟にクナイを投げた。驚いて帰ってくれば良かった。

今、この山の中に人間が入って来てはいけない。そう、天魔様が言っていた。

山頂の神社を退去させるための戦いがこれから始まる。邪魔をさせないためにも、これ以上奥へ踏み込ませるわけにはいかなかった。

「どこだ……」

……殺してでも止める。

権はゆつくりと目を閉じて、意識を集中させた。目で見えないのなら、それ以外で探し出す。

肌で空気の流れを感じ、耳で音を聞き、鼻で匂いを嗅ぎ分ける。

……2つの息遣い、2人分の匂い。先程見かけた女たちのものだろう。それほど近くはない。しかし、このままでは男が1人足りない。もっと集中を……。

その時、権の耳に微かだが足音が聞こえた。

ハツとして足音が聞こえた方向を見れば、そこだけ景色が少し歪んで見えた。

「そこかあー！」

「やべっり?!？」

歪んだ景色から声が聞こえた。

権は刀を振り上げると、歪んだ景色に向かって振り下ろした。目の前の景色が砕け散り、そこに隠れていた者が姿を現す。

「あー、まずい……こりやまずい……」

言いながら心の中で何度も悪態を吐くが、そんなことをしてもこの状況は一切変わらない。

自分は見つかってしまった。そして、目の前の白狼天狗は彼を斬り捨てようと、再び刀を振り上げていた。ただ、刀を支えている腕がこちら側に倒れば、それだけで自分は両断されてしまう。避けるか弾くかしなければ、人生終了である。

「む、小賢しい真似を……!」

しかし、権は後ろへ飛び退いた。

直後に、優の目の前——権の身体があった場所を光線が貫いた。

「ちよっ、避けられたじゃねーか! 優の方に意識が向いている間に撃てば良かったんじゃねーのかよ!」

「うっさいわねえ。あんたのコントロールが悪かったただけでしょう……」

「なっ……! 私^は霊夢の指示に従って撃つただぞ!」

「いくら私の指示に合わせて撃つても撃つ人が下手じゃ当たらないわ

よ」

「何をー……！」

……何やってんだ、あいつら。

優のはるか後方の岩の陰で、霊夢と魔理沙の喧嘩が始まっていた。不意を狙った魔理沙の光線は外れてしまった。しかし、決定的な隙が生まれた。

優は密度の高い霊力の弾を作り出して地面に叩きつけた。地面にぶつかった衝撃で割れた弾からは、弾の中で反射を繰り返し、増幅した光が、圧倒的な光量が解き放たれる。

突然のことに、椀はその光を直視してしまった。雷にも負けないほどの光が、彼女の目に飛び込んできた。

「ギヤアアアア！」

鋭い刃で目を貫かれたかのような感覚を覚え、椀は手で目を押さえ、地面をのたうちまわる。その間に、優はまた別の岩陰に逃げ込んだ。

「小癩な真似を……！」

数秒後、椀は立ち上がった。先程の光を受けたせいで、目が焼かれてよく見えない。非常に煩わしい。

椀は目の不調を振り払うかのように、刀を横薙ぎに一閃した。それを岩陰から見ていた魔理沙と霊夢は、驚きで目を見開くことになる。

太刀筋にあった岩が、まるで柔らかいステーキ肉を切った時のように音もなく切れたのだ。静けさの中、岩の崩れる音が響き渡った。静けさが、その刀の切れ味の良さを表していた。その刀は、あまりにもよく切れすぎた。

「なんだ、あの切れ味は……なっ!?? これは……！」

足元に落ちていたクナイを見て、魔理沙はさらに驚愕する。

「まずいぞ霊夢！」

「どうしたのよ……？」

「これを見ろ！」

魔理沙はクナイを拾い上げ、霊夢の目の前に差し出す。

「この材質、見たことあるだろ？」

「材質……？ え、これって……!?？」

「わかっただろ。あの切れ味の正体が」

「ええ、これは間違いなくモノリスね……」

生体金属モノリス。

元の金属の強度や硬度をそのままに、生物としての再生能力や成長能力を付与された金属である。傷つけば傷つくほど丈夫になり、傷も勝手に塞がる。故に、道具としての寿命が非常に長い。

しかし、便利な反面、加工が非常に難しく、それができるものは世界に1人しかいなかった。そして、それが誰なのかを、霊夢たち2人は知っていた。

「これ、範人の剣と同じやつだよ……。てことは、作ったのは範人か？」

「そうとしか考えられないわ。それなら、あの刀の切れ味だって納得がいくもの」

「これは……いよいよ本当にまずいぞ！ 優がマジで危ねえじゃねーか！」

すぐに優の方へ目を向ける。

権は既に、優が隠れている岩の前に立っていた。

「……」

権は無言で刀を振り上げる。狙うは一刀両断。岩の向こう側に人間がいるのは、匂いでわかった。

優は権の刀の切れ味を知らなかった。逃げるのに夢中で、見ていなかった。だから、安心しきっていた。余裕を感じていた。

「死ねえいー！」

その言葉から殺気を感じた。

優が頭上を見上げると、刀が岩を突き抜けているのが見えた。そして理解した。相手は岩ごと自分を叩き斬るつもりなのだ。

急いで岩から離れようと脳が身体に命令を出す。しかし、遅かった。当たらないだけの距離をとるよりも、刃が自分に到達するまでの時間の方が近いことがなんとなくわかった。

……やばい！

優はその場から動くことなく、腕を交差させて頭上に掲げた。避けることは諦め、防御を選んだ。

しかし、岩さえも軽々と切ってしまう刀の前に、人間の腕が2本入ったところで、斬撃を防ぐことは可能なのだろうか。否、鎧を着込んでいるのならともかく、生身の肉体ならば絶対に不可能である。

椀は真つ二つに割れていく岩の向こう側に立つ青年が、腕を交差させて防御の構えをとっているのを見た。

確信した。次の瞬間に、自分の腕に伝わってくるのは肉を切り裂く感触なのだ。2本の腕が宙を舞うのを視界の中に思い浮かべた。

1秒と経たずして、刀は優の腕に到達した。

ガキーン！

肉を切り裂く感触も、宙を舞う腕も、鮮血の赤も、何もなかった。鳴り響いたのは、金属同士をぶつけ合ったような、甲高い音だった。刀は弾かれた。わずか2本の腕に、岩をも切り裂く刀が負けた。その場にいた全員が目を丸くした。

「……いや、そんなはずはない」

椀の刀は間違いなく優の腕を捉えていた。それにもかかわらず、目の前の青年には傷1つ付いていない。その事実が、椀を困惑させていた。

……これは何かの間違いだ。もう一度切りつければきつと。

迷いを振り払うように、力任せに刀を振るう。

ガァン！

しかし、優の腕に刀がぶつかって響いた音は、またしても金属同士をぶつけ合ったような音だった。

「おかしい！……おかしいだろうー！」

こんな結果はありえないと、何度も刀を振るい、優の腕を切りつける。だが、やはり傷1つ付かず、同じような音が鳴り響くだけ。

岩が切れて人が切れないなんて、おかしい。

「あの人間、なまくらを渡したのかー！」

「もうやめろ」

振るわれた刀に対し、真正面から優の拳が打ち付けられた。

ゴン！

重い音とともにひしやげた刀が宙を舞った。刀が拳に負けた。

「鉄壁剛神を宿す、か。試したことのない最大出力だったけど、これほどなんてね……。かなりリスクの大きい賭けだったけど、まあ、耐えて良かったよ……」

優は安堵の表情を浮かべ、ホッと一息つく。

優の能力、『鉄壁剛神を宿す程度の能力』は彼の全身を硬く丈夫に変質させ、文字通りの鉄壁、またはそれ以上の防御力を生み出していた。

防御は最大の攻撃である。硬く丈夫な身体で攻撃を受ければ、その衝撃を全て跳ね返して相手にダメージを負わせ、自身は無傷。攻撃に対して、瞬間的な耐久力さえ上回っていれば、正しく無敵。天狗の筋力が合わされば、その反発力でモノリスさえも破壊した。

能力を発動させて圧倒的な耐久力と硬度を得た優に、それを上回る攻撃手段を持たぬ者が攻撃したところで、傷などつけられるはずがなかったのだ。

しかし、権は諦めなかった。

「まだまだー！」

「だからやめろって、本当に無駄なんだよー！」

優は、盾を構えて飛びかかってきた権に忠告するが、彼女は止まらない。そのまま、盾で彼の顔面を殴りつけた。しかし、倒れない。衝撃で仰け反るところか、痛みに顔を歪めることもない。

もうやけくそだった。何度も何度も、全身くまなく盾で殴った。しかし、優は平気な顔で立ち続けた。ただ、無抵抗で殴られ続けた。

「やめなさい、権！」

しばらくして、そこに声がかかる。

手を止めて声が出した方を向けば、射命丸文がいた。その背後には、範人とジェットンの姿もあった。

「何故です？ こいつは我ら天狗の領域に無断で立ち入ったのですよ。排除して何が悪いんですか？」

「無抵抗の相手を殴り続けるなんて、天狗の誇りに傷がつくわ。それに、さっきから見れば全く効いてないじゃない」

「くっ……」

「いいからやめなさい。そうですね、天魔様？」

『おお、その通りだ。もう止せ、椀よ』

椀の頭の中に天魔の声が響き渡る。

トップからの命令に逆らうわけにはいかず、椀は仕方なく盾を下ろした。

「私が入があるのはあなたですよ。霊夢さん、出てきてください。いるんでしよう？」

文の言葉を受け、霊夢は溜息を吐きつつ、岩陰から姿を現す。その後ろから、魔理沙も出てくる。

「何よ？ 帰れと言われても帰らないわよ」

「そこは問題ありません。頂上まで進んでいただいて結構です」

「あら、意外にもすんなり行かせてくれるのね」

「ええ。ただし、条件があります……。この先は天魔様から直々に説明してもらいましょう。私の手を握ってください」

言われるままに、霊夢は文の手をとる。すると、頭の中に声が流れ込んできた。

『おお、繋がったようだな。聞こえておるか、博麗の巫女よ？』

霊夢は思った。随分と子供っぽい声だな、と。

『子供っぽいとは失礼な。これでも僕は数百年生きてるんだぞ！』

心の声は筒抜けらしい。

『コホン！ ……まあ、よい。実は頼みたいことがあってな』

そして、天魔はこれまでのことを説明した。山頂に突如として神社が現れたこと。そこに住む者たちが立ち退いてくれないこと。その者たちを降参させたいこと。天狗の部隊がたった1人の力で壊滅的な状況に陥ったこと。その他諸々全て。霊夢の力を信じているからこそその頼みだった。

『範人殿とジェット殿は既に協力することを約束してくれた。2人も、実力は折り紙つきだ。そこに博麗の巫女も加わるとなれば、これほど頼もしいことはない。頼まれてはくれないか？』

「ちようど私もそこに用があるから、断りはしないわ。……でも、タダ

「じゃあ引き受けないわよ?」

『もちろん、協力してくれれば何かしらの礼は約束しよう。どうだ?』

「それなら、良いわよ。引き受けましょう」

『かたじけない。山頂まで、文と椀が付き添う。そこから後のことは任せたぞ』

話をついた。

霊夢は文の手を離し、深呼吸を一つ。

「ふう……。文、案内は任せるけど、魔理沙たちも連れて行くわよ?」

「それはもうご自由にどうぞ。戦力が増えるに越したことはありませんからね。お2人とも、確かな実力をお持ちのようですよ」

「許可は取れたってことで。それじゃあ、連れて行ってちょうだい?」

あの緑色の女には仕返しをしなきゃ気が治らないわ。私に喧嘩売ったこと、後悔させてやる」

「さては、そちらでも何かありましたね? なかなか気になるところですが、今は案内が先ですね。そっちは後でたっぷり取材させていただきますみましょうか。……それでは、私の後について来てください。風の道を作るので、移動はだいぶ楽になるはずですよ」

文は黒い翼を広げて、空に飛び立った。その後につき、霊夢たちも飛行を開始する。

妖怪の山に自然の風は吹いていなかった。1人の烏天狗の起こした風だけが、木々も草葉も揺らすことなく上空を流れていた。山全体が、不気味なほどに静かだった。嵐の前の静けさというものが、そこにはあった。

第105話

「来たか……」

その言葉に答えるように、境内に風の音が響いた。

妖怪の山、山頂にて。

守矢神社の本殿の中で精神統一をしていた、左目に眼帯をつけている金髪の青年——旅行冷仁は、スツと立ち上がり、境内に通じる扉を開けた。

他の住民も異変を察知したのだろう。境内には、守矢神社に住む者全員が集まっていた。

緑色の髪の少女——東風谷早苗が冷仁の方に振り向く。

「あ、冷仁くん。起きたんですね」

「寝ていたわけじゃない……。それより、覚悟はいいか？」

冷仁の言葉で、全員が顔を見合わせる。

そこに言葉はいらなかった。来るべき戦いへの備えは、既にできていた。

神としての存在を保ち、より強いものとするため。大切な者の消滅を防ぐため。それぞれの願いが、幻想郷を敵に回すという覚悟を与えていた。

「敵は7名。全力で迎え撃つ！」

その時、境内に突風が吹いた。

巨大な空気の塊が地面に直撃し、砂塵を巻き上げる。攻撃の気配を察知し、全員が身構えた。

やがて、砂煙が晴れた時、そこには7人の戦士がいた。

「遅かったじゃないか……」

背中にしめ縄を背負うという独特な格好をしている女性——八坂神奈子は嬉しそうに目を細める。

文が集団の中から一步踏み出した。

「私たちも準備が必要だったんですよ。そちらのあなた1人を相手にするのに一部隊で足りないならば、他の人も合わせればもつと戦力が必要なはず。とっておきを揃えるには時間が少々かかってしまいま

した。天狗の誇り、守らせていただきますよ?」

「誇りつて言っても、こんな簡単に縄張り踏み込まれてちや、世話ないねえ」

「冷仁、私は早く防衛戦したいんだけど?」

「好きにすればいい。……俺からすれば、用があるのはそいつだけだ」

目のついた帽子を被っている小柄な少女は洩矢諏訪子。

その彼女の問いに軽く答えた冷仁は、範人を指差した。

「久しぶりだな。大きくなったじゃないか、範人」

「それはお互い様だろ。あれから10年近く経ってるんだからな。成長しなきゃおかしい」

「ちよつと待つてください!」

互いに鋭い目つきで睨み合う2人に、早苗がストップをかける。

「冷仁くん、彼があなたの弟なんですよね?」

「そうだ」

「つまり、私の義弟おとうとというわけですね?」

「……そうだ」

「は……?」

話が読めない。

弟という言葉に範人が混乱する中、その目の前に早苗が歩み出る。

「冷仁くんからは常々話を伺っております。範人くん、ですね?」

「……そうだが、あんた誰だ?」

「おっと……そうでした。自己紹介がまだでしたね。私の名前は東風

谷早苗。冷仁くんのお嫁さんです」

「ヨメ……?」

範人は更に困惑し、冷仁の方に目を向ける。

呆れた様子で額に手を当てる冷仁だったが、その顔は耳まで真っ赤に染まっており、恥ずかしいという感情をほとんど隠せていない。

「……冷仁、どういうことだ?」

「ちよつとした間違いはあるが、概ねそいつの言った通りだ。そいつは将来的に俺の嫁になる」

冷仁は顔を上げ、呆れた様子の声で堂々と冷静さが伺える声色で

言った。しかし、その顔は未だに真つ赤であり、堂々とした態度はやけくその結果に出来上がったものにしか見えない。かつこ悪い。

早苗はドヤ顔になり、範人に近づく。

「というわけで、私は君の義姉ちゃんおねえになるわけです。こちらにはあなたの身内がいるんですよ。どうです、私たちの方につきませんか？」

「お断りしまーす」

笑顔で、チャライ感じで即答。

「冷仁くん！ 弟がお姉ちゃんの言うこと聞いてくれないんですけど!??!」

「こちらへ来る前にも言ったはずだ。そいつは味方にならないはずだと……」

「だからって、こんなにあつさりと断られるなんて思わないじゃないですかー！ お姉ちゃんですよ!??! 私、彼のお姉ちゃんなんですよ!??!」

範人を指差して、早苗が喚く。凄まじいほどの「お姉ちゃん」に対する執着である。

「だいたい聞いていたイメージと違うんですけど！ 髪が長くて可愛い顔した女の子みたい、ってどこにそんなイメージがあるんですか!? ? 筋肉モリモリマツチョマンのちよつと目つき悪い高身長イケメンじゃないですか!」

「早苗……人は変わるんだ」

冷仁は悲しい目になって言った。
「変わりすぎでしょう！ この写真の男の娘はどこに行ったって言うんですか!??!」

早苗が冷仁に一枚の写真を見せつける。そこには、眼帯をつけた少年と髪の長い少年が写っていた。写真の中の2人は笑っており、同じ金髪であることやどことなく似ている顔つきから双子であることがうかがい知れる。

「こつちの子が冷仁くんっていうのはよくわかります。左目に眼帯つけてますし、目つき悪いですし。でも、こつちの金髪ロングの可愛い

子がこの人っていうのはちよつと……」

「あ、これガキの頃の俺だわ」

「本当でしたか、ちくしょー!」

早苗は数歩下がると、ガツクリとしゃがみこみ、地面を指で突き始めた。

「うう……可愛い弟か妹が欲しかったです……」

その場に居合わせた一同の早苗を見る目には憐れみがこもっていた。

冷仁は静かにため息を吐く。

「さて、とんだ茶番を見せてしまったが、これでも俺たちはこの妖怪の山に入り込んだ侵入者だ。追い出さなければならぬのではないか?」

「その通りです! みなさんのお力で、こんな人たち、ちやつちやつやつつけちやつてください!」

いつの間にか霊夢達の一番後ろに隠れていた文が喚く。

「天狗様はああ言ってるが……?」

「もちろん、捻りつぶさせてもらおうわよ。私も少し借りがあから」

冷仁の問いに対し、霊夢は怒りを露わにしながら答えた。

「そうか……範人、お前はどうする?」

「その質問、答えはいらぬよな?」

「質問に質問で返すな……と言いたいところだが、正解だ。ついて来い。ちようどいい場所がある」

「ほーう、それじゃあ招待に預かりますかねえ」

「待ちなさい!」

その場を立ち去ろうとした2人を引き止める声が1つ。

冷仁の動きがピタツと止まり、振り返ると同時に鋭い視線が声の主を射抜く。あまりの迫力に権はビクツと身を震わせた。

しかし、権は吠える。

「何故、勝手に始めようとしているんですか?」

負けじと吠える。

「この戦いは複数対複数。数の勝負。複数人で一人を叩けば勝ちで

す。一対一の戦いなんて最初からできるなんて思わないでください！」

椀が刀を構える。対して冷仁は、

「そうか、貴様がさっきの……ほう……」

呑気に一人喋っていた。

「覚悟！」

刀を前に構え、突きの形で跳躍。

「そういえば、俺も貴様に言いたいことがあったな……」

瞬間、冷仁の姿が消えた。

椀の刀は空を切り、虚しさがその手に伝わる。

「逃げたか？」

「そんなわけないだろう」

「なっ……!?？」

ガシツと、椀の手首が掴まれた。背後からでも、横からでもなく、真正面から掴まれた。

いつの間にか、冷仁が椀の前に現れ、手首を掴んでいたのだ。

離れようと腕を引く椀だったが、手首を離す気配は一切ない。それどころか、冷仁は微動打にしない。

人ならざる者の、生物の最高到達点の一種が持つ尋常ではない力の前では、白狼天狗の力など無に等しかった。

冷仁は、そのまま椀の方へと一歩踏み出す。

「さっき、範人の刀を鈍なまくらと言ってくれたが、あいつの打つ刀は鈍じゃない。鈍なのは、お前の腕だ。あのような細腕、俺ならば軽々と切り落としてみせよう」

弟への侮辱は、我が身への侮辱よりも腹立たしいことだ。冷仁は完全に怒っていた。

周りから見れば、冷仁の目が光を放っていると錯覚するほどの迫力。

そのあまりの迫力に、椀は背筋が冷たくなるのを感じた。膝がガクガクと震えている。

「失せろ、雑魚が……」

そう小さく囁き、冷仁は椀から手を離した。
途端に緊張が解けた。

恐怖のあまり、失禁。椀の股間からは、情け無い黄色い液体が、流れ出していた。

呼吸が乱れ、世界がネガ反転する。椀は半べそをかきながら、その場にへたり込んでしまった。

文が椀に近づき、後退を促せば、彼女は黙って鳥居の外へ出た。

相手から戦意が完全に喪失したことを確認し、冷仁は範人の方に向き直る。

「邪魔者はいなくなったな。早く行こうじゃないか」

「いや……まあ、うん。早く行った方が良かったのはわかるんだが、あまりにも容赦がなさすぎやしないか？ 女の子だぜ？」

「そんなこと知るか。たとえ女子供だろうと、俺は容赦しない。どんな相手であれ、敵ならば斬り捨てるまでだ。襲いかかってきたのなら、答えは1つだろう。ましてや、我が弟の侮辱など言語道断。命があるだけ、ありがたいと思うべき愚行だ」

「やべえ兄貴を持ちまつたぜ……」

範人は「やれやれ」と溜息を吐く。

冷仁のブラコンにも困ったものである。

◇ 範人は苦笑いしながら、兄の背についていくのであった。

一歩も動けなかった。

2人がいなくなつた後の境内は、静寂に支配されていた。

その静寂を魔理沙が破る。

「いったい、何が起こっていたんだ？」

「わからないわ……」

「霊夢でもわからないのか、まいったな……」

わかったことと言えば、冷仁には妖怪をも遥かに凌ぐ力があるということだけ。

姿を見えなくするような能力ならば気配は残るが、冷仁の気配は完全に消えていた。能力がわからない。

相手の手の内がわからないのであれば、対処のしようがないと、

「僕、見えましたよ……」

そう言っつて、おもむろに手を挙げたのはジェットだった。

霊夢たちの注目が彼に向く。

「あの人、姿が見えない間、後退していたんです」

「後退？ 近くにはいなかったぞ」

「距離が桁違いだったんですよ。あの一瞬で、博麗神社まで跳躍して戻ってきたんです」

……ちよつと言っつてる意味がわかりません。

皆がそう思った。

一方、

「みんな驚いちゃつてるねー。良いね良いねー、その反応」

「自分で言うのもなんだが、私らも敵わないからねえ」

「ふふふ、どうです？ ウチの夫は強いでしょう？」

「もおー、夫だなんて。早苗は気が早いなあ」

早苗たちは勝利を確信し、ドヤ顔を浮かべていた。

圧倒的な力を持った強者。それに守られる者。彼女たちと敵対することは、冷仁との敵対を示していた。勝ち目はほとんどないと思っ

た。

しかし、その程度で諦める霊夢たちではなかった。

「いいえ、大丈夫よ。私たちは私たちにできることをしましょう。まずは目の前にいるこいつらをやつつけなきや」

それはただの出任せだったかもしれない。しかし、その言葉は彼女たちを大いに勇気付けた。

早苗の目が細くなる。

「やはり、諦める気はないのですね。わかりました。徹底抗戦です」

早苗が身構え、促されるように神奈子と諏訪子も構える。霊夢たちも身構えた。

多数対多数、数の利は霊夢たちにあった。しかし、目の前にいるのは2柱の神と1人の人間。戦力にそれほど差があるようには思えない

かった。

「我ら、信仰のために！」

「博麗神社の名誉、ついでに天狗のため！」

「霊夢さん!?? 天狗がメインなんですけど!??」

ジエツトの声が聞こえた気がするが、無視。

両陣営から同時に大量の攻撃が撃ち出され、炸裂、相殺。ついには大爆発を起こした。

爆風により土煙が上がり、全員の姿を隠した。

何が起きているのか、近くから見ている権にすら、煙の中の様子はわからなかった。

◇

やがて、煙が晴れた時、そこに残っていたのは幼い2人の姿だけだった。

第106話

「はあ……はあ……なかなか派手に吹っ飛ばしてくれたわね」

木々の間から守矢神社の本殿が見える。境内の外まで飛ばされてしまったことは間違いない。

距離にして数十メートル。しかし、それだけ吹っ飛ばされたにも関わらず、不思議と痛みはなかった。

霊夢は服についた木の葉を払い落としながら、自身の背後に目を向ける。

「おやおや、気づかれましたか。これはびっくりです」

「私の方がびっくりよ……」

呆れた表情で霊夢は言う。

背後には早苗がいた。木の枝に服の背中側が引っかかり、宙吊りの状態で。

かなりかつこ悪い状態のはずなのに、早苗は偉そうに上から目線。ドヤ顔まで浮かべている。

外界の人間は恥を知らないのかもかもしれない、と霊夢は思った。

「……あんた、そこで何やってんの？」

「見ての通り、木に引っかかって宙吊りになっていますー！」

「そう……わかってはいるなら良いわ。私があんたをぶちのめしたいと思っていることも覚悟しているんでしようからね！」

言いながら霊夢は大幣おおぬぎを掲げた。霊力で構成された赤く光る球体が、早苗に向かって飛んでいく。

しかし、早苗は一切避ける素ぶりを見せない。それどころか、ドヤ顔を崩すこともない。

自信はあった。相手は碌に戦い方も知らないはずの外界の人間。先程の青年は刀を持っており、天狗を切り捨てたという話もあったが、あの範人の兄なのだからおかしくはない。

それに比べて、目の前にいるのはただの少女。服装からして神職についているようではあるが、そこまで強い力を持っているようには見えない。大方、冷仁に守ってもらおう予定だったのではないだろう

か。

不安になる自分にそう言い聞かせ、霊夢は早苗に迫る霊力弾を見つめる。

このまま真つ直ぐ飛べば直撃する。

「なっ……………!?!?」

……………はずだった。

「ふー、やっと外れました。これで身動きが取れますね」

その足で地面に立ち、軽く背伸びをする早苗。

霊夢の霊力弾が早苗に当たる直前に風が吹いて軌道が変わり、彼女が引つかかっていた木の枝を撃ち抜いたのだ。

「……………いったい何をしたの?」

「さあ? 私にはさっぱりわかりませんね。気持ちの問題では?」

「気持ちの問題で外れるわけがないでしょう! 奇跡でも起きなきや外れやしないわよ!」

「だったら、その奇跡が起きたということなのでは?」

言われてハツとする。

霊力弾は霊力でできているのだから、風による物理的な干渉は基本的に受けない。風の干渉を受けるとすれば、その風に霊力や妖力が含まれていた時。ここは妖怪の山なのだから、風に妖力が含まれていたとしてもおかしいことはない。

しかし、普段気にするほどでもない風が吹いただけで弾幕が曲がった。よっぽど強い風でもない限り、そんなことは起こるはずがない。

そう、奇跡。奇跡が起きたのだ。奇跡的に妖力の濃い風が吹き、霊力弾から早苗を守ったのだ。

ならば、二度も同じことが起こるはずがない。それは奇跡なのだから。

霊夢は焦りつつも冷静に狙いを済まし、手のひらから霊力弾を発射した。

一方、早苗は相変わらず避けるつもりなどないかのように、笑みを浮かべたまま直立不動。

このままならば直撃する。しかし、またしても風が吹いて霊力弾の

軌道を変えてしまった。

「なんで……そんなバカなことが……！」

すぐさま霊力を集めて霊力弾を発射。目の前の少女へ向けて、何度も何度も繰り返し返し撃つ。密度を変え、速度を変え、美しい軌道を描くように撃ち続ける。

しかし、どれも当たらない。

霊力弾が早苗に当たりそうになる度に風が吹き、軌道をずらしてしまふ。なおも諦めずに撃ち続けると、次第に風の勢いが増していき、ついには霊力弾自体を弾き返すほどになってしまった。

流石の霊夢もあまり大量に霊力を消費するのはまずいと、攻撃の手を止める。

「どうしたんですかア？ 全然当たりませんよオ？」

「ぐっ……こいつ……！」

明らかにバカにしている態度に、思わず殴りかかりそうになる霊夢。しかし、相手の手の内がわからない状態で近づくのは、もはや自殺行為でしかない。

なんとか踏みとどまり、相手の観察に努める。

「おやア？ 来ないのですかア？ 来ないなら、こちらもやらせていただきますよ！」

薄い緑色に輝く大量の球体が霊夢に向かって飛んでいく。

しかし、

「遅いわね」

霊夢はまるで舞うような動きで霊力弾の間を軽々とすり抜けていく。隙間があれば入り込み、逃げ場に困っても既に発射してある自身の弾が相殺して道を作る。

一連の攻撃を避けきって早苗に目を移すと、彼女は肩で荒く息をしていた。既にスタミナ切れを起こしているようだ。

「あなた、戦いには慣れてない感じね。今の弾幕、すごく薄かったわよ。避ける隙間はたくさんあったし、弾1つあたりの耐久力も弱かった。私の攻撃1発で5発は打ち消せたわ」

「それがなんだって言うんですか？ 攻撃が当たらないのはあなたも

同じではありませんか。当ててしまえば私の勝ちですよ！」

「当ててしまえば勝ち？ 何をバカなこと言ってるのかしら。あんなへなちよこ弾幕当たるわけないじゃない。あんなの当たったら奇跡よ」

「ほほう、奇跡ですか。……バカにするのも大概にしてください！」

再び、早苗が大量の弾を発射した。

しかし、相変わらず狙いが甘い。弾幕ごつこの熟練者である霊夢からすれば、容易に回避できる密度とスピード。今度は相殺することもせずに、とにかく避けていく。

その時、またしても風が吹いた。

山を駆け抜けるだけの直線的な風なら良かっただろう。しかし、今度の風は極めて異質なものだっただ。

全方位から霊夢に向かって風が吹いた。彼女を中心に軽いつむじ風が発生したのだ。

まだ霊夢に到達していない弾も既に避けた弾も、全ての弾がスピードを増して彼女に向かっていった。

「くっ……このオー！」

流石の霊夢も弾幕を展開し、相殺を試みる。が、

「なんで壊れないの!?」

早苗の弾は威力が増していた。先程とは逆に、霊夢の弾が打ち消されてしまう。

咄嗟に、霊夢は身をかがめた。

早苗の弾はつむじ風になり、背中を掠めながら上空へと飛んでいく。

瞬間、つむじ風が消え、冷たい空気の塊が地面に叩きつけられた。少し遅れて早苗の弾も地面に叩きつけられるが、霊夢は地面を転がって回避する。

「危なっ……なんて威力！ さっきは大したことなかったのに！」

振り向けば、つい直前まで霊夢が立っていた地面が大きく抉れている。早苗の弾はその一点に叩きつけられたのだ。まるで霊夢を狙っ

たかのように、確実にその一点だけに。

「ほう、全てかわしたんですか。運が良かったですね」

少し驚いた様子で早苗が挑発めいた言葉を投げつける。

「このぐらい余裕よー。いくらでもかわしてやるわ」

霊夢も負けじと強気な言葉を返すが、内心焦っていた。

霊夢は博麗の巫女。博麗の巫女は、代々、幻想郷の均衡を保つために妖怪や異変を相手に立ち向かうことを運命づけられ、それらを退治し、鎮圧してきた。それだけのことができるかと判断されて、霊夢もまた、博麗の巫女の立場にいる。すなわち、博麗の巫女は幻想郷における巨大な勢力の一角と言えるのである。

しかし、今はどうだろうか。

最初こそ優勢だったものの、外界から来た新参者を相手に手こずっている。日頃の鍛錬が足りていないのか、それとも相手の成長が異常に早いのか、原因は不明だが、敗北を喫するかもしれない窮地に陥っている。

空に浮かんだ早苗を見上げれば、その背後の景色も自然と目に入ってくる。そこに澄み渡る青空と眩しい太陽はなかった。上空は、いつものまにか巨大な雲に覆われてしまっていた。

まるで、霊夢の心情を表しているようである。

「これで終わりです！ 秘術『グレイソーマターズ』」

早苗が弊を一振りすれば、周囲に霊力弾が大量に生成され、星型の並びになって周囲を飛び回る。

霊夢はすぐに立ち上がって攻撃を避けにかかる。軽やかな動きで次々と弾をかわし、同時に弾幕も展開する霊夢。その顔に余裕はなかったが、攻撃に当たる気配は一切ない。

その様子を見て顔をしかめる早苗だったが、すぐに余裕の表情に戻り、攻撃を続ける。一方の霊夢も熟練の動きで避け続ける。

しばらくすると、不意に空気が変わった。

「またっ？」

不穏な風が吹いた。

上昇気流が発生し、妖力を乗せた風が2人の霊力弾を巻き上げる。

まるで、上空の雲に吸い込まれるかのように、放っておけば霊夢に当たっていたはずの弾も巻き込んで。

霊夢は少し安心した表情を浮かべる。

「まあ、あの程度簡単に避けられたけど、今ので体力温存できるわ」「本当にそうでしょうか？」

「ええ、あの程度余裕よ。あんたとは場数が違うのよ」

「言ってくれますねえ……！　これを見て、そんな台詞が言えますか？」

早苗が天を指差す。その指の動きにつられて上空を見ると、巨大な雲はさらに大きく、黒く成長していた。雨こそ降っていないものの、時折轟音と共に雲の中に稲光が走るのが見える。

大気が生み出す空の化け物、積乱雲。空における最強クラスの災害である。

先程から吹いていた上昇気流が、空にあった雲を急速に成長させ、積乱雲に進化させたのだ。

「さっきの風では足りなかったみたいですからね。いきますよー、それっ！」

早苗が掛け声と共に弊を振り下ろした瞬間、冷たく凄まじい突風が地面に叩きつけられた。それにつられて、先程吸い込まれていた霊力弾や積乱雲の中で形成された雹が猛スピードで降り注ぎ、霊夢に襲いかかる。

ダウンバースト。積乱雲の中に溜めこまれた大量の冷たい空気の塊によって生まれる強烈な下降気流である。その風速は通常でも秒速30メートル、更に強くなるとその倍に達することもある。

——マズいマズいマズいマズい！

先程のつむじ風の時点で早苗の弾の破壊力は霊夢のものを超えていた。それが更に強化されていることを考えると、打ち消すことは不可能。そんなものが降り注いでくるというのだ。

避けることは困難。当たれば1発でダウン。奇跡など関係なく、敗北はすぐそこに迫っていた。

「あはっ……」

轟音が響くが、不思議なことに痛みはなかった。

目を開いてから、霊夢は驚く。

弾は1発たりとも当たっていなかった。全て、霊夢の周りの地面に落ち、クレーターを生み出していたのだ。

霊夢が立ち上がると、早苗はわなわなと身体を震わせる。

「なんで当たってないんですか!」

「……さあ、私にもわからないわね」

「くうー!」

悔しそうにギリギリと歯噛みする早苗。

対して、霊夢は冷静に状況を分析していた。幾度とない戦いを超えてきた彼女の本能が、霊夢に冷静さを取り戻させたのだ。

霊夢は早苗の言葉に違和感を感じていた。何故、自分の攻撃なのにそれに対する意見が、「当たっていない」などという受動的な言い方だったのだろうか。まるで、最初から実力で当てようとしていたわけではないような言い方である。

そして、実力がないことを裏付けるかのように、すぐにスタミナ切れを起こすほどに体力がないこと、弾幕の張り方が甘く、狙いもよろしくないことがわかつている。

実力がそれほどではないにもかかわらず、勝ちを取りに来る。それも、ここまで霊夢を追い詰めるとなれば、そこになんらかの特殊能力が働いていることは確実とも言えよう。

更に、その能力が切れたタイミングもほぼ判明している。積乱雲に吸い込まれた霊力弾がそこから射出され、地面に到達するまでの間である。早苗の発言からして、霊力弾が射出されたタイミングでは当たることが決まっているようだった。

霊夢はその間に起こった変化を頭の中で箇条書きに並べていく。例え、物理的でなくとも、どんな小さな変化であつても良い。そこには必ず能力解除のトリガーとなる変化があつたはずなのだ。

霊夢は心を切り替え、最大限の警戒を早苗に向ける。

「ハッ、もしかして……いやでも気づかれてはいないはず……そう、まだ私の攻撃はきつと当たる……! 当たるはずなんだー!」

独り言から叫び声へ移行、そして共に飛来する霊力弾。

しかし、狙いが悪く弾速も遅い。全て霊夢の脇を通りすぎ、地面に当たって消滅していく。

——やはり、大したことないのではなからうか。

そう思った瞬間だった。

「食らえッ！」

突如、風が吹き、またしても霊力弾が加速した。

能力が切れていなかったことに気づき、驚きつつも咄嗟の動きでかわしきる。早苗は依然として危険な存在であると、再確認する羽目になった。

「油断しちゃダメみたいね……」

それは、自分への注告であり、くだらない独り言のつもりだった。

しかし、霊夢はハツとする。

早苗の能力のトリガー、その答えが潜む暗闇に一筋の光が差し込んだ。

「もしかして……」

霊夢は早苗への警戒を心の中で一瞬緩める。その瞬間、またしても風が吹いた。すぐに警戒を最大限に戻すと、風が止んだ。

「なるほど！」

「チツ……！」

笑みを浮かべる霊夢と、苦々しげに舌打ちをする早苗。

霊夢が早苗のカラクリに気づいた瞬間の2人の仕草は全く異なるものだった。

霊夢はたんつと地面を蹴り、宙へ浮かび上がった。早苗と同じ高さに立ち、フフンと鼻を鳴らして得意げに睨みつける。

「あなたの能力わかったわ。流星に名前まではわからないけど、あなたは人がありえないと思っっていることを実現させる能力を持っている。相手が無理だと思っていればなんだってできる。まるで、奇跡を起こすみたいだね。今回は、私が『負けるわけない』と思っただけから能力が発動した。きつと、誰もが無理だと思っっている比較的規模が大きなことは簡単に起こせるけど、今回の個人に勝つみたいは限定的

なことは相手の感情がないとダメだったようね」

「バレちゃいましたか……。そうですよ、私の能力は『奇跡を起こす程度の能力』と言います」

早苗が力なく笑う。

「初手で私に対してショボい弾幕張ったのは、私を油断させるため？

それとも実力？ まあ、どちらにせよ良い作戦だったわ。私は幻想郷の大きな勢力の1つに数えられる博麗の巫女。一個人に負けることなんてほとんどないから、大抵の相手を甘く見ることが多いし、負けるはずなんてないと思ってた。自分を見直す良い機会になったわね」

「途中から全力、出したんですけどねえ……」

「本気出しても元から下手な鉄砲、数撃つても当たらないわよ。能力に頼りすぎてきたツケね。……さて、どういたぶってあげようかしら？ 私の神社をバカにしたこと、そう簡単には許さないわよ」

青ざめる早苗。

ニヤリと笑みを浮かべる霊夢の背後に、黒い鬼を見た。

自然と両手は上がっていた。

「何、その手は？ 降参のつもりかしら？」

「は、はい……。降参、です……」

「私の言ったこと聞いてなかったの？ 簡単には許さない、って言ったんだけど」

「で、でも、私が降参したから、もう勝負はついて……！」

「そう、勝負はついている。……けれど、それはあくまで、勝負の話でしかないわ。覚えときなさい。私を殴ったら、それ以上の力で殴り返されるのよ！」

瞬間、早苗が背を向けて走り出した。

攻撃を受ける前にこの場から逃げ出そうというのだ。

森の中へ。とにかく遠くへ。遮蔽物の陰に隠れながら。相手から距離を取る。恐怖はオリンピックピック選手にも負けないほどの速さで、彼女を走らせた。

「夢想封印！」

霊夢の周りに巨大な光弾が出現し、勢いよく発射された。木々の間をすり抜け、最短ルートで早苗に迫る。

数十秒後、妖怪の山全体に聞こえるような凄まじい悲鳴が響き渡った。

特別編・番外編 ハロウィン特別編

『Trick or treat!』

子供たちの声が響く。

今日はハロウィン。どこから流れ込んだのかはわからないが、この異国の文化は幻想郷にも存在する。日本人は元々お祭り好き。そんな彼らの性質に受け入れられたのだ。

子供たちからすれば、お菓子がもらえる祭日。しかし、大人たちからすれば、そうはいかない。

この日のために、買ったお菓子の分だけ金が飛ぶのだ。美味しいお菓子も大人たちにとっては美味しくなかった。

「チキショー、持ってきてやがれ!」

また一つの家が犠牲になった。

近隣の住民は恐怖する。子供たちは可愛い顔をした悪魔なのだ。この日だけは、家からお菓子を搔つ攫つていく悪魔なのだ。

おまけに、子供たちの列の中には本当の意味での悪魔（妖怪や妖精）も混ざったりしているため、あまり逆らえないのである。

人里を回り終える頃。戦利品を抱えたチルノが口を開いた。

「ねえ、大ちゃん。橙がないけど、どこ行ったか知ってる?」

「橙ちゃんなら、範人さんの家に行くって言うってたよ。範人さんがハロウィンパーティーを開いているんだって。」

「パーティー……楽しそうなのだけ。」

大妖精の言葉にルーミアが羨ましそうに言う。

実際、かなり大食いな彼女からすれば、羨ましいのである。流石に、白玉楼の主に比べれば、まだ可愛い食いつぶりなのだが……

ルーミアの顔を見たチルノが何かを思いついたように手を叩く。

「そうだ。アタイたちも行っちゃえばいいんだよ。」

「でも、迷惑なんじゃ……」

「大丈夫だよ！」

「え？」

チルノは自信有り気に言う。彼女の言葉に大妖精は驚きの声を上げた。周りの子供たちが見つめる中で、チルノは自信たっぷりに、フフフと笑う。

「それは……どうしてだ？」

「それは……」

チルノの答えを待つ子供たちはゴクリと唾を飲み込む。しかし、その答えはあまりにも呆気ないものだった。

「範人だからだよ！」

『なんだそりゃ！』

チルノのあまりにも単純な答えに、子供たちは誰に命令されたわけでもなく、一斉に片手を上げてツツコミを入れた。

子供たちも範人がどれほど優しいか、わかっていないわけではない。しかし、流石に飛び入り参加はどうかと思っている。

「さあ、そうと決まったら行こう、行こー！」

チルノは範人の研究所に向かう。他の子供たちは躊躇いながらも、やれやれと彼女に着いて行く。

勢いのあるバカは先導者に最も向いているのかもしれない。チルノよりも賢い子供たちは全員がそう思った。



ゴートレック生物研究所。

範人と妖夢はキッチンでお菓子作りに勤しんでいた。キッチンにはクッキーの焼ける香ばしい匂い、チョコレートの甘い香りなど、スイーツ店顔負けの香りが漂っている。

今日はハロウィンと言うこともあり、アメリカ育ちの範人はこういうイベントに対して、全力投球である。

既に来る者は決まっているが、結局は追加で誰か来るのだろう。最早、それがイベントの常識だと、範人は幻想郷ルールに染まっ

てきていた。作るお菓子は追加分も考えて、確定している者たちの分の3倍ほどである。

そんな時、玄関のドアがノックされる。範人は手を拭きながら玄関に向かい、ドアを開ける。そこにいたのは、魔理沙と優だった。魔理沙は普段通りの格好だが、優は異なる場所があった。彼には普段の服に加えて、猫耳と尻尾が着いている。

「あれ？それはコスプレか？」

「う、うん。コスプレだけど…「違うぜ！」ちよ、ちよっと魔理沙!?!」

「これを見てみる！私の薬の結果だぜ！」

魔理沙は優の上着を下着ごと捲り上げる。すると、優の服の下から、控えめなものの膨らんだ胸が現れた。どうやら女体化させられてしまったらしい。範人は手を顔の前にかざして、ソレが見えないようにする。

羞恥に耐えられず顔を真っ赤にして暴れる優の尻尾を魔理沙が掴むと、彼は一瞬で脱力した。魔理沙は満足気な表情で範人に顔を向けるが、彼は苦笑いで返した。

羞恥からションボリとしている優を見た範人は空気を切り替えるべく、2人を別館に送る。

「さて、ケモツ娘のチツパイなんぞにとらわれず、お菓子作りだ！（さっさと切換えろよ、俺。今のは不可効力だ……）」

範人は自身に喝を入れ、キッチンに戻った。



「できたー！」

キッチンに男女の声が響く。範人と妖夢の眼前にある机の上には大量のお菓子が個別に包装されて、並べられている。種類は様々。その中には酒を使ったものもあり、酒豪が揃う幻想郷でも人気が出そうだ。

2人はやり切った表情をしている。しかし、工程はまだ終わりではない。これら大量のお菓子を会場まで運ぶ必要があるのだ。形

を崩さずに……

「範人、これ……どうやって運びましょう……」

「まあ、頑張つて普通に運ぶしかないな。」

「優があんなだし……」

耳をすませると「ニヤアアア♀」と言う優の叫び声が聞こえてくる。おそらく、尻尾でも愛撫でされているのだろう。

神経が集中し、敏感な尻尾は感じやすい部分。生物学者である範人にはそれがわかつているのだが、尻尾を性感帯だと決め付けたヤツはどここのどいつだ？と疑問が隠せない。

「ひとまず、スキマ倉庫を上手く使つて運ぼうか。」

「はい。」

範人はスキマの封力石を取り出し、スキマを開いた。その中にお菓子を丁寧に合わせていく。幸いにも、お菓子は種類ごとに分けてあったため、スキマに移すことで混ざること、変な風にぶつかりあつて形が崩れることもなかった。範人と妖夢はホッと一息吐き、別館に移動した。

別館にはとろけた表情の優が居たが、2人はその原因についてあまり考えることなく、黙々とお菓子を並べていく。

数分後に並べ終わつたとき、机の上では丁寧に並べられたお菓子たちが証明の光を受けて輝いていた。2人は満足したように顔を見合わせて笑い合う。

「じゃあ、俺は着替えてくるから。みんなが仮装しているんだから、俺もしないとな。」

「……覗くなよ……」

「大丈夫です。もちろん、見に行きますから。」

「おいおい……」

範人は自室に向かう。妖夢もその後についていくが、範人は粒子化してダクトに逃げ込み、一瞬で自室に辿り着いた。粒子化した状態で用意していた包帯に身体を通せば、アツと言う間にミイラコスチュームである。

妖夢が部屋の扉を開けたときには既に範人が着替え終わった

後だったが、範人は筋肉を体内に圧縮して隠すことを忘れていたため、一番恥ずかしいマッチョ体型を見られることとなってしまった。



ハロウィンパーティー開始5分前。

会場には紅魔館の住人や永遠亭の住人など、多くの者が集まっていた。範人の予想通り、魔理沙が広めたであろう情報で、参加者がドツと増えたのだ。

当の魔理沙は優の猫耳を触りながら、パーティーの開始を今か今かと待っている。一方の優はいじられることに快感を覚えてしまったらしく、気持ち良さそうに喉をゴロゴロと鳴らしている。

しかし、多くの参加者がいるにもかかわらず、その会場にはまだ主役が居ない。ハロウィンを楽しんでいる者たちがまだ居ないのだ。

「俺の見立てではそろそろ来る頃なんだが……」

範人が心配をしていると、不意に玄関のドアがノックされた。範人は全身を粒子化させて高速で移動。客を対して待たせることなく、ドアを開けた。

『Trick or treat!』

子供たちの口から、同じ言葉が同時に飛び出す。範人はその言葉聞いて笑顔を返し、彼らを別館に招き入れた。

子供たちが会場に入った瞬間、パーティーが始まった。

チルノは相変わらず生意気、ルーミアは大食い、大妖精は控えめ。しかし、今日はそれでも構わない。今日と言う日を楽しむ者は……主役は子供たち^{彼ら}なのだから。

その日、子供でないにもかかわらず、幽々子が子供たちの中に混ざってお菓子をせがんでいたのは記憶に新しいだろう。

『Happy Halloween……』

スペルカードリスト

キャラクター名：旅行 範人

粒符『パーティカルストーム』

粒子の竜巻を二つ発生させて、相手の周りを衛星のように公転させる。それぞれの竜巻は弾幕を発射する。さらに、自分はその周りを回って、相手に向かって弾幕を発射する。

破斬『大切断ハルバード』

手に持った剣を斧に変化させてフルパワーで振り下ろす。斬撃は衝撃波となって飛び、ありとあらゆるものを断ち切る。とんでもない威力。

分裂『超再生の果て』

自分の再生力を飛躍的にアップさせるスペルカード。受けた傷が一瞬で治る。また、身体がバラバラになってもその全てがそれぞれ一体の生命体として再生する。分裂して増えたものを残り一体まで減らすか、時間経過で解除される。

炎舞『紅蓮爪拳舞』

第一の変異時のみ可能。全身に炎を纏うことによって、攻撃力と攻撃のリーチが上がる。

炎陣『フレイムライン』

第一の変異時のみ可能。全身を炎の粒子に変えて相手の周りを取り囲み、その状態から弾幕を放つ。さらに、可燃性の粒子を飛ばして粉塵爆発を起こすことでも攻撃する。使用時はほぼ無敵。

爆散『ブレイズグレネード』

第一の変異時のみ可能。爆発する炎の弾幕をばらまく。弾幕は爆発すると分裂し、爆発する度にはほぼ無限に分裂する。

昇拳『ライジング・レイブ』

第一の変異時のみ可能。格闘技。相手に炎を纏ったアッパーを放つ。0.1秒で50発。肘から炎を噴き出すことにより、威力とスピードがとんでもないことになっている。

天獄『ヘブンズ・ヘル・ファイア』

第一の変異時のみ可能。相手の上下から特大の火柱が発生する。全てを焼き尽くしてしまうような威力。

雷符『エレクトリックウエブ』

第二の変異時のみ可能。金属の粒子を並べることで蜘蛛の巣型に電流を流す。相手の動きを妨げることに優れている。

天雷『ヴァジュラズレイン』

第二の変異時のみ可能。槍に電流を流して突くことにより電撃を飛ばす。電流で筋肉を刺激しながらの攻撃になるため、弾数、スピードがある。その様子はまさに雷の雨。

電磁砲^{レールガン}『パラケルススの魔剣』

第二の変異時のみ可能。その名の通り、電磁砲。超威力の電撃を放つ。とんでもない威力。

キャラクター名：デューレス・タイラント

壊符『ハートブレイク』

ハート形の弾幕で相手を覆い、そこに弾幕をぶつけることでその弾幕を崩して攻撃する。その名の通り、ハートを壊す。

鎖槌『逆襲の亡霊』

ハンマーをハンマーチェーンにして、弾幕でコーティング。それを振り回す。ハンマー自体はもちろん弾幕だが、ハンマーが描いた軌跡からも弾幕が発射され、ハンマー自体からも発射される。

地縛『グラウンドグリップ』

相手の足を地面とつなげて飛べなくする。しかし、片足が地面についていけば、動くこともできるため決してチートではない。動きを妨げるだけ。

巨神『星砕きの鉄槌』

超特大ダメージの近接攻撃。弾幕を纏わせたハンマーを叩きつける。敵に当たらなくとも、弾幕は周りに弾け飛び攻撃になる。

キャラクター名：難波 優

反符『リフレクションスペース』

自分の周りの空間を重力が強い空間に入れ換え、さらに重力は自分

から見て外側に向ける。相手の弾幕は反射され、自分が放った弾幕は加速する。攻撃というよりは、防御技。

換符『ランダムバレット』

弾幕を大量に放ち、それぞれの位置だけをランダムに入れ換える。位置が変わっても、向きは変わらないため弾幕は不規則な動きをして避けづらい。

言霊『発言実現』

言った言葉を実物にする。ただし、物にはならず、文字になる。文字を弾幕として投げたり、武器として振り回す。ネタスペルカード。

全反射『不平等なる天秤』

自分に与えられた全ダメージを相手に流し込む。発動中に受けたダメージも同時に流し込む。

キャラクター名：ジェイド・スカーレット

影牙『テラードッグス・ハンティング』

影で出来た犬型の弾幕。相手を追尾、捕獲するように動きまわり、逃げ場を少なくする。もちろん、この弾幕自体もぶつかりに行く。

暗黒『魔人の黒き太陽』

影で作り出した巨大な弾幕。ぶつかったものを飲み込むが、飲み込んだエネルギーの量がある一定の値に達すると、爆発を起こす。威力が半端なく高い。

夜王『光破壊せし影の魔人』

影の鎧を身に纏う。パワー、防御が格段にアップする。さらに、鎧を武器のように変形、それで攻撃することもできる。鎧を飛び道具として飛ばして攻撃もできる。格闘最強クラス。

合技

大寒波『冬將軍の軍勢』

チルノ+レティ。無数の氷像を作り出し、氷像が相手を攻撃する。氷像が丈夫なため、氷像の相手に手こずる。

鏡乱光球『マッドネスパーク』

魔理沙+優。優が放ったミラーボール形の弾幕に魔理沙がマス

タースパークを撃ち込む。マスタースパークは弾幕の中で反射を繰り返し増幅された後に、弾幕からランダムに飛び出す。威力が非常に高い。

個人技

光符『ライトロード』

魔理沙のスペルカード。チューブ状のマスタースパーク。弾幕がチューブを通って一点集中で襲いかかる。

冥陽剣『光晶の煌めき』

妖夢のスペルカード。妖夢の周りに剣の弾幕が10本ほど出現する。これらの弾幕は普通の弾幕に比べて、威力、耐久性が非常に高い。もちろん、相手に向かって飛ばすこともできるが、盾や突撃という使用方法が強い。

時空剣『輝きの残月』

妖夢のスペルカード。狙った場所に斬撃の軌跡が現れて相手を攻撃する。ただし、ある一定以上の距離がある場合は軌跡同士を近接させなければならぬ。

断滅剣『絶界』

妖夢のスペルカード。全てを断ち切る斬撃。防御無視ので通する。まさに「切れぬものなどない」だが、放つには長時間の集中が必要。

蝶符『バタフライフェザー』

幽々子のスペルカード。背中に蝶の羽のような弾幕が出現する。これは無数の弾幕の集合体であり、自分の身体を包んで防御、振るわせることで弾幕を飛ばすという使い方ができる。ただし、あまりにも大きな衝撃を受けると弾幕の結合が解けて、崩れてしまう。

死界『デスゾーン』

憑依幽々子はスペルカード。逃げ場のない死の弾幕。反則技。